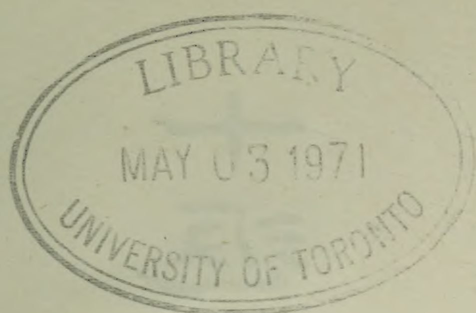




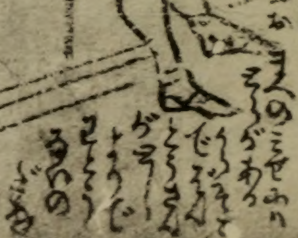
十返舍一九集

全



本家

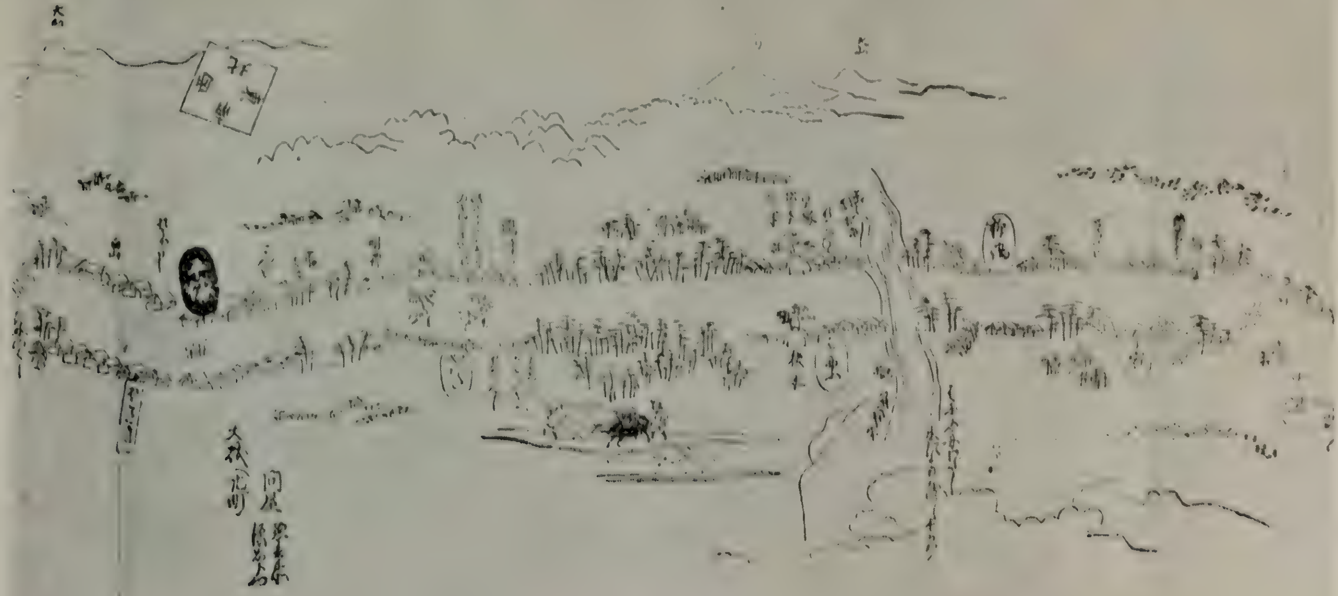
ういろう







廣重「木曾街道六十九次の中大井」



菱川師宣「東海道分間繪圖」





廣重「東海道風景圖繪」の中「五十鈴川」

近代日本文學大系　第十八卷目次

浮世道中膝栗毛……一—三八八
木曾街道 續膝栗毛……三八九—五七二
風聲夜話 翁丸物語……五七三—六一四
串戲教諭 六あみだ詣……六一五—七一五
討ちは致さぬ金がかたき 世中貧福論……七一七—八一六

上卷

一　禍福のまはり仕掛は前生の引道具……七二三

二　貧福は降つて涌く身代の棒振蟲……七二六
三　金銀も内證はめでたいことの累なる難儀……七三一

中　卷

一　宿駕籠の痲耳に水の浅る茶椀の掘出し……七三七
二　當の違ひは金よりも延びた髭題目講……七四三
三　頓て菰を著る親仁が六十の筵破り……七四九

下　卷

一　果報は寢て松の位預人は半分の主……七五四
二　邪の胸に綴蓋した破鍋後家の色咄……七六〇
三　手盛を喰逃げしられた慾の皮のひつぱり蛸……七六五
四　過去の悪業身に積る雪の夜の發心……七六八

後編上冊

一　身代の煤拂は十露盤の塵埃……七七五
二　坊主の鉢卷はしまり内儀の友稼ぎ……七七七
三　慾に眼の光る戀病の横著者……七八四

後編中冊

四　明いた口へ持ち込んだ色と慾との二つ鰭……七八九
五　煩惱の犬骨折つて樓の色仕掛……七九四
六　しらぬが佛造りて魂の惡性者……七九六

後編下冊

七　昔話に尾鰭のつく生物の腐れ緣……八〇三
八　貧すりや鈍ちやん內證の軍評定……八〇七

九　泣く頬をさす八幡の勸進角力……八一〇
十　無心の種を卷舌は生醉の似山師……八一三

通俗巫山夢……八一七―九〇九

誹語堀之內詣……九一一―九五〇

上之卷

第一章　生醉本性違はず、手盛をくふ酒の題目……九一七
第二章　世界の親父の店卸、算用のあはぬ佛せゝり……九二三

中之卷

第三章　女に孝行のしるし、掘り出した月夜に釜……九二七
第四章　戀に眼のなき座頭、ひつかゝれた猿の吹替……九三一
第五章　馬の糞をさらふ鳶爪に、慾頬の千枚張……九三五

下之卷

第六章　色に溺るゝ傾城買ひ、はまりこんだ借金の淵……九三九
第七章　出放題目の奇特、佛を賣りぐひの道心坊……九四五

解題……文學博士　笹川種郎……一—一三

目次終

解題

文學博士　笹川種郎

十返舍一九の畧傳

一張一弛は世運泰否の波動にして、なほ潮の一昂一低して徂徠するが如きものである。寛文、延寶、貞享の後に天和あり、元祿、寶永の後に享保あり、明和、安永の後に寛政あり、一時紀綱を振肅して、政治の弛緩を矯めたが、世運は此の間に進展し、寛政につぐに文化、文政を以てし江戸創基以來二百年の文化は爛熟の域に達したのである。世は常憲院時代の豪華を經て、有德院時代の繁華を過ぎ、浚明院時代より、今や文恭院時代に入つた。文恭公の子女五十一人、諸侯の嫡嗣なきものは、爭ひて其の意を迎へ、請うて其の家を襲がしめて、幕府の威令は諸侯に洽かつた。熙々たる太平の氣象は上下を光被して、到る處不斷の春を樂しんだのであつた。

關西の地に長じ榮えた町人文藝も、江戸の盛んなるにつれて漸くに東下し、關東の風氣を稟け

て、輕妙洒脫なるもの、雄渾沉鬱なるものを作り出した。文化文政前後は、恰も其の全盛期にして、文士詞客は綺羅星の如く斐然として章をなしたのである。山東京傳の通を穿つた酒落本『古契三娼』『通言總籬』『夜半茶漬』『繁々千話』『仕掛文庫』『娼妓絹ぶるひ』『錦酒嚢』等は天明寛政の頃に梓行せられ、輕妙なる黄表紙『御存商賣物』『江戸生浮氣樺燒』『孔子縞于時藍染』『心學早染草』『人間一生胸算用』等を著したのも其の頃であつた。文化に入りては讀本として『櫻姫全傳曙草紙』『梅花氷裂』『昔語稻妻表紙』『本朝醉菩提』『雙蝶記』等を公にした。曲亭馬琴の『椿說弓張月』は文化三年より、『南總里見八犬傳』は文化十一年より、『近世說美少年錄』は文政十一年より、逐次刊行せられた。式亭三馬が、『浮世風呂』を公にしたのは、文化六年にして、柳亭種彥が、『修紫田舍源氏』の初篇を出したのは、文政十二年で、爲永春水の、『春色梅曆』は之に後れて、天保三年から書き始めたのである。文化に入りて、黄表紙、洒落本は衰へたが、讀本、合卷物等は盛んであつた。

明和二年、鈴木春信が錦繪を創めてより、墨繪より丹繪となり、漆繪となり、紅繪となつた。版畫は此に目もあやに鮮麗のものとなつて、民衆藝術の本領を發揮し、春信、奥村政信、北尾重政、鳥居淸長、勝川春章、磯田湖龍齋、一筆齋文調、窪俊滿、北尾政演（山東京傳）、石川豐信、

勝川春潮、喜多川歌麿、歌川豐國、北尾政美、細田榮之、葛飾北齋等、或は時を同じうし、或はやゝ後れて、藝苑に千紫萬紅の奇觀を現じた。文化三年（或は云ふ二年）には、歌麿五十三歳を以て逝き、翌四年には東洲齋寫樂歿し、文化十一年には春潮及び歌川豐春死去し、翌十二年には清長が六十四歳を以て世を去つてゐる。勁い線ですつきりした清麗の美人畫を描いた清長や、柔かい筆で、豐艷の肉體美を現はした歌麿は世を去つて、浮世繪としては、末期に近づいたものの、健筆無比の北齋は猶盛んで、都會情調や羇旅の趣を描いた、安藤廣重も漸く擡頭せんとし、勁拔な筆致を以て知られた歌川國芳の處女作「御無事忠臣藏」の稿を起したのは、實に文化十一年であつた。四方赤良や、北川眞顏等に依りて振興された狂歌も、柄井川柳の創めた川柳も、市井文藝として、極めて江戸向きであつた。十返舍一九も亦時代の兒であつた。

一九は明和元年（二四二四年）に生れた。谷中笠森稻荷境内の水茶屋女、鍵屋お仙と、淺草奥山の楊枝店の看板娘柳屋お藤とが其の美を競ひ、湯島の巫女おなみ、おはつが艷姿を謳はれて、江戸人士が現世的歡樂にあこがれてゐた其の頃、彼は呱々の聲を揚げたのであつた。重田氏、名を貞一と云ふ。通稱與七、幼名を幾五郎と云ひ、駿府の町同心重田與八郎の二男である。小田切土佐守が大阪町奉行たりし時、一九は其の家に仕へて、浪華にあつた。職を辭して後、彼の地の材

木商某の女壻となつたが、又こゝをも離緣となり、流浪して江戶に來たと云ふことである。

近世物之本江戶作者部類には「性酒を嗜むこと甚しく、生涯言行を屑とせず、浮薄の浮世人にて、文人墨客の如くならざれば、書賈等に愛せられて、暇あるをり、他の草冊子の畫工をさへして、旦暮に給し、其の半生を戲作にて送りしは、此の人の外に多からず。」とあるが如く、彼は性來の酒好きではあつたが、他の作家と異にして、決して高慢ぶつたり、威張つたり、横柄づらをすることなく、好い氣な樂天家であつた。しかし其の作に滑稽味の多かつたにも似ず、寧ろ無口な、だんまりやであつたと云はれてゐる。

彼の處女作は竝木千柳、若竹笛躬と合作した院本『木下蔭狹間合戰』であると云はれてゐる。寬政元年の作で、此の時は近松余七と署名してゐる。彼の文筆の才は此の頃からして作家たらしめんとしたのであつた。江戶に來て後、寬政六年の秋より、通油町の書賈蔦屋重三郎の食客となりて、錦繪に用ゐる奉書紙に、ドウサなどをひくを務めとしてゐた。然し其の性滑稽を好みて、且つ浮世繪をも畫いたので、重寶がられ、蔦賓が誂へにて、心學時計草三卷の臭草紙を作り、畫も一九の自畫にて寬政七年出版したと云ふことである（作者部類）。猶作者部類に依ると、此の草紙の趣は石川五老の立案で、蔦重に說き示し、蔦重より一九に命じて綴らせたとある。

蔦屋重三郎、本姓は丸山、其の名を柯理と稱したのは、其の戲號を蔦唐丸と云ふ處から唐丸を唐様(からやう)に書いて、カラマロと訓じたのである。父は重助、母は廣瀬氏である。寛延元年正月七日、江戸の吉原に生まれ、幼にして喜多川氏に養はれた。人となり奇才あり、又任俠の風を好み、いはゆる太つ腹の拔目のない、生粹の江戸つ子の、然も郭育ちであつた。天明の初めに吉原五十軒に書舗を開き、吉原細見の版を買ひ入れ、太田南畝、若しくは朱樂菅江、山東京傳等に序を書かせて奇利を博してゐた。其の後、通油町地本問屋丸屋の店庫奧庫を購ひ、此に開店して耕書堂と云ひ、幾多の文學者に著作させて之を刊行してゐた。喜三二、戀川春町、芝全交、山東京傳などの黃表紙、洒落本は多く此の人に依りて公にせられ、曲亭馬琴も寛政七年重三郎の依囑に依りて心學草紙を著して、其の名漸く知られ、浮世繪の大家歌麿も此に寄寓して、喜多川を名乘り、後年の大成を致した。されば文才ある者畫才ある者は爭ひて其の門に奔り、蔦重は此等をして其の才能を灑下せしめ其の名を成さしめたのである。蔦重は又自ら狂歌を詠み、蔦唐丸と號したが、馬琴の記する處に依ると、多くは代作であつたと云ふ。又著す處に「身體開帳略縁起」「本樹眞猿浮氣噺」(歌麿代作)「宅山伏狐修怨」(馬琴代作)等代作せられた數種の黃表紙がある。寛政九年五月六日歿したが、其の將に逝かんとするや、傍人を顧みて「午時に歿すべし。」と云ひ、家事を

處理して妻女と訣別し、午に至ると莞爾として、「拍子木が鳴るのに、なぜ幕明きが遲いのか。」と云ひ畢つて瞑目した。壽四十八歲である。戒名を幽玄院義山口盛信士と云ひ、山谷の正法寺に葬り、石川雅望が其の碑文を書いてゐる。雅望が題して、「予は霄壤間の一罪人、餘命たゞ知己の恩遇を恃むのみ。」と云ひ、「人間常行、載在二稗史一、通邑大都、孰不レ知レ子。」と銘してゐる。馬琴も彼を「世才捷れたり。」と云ひ、又「奇人」と呼んでゐるが、猶「思ひきやけふは空しき藥玉も枕のあとに殘るものとは。」と弔歌を詠んで、哀悼の意を寄せてゐる。

一九も此の人の知る所となり、之よりして著作を事とすることとなつた。寛政の季、彼は長谷川町の某家に入夫となつたが、此も久しからずして離緣となり、更に妻を娶り、通油町鶴屋の裏なる地本問屋の會所を預りて、そこに住して一女を設けた。此の女子二八の頃からして踊の師匠となり、親の生計を助けてゐたが、或時某侯より、妾にとの申し入れがあつた。然し一九は之を拒んで、「彼なくては吾が助けとなるものなし、よしや後年幸運到來すとも、さることは願はしからず。」とて、聽き入れなかつたと云ふ事である。一九の妻に就いては、名をお民と云つたと云ふ說があり、「作者の畫中にまゝ見えたり。畫面には隨分婀娜者なり、一笑。」と一書に見えてゐる。

「心學時計草」著作の頃よりして彼の世に公にした黃表紙は、

奇妙頂禮胎錫杖
油畫敵役功能書
早野勘平若氣誤
御存向鼠嫁入
獨打雙衛卷
怪談筆始
釣惠比壽水揚帳
閻思獸境界
花笠勇者命
棒師直開帳
熊坂長半物見松御休所
三助待馬運次第
忠臣星月夜
取得貨德用

自由自在新鐫小判驥
蟲看鑑野邊若草
當門再興御講淺草法
化物年中行狀記
樗會入雲鳥
源氏口切平家陣屋今昔狐夜噺
家內安全鼠山入
化物見越松
貧福水掛論
時花壑拔非
假名文章女忠臣
竜角一生人唯樽底拔
義光夜功珠
初賣大福帳（春亭畫）

千里一刎勇天邊
初日影七福卽生
常盤國風土記
化物小遣帳
信有奇怪會
太平記無禮講中
千早振紙屑籠
金生水拔錦
諺東埔塞掌
忠臣貞請狀
御德用黃金草鞋
雲上道中記
河童尻子玉
尻作御要領

初登山手習方帖
替謠通用壽護錄
垣覗本草盲目
青海波龍宮
虛油揚淺構
夜目遠目笠之內
薯蕷鰻鑛藥
風光花桂男
壽金太郎月
加賀見山草履打榮增照降册
十返舍戲作種本
一陽來伏帳
福神江島臺
前度往昔軍

太郎冠者
竹本義太夫武士
増補分福茶釜開
穴賢狐緣組
去御方の御好に付稚衆忠臣藏
今此奈緣唐有乎
化物見世開
忠臣藏四十八文字
伊呂波短歌
質流思外幸
人心兩面摺
聞風耳學問(歌麿畫)
玄德武勇傳
兩面摺後編裏面心拔路次

赤本鼠黒本狐兩評娵入拔
鳩讃試禮者笑宴
善惡兩良藥
大鯨豐年貢
明眼千人盲仙術
金の蔓掘出分限
貧福蜻蛉返
嵯峨釋迦開帳延喜繁華
金寶身體直
坂東七英士
旅恥辱書捨一通
屈伸一九著
夏木立戀重荷
桃太郎後日話初寶鬼島臺(重政畫)
大道具幕なし怪物寶初夢

露深淀引船
星月夜鎌倉山
正眞卽功紙
花軍梅先陣
出世鯉四方瀧水
白雨や田を三圍の開帳噺
智惠文殊御夢想丸馬鹿に附る藥
色揚鼠嫁入
春霞男達引
人武忠義功
一九畫作園七縞
美男狸金箔
増金山莊太輔

源八渡平太堤三千石皺始
腹內養生論
運開大黒傘
白井權八金松權七金世界揃能艷
増補大江山物語
心學芋蛸汁
忠臣藏十一段續畫夷素人狂言
家內安全山神御祭禮
福德三年酒
化物忠臣藏
的中地本問屋
忠臣陶物藏
昔話由良湊

善惡角力勝負附（豊國畫） 人欲看過卜筮 御誂向叶福助金生木息子 怜悧怪異談
太郎稻婚禮 地神五代卷（春亭畫） 花聟大安賣 青嵐柳下蔭
撰取話 其身金金持親王（春亭畫） 欲の皮千枚張（月麿畫）

等年々著す所があつた。しかも此等の書の大多數は殆んど彼の自畫に成つてゐたのであるから、作者の勞力とともに、如何に書肆に重寶がられてゐた事かを知るに足りる。固より此の中には大して名作もなかつたが、作者部類に、「初めは多く自畫にて板したれども、其の畫拙ければにや時好に稱はず。故に後には皆別人に畫かせたり。」とあるは、云ひ過ぎである。彼の畫技は器用にして、決して拙劣なものでなかつた。作るところの洒落本には、寛政五年板の

附會倡賣往來

同十年板の

當變木眼倉八卦

享和元年板の

惠比良の梅　野良の玉子　青樓夜話色講釋

同二年板の

俳客眞話傳授之卷郭意氣地　　青樓妓談狐竇道人　　起承轉合　　起承轉合後編遊冶郎
俳客發學問　　青樓松之裡　　青樓素見數子　　郭中商夜興內神
吉原談語
同三年板の
夜轉行燈
文化三年板の
卽興跡引上戸
文政三年板の
初惠比壽
年次不明の
數の子後篇夜半冷酒　　見通し占

等があつて、黄表紙に比すると、遙かに佳作がある。敵討物の流行するにつれて、享和頃よりして、一九も亦敵討物に筆を染めて、

敵討攝州合邦辻　　安部川敵討　　敵討岸柳島物語　　敵討夜居鷹

播州赤穂 車川仇討實記　敵討阿部曲輪　防州氷上宮利生仇討　敵討箭指ヶ浦
敵討猿番場柏餅　敵討連歌怪談　甲州矢倉仇討　敵討浪速男
敵討葛の松原　敵討女用文章　敵討女諸禮鏡　敵討和布刈海門
大矢數意恨仇討　敵討鷺娘之由來　彥山靈驗英嶽仇討噺　御嶽山誓仇討
嵐山花ノ仇討　花雲都仇討　鼓艸花ノ仇討　三ツ浦難波復讎
敵討西海硯　敵討高野櫻　敵討蓮ノ若葉　敵討桔梗ヶ原
敵討磐手杜　敵討蝦蟆ノ妙藥　復仇奥州桅割坂

等をはじめ、幾多此の種のものに手をつけ、其の中には滑稽味を加味したものも少なからずあつた。文化元年、化物繪本太閤記（化物太平記とも云ふ）を著して忌諱に觸れ、絶板を命ぜられ、作者一九は手鎖五十日の刑に處せられた。蓋し太閤記と名のつくものは幕府の忌諱に觸るゝを例とするので、一九も亦奇禍を購つたのである。一九には又

落語 風の神　落語 三番叟福種蒔　新作 口合 はなし鰻　百の笑
於臍茶番　おとしばなし 福ねずみ　へそくり金　叶福助

等十數種の小咄集がある。

一九の著作は其の數少なくなかつたが、盛名を馳せたのは、中本の膝栗毛に依つてである。作者部類に「一九草紙には尤き當り作なし、たゞ膝栗毛と云ふ中本の作いたく時好に稱ひて十數篇に及べり。其の名聞三馬に勝りしは此の戯作あるによりてなり。」とあるが如く、此の作は大當りであつた。一九と膝栗毛、膝栗毛と一九とは離るべからざる關係があつたのである。文政十二年三月、江戸の大火に類燒し、長谷川町なる新路の裏屋に借宅したが、此の頃から手足偏枯の症にて遂に起たず、天保二年七月二十九日、享年六十七歳にて歿した。

此の世をばどりやおいとまにせん香のともにつひには灰さやうなら

との辭世は、流石に滑稽作家たるに背かない。淺草土富店善龍寺内東陽院に葬り、法名を心月院一九日光信士と云ふ。十返舍の號は、彼が志野流の香道に嗜みあるを以て、黄熟香の十返に取つたと云ふことである。十遍舍、十偏舍、又は十偏齋とも書す。別號を醉齋と云ふ。其の門人に一返舍白平、五返舍半九、十字亭三九等あり。三九は一九の歿後、其の寡婦に請うて、二世一九となつた。

安永以後、黄表紙盛んに行はれ、江戸人特有の輕妙洒落なる頓才を其の間に寓し、太平の時勢粧を示してゐたが、其の滑稽を集大成した作家は一九であり、其の著作は膝栗毛であつた。式亭

三馬も同じく滑稽の才に富みたれども、彼の才には辛辣のところがあり、社會の機微を穿ち、機鋒頴脱し、警句百出する點は優れてゐたが、一九のやうな思ひきり樂天的なところはなかつた。三馬の滑稽には厭味があつたが、一九の滑稽はどこまでも呑氣であつた。一九は實に江戸文學者中に於ける一異采と稱さねばならぬ。

膝栗毛

洒落本の天地は吉原、深川、芳町等を初め中洲、新宿、品川、根津等の花柳界であつた。其の賣女と隱賣女と孌童との差別はありたりとも、いづれも手折るに任せた花の世界であつた。よし江戸以外の地なりとも、銚子にせよ、潮來にせよ、同じく闇に咲く野花幽草の地であつた。黄表紙の世界は、讀本や人情本が江戸の代りに鎌倉を用ゐたると同じく、鎌倉を假り、富士に及び、唐土に至り、無何有の郷にまで及んでゐるが、所詮は江戸ッ子の江戸を離れぬ小天地であつた。一九に至ると、嘗て東西を往來したる經驗もあり、又旅行好きであつたから、其の題材を江戸以外に取りて、先づ東海道に於ける羇旅の狀に注目した。彼の著眼は決して凡でなかつた。

京都より江戸に至る東海道は海内交通の大動脈であつた。其の間の長亭短驛を五十三次と定め

たのは、宋の黄山谷の「鬼門關外遠しといふなかれ、五十三驛是れ皇州。」と云ふ詩に基いたのであらう。黄山谷の詩は蘇東坡の詩と共に、宋元文化が傳來し、禪學の流行した足利時代から、德川初世にかけてもてはやされて、五山禪僧の愛誦したものであつたから、これに依りて東海道の宿驛を定めたのであらう。これを暗合なりと云ひ、若しくは佛教に其の出典を求めんとするなどは、時代を解し得ない誤りである。東關紀行や、海道記の昔はさて置いて、江戸時代になると、參覲交代の制が創められて、金紋先箱の行列美々しく、諸國の大名小名が絡繹として往來する狀は、又なく壯觀であつた。本陣、脇本陣の夕暮の賑やかさは一方でない。箱根八里の險、大井、天龍、荒井の渡し、宮の七里の渡を避ければ佐屋廻り。駕籠に輕尻馬、川越えには蓮臺か肩車。名物に旨い物なしとは云へ、府中の安倍川餅、小夜の中山飴の餅、日坂の蕨餅、鞠子のとろゝ汁、富田の燒蛤、草津の姥ヶ餅、處かはれば品かはる。お泊りならば泊らんせと、おじやれ、飯盛は夕暮の粧ひに忙しく、出女の口々にわめく聲は喧しかつた。

江戸時代に於ける、東海道の道しるべは、『東海道名所記』を以て最も古しとする。此の書は淺井了意の作と傳へられてゐるが、樂阿彌と男との京上りを敍し、處々狂歌や俳句やを載せて、名所古蹟を說き、傳說を說き、神社佛閣の緣起を說き、風景を說き、羇旅の情調を說き、風俗を說

き、東海道の記として、頗る新意を出してゐる。●日坂の條下に、

男いふやう、もはや足疲勞れたり、此の宿に泊らんと云ふ。棄阿彌申しけるは、こゝもとは、宿泊りよろしき所にもあらねど、泊りはべらんとて、宿に入りぬ。夜に入りてともしび微かにともし、烟草のみてゐたる所へ、遊女がましくて來れるを見れば、つくもの如くなる髪、むさ〳〵と束ね、顔は丹波いがきの底の如く、荒々しう、色は麥餅とかやいふらん、その上に白粉をまだらに塗りなし、額には飛び墨ゆるばかりなる大あかゞりをきらし、なまじひに幅廣き帶を腰に纏ひたるが、しかも鳩胸にて猫おとがひなり、眸は垂れて口大なり、暗まぎれより現はれ出でたる姿、花に喩へば鬼百合の花、月に喩へば極月の月、たゞあげろの山に住む人かとぞ覺ゆる。男が傍に立つより、しなだれつゝ、物言ふ聲は、堂の鳩の如くに聞ゆ。さて上﨟は國許はいづくの人ぞと問へば、下野の者と云ふ言葉つき訛りて、可笑しかりければ、旅屋の慰みに、初めて歌うたはせなどするに、歌さへぞ鄙びたり。いかになよ旅の賤さ、お草臥であるべいに、おくわびらいだしめされい、はだけ申さうといふ。男可笑しがりて、足をさし出して、さすらせければ、さてな、猛に毛が生えておせらしや〳〵と言うて笑ひけり。かくて立ちける程に、何處に行くぞと云へば、喉のひつき申すに、水をつんのみ、その序に尿をつきて、參り申さうとて、内に入りぬ。遠田舍の者とて、言葉つき都に變りて、可笑しく侍り。かくて又立ち出でたるに面白き歌あらば、歌ひて聞かせよと云へば、

君が來ぬ夜け、まぶたも合はぬ、涙の淵へ、枕をつゝぱめた

と歌ひける。聲の訛り、ゆがみたるは、又珍らしく聞ゆ。樂阿彌は之を知らず、大鼾こと〳〵しうかきて、前後も知らず伏せり。女聞いてあらおせらし、山かじちのねまり申したるよな、大飯かきとりて、腹ぽてるまゝに、夢にて夜をぶちあかし給ふべいよな。明日は又道中だんべいに、てつぺいを枕にぶつさげめされいと云ふ。

と、關東訛を巧に寫したるなど、まことに捧腹絶倒の極みである。老手と稱すべし。此の書はいつ頃の作であるか、萬治元年と云ふのは動かすべからざる定說であらう。坂の下の條下に、「このかみは坂の下に川流れて、宿は川端より續きてありけるを、九箇年以前庚寅の歲、打續き大雨降り家を埋み人多く損じたり」とあるが、庚寅の歲は、慶安三年で、それより九年目は萬治元年に當つてゐる。一九の膝栗毛が彌次郎兵衞、喜多八二人をして東海道を旅行せしめたのは、此の書を粉本としたこと知るべきである。

元祿十六年八月の板になれる、遠近道印作、菱河師宣の圖『東海道分間繪圖』五卷は東海道圖として、頗る斬新なものであつた。其の序に、「予道印に因んで東海道五十三次の道法分間に顯はし而所々の景村付ケ馬次家並名所舊跡山川海道微細に考へ既に板行せしめんと淸書を畫師菱河氏

に請ふ。時に彼師の云、指圖ばかりにては通達の慰川ともならず、唯右の圖を風俗に顯はし、うるはしきを以て高位の簾中下劣の女童に至るまで明鏡に向つて自面の見るが如くならしめんと功筆を抜きんづ。凡そ此の兩家は名譽を世に顯はし、貴賤一同免す所の名人たり。誠に函蓋相應毛頭の違へなきを以て板行流布せしむる者なり。」とあるが如く、趣味のうちに道程の距離、山川村落、社寺舊蹟、名物問屋等まで、細大之を寫して、一目瞭然たるものがある。

猶師宣には天和二年板の『狂歌たびまくら』二卷あり。其の他の人の作として寶永六年に『東海道驛路の鈴』(五卷)なるもの刊行せられ、享保六年には『吾嬬路記』(一卷)なるものが公にせられた。更に寛政九年になると、秋里籬島の『東海道名所圖繪』六卷が出版せられた。畫は土佐光貞、山口素絢、春泉齋、圓山應擧、下河邊維惠、應受、文鳴、田中訥言、松村吳春、石川友汀白井直賢、法橋中和、原在世、佐久間草偃、餘夙夜、北尾政美、蒲生踊魚、高若拙、狩野永俊等の名ある畫家の手に成りて、東海道の案内としては、最も完全なものであつた。東海道に關する文獻は斯くして次第に完備して來た。特に寶永年間を初めとして、明和八年に至り流行しかけて來たお蔭參りは、東海道に就いての知識と趣味とを一層に擴めたのであつた。一九が其の東海道通を膝栗毛に振りまはすに至つたのも、膝栗毛が多大の歡迎を受けたのも偶然でない。

東海道五十三次に關する圖畫典籍は數多くあるが、其の代表作は、これを前にしては一九の膝栗毛があり、これを後にしては一立齋廣重の五十三次がある。一九と云へば『東海道中膝栗毛』、『東海道中膝栗毛』と云へば一九と云はれるが如く、廣重と云へば五十三次、五十三次と云へば廣重と云はれる程、倶に高名のものであつた。廣重には『行書東海道』『隷書東海道』『狂歌入東海道』半折縦繪の『東海道』、『東海道名所圖繪』一卷、『東海道風景圖繪』等二十餘種あるが、其の最も名あるものは一番最初に成つた保永堂板の五十三次であつた。天保五年に完結したもので、彼の出世作である。此の作中には傑れたものが少なからずある。其の中でも庄野の白雨、蒲原の夜の雪、土山の春雨、龜山の雪晴、大磯の虎の雨、三島の朝霧、見附の天龍川、沼津の黄昏、石藥師などが出色であるが、取分け庄野と蒲原とを推して白眉とすべきである。『隷書』、『行書』、『狂歌入』にも自然現象を取扱つた名作があるが、『東海道風景圖繪』も亦極めて趣あるものである。恰も諸種の江戸名所に對して『江戸土產』のありて、こゝにも云ひ知れぬ味があるのと同様である。

葛飾北齋に、『五十三次北齋道中畫譜』なるものがあるが、實は北齋の筆ではなく、北溪の描く所で、天保六年の板である。廣重は天保元年、御馬進獻の役人に從ひて、親しく東海道を旅行し

歸つて後、始めて東海道五十三次に筆を執つて、保永堂板が公にされたのである。膝栗毛は少なからず彼を刺戟したであらうが、廣重の觀た五十三次と、一九の眼に映じた東海道とは其の間に差異（けぢめ）があつた。廣重は眞摯な態度を以て五十三次を視た。彼は驛路の表面に現はれた殷賑の樣を描かずして、其の内に包まれた羇旅の情趣を寫した。或はとほ／\と夜の雪に惱む行人の影や、夕暮の月白く驛路の宿を急ぐ旅客の姿や、春雨しと／\と降り暮す中を行列肅かに板橋を渡る景や、雪晴の城を仰ぎながら、人や馬やが坂路を登るところや、冬枯の宿外れに焚火に雲助の尻暖める風情や、篠つく大雨に濡れそぼちながら駕籠を急がせる旅愁やらが、次へ／\と開展されてゐる。彼は此の點に於て眞面目な羇旅畫家であつた。

一九はこれに異なる。彼の膝栗毛は滑稽突梯、諧謔百出し、どこまでも江戸ッ兒の罪のない氣輕な、駄洒落と、惡ふざけとを連發して、頤を解かせ、腹を抱へさせずんば已まないのである。そこには寂しい、やるせない旅の情調は更になくして、賑やかな盛んな五十三次の光景があり／\と目に浮んで來る。

『東海道名所記』には、ところ／\に教訓が寓してある。新吉原を贔屓しては、傾城に浮れた結果り、不忠不孝不義の名を取り、てんつるてんの獨身となり、親の勘當を蒙り、妻子に別れ、一時

の樂しみが永代の憂ひとなる事を說き、旅行の用心を述べ、熊坂長範の物見松に就いては、「世に住む人、誰か寶を嫌ひ色を好まざるものあらんや。心ざし未練ある故に、盜み掠め、或は又間男なんどに恥を晒す事多し。」と戒めてゐる類である。されば其の中の狂歌も駄洒落でなくして、多くは訓戒めいた言葉であつた。教訓を主とした假名草子の頻出した時代の感化と、作者が世道人心に資せんとの主義を抱持してゐた事とは、自から這の種のものにも其の意を寄せたのである。

一九が『東海道中膝栗毛』初編を刊行したのは享和二年であるが、彼は其の初篇に序して、「箱根八里の長持唄には猛き宰領の心を和げ、竹に雀の馬士唄には鬼殺を燗せしむ。これその歌の德利酒、呑めや謠の旅衣、都をさして行きがけの駄賃帳を繰り返し、筆の立場に雲駕籠の息杖をして、えいやらやつと書きつゞりたる東海道五十三次の紀行に、無滑稽を方言の二割增、重荷に僻言夷曲歌、それが中にも唯一夜鮓の飯盛押しかけて商ふ戀の箱枕、そのあらましを宿帳の帖となしたるは、空尻の殼無體なるほんの嘶の問屋場もどき。」と云つたのは、此の書の性質を善く說明してゐる。

膝栗毛初編の出づるや、好評嘖々として、一九の聲價は頓に揚り、これより每年一編づゝ出して、文化六年其の八編を最後に一先づ完結することゝなつた。作者部類にも、「膝栗毛と云ふ中本

の作いたく時好に稱ひて十數編に及べり。其の名聞三馬に勝りしは此の戯作あるによりてなり。」とあるが如く、膝栗毛は彼をして一躍文壇に重要なる地位を占めしむるに至つた。彼が其の八編に於て、此の書を打切りにした事は、八編の序に「すべての事の十分なるは、缺くるの兆、九分なるは充つるの首なれば、八の數を以て、永久の嘉瑞とし、物のめでたき極位とする事は、先づ大江都の八百八町、長へにして盡きず、神に八百萬神、永く跡を垂れ給ひ、法華經の八部末世に傳へて弘く、歌書は八代集を最上とし、易に八卦、十露盤に八算、食言にも八百の相場あれば、質も八箇月を限りとす。予が膝栗毛も此の八編に至つて足を洗ひ、引込思案の筆を置く事、花の半開、酒の微醉にかこつけたれど、實の所は逃口上、智慧袋揚底なれば、はたき仕舞ひし栗毛の趣向、據なくおつもりの大阪著、長町泊りから滑稽のはじまり／＼。」とあるにても知られる。

膝栗毛の粹は東海道中に鍾りて、其の眞價も此に盡きてゐる。古い材料を用ゐて、新しい衣をかけたものも散見すれど、彼の天稟の滑稽才を否むべきではない。しかし金毘羅、宮島、木曾街道、善光寺道、草津溫泉道中の續編となりては、全く蛇足で、燒直しか、下卑たる洒落おほくして、其の煩に堪へない。一九も此等の諸編に於ては、甚しく窮したのであつた。然も其の窮したるに拘はらず、續々と山鳥の尾の長々しく濫發したのは、要するに膝栗毛の賣行き盛んなりしを

以て、利に敏き書肆の強請に依つてである。文化十一年には愚にもつかぬ無くもがなの發端さへも書き添へた。作者部類に、「文化五六年の頃より、膝栗毛と云ふ中本を綴りて、いたく時好にかなひしかば、年々に編を繼いで、本集九編續集九編、共に十八編(これは全部に非ず)に至れり。此の冊子は彌次郎兵衞北八と云ふ浮薄人、同行二名、諸所を遊歷しぬる旅宿の光景を、いとをかしく綴りたり。初め一二編は、新案を旨とせしが、編を累ぬるまゝに、古き洒落などをも交へ、且つ相似たる事多けれども、看客は其處らに意をとゞめず、たゞ笑ひを催すを愛でたしとして飽く事なかりしかば、板元はさらなり、貸本屋等も、利あるもの、これにまされるはなしと云ひにき。初めは通油町なる村田屋次郎兵衞が印行したり。其の後村田は衰へて、其の板株を賣與しぬる事二三傳に及びしかども、膝栗毛の評判は猶衰へず。これをもて一九は編每に潤筆十餘金を得て、且つ趣向の爲に折々遊歷すとて、板元より路費を出させしも尠からずと聞えたり。按これに接ぎて六阿彌陀詣(五卷)、江の島みやげ(二卷)、二日醉(二卷)、貧福論(三卷)、堀之内詣(二卷)、きうかん帖(鬼武と合作二卷)、一九が紀行(二卷)、二十四拜詣(若干卷)、金の草鞋(全本二十編)、此の餘猶あるべし。皆膝栗毛の糟粕なれども、編每に行はれて、一九が半生は、此等の中本の潤筆にてすぐしたりと云ふ。唯村農野孃の解き易くて笑ひを催すを欣ぶのみならず、大人

君子も、膝栗毛の如きは、看者に害なしとて賞美したりける。げに二十餘年相似たる趣向の冊子のかくまでに流行せしは、前代未聞の事なり、唯是れ一奇といはるゝのみ。」とあるは、此の間の消息を道破してゐる。

一九の黄表紙、中本、讀本には傑作がないが、洒落本中には頗る觀るべきものありて、彼の伎倆を窺ふに足るべけれど、『東海道中膝栗毛』が他の追隨を容さざるところに彼の價値があり、彼の聲名がある。若し夫れ金毘羅以下に至りては、強弩の末と謂ふべきのみ。

方言、名物、各驛亭の特色、宿屋木賃宿の趣、おじやれ飯盛の風情等、東海道五十三次の情調は此の編に踴躍してゐる。喜三二も序して、「北八、彌次、二枚の道外方に東海道の引道具を用ゐる今四編に及んで狂言の筋をかへず、見物なほ跡幕の遲きに手を打つ事頻りなるものは、作者の手柄、宿はづれの並木氏も、領分堺の定杭これより右に出でん事を競ふべし。」と云ひ、「嗚呼大儒先生、生前に文集の二編目を出す事稀なるを、膝栗毛の四編目、三年を過ぎずして製本既に成れるは、當り芝居の大名題、三都會の評判記に貫通すべし。」と讃へてゐる。其の好評はつひに當時續編を僞作したものさへあつた。五編の附言に、「予今年神無月二十日あまり、六日の朝思ひ立ちて、東海道に杖をはせ、伊勢路に赴き、内外の宮巡りをして歸りしは、雪見月の五日になんぬ。そ

れよりして此の五編目の著述にかゝり、彫工机のもとにたえず、須臾も筆を置く間なし。然るにいづれの人のつゞりけん、膝栗毛續編といへるもの、皇都（みやこ）の書肆より下したりとて、上總屋忠助なる人の許より、予が方におこせたり。予これを閲するに、其の排設つゞまやかにして、滑稽いとも巧みなり。惜しむらくは、かかる筆の文をもて、などて自立せざることこそ不審（いぶか）しけれ。その名を索むる人に非ず、欲に生ずるの徒なるべきか。されど予の爲の引札にして思はざるの幸甚なりき。」とあるにても膝栗毛の高名なるを思ふべきである。從つて彼も苦心慘澹として、其の土地土地に赴いては風俗人情方言を探り、奚嚢を滿して歸り、種々工夫して趣向を立て、讀者の心に副はん事を計つた。書肆も亦彼にせがんで、續編々々と矢繼早の催促に、一九もありだけの智慧を絞つて燒直しや無理の趣向を其の間に加へたのはまた是非がなかつたであらう。「氣のききたる化物、足を洗ひてひつこむ時分、膝栗毛の作者圖に乘りて、又しても彌次郎兵衛北八が洒落もむだも洗濯頃、此の五編目追加にいたつて足元の明るきうち、先づ今日はこれまでの筆を擱くに若しくはなしと、漸く滿尾し、こじつけたれど、御見物のしびれを切らせし處に付け込み、京へ登る一段を拾遺にかけよと、書肆の需めに是非なくとは譃の皮、やつぱり作者も慾の皮引張りだこの手を組みて、一工夫せしあとの二冊は京大阪の穴探し、ほじくりかへして御覧に入れんとし

こたま趣向は取つて置きの正月物、それは晴著、此の一冊は不斷櫻の伊勢道中、をはりかと思へば拾遺の始まり、こゝはざつと致しませうと、あとをはらんで、其の爲お斷りさやうと例のなまけものがいふ。」とあるは、其の本音であつた。同じ樣な云ひ譯は六編の序にも見えて、「せめて四國は廻らずとも、京大阪はあたりまへ、これだけの處、御辛抱御一覽の程ハイ賴み申しますと爾か云ふ。」とあれば、長帳場も五十三次の京上りで最後とするつもりであつたのは明らかである。

さるに書肆の慾は八編の千秋樂にて盡きず、遂に一九を强ひて、「金毘羅參詣續膝栗毛」を出さしめたのは、文化七年で、『東海道中膝栗毛』終刊の翌年である。しかるに金毘羅だけでは尻切蜻蛉の恐れあるより、『宮島參詣』から『木曾街道』となり、文政五年、「抑初編出でしより二十年を過ぎて漸く東都歸著滿尾に至る、長旅の路費はもとより、趣向も盡きたれば、長居は恐れの本文によりて氣の利かぬ化物とともに、栗毛の馬を洗ふこと、昔より戲作の書の、かばかり編數を重ね出せるは、例なく、予が生前の悅び、偶中の祥ひなれば、めでたく筆を採り納めぬ。」と、最後の第十二編に其の喜びを述べたところに彼の得意は見えてゐるが、初編賣出しより二十一年間の追つかけ趣向は全く書かんが爲の苦しい趣向に過ぎなかつた。

第二世十返舍一九の『奧羽一覽道中膝栗毛』（弘化二年作、同五年板）五編は、もとより狗尾續

貂の譏りで云ふまでもない事である。初代一九は一たび膝栗毛に味を占めてより、或は『江之島家土産』となり、『誹諧堀之内詣』となり、『雑司ヶ谷紀行』となり、『六阿彌陀詣』となり、『方言修行金草鞋』となり、相も變らず道中記に駄洒落を盡したが、何れも殘山剩水、更に觀るべきものとてはなかつた。要するに『東海道中』が、彼の總身代であつた。然し『東海道中』と其の他の諸編と相比較するに便ならしめんがために、こゝには其の續編なる『木曾街道』をも併せ載することとした。

風聲夜話　翁丸物語

此の書は文化四年の出板にして、插畫は蹄齋北馬の描く處である。一九が龜戸寓居の折の作で怪談の敵討物である。然も其の敵討には犬の因果が付き纏うて、怪奇を極めてゐるが、趣向も文章もとり立てて云ふ程のものがない。或は支那怪談の飜案かとも思はれる。末段忘井源太兵衛の一子修驗者觀乘が犬の靈驗に依りて、仇敵島貫伊平を殪し、犬は豐後の國早川犬上大明神に勸請せらるゝところ、『犬首(いぬかみ)明神と勸請せられし』などは、口合の駄洒落で、寧ろ此の方が一九の本領のやうである。

文化四年には、一九は「敵討浪速男」「敵討稲指ヶ浦」後編「諏訪海狐助太刀」「復讐連歎怪談」「敵討仲間入」「敵討大悲誓」などの讐討物を刊行してゐるが、「増補續青本年表」にも、「奈巻外題集」にも此の書の名は見えてゐない。蓋此の書は從來活版に附せられたものがなく、賣行きの面白からざりしがためか、流布本極めて少なき故、こゝに載錄することとした。

畫家蹄齋北馬は有阪五郎八と云つて、御家人の隱居であつた。北齋に就いて畫を學び、彩色に長じてゐた。親に事へて、甚だ孝行であつたので、谷文晁はこれに感じて密畫の彩色をするに、手傳はせた。北馬は左筆にも長じてゐたので、右手は師北齋のためだとて、左手を以て文晁の手助けをしたと云ふ傳說がある。讀本黄表紙狂歌本等の插畫を多く描いてゐる。又其の作に、「隅田川名所圖會」がある。弘化元年八月十六日、七十四歲で歿した。

誹諧堀之內詣

「こゝに神田の八丁堀に、彌次郎兵衞とは、一つ長屋の佐次兵衞」が法華の信者であつて、堀の內のお祖師樣へ參ると云ふ膝栗毛式の滑稽味を發揮した上下二巻の小編である。然し後の聲名につれて相當行はれしものと見えて、其の後編なる「雜司ヶ谷紀行」の序に、「そは嚮に梓行せし堀

之内詣の祥ひに行はれしとて、書肆が偶中の悦びに附け込み、其の後編となして、例の滑稽、方言のことの葉の、塵も芥も掃き集めて、膝栗毛の彌次郎兵衛が口車を引き出すこと然り。」とありて、三巻を著してゐる。此の後編は文政四年の作である。いづれも膝栗毛の唾餘に過ぎない。

討ちは致さぬ金がかたき　世中貧福論

前編三巻後編三巻であるが、後編下巻の末には「此の外さま／＼趣向あれども、あまり帖数長く相成候故先づこれにてさし置き、猶嗣編追々出板いたし入二高覧一可レ申候、御評判宜奉二希上一候。」とあれば、續編をも出すつもりであつたらしい。文化九年の作で一九としては作意も文章もよほど變じてゐる。尤も一時全盛を極めた敵討物の凋落した時、で作者も「討ちは致さぬ金がかたき。」とある如く、こゝに敵討物以外に珍案を工夫せんとし、浮世草紙や八文字屋本風に轉化を試みたのである。されば其の序文にも「一鳥が啼く東の都を立ちて、おしてるや難波江の葦の假寝にやどりしは、今年如月の頃になん。徒然なるまゝに、古の浮世草紙に名だゝる作者、二萬翁西鶴法師の戯木を見るに、言葉の林しげりて、風流の花咲き、心のくさ／＼生ひて玄妙の實をむすべり。予此の風製を慕ひ、及ばぬ筆を馳せて、通俗巫山夢といへるを著し、彼の地の書肆に與

へて歸りぬ。猶またその餘風偲ばしく、再び西鶴の唾を嘗めて、此の卷をつゞる。もとより商家軍配といへる草本によつての作意なれば、自分の文談のみにあらずと云々」とあつて、此の書が江島屋其磧の『立身招福 商人軍配團』を粉本としたことは明らかである。

『商人軍配團』一之卷第二冒頭

且に星を戴いて、宴前に酒屋の米を踏みに通ひ、夕には月に向ひて草履草鞋を作り、捨りゆく藁屑まで取集めて、鍋取錢差に拵へ、

『貧富論』上卷二冒頭

且に星を戴きて、宴前に酒屋の米を踏みに通ひ、夕には月に向ひて、草履草鞋をつくり、元手なしにすたりゆく藁屑までも拾ひ集めて、錢差を拵へ、

『商人軍配團』一之卷第二中段

商面白き日もはや西に傾けば、たゞ去なすは、世界の費、隙取してとらせまじと、請取普請に切々入札しつゝすてゝる、材木屋の手代が小さな紙切つて丸め、搔餅載せて出た高坏の菓子盆に入れて、とあつて何れも近うよつて、御緣をお結びなされ。

女房の外は色と云ふ字を知らぬ男、今をさかりの舊衣、帯紐解いて寢て見しに、

『貧福論』上卷二中段

三十七人の大一座、座敷持部屋持新造、ひつくるめて鬮にせよと、請坂普請に入札しつけてゐる、材木屋の手代が鼻紙を小さく切りて、女郎の名を聞き、それ〳〵にかきしるし、ひんまるめて、さあ〳〵何れも、近うよつて御縁を結びませう、信心次第で、ちつともしほめのよい女郎衆にあたり給へと、高坏の菓子盆に入れてさし出せば、

女房の外に色と云ふ事を知らぬ孫太郎、今を始めの旅衣、帶紐解きて、

『商人軍配團』二之卷第一冒頭

世の中に目出度い事ばかり重なるも、難儀の一つなれば、滅多にめでたい〳〵とて、喜ばうものでもなし、又愁事の續きて、悦びになる事あれば、無上に悲しまう事にもあらず。

『貧福論』上卷三冒頭

世の中にめでたい事ばかり重なるも、難儀の一つ、悦びあれば悲しみあるべし、又愁事のつゞきたるも、歎きの中の喜びといふことあれば、とかく定まらぬでもつた浮世、

『商人軍配團』二之卷第一上段

長持五十棹、定紋つきし絹の覆をかけて、僅かに五町は道具つゞき、

『貧福論』上卷三上段

簞笥長持五十棹、其の外手道具諸色、一樣に定紋つきし絹の覆を打ちかけ、僅かに四五町はつゞく釣臺の夥しさ、

『商人軍配團』四之卷第一冒頭

死生命あり、富貴天にありとは、孔子の語なり。しかりとて面々の所作家業をも勤めず、我が身上の貧福は天にありと云ひたらば、人の生死は命ありとて、平生婬酒の二つに身をなし、毒魚と知つて河豚汁を好み、さしあふ合點で蕎麥に西瓜の喰合はせして、死ぬるが如くなるべし。

『貧福論』下卷四冒頭

死生命あり、富貴天にありとは、聖人の語なり。然りとて銘々の所作家業を勉めず、其の身の上の貧福は天にありと思ひをらば、人の生死は命なりとて、平生婬酒の二つに耽り、毒魚と知つて河豚を好み、さし合ひ合點で、蕎麥切と西瓜の喰合はせして、死ぬるが如し。

の類一にして足らず。唯貧福論は一丸だけに、一五十年ばかりにて小便せし盧生が夢の半分、二十四年の榮華の春も打過ぎ、壽永の秋に末期の鹽からきを呑みて、八島檀の浦の土左衛門となり、龍宮の火の見に引つかゝりうせたりし平家の一門が、どかおちの盛衰」と云ふやうな滑稽交りの

文が處々見えてゐる。どうせ趣向も文章も軍配團からの借物が多かつたから、序(ついで)に跋文までが借物と來てゐる。貧福論前編の跋に、

朱文公の詩に、耕牛無二宿食一倉鼠有二餘糧一と賦し給へり。夫れ耕す牛、力を盡せど、却つて食物に乏しく、倉の中の鼠、勞せざれども、自由に糧を貪るは、人の身の生まれ得たる禍福、富貧の道理に同じ。

とあるは『商人軍配團』四五卷第三の末段に「朱文公の詩に、耕牛宿食なく、倉鼠餘糧ありと作りたまへるも、日暮(あけくれ)田を耕す牛は己が力にて作れる五穀なれば、喰物あまるべき筈なれども、明日(あす)食ふべき食物もありかね、倉の中に棲む鼠は盜み喰ひする惡きものあれども、多くの米の中に匿れ居りて、食物自由なれば云々」とあるのを借用し來たのである。貧福論は要するに八文字屋を學んで、八文字屋の臨摸に畢つてしまつた。

串戲教諭　六あみだ詣

六阿彌陀詣は、江戸時代(明治時代までも)に於ける江戸士女の信仰と遊山とを兼ねる郊外散步であつた。第一番は豐島村の三緣山西福寺、第二番は下沼田村の甘露山應味寺、第三番は西ヶ原の佛寶山無量寺、第四番は田畑村の寶珠山與樂寺、第五番は下谷の延命山長福寺、第六番は龜戸

の西歸山常光寺で、此の里程總計して、六里二十三町と云ふ。時は春秋の彼岸、日は暖に風和かに、遙かに筑波を雲煙縹渺の間に眺めながら、白脚半の下駄穿きにて、數珠を手にかけながら、嘻々として談笑して行く趣は、又なく長閑なものであつた。田端や西ヶ原が今の如く開拓されないで、青々とした畑が打續いた其の頃には、よく此等の善男善女が三々五々打連れ立つて行くのを見かけて、江戸情緒を思ひ起したのであつたが、それも今日では昔の語草となつた。

文化八年上下二編を出し、翌九年嗣編二卷、十年三編を出して、世評は宜かつた。堀の内詣に出る佐次兵衞の後家を、今度は引つ張り出して、大屋を初め井戸端のお喋舌連が龜戸の常光寺を振出しに、行く〳〵お喋舌の共進會。途次種々の人物を出して、大屋との問答に處世の教訓を說くのが、此の編の結構である。三馬の浮世風呂や浮世床のやうに利いた風はないが、又それだけ此の編は見劣りせられる。

解題 終

東海道中膝栗毛

道中膝栗毛序

箱根八里の長持唄には、猛き宰領の心を和げ、竹に雀の馬士唄には鬼殺しを燗せしむ。是れその歌の德利酒、呑めや謡ひの旅衣、都をさして行きがけの駄賃帳を繰りかへし、筆の立場に雲籠駕の息杖をして、えいやらやつと書き綴りたる東海道五十三次の紀行に、無滑稽と方言の二割増、重荷に俳言夷曲歌、それが中にも唯一夜鮓の飯盛押しかけて、商ふ戀の箱枕、そのあらましを宿帳の帖となしだるは、空尻の穀無體なる、ほんの噺の問屋場もどき、ハイ頼みます〳〵と、この本の鹿島立に序する事しかり。

維時享和二載壬戌孟陽吉日

十返舍一九誌

道中膝栗毛凡例

○此の書はすべて東海道往來之記。上貴人高官の通行より、下拔參り物貰ひの木賃泊り、雲駕籠馬士の俗腸まで其の下情を穿つて悉く弘著す。

○驛々風土の佳勝山川の秀異なるは諸家の道中記に精しければこゝに除く。處々の名物景物等に至つては聊か其の滑稽詞を加へ記す。

○館作女俳優の風流、泊り〳〵の遊戲、その可笑しみを純らにす。

○卷中に著す夷曲歌は排設地口を專らにす。故に嗤ふ者は笑へ、予が風製落首體たるを以て入金を曾て出さず、却つて其の料を著服するは、是れ稱を取るより德を執つて慚を愧と思はざる予が性質仕方がなし。

○此の編は東都品川驛より漸く箱根驛に至つて畢る。其の餘草稿出來あれども帖數の過餘を厭ひて飯盛の後釜に讓り追挾して後編に著さんとす。すべて玆年予が戲作の帖擧共に滿尾に至らず。是れ卽ち無性横著骨惰みなりと書肆の私言一言もなし〳〵。

巻中書目

發端鹿島立之話
川崎萬歳屋啗奈良茶話
馬士高詳演色情話
神奈川晝食滑稽之話
抜參宮謀旅人而腹餅話
戸塚泊番轉倒之話
聞長持唄而懐女房所謂之話
一寸加禮坊主過而貪波錢話
駕籠舁自悶無如在話
宿引應對嚴重話
小田原泊功拙之話
筥根山中洒落蔓話

卷中書目

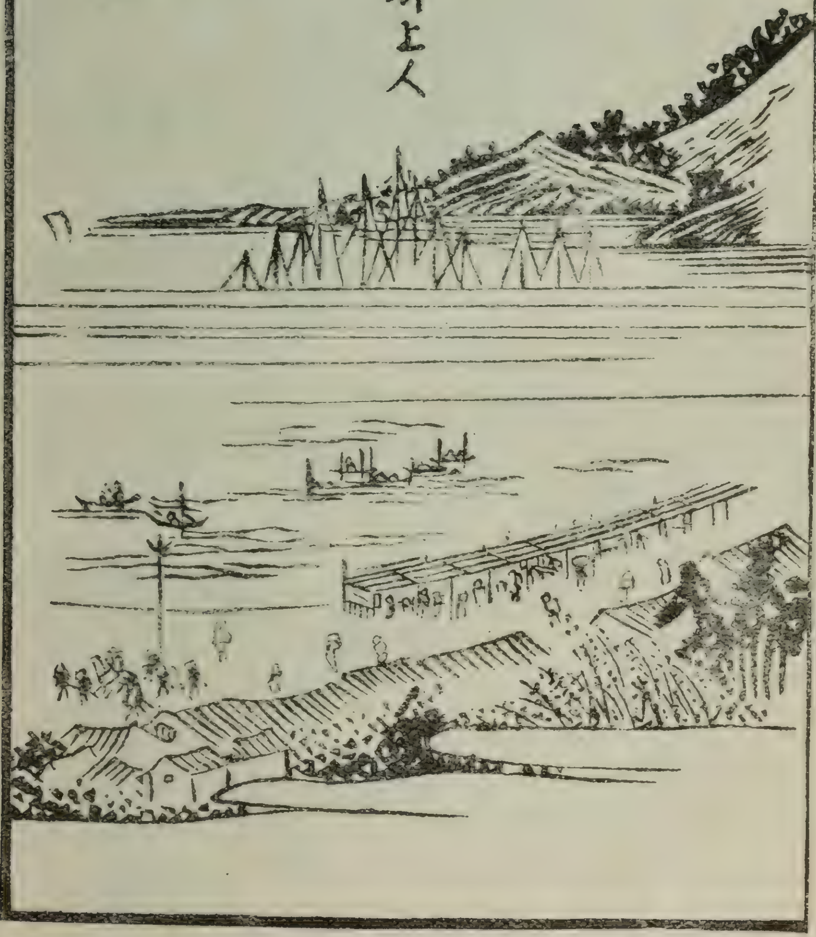
上　件

浮世道中膝栗毛初編

十返舍一九著

發端

「日本橋より品川へ二里」富貴自在冥加あれとや營みたてし門の松風、琴に通ふ春の日の麗かさ、けにや大道は髪の如しと、毛筋程も搖がぬ御代のためしには、鳥が鳴く吾妻錦繪に、鎧武者の美名を殘し、弓も木太刀も額にして、千早振神の廣前にをさまれる、豐津國のいさをしは、堯舜の古、延喜の昔も、目前見る心地になん。いざや此の時國々の名山勝地をも巡見して、月代にぬる聖代の御德を、藥罐頭の茶呑ばなしに貯へんものをと、玉くしげ二人の友ども誘ひつれて、山鳥の尾の長旅なれば、臍の邊に打ちがへの金をあたゝめ、花のお江戸を立ち出づるは神田の八丁堀邊に、獨住みの彌次郎兵衞といふのふらくもの、食客の北八諸共、朽木草鞋の足許輕く、千里膏の貯へは何貝となく、蛤のむきみしぼりに對の單衣を吹き送る、神風や伊勢參宮より足引の大和巡りして、花の都に梅の浪花へと心ざして出で行く程に、早くも高輪の町へ來かゝり、川柳點の前句集を思ひ出せば、





自画

　　高輪へ來て忘れたることばかり

と詠みたれば、我々は何ひとつ心がゝりの事もなく、獨身の氣さんじは、鼠の店賃出すも費えと、身上のこらず風呂敷包となしたるも心やすし。さりながら檀那寺の佛餉袋を和かにつめたれば、外に百銅地腹を切つて、往來の切手を貰ひ、大屋へ古借を濟ました代り、御關所の手形を受けとり、踏めるものは、見倒屋へさづけて金にかへ、がらくた物は店受に背負はせて禮を受け、漬菜の重石とすみかき庖丁は鄰へ殘し、千斷れたれども、繩すだれと油壺は向うへ讓りて、何ひとつ取り殘したる物もなく、まだも心がゝりは、酒屋と米屋の拂ひをせず、出拔けにしたれば、さぞや恨みんと氣の毒ながら、これも古き歌に、

　さきの世にかりたをなすか今かすかいづれむくいのありと思へば

打笑ひつゝ、彌次郎兵衛また狂詩を口ずさむ。

雖レ非二亡命一可二奈何一　借金不レ報欅レ尻過
夫居本貫掛乞衆　將三是川向成二干戈一

打興じて、ほどなく品川へ著く。［品川より川崎へ二里半］彌次郎兵衛、

海邊をばなど品川といふやらん

と難じたる上の句に、北八とりあへず、

さればさみづのあるにまかせて

いとおもしろく、歩むともなしに、鈴が森に至り、彌次郎兵衛、

おそろしや罪ある人のくびだまにつけたる名なれ鈴がもりとは

大森といへるは、麥藁細工の名物にて、家ごとに商ふ。

飯にたく麥藁ざいく買ひたまへこれは子どもをすかし屁のため

それより六郷の渡しを越えて、まんねん屋にて支度せんと腰をかける。川崎より加奈川へ二里半

萬年屋の女「お早うございやす。」彌次郎兵衛「二ぜん頼みます。」北八「コウ彌次さん見なせえ。今の女の尻は去年までは柳で居たつけが既う臼になつたア。どうでも杵にこづかれると見える。そしてめんえう、道中の茶屋では、牀の間に干乾びた花を活けておくの。あの懸物を見ねえ。何だ。」彌次「アリヤア鯉の瀧登りよ。」北「己ア又鮒が素麪を食ふのかと思つた。」彌次「コウ無駄をいはずと、早く喰はつし。汁がさめらア。」北「すかいつの間に持つて來た、ドレ／＼。」トならちやをあり切りさら／＼としてやり 彌次「もうお鉢が零落した。」北「又先へ行つて旨え物をしてやらう。」ト それより二人は錢を拂ひ、こゝを立ち出でて行くに、向うよりお大名の行列、先拂の男、一人は六十位のおやぢ、一人は十四五の奴、いづれも肴み人足なり。 彌「したアに／＼、かぶりものを取りませうぞ。」北「かけおちものは、下座をしねえでも

いゝと見える。」彌次「なぜ。」北「ハテ、かぶりものはとほりませうぞといふは。」先拂「馬士むまのくちを取りませうぞ。」北「馬の口も取りはづしが出來るかの。ハ、、、。」先拂「あとの人、せいが高いぞ。」彌次「おいらがことか、高いはずだ。愛宕の坂で九紋龍と肩をならべた男だ。」北「しやれなさんな。飛んだ目にあはうぜ。」彌次「アレ見やれ。どれもいゝ奴だ。まきばしよりで豪勢に尻がならんだは。何のことはねえ、葭ちやうじんみちの土用ぼしといふもんだ。」北「オヤ／＼、弓をかついでゐる人の笠を見ねえ。あたまと延引してゐらア。」彌次「そしてアノ羽織の長さは。暖簾から金たまがのぞいてゐる。」北「殿さまはいゝ男だ。さぞ女中衆がこすりつけるだらう。」彌次「べらぼうめ、いろ／＼なことに世話をやくは。あなたがただとつて、やたらそんな事をしてつまるものかえ。」北「ナゼ、それだとつて、アレお道具を見ねえ。アノとほりに立ちづめだは。ハ、、、。サアお駕籠が通つたから行かう。」卜立つてゆき過ぎると宿外れに、馬かた「親方、歸馬だが乘つてくんなさい。」彌次「安くば乘るべい。」馬かた「さか手で行かう。じばで乘つてくんなさい。」卜馬の値段も相談が出來て、彌次郎も北八も爰より馬に乘ると、二匹竝べて牽出す鈴の音、しやん／＼／＼。馬ヒン／＼／＼。卜向うより來る馬士「ヘエ畜生め早いな。」こちらの馬士「糞を食らへ。」さきの馬かた「うぬ尻でもしやぶれ。」卜これが此の手合の行きちがひの挨拶、互にあくたいをいつて義理をのべ別れる。彌次郎兵衛を乘せたる馬かた。「コレ伊賀よ、昨日手前と飲んでゐた野郎は、アリヤ上の宿の房州だな。」北八を乘せたる馬かた、此の手合、常に名をいはず、みな國所の名をよぶ。「先度のばんげにな、アノ房州めが嗅がな、う

らが親方の背戸口に尿をこいてゐたと思へ。何がシャア〳〵といふ音を聞くと、うらも氣が悪くなつたもんだんで、こいつなァ構ふこたアねえ、打つちめてやらうと思つて、打ちくらつた元氣で、いきなりにうぢよチ捻上げてそこへ打つ倒したと思へ。さうすると、嚊めが肝を潰しァがつて、コリヤァ何チするとぬかしやァがつたから、エ、何チするも犬の糞もいるもんかえ。擲つてしめるのだ　默つてけつかれといふと、何がァノ圖體だから、ひでえ力のある女よ。コノ野郎みやアと、おりよチ突つこかしやがつたんで、エ、如何しやァがると、横顔ァ一つぶん毆つて、廐の壁へおつ倒して、乗つ懸つたと思へ、まだ小言をぬかしやァがるから、うらが親方の子にやらうと思つて、餅チ買つて來がけだから、その餅チ二ツ三ツ、嚊めが口へねぢこんだら、むしや〳〵と食らやアがるから、その内に打つちめた。さうすると最つとくれろといやァがつたんで、己もそこらァ探り廻して、馬の糞たア知らずに彼奴が口へ押しこんだら、胸チ悪がつて、腹ァ立ちやァがるまいか、己もあんまり可愛さうだんで、とうとう焼杉の下駄ァ一つ押つ倒れたはな、いま〳〵しい。」この話に、二人も大きに興を催し　はや加奈川のぼうばなへ著く。これより二人とも馬を下りて辿り行くほどに、金川の臺に來る。「加奈川より程ケ谷へ一里九丁　爰は片側に茶屋軒をならべ、何れも座敷二階造り、欄干つきの廊下　棧などわたして、浪打際の景色いたつてよし。茶屋の女かどに立つて「お休みなさいやァせ。あつたかな冷飯もございやァす。煮たての肴の冷めたのもご

ざいやァす。蕎麥の太いのを上りやァせ。饂飩のおつきなのもございやァす。お休みなさいやァせ。」二人はこゝにて、一ぱい氣をつけんと茶屋へ入りながら、彌次「北八見さつし、美しいたへもんだ。」北「ハヽァいかさまいい娘だ。時に何がある。」ト北八そこらを見廻し、肴を差圖して酒をいひつける。娘前垂で手をふき／＼、鹽燒の鯵をあたゝめ、銚子杯を持ち出し、娘「これはお待遠さまでございやした。」彌次「おめへの燒いた鯵なら味からう。」ト娘フヽンと笑ひながら、表の方を向いて呼びながら行く。娘「お休みなさいやァせ。奥が廣うございやす。」北「奥が廣いはずだ。安房上總まで續いてゐる。」彌次「北八見さつし、此の魚はちとござつた目もとだ。」トうち返し見て彌次郎、

ござつたと見ゆる目もとのおさかなはさては娘が燒きくさつたか

北八これを聞きて、同じくこじつける。

味さうに見ゆる娘に油斷すなきやつが燒きたるあぢのわるさに

彼是れと興じて爰をたち出で、いろ／＼道草を喰ふ驛路の氣さんじは、高聲に話しものして、たどり行く程に、此の宿外れより十二三歳許りの伊勢參り、後になり先になりて、イセ參「だんなさま壹文くれさい。」彌次「やらうとも、手前どこだ。」イセ「わしらァ奥州。」北「奥州はどこだ。」イセ「笠に書いてあり申す。」彌次「奥州信夫郡幡山村長松、ム、幡山か。おいらも手前たちの方に居たもんだ。幡山の與次郎兵衛どのは達者でゐるか。」イセ「與次郎兵衛といふ人さァ知り申さない。與太郎どんなら、わし

らが鄰さアにあり申す。」彌次「オヽその與太郎よ。其の又內にのん太郎といふ年寄の祖父樣がある筈だ。」イセ「ぢゝいはあり申す。」彌次「そして與太郎殿の內儀樣は、確か女だつけ」イセ「お內儀樣ア女でござり申す。よく知つてゐめさる。」彌次「今ぢやア何といふか知らねえが、おいらがゐた時分は、名主どのは熊野傳三郎といつてな、その內儀樣が內に飼つておいた馬と色事をして、逃げたつけが、どうした知らん。」イセ「それよさアよく知つてゐめさる。莊屋殿の御內儀樣ア、內の馬右衞門といふ男と突つ走り申した。」北「イヤ妙々。」彌次「コリヤ小僧よ なぜ後へさがる。くたびれたか。」イセ「私はひだるくてなりまうさない。」彌次「餠でも買つてやらう。こいこい。」ト五もんもち五つ六つ買つてやりながら、いよいよ圖にのり、「オ彌次「なんと小僧、よく知つてゐるだらう。」イセ「アイノ＼。」ト餠をしてやる。この內つれの伊勢參、これも十四五の前髮、後から呼びかける。オイ、オ、イ、長松ヤイノ＼。」奴の伊勢參「きさいのノ＼。」ツレ「うぬしやアもつちチ己にもくれさい。」イセ「さきへ行く人に買つてもらへ。何でもあの衆が國さアの話をするを、オイノ＼といつてゐると、ぢきに買つてくんさるはちやア。」ツレノイセ「オイうらにも買つてもらうべい。」トかけ出して彌次郎に追付き、彌次「わしにも餠を買つてくれさい。」彌次「手前はどこだ。」ト笠のかきつけを見て、「ハ、ア是れも奧州下坂井村、コレ手前の村に、與茂作といふ親仁があらう。」イセ「先き餠を買つてくれさい。さうせないけりやア、此方のいふことが當り申さない。」彌次「おきやアがれ。ハヽヽヽ。」北「こいつは擠がれた。ハヽヽヽ。」ト打笑ひ

て行く程に、はや程ヶ谷の驛につく。［程ヶ谷より戸塚へ二里九丁］兩側より旅雀の餌鳥に出しておく留女の顔は、さながら面を被りたる如く眞白にぬりたて、いづれも井の字がすりの紺の前垂をしめたるは、扨こそいにしへ、爰は帷子の宿といひたる所となん聞えし。旅人を乗せたる馬士なまけたる聲にて、

ふじの人穴馬でも入る、なぜにお方にや穴がない、ドウ／＼。

とめ女「馬士どんお泊りかな。」馬士「イヤ旦那は武藏屋だが、お前の顔を見たら、ソレ此の畜生めが泊りたがらァ。ソレ／＼。」馬「ヒ、ヒン／＼。」ト行き過ぎると、又あとより旅人二三人。とめ女「もしおとまりかえ。」ト引き捕へて引つぱる。旅人「コレ手がもげらァ。」とめ女「手はもげてもようございます。お泊りなさいませ。」旅人「ばかァいへ。手がなくちやァおまんまが食はれねえ。」とめ女「お飯の上られねえ方が、おとめ申しちやァ猶勝手さ。」たび人「エ、いめえましい。はなさぬか。」トやう／＼にふり切つて行く、と、又後から來るは旅僧。とめ女「お泊りかえ。」たび僧、此の女のかほを見て、旅僧「イヤもちつと先へ參らう。」トこのあとより來るは田舍道者。とめ女「お泊りなさいませ。」田舍「はたごさァ安かァ泊りますべい。」とめ女「おはたごは二百ヅヽ。」田舍「イヤ／＼さうは出し申さない。そんだい湯はぬるくても宜くござる。平は遂ぞかへて食つたこたァござらないが、飯と汁は、たつた六七杯ヅヽも喰やァそれで宜くござるは。そんだいにや、あしたの晝食は、この柳ごりに一ぱいつめて貰へば、もう外に何にも入り申さない。はたごは百十六文ヅヽも出し申さう。」とめ女「そんなら外へお泊りなさいませさ。」

田舍「ハアとめざア行きますべい。」トゆき過ぎる。彌次郎兵衞北八この體を見て、終始興に入る。彌次又こじつける歌、

おとまりはよい程が谷ととめ女戸塚まへては放さざりけり

と、打笑ひ過ぎ行く程に、品野坂といふ處にいたる。これなん武州相州の境なりと聞けば、

たまくしげふたつにわかる國境所かはればしなの坂より

すでにはや、日も西の山の端に近づきければ、戸塚の驛になん泊るべしと、いそぎ行く道すがら、彌次「コレ北や、待たつせえ。話があらア。なんでも道中は飯盛を勸めてうるせえから、こゝに一つはかりごとがある。おいらは親仁なり、ぬしやア二十代といふもんだから、親子といつてもいい位だによつて、これから泊々では、なんと親子の分にしようぢやアねえか。」北「オヽこれは妙だ。なる程それぢやア勸めねえでいい。そんならお父さんといふのか。」彌次「さうさ、貴樣は諸事を息子氣取だが承知の助か。」北「よし〳〵、さういつて又いいたぼでもあつたら、此の息子をだしぬくめえよ。」彌次「エエばかァいはつし、オヤもう戸塚だ。 戸塚より藤澤へ二里 笹屋にしようか。」北「とつさんや。」彌次「なんだ。」北「こゝぢやア、ねつからお泊りなせえといつて、引つはらねえの。」彌次「ほんにその筈だ。爰はどなたかお泊りと見えて、みな宿屋に札が張つてある。」北「コウ、向うの内がいきだぜ。」彌次「コレ

あねさん、泊めてくれる氣はなしか。」はたごや女「イエ今晩はお泊りで、合宿はなりませぬ。」彌次「なむ三、さうだらう。」ト だん／＼宿をさがせども、みなふさがり泊めぬゆゑ、おほきに困り、まごつき歩き、

とめざるは宿を疝氣としられたり大きんたまの名ある戸塚に

それより宿外れにいたるに、漸くはたごやの合宿なき體に見ゆるあれば、やがてこゝにたよりて、彌次「なんとわしらを泊めてくんなせえ。」亭主「お二人かえ、お泊りなされませ。當宿は、やどやは皆ふさがりましたが、私かた許り當りませぬ。」彌次「こんなに綺麗な内をなぜ當てねえの。」てい主「私方は、新宅でござります。ソレおなべお湯はどうだ。」ト 此の内、女、たらひに湯をくんで來り、柳行李、風呂敷包を座敷へ運ぶ。北「コウ、彌次さんぢやねえ、とつさん、お前わらぢも一所にしておかう。」彌次「オヽ、そしておれが脚絆もざつと濯いでおきや。」北「ナニ脚絆をいすげか。」ト 顔を見ると、彌次郎兵衛目つきで知らせる故、口ごとをいひながら、脚絆を洗ひしまひ、北「あねさん茶を一つヅ、くんな。」ト 座敷へ通ると、盆に茶を二つもつて來り 女「すぐにお湯にお召しなさいやせ。」彌次「コウ、あの女の面ア見たか、眞中がへこんで、何のことはねえ、踏みけへしの馬蹄石といふもんだ。」北「そりやアさうと彌次さん。」彌次「ソレ女が來たわ。」北「オツトとつさん、湯へ入らねえか。」ト 此の内、女さかづきを持つて來る。彌次「オヤ酒か。江戸者と見ると、どこでも斯うするにはあやまる。」北「ナゼ、酒を出しやアべつに錢をとるか。」彌次「知れた事よ。」ト いひながら手拭を取り湯へ入る。女、硯ぶたとてうしをもち出で、女「おひとつ召し上りませ。」北「是れは御ちそうだ。」

コウ、おいらが親仁に、早く上らつせえといつてくんな。」女「ハイさやう申しませう。」ト立つて行く。此の内彌次郎兵衛湯よりあがりて、彌次「ハ、ア何だ、コリヤア飲めるわ。コレ手前はやく湯に入つてきや。」北「イヤ飲んでから入らう。」彌次「エ、手前も意地のきたねえもんだ。這入つて來やな。」此の内、北八も湯へ入る。亭主出て「是れは何もございませぬか、一つ召し上りませ。」彌次「イヤ御亭主さん、これでは迷惑だ。」亭主「イエ時にかやうでございます　私方は、今まで外商賣を致して居りましたが、今度旅籠屋になりまして、すなはち今日が店開きでございます。あなたがたは初めてのお客ゆゑ、それで祝つて一つ差上げますのでござりますから、別に御酒代を頂くのではございませぬ、お心置きなく召し上つて下さりませ。」彌次「イヤそれは先づおめでたい、しかし御馳走になつては近頃きのどくだ。」亭主「ナニサ御遠慮なう、今にお吸物もできます。」彌次「イヤもうお構ひなさるな。」亭主「ハイ御ゆるりと。」トいひ棄てて立つて行くきた八ふろより出て、北「やうすは殘らずあれにて聞いた。親方、只とは有り難え。」彌次「コレしやれずと、もう一ぺん湯へ這入つて來や。その内に皆おれが飲んでしまはア。」北「左樣だらうとおもつて、湯へはひつてゐても洗ふそらアねえ。オヤ足はまだ土だらけだ。まゝよ、サア始めねえ。」彌次「もうとつくに始めてるらア。ドレもう一つ始め直してから差さう。」北「イヤおいらはこれだ。」ト茶わんについで、息なしにぐつ／＼とやらかし、北「ア、いい酒だ。時に肴は、ハ、ア蒲鉾も白板だ。鮫ぢやァあんめえ。漬生薑に車えび、野暮ぢやァねえ。コウ

とつさん、此のしその實がいつちうめえ。お前は是ればつかり食ひなせい。」彌次「ばかアいへ。そりやア後へのこるにきまつたもんだ。時にもう吸物が出さうなものだ。」北「待ちなよ。」ト襖の間から勝手の方をのぞき、北「でる／＼、今よそつてゐらア。オヤなむさん神樣へ上げるのだ。イヤア來るぞ／＼。」ト膝を直してゐると、やがて女吸物をもつて出で、女「お銚子をかまへせう。」ト持つて行く。二人ながらすぐに吸物のふたを取つて、北「オヤ赤味噌たア、しやれるわ。よもや玉味噌ぢやアあんめえ。時に銚子はどうだ。」彌次「せはしねえ。たつた今もつて行つたわ。」北「もう來さうな物だ。」ト此の内、女が銚子をもつて來ると、二人ながら、なる口ゆゑ、あひの押へのと飲みかけ、だん／＼酒が廻つて、親子の挨拶も、何だかむちやくちやと成り、北「コウ姉さん、ちツと合をしてくんな。」女「私は一向たべませぬ。」北「はてさ、コレさういはずと。そしてこん夜お前と、ちよつとナ。これがかための杯だ。ノウとつさん。」彌次「せがれめは、もう醉つたさうな。」北「ナニ醉つたも氣がつえゝ。アノ親仁の面はよ、ハヽヽ。」ト卷舌にてしやれる。女は、肝をつぶしながら、受けた杯をほして、彌次郎兵衛方へ差す。北「エ、親仁の畜生め、思ひざしに預つたな。コウ、女中、後に頼みます。」トしなだれかゝる。女はあきれて早々にげ出して行く。彌次「コウ、貴樣ア悪い男だ。女の前であんな事をいふなえ。」北「ナゼ、いつちやア悪いか。悪かアいふめえ。おらア、アノすへもんめがをかしな目つきをするので、もう親子の縁が切りたくなつた。」ト此の内に膳も出で、いろ／＼あれども、餘り事ながければこゝに畧す。なまなか親子の挨拶にて、旅籠屋の女まこととおもひ、何をいつても、取りあげねば、今更ひとり寢の枕さみしく打臥しけるが、夜も更けゆくまゝに、勝手も靜まり、やまの神の小言いふ聲のみ聞えて、

此のふたり、寐もやらず、著たる夜著の垢つきかけて、千手觀音の利生あらたに、かゆき所へ、襖もる風の手の届くもうるさく、ほろ醉の酒もさめて、今おもひ廻らせば、獨寢におはちの廻らざるも、飯もりの杓子あたり悪き故にや、假の親子の遠慮ありしは、却つて鳥目の得附きたりとをかしくて、

一筋に親子とおもふをんなよりたゞ二すぢの錢まうけせり

斯く口ずさみて打笑ひつゝ傾けし箱枕も、耳の根にいたくも響く夜明の鐘、早表には助郷馬の嘶く聲ヒインノ〵、馬の屁の音ブウノ〵ノ〵、長持人足の歌人「竹にさアあ引雀はアなアんあえ、オイノ〵どうするノ〵。

此のうち、彌次も北も起き出づれば、やがて膳も出で、こゝにもいろ〵あれども、あまりくだ〵しければ略す。それより二人は、そこ〵に支度して、こゝを立ち出づると、向うよりつゞいて來るお大名の長持、引きもきらず。人「箱根さア引八里イはアなあんあえ。アツノ〵どうだか〵。」北「彌次さん見ねえ。重さうな物をよく擔ぐぜ。アノ尻を振るさまア。」彌次「あの手合が尻を振りまはすを見たら、チトふさいで來た。」北「なぜなぜ。」彌次「死んだ女房が事を思ひだして。」北「おきやアがれハヽヽヽ。」ト此の内、向うよりちよんがれ坊主、破れた扇にて手を叩きながら、坊主「ヒヤア御繁昌の旦那方、壹文やつて下しやいませ。」彌次「つくな〵。」坊「とこ〵〵よいとこな。」北「コレつくなといふに。錢はねえわ。」坊「ナニ無い事がござりやしよ。道中なさるお方には、なくて叶はぬ錢と金、まだも杖笠菱桐油、なんぼしまつな旦那でも、足一本では歩かれぬ。その上、田町の反魂丹コリヤさつてやのしらみ紐、越中褌のかけがへも、無くてはならぬその代り、古い奴

は手拭に、お使ひなさるがお徳川。」彌次「エ、喧しい、ソレやらう」ト はや、道より壹文はふりだす。坊「コリヤ四文錢とは有難い。」彌次「ヤ四文錢か。なむ三寶、二文つりをよこせ。」坊主「ハ、、、いめえましい。」

藤澤より平塚へ三里半　早藤澤に著きければ、まづ棒端の怪しげなる茶店に休み、北「婆さん團子は冷てえか、チト暖めてくんな」茶屋の婆「ドレ燒きなほして進ぜますべい」ト消炭の火をかき探し、灰の立つをも構はず煽ぎたてる。此のうち二人は埃をはたき〳〵、煙草のみゐると、六十ぐらゐの合羽をきて、ふろしき背負つたるおやぢ、此の店さきに立ちどまりて、親仁「モシちつとものを問ひますべい。江の島へはどう行きます。」彌「お前、江の島へ行きなさるか。そんなら、こりよチ眞直に行つての、遊行樣のお寺のまへに橋があるから。」北「ほんに、橋といやァ、たしかその橋の向うだつけ、いきな女房のある茶屋があつたつけ。」彌「ソレソレ、去年おらが山へ行つた時泊つた內だ。アノ女房は江戸者よ。」北「道理で氣がきいてるらァ。」親仁「モシ〳〵、其の橋からどう行きます。」彌「その橋の向うに鳥居があるから、そこを眞直に。」北「まがると田甫へ落つこちやすよ。」彌「エ、手前默つてゐろえ。ソノ道をずつと行くと、村外れに茶屋が二軒ある處がある。」北「眞にそれよ。よく腐つた物を食はせる茶屋だ。」彌「ソリヤァ手前のいふのは、右側だらう。左側の內はいいわな、去年おらがいつた時、ぴち〳〵する鯛の燒物、それに大平が海老のはね出るやつに、玉子と慈姑と大椎茸に、そして。」親仁「モシ〳〵、わしはそんな物は食はずとようござる。そこから又どう行きます。」彌「そこをずつと行きあたると、石の地藏樣がありやす。」北「アノ



地藏樣は瘡の願がきくさうだ。おらが方のへたなすが、あれで癒つた。」彌「ほんに瘡といやア、新道の金箔屋のたぬ吉めは、草津へ行つたつけがどうした知らん。」北「あれは、大福町に所帶を持つてるらア。」彌「大福町といふはどこだ。」北「大福町は、おいらが通りをまつすぐに當座町へ出て、判取町から店賃町を通つて、地代屋敷の算術橋を渡ると、そこが大福町だ。」親仁「そんな事よりやア、江の島へ行く道を教へてくんさい。」彌「ほんにさうだつけ。其の地藏樣から大福町を眞直に行くとの。」親仁「江の島へ行くにもそんな町がござるか。」彌「イヤ〳〵、こりやア江戸の町だつけ。」親仁「エヽこの衆は、おえどの事は聞き申さない。埒もない衆だ。ドレ先へ行つて聞きますべい。」トぶつ〳〵小言をいひながら行きすぎる。北「ハハヽヽヽ。」ト此のうち、主の婆だんごを四五くし、盆にのせて持つて出る。彌「こいつは黑い團子だ。」トいひながら一串取りあげて見れば、消炭の火が團子にくつついてゐる故、わざと火のついてゐるを隱して、北八の方へ差出して、彌「コレ手前こげたやつがよからう。」北「ドレ〳〵。」ト口もとへ當てがひ、「ア、ツ、、ツ、。婆さんアツ、、、、、とんだ目にあはせた。コレ團子に火がくつついて、ア、ひり〳〵する。」彌「ハ、、、手前暖かなのがよからうと思つて、火のついたのを遣つたわ。」北「エヽいめえましい。ペツペツ。」彌「サア行かう、婆さんおせわ。」ト茶代を置き、爰を出でて藤澤の宿へ入ると、兩側の茶屋、口を揃へて、茶屋女「お休みなさいやアし。醉はない酒もござりやアす。ばり〳〵する強飯をあがりやアし。」馬かた「旦那生きた馬はどうだ、安くやりませう。馬は達者だ。はねる事は受合だ。」かごかき「かごよしかの。旦那戻り駕籠だ。安く行

きませう。」北「駕籠はいくらだ。」かご「三百五十。」彌「たかい／＼。百五十なら己がかついで行かア。」かご「百五十にまけますべい。」彌「まけるか。ドレ／＼此の草鞋をそこへつけて下せえ。」かご「おめへ乗るのかえ。百五十で舁ぐといはしやつたぢやアないか。そんだんで、片棒わしが舁いで百五十とるのだ。」彌「ハ、、、こいつはいゝ。エヽわ、そんなら二百か。」かご「安いが行きますべい、ナア棒組サアめしませ。」トかごの値ができて、彌次郎兵衛交より駕籠に乗つて出かける。先ぼう「棒組や、旦那はおたいぜ。」あとぼう「しつかり構へてるさしやるもんだんで。」ト此の内、茶屋の亭主駕籠舁の名を呼びながら、てい主「ホイ、ホイ／＼。梅澤の佐渡屋へちよつくり左様いつてくんさい。此の中の新酒は餘り水の交ぜやうが少ない。今度から酒をちつと交ぜてよこして下さいといつて下さいヨ。ソレ何かおちたア。」かご「アイ／＼。」トかつぎ出す。北「コウ、貴様たちやァ藤澤か、アノ宿も大分綺麗になつたの。問屋の太郎左衛門どのは達者かの。」さきぼう「よく旦那は知つてござる。隨分達者でゐられます。」彌「孫七殿は未だ勤めてゐるかの。」さき「アイサア、旦那は何でも明るいもんだ。」あとぼう「べらぼうめ、知つてるやしやる筈だ。駕の内で道中記を見てゐさつしやるわ。ハ、、、ハ。」ト此の内、早くも馬入の渡しにつく。北八こゝは何といふ川と人に問ひしに、たゞ渡場とばかり答へけるを、彌次郎聞きて、

【平塚より大磯へ二十七丁】

川の名を問へばわたしとばかりにて入が馬入の人のあいさつ

此の川は、甲斐の猿橋より流れおつるよし。やがて向うに渡り、辿り行く程に、此に白旗村といへる

は、その昔、義經の首こゝに飛び來りたるを祝ひこめて、白旗の宮といへる、今にありと聞いて、彌次郎兵衛、

　首ばかりとんだ話の殘りけりほんの事かはしらはたのみや

それより大磯にいたり、虎が石を見て北八よむ。

　このさとの虎は藪にも剛のものおもしの石となりし貞節

彌次郎兵衛とりあへず、

　去りながら石になるとは無分別ひとつ蓮のうへにやのられぬ

斯く打興じて大磯の町を打過ぎ、［大磯より小田原へ四里八丁］鴫立澤にいたり、文覺上人が刀作と聞えし西行の像に向ひて、

　われ／＼も天窗を破りて歌よまん刀つくりなる御影拜みて

春の日の長欠伸に、頤のかけ金も外るゝばかり目をすりながら、北「ア、退屈した。ナント彌次さん道々謎を懸けよう。おめへ解くか。」彌「よからう、懸けやれ。」北「外は白壁、中はどん／＼ナアニ。」彌「べらぼうめ、そんな古いことより己が懸けようか。コレ手めへと己とつれだつて行くとかけて、サア何と解く。」北「ソリヤア知れたこと、伊勢へ參ると解く。」彌「馬鹿め、これを馬二疋と解く。」北「な

ぜ。」彌「どう〳〵だから。」北「ハヽヽヽ。そんならおいらふたりが國所ナァニ。」彌「神田の八丁ぼり、家主輿次兵衛店と解くか。」北「エヽおぶしやれなんな」これを豚が二疋、犬子が十疋と解く。」彌「その心は。」北「ぶた二疋ながらきやん十もの。」彌「おきやァがれ。コレこん度はむつかしいやつを云はう。そのかはり手めへ解かねえと酒を買はせるが、いいか。」北「解いたらおめへ買ふか。」彌「しれた事よ。」北「こいつァおもくろい。」彌「ちつと長いぜ。マアかうだ。おいら二人が國所とかけて、これを豚が二疋犬つころが十疋と解く、その心はぶた二ながらきやんとをもの、サァこれなァに。」北「ハヽヽヽそんな謎があるものか。」彌「べらぼうめ、ありやァこそ懸けるわ。解いて見ろえ。」北「どうしてそれが知れるものだ。」彌「知れざァいつて聞かせよう。これを色男が自分の帯をとつて、女にも帯を取らせると解く。」北「豪氣にむつかしい。その心は。」彌「ハテ解いた上で又解かせるから。なんと奇妙か。サァサァ酒を買へ〳〵。」北「まちなよ、意趣げへしをやらかさう。おれがのもちつくりながら。マァ搔撮んだ所がかうだ。おいら二人が國所とかけて、これを家が二疋犬ころが十疋と解く。その心はぶた二ながらきやんとをもの。これを又色男がじぶんの帯をとつて、女にも帯を取らせると解く。又其の心は、解いた上で解かせるから。サァ是れナァニ。」彌「ハヽヽヽ途方もねえ長い謎だぞ。」北「どうだ彌次さん、知れめえがの。これを衣桁の褌と解きやす。」彌「その心はどうだ。」北「解いてはかけ、解い

てはかけ。」二人「ハヽヽヽ。」打笑ひつゝ、歩むともなく、いつの間にか曾我の中むら、小八幡八まんの宮をうち過ぎ、酒匂川に差しかゝりければ、

われ〳〵はふたり川越ふたりにて酒匂の川にしゐて酔うたい

此の川を越え行けば、小田原の宿引早くも道に待ち受けて、宿引「あなた方はお泊りでござりますか」彌「貴樣小田原か。おいらア小清水か白子屋に泊るつもりだ。」宿引「今晩は兩家ともお泊りがござりますから、どうぞ私方へお泊りくださりませ。」彌「きさまの所は綺麗か。」宿「左樣でござります。此の間建て直しました新宅でござります。」彌「ざしきは幾間ある。」宿「ハイ十疊と八疊と、店が六疊でござります。」彌「水風呂はいくつある。」宿「お上と下と二ツヅ、四ツござります。」彌「女はいくたりある。」宿「三人でござります。」彌「きりやうは。」宿「ずゐぶん美しうござります。」彌「貴樣御亭主か。」宿「左樣でござります。」彌「内儀樣はありやすか。」宿「ござります。」彌「宗旨は何だの。」宿「淨土宗。」彌「寺は近所か。」宿「イエ遠方でござります。」彌「葬禮は何時だ。」北「コウ彌次さん、お前も飛んだ事をいふもんだ。」彌「ハヽヽ、ツイ口が辷つた。ハヽヽヽ。」ト だん〳〵打連れて、ほどなく小田原の宿へ入ると、兩側のとめ女、［小田原より箱根へ四里八丁］女「お泊りなさいませ、お泊りなさいませ」ト呼びたつる聲かしましく、彌次郎しばらくかんがへ、

梅漬の名物とてや留女口をすくして旅人をよぶ

此の宿の名物、外郎店近くなりて、北「オヤ爰の内は、屋根に大分凸凹のある内だ。」彌「これが名物のうゐらうだ。」

北「ひとつ買つて見よう。味えかの。」彌「味えだんか、頤が落ちらア。」北「すりや餅かと思つたら薬店だな。」彌「ハヽヽヽかうもあらうか。」

うゐらうを餅かとうまくだまされてこは薬ぢやと苦い顔する

やがて宿屋へ著きければ、亭主さきへ駈け出して入りながら、亭「サアお泊りだよ。おさん／＼、お湯を取つてあげろ。」宿の女房「お早うございます。」ト茶を二つ汲んで持つて來る。此の內、下女たらひに湯を入れて持つて來ると、彌次郞女の顏を橫目にちらと見て、小ごゑに北を呼びかけ彌「見さつし、萬ざらでもねえの。」北「あいつ今宵ぶつてしめよう。」彌「太え事をぬかせ。おれがしめるわ。」北「ソレお前、わらぢも解かずに足を洗ふか。」彌「オヤほんにハヽヽヽ。」北「エヽ、藁なしに湯を眞黑にした。」ト小言をいひながら足をあらひ、すぐに座敷へ通ると、女、柳行李三度笠を持ちきたり、牀の間に置く。北「コレ／＼女中、煙草盆に火を入れて來てくんな。」彌「すりや、手前も飛んだことをいふもんだ。」北「なぜ／＼。」彌「煙草盆へ火を入れたら焦げてしまはア。煙草盆の中にある火入のうちへ、火を入れて來いといふもんだ。」北「エ、お前も詞とがめをするもんだ。それおやア日の短い時にやア、煙草をのまずに居にやアならねえ。」彌「時に腹がきた山だ。今飯をたくやうすだ。埒のあかねえ。」北「コレ彌次さん、おいらよりやア、おめへ文盲なもんだ。」彌「なぜ。」北「飯をたいたら粥になつてしまふはな。米を炊くといへばいいに。」彌「ばかぬかせ。ハヽヽヽ。」ト此のうち、女煙草盆を持つて來る。北「モシおねへさん、湯がわいたら這入りやせう。」彌「ソリヤ人のことを言ふうぬが、何にも知ら

ねえな。湯が沸いたら熱くて入られるものか。それも水が湯にわいたらへえりやせうとぬかしをれ。」此のうちま た宿の女、女「モシお湯がわきました。お召しなさいませ。」彌「オイ水がわいたか。ドレ入りやせう。」

ト すぐに手拭をさげ、ふろばへ行きて見るに、この旅籠屋の亭主、上方者と見えて、水風呂桶は上方にはやる五右衛門風呂といふ風呂なり。（風呂の説明を省く）彌次郎この風呂の勝手を知らねば、底の浮いてゐるを蓋と心得、何心なく取つてのけ、すつと片足をふんごんだ處が、釜がぢきにある故、大きに足をやけどして、肝を潰し、彌「アツ、、、。こいつは飛んだ水風呂だ。」ト 色々考へ、これはどうして入るのだと聞くもばか〳〵しく、外で洗ひながら、そこらを見れば、雪隠のそばに下駄がある故、こいつおもくろいと、かの下駄をはきて湯の中へはひり、洗つてゐると、北八待ちかねて湯殿をのぞき見れば、いう〳〵と淨瑠璃、彌「お半なみだの露塵ほども。」北「エ、あきれらア。だうりで長湯だと思つた。いいかげんに上らねえか。」彌「コレちよつと己が手をいぢつて見てくれろ。」北「なぜに。」彌「もう湯だつたか知らん。」北「いいきげんな。」ト 座敷へ入る。此の内、彌次郎湯から上り、かの下駄をかたかげへ隠し、そしらぬ貌にて、彌「サア這入らねえか。」北「オットしめた。」ト さら〳〵裸になり、一目散に水風呂へ片足つつこみ、北「アツ、、、、彌次さん〳〵、たいへんだ。ちよつと來てくんな。」彌「さう〴〵しい、何だ。」北「コレお前、この風呂へはどうして入つた。」彌「馬鹿め、水風呂へ入るに別に入り様があるものか。先づそとで金玉をよくあらつて、そして足から先へどんぶりこ、すつこつこ。」北「エ、しやれなんな。釜がぢきにあつて、これが入られるものか。」彌「入られりやァこそ手前の見たとほり、今までおれが入つてゐた。」北八「お前どうして入つた。」彌「ハテしつこい男だ。水風呂へ入るのに、どうして入つたとは何の事だ。」北「ハテめんえうな。」彌「むづかしいこつたァねえ。初め

の内、ちつとあついのを辛抱すると、後にはよくなる。」北「ばかァいひなせえ。辛抱してゐるうちにやア、足が眞黒に焦げてしまはァ。」彌「エヽ、埒のあかねえ男だ。」ト心の内はをかしさ堪へられず、座敷へかへる。北八いろ〳〵と考へ、そこらを見廻し、彌次郎が隠しておいたる下駄をみつけて、ハヽアよめたと、心にうなづき、すぐにその下駄をはいて水風呂のうちへはひり、北「彌次さん〳〵。」彌「なんだまた呼ぶか。」

北「なるほどお前のいふとほり、入りしめて見るとあつくはねえ。アヽいゝこゝろもちだ。あはれなるかな石童丸は、ヅレレン〳〵。」ト此の内、彌次郎あたりを見れば、隠しておいたる下駄がなき故、さてはこいつ見つけたなと、をかしく思つてゐる内、北八はさすがに尻があつく、立つたり坐つたりして、いろ〳〵して、餘り下駄にてぐわた〳〵と踏みちらし、遂に釜の底をふみぬき、べつたりと尻もちをつきたりければ、湯は皆ながれてシウ〳〵〳〵〳〵。北「ヤアイたすけぶね、たすけぶね。」彌「どうした〳〵、ハヽヽヽヽ。」ト宿の亭主この音に驚き、裏口より湯殿へまはり、肝をつぶし、亭主「どうなさいました。」

北「イヤモウいのちに別條はねえが、釜の底がぬけて、アイタヽヽヽ。」亭主「コレはまた、どうして底がぬけました。」北「ツイ下駄でぐわた〳〵やつたからさ。」トいふに、亭主は不思議さうに北八が足を見れば、下駄をはいてゐる故、亭主「イヤア、お前は途方もないお人だ。水風呂へ入るに、下駄をはいて入るといふ事があるものでございますか。埒もないこんだ。」北「イヤ私も初手は、はだしではひつて見たが、あんまりあついからさ。」亭主「イヤはや、苦々しいこんだ。」ト大きに腹をたてる。北八も氣の毒さ、こそ〳〵と體をふいて、色々と言譯をする。彌次郎氣の毒に思ひければ、中へ入り、釜の直し賃、南鐐一片遣はし、やうやうと詫言して、

水風呂の釜をぬきたる科ゆゑにやどやの亭主尻をよこした

北「いめえましい。」ト思ひがけなく、貳朱ひとつ棒にふつて大きにふさぎゐる。此の中膝も出で、そこそこに食つて仕舞ひ、しやれも無駄も一から云はず、たゞ茫然とだんまりなり。彌「コレ手前何もふさぐこたァねえ。大きに徳をしたわ。」北「なにが徳だ。」彌「かまを抜いて貳朱では安い。葭町へ行つてみや、そんなこつちやァねえ。」北「エヽぶしやれなんな、人の心も知らずに。」彌「イヤそれでも手前がそんなにしてゐると、おらァ氣のどくな事がある。」北「なにが。」彌「さつきの女が後に忍んで来る筈にふづくつて置いたから、側で手前が氣を悪くして、なほの事ふさぐだらうと、それがどうも氣の毒だ。」北「オヤほんにか。いつの間に約束した。」彌「そんなことに如才のあるのぢやァねえ。さつき手前が湯へ入つてゐるとき、げんなまで先へおつとめを渡しておいたから、もう手つけの口印までやらからしておいた。何ときついもんか。へヽヽヽ。さういつても色男はうるせえの、ハヽヽヽハもう寝ようか。」ト手水にたつて行く。此の内女きたり脉をとる。北「コレ姉さん、お前おらが連れの男に何か約束をしたぢやァねへか。」女「イヽエ、オホヽヽヽ。」北「イヤ笑ひ事ぢやァねえ。コリヤァ内證の事だが、あの男はをへねえ瘡かきだから、うつらぬ様にしなせえ。お前がしよつては氣の毒だから、いつて聞かすが、かならず沙汰なしだよ。」ひそ〳〵もので眞實らしくいへば、女肝をつぶせし様子に、北八圖にのり、北「そして足は年中鴈瘡で、何のことはねえ、乞食坊主の菅笠を見るやうに、所々に油紙のふたがしてある。それに又アノ男の胡臭のくさゝ、その癖ひつこい男で、かじり付いたら放しやァしねえ。めんえうアノ瘡つかきといふものは、口中の

悪臭いもので、おいらも並んで飯を食ふさへ嫌でたらねえが、仕方がねえ。おもひ出しても蟲酸がはしる。ペッ〳〵。」ト此の内、はや彌次郎手水より出て來る樣子に 女「もうお休みなさいませ。」ト とう〳〵立つてゆく。彌次郎座敷へ入り、すぐに夜著をかぶつて、 彌「ドレ、ふところを暖めておいてやらう。」 北「いめえましい。今夜のやうにうまらねえ事はねえ。火傷をして貳朱金をふんだくられる、その上アノ美しい奴を、そばで抱いて寝られて、ほんに踏んだり蹴たりな目にあふわ。」 彌「へヽヽヽヽヽ。堪忍さつし。こんやァちつとうけにくからう。畜類め、こたへられぬ。ハヽヽヽヽ。コレ北八もう手前ねるか。もつと起きて居ねえ。」北八は委細かまはず、 北「ゴウ〳〵ゴウ。」 彌「もう來さうなもんだ。」ト ひとりましくしして、待てども〳〵、音もなし、なま中さきぜにをやつて、棒にふるかと氣が氣ではなく、こらへ兼ねて、むしやうに手をたゝき立てると、宿屋のかゝさまみ來り、 女房「お呼びなさいましたか。」 彌「イヤお前ではわかるめえ。さつき、こゝの女中にちつと頼んでおいたことがあるから、何卒ちよつとよこしてくんねえ。」 女房「ハイあなた方のはうへ出ました女は、雇人でございますから、もう宿へかへりました。」 彌「エヽほんにか。そんならよし〳〵。」 女房「ハイお休みなさいませ。」ト 勝手へ行く。 北「ハヽヽヽヽヽヽヽ。」 彌「べら棒め、何がをかしい。」 北「ハヽヽヽヽヽイヤこれで地にした。もう安堵して寐ようか。」 彌「勝手にしやァがれ。」ト哀れなるかな彌次郎兵衛、北八が奸計とは露しらず、貳百懸しや恨めしの、おじやれか無洒落か、あたら夜を、是非なくころりと突つぶしければ、北八をかしく、又一首、

ごま鹽のその辛き目を見よとてやおこはにかけし女うらめし

かれ是れ興じて臥したりけるに、早くも聞ゆる遠寺の鐘に、一睡の夢は覺めて、夜明けければ、やがて起き出で、そこ〳〵に支度して立ち出でけるに、けふは名におふ箱根八里、早そろ〳〵とつま上りの石だか道をたどり行くほどに、風祭近くなりて、彌次郎、

人の足にふめどたゝけど箱根やま本堅地なる石だかのみち

北「コレ〳〵明松を買はねえか。こゝの名物だ。」彌「べらぼうめ、もう日の出る時分明松がナニいるものか。」北「夜が明けてもいいわな。おめへ買つて點せばいい、昨夜のかはりに。」彌「おきやアがれ。」北「ハヽヽヽヽ。」又こゝに湯本の宿といふは、兩側の家作きらびやかにして、いづれの内にも美目よき女二三人づゝ店先に出て、名物の挽物細工をあきなふ。北八一軒々々にのぞき見て、北「オヤ〳〵、あらひ粉の看板を見るやうに、顔と手さきばかり白い女がゐらア。」彌「なんぞ買はう。」女「お土産お召しなさいませ。お入りなさいやんせ。」彌「コウ姉さん、そこにある物を見せなせえ」トいふに、娘は又外の客と相手になつて商ひしてゐる。勝手より婆走り出で、婆「ハイ〳〵これでおんざりますか。」婆アでは不承知の顔つきにて、彌「それぢやアねえ。コウ姉さん、そつちのを見せな。」婆「ハイ〳〵これでおんざりますか。」彌「エ、それでもねえ。コウ姉さん、お前の手に持つてゐるは何だ。」娘「ハイ〳〵お煙草入でおざりやんす。」彌「コレ〳〵、この事さ。

時にいくらだ。」娘「ハイ二百でおざりやんす。」彌「百ばかりにしなせえ。」娘「お前さんもあんまりな、あなた方のお蔭でかやうに致してをりますものを、かけ値は申しやんせぬ。」ト彌次郎をじろりと見る、たちまちのろくなりて、彌「そんなら弐百よ。」娘「もう些とお召しなさつて下さいませ。オホ、、、、。」トねつから可笑しくもないことを笑つて、彌次郎がかほたまたじろりと見る。彌「そんなら三百々々。」娘「もうそつとでござりやんす。オホ、、、、。」彌「ふんだうな四百々々。」ト一本はふり出して買ひ取り、「北八サア行かう。」娘「ようお出でなさいやんした。」北「ハ、、、、、二百のものを四百に買ふとは、新しい〳〵。」彌「それでも惜しくねえ。アノ娘は餘程おれに氣があつたと見える。」北「おきやアがれ。ハ、、、、。」彌「それでも初手からおれの顔ばかり見てゐたは。」北「見てゐたはずだ。アノ娘の目を見たか、やぶにらめだ。ハ、、、、。」トこゝにいがぐり頭の子ども四五人ゐて、子供「權現さまへ御代參、壹文やつて下されチヤ。」北「ナニ御代參とはなんだ。」子供「此方しゆの代りに參るわ。」北「ナニおいらが代りに。いづれを見ても山家そだち、身がはりにする面があるものか。ろくな首は一つもない。イヤ時にアノ錢はなんだ。」彌「賽の河原へ來たぞ〳〵。」

辻堂はさすがに賽のかはら屋根されども鬼は見えぬごくらく

お茶漬のさいのかはらの辻堂ににしめたやうな服裝の坊さま

それより、御關所を打過ぎて、

はる風の手形をあげて君が代の戸ざさぬ關を越ゆるめでたさ

斯く祝して、峠の宿に悦びの酒くみかはしぬ。

浮世道中膝栗毛初篇　終

膝栗毛後編序

予嘗て旅の賦を作る。其の畧に云く、土橋を渡りて又土橋を見る。恰も深川にて友を訪ぬるがごとく、並木を出でて亦並木に入る。殆んど淺草にて狐に魅さるゝが如し。卷藁に鯱立ちなせる燒肴には、今井四郎が討死を思ひ、強飯に羣鳥なせる蒼蠅には、伊勢平氏の敗軍をなげく。木賃宿の居風呂は、鳧の脚短しと雖も膝を越ゆる事なく、大井川の歩行渉りは、鶴の脛長しと雖も、胸を冷す事頻りなり。雲助は裸蟲の長として、赤裸の境界に終り、出女は萬物の靈として、萬客の弄物に老い、見る物都て意馬の頭を低れ、聞く事皆心猿の腸を斷てり。さるをうき物の發語ともしらで、天地の逆旅に居て獨り樂しく、日月の過客にしたがひて、そゞろ浮れありくものは十篇舍の主にして、これが爲に一雙の膝栗毛を養ふ。一疋の口の輕尻は繩に一冊子を負うて箱根に留まり、伯樂顧みて本屋仲間の初市に價を倍す。今本馬三十六貫目、中腹に羣ぐる才力を出して、一鞭直に京城にいたる。かばかり迅速のうちに、驛路の情態を記して全篇の功を成す。此の膝栗毛、一日千里といふべし。

享和癸亥春

芍藥亭主人　菅原長根題

道中膝栗毛後編凡例

○此の膝栗毛後編は、箱根驛より大井川に至つて終る、驛中旅客の滑稽、道路俚諺の風色、其の雜情を穿つて著す事初篇に同じ。

○驛々風土に隨つて音律に清濁の差別あり、俚言方語の通稱に異なる事あり、笑ふべきに非ず。古代の詞は却つて田舍に殘れりと徂徠翁の謂なり。たとへば駿遠兩國にて、行くといふを行かずといふは行かんずるなり、酒を呑まず飯を食はずとは、呑まんず喰はんずるなりと「物類稱呼」に見えたり。

○恐ろしいといふ事を、相州にてはおつかないといひ、駿州にてはおぞいといひ、遠州にてはこはいといふ。同國にて九ツをけゝねつといひ、心なしといふをけゝれなしといふ事は、「今古集」にかいがねをさやにも見しかけゝれなくよこをりふせるさやの中山」とあり。

○おぞいといふは、尾張にて物の惡しき事をいふ、駿河邊にては物事賢き事にいふ。「和字正濫」にからすてふ大おそどりの歌を、おほおぞとりと濁音によませて、あしき鳥の事といへり、おそといふ是れなり。いは助字なり。

○相豆駿遠にてまずいといふは、味からずの下字をとりて、まずといふ、いは助字なり。

○都て道中箱根より伊勢路までは、馬をおまといひ、又いまといふ。「日本紀」に馬をいまとよませり、仍つて相通しておまともいふ。

○なぜといふをあぜといふは、[萬葉]に、あぜそも今宵よしろきまさぬとあり。
○うらといふは我等の轉語、おれらをちゞめておらといひ、おら又轉じてうらといふ。
○驚くことを相豆にてはたまけるといひ、駿遠におびえるといふ。たまげる、[源氏]に魂消ゆると有り。
○なでふあでうといふ詞は、[紫日記]に、なでう女のまなふみとあり。
○愚かなるものを駿遠にてひやうたくねといふ。
○相豆に、とてつもないといふ詞は、[性理大全]に塗轍と有るなるべし。駿州にはとひやうもないといひ、遠州にはしやうくもないといふ。
○にしといふは、主なり。にとぬと通へばなり。
○すわることをかうまるといふは、禪家に久しく坐する事を行坐といふ、行の字は久しき義なり、仍つてかうまるとふこまるは居の心にて、ねまるかしこまるのまるなり。
○これ等の外勝ぐるに暇あらず、唯此の卷中にあらはしたる詞のみを爰に觧く。仍つて排設の趣は俚俗の訛言方語のまゝを記して、其のをかしみを純らにす。
○道旅木賃泊の憀慄なる體、六部順禮ぬけ參りの患苦、雲駕馬士護摩の灰等の始末、初篇にもれたるをこゝに記す。餘は續編に讓るものならし。

十返舍一九著

浮世道中膝栗毛後編

十返舎一九著

箱根より三島へ三里二十八町　長明が關海道記に曰く、松に雅琴の調べあり、浪に鼓の音ありと、息杖の竹笛をふけば、助郷の馬、太鼓をうつ。膝栗毛後編の序びらき、ヒヤリ／＼、てれつく／＼、すつてん／＼。狂言詞「かやうに候ものは、お江戸の神田の八丁堀邊に住居ひせし、彌次郎兵衛、北八と申す懶けものにて候。扨もわれ／＼、伊勢へ七度熊野へ三度、愛宕様へは月参りの大願を起し、ぶらりしやらりと出かけ、ねつから急がす候程に、えいやつと箱根の驛につきて候。」北「玉くしげ箱根の山の九折々々、げにや久かたの醴賣や、さんしよ魚の、名所おほき山路かな。」醴賣のおやぢ「名物上らしやいませ。醴飲ましやいませ。」北「彌次さん、ちよつと休みやせう。オイ一杯くんな。」ト牀几にこしをかける。おやぢ一ぱい汲んで出す。北「こいつは黒い／＼。」彌「黒いやうで甘いは、遠州濱松ぢやァないか。」北「わりいわりい。コウお前なぜ飲まねえ。」彌「おいらァいやだ。その茶椀を見や。施主の氣がきかねえよ。朝顔なりにでもすればいいに。」北「さうさ、是れおやぢ強飯の香のものも、奈良漬ぢやあるめえの。」

おやぢ「香の物はござらねえが、むめぼしよヲ進ぜますべい。」ト皿にある梅干を出す。北「オイ〳〵いくらだえ。サアおせわ。」ト錢を拂ひ出て行く。向うより來る小荷駄馬引きも切らず。すゞの音しやん〳〵。馬子の唄「富士の頭がつんもえる、なじよに煙がつんもえる。三島女郎衆にがら〻打ちこみ、こがれおしやつたらつんもえたア。しよんがえ。ドウ〳〵。」

こちらから行く馬かた、たがひに行き違ひて、馬方「ヒヤア、出羽宿の先生、どうだ。」向うより來る馬方「べらぼうめ。おれが先生なりア、うぬははつつけだア。」馬「ヒイン〳〵。」またむかうより來るは、お大みやうの國からお江戸いりの女中達、かごをつらせて四五人づれ、さわぎつれて來るを見て、

彌次郎兵衞「オヤ〳〵、えらい〳〵。」北「ほんに是れは、皆生きた女だ。奇妙〳〵。ナント彌次さん、つかねえこつたが、白い手拭をかぶると、顏の色が白くなつて、とんだ意氣な男に見えるといふことだが、ほんたうかの。」彌「ソリヤ違へなしさ。」北「よし〳〵。」ト袂からさらしの手拭を出して、ぐつと頰かぶりにすると、通りすがひに女中たち、北八が顏をのぞいて見て、みなみな笑ひとほりすぎる。北「何とどうだ。今の女どもが、おいらが顏を見て、嬉しさうに笑つて行つたわ。どうでも色男は違つたもんだ。」彌「笑つたはずだ。手前の手拭を見や。木綿さなだの紐が下つてるから。」北「ヤア〳〵、こりやア手拭ぢやねえ。越中褌であつた。」彌「手前、昨夜ふろへ入る時、褌を袂へ入れて、それなりに忘れたはをかしい。大方けさ手水をつかつて、顏もそれで拭いたらう。汚ねえ男だ。」北「さうよ。道理こそ惡臭い手拭だと思つた。」彌「ナニ全體手前があたじけねえから、こんな恥をかくわ。」北「なぜ。」彌「木綿をしめるから、手拭と取り違へるわ。コレ己ア見やれ、いつでも絹の

褌だ。」北「それだとつて、やね屋が長局のふきかへに行きやァしめえし、絹をしめる事もねえす。エヽまゝよ、旅の恥はかきずてだ。斯うもあらうか。」

手拭と思うてかぶるふんどしはさてこそ恥をさらしなりけり

それよりかぶと石をよめる、彌次郎兵衛、

たがこゝに脱ぎすておきしかぶと石かかる難所に降参やして

斯くて山中といへる立場にいたる。こゝは兩側に茶屋軒を竝べて、女「おやすみなさいますァし。くだり諸白もおざりやァす。餅ヲあがりやァし。一膳飯ヲおあがりやァし。お休みなさいやァし、お休みなさいやァし。」北「北八ちつと休んで行かう。」ト茶屋へ入る。此の内の庭につき立てたる竈の前に、雲介どもねござ、赤合羽などを著て、寄りこぞり火にあたりゐると、蒲團をからだに卷きたるもあり、澁紙を著たるもあり、或は表の方より竹の煙管をくはへて、一人の雲介ずつとはひる。雲介「おへねえひやうたくれどもだ。あか熊やどぶ八めが峠まで長持でやつてたァな。」一人の雲介「えいわ、其ん代あひ手が四十に五十はふんだくるべい。」この長持といふは六百のこと、あびてといふは酒手の事なり。今一人「コレそりァえいが、コノ野郎がおしやらくを見ろえ。しつかり紋付を著やァがつた。」酒ごもを著てゐる雲介「昨日小田原の甲州屋で、やらやつと一枚貰つて著たが、あんまり褌が長くて、お醫者殿のやうだとけつかる。」丸裸の雲介「野郎めらァ工面がえいから、好きなものを著やァがる。おらァ此ん中内から、丸裸でゐりやァ、がら吉婆がぬかすにやァ、古傘をやらうから、

引つぺがして著ろとけつかる。べらぼうめ、野郎の猪ぢやアあんめえし、そんなもんが著られるもんかといつたら、すんならこりよォ著ろとつて、えい筵を一枚うつくれたと思へ。そのむしろを昨日の晩げに、畑で湯につつ入るとつてひん脱いで置いたら、聞きやれ、大事の著物を、がら、馬に食はれてしまつたア。いま／＼しい。」彌次郎、北八、この手合の話をきいてゐて、大きに興にいり、やがてこゝを立ち出でゆくと、長坂大しぐれといへるあたりより、旅人一人紺の合羽を著て、風呂敷包、御行李を肩にひつかけたるが、後になり先になり、旅人十吉「あなた方はどこでござります。」彌「わつちら江戸さ。」十吉「私も江戸でござります。あなた江戸はどの邊でござります。」彌「神田さ。」十吉「神田には、私もをりましたが、どうか貴方方は見申したやうだ。神田はどこでござります。」彌「神田の八丁堀で、わつちらが内はとちめんや彌次郎兵衛といつて、間口が二十五間に裏行が四十間、角屋敷の土藏造りで大層なものよ。」十吉「ハヽヽヽ、その裏でござりますか。」彌「とんだ事をいふ。裏店はなしさ。わつちらが所一軒で住つてゐやす。」十吉「ハァそんなら、總地代で沽券はいくら。」彌「沽券は千八百兩。」十吉「おめへ直でござりやすか。口錢は何朱でも、二ツ割に致しやせう。」彌「おめへ何をいふ。」十吉「わたしは又、地面の賣買のお咄しかと存じました。」彌「ナニ其樣こつちやァねえ。わつちらァちよつと出るにさへ、供の五人や十人はつれて歩きやすが、それぢやァ氣がつまつておもしろくねえから、此の男ひとりつれて、不自由して歩くも物ずきだね。」十吉「なる程さ樣でござりませう。イヤ又あなたのお母親樣なぞ

は、私よく存じて居りますが、いつぞや淺草の門跡さまの前で、お目に懸りました時、なにか包をさげて杖にすがつてござる容子、大きにお年がよりました。」彌「ハヽアそれは大かた、寺まゐりにでも行かれた時でござりませう。おめへ御存じとあれば、定めて何とか詞をかけられたで御座りやせう。」十吉「私を見ると直に駈けてござつて、何を仰しやるかと存じますたれば、一文やつて下しやいませと。」北「ワハヽヽヽヽ。」彌「イヤ、お前おいらを乙にはぐらかすの。」北「おもしろへ〳〵。何と今宵私らと一所に泊りはどうだ。」十吉「ようござりやせう。」トそれより道すがら互にしやれ合ひ、園澤といへるに至る。爰に法花寺といへる寺に足利ぶしやうの建立ありし七面堂あり。彌次郎兵衞遙かにこれを伏し拜みて、

足利の武將の建てし名にめでて七面堂といふべかりける

斯くて三人話しつれて、市の山に到る。こゝに、毬栗頭の子供二三人、大なる泥龜を捕へて、持ち歩き遊びゐる。北八見つけて、北「コウ彌次さん、いいものがある。アノ泥龜を買ひとつて、晩に宿屋でやらかしは如何だ。」彌「よからう。ナント小僧、その泥龜を賣らねえか。」子供「こんたしゆ、要るならうちくれべい。そんだい錢チくれさるか。」北「やらうとも。ソリヤ大きな錢をやるわ。」ト四文せん二十四文ばかり拔いてやり、軈てあたりの藁をひろひ、かのすつぽんを藁つとに入れて引つさげ、北「奇妙々々。」十吉「こいつは面白い。時に日が入らしつた。ちつと急ぎやせう。」ト足ばやに三人たどる。既に其の日も暮に近づき、入相の鐘幽かに響き、鳥も塒に歸りがけの駄賃馬追つ立てて、泊りを急ぐ馬士唄の惰けたるは、

ほてつぱらの寂しくなつたる故にやあらん。此の時、漸く三島の宿へつくと、兩側より呼びたつたる女のこゑ〴〵、

三島より沼津へ一里半

女「おとまりなさいませ〳〵。」彌「エ、ひつはるな。こゝをはなしたらとまるべい。」女「すんならサアおとまり。」彌「おかすかべイ引。」ト逃げるはずみに、あんまに行きあたる。あんま「アイタ、、、、。まなこつぶれが、べらぼうめ。あんまァけんびきイ引。」燒酎賣の聲「燒酎は要りませぬか。目のまはる燒酎を買はしやいませ。」北「えいかげんに、こゝへとまらうか。」はたごやの女「サァおはひりなさいませ。おさんどんお泊りだよ。」やどやの亭主「コレハお早うございます。お連樣はお幾人。」彌「影法師共に六人。」ていしゆ「ヘイそれは、ヤレちやア三太郎はゐぬか。お湯をとつて來い。おちやは煮えてあるか。ソレまづお風呂をひとつあげろ。お飯もわいた。すぐにお入りなさいませ。」此の内、三人とも足を洗ひしまひ、すぐに奥へとほる。宿の女「お湯にお召しなさいませ。」彌「ドレお先へ參らう。」ト裸になりて驅けいだす。女「モシそこは雪隱でございます。こつちらへ。」彌「ホイこれは。」ト湯どのへゆく。十吉「時にかの藁苞はよ。」北「牀の間に置きやした。後の寐酒にこしらへて貰ひやせう。」此の内、彌次郎湯よりあがると、次に十吉湯に入りに立つ。宿の亭主問屋の下役を連れて、帳面と矢立を持ち出る。これは宿帳とて旅人の國所を記すなり。亭主「御免くだされませ。ハアお一人はお風呂か。宿帳を附けます。あなた方お國は。」北「ハイわしは泉州。」亭主「泉州はどこでございます。」北「泉州堺、名は天川屋儀平といひやす。」亭主「ヘイあなたは。」彌「わしかえ、城州山崎村與市兵衞と申しやす。」亭主「扨は與市兵衞樣とはあなたか。承りおよんだあなたの聟さま勘平樣

は、どうなされました。」一北「勘平は、三十になるやならずに死にやした。」亭主「ハア、それはお力おとし。 お輕さまは。」一彌「ずるぶん達者でゐます。」亭主「そして狸の角兵衛さまや、めつぽふ彌八殿はたしかあなたの御近所であつた。」一北「さやうさやう。」亭主「アノまた猪はどこにゐられます。」一北「ハア猪はどこだか。」亭主「てんつるてんつる、てんつるてんはどういたしました。」一北「ハ、、、、、」亭主「イヤまア御膳を上げませう。」一彌「いましい、結句あつちに遊ばれた。」ト此のうち、宿の女、膳を持ちきたり、ならべ置きて、 女「サアおあがりなさいませ。 コレちやアおたつどんよウ、そこの飯櫃ウ持うてきなさろ。」一北「時にこゝにやア代物はなしかの。」女「この間、木曾街道の追分から來た女郎衆が二人ございます。 おさみしかア お呼びなさいませ。」一彌「こいつおもしろからう、器量は。」女「がいにえいと云ふでもおざりましない。ヤア十人前でおざいます。」一北「ハ、、、、十人前の飯盛か。 おもくろい、呼んでくんな。」女「すんならたゞ今。」トいひすてて立つて行く。此のうち、十吉湯殿より上りて、 十吉「お前がたア、何か野暮からぬお話しだね。」一北「ねしやアどうだ。」十吉「イヤ私はアノ内の女に、小し咄合ひがありやす。」ト此の内、宿の女きたりて、 女「これは御如才でございます。 サアお買へなさいませ。 モシ今のが參りました。 コレおまいちやアこゝへ來なさろ。 ドレ迎ひに行かずに。」女は立つてゆく。すべてこのあたりより、駿河、遠州掛川あたりまでは、行かうといふことを行かずといひ、食はうといふことを食はずといふ。やがてかの女、襖のかげに覗いて立つてゐるを、引つぱり出る。 女「サアサア來なさろ來なさろ。」飯盛おたけ「アレハア一人つて行ぎます。がいにしよびきなさん

な。」今一人の飯盛おつめ「どうせハァ出べい處さァ出にやァならない。サァおたけさん、つん出なさろ。」

ト やう／＼二人ながら出かけて來る。一人は紺の木綿にけんかたばみの紋の付きたるを著て、ふとり縞の帯をしめ、今一人はべにがら色の、赤き絲の入りたる縦縞のぬのこに、これも帯はふとりの藍びろうど、紅木綿のふんどしちらちらと出しかけ、黒きらをの長ぎせるを、手に持ちて座敷へすわる。

北「サァ／＼爰へ來なせえ。時に女中、膳は引いて酒にしやせう。」

女「ハイ今に出します。」ト膳を引いてしまひ、銚子、さかづき、肴を持ちいで、女「サァ一つあがりませ。」彌「ドレ／＼。」ト一口のんで下におくと、女、心えてお竹にさす。お竹「コリヤハァ私にかえ。」ト飲むまねして北八へさす。北八のんでおつめへ差す。おつめ「お龍どんハァおりよけえだもし。」北「一つ飲みなせえ。」つめ「私らァはあ、がいに飲みましねえ。ヤレ扠この衆は、がいにおつぎやる事よ。」女「お竹さん、お前方の所ぢやァ、皆これよヲさしてゐるの。」ト おたけが頭にさしてる銀ながしの五大力のかんざしを抜いて見る 竹「コリヤハァお江戸でもはやるげでの、わしらが所の金彌さんが、野尻の彦十さんに買つてもらつたげで、がいに自慢らしく、内中の者に光らかすから、私もはァ、あの衆のさすものを、さゝないでも口惜しいから、だてひきづくで、がらゝ二十四文うつちやつたァもし。」女「おつめさん、お前の櫛を見せなさろ。」ト取りにかゝるを嫌がりて、つめ「おらァ嫌だよハ、、、。」ト 顔をそむけるを、むりに取つてみれば、朱塗の櫛に、金ぶんにて、だきめうがの紋がついてゐる。女「ばあちやヤァ、コリヤ札の辻の太郎左衞門さんの紋所だァよ。」つめ「知つちつたかやァ。」ト ひつたくり、手にて叩くまねをして、頭へさす。この二人、まことに此のあひだ追分から來たと見えて、これは皆あつちの言葉なり。皆々をかしさを隠し、だんまりにて聞いてゐる。こゝにもいろ／＼あれども、餘りくだ／＼しければ畧す 女「もうおそべりなさいませ。」十吉「ホンニ私次の間へ寐やせう。」彌「ナニサ、一所にこけ

寢やせう。」彌「ナニサ、一所にこけへ。」十「コレハ迷惑な。」女「サァお前がたも着かへて來なさいまし」ト夜着蒲團をはこび、牀をとる。みな〳〵蒲團の上にあがりゐると、二まい折の小屏風にて、間をしきる。此の内彌次郎があひかた來りて、竹「モウそべらしやりましたか。がいに寒い晩だァもし。」彌「もつとこつちへ寄りなせえ。なにも遠慮はねえから、ちつと話でもしなせえ。」竹「私らがやうな者ァ、お江戸の衆にやァ、こつ恥かしくて、何も語るべい事ァござんなえもし」彌「ナニ恥かしいも氣が強え、お前もう何歳だ。」竹「わしやハヤお月樣の年だよ。」彌「ム、十三七ッで二十といふことか。大分おしやれだの。」竹「ホ、、、私らァ此中追分さァから來て、これのとこの客衆さア、あじやうしたらよかんべいか。猶かしお江戸の衆にやァ、氣が詰つてなりましない。帶のゥ解きなさろ。そしてこの足さァわしが上へ乘つけなさろ。」彌「オイ〳〵かうか〳〵。」竹「ヤレハァ寢づらいこんだよ。そしてがいに後へさがりやることよ。もつと上へつん出なさろ。」彌「オツト承知〳〵。」ト夜著をこつぽり被り、しばらく無言。此のうち北八が相方のおつめも來りていろ〳〵あれども、これもくだ〳〵しければ畧す。はや其の夜も更けゆくまゝに、助郷馬のすゞの音もたえはて、背戸になく犬の遠吼、しゝを追ふ鳴子の音まで吹きおくる夜あらしの身にしむ許り、行燈のあぶらも盡きて、いつのまにかは眞暗闇。この時かの苞苴になし置きたる泥龜、牀の間におきたる儘、それなりに忘れたるが、やがて藁づとを食ひやぶり、そろそろはひ出で、ごそつき歩くに、十吉目をさまし、何やらんと考へゐるうち、かの泥龜は、北八が夜著の中へはひこむと、北八びつくり目をさまし、北「誰だ〳〵」ト頭をあげると、泥龜うろたへて、北八が胸のあたりへ驅けあがる。北八きやつといつて引摑み投りなげると、彌次郎が顏へばつたり。これもきやつといつて目を覺し、うろたへて引攫み、指先を食ひつかれて、彌次郎「アタ、、、。」相方お竹も目を覺し、

竹「ヤレうつたまげた。あじやうしたえ。」彌「火を點してくれろ。アイタヽヽ。」竹「何としたえ。」ト探りまはす手さきが泥龜へさはり、バアチヤハアと後へ倒れる拍子に、襖が外れて共にばつたり。北八むしやうに手を叩き、北「眞暗でねつから分らぬ。」竹「おたつどん、おたつどん。最前から客衆が腕を叩かつしやる。早く灯チ持つて來なさろ。」彌「早く／＼。アタヽヽ。」ト無上にうろたへ騷ぐ。此のひまに十吉、彌次郎が蒲團の下に入れておきしうちがへの金を盜み、かねて拵へおきたると見えて、石ころを紙にくる／＼包みたるをすりかへ、胴卷へ入れて、又もとの如く蒲團の下へ入れおく。一體此の十吉は道中のごまのはひといふ者にて、こんな事をするが商賣なれば、いつの間にかは、彌次郎が金を持つてゐるを見てとり、途中よりつけ來りて、かくの如し。このうち宿の女房あかりを持ち來り、見れば彌次郎が手に泥龜がくつついて、振つても叩いても一向に離れず。宿の女房あわてて、女房「ばやチヤ、こゝへはどうして泥龜が來たやア。」北「ハヽア晝間の泥龜が、苞苴の中から這ひ出たのだな。コイツすつぽんと拔けさうなもんだ。」彌「エヽしやれ處ぢやァねえ。アレ血がでる、痛い／＼。」竹「何だと思つたら、がさだァもし。ソリヤァ指を水の中へ入れめさると、ぢつきに放してつん逃げ申すは。」女房「ホンニさうなさいまし。」ト雨戸をあける。彌次郎かけ出で手水鉢の中へ指をつけると泥龜は放れ泳ぐ。彌「ヤレ／＼飛んだ目にあつた。」北「イヤはや、奇妙希代、希有けれつ、ちんじ、ちうやう、言語道斷なことであつた。ハヽヽ。」トそこら取りかたづけ、まだ夜あけにも間もあればと、又も枕をかたぶけて、暫くまどろみける中に、北八をかしさ半分、

よねたちとねたる側には泥龜もはづかしいやら指をくはへた

おなじく彌次郎も痛さをこらへて、

すつぽんにくはへられたる苦しさにこちや石龜のぢだんだをふむ

最早其の夜も明け行けば、寺の鐘も勤行の聲もろ共に響き渡り、求食鳥の軒近く鳴き渡るに、皆々目さめて起き出づれば、勝手より膳もいで、それ〳〵に支度するうち、宿の女「お一人はどこへ行きなさつた。」北「ほんに十公はどうした。」彌「大かた雪隱だらう。先へやらかせ。」ト構はず飯を食ひ懸る。十吉は早いつの間にかは、裏道より逃げ行きたれば、いくら待つても來るはずはなし。彌次郎あたりを見廻し、不思議さうに、彌「コウ北八、アノ十吉とやらなんだらう。」北「されば。」彌「ハテ合點のいかぬ。アノ野郎が風呂敷包も笠もねえ。大かたおいらが寐てゐるうち、立つてしまつたと見える。」北「ヤアそんなら何ぞなくなりやァしねえか。」トそこらを見廻し、北「何も別條はねえが。」彌「イヤイヤ別條があるやうだ。」ト懐から胴巻を出しふるつて見れば、紙に包んだやつがゞつたりと落ちる。開けて見ればみな石ころ。彌「ヤァ〳〵〳〵。」北「どうした。」彌「どうしたどころか。金が石になつてしまつた。エ、エ、。」北「こいつは大變〳〵。」彌「くやしい。今の野郎めにすりかへられた。コレ女中御亭主を呼んでくんな。早く〳〵。」ト無上にのぼせ返るに、女はさう〳〵立つて行くと、この様子をきいて、宿の亭主ねまきのまゝ驅け來りて、亭主「今承りました。さて〳〵飛んだ事でござります。」彌「イヤ貴様御亭主だの。コレ濟まねえぞ〳〵。あんなごまの灰に宿をかすからにやァ、此方も上まへを取つたらう。なぜおいらに沙汰なしに先へ立たせた。」亭主「コレハけしからぬ。お連様と存じて泊めたのでございます。今朝立たしつたもさつぱり知りませぬ。大方うら道からでも。」彌「うら道からも凄まじい。そんなで行くのぢやァねえわ。何でもアノごまの灰を出せ〳〵。コレエ野郎を見そくなつたか。お江

戸でも神田の八丁堀で、とちめん屋の彌次郎兵衛樣といつちやァ、おそらく己が近付の人に、誰知らぬ者はねえわ。悪くふざきやァがると、やてえぽによヲ叩きこはして、合羽干場の地請にたつのだ。足元のあかるいうち、サアごまの灰めを爰へ出せ。サァだせ／＼／＼。」亭主「これは御難題。さりとてはお氣の毒な。」彌「ナニお氣の毒の人丸さまだ。イヤ四斗樽樣があきれらァ。サア四斗樽めをこゝへ出せ。」亭主「ナニしとだるとは。」彌「イヤサ四斗樽を合點で泊めたからにやァ、貴樣も一ッ穴の狐だ。」亭主「これは無體な。ナニわしらが四斗樽を泊めませう。」彌「泊めねえ事があるものか。昨夜から今のさきまで、こゝのうちに寢てゐたわ。」亭主「アノ四斗樽がかえ。」彌「オ、サ四斗だる。イヤ／＼ごまのはひだ、ごまのはひだ。」北「コレ彌次さん、マア靜かにしねえ。可哀さうに、御亭主の知つた事ぢやァねえ。道伴にして來たはこつちが悪い。どうも仕方がねえと諦めなせえ。」亭主「さやう／＼。是れがわし共が内へござつての相宿ならば、おつしやるも尤もだが、何をいふも一所にござつたものを、申さばお前たちの御麁相といふもんだ。」北「違へなしさ。コレ彌次さん、お前りきんでもはじまらねえ。どうも仕様事がねえわさ。」トいはれて見れば、彌次郎もなる程と思つた處がつまらず、ふさぎ切つてだんまりでゐる。しまひつかねば、北八「彌次さん、マア飯でも喰ひねえ。」彌「飯も食へぬ。ナント北八かうだ。府中まで行けばちつたァ算段する當もあるから、先づ一文なしで出かけよう。」ト使ひ殘りの錢を集めて、やう／＼とこゝの旅籠を拂ひ、後にわづかのはした錢の殘りたるをたよりに、早々にこゝを出かけ、道々も心がけて、ごま

のはひの行方を探ぬれども、一向知れず。しやれも無駄もどこへやら、たどうか〳〵と辿りながら、

諺の枯木に花は咲きもせで目をこすらするごまの灰かた

北「彌次さん、そんなに力を落しなんな。たかがかうだ。

うき沈みある世は次第ふどう尊いのれるかひもなき護摩の灰

彌「北や、おらァもう坊主にでもなりたい。」北「お前とんだことをいふ。」彌「いつそ江戸へ歸らうか。」北「ナニサけへることがあるもんだ。柄杓をふつても、お伊勢さままで行つてこにやァ外聞がわりい。」彌「それでも、もうひだるくて歩かれぬ。」北「ハテ待ちなさい。こゝに江戸からことづかつて來た十二銅があるから、さきへ行つたら餅でも買つて食ひなせえ。」ト いひつゝ二人ながら、杖にすがりてえちらえちらと行く向うから状ばこをかつぎし人足、人足「エイさつさ〳〵。」北「なんだ、野郎の韋駄天さまァ見るやうに、やみと驅けて來やァがる。」彌「アヽ、羨ましい。あんなに驅ける勢ひだから、さだめてお飯もふんだくに食つたらう。」北「エヽ、おめへも乞食じみた事をいふもんだ。」状箱擔の人足「エイさつさ〳〵。」北「ソレあぶねえ、こつちへ寄んな。」人足「エイさつさ〳〵。」ト 通りすがいに状箱のかどで、彌次郎が小びん先へがつたりと當る。彌「アイタヽヽヽ。」人足は委細かまはず「エイこりやさつさ、さつさ。」彌「アヽ、〳〵いたい〳〵。何の因果でこんな目にあふか。おらァ死にたくなつた。」北「エヽ、ばかァいひなせえ。ソレ馬が來たァ。」彌「馬士殿先の宿までは、まだ餘程あるかの。」馬士「ナ

ニぢつきにそこだァ。」彌「いくらほどあるえ。」馬士「たつた三里二十四五丁もあるだんべい。」彌「ハッア、。」トだん〳〵辿り行く程に、軈て釜が淵といふ所に到りて、かかる中にもすきの道とて、又一首くちずさむ。されども歌もその身の苦しきまゝなれば、

名を聞いてほしやこがねの釜が淵くちに孝行したきゆゑには

此の所にて餅などとゝのへ、少しは腹の蟲をやしなひ、互に力をつけ合ひ、話しものして漸く沼津の驛につく。沼津より原へ一里半 こゝにてまづ足を休めんと、宿はづれの茶屋へ入る。茶屋の女「お早うおざいますチヤ。お支度でもしなさいませぬか。」北「イヤあとの立場でうんといふほど食つて來やした。」ト此の内、雨掛を人足にかつがせ、供を一人つれたる侍、お國風の大たぶさ、木綿を片面に染めたる小紋のぶつさき羽織を著たるが、この茶屋へはひる。女「お茶あがりませ。」侍「もう何時だの。」女「ハイ八ッでもおざりやしよ。」侍「よい酒があらば、ちくと出しなさろ。」女「ハイハイ、三十二文のを上げませうかやァ。」侍「今すこし下直なのはなんぼぢや。」女「二十四文のもおざいます。」侍「然らば、ソノ二十四文の酒と三十二文の酒と等分に割つて、一合五勺許り出しなさろ。」女「ハイ〳〵。」ト勝手より、ちろり、杯を持ちきたり、肴の煮付など出す。侍「コリヤ〳〵、此の煮付よつた肴どもの價ななんぼぢや。」女「三十二文でおざいます。」侍「こちらは。」女「十二文。」侍「ム、よい〳〵。コリヤ傳助、わごりりよも一ッ飲みやれ。」供傳助「ネイ。」侍「コリヤ、向うに火を焚きよる女どもは奥田氏の内室によく似よつた。」供「いかさま、こちらの今笑ひよる女なぞも、よいやうでござります。」侍「どれか〳〵。ウ

ウァノ柱のねきに横はつてをる女がよい／＼。サア傳助今少しある、呑んでしまへ。」供「ネイ／＼。」侍「サァ勘定のいたさう。なんぼぢや。コリヤ／＼、この肴どもは手はつけないぞ。」女「ハイ／＼、四十二文でございますチャ。」侍「オ、よい／＼。」ト供の者にはらはせ、こゝを出かける。北八彌次郎は茶ばかり飲んで立ちあがり、北「サァ行かう。」彌「アイおせわ。」女「どなたもようお出で。」トそれよりこゝを立ち出で、二人はかの侍と後になり先になりて、いろ／＼話しつれてたどり行くに、ならの坂といふ所にいたり、

千本の松原にて、北八がこじつける歌

この景色見ては休まにやならの坂いざたばこにや千本のまつ

侍この歌を聞きて感心し、侍「ヒヤァでけた／＼。お身達は江戸の者だな。」彌「さやうでござります。私どもは夜前の泊で、ごまの灰に取りつかれて、大きに難儀をいたします。」侍「ハァそれは近頃氣の毒ぢや。なるほど、ごまの灰のさしたのは痛からう。」北「イヤごまの灰と申すは、どろばうの事でござります。」侍「どっろばうとは何ぢや。」北「ハイ泥坊と申すは、盜賊のことでござります。」侍「ハ、ァ何か、人のものを取りよる盜賊の事を泥坊といふか。」彌「さやうでござります。」侍「ソノ又どろばうを、ごまの灰といふぢやナ。なるほど解せた／＼。」北「ときに旦那へちとお願ひがござります。私ども右の泥坊にあひまして、さつぱり路用は取られてしまひましたから、大きに難儀を致します。府中まで參れば、いかやうとも致しますが、それまでの所に困ります。そこで財は身のさし合はせとやら、どうぞ是れ

を賣りたうござりますが、お買ひなさつて下さりませぬか。」ト腰にさげたるいんでんの巾著を出し見せる。侍「ホウそれは氣の毒。途中で物を求むるはいかゞしいが、お身たちの難儀とあれば求めて遣はさう。價なんぼぢや。」北「ハイ七百ぐらゐに差上げませう。」侍「それは高直ぢや。」北「少しはおまけ申しませう。」侍「しからばソノ巾著共の價な、かうと六十文の遣はそか。」北「それはあんまり。」侍「六十一文の遣はそか。」北「もちつとお買ひなさつて下さりませ。」侍「しからば六十二文のつかはそか。」北「イエどうも。」侍「左あらば清水チウ舞臺どもから飛んだと思うて、六十三文のつかはそか。」北「イヤモウそんなに一文ヅヽ、お買ひなさつては、御相談ができませぬ。かういたしませう、ちやうどにお買ひなさつて下さりませ。」侍「ヤ丁度とはなんぼぢや。」北「ハイちやうどと申すは、百につばまりました事を、ちやうどと申しますから、百文なら差上げませう。」侍「ム、なにか、百のことをちやうどといふか。しからばちやうどに求めて遣はさう。」北「それは有り難うござります。」ト巾著を渡し、百文取り、北「モシ、是れは安いものでござります。捨賣にしても根付ばかりでは、四五百が物はござります。」侍「イヤ身ども倅共が、兩人罷り在るが、是れは總領へのよい土產ぢやて。」北「ヘイ、あなたはまだお若うお見えなさいますに、お子達がお二人とはよいお樂しみでござります。無躾ながら、もうお幾つでござります。」侍「あてゝお見やれ。」北「ハイ、あなたは、カウト、三十七八にもおなりなされますか。」侍「身共當年巳の年で、四十二歳に

まかりなる。」北「それはお若うござります。」侍「コレハ御挨拶。しかし身ども相役の園原作野衛門、米木津甚大夫など、皆同年でまかりあるが、その内で、身どもがいつち若え〳〵といひをるて。」北「さやうでござりやせう。」侍「それに又、家中うちの若え女どもがな、身共が事を澤村宗十郎に似てをるなぞと申す。」北「ハヽアなる程。」侍「時にお手前はいくつぢや。」北「旦那お當てなされてごらうじませ。」侍「ムウ、お手前年な、かうと二十七八にもなりをるか。」北「イエちやうどでござります。」侍「ナニちやうど、アノ百か。」北「イヤ是れでござります。」侍「ハア、三百には若え男だ。」みな〳〵「アハヽヽヽヽ。」この話にまぎれて、歩むともなしに小すは大すはを打過ぎ、ほどなく原の宿へつく。こゝにてつれの侍にわかれける。

原より吉原へ三里六丁

まだ飯もくはず沼津をうち過ぎてひもじき原の宿につきたり

北「エヽお前、未だそんなしみつたれをいふわ。今の錢で蕎麥でも喰ふべい。」彌「ソリヤアよからうよからう。」ト蕎麥屋へ入り 北「オイ二ぜん頼みます。」そばや「ハイ〳〵。」トやがて蕎麥二ぜんを出す。彌「太い蕎麥だ。食ひでがあつていいわえ。北八もう一杯かへようか。」北「イヤ〳〵、さう一時に錢を使つてはならぬ。又先へ行つて、何ぞやらかしやせうから、湯でもおもいれ飲みなせえ。」彌「そんなら若え衆、湯を一つくんな。」そばや「ハイ〳〵。」彌「アヽ、甘え〳〵。北八飲まねえか。オイ〳〵もう一杯くんな。オツトす

ツト、アツヽヽ、口をやけどした。餘り熱い。どうぞ蕎麥をちつとうめて貰ひてえもんだ。」北「コレコレ若え衆、たび〳〵氣の毒だが、藥を飲むからもう一つ湯をくんな。」そばや「ハイ〳〵。」北「コレたつぷりだよ。オツトよし。併し私が飲む藥は、したぢの入つた湯でなければきかねえから、とてもの事に若え衆、したぢを少しさしてくんな、オツトよし〳〵。」ト鮒の水を呑むやうにぐつ〳〵と呑んで、「サア行かう。」彌「大分心がたしかに成つた。」

今食ひし蕎麥は富士ほどやまもりにすこし心もうきしまがはら

それより新田といへる立場にいたる　こゝはうなぎの名物にて、家毎に煽ぎたつる蒲燒の匂ひに、二人は鼻の先をひこつかして、

蒲燒のにほひを嗅ぐもうとましやこちら二人はうなんぎのたび

軈て元吉原を打過ぎ、かしは橋といふ所にいたる。此所より富士の山正面に見えて、裾野第一の絶景なり。彌次郎取りあへず、

餅の名のかしは橋とてたび人のあしをさすりて休みやすらん

かくて吉原の驛につく。吉原より蒲原へ二里三十五丁半　棒端の茶屋女ども、いづれも黄色なる聲聲に、女「お休みなさいやアせ。酒ウあがりやアし。米の飯をあがりやアし。こんにやくと葱のお吸物

ちおざりやァす。お休みなさいやァし。」かごかき「籠よしかな、かごゝ」馬方「ナイ旦那衆、馬サどうだ。戻りだから安い。」彌「今まで乗りつゞめに乗つて來たから、ちよつと是れからひろひやせう。」北「轉びやせうが聞いてあきれらァ。」それよりこの宿はづれに、破れ編笠をきたる浪人者とおぼしく、扇をもちて、彌「いざ〳〵酒を飲まうよ。さてお肴は何々ぞ。ころしも秋のやまくさ、ききやう、かるかや、われもかう、しをんといふは何やらん。道中わづらひまして難儀ないたします。なにとぞ路錢の御合力を願ひます」北「イヤモウ、わつちらァ昨夜ごまの灰に路用をとられて、壹文なしだ。どうぞ貰ひだめがあらば、こつちへ御合力ねがひます。」浪人「そんなら、コレ附くな〳〵。」トさう〳〵に行き過ぎる。二人もをかしくうち笑ひつゝたどり行くに、村はづれに小屋がけして、麻の破衣を著たる坊さま、居眠をしてゐたりしが、旅人を見ると、俄に鈴をうちならし、觀音經「妙法蓮華經普門品第始終忽多闇、世間子息大分遊興毎晩三味線、音曲滅多無正、夜前大食翌日頭痛八百、羅利古灰、笑止千萬、近邊醫者早速御見舞、調合煎藥、呑多羅久多羅腹張多心經チインノ〵、鼻の下空殿の建立、お志をお頼ん申します。」北八「お經がおもしろえから、寄進につきやせう。」坊「ハイそれは御苦勞、お名を記しませう。」彌「そんなら彌次郎兵衞とつけなさい。」坊「ハイ俗名彌次郎兵衞。」彌「エヽまだ死にやァしねえわな。」坊「ヘイまだ死なしやらんのかな、イヤ是れへは、お志の戒名を記します。」北「オイそんなら、そけへ書いてくんな。」釋急の難、取つめ佛果菩提の爲、ソリャ一文。」ト投げ出して行き過ぎる。松原の中程に、十四五の前髪、堤を擔してやくわんをかけ、菓子などならべて遊ぶ片手に旅人をよびたつる。小僧

「お休みなさいませ／＼。」北「サア彌次さん、菓子でも食はねえか。」彌「チト休まう。」ト堤のうすべりの上へ腰をかけ、二人ながらくわしをしてやり、北「小僧、この菓子はいくらづゝだ。」小僧「アイ貳文ヅヽ。」彌「五ツ食つたからいくらだ。」小僧「私はいくらだか知りましない。」北「そんなら、かうと五ツで二五の十文か、これこゝに置くぞ。」彌「ヒヤア、こいつは安いもんだ。もう一つ食はう。コリヤいくらだ。」小僧「ソリヤア三文。」北「ドレドレ甘えノ＼。小僧、せんの錢はすんだぞ。あとの菓子が四ツ食つたから、三四の七文五分か。エイハ、五分はまけろノ＼。」彌「イヤ餅もあるな。」北「ドレこいつは甘え。この餅はいくらだよ。」小僧「ソリヤア五文どりよ。」北「五文ヅヽなら、かうと、二人で六ツ食つたから五六十五文、ソレやるぞ。」小僧「イヤこの衆は、モウ塵劫記ぢやァ賣りましない。五文づゝ六つくれなさろ。」北「ヤァノ＼ノ＼錢があるかしらん。」小僧「こゝへ出しなさろ。一ツ二ツ三ツ四ツ。」ト五文ヅヽひとつノ＼に數へて、めのこ算用にひつたくられ、彌「こいつは大笑ひだ。」北「とんだ目にあつた。サア行かう。」ト立ち上り、四五間も行きすぎ、北「アノ小僧は如才のねえ奴だ。アノ餅がナニ五文取なものか。二文か三文の餅だらうに、高く賣つて、初手の損をうめやァがつた。」彌「いまノ＼しい。今食つた餅がのどにつまつた。ゲツノ＼。」トをかしさ半分、子どもと侮つて、ぢきに報つたと打ちわらひ、たどり行く。それより久澤の善福寺といへるに、曾我兄弟の石碑あるを拜みて、北八、

今曾我に機縁をむすぶわれノ＼はほかに一家も一もんもなし

富士川のわたし場にいたりて、彌次郎兵衛、

ゆく水は矢をいるごとく岩角にあたるをいとふふじ川のふね

此の渉を打ちこえけるに、はや日も西の山の端にちらつき、おのづから道急ぐ馬士唄の、竹にとまる雀色時、やう〳〵蒲原の宿に到る。〔蒲原より由井へ一里〕此の宿の御本陣にお大名のお著きと見え、勝手は今、膳の出る最中。北八外よりさし覗きて、北「コウ彌次さん、ちよつと此の風呂敷包を持つてゐてくんな。」彌「どうする。」北「イヤちつとの間だ。」ト彌次郎に包をわたし、御本陣へずつと入り、勝手のどさくさの中へあがり、片隅の方へすわると、本陣の女、だん〳〵膳を持ち運び大勢の者にすゑる。北「すイ、こゝへも一膳」女「ハイ〳〵」トすゑる。かゝる混雑の中ゆゑ、人も氣がつかず。北八思ふさま食つてしまひ、すきまを見て、手拭を廣げ、椀に盛りたる飯を一膳ちやつと打ちあけ、手拭に引きつゝみ、隠てこそ〳〵とにげ出で、まごつくうち、彌次郎は向うの軒の下に待ち、退屈して、彌「どけへ行つた。」北「ヘ、おらァ飯を食つて來たが奇妙か。」彌「エ、どこで。」北「本陣で、どさくさ紛れに五六はいやらかして來た。」彌「ソリヤアいい事をした。しかし手前も實のねえもんだ。なぜおいらも連れて行かねえエ。」北「イヤお前にやァ土産をもつて來た。」ト手拭に包みし飯をいだす。彌「何だ、めしか。有りがてえ。イヤなか〳〵手前氣がきいてゐるわえ、ア、うめえ〳〵。」ト殘さず食つてしまひ、かの手拭をうちふつて、彌「ヤァこれは手拭に包んで來たな。エ、汚ねえ。」北「ナニ汚ねえものか。」彌「それだとつて、手前が金玉や何かを洗つた手拭だものを、ア、胸がわるい。ペッ〳〵。」北「ハ、、、時に宿はづれへ行つて木賃と出よ

う。」トうちつれて此の宿のぼうばなへ出てそこらあたりをまごまごして、彌「コウ、どうぞいきな女のある内へ泊りてえの。」北「ナニ木賃でとまる内に、いきも瓢箪もあるものか。ハテどこだか知れねえ。」トあつちこつちの内を覗きあるき、軒の下にねてゐる犬の脚をふんで、大きに食ひつかれ、北「アイタ、、、。」犬「キヤアンキヤアン。」すし賣の聲「あぢのすウし、さばのすウし。」北「コウすしやさん、こゝらに木賃宿はねえかの。」すしや「アイ向うのとつぱしの内よ。」彌「アイおせわ。」トをしへられたる内の門口から、

北「チト御免なせえ。」トドッと入り見れば、疊の四五疊も敷かれようといふ内に、佛壇ひとつと破れつゞらひとつの身代、あるじは七十ぢかきおやぢ、ゐろりの際に藁をなつてゐる。じざいにてつるしある鍋に、何かぐつぐつ煮えるそばに、六部が一人巡禮二人。一人は六十餘りの親爺、一人は十七八の娘、波を著たまゝ皹だらけの足を伸し、火にあたつてゐる。此の家のばゝア、松の枝をへし折り爐へくべながら、ばゝ「こつちへはひらしやりませ。」北「わしらを今夜泊めてくんなせえ。」おやぢ「あがらしやりませ。ソレそこに水がある。足ヲゆすぎなさろ。」ト足を洗ひながら、北八「彌次さん見ねえ。いい巡禮が泊つてゐる。」彌「ホンニこいつ唯はおかれぬ。ひだるい時にやアまづいものなしだ。」ト打笑ひ足を洗ひて上へあがる。六部「サアこゝへ來てあたりなさろ。」北「コウ彌次さん、もつとそつちへ寄りな。」ト娘の側へわりこんで坐る。あるじの婆はゐろりの鍋をおろし、ばゝ「サア粥ができた。皆食ひなさろ。」彌「ソレは暖かでよからう。」ばゝ「インネ、こんた衆の事ぢやアござらぬ。コリヤアこの衆の粥だアよ。」巡禮「イヤけふもらつた米アしひな許したんとあつて、そして半分は石ころだアのし。こりよヲ食つたら、腹が重くなるだんべい。」ばゝ「六部さんのも三合ばかしやアあつたんべい。そこへ分けて食ひなさろ。」トこの内巡禮六部も、てんでんに茶椀を出し、もつて食ふうち、だし合ひの米なれば、彌次郎北八は只見てゐるばかりで、手持なくて煙草入の底

をはたく。六部はやがて食ひしまひて、六部「二人のお衆は、さためしお江戸の衆だらうが、私どもはお江戸で、てんこちもない目にあつたァもし。」亭「どうしなさつた。」六部「わしがハァこの六部になつた因縁のゥかたり申すべいが、ヤレ扠人といふもなァはあ運がなくちやァ持ちあげべいにも、何として頭ァあがり申さない。わしがハァ、わかい時分にお江戸に居申したが、その時何でもハァ夏のとつつきから秋へぶつかけて毎日々々づなく風の吹いたことがあり申した。其のじぶんハァ何でも金儲のゥすべいとつていろいろ首さァひねくり廻いて、とつけもない事を思ひついたァもし。」亭「はての。」六部「イヤサ箱屋をおつ始め申したわ。あにが重箱だァの櫛箱だァのと、いろ／＼箱どもをづなく買ひこんで賣るつもりだアもし。」亭「ハテ風が吹いたによつて、箱屋とはどういふ案じだの。」六部「さればさァ、わしがハァ、思ひつきにやア、何が扠、毎日々々途方もなく風がふいて、お江戸ではがいに砂埃がたち申すから、おのづと人さァの目眼へ砂共が吹きこんで、眼玉の潰れる者がたんと出來るだんべいと思つたから、そこではァわしが工夫のゥして、せけんの俄盲が外に何條せう事はなし、みんな三味のゥ習はしやるだんべい。さうすると三味線やどもが繁昌して、世界の猫どもが打殺されべいから、そこで鼠どもが無上にあれて、何でも世間の箱共のゥ、皆かじりなくすべいこたァ目の前だァもし。コリヤハァこゝで箱屋商賣のゥおつ初めたら賣れべい事ァ違ひはないと、あにがハァ身上ありぎり、箱ッどものゥ仕

入れたと思はつしやい。」彌「コリヤァいい思ひつきだ。大方賣れやしたらう。」六部「イヤ一つも賣れましない。そこで私もハァ是れほどまでに工夫のゥして、是非儲かるべいと思つた事がつつぱつれ申したから、所詮ハァ、何條しても行かないこんだと發起のゥして、六部になり申した。兎角世界は思ふやうにやァならないもんだァもし。」北「ハァ感心なお話だ。時に又巡禮さん、お前はどういふ事から思ひついて巡禮にやァ出なすつた。」巡禮「コリヤハァわしも序に懺悔話のゥしますべい。この娘はコリヤァ一人の孫でござるが、わしどもはハァ變つたこんで、佛緣のゥ結び申した。わしは日光の方でござるが、定めてそれ樣たちも、話にも聞いてるやり申すだんべいが、私共が國などは、雷がたくさんで、此の二十年ばかしも後のことであり申したが、ふと夏、でかく雷が鳴り申して、私共が脊戸口さァへ落ちたと思ひなさろ。さうするとハァ其の雷どのが、榎の株つちいで、でかく尻をうち申して、疝氣が起つたと騷ぎやる事よ。あにがそこで、天竺のゥへ歸るべいことも出來ないから、わし共の内で養生のゥしてる内、恥さァかたり申さにやァ理が聞え申さないが、その雷が私どもの娘とがらり懇のゥしまして、互にハァ離れべい樣子もおざんないから、すぐにその雷どのを壻に取つたと思ひなさろ。そこでハァ天竺の親方どのから、夕立の時分は手傳つてくれろとつて、夏中は賴まれて行きやり申したが、ふと夏、上方さァへかせぎに行くとつて、出たなりけりで歸らぬと思ひ

なさろ。剰へ、其の時私が娘は孕んではゐるし、何がハァ案じをるまい事か、大方どこぞへ落ちて、腰骨がな打ん拔いて、病つてでもゐるだんべいと思つた許しで、便り聞くべいにもあてづつばうなり、コリヤハァ何たる事だと思つてゐる中、友達の雷どのが來て、これの壻どのはハァ熊野浦へ落ちて、鯨にがらゝ呑まれたとの話。ヤレさて悲しい事だと娘も泣きやる、わしもハァ片腕のゥ捥がれたやうに思ひをりましたが、何とすべい、せうことがない。其ん代にやァ娘が雷どのの種を孕んだから、鬼子でも生みをるべい。それにハァ親雷の跡を繼がせべいと樂しんで、何でも鬼の子を生むやうにと氏神樣へ願のゥかけて祈つた所が、因果な事ァ生まれた子が此の娘でござり申す。そこでハァわし共も力のゥおとして、是れほど祈つたのに鬼は生まず、しかもこんなに滿足な人間の子を生むといふは、よく／＼の因果だと諦めて、罪滅ぼしにこりよチつれて、巡禮と思ひ立つたァもし。私ども程因果なもなァないと思やア、咄チするさへ胸がつぶれ申すわ。」ト涙ながらに話すうち、はや夜も更けければ、主の婆それぞれに寢ござなどあてがひて、ば「サァ皆そべらしやいませ。內ががいに狹いから、わしと巡禮の女の衆は、天井へ上つて寢ますべい。」ト九ツ階子を二階へかけて、巡禮の娘とつれて上る。六部は笈のうちより紙帳など出しかぶる。主の親父も巡禮も薄べらなる蒲團のやうなる物を引つぱり、爐の端へころげて寢る。北「コリヤ小便が漏るやうだ。」彌「おいらも一所に行かう。」ト裏口へ出る。彌「アノ巡禮め、ぶつちめようと思つたら、二階へ行きをつた。いまいましい。」北「さつきから咄してゐる內、そつと手を握つたり尻

を抓つたりして、癡話をしてゐたがお前知るめえ。」彌「譃をつくぜ。」北「譃でない。今夜アノ娘をぶつちめて見せよう。」彌「早い男だ。」ト内へ入り、裏口をしめて寢る。かゝる木賃泊りのわびしきも、話の種とはいひながら、凌ぐべきむしろ屏風も、破壁をもる風の音いたくも更けゆく鐘に目覺めて、北八あたりを伺ひ見れば、皆旅疲れのかけ合ひ鼾、ゴウ／＼スウ／＼ムニヤ／＼／＼。時分はよしと北八そつと起き上れども、燈はなし眞暗闇、そこらあたりを探り廻して、やう／＼と階子に取付き二階へ上り見れば、天井は竹の簀子にてその上に莚をしきたれば、歩くとミシリ／＼と鳴るに驚き、やがて四ツ這になつて探りまはり、娘と思ひ婆が寢てゐる蒲團の中へ這ひこみ、そろ／＼撫でまはしゆすり起せば、婆眼をさまして、ばゝ「だれだ、何ヲする。」トいふ聲に、北八うろたへ、さては門違せしと逃げだす拍子に、足へ竹のとげを立ててばつたりこけると、竹の簀子を踏みぬき下へどつさり落ちる音ミシ／＼ガラ／＼ストウン。内のおやぢ目をさまし、おやぢ「あんだ／＼。」二かいのばゝ「あんだか知らないが、とつ拍子もない。みな起きなさろ／＼。」この音に六部も巡禮も起きあがり、六部「どえらい音がした。あかりをつけなさろ。眞黑くて何だかかんだか知れないぞ。」こゝに怪しいかな。北八天井をふみぬき、下へ落ちたところが、何か箱のやうな物の中へおちて、一向にわからず。足にころ／＼と何だか引つかゝる故、さぐりて見れば、佛さまのごくわうなり。さては佛壇の中へおちしと、苦しき中にもをかしさ半分、この間にかけ出でんとするに、はや燈をともして内のおやぢ、「何だか佛樣のなかへ落ちたさうだ。」ト佛壇の戸を開き見れば、思ひがけなく北八がはひ出たるゆゑ、肝をつぶし、おやぢ「イヤ此の人は。」北「モシ身延樣へはどうまゐります」おやぢ「馬鹿アいはつしやい。こんたアまあ、アゼニそこへ入らしやつた。」北「イヤわつちは小便におきた所が、ツイ戸まどひして。」おやぢ「アニ戸まどひをした。イヤこの人は佛樣の中へ小便をしやせぬか。」ト佛壇の内をのぞき おやぢ「ヤア／＼こんたア天井から落ちさつたな。」北「アイサ、ついアノ猫に追はれて落ちやした。」おやぢ「アニ、こんた鼠ぢやアあるまい。猫に追はれたたア何たる事だ。そしてアゼ天井へ上らしやつた。」北「イヤ私は褌

を鼠に引かれたから、もしや二階にでもあらうかとそれを探しにこ」ト辯解をしてゐるうち、上から婆ァが降りて來り、婆「イヤさうぢやァござらない。わしもハァ六十になり申すが、どこの國にか何ヲすべいと思つて、私が懐へ這ひこみめさつた。」おやぢ「ヤァ／＼こんたァ氣が違やァせぬか。私どもは二十年もこつちイ、そんなあじやらしい事ァ中絶のゥしてゐますに、アノ皺くた婆ァが所へ這ひこむといふは、イヤはやこんたは見たくでもない人だ。」北「イエもう御免なせえ。コレ彌次さん寐たふりをしてゐずと起きてくんなせ。」トゆり起されて、をかしさを隠し、彌「どうも若え者といふもなァ、後先の考へがござりやせん。どうぞ料簡してくんなせえ。」ト六部や巡禮もとも／＼、口を添へてやう／＼とをさまり、北八も單衣一枚貳代なして、天井のつくろひ賃少々出し、さらりと濟んでしまひければ、程なく夜があけて、彌次郎北八こう／＼に此の所をたち出でて、又たどりゆく道すがら、彌「北八、でえぶふさぐの。小田原の泊りでは、水風呂の底をぬいて貳朱ふんだくられ、又ゆうべは二階をふんぬいて、三百取られたも智慧がねえぞ。」北「イヤ面目次第もねえ。いまいましいが一首詠んだ。」

巡禮の娘とおもひしのびしはさてこそ高野六十の婆

彌「ハヽヽヽヽ、ゆうべ戸まどひの言譯もをかしかつたが、褌を鼠に引かれたとは、いいこじつけだ。イヤそれで一つ咄を案じたが、どうだ。」北「コリヤおもしろえ。聞きてえの。」彌「まづかうだ。ゆうべのやうに巡禮や六部と一所に、木賃泊をしやした時に、手前が夜中に起きて何かまごつきやす。

さうすると、皆が目を覺して、コリヤお前何をしなさるといふと、手前がいふには、イヤ私は褌を鼠に引かれやした。確か二階の方へ引いて行つたやうだといふと、巡禮も六部もさういひなされば、私も枕元に置いた褌が見えぬ。イヤ私がのもこゝに置いたがない　コリヤア皆鼠に引かれたもんだらう。何でも二階へ行つて見やせうと、皆つれだつて階子を上りやす。さうすると、二階の隅の方で三味線の音がする。イヤこいつは不思議だと上り口から透して見れば、鼠どもが大勢よつて、皆の褌を廣げて見て、一疋の鼠がいふには、おいらが引いて來た六部の褌は、振ふと三味線の音がするはどうした事だやら、合點が行かぬといひながら、其の褌を口に銜へて振つて見ると、なる程、チヽ、チン／＼なぞと鳴りやす。そこで又外の鼠がいふには、六部の褌に限つて三味線の音がするも不思議だ。物は試し、おいらが引いてきた巡禮の褌をも振つて見ようと、同じく口に銜へて振ふと、これも、チヽ、チン／＼／＼と鳴りやした。こいつは妙だと又一疋の鼠が、おれは北八とやらいふ男の褌を引いて來たが、コリヤア越中だから、短いだけで鼓弓の音がするだらうと、くはへて振つてみれば、ヅヽンヅン／＼と義太夫三味線の音がしやす。そこで鼠どもが、こいつは不思議だ、六部や巡禮の褌はみなかはいらしい歌三味線の音がするに、なぜ北八とやらが褌は義太夫三味線の音がするだらうといふと、隅つこの鼠が暫く考へ、ソリヤアその筈だわえ。ナゼその筈だ。ハテ北

八とやらは大方太棹だらうよ。」北「ハヽヽヽ、奇妙々々。」ト此の話のうち由井の宿につく、両側より呼びたつる聲々、「由井より興津へ二里十二丁」茶屋の女「お入りなさいやアせ。名物砂糖餅ヲあがりやアせ。鹽辛いのもおざいやアす。お休みなさいやアせ。お休みなさいやアせ。」彌「エヽ、喧しい女どもだ。」

呼びたつる女の聲はかみそりやさてこそ爰は髪由井の宿

それより由井川を打越え、倉澤といへる立場へつく。こゝは蚫榮螺の名物にて、蜑人すぐに海よりとり來りて商ふ。こゝにて暫く足を休めて、

爰もとに賣るはさゞえの壺燒やみどころおほき倉澤の宿

それより薩埵峠を打越え、たどり行く程に、俄に大雨ふり出しければ、半合羽うちかづき、笠深くかたぶけて、名におふ田子の浦、清見が關の風景も、降り埋みて見る方もなく、砂道に踏み込みし足もおもげに、やうやく興津の驛にいたり、「興津より江尻へ一里二丁」こゝに怪しげなる茶店にたち寄り、北「オイ婆さん、ソノ黄粉をつけた團子を、二三本くんなせえ。」彌「さてノヽ、久しぶりでお前の顔を見たわ。いつもお達者でめでたい。時にこの子は、ちつさな時見たよりかァ大きくなつた。姉御は達者かの。」ば「わしは子供はおざんない。」彌「そんなら孫か。」ば「イヽネ、子が無けりやァ孫もおざんない。」彌「ハテノ、お前の孫でなけりやァ、確かどこかの孫であつた。」ば「イヽネ馬士ぢやァ

おざんない。鄰のかごやの子でおざるは。」彌「ハアさうか。コウあの子、團子が二つ餘つた。ソレ食ひな。」かごやの子「うらアやアだ。」彌「ナゼ嫌だ。」かごやの子「ナニ糠アつけた團子はやアだ。」彌「ナニ糠をつけるものか。コリヤ黄粉だ。」北「インネ私らがとこぢやア、糠ア付けて賣り申す。」彌「エ、道理でざら〳〵すると思つた。ペツ〳〵。そんなら、犬にやらう。コ、、、。」犬「わん〳〵。」彌「ソリヤやるわ。あんといへ。」犬「あアン。」彌「ア、惜しいもんだ。」ト殘らず犬に遣つてしまひ、胸を惡くしてこゝを立出で、たどり行くに、猶雨はしきりに降りつゞきて、一向しやれも無駄も出でばこそ、たゞとぼ〳〵と歩みなやみて、

「江尻より府中へ二里二十七丁」

ほどなく江尻の宿をうち過ぎけるに、こゝにて雨も晴れければ、

降りくらし富士の根ぶとを打ちすぎて江尻にあめの霽れあがりたり

雨やみたれば、おのづから行きかふ人の足も輕げに、からしり馬の鈴の音も勇しく、シヤン〳〵シヤン。馬士のうた「よんべナアしのんだらアエ、おさんどなア、まづいイあせさねてるた、がらいよなべの飯がすぎてつつぶしたア、エ引。エ、このほてつぱらア、又ばりをこきやアがる。ついでに我等もやらかすべい。」シヤア〳〵。先へ行く馬方、後を振向きて「次郎ヤイ、主が馬ア、だがおまだ。」あとから行く馬方「コリヤア下町の酒屋のおまよ。彼所のやらうめが、がいに上なく使やアがつたんで、おまア強い。昨日も清水へ四くら行つて歸ると、役が當つて府中までとつ走らかしたア。駄賃は皆うらが呑んでしまつて、がら馬に食はせべい物アなし、丁場の背戸に繋いでおいたら、雪隱の屋根チ、がらゝ皆

くらやァがつた。」先へ行く馬士「サノ酒屋の嚊めはしよつはいやつよ。うらがあしこにゐる時分にやァ、飯の中へ寸莎をまぜて食はしやァがつた。それに何だかハァうらを見ると、むしやうに字を書きならへの、イヤ算盤をかじれのと、いろ〳〵な戯言を吐きやァがつて、うらをあしこの番頭にしようといやァがつた。其の手を食ふものか、業ざらしな。ドヤ〳〵。」馬士「まごどん、火を借してくんなせえ。」馬士「アイ〳〵御前方ァお江戸だな。お江戸衆は氣がつない。昨日、うらが府中から江尻へ三百で乘せた旦那が、お江戸衆でえい旦那よ。長沼まで來ると、その旦那がいふにやァ、江尻まで三百おやァ安いから酒手を二百ましてやらう。其ん代酒は別に此方から買つて飲ませるとて吉田の的ばで、たらふく酒を振廻はしやつた。それから又いはしやるにやァ、コリャ馬士、主ァ一日おまを引いて歩んで草臥れたらう。是れからうらが下りて主を此の馬に乘せようといはつしやる。コリャァハァ何たる事だ。我等アやァだといつても聞かない旦那よ。是非うらに乘れとつて、そんだい乘賃を二百やらうと、梅の木の立場から到頭うらを追ひ乘せて江尻へ來ると、興津まで馬ァ取るのだが、草臥れたらうから、馬ァ取つた分で駄賃やらうと、又二百下さつた。あんなえい旦那はあつたにやァ無いもんだ。」ト話のうち此の馬に乘つてゐる旅人、馬の上にてそら鼾をかく。「ゴウ〳〵〳〵」馬士「サイ旦那あぶない。目をさましなさろ。」旅人とおこされて目をひらき、「馬が埒があかねえから眠氣が出た。きのふ三島から乘つた馬はよい馬であつた。そして馬士がとんだ

氣のよい男よ。三島から沼津へ百五十で値をして乘つた所が、馬士がいふには、旦那はこんな早い馬に乘つて、今に落ちようか、イヤめつたに居眠もならぬなどと、心遣ひしてゐさしやるだらう。それが氣の毒だから、駄賃はモウ貰ひますまいといひをる。それから三枚橋へ來ると、旦那は馬のくらで腰が痛みませう。ちと下りてお休みなさい。酒でもあがるなら酒手はこつちから上げませうと、馬方の方から百五十くれて、沼津へ來ると、さきの宿まで送つて上げたいが、わしが馬は跳ねますから、外に馬をとつて乘つて行かしやれ、駄賃はわしが進ぜませうと、又百五十たゞくれた。あんな氣のよい馬士もないもんだ。」ト話のうち此の馬をひく馬方あるきながら、「ゴウ／＼ムニヤ／＼。」此のはなしに彌次郎北八も大きに興に入り、あゆむともなしに府中の宿につく。「府中より鞠子へ一里十六丁」先づ傳馬町に宿をかりて、それより彌次郎がしるべの方へ訪ね行く。こゝに金子の才覺とゝのひ、大きに勇み出して宿へ歸り、何でも今宵はかねて聞きおよびし安部川町へしけこまんと、北八もろとも其の支度をして、宿の亭主を招き、彌「モシ御亭主、わつちらア是れから二丁町とやらへ見物に行きてえもんだが、どつちの方だね。」てい主「安部川の方でござります。」北「遠いかね。」てい主「爰から二十四五丁ばかしもあります。なんなら馬でも雇うてあげませうか。」北「こいつはいい。」彌「から尻に乘つて女郎買もおもしろい／＼。」やがて爰より殼尻馬に打乘りゆくほどに、かの安部川町といへるは、安部川彌勒の手前にて、通筋より少し引つこみて大門あり。爰にて馬をおり、郭に入りて見るに、兩側に軒をならべて、彈き立つるすががきの音賑はしく、見せつきの趣は、東都の吉原町におほよそ似

たり。客とおぼしきが、黒き木綿に紋のつきたる羽織など著て、手拭のさきを結ばずにかぶり、送り行く茶屋の女は、燒すぎの駒下駄をひきずり、客人の神と見えしは、おほくは股引草鞋にて、いづれも祖父ばしよりなり。そゝりでやひに前垂かけの競あれば、棒の先に、もつこうなど括りつけて、擔ぎ歩くひやかしあり。行きかふ男女は開帳參りの人のごとく、更に風俗定まらず。又繁昌はいふばかりなし。向ふより來るは地まはりと見えて、尻のしまおら、おはりたる縕袍を著て、山だしの低き角下駄に、竹のかはの鼻緒をすげたるをはき、兩しの手拭をるくびに被り、往來の人に行きあたりて、「あんだり、コノおんぢいは、眼をはだけて通りやァがれ。ナゼ己にぶつつかつた。」後から來る地廻り「ヤイ市さ、あんとした。そいつ、へこたらしてやらずい。」これはへこませるといふがごとし。先の相手「暗がりでツイがらゝ行き合ひました。堪忍なさい。」ト行き過ぎる。それより此の地廻り「アノ壁のきしにゐる女のつらは、淺間樣の天の面のやうだ。アリヤアたつて行かァ。せいの短い女らだ。梶原の馬が食つた笹葉を見るやうに、半分しかァ育ててないは。」今一人の地廻り「こゝの内の著物は、みんな七間町の硯蓋の樣だナァ。」この梶原の馬が食つた笹の葉といふは、狐が崎の梶原堂の故事なり。又七間町の硯蓋といふは、きじろ色に油繪のかいてある駿河細工の硯蓋の事なり。著物のもやうをかの油繪に見たてての洒落なるべし。彌「ナントどこぞへ上らうか。」北「待ちなよ。確かに爰は壹分と拾匁と貳朱だけな。壁の方にしよう。大かた拾匁だらう。向ふの暖簾はなんだ。しなのや、こちらが丁字屋、こゝが大和屋だな。しかしどうして上るのだ。勝手が知れねえ。」ト格子先をうろついてゐる内、客北「よし／＼、サアこゝにしやせう。彌次さん見たてねえ。」

彌「オツトきまつた。サア上らう。」ト つれ立つてすつと暖簾の内へ入ると、若いもの「コレハよくお出でなさいました、先づ上へ。」ト 二階へ案内する。二人は見たてた女郎を註文すると、すぐに其の部屋へつれ行く。あたりを見れば、牀の間に琴もあり、花もいけてあり。すべて吉原小店の部屋もちの如し。こゝは酒代ゞつにかゝると見えて、若いもの「御酒はどういたしませう。」北「酒も出してくんな。」わかいもの「ハイ／＼取つてあげませう。」ト 此のうち、彌次郎があひかた名は小ざゝの、うへだの小袖、縞繻子の帯、空色ちりめんの裲襠、北八が相方いさ川、縞ちりめんにきんもうるの帯、黒ちりめんの裲襠、いづれも皆もみ裏なり。座につくと、きじろ色の煙草ぼんを控へて、小ざゝの「よくおざいました。」いさ川「エ、見たくでもない。アノがきやアまだ煙草も入れないヤア。小さめヤアノ／＼引。」彌「サアお前がた、もつとこつちへ寄んなせえ。若え衆酒をはやく。」わかいもの「かしこまりました。たゞいま。」ト いひすてて行く。程なく杯だい、銚子、硯ぶたをもち出で、おさだまりの杯もそれ／＼にすんでしまひ、彌「わけえしゆ一ツ飲みな。」若いもの「ハイ。」彌「ソレさかな。」ト なんりやうひとつはずむ。若いもの「是れは、ハイ。」ト 頂いて立つてゆく。入りかはりて禿小さめ驅け來りて、かぶろ「アノヤ、今吉野屋から磯次さんがおざいまして、お前に用がありますから、ちよつくり來さしやいましとさヤア。」いさ川「今行かずに。」小ざゝの「ハレ小さめヤア、久能の仙さんはおざつたか。」小さめ「インネ。」小ざゝの「ばあチヤ、おらやだやァ、此中から行かず／＼といつてよこして、がいに人をつるくるヤア。」北「コウお前がたア、もつとこつちへ寄つて一ツ飲みなせえ。」いさ「アイ、まあ御前方あがりまし。」ト 此の内、若い者二人と遣手がつれだち、八寸の上に何か重箱をさげて持ちいで、やり手「たゞ今は有り難うおざります。」若いもの「わたくし金太と申します。これは權右衛門、已後はお頼み申します。」ト 丁寧に禮をいつて立つ。彌「ハヽア爰では花も

ひつぱらに貰ふ極とみえた。若い者に金太權右衛門といふ名も珍らしい。」北「コノ重箱はなんだ。ハ
ア阿部川の五文どりか。これが二朱の返し、紀の字屋の臺といふ物だの。ハヽヽヽ。」ト此の内、廊下何かさわがし。大
勢の聲にて、濟むの濟まぬのとわめきて、此座敷へ皆々はひる。北「さう/\しい何だ。」いさ「何でもおざりましない。アリヤァ性のわる
い客衆をめつけて、連れて來たのでおざいますヤァ。」彌「こいつはおもしろい。ドレ/\。」ト襖を少しあけて、
此座敷をのぞきて見れば、大きい女郎が客一人を中にとりまき、女郎「お前こんな中から、此方ァはなぜ來ましない。」今一人の女郎「丁字屋へばつ
かしおざるから、常夏さんが腹ァつッ立つも無理おやァおざりましない。」此の客人は山家の人「ヤレ扨私は
ハイ、一昨日も、昨日も、來ず/\と思つたが、がらい川ができて來られなくなつた。ソリヤァハイ
丁字屋へも川なべの伯父どんの附合で、行かずこたァ行つたァけれど、アニハイ爰の常夏姉と申し
かはした事ァあるし、日天さまかけて不味い心おやァおざらないヤア。」女郎「ばあチャ、それでも丁字
屋の花山さんに馴染んで、行かずこたァ違ひはおざりましないわ。」客「アニハイ、そんだ事ァないこ
んだが、上無くさういやァせず事がない。」ト萎れかへつてゐる。この内の姉女郎、名は常夏、うちかけを、まへあけ、煙管たばこ入れを持ちそへ悠々として座敷へはひり、
とこ夏「彌弟さん、こんな中からおひましないが、よくおざいました。」客「よかァ來ましない。堪忍しなさ
ろ。」とこ夏「何もかんにせず事ァおざりましない。わしもハイ此の内では、あんねい/\といはれる女
郎でおざいます。こんなァに顔をへし潰されおやァ、朋輩衆の前へ立たずやうがおざりましない。」ト

てもハイ是れつきりの緣なら、お前ちの樣な性根の悪い客衆は、見せしめの爲、私がせず事を見さしやいまし。ソレ夏菊さん、さつきの剃刀を持つておざいまし。」客「ヤレそれやァわしよチどうせずと思つて。」常夏「どうせずもんか、髮を切らずにャア。」ト剃刀を持つて立ち懸れば、客はうろたへ頭をかゝへて、客「ヤアレ、コリヤさて待ちなさろノ＼。」新造ども口々に「待たず事アおざいましない。」客「そんだァとつて、此の小ほけな髷のちよん先さへ切らないに、そりよチハイ、切らず事ァ許しなさろ。」とこ夏「ナニ許さずもんで。」客「アレこりや。」とこ夏「ソレ切らずに。」客「ヤアレこりやノ＼。」ト逃げだすを、取巻きて逃がさばこそ、寄つて掛つて頭を毟り散らかす。一體此の客人げんつうにて、皆付髮なれば、髷も鬢も落ちてしまひ、客頭を撫で廻して、客「ヤアこりやハイ、頭ア毟りなくしたわ。」女郎みなノ＼「ばあチヤ、オホ、、ホ。」客「ヤレ笑所ぢやアない。コレ私はハイ、丁字屋へは行くまいから、頭ア出してくれなさろ。」とこ夏「わしやァ知りましない。」客「アレハイ、夏菊殿が隱した。サア頭ア早く出しなさろ。」とこ夏「お前ハイ、是れでも丁字屋へ行かずか。」客「モウ行かないノ＼。」とこ夏「ほんたうにかヤア。」客「天照皇大神宮さまかけて行かない。」とこ夏「すんなら夏菊さん、出して上げさしやいまし。」ト常夏のさしづに、かくしたるつけ髮を出してわたせば、客「ヤア、まだ足らない。」なつぎく「モウそればつかし。」客「アニハイ、まだかた小鬢がそこらにやァないか、たづねてくれなさろ。」女郎「コレカ、あるヤア。」客「それだノ＼。」ト自身にあたまをさぐりまはして、髷先をよこちよにくつ付け、ため息をつきて、客「ヤレノ＼えずい目にあつた。」みなノ＼「オホ、、、。」ト之より中なほりの酒になりて、色色あれども事長ければ畧す。彌次

郎北八は腹の皮をよぢり、彌「いつくの浦でもあるやつだが、餘程おもしろかつた。ちやうど去年の春、一九が中田屋の勝山にしばられた時、あんな様であつた。業ざらしな。」ト此の内若い者來り「モウお牀に致しませう。チトあつちらへ。」ト北八は自分のあひ方の部屋へ行くと、そのうち若い者牀をとりて、二人ながら引分れて暫くまどろむ。斯くて一睡の夢はさめて曉のなごりを惜しみ、彌次郎牀を起き出づれば、北八も目をすりながら爰に來りて打連れ立ち階子をおりるに、皆々送り出で、挨拶そこ／＼に引分れ、傳馬町さして急ぎ歸り來りければ、はやくも宿には朝飯の用意とゝのへ、膳をすうるに、支度あらましにして、やがてこの驛を打ちたちけるが、今もどりし道をますぐに、程なく彌勒といへるに至る。こゝは名にあふ安部川餅の名物にて、兩側の茶屋いづれも綺麗に花やかなり。茶屋女「名物餅をあがりやアし。五文取をあがりやアし。五文どりをあがりやアし。」彌「おいらア昨夜、二朱がもちを食つて來たから、モウ爰では食ふめえ。」北「さうさ／＼。」ト此の内あべ川の川ごし、道に出でむかへて「旦那衆おのぼりかな。」彌「オイ、きさま何だ。」川ごし「川ごしでござります。安くやらずにお賴ん申します。」北「いくらだ。」川ごし「昨日の雨で水が高いから、一人まへ六十四文。」北「そいつは高い。」川ごし「ハレ、川をマアお見なさい。」ト打ちつれて川ばたへ出で、彌「なる程がうせいな水勢だ。コレ落すめえよ。」川ごし「ナニお前、サアそつちよヲつん向きなさろ。」ト二人を肩車にのせて川へざぶ／＼と入る。北「ア、なんまいだ／＼。目がまはるやうだ。川ごし「しつかり私があたまへとつつきなさろ。ア、コレ、そんなに私が目を閉がつ

しやるな、向うが見えないこ」彌「なるほど深いわ。コレ落して下さるな。」川ごし「アニ落すもんかえ。」彌「それでもひよつと落したらどうする。」川ごし「ハレ落した所が、たかでお前は流れてしまはしやる分の事だっ」彌「エ、流れて堪るものか。イヤもう來たぞ〳〵。ヤレ〳〵御苦勞々々。」トかた車よりおりて賃錢をやり、彌「ソレ別に酒手が十六文ヅ、。」川ごし「ヘイコレは御機嫌よう。」ト川ごしけ、すぐに川上の淺い方を渡つてかへる。北「アレ彌次さん見ねえ。おいらをば深い所を渡して、六十四文ヅ、ふんだくりやアがつた。」

川ごしの肩車にてわれ〳〵を深いところへ引きまはしたり

それより手越の里に至るに、またもや俄雨ふり出して、忽ち車軸を流しければ、半合羽取り出し、打被き、足を早めて、ほどなく鞠子の宿にいたる。［鞠子より岡部へ二里九丁］こゝにて支度せんと茶屋へ入り、北「コウ飯を食はうか、こゝはとろゝ汁の名物だの。」彌「さうよ、モシ御亭主、とろゝ汁はありやすか。」亭主「ハイ今できず。」彌「ナニ出來ねえか、しまつた。」亭主「ハレぢつきに拵へずに、ちいと待ちなさろ。」ト俄に芋の皮もむかずして、さつ〳〵とおろしかゝり、亭主「お鍋ヤノ〳〵、この忙がしいに何ヲしてゐる。ちよつくり來い〳〵。」トけはしく呼びたつるに、裏口より小言をいひながら來るは女房と見え、髪はおどろのやうに振りかぶりたるが、背中にちのみ子をせおひ、藁草履ひきずり來り、「今、彌太アのとこのおんばァどんと、はなしよヲしてゐたに、喧しい人だヤア。」亭主「アニハイ喧しいもんだこコリヤそこへお膳を二膳こしらへろ。エ、ソレ前垂がひきずらア。」女房「おまい、箸の洗つたのウ知ら

ずか。」亭主「アニおれが知るもんか。コリヤヤイ、その箸チよこせヤア。」女房「これかい。」亭主「エ、箸で芋がすられるもんか。擂木のことだわ。コリヤ拵まごつくな。その膳へつけるのぢやァないわ。ここへよこせといふ事よ。エ、埒のあかない女だ。」ト擂木を取つてごろごろと芋をする。女房「ソレお前擂木がさかさまだ。」亭主「かまふな。おれが事より、うぬがソリヤ海苔がこげらア。」女房「ヤレ〳〵喧しい人だ。コノ又がきやァ同じやうにほえらア。」亭主「コリヤ擂鉢を捕へてくれろ。エ、さう持つちやァすられないわ。おへないひやうたくれめだ。」女房「アニこんたがひやうたくれだ。」亭主「イヤこの女ア。」ト擂木で一つくらはせると、女房やつきとなりて、女房「コノ野郎めは。」トすり鉢を取つてなげると、そこらあたりへとろゝがこぼれる。亭主「ヒヤァ、うぬ。」トすりこ木を振りまはして立ちかかりしが、とろゝ汁にすべつてどつさりと轉ぶ。女房「こんたに負けてゐるもんか。」ト摑みかゝりしが、是れもとろゝにすべりこける。向ひのかみさんが驅けて來り、「ヤレチヤ、又見たくでもない爭ひか。マア靜まりなさろ。」ト両方をなだめにかゝり、これもすべり轉んで、「コリヤハイ、何たるこんだ。」ト三人が體中とろゝだらけになる〳〵して、あつちへ辷りこつちへ轉けて、大騷ぎとなる。彌「こいつははじまらねえ。先へ行かうか。」トをかしさをこらへてここを立ち出づ 北「とんだ手やひだ。アノとろゝ汁で一首詠みやした。」

けんくわする夫婦は口をとがらして鳶とろゝにすべりこそすれ

それより宇津の山にさしかゝりたるに、雨は次第に篠を亂し、蔦のほそ道心細くも、杖を力に十團子の茶屋近くなりて、彌次郎おもはず坂道にすべり轉びければ、

降りしきるあめやあられを十だんご轉げて腰をうつの山みち

岡部の宿の宿引、待ち受けて、「お泊りでございますか。」彌「イヤわつちらア、今日川を越さにやアならねえ。」宿引「大井川はとまりました。」北「なむさん、川がつかへやしたか。」やど引「さやうでございます。さきへお出でなさつても、お大名が五かしら島田と藤枝にお泊りでございますから、あなた方のお宿はござりませぬ。先づ岡部へお泊りなさいませ。」彌「そんならさうしようか。」北「おめへ何屋だ。」やど引「相良屋と申します。すぐにお供いたしませう。」ト打ちつれて急ぎ行くほどに、早くも大寺がはらの坂道をうち越えて、岡部の宿に到りければ、

豆腐なるをかべの宿につきてけりあしに出來たる豆をつぶして

まづこの驛に宿をとりて、川のあくまで、暫く旅のつかれをぞ休めける。

浮世道中膝栗毛後編　終

東海道中膝栗毛三編序

予多年東海道に遊歴し、其の行路中、山川の佳境勝景なるを假書して旅袖に藏めおけるあり。それが中に、風土の異なる遺風を録し、亦土人の言語都會に替れるくさ〲の多かる中に、往來旅客の光景、或は貴遊或は卑賤の患苦、雲駕籠馬士の木訥なる、出女の姿けはひ、なべて鄙情のをかしげなる有増を、白地にかいつけたる道中の滑稽を、膝栗毛と題號し、初編二編祥ひにして世に行はれ、撰者が偶中の怡び稍なからず、由是今書肆の需めに三編を輯作し、同志の人の覽に備ふ。將其の文の拙なきは、予が短才の及ばざるを視ゆるし給へとしかいふ。

予時享和四載甲子蒼陽日

十返舎一九識

凡例

此の編は、道中岡部驛より、舞坂に至り、荒井渡船にして一集終る。其の餘草稿大概出來あれども、急迫にして未だ校正するに遑なし、因而四編に悉く著し、嗣ぎに出す。都而初編二編より、長途の滑稽、其の趣にして珍らしからず、好士の見るに倦まん事を恐れて、聊か趣向の轉變せることを輯む。猶四編に至つては事繁くして、舞坂驛より漸く四日市に至つて終る。其の次五編は伊勢路にかゝり、古市の遊樂、相の山の光景を盡し其の餘奈良越より、大阪へ出づるまでを記して、全一册此に滿尾せしむ。

道中膝栗毛三編

十返舍一九著

「岡部より藤枝へ一里二十六丁」名にしおふ遠江灘浪たひらかに、街道の並松枝をならさず、往來の旅人互に道を讓り合ひ、泰平を謠ふつゞら馬の小室節ゆたかに、宿場人足其の丁場を爭はず。雲助駄賃をゆすらずして、盲人おのづから獨行し、女同士の道連、ぬけ參りの童べまで、盗賊かどはかしの愁へにおはず。かかる有り難き御代にこそ、東西に走り南北に遊行する雲水の樂しみえもいはれず。爰にかの彌次郎兵衛北八は、大井川の川支にて、岡部の宿に滯留せしが、今朝御状箱わたり、一番越もすみたるよし聞くとひとしく、そこ／＼に支度して旅籠屋を立ち出でけるに、はや諸家の同勢往來の貴賤櫛の齒を挽くが如く、問屋駕籠宙をかけり、小荷駄馬飛んで走る街道の賑はひ勇ましく、二人も共に浮かれたどり行くほどに、朝比奈川をうち越え、八はた鬼島を過ぎ、白子町にいたる。爰は立場にて兩側の茶屋女、「お茶アまゐるわア。一膳飯ヲまゐるわア。お休みなさいまアし、お休みなさいまアし。」馬士のうた「うらがお長松の噂はたこよナア。あぜさ蛸だとおもしやるえ。八間まなかに足だら


大井川日本第一の流

おもひ出る
都のことは
大井川
いくせの
石の
数も
およばじ



け。しよんがえ。ドウ〳〵。」馬「ヒイン〳〵。」馬士「旦那衆馬ァいらないか、二百だがやすいもんだイ。なんなら錢さへくんさりやァ只でも行かずに。」北「エ、二百出しやァ夜の馬にのらァ。糞たれめが。」馬士「ヤイ糞つたれたァあんだイ。うらが何口、糞を〳〵。」馬「ヒ、ヒン〳〵」彌「ナントちよつぽり飲んで行かうか。コウ姉さん、いい酒があらばちつとばかり出してくんな。」ト茶屋へ入る。茶屋の女「ハイかんをして上げずかヤァ」彌「さうさ。時に肴は何がありやす。」亭主「アイ、ねぶかと鮪の煮たのばつかし。」北「イヤねぎまのふろふきソレよからう。」亭主「イヽネ、ふろふきぢやァござらない。たんだ醬油で煮たのだァのし。」トいひつゝ銚子杯をもち出で、鮪を皿にもつて持ちきたる。彌「ハ、ァねぎまといふから、江戸でするやうだと思つたら、コリヤァきじやきを煮たのだな。よし〳〵。」北「始めよう。オト、、、、イヤ此の肴はおだぶつだぜ。コリヤ昨日の鮪だな。」亭主「インネハイ、昨日の魚ぢやァござらない」彌「それでもさつはり食へぬ〳〵。」亭主「ハァ昨日のが悪かァ、一昨日のを進ぜませう。其代にやァ醉ふ事ァ請合だもし。」北「エ、醉つてたまるものか。そしてこの酒は半分水だ。ペツ〳〵。時にいくらだの。」亭主「ハイ、肴が六十四文酒が二十八文。」北「甘くねえ代りに高いもんだ。サア行かう。」ト錢をはらひ、爰を立出で、早くも鐙が淵といふ所に至り、例のすきの道なれば、彌次郎兵衛取りあへず、

爰もとは鞍のあぶみがふちなれど踏んまたがりてとほられもせず

それより平島口田中を打過ぎ、藤枝の宿近くなりて、

　街道の松の木の間に見えたるはこれむらさきの藤えだの宿

藤枝より島田へ二里八丁　此の宿の入口にて、風呂敷包ちよいと肩にかけたる田舍のおやぢ、馬の跳ねたるに驚き、逃げる拍子に北八へつき當ると、北八水たまりの中へころげて、大きに熱くなり、起き上りて、田北「コノ親仁め、眼が見えねえか。寒烏の黒燒でも食らやァがれ。」おやぢ「コリヤハイ、御免なさい。」北「ヤイ御免なさいぢやァすまねえわえ。コノ野郎は小粒でも、ぎやつといふから金の鯱をにらんで、産湯から水道の水を浴びた男だ。」おやぢ「イヽネハイ、水をあびたならようござるが、そんたの轉けた所は、馬の小便のたまりだもし。」北「エヽ、その小便のたまつた所へ、なぜ突つこかしやァがつたえ。」親仁「そりやハイ、わしも、がらい馬につつ跳ねられて、そんたに、いきやつたのだ。どうもせず事がない、堪忍さつしやい。」北「なんだ堪忍しろ、嫌だわえ。ほんのこつたが、大江山の親分が、鐵棒ひいてわたりに來ようが、石尊さまが、猪の熊の似づらを書かせた提燈で、路次口から、溝板の上へ、這ひかゞんで來ても、聞かねえといつちやァ、久米の平内を居ざいそくにやつたよりかァ、まだ、びつくともせぬ奴樣だァ。」おやぢ「ソリヤァハイ、あにか、しちむづかしい事をいはつしやるが、私らにやァハイ、かいもくに知れ申さぬ。わしもハイ、この近在の長田村ぢやァ、名主役も勤めた家筋だんて、今でもお地頭樣の年頭にやァ、上席ノウせる男だ。何もがいに心なく、

雑言ノウし召さるこたアござんないヤァ。」北「エ、悪くしやれらァ。尻がかいいわえ。頭のかけでも拾はせてやらうか。」おやぢ「エレノ〳〵、そんたアづない人だヤア。わしにもハイ荒神さまがついてるずに、がいに頤ノウ叩かしやんな。」北「エ、此のすりこ木め。」トくらはせにかゝる。彌次郎兵衛見かねてやう〳〵に引分けて、彌「北八もう料簡しろえ。とつさん、おめへが全體麁相しながら氣が強え。もういいから行きなせえ。」ト北八をなだめるうち、おやぢはつらをふくらかし、ふしようぶしように行き過ぎると、彌次郎、

頭にのつてきた八に今たゝかれし薬鑵あたまの親仁へこんだ

打笑ひつゝ瀬戸川を打越え、それより、しだ村、大木の橋を渡り、瀬戸といふ所にいたる。爰は建場にて染飯の名物なれば、

やきものの名にあふせとの名物はさてこそ米もそめ付けにして

斯くてこの町外れの茶屋に、先の田舎親仁休みゐたりけるが、二人を見つけて呼びかけ、おやぢ「エレ、エレ、さつきやァ無禮ノウしました。私もハイありやうは、一杯飲んだ元氣で、づない事もいひ申したが、そんた衆が料簡ノウしてくれさつたから、へこたらずに歸村ノウしますわ。マァあんでも禮に酒ウ一つ進ぜませう。こゝへ寄らつしやいまし。」彌「ナニわつちらァ酒も飲んで來やした。」おやぢ「エレチヤァ、折角私が思ひだァのし。是非一ッよからずに。コリヤ〳〵御亭の、味よい酒ウ出さつしやい

まし。」北「イヤお心ざしは忝いが、サア彌次さん行かう。」おやぢ「ハテコリヤ、情のこはい人だヤア。ぢつきにやらずに、ちよつくり寄つてくれされヤア。」トむりに彌次郎北八の手を取つてひきずりこむ。二人もなる口ゆゑ、酒と聞きて少しこゝろひかされて、彌「えいわ、北八一ぱいやらかさう。しかし親仁さん、おめへの御馳走がやすきのどくだ。」おやぢ「ハテコリヤよいといふのに。御亭の〳〵、肴アじやうにつん出してくれさい。時にコリヤハイ、こゝはあんまり端つぽだ。奥座敷へ行かずかヤア。」ちや屋の女「サアあつちイござらつしやいまし。」ト出しかけたこうしいさかづきを奥へもつて行くと、三人も中庭からまはり、奥座敷のえんがはに、わらぢのまゝあぐらをかき、彌次郎兵衛「サア親仁さん始めなせえ。」おやぢ「アイ、すんだら毒味ノウしませず。オト、、、よからず〳〵。さて先づわかいのへ進ぜませう。」北「アイ、わつちやア酒よりかアはらがへつた。」おやぢ「アニ腹がへつた。ソリヤア飯を食はつしやい。ぢつきによくなる。」北「イヤまづ酒にしよう。オットあります〳〵。ときにこの吸物はなんだ。たゝみ鰯のせんば煮か。おほかたこのあとおやア、南瓜のごまじるか、薩摩芋のよごしが出るだらう。」彌「サア悪くいふぜ。コレ此の海老を見や。かう跳ねかへつた所は、がうてんじやうの天人といふ身がある。」北「イヤ豊後ぶしのことかアいなア、、引といふところもありやす。ハ、、、時に親仁さん上げやせう。」おやぢ「インネ、へさいませう。今肴が來ずに。コリヤあんねい、〳〵、さつきからハイ、へし折れる程腕をたゝくに、あぜ肴アつん出さない。」女「ハイ〳〵只今あげずに。」トやう〳〵に大平とはちざかなを持つてくる。おやぢ「やら

やつと持つて來た。平は何だ、卵のぶは〳〵か。」彌「遲いはずだ。今うむのを待つてゐたと見えた。」北「こいつは無鹽だ。奇妙々々。」おやぢ「たんと飲んでくれさつしやい。そんたァ私がためにやァ命の親だ。よく先刻ァ料簡ノウしてくれさつたのし。」北「イヤ、わつちもツイ蟲のゐどころが惡くつて、いひすごしました。まつひら御免。」彌「そこは旦那どんも野暮ぢやァねえ。モシこいつはどうせ、味噌べつたり燒生薑といふ男だから、しやうどはなしさ。」トたゞ飲む酒ゆゑ、追從たら〴〵闇雲にひつかける。このうち勝手よりもいろ〳〵もち出し、膳も出て、彌次郎北八少しは氣の毒ながら、これも食つてしまふ。おやぢ小便に立つて行く跡にて、北「コウ彌次さん、お前こゝの割合をおれによこしなせえ。おいらがァノおやぢをいぢめたればこそ、お前がうてきにやらかしたぜ。」彌「おきやァがれ。さういつてもまんざらぢやァねえ。アノ親仁の來ぬうち、のちに飲む分もやらかさう。」北「おらァ此の茶椀についでくんな。オツトきた〳〵、きたさの〳〵讃岐のこんぴら、たかが高瀬の船頭の子ぢやものおさへてどうす。ジヤジヤン、〳〵〳〵。」彌「エ、、、引山に切つころばした松の木丸太の樣でも、つまと定めたら、まんざらにくくもあるまいし、やとせのせ〳〵、おもしろえ。時にこの親仁のべらさくめはどうした。」北「ホンに長い雪隱だ。モシ女中、こゝに居た爺樣はどけへ行つたの。」女「たしか表の方へ。」彌「ハテノ、こいつどうか變ちきだわえ。」ト待てども〳〵、此の親仁どこへ行つたか、一向に歸らず。雪隱を探せども行方しれず。北「モシ女中、今の親仁が爰の拂ひをして行つたかの。」女「イ、エまだ頂きませぬ。」彌「ヤァ〳〵。」北「い

つぺいおこはにかきやァがつたな。追つかけてぶちのめさう。」ト、とんで出たれども、どつちへ行きしやら、一向雲をつかむ如く、殊に親仁は此の近在のものゆゑ、わき道へ入りしにや、さらに行方知れず。北八しよけて立ち帰り、北「彌次さんどうも知れねえ。とんだ目にあつた。」彌「しかたがねえ、手めへ拂ひをしやァ。ァノ親仁めがくやしんばうで、手めへに意趣返しをしたのだはな。」北「それでもナニ己許りかぶるもんだ、いま／＼しい。せつかく醉つた酒が、みんな醒めてしまつた。」彌「次郎どんの犬と太郎どんの犬と、みんな醒めてしまつたか。」北「エ、しやれなさんな、そこ所ぢやねえ。まあ何にしろ幾何だね。」亭主「ハイ／＼九百長五十でござります。」北「騙りにあつたとおもつて、わうじやうして拂ひやせう。言やァいふほど、智慧のねえ話だ。」彌「さういつても乙な親仁だ。いいことをしやァがつた。コウ北八、手めへの貌で一首うかんだ。」

御馳走とおもひのほかの始末にて腹もふくれた頬もふくれた

北「へ、業腹な、生馬の目を抜きやァがつた。」

有り難いかたじけないと禮いうていつぱいたべし酒の御馳走

かく詠みて北八も笑ひを催し、田舎者と侮りて、とんだ意趣返しを、しられたるもをかしく、爰を出でて行く程に、大井川の手前なる島田の驛に至りけるに、［島田より金谷へ一里］川越ども出で迎へて、「旦那衆、川を頼んます。」彌「貴樣川越か、二人でいくらで越す。」川「ハイ今朝がけに、あいた

川だんて、肩車ぢやァあぶんない。蓮臺でやらずに、お二人で八百下さいませ。」彌「途方もねえ。越後新潟ぢやァあんめえし、八百よこせも凄まじい。」川「すんだら、いくら下さるヤア。」彌「いくらも擂木もいらねえ。おいらが直に越すわ。」川「オ、川ながりやァ二百つけて寺へやるから、なんならさうさつしやい。ながれた方が、安くあがらァ。ハヽヽヽ。」彌「ばかァぬかせ。問屋へかゝつてお越しなさるわ。」ト云ひすてて、あしばやに行きすぎ、彌「ナント北八、あいつらにからかふが面倒だから、いつその事、問屋へかかつて越さう。手前の脇差を借しやれ。」北「なぜ、どうする。」彌「侍になるわ。」ト北八が脇差を取つてさし、己の脇差のひきはだを、後の方へのばし、ながくして、大小さしたやうに見せかけ、彌「ナント出來合のお侍、よく似合つたらう。此の布呂敷包を手前一しよに持つて、供になつて來や。」北「こいつは大わらひだ。ハヽヽヽ。」ト彌次郎が荷物を一緒にして、北八肩にひつかけ、やがて川問屋にいたり、彌次郎おゝ國ことばの聲いろにて、彌「コンリヤ問屋ども、身ども大切な主用でまかり通る。川ごし人足をたのむぞ。」とひや「ハイ畏まりました。御同勢はおいくたり。」彌「ナニ同勢な。」とひや「さやうでございます。旦那はお駕籠かお馬か。お荷物は幾駄ほどござります。」彌「本馬が三疋、駄荷が都合十五駄ほどありをるが、道中邪魔だから、江戸表において來た。其の代り身共駕籠陸尺が八人、そこへ記しめさろ。」とひや「ハイ、おさぶらひ衆は。」彌「侍共が十二人、やりもち、挾箱、ざうり取、よいか〳〵。合羽かご、竹馬、都合上下三十人餘りぢや。」とひや「ハイ〳〵、その御同勢はどこにをります。」彌「イヤサ、

江戸表出立の節は殘らず召連れたが、途中で追々麻疹をいたしをるから宿々へ殘しおいた。そこで只今川を越さうといふ同勢は、上下合はせてたつた二人ぢや。臺越に致さう。何程ぢや。」さひや「ハイお二人なら蓮臺で四百八十文でござります。」彌「それは高直ぢや。ちとまけやれ。」さひや「エ、此の川の賃錢にまけるといふはないヤア。ばかァいはずと早く行くがよからずに。」彌「イヤ侍に向つて、ばかアいふなとは何ぢやア。」問屋「ハ、、、がいにつないお侍だャア。」彌「こいつ武士を嘲弄しをる。ふとどき千萬な。」さひや「こんた武士か。刀の小じりを見さつしやい。」ト いはれて彌次郎ふり返り、後を見れば刀のこじり柱につかへて引きはだ許りの所二つに折れてゐる。皆々どつと笑ひ出せば、さすがの彌次郎面目なく、しよげ返つてだんまりなり。さひや「刀の折れたのをさす武士がどこにあるもんだ。こんた衆問屋を騙りに來たぞ。そんではハイ、濟ませないぞ。」彌「イヤ身共は、みをのや四郎俊國が末孫だから、それで刀の折れたのを差しをるて。」さひや「戯言いふと、くゝし上げるぞ。」北「コレ彌次さん、をさまらねえ。早く行かう。」ト 手をとつて引きずられ、彌次郎それをしほに、こそ〱と逃げいだす。さひや「ハ、、、途方もない氣違だ。」兩「ツイやり損つた。いま〱しい。ハ、、、。」

出來合のなまくら武士のしるしとて刀のさきの折れてはつかし

この狂歌に雙方大笑となり、彌次郎兵衞北八愛をのがれ、急ぎ川端にいたり見るに、往來の貴賤のすき間もなく、此の川のさきを爭ひ越え行く中に、二人も直段とり極めて、蓮臺に打乘りみれば、大井

川の水さかまき、目も眩むばかり、今や命をも捨てなんと思ふほどの恐ろしさ、たとふるに物なく、まことや、東海道第一の大河、水勢早く、石流れて、渡るになやむ難所ながら、程なくうち越して蓮臺をおりたつ。嬉しさいはん方なし。

　蓮臺にのりしはけつく地獄にておりたところはほんの極樂

斯く打興じて金谷の宿に到る。［金谷より日坂へ一里二十四丁］両側の茶屋女「お休みなさいまァし、お休みなさいまァし。」かごかき「戻り駕籠乘つていじやござい。」北「コウ彌次さん、駕籠はどうだ。」彌「イヤ氣がない。手前乘るなら乘つて行かつし。」北「そんなら日坂まで乘らうか。」ト駕籠のねだん極めて打乘りたるに、をりふし雨ふり出しければ古ござ一枚、駕籠の上からうちかぶせ、かつぎいだして、早くもきく川の坂にかゝると巡禮が二三人、巡禮「ふだらくや、岸うつ波はみ熊野の。アイお駕籠の旦那一文下さい。」北「つくな〳〵。」巡禮「御道中御繁昌の旦那、この中へたつた一文。」北「エ、つくなといふに、べらぼうめ。」巡「それにべらぼうがいるもんか。そつちがべらぼうだ。」北「コノ乞食めが。」ト力むはずみに、如何しけん駕籠の底すつぽり抜けて、北八どつさり尻餅をつき、北「アイタ、、、。」巡「ハ、、、。」かごかき「エレ〳〵、怪我ァさつしやりませぬか。」北「コレ手前達ァ、なぜこんな駕籠に乘せた。」かごかき「許さつしやりませ。何とせるもんで。」北「どこぞへ行つて、いい駕籠を借りて來さつし。」かごかき「こかァ坂中で借りずとこがごさらない。イヤよかことがある。ぼうぐみ、主の褌をはづせ。」ぼうぐみ「アゼ、どうせる。」かご「ハテお

れがせることがある。見されし。」ト自分のふんどしをはづし、棒組の褌と二すぢにて、ござの上から、駕籠の胴中を括りて、 かご「サア乗つていじやござれ。」北「とんだことをする。これで乗られるもんか。」かご「ハテ外にせることがない。そん代にやア眠たくならしやつても、この褌で落ちずやうがござらない。不肖して乗らつしやいませ。」ト気の毒さうにいふ。北八もをかしく、これも話のたねと打ち乗れば、 弥「ハ、、、白い褌で駕籠の胴中を括つた所は、しつかいお屋敷の葬禮といふものだ。」北「エ、いま／＼しい。そんな事をいひなさんな。」弥「ハ、、ア、駕籠の内でものをいふから佛でもねえ、こいつ聞えた、科人だな。」北「エ、猶いま／＼しい。おらアもう降りて行かう。」トこゝより駕籠をおり、こゝまでの賃錢を拂ひ、駕籠を返し、たどり行くに、雨は頻りに降り出しければ、坂道滑りて、やう／＼と小夜の中山立場に到る。こゝは名におふあめの餅の名物にて、白き餅なり。水あめをくるみて出す。この二人酒飲なれば、漸く一ツ二ツ食ひける中、雨だん／＼強くなりたるに、

爰もとの名物ながらわれ／＼はふり出すあめのもちあましたり

つたへ聞く無間の鐘は、その寺に名のみ残りて、今はなしとぞ

この寺にむげんのかねもつきなくし今は晦日にうそやつくらん

「日坂より掛川へ一里十九丁」 それより此の坂を下り、日坂の驛に到る頃、雨は次第に強くなりて、今は一足も行かれず。あたりも見え分かぬほど、頻りに降りくらしければ、ある旅籠屋の軒に佇み、弥「いま／＼しい、がうてきに降るわ／＼。」北「はなやの柳おやアあるめえし、いつまでひとの門に立

つてもゐられめえ。ナント彌次さん、大井川は越すし、もうこの宿に泊らうぢやァねえか。」彌「ナニ飛んだことをいふ。まだ八ツにやァなるめえ。今から泊つてつまるものか。」旅籠屋のば、「この雨ぢやァ行かれましない。泊らしやりませ。」北「イヤ、こりや泊りたくなつた。彌次さん見ねえ。奥にたぼがでえぶとまつてゐる。」彌「オヤドレ〳〵、こいつ話せるわえ。」旅籠屋のば、「サァお前ち泊らしやりませ。」彌「さうしやせう。」トこゝにて彌次郎北八、あしをあらひ、すぐに奥の次の間へとほり、彌「コレ〳〵女中、素湯があらば一ぱいくんな。」女「ハイ〳〵、今上げうず。」北「ひりやうずが聞いて呆れらァ。」女「ハイおさゆ。」彌「よし〳〵。北八、昨日の藥をくりやな。」北「何だ、しんりいあんかん丹か。待ちなよ。ありのとわたりから捻り出してやらう。」彌「エ、ばかァいやんな。腹が痛くてならぬ。」北「ソリヤァお前、ないらの起つたのだ。豆を食やァなほる。」彌「エ、悪くしやれずと、はやく出してくれろえ。」北「そんなら眞面目に、ソレ田まちの反魂丹。手を出しな。」彌「二つばかりくりやれ。ガリ〳〵〳〵。コリヤ胡椒だわ。ア、辛い〳〵。」北「ハ、、、待ちなよ。イヤもう無い。イヤこゝに錦袋園がある。ソレよしか。」彌「からかみのかげでまつくらだ。」トつゝみがみを開けて、藥をとり出し、ガリ〳〵〳〵。彌「ア、又何をか食はしやァがつた。ペッ〳〵。」北「ドレ見せな、イヤこれは觀音樣だ。」彌「ほんに觀音樣の頭ァ噛み碎いてしまつた。ハ、、、。」女「御膳を上げませう。」北「イヤ三ぜん食やァ澤山だ。」彌「よく口を叩く男だ。喧しい默つてしやべれ。」北「しづかに

騒げか呆れらア。」トこのうち膳も出て、しやれながら、食ひかゝり、いろ〳〵此時に女中、奥の客は女ばかりだが、ありやァ何だ。」女「みんな巫女でございます。」弥「ハヽア巫女だ、コリャおもしろへ。ちと生口を寄せて貰ひてえもんだ。」女「もう遅からう。七ツからは寄らぬといふことだ。」弥「ナニ、まんだ八ツ少し過ぎでおざります。」北「そんなら聞いて見てくんな。おいらが山の神を寄せて貰はう。」弥「コリャをかしい。」女「いんま聞いて上げうずに。」ト此のうち膳もすみ、女奥の間へ行き、かの巫女にその事を聞きあはす、巫女承知のよしなれば、やがて弥次郎北八おくの間へはいりにのぞむと、巫女例の箱を出してなほすと、きし
こゝへえて宿の女水をいれ来る。弥次郎さきさりし女房のことをおもひ出して、しきみの葉にみづをむけると、巫女はまづ神おろしを始める。巫「そも〳〵謹みうやまつて申したてまつるは、上に梵天、帝釋、四大天王、下界にいたれば閻魔法王、五道のみやうくわん。わが朝は神國のはじめ、天神七代、地神五代のおんかみ、伊勢はしんめい天照皇大神宮、外宮には四十末社、内宮には八十末社あめの宮、風の宮、月よみ、ひよみの御みこと、北にべんくう鏡の社、天の岩戸大日如来、淺間嶽ふく一まん虚空藏、その外日本六十餘州、總じて神のまんどころ、出雲の國の大社、神の數は九萬八千七社の御神、佛の數が一萬三千四靈の靈場、冥道を驚かし、こゝに請じ奉る。ハーおそれありや、この時に、この〳〵かのそしやうりやう、代々のぶつおやうし、弓と矢のつがひの親、一郎殿より三郎殿、ばんもかはれ、水もかはれ、かはらぬものは五尺の弓、一打うてば寺々の佛壇にひゞくなふじの。ヤヤレハヤ、なつかしや〳〵。よく水をむけて下さつた。わしが弓取りまくら

ぞひどのも出やらうけれど、婆婆にゐた時精進がきらひで、肴は骨まで食やつたむくい、今は牛鬼になつて地獄の門番をしてゐらるゝゆゑ隙がない。それで私ばかり出ましたぞや。」彌「お前誰だ、わからねえ。」いちこ「ハァわしは水をたむけどんの爲には、からのかゞみぢや、子寶どの。」北「からのかゞみたァ、彌次さんお前のおふくろのことだ。」彌「ハヽァおふくろか。そんたにやァ用はない。」いちこ「ハァレからのかゞみどんぢやァ用はおざらないか。わしやァそなたのまくらぞひぢや、厚がましくも能くぞ問うて下さつた。そなたのやうな意氣地なしにつれ添つて、わしや一生食ふや食はず、寒くなつても袷壹枚著せてくれた事はなし、寒の冬も單物ひとつ、ァヽうらほしや〳〵。」彌「堪忍してくれ。おれも其の時分はめんくがわるくて、かはえさうに、苦勞をし死にゝしやつたが殘りおほい。」北「オヤ彌次さん、おめえ泣くか。ハヽヽヽこいつは鬼の目に涙だ。」いちこ「忘れもせない。そなたが瘡を病はしやつた時、わしは生憎ひつをかく。瓜の蔓の次郎どのはよい〳〵病、たつた一人の子寶は、脾胃虚して骨ばかりに痩せこける。米はなし、日なしはせがむ、大屋どのの店賃やらねば、路次の犬の糞に滑つても、小言はいはれず。」彌「もう〳〵いつてくれるな。胸がさけるやうだ。」いちこ「それにわしが奉公して、折角ためた著物まで、そなた故に置きなくしたが口惜しい。質は逆にやァ流れ申さぬ。」彌「その代り、手めへは結構な處へ行つてゐるだらうが、おれは未だに苦勞がたえぬ。」いちこ「ヤァレハ

ア何が結構でござらう。友達衆の世話で、石塔はたてて下さつたれど、それなりで墓参もせず、寺へ附屆もして下されねば、無縁どうぜんとなつて、今では石塔も塀の下の石がけとなりたれば、折ふし犬が小便をしかけるばかり、つひに水一つ手向けられた事はござらぬ。ほんに長死にをすれば、いろいろな目に逢ひますぞや。」彌「尤もだ／＼。」いちこ「その辛い目に遇ひながら、草葉の陰でそなたの事を片時もわすれぬ。どうぞそなたも早く冥途へ來て下され。やがて私が迎ひに來ませうが。」彌「ヤアレとんだ事をいふ。遠い處を必ず迎ひに來るにや及ばぬ。」いちこ「そんなら私が願ひを叶へて下され。」彌「オヽ、何なりと／＼。」いちこ「このいちこどのへ、お錢をたんと遣らしやりませ。」彌「オヽ、やるともやるとも。」いちこ「アヽ、なごりをしや。かたりたいこと、問ひたいこと、數かぎりは盡きせねど、冥途のつかひしげければ、彌陀の淨土へ。」ト　うちむきて、巫女はあづさの弓をしまふ。彌「コレハ御苦勞でござりました。」ト　鳥目貳百文はりこみ、紙にくるみて出す。北「暗闇の恥をとうどうあかるみへぶちまけてしまつた。ハヽヽヽ、時に彌次さん、お前とんだ鬱〴〵の。ナント一ばい飲まうぢやアねえか。」彌「それもよからう。」ト　手を叩き、女を呼び酒肴をいひつける。いちこ「今日はお前樣がたア、どこからお出でなさりました。」彌「アイ、岡部から來やした。」いちこ「それはお早うおざりました。」彌「ナニわつちらア歩くこたア韋駄天さまさ。サアといふと、十四五里ヅヽ、はあるきやす。」北「その代りあとで十日ほどは役に立ちやせぬ。ハヽヽヽ。」ト　此のうち、酒肴を出す。彌「ちとあがりませぬ

かゝ。」いちこ「わたしは一向下さりませぬ。」彌「あちらのお方はどうだ。」いちこ「かゝさんお出で。サアおかまさんもお來なさいまし。」北「ハヽア お前のおふくろか。エヽこいつはめつたな事アいはれぬわえ。まづ上げやせう。」ト これより酒盛となり、さいつおさへつ。此の巫女ども思ひの外の食ひぬけにて、いくら飲んでもしやあ〳〵としてゐる。彌次郎兵衛北八は大きに醉がまはり、いろ〳〵可笑しき酒落あれどもくだ〳〵しければ畧す。北八まき舌にて、 北「ナントおふくろさん、今夜お前のおむすをわつちに借してくんなせえ。」彌「イヤ己が借りるつもりだ。」北「とんだ事をいふ。お前こそ今宵は精進でもしてやりなせえ。可愛さうに死んだ嬶衆があれ程に思つて、どうぞ早く冥途へ來い。やがて迎ひに來ようと深切にいふぢやァねえか。」彌「ヤレそれをいつてくれるな。迎ひに來られて堪るものか。」北「それだからお前はよしな。サアおふくろ、おいらに定つた。」ト いちこの娘にしなだれかゝるを、突き放して逃げる。 いちこ「およしなさりませ。」いちこのばゝ「娘が嫌なら私では。」北「もうかうなつちやァ誰かれの見境はない。」ト 夢中になつてしやれる。此のうち勝手より膳も出で色々こゝにもあれど畧す。はや酒もをさまり、彌次郎北八も次の閒に歸り、日が暮れるや否や、牀をとらせ寢かける。奥の閒にも旅くたぶれにや、もう寢かける樣子。北八小ごゑにて、 北「何でも巫子の新造めが、いつちこちらの端に寢た樣子だ。後に這ひかけてやらう。彌次さん、お前ねたふりなぞは通りものだぜ。」彌「おきやァがれ、己がしめるわ。」北「氣のつええ、大笑だ。」ト いひつゝ兩人ながらぐつと夜著をかぶりて寢る。 すでに夜も五ッ過ぎ、四ッまはりの拍子木の音、枕にひゞき、臺所にあすの支度の味噌する音もやみければ、たゞ犬の遠吠のみ聞えて、物寂しく更け渡るに、北八時分はよしとそつと起き出で、奥の閒を窺へば、行燈消えてまつ暗闇。そろ〳〵としのびこみ、探りまはしてかの巫女の懐へにぢりこむと、思ひの

外、此のいちこの方から、物をもいはずに北八が手を取つて引きずり寄せる。北八こいつはありがてえと、そのまゝ夜著をすつぽり手枕の轉びねに、假の契りをこめし後は二人とも前後も知らず、鼻つき合はせてぐつと寐入る。彌次郎兵衛一寐入して目を覺して起き上り、彌「もう何時だ知らぬ。手水に行かう。コリヤ眞暗で方角が知れぬ。」ト小便に行くふりにて、是れも奥の間へ這ひこみ、北八が先をしたとは露知らず、探り寄つて、夜著の上からもたれかゝり暗がりまぎれにかの巫女と思ひ、北八がムニヤ／＼いふ頬をねずり廻し、わんぐりと噛みつく。北八肝を潰し目をさまし、北「アイタ、、、。」彌「オヤ北八か。」北「彌次さんか。エ、汚ねえ、ペツ／＼。」ト此のこゑに北八と寐てゐた巫女も目をさまして、いちこ「コリヤハイ、お前たちは何だ。騒々しい。靜かにしなさろ。娘が目をさまさずに。」トいふ聲は婆の巫女、北八は二度びつくり、こいつ取りちがへたか忌々しいと、這ひ出てこそ／＼と次の間へ逃げかへる。彌次郎も逃げんとするを巫女手を取つて引きずりながら、ばゝあ「おまへ此の年寄をなぐさんで、今逃げる事はござらぬ。」彌「イヤ人違だ、おれではない。」ばゝあ「インネさういはしやますな。わし共はこんな事を商賣にやアしませぬが、旅人衆の伽でもして、ちと許しの心付を貰ふが渡世、はら散々なぐさんで、只逃げるとは厚かましい。夜の明けるまで私が懐で寢やしやませ。」彌「これは迷惑な。ヤイ北八々々。」ばゝあ「アレハイ、おつきな聲さしやますな。」彌「それでも己は知らぬ。エ、北八めが飛んだ目にあはしやアがる。」トやう／＼無理に引放して逃げんとすれば、又取りつくを突き倒して、がたぴしと蹴ちらかし、さう／＼次の間へ這ひこみながら、

いち子ぞとおもうてしのび北八に口をよせたることぞくやしき

掛川より袋井へ二里十六丁

しのゝめまだき驛路の、急がしげにひきつるゝ、朝出の馬の嘶きに旅勞れの目をこすりながら、彌次郎北八起き出でて、支度する中、相宿のいち子が、顏ふくらかしゐる

もをかしく、爰を立出で、ふるゐや、誉田の八幡を打過ぎ、右にしうとの畑、嫁が田といへる見ゆれば、彌次郎兵衛、

　干からびししうとの畑に引きかへて水澤山のよめが田ぞよき

それより、鹽井川といふ所に至りけるに、昨日の雨強くして、橋落ちけるにや、行きかふ人みづから股引をとり、裾をまくり上げて、爰を渉るに、彌次郎北八も、いざや引きつれて渉りなんとする折から、京上りの座頭二人つれ、此の川の歩わたりなることを聞きけるにや、一人の座頭、犬市「モシ、川は膝ぎりでござりますかな。」北「さやう〳〵。しかし水が早いから、お前がたァ危い。用心して渉りなせえ。」犬市「ハァ、なるほど、水の音がよつぽど早い。」トいひつゝ石を拾ひ、川のなかへ投げこんで考へ、犬市「イヤ、こゝらが、どうか淺いやうだ。コリヤ猿市、二人ながら脚半を取るも面倒だ。おぬし若役に、おれをおぶつてわたれ。」猿市「ハヽヽヽ、ずるい事をぬかす。拳でまゐらう。何でも負けたものが、おぶつて渉るのだ。よしか。」犬市「コリヤおもしろい、サア來い、さんなむめで。」さる市「りやんごうさい〳〵。」ト片手で拳をうちながら、兩方から左の手を出し、互に拳をうつ手をにぎりあひ、犬市「サア勝つたぞ〳〵。」さる市「エヽ、いま〳〵しい。そんなら此の風呂敷包を、貴樣一所に背負はつせえ。ソレよしか。サア來い〳〵。」ト支度して背中を向ける。彌次郎これはあり難いと、さる市におぶされば、猿市は連れの犬市と心えて、さつ〳〵と川へ入り、難なく向うへ渉ると、こなたの岸に殘りたる犬市、犬「ヤイ、猿よどうする。早く川を渉さぬか。」猿市向うの岸にて聞き

つけ、腹をたて、さる「コリヤ冗談なやつだ。たつた今おぶつて渉したに、又そつちへ行つて、おれを嬲るな。」犬市「ばかアいへ。己ばかり渉つて、太い奴だ。」さる市「イヤ、太いとはそつちのことだ。」犬市「コリヤおのれ、兄弟子に向つて言語道斷な。早く來て渉さぬか。」ト白い目をむき出し、腹立つる故猿市しかたなく又こちらへ渡りかへり、さる「サアそんならおぶさりなさろ。」ト背中を出す。北八しめたと、手をかけておぶされば、猿市又さつ／＼と川へ入る。犬市はおほきに急きこみて、犬「コレ、猿市どこにゐる。」さる市、川の中にて、さる「イヤ、こいつは誰だ。」ト北八を川の中へ、どんぶりおとす。北「ヤアイ、助けてくれ／＼。」ト手足をもがき、流れる故、彌次郎飛び込み引上ぐれば、頭から骨まで、腐るほど濡れ、北「エ、座頭めが、とんだ目に遇はしやアがつた。」彌「ハヽヽヽヽ、まづ著物をぬぎやれ。しぼつてやらう。」北「全體彌次さんが悪い。何のおぶさらずともいゝことに、お前が手本を手したから、ツイおれも。」彌「川へはまつたか、氣の毒な。ハヽヽヽヽ、それで一首やらかした。」

はまりけり目のなき人とあなどりてむくいは早き川のながれに

北「エ、聞きたくもねえ、よしてくんな。ア、寒い／＼。」ト裸になり、がた／＼震へながら、著物をしぼる。此の内座頭は川をわたり、行き過ぎる。彌「こゝで干してもゐられめえから、著替を出して著やれ。どこぞで火を焚いてもらつて、あぶるがいい。」北「エ、いまいましい。風をひいた。ハアクツシヤミ。」トぶつ／＼小言を言ひながら、著替を出して著かへ、くさつた著物はしぼつて引きさげ出かけると程なく、掛川の宿にいたる。棒ばなの茶屋をんな、女「おめしよヲあがりまアし。」鯵とこんにやくと干大根のお

ながもち人足の唄「吹けばナア、吹くほどナア、ンエ、もつもなかるいナア、ンエ、わたをサア入れたやナア、ながもちに綿をナア、ンエヨウ、しつたかどうだか、〳〵。」彌「オヤ北八、見さつし。さつきの座頭めらが、あそこに吞んでけつかるわ。」北「こいつはいいことがある。おいらを川へはめた意趣げへしをしてやらう。」トつくり酔にて、かの座頭の酒を吞んでゐる茶屋へはひる。北「オイ御めんなせえ。」茶屋の女「おいでなさいまし。」ト茶を汲んで来る。北八かの座頭のわきへ腰をかける。女「おしたくでもなさいますか。」彌「まだ〳〵腹はぼんぼこなだ。」先刻の座頭二人、此所にやすみ、酒を吞みゐたるが、かの二人とは氣もつかず、犬市「ハァねつから酒がたらぬやうだ。もう一合やらかさう。」さる市「いかさまなあ、御亭主々々、もうちつと頼みます。」女「ハイ〳〵。」犬市「時に、今の川へ陥つたべらぼう共はどうしたらう。」さる市「それよ、ハ、、、、、。まづ替目をやらかさう。」ト猪口に一杯ついで、一口のみ下におくと、北八そつと手を出し、猪口の酒を吞んでしまひ、ちやつと本の所へ置く。さる市「イヤ、太いやつらであつた。ちやんと己におぶさりやァがつて。その代り水を食やァがつたときは、助けてくれろと、悲しいおとぼねを出しをつた。何でもかすりを取ることばかり心がけてゐる奴だから、大方あいつは、ごまのはひだらうよ。」犬市「さうさ、どうで碌なもんぢやァない。あゝいふ奴は、こんな所へ来ても、えては食逃をして、打ちのめされるもんだ。イヤ時に杯はどうした。」猿「ホンニ忘れた。」ト猪口を取りあげて、吞まうとしたところが、酒は一すゐもない。さる市不思議さうな貌つきにて、猿「オヤ、

「こぼしたさうな。」トそこらあたりを探り廻し、「ハテ面妖な。改めてさゝう。」トまた一ぱいつぎ、一口呑んで下におくと、北八またそつと引きよせ、呑んでしまふ。犬市「かうしてゐる所へ、さつきの奴らが來たら可笑しからう。」さる市「ナニあいつらは、大かた著物をしぼつたり、干したりして未だあつちにまごついてゐるだらう。智慧のないべらぼうどもだ。」トいひながら、杯を取りあげたところが、又酒が一しづくもなし。さる「これはどうだ。」いぬ「又こぼしたか、意氣地のない。」さる「イヤこぼしはせぬが、ハテ奇妙ちやうらいな。」犬「イヤ手前そんな事ばかりいつて、獨りで呑むな。」ト此の内、北八銚子を取り自分がのんだ茶わん茶わん二つにあけて、そつと銚子をもとの處へおく。犬「コリヤ猿よ、杯をまはさぬか。」トひつたくり、てうしを取つて、ついで見て、犬「ヤァ此の猿市め、獨りで食つてしまやァがつた。」さる「ナァニ、飛んだことを。」犬「それでも銚子がさつぱりだ。」さる「なんだ銚子がない。イヤこゝの御亭主々々、わしらが旨と侮つて、こんな横著をさしやるか。二合の酒がたつた二口呑むと、もう無いはどうしたもんだ。」亭主「ハイそれは二合、しかもたつぷり注いで上げましたに、おほ方こぼしなさつたもんだんで。」さる「ナニこぼすもんだ。商人に似合はぬことをさしやるから、此の酒代は拂ひませぬぞ。」ト大きに腹を立てる。此の時門口に遊んでゐる子守が、いぜんより見てゐたりしが北八の方へ指ざしをして、こもり「アイ、座頭どんのさけゥ、皆あの人が、ちやわんへ注いでしまはつせいた。」北「イヤ、この子は飛んだことをいふ。コリヤア茶だ／＼。」トいひながら、呑みさした茶わんの酒を呑んでしまふ。亭主「イヤ、おまい酒臭いわ。そして顔が赤くならしやつたわ。大方あの衆の酒を呑ましやつたな。」北「エヽ、この人も同じやうに。途方も

ねえ、わしが顔の赤くなつたのは、茶に醉つたのだ。わしは變つた事で茶をたんと飲むと醉ひます。酒に醉つた人は管をまくが、茶に醉つた證據には、茶ばかりいふが癖でならぬ。そこでちやばかりなから、どなたもちややうチヤ、ハ、、、、。」さる「イヤ、その手はくはぬ。子供は正直だ。コリヤアこんた衆が横取して呑んだに違ひはない。酒代を拂はしやれ。」北「ちやれやれ。ちやりとは、ちやわいも無い事をちやべらしやる。ちやつきから飲んだは茶ばかり、ちやとう衆のちやけを、ちやくぶくした覺えはごちやらぬ。惡いちやれだチヤハ、、、、。」犬「イヤこれ、目の見えぬ者だと思つて、そのちやらくらおかつしやれ。ハテ、見てゐた子供が證據人だ。」さる「まだ確かなことは御亭主、あの衆の飲んだ茶椀が酒臭いか、かいで見さしやれ。」トうごかぬ所へ氣をつけられ、北八ちやつと茶椀を隠さうとするを亭主ひつとり、かいで見て、亭主「ヒヤア、臭い〳〵。そして酒でにちや〳〵する。コリヤハイ、お前ちが呑ましやつたに違ひはない。酒代をおかつしやいまし。」トいはれて北八、こいつはをさまらぬと思ひ、北「イヤちやけは呑まぬから、ちやか代は拂はぬ。茶代ならなんぼでも拂はう。幾許だ。」亭主「そんなら、茶代をおかしやいまし。茶が二合で六十四文。」北「ヤ何だ、茶を二合飲んだ。途方もねえ。」彌「エ、めんだうな、拂つてしまつたがいい。手前のする事ア何でも納まらねえ。足もとの明るいうち、拂つてしまや。」ト目がほで知らせる。北八もせうことなし六十四文はらつてやると、さる「イヤはや、飛んだ人たちだ。大方さつきおぶさつたも、こんた衆であらう。人の買つた酒を横取りして呑む

といふは、マア泥衆といふものだ。」北「ナニ泥坊だ。このどうめくらが。」ト力みかゝる。彌次郎おしとめ、彌「ハテ、こつちが悪い。モシ、料簡してくんなせえ。こいつは茶に酔ふと、氣が強くてなりやせぬ。サアちやつちやつと行かう。ナイおちやらは〳〵。」トいひ捨てて北八をむりに引立て、爰を立ち出で足早に此の宿を打過ぎ、北「エヽ、いま〳〵しい。今日は飛んだ間がわるい。錢を出して酒を呑みながら、へこまされたがうまらねえ。」彌「ハヽヽヽ、己よりは餘程智慧のねえ男だ。」

する事もなす事も皆あしくぼや茶にしられたる人のしがなさ

斯く興じ、打ちわらひつゝ、やがて秋葉三尺坊へのわかれ道にいたり、彌次郎兵衞遙拜して、

脇差の貳尺五寸もなにかせん三じやくばうのちかひたのめば

それより澤田、細田を打過ぎ、砂川の坂道に掛りけるに、兩方より木立生ひ茂りて、日の陰暗く、折ふし往來もとだえたるに、誰とも知れず、「コレ〳〵、旅の人オ〳〵。」ト呼びかけられ、兩人後をふりかへり見れば、傍の木かげより、のさ〳〵と懐手にて出で來るは、どてらの布子へ一腰ぼつこみ、山岡頭巾をかぶりたる髭だらけのむさくろしき男、彌次郎北八が向うへまはり、立ちはだかる。二人はびつくり、こは〴〵ながら、彌「コリヤ晝日中に何の用だ。」かの男「イヤ酒手を壹文下さいませ。ハヽヽヽ。」北「何のこつた。それで落著いた。ソレ壹文。」彌「あつたら肝を潰さしやアがつて、いま〳〵しい乞食めだ。」ト呟きながら、原川をうち過ぎ、はやくもなぐりの立場につく。爰は花ござを織りてあきなふ。

道ばたに開くさくらの枝ならでみなめい〳〵におれる花ござ

程なく袋井の宿に入るに、「袋井より見附へ一里半」兩側の茶屋にぎはしく、往來の旅人、おの〳〵酒のみ、食事などしてゐたりけるを、彌次郎兵衛見て、

こゝに來てゆききの腹やふくれけんされば布袋のふくろ井の茶屋

此の宿はづれより、上方者と見えて、棧留の布子に、銀ごしらへの脇差を差し、花色羅紗の裝束かけし合羽を著たる男、供一人つれて、後になり先になり、かみ方もの「モシ、おまいがたはお江戸ぢやな。」彌「さやうさ。」上がた「私も毎年下るものぢやが、お江戸はきよとい繁昌なことぢやわいの。アノ吉原へもちよこ〳〵誘はれて、晝三とやらいふおやまを買うたが、いつも人に振れまはれて行くさかい、何程かゝつたやらこちや知らんが、おまい方も定めて買ひなさるぢやあらうが、アリヤなんぼ程かゝるぞいな。」彌「わつちも女郎買では、地面の五箇所と拾箇所はなくしたものだが、ナニ晝三位では僅かなことさ。マアひらの晝三なら片しまひで壹分貳朱、茶屋が壹分か、藝者が一組でまた壹分。そして一斤々々でも取れば、その代が四百ヅ、かゝる分のことさ。」上がた「ハテノ、わしも大店はしよ〳〵へいたが、其の一斤々々といふは、何のこつちやいな。」彌「ソリヤア、酒一斤、肴一斤などと、内の酒が呑めぬから、別に外から取り寄せることさ。」上がた「ハア、わしが行た内では、そないな事はなか

つたわいな。そして何も、呑めぬ酒は出しやせんわいの。えらうよい酒であつたわいな。」彌「ナニ、そりやア呑める酒でも、呑めねえといつて、別に取るが江戸つ子の氣性さ。」上がた「そして上方では、みな借つて戻るが、お江戸の女郎は現金拂ひぢやさうな。」彌「ナニサあそこでも、つき馬をつれて歸りさへすりやァ、いくらでも貸してよこしやす。」上がた「ハ、、、、コリヤおまいは大店のお客ぢやないわいの。そのつき馬とやらいふ事は、わしらが店の職人衆の話で聞いてゐますが、晝三かひにそんな事はありませんわいな。」彌「なくてさ。ほんにわつちらア、尻に四ツ手かごの蛸のできたほど通つたものだ。ナニねえことをいひやせう。」上がた「ハァ、そんなら、おまいのおなじみは何屋ぢやいな。」彌「アイ大木屋さ。」上がた「大木屋の誰ぢやいな。」彌「とめの助よ。」上がた「ハ、、、、そりや松輪屋ぢやわいな。大木屋にそんなおやまはないもせぬもの、コリヤおまい、とんとやくたいぢや〳〵。」彌「ハテあそこにもありやす。ナア北八。」北「エ、、さつきから默つて聞いてゐりやァ、彌次さんお前きいた風だぜ。女郎買に行つた事もなくて、人の話を聞きかじつて、出はうだいばつかり、外聞のわるい、國ものの面よごしだ。」彌「べらぼうめ、おれだとつて行かねえものか。しかもソレ、手めへを神につれて行つたぢやアねえか。」北「エ、、あの大屋さんのとむらひの時か。へ、、神につれたも凄まじい。なる程貞朱のつとめをおぶさつたかはり、馬道の酒屋で、剝身のぬたと辛汁で呑んだときの錢は、皆

おいらが拂つておいた。」彌「譃をつくぜ。」北「譃なもんか。しかもその時、お前、さんまの骨を咽へたてて、飯を五六杯丸呑にしたぢやァねえか。」彌「ばかァいへ、うぬが田町で甘酒を食らつて、口を燒傷した事ァいはずに。」北「エ、、それよりかお前、土手でいい紙入が落ちてあると、犬の糞を攫んだぢやァねえか。業ざらしな。」上がた「ハ、、、、イヤはや、お前方はとんとやくたいな衆ぢやわいな。」彌「エ、、やくたいでもあくたいでも、うつちやつて置きァがれ。よくつべこべとしやべるやらうだ。」上がた「ハアこりや御免なさい。ドレ、お先へ參らう。」ト肝を潰し、そこ／＼に挨拶して、早足に行きすぎる。彌「いま〱しい。うぬらに一ぱんへこまされた。ハ、、、、。」此の話のうち、みかの橋をうちわたり、大くぼか坂をこえて、早くも見附の宿にいたる。見附より濱松へ四里七丁 北「ア、くたびれた。馬にでも乘らうか。」馬かた「おまいち、馬ァいらしやいませぬか。私どもは役に出た馬だんて、早く歸りたい。安く行かずい。サア乘らしやりまし。」彌「北八乘らねえか。」北「安くば乘るべい。」ト馬の相談ができて、北八こゝより馬にのる。此の馬方はすけがうに出たる百姓ゆゑ、諸事いんぎんなり。彌「コレ馬士どん、こゝに天龍への近道があるぢやァねえか。」馬士「アイ、そつから空へあがらしやると、壹里ばかしも近くおざるわ。」北「馬はとほらぬか。」馬かた「インネ、かち道でおざるよ。」ト爰より彌次郎は獨り近道の方へまがる。北八馬にて本道をゆくに、早くもかも川橋をうちわたり、にし坂さかひ松の建場につく。ちや屋女「お休みなさりやアし。」はゝ「名物の饅頭買はしやりまし〱。」馬士「婆さん、異な日和でおさる。」はゝ「お早うおざいやした。いんま新田のおんにいが同志にいかずと、待つてゐた

アに。コレ〳〵、横須賀の伯母どんにいひついでくんさい。道楽寺様に御説法があるから、遊びながらおざいといつてよオ。」馬士「アイ〳〵、またこのごろに来すい。ドウ〳〵」北「この馬はしづかな馬だ。」馬士「女馬でおざるわ。」北「道理でのり心がよい。」馬士「だんなア、お江戸はどこだなのし。」北「江戸は本町。」馬士「ハアえいとこだア。わしらも若い時分、お殿様について行きをつたが、その本町といふところは、何でも無上い商人ばかしるる所だアのし。」北「オ、それよ。おいらが内も、家内七八十人許りのくらしだ。」馬士「ソリヤア御大層な。おかつ様が飯を炊くも大抵のこんではない。アノ、お江戸は米がいくらしをります。」北「マア壹升貳合、よいところで壹合ぐらゐよ。」馬士「ソリヤいくらに。」北「しれた事、百にさ。」馬士「ハア本町の旦那が、米を百ヅヽ、買はしやるさうだ。」北「ナニとんだことを車で買ひ込むわ。」馬士「そんだら、雨にはいくらしますう。」北「ナニ壹両にか、ア、かうと、二二一天作の八だから、二五十、二八十六で踏みつけられて、四五の二十で帯解かぬと見れば、無間のかねの三斗八升七合五勺ばかりもしようか。」馬士「ハア、なんだかお江戸の米屋はむづかしい。わしらにやア分らない。」北「分らぬ筈だ。おれにも分らねえ。ハヽヽヽ。此の話のうち、程なく天龍にいたる。此の川は信州諏訪の湖水より出で、東の瀬を大天龍、西を小天龍といふ舟わたしの大河なり。彌次郎、此所に待ちうけて、倶に此の渉しを打越ゆるとて、


鴨長明
この川の



水上は雲より出でてうろこほどなみのさかまく天龍の川

舟よりあがりて、立場の町にいたる。此所は江戸へも六十里、京都へも六十里にて、ふりわけの所なれば、中の町といへるよし。

けいせいの道中ならで草鞋がけ茶屋にとだえぬ中の町客

これより、かやんば、藥師、新田をうち過ぎ、鳥居松近くなりたる頃、濱松の宿引出迎へて、宿引「モシ、貴方方ァお泊りなら、お宿をお願ひ申します。」北「女のいゝのがあるなら、泊りやせう。」宿引「するぶんおざります。」彌「とまるからめしも食はせるか。」やど引「あげませいで。」彌「コレ、菜はなにを食はせる。」やど引「ハイ當所の名物、薯蕷でもあげませう。」北「それが平か、そればかりぢやァあるめえ。」やど引「ハー、それに椎たけ、慈姑のやうなものをあしらひまして。」北「汁が豆腐に蒟蒻のしらあへか。」彌「マァかるくしておくがいい。その代り百箇日には、ちと張りこまつせえ。」やど引「コレハ異なことをおつしやる。ハヽヽヽ。時にもう參りました。」彌「イヤモウ濱松か。おもひの外、早く來たわえ。」

濱松より舞坂へ二里半十二丁

さつ／＼とあゆむにつれて旅衣ふきつけられし濱松の風

宿引先へかけぬけて「サア／＼おつきだァよ。」宿の亭主「お早くおざいました。ソレお爨、お茶とお湯だァよ。」

彌「イヤ、そんなに足はよごれもせぬ。」亭主「そんならすぐに、お風呂にお召しなさいまし。」北「湯灌場はどこだ。彌次さんマア先へやらかしねえ。」彌「いま／＼しい事をいふ男だ。手めへ先へはひれ。」

やどの女「こつち／＼お出でなさりまし。」ト すぐに湯殿へ案内する。此のうち、荷物も座敷へはこばせ、彌次郎兵衛奥へ通ると、「ハイ／＼、両替はようおざりますか。」あんま「お療治をなさいませぬか。」彌「ヲツト揉んでください。イヤ、きさま目があるの。」

あんま「ハイ／＼、仕合と片方はよく見えます。十年ばかしも後に、風眼とやらを煩ひをりまして、両眼ともに皆目おツ潰してしまひをりましたが、それからこつち／＼、いろ／＼と療治をして、やうやつと此のあひだ、左のはうがよくなりました。」彌「ひさしぶりで目が開いたら、皆知らぬ人ばかりだらう。」

あんま「おさやうでおざります。」彌「見えない方も、随分療治をしなさい。直りさへすりやァ見えるもんだ。時に北八、湯はどうだ。」北八ふろよりあがり 北「アヽ、いい湯だ。あんまりあつくて、體が半分、水引のやうになつた。」女「ハイ／＼、御膳をあげませう。」ト こゝにて膳も出で、いろ／＼あれども畧す。やがて膳もすみ、彌次郎湯にもはひつてしまひ、彌「サァあんまさん、やらかしてくんな。イヤ時にいま、湯殿から見れば、こゝの内の内儀様か知らぬが、病人と見えて取亂してゐるが、なか／＼美しい代物だ。」あんま「ソリヤァ氣違でおざるわのし。」北「きちげへでも大事ねえの。」あんま「イヤ、聞きなさい。今に念佛がはなりますわ。」ト此の内、勝手の方にて、チヤンとかねの音して、百萬遍はじまる。

あんま「ソレお見さい。あの氣違どのは、こゝの下女でおざるが、御亭主がふつと手をつけられたを、

内儀様が甚いやきもちやきで、あの女を打つたり叩いたりして、とう〳〵さらけ出しをりましたが、とかく御亭主は不便がつて、それからわきに圍つて置きをりましたを、なほぜかし内儀様が喧しくいつて、とう〳〵氣が違ひ、首をくゝつて死にやりました。さうすると御亭主は又よいことにし、あの女を内へ入れると、其の晩から、内儀様の幽靈がとつ付いて、あの女がまた内儀様のやうに、氣違になつたもんだんて、それであんなに、毎晩百萬べんをくりをります。」トひそ〳〵話すに、彌次郎北八も口は達者なれども、性は臆病もの。北「何だ、幽靈がとつついたとは、爰のうちへ其の幽靈が出るかの。」あんま「出るだんか。」彌「譃をつくぜ。」あんま「ナニ、譃ぢやァおざらぬ。毎晩この屋根の上に、白いものが立つてゐるのを見たものがおざります。」北「ヤアコリヤ、とんだ所に泊り合はせた。」あんま「それにその内儀様が首をくゝつた時の顔色といふものは、目まなこをくるりと開いて青涕をたらし、齒を食ひしばつて、それは〳〵生きてゐるやうな貌であつた。」北「ソリヤアどこで。」あんま「しかもソレ、お前の後の緣先で。」彌「ヤアコリヤ堪らぬ。どうか首筋がぞく〳〵するやうだ。」彌「生憎しよぼ〳〵雨が降り出したは情ない。」あんま「今夜などはきつと出さうなこんだ。」北「ヤイコレ按摩殿、もう歸つて下さい。」彌「アノ又たゝき鉦の音で一ばい氣が引き入れるやうだ。」北「何にしても忌々しい宿をとつた。」あんま「エ、臆病なお衆だ。ハヽヽヽ。」彌「もうしめへか。北八はどうだ。」北「おらァもう寢よう。」あんま「さやうなら御機嫌よく。」ト按摩は暇乞して立

つて行く。此のうち、女夜具を持ち出で牀をとりて行く。二人ともにいつにない洒落も無駄も出でばこそ、只まじ〱と寐入りもやらず。彌「エヽ、いつその事、北八今から立たうぢやアねえか。」北「ナニ飛んだ事をいふ。今の話で、どうう夜道が歩かれるもんだ。」彌「それにこの内は、何だかだゝ廣いばつかりで、人が少ないから、うそ氣味の悪い内だ。」ト目ばかりぱち〱してゐると、鼠が天井をかける音からから。北「エヽ、鼠までが馬鹿にしやアがつて、小便をしかけた。」彌「その鼠めが羨ましい。己ア先から、小便をしたくても堪へてゐるに、ヤア何だか柔かな物が足に觸つた。」北「何だ〱。」ねこ「ニヤア〱。」彌「コノ畜生め。シツ〱。」百萬遍の鉦の音、「チヤン〱。」軒におちる雨垂、「ほたり〱。」折も折と迷子をたづぬるこゑ、「迷子の長太やアい。チヤン〱、チヤン。」二人共、夜著の内へもぐりこみ、北八夜著の袖から差覗き 北「どうだ彌次さん、まだ生きてゐるか。」彌「なまいだ〱。アヽ、時に困つた事がある。もう小便がもるやうだ。」北「お互に難儀な目にあつた。」彌「何と、思ひきつて一しよに行かうか。」北「雨戸を開けてやらかすべい。」トふたり起きて、一しよに、こは〱そろ〱と障子をあけ、北「サア彌次さん。」彌「イヤ手めへ先へ。」北「何が出るもんだ。」ト雨戸をさらりと開けたところが、何か庭のすみに白い物が宙にふはふは。北八きやつといつて倒れる。彌「ヤアどうした〱。」北「どうしたところか、あれを見ねえ。」彌「あれとは。」北「白いものが立つてるらア。そして腰から下が見えぬ。」彌「ドレ〱。」トふるへながら恐いものは見たくなり、雨戸の外をそつと覗き、これもきやつといつて、座敷へはひ込み倒れる。北「コリヤ彌次さんどうした。オヽイ、彌次さんヤアイ。」ト此のさわぎに、勝手より亭主かけいで、この體を見て樣々介抱し、やう〱彌次郎しやう氣づきければ、亭主「ヤレどうなさいました。」北「イヤ小便に行つた所が、あそこに何か白

い物がゐたと、それで此通り、臆病な人さ。」亭主縁先へ出で、これを見て、「イヤあれは襦袢でおざります。コリヤコリヤ、おさんやい〳〵日が暮れたに、やつぱり干物をなぜ取りこまぬ。そしてさつきから雨がほろついて來たに、らつしくちもない女共だ。しかしコリヤァ、お氣の毒樣でおざります。」彌「ナニサ、私ちらァ恐いといふこたァ知らねえ者だが、なぜか今夜は、蟲の居どころが惡かつたさうな。」亭主「ハイおやすみなさいまし。」ト勝手へゆく。彌「エ、いま〳〵しい。大きに肝をひやした。」トやう〳〵心落ちつき縁先へ出て見れば、なるほど女が襦袢を取りこんでゐる。二人とも小用をして座敷へかへり、夜著ひきかぶりて、

いうれいと思ひの外にせんたくのじゆばんの糊のこはくおぼえた

はじめて笑を催し、心落ちつきて、とろ〳〵と一睡の夢をむすぶに、程なくやこゑの鷄の聲家毎にうたひつるゝ勇ましさ。早出の馬の鈴の音シヤン〳〵。馬士の唄「晩にござらばナァ、裏からござれよォ。表くろゝ戸で音がするよォエ引。」馬「ヒイン〳〵。」烏が板屋根をつゝくおと、「コト〳〵〳〵〳〵。」彌「もう夜が明けたさうな。」ト北八も共に起き出づれば、やがて勝手より膳も出で、いそぎ支度して立出で、此の宿にすは明神の社を拜みて、

梅干のすはのやしろと聞くからにまもらせたまへ皺のよるまで

斯くて、若林の鄕を打過ぎ、篠原の取付きにて、北「オヤ旨さうな牡丹餅がある。オツトばあさん、一つくんな。」ト立ちながら、店先の牡丹餅をつまんでかつちり、北「ヤァこいつは食へぬ。」ばゞ「ソリヤァ牡丹餅の看板でおざる

わ。」北「イヤほんに、木でこしらへたのであつた。道理でかたい。」は「いくつ進ぜます。」北「ナニ、三ツばかりくんな。」ト錢をはらひ、牡丹餅を食ひながら呼びかけ、北「ヲイ\/\彌次さん\/\。」彌「なんだ、うめえものならちつとくれろ。」北「がうぎにうめえ。」彌「ドレひとつ。」北「イヤそれから御らうじろ。」ト手の平へ乗せてさし上ぐると、鳶が來りちよいと浚つてゆく。彌「ハヽヽヽ。」北「いまいましい。こゝらの鳶は、みな下戸ださうな。」ト恨めしさうに空を眺めて、

あいた口ふさがれもせぬその上に鼻をあかせしとびの憎さよ

ほどなく蓮沼坪井村を打過ぎ舞坂の驛にいたる。「舞坂より荒井へ海上一里」これより荒井まで壹里の海上、乘合船にうち乘りわたる。げにも旅中のきさんじは、船中おもひ\/の雜談高聲にかたり合ひ、笑ひのゝしりうち興じゆく程に、頓て、なかば渡りて、乘合の人々も咄しくたびれ、めい\/柳行李に肘をもたげて、居眠をするもあり、又この風景に見とれて、たゞ默然としてゐるもあり。この乘合の中に年のころ五十ばかりの髭むしやう\/としたる親仁、いかにも垢づきたる布子を著たるが、何をか失ひけん、ゐねぶれる人々の膝の下を探り、又はうすべりを持ちあげ、頻りに物を探し求むる樣子にて彌次郎が袖の下を探りまはす。彌次郎その手を提へ、彌「コウ、貴樣はなんだ。斷りなしに人の袂を探つて何とする。」おやぢ「ハイ御許されまし、わしはハイちとべこ、なくならしした物がござるから。」北「お前なくなつた物があるなら斷つてたづねるがいい。此の船のなかでどつこへも行く事ではない。何だ。煙草入か、煙管か。」おやぢ「イインニヤ、そんな物おやアござらない。」北「イヤそんなら錢か、金か。」おやぢ「インニヤ尋ねすともよくござる。」

彌「尋ねずとよい物なら、人の居眠をしてゐるうち、そこらア探り廻すこたアねえ。」のり合みな〳〵「サア何が見えぬ。いひなさい。此のなかで物が見えないでは濟まぬ。」おやぢ「インニヤ、もうよくござる。」彌「ハテいいでは濟まねえ。何が見えやせん。」おやぢ「ハアそんならいひますべい、皆びつくりさつしやりますな。」北「ハ、、、お前が物をなくしたとつて、誰がびつくりするものだ。」彌「何が見えやせん。」おやぢ「アイ蛇が一疋なくなり申した。」北「ヤア〳〵飛んだことをいふ人だ。蛇たア何の蛇だ。」おやぢ「何だべいとつて生きた蛇でござるわ。」のり合「ヤア〳〵〳〵。」彌「イヤ貴樣も飛んだものを持つて來た。蛇をマア何にしようと思つて。」北「こいつは氣味のわるい。こゝらにはゐぬか。」トたち騷げば、船中みな總立ちに立騷ぎ、「ヤアこの板子の下に、とぐろを卷いてゐるわ。ソリヤそつちの方へ行つた。エ、こりや氣味のわるい。ソレ〳〵揚荷の下へ這ひこんだわ。コリヤまあ、とんだ人と乘り合はした。」ト船中上を下へ引つくりかへし、たち騷ぐ。かの親仁あけ荷を取りのけ、蛇を何の苦もなくつかみ、また懷へ入れる。北「コレ〳〵、お前飛んだことをする。それを懷へ入れておくと、又はひ出ますわ。海へうつちやつてしまひなせえ。」おやぢ「インニヤさて、さうはなり申さぬ。わしはハア、讃岐の琴平さまへ行くもんだが、道中路錢につきて、すべいやうがござらないから、道でこの蛇をとつたを幸ひ、蛇つかひになつて、壹文ヅヽ貰つて行くもんだから、コリヤァわしが商賣の種でござるわ。」彌「イヤ、なんぼ貴樣が商賣の種だとつて、蛇を持つてゐる人と、どうして一所にゐられる

ものだ。コレ船頭どん、なぜこんな者を船に乗せた。」せんどう「ハアわしらだとつて、よもやあの人が蛇を持つてるようとは知りませぬ。」のり合「コレ親仁どん、何のかのといはずとも、多勢に無勢だ、早くうつちやつてしまひなせえ。」おやぢ「インニヤ、やアだ。なり申さぬ。」北「ならざア貴様ぐるめに、海へぶちこんでしまふがどうだ。」おやぢ「サ、サ、はめるならはめて見さつしやい。私にも手ぶしがござるわ。」北「エ、このおやぢめが太え奴だ。」ト北八立ちかゝつて、かの親仁の胸倉をとると、懐から蛇の頭がによつこり出る。北八きやつといつて飛びのく。彌次郎つゞいて立ち上り、煙管にて親仁を一つくらはせる。親父腹をたて、摑みつくと、中持々とりさへるうち、またかの蛇がおやぢの袂から落ちてのたくり廻ると、松ほか一「ソリヤ又出をつた。ぶち殺せ。ぶち殺せ。」ト北八自分の脇差のこじりで、ちやつと蛇の頭をおさへる。蛇そのまゝ鞘にまきつきたるを、ちよいと海へ投りなげるはずみに手が滑り、脇差も一所に海へうちこみけるに、蛇は波にまかれて見えず。脇差は竹光ゆゑ浮きて流れる。北八面目なくしよけてゐる故、親仁これにて腹をいる。乗合の皆々「ア、これで落ちついた。しかしお氣の毒な事は、あなたのお腰の物だ。」おやぢ「わしは此の年になるが、脇差の流れるのを初めて見申した。」北「エ、尻の穴のせめえことをいふ親仁めだ。奥州衣川で辨慶が立往生したときやア、太刀も鎧も流れたといふことだ。」おやぢ「ハヽヽヽ、こりやアハア、横腹が痛くなり申すわ。柳樽といふ本に、ころも川さい鐙ばかり流れけりといふ句がありますす。辨慶のさしてお出やつた腰の物は、金でこしらへたもんだから、流れべい事アござんないわ。」侍「エ、いはせておきやア、よく喋る死にぞこなひめだ。はり飛ばしてやらう。」ト又立ちあがり、摑みかゝるを、彌次郎おし留め、彌「もう北八いゝにしや。乗合の衆の手前もある。静まれ／＼。

ト是れをなだめるうち、ははや荒井ぢかくなる。船「サア／＼、お關所前でござる。笠を取つて膝をなほさつしやりませ。ソレソレ舟があたりまするぞ。」乘合「ヤレ／＼、とゞこほりなくついてめでたい／＼。」ほどなく船は荒井の濱につきければ、乘合みな／＼舟をあがり、お關所をうち過ぎける。彌次郎北八も船をあがり、

　舞坂を乘り出したる今切とまたゝくひまもあら井にぞつく

さるにても、腰のものの流れたるは、前代未聞の話の種と、みづからうち笑ひつゝ、北八、

　竹篦をすててしまひし男ぶりごくつぶしとはもういはれまい

それより二人は、此の荒井の宿に酒くみかはして、足を休めぬ。

道中膝栗毛三編　終

題膝栗毛四編巻首

女方の阿佛、立役の親行、十六夜日記、東關紀行の類世に行はるゝ多なれど、皆下役者の時代物、聾棧敷の耳遠きをいかにせん。此の膝栗毛の世話事は、切落向を專らとして、樂屋落を載せず、北八、彌次、二枚の道外方に東海道の引道具を用ゐ、今四篇に及んで狂言の筋をかへず、見物猶跡幕の遲きに手を打つ事頻りなるものは、作者の手柄、宿外れの竝木氏も、領分堺の定杭、是れより右に出でん事を競ふべし。鄕に野生二番目に題して、一鞭直に京城の大詰に至るといへる者は、大帳を見ざるの誤りにして、此の世界未だ新井より桑名までの道行に終りて、伊勢參宮のまはり仕掛、大津街道の泥仕合は、五篇目の打出しに載せたり。嗚呼大儒先生、生前に文集の二篇目を出す事稀なるを、膝栗毛の四篇目、三年を過ぎずして製本既になれるは、當芝居の大名題、三都會の評判記に貫通すべし。

文化乙丑春　前黄表紙著作　喜三二題于芍藥亭

道中膝栗毛四編

十返舍一九著

〔荒井より白須賀へ一里十六丁〕由縁齋貞柳の狂歌に、「螺貝の出でし昔は知らねども今吹くはよき追風なりけり」と詠みしは、東海道に名だたる今切の渡しになん。そのかみ明應の頃、山の奥より螺貝數多拔け出で、それより海上あしくなりたりしを、元祿年中、公の命によりて、海上に數萬の杭をうち、蛇籠をふせ、往來渡船の難澁を救ひたまはりし、御惠みのありがたさに、風やはらぎ浪低くなりて、わたるに難なく、かの彌次郎兵衞北八こゝをうちわたりて、荒井の驛に支度とゝのへ、名物の蒲燒に腹をふくらし、やすみゐたるに、げにも、往來の貴賤たえまなく、舟場へ急ぐ旅人は、足も空に、出船をよばふ聲につれて走り、問屋へかゝる宰領は、口やかましく、課役をふるゝ馬さしについてのゝしる、旅籠屋の袴腰よこちよに曲げて走り、茶屋女の前垂すぢかひに引きずつて飛ぶ。長持人足横に立つてうたひ、馬士後を向きて、ひよぐりながら行く道すがら、うた「うらが性根は、濱名の橋まエ、今はとだえてエ、音もせぬヨエ」ドウ〳〵。」ちや屋をんな「お休みなさりまアし〳〵」コレ馬士ど

ん、お下し申さつせえよ。」馬士「オツト旦那様、ソリヤお頭があぶんない。」ト軒下へ馬を引き入れる。このから尻に乗りたるは、木綿の鼠小紋に、ひうちの所へ黒繻子をあてたるぶつさき羽織を著たるお侍、馬より下りて、北八と彌次郎が休んでゐる向うの床几に腰をかける。女「お茶あがりまし。」ト茶をくんで来る。お侍、女の顔をじろりと見た後にて茶椀を取り、侍「モウなん時ぢやらう。」女「九ツ半でもおざりましよ。」馬士「昨日の今時分ぢやろかい。」侍「したく致さう。何ぞあるか。」女「おなぎの蒲焼がおざります。」侍「何ぢや、お内儀の蒲焼か。」馬士「御亭主のすつぽん煮はないかな、ハヽヽヽ。時に旦那、此のお荷物は是れにおきます。お小づけが丁度五ツ。」侍「その貫ざしはこれへ賜れ。」馬士「ハイ〳〵、モシ旦那様、ちとお願ひがおざります。ヘヽヽヽどうぞ御酒を一杯食べたうおざります。」侍「ホウ、お身、酒がすきか。」馬士「ハイ、飯よりは好きでおざります。」侍「遠慮のない事ぢや。勝手に飲みやれ。身ども食べうずならば、ふれまはうものを、かいもく下戸ぢやからぜひがない。」馬士「ハア旦那はあがらずとも、ハイどうぞ頂きたうおざります。」侍「ハヽア解せた。お身、酒手おくせといふのぢやな。イヤまかりならんぞ。道中御定法の賃錢ども、相拂つてまかり通る。別に酒手なぞといふことは、決してならんことぢや。」馬士「左様ではおざりますが、どうぞそこを。」侍「イヤたつてといはば遣はさうが、請取書をしやれ。身共歸國の節、問屋どもへ相とゞける。」馬士「いつたい空尻のお荷物には、重過ぎてをるから、どうぞ御料簡なされまして。」侍「しからばソレ八錢も遣はさう。」トくわんざしより八もんぬいてやる。馬士「ハイ、せめて十六文下さりませ。」

侍「しからば身共料簡のもつて、今四文遣はさう。」ト銭四文、投り出してやる。馬士ふしようぶしように取つて、馬を引きゆく。侍「コリヤまてまて〳〵なむ三寶、あやつ〳〵もうどこへか行きをつたさうな。身共大切の草鞋を、馬につけておいたが持つて行きをつたさうぢや〳〵残念な、江戸まではかれる草鞋ぢやものを。」トぶつ〳〵小言をいふを、北八をかしく北「モシ、あなたは江戸へお下りでござりますか。」侍「さやう〳〵。」北「今承りますれば、草鞋一そくを、江戸までおはきなさると見えましたが、けしからず道がお上手でござりますの。」侍「イヤ、身共手作に致いたわらうぢぢや程に、一足あると、いつも江戸まで行き戻りはきをります。」北「ほんに草鞋の切れるはあるき下手でござりますが、あなたは道がお巧者な事だ。しかし私も此の草鞋は、一昨年松前へはいて参つたが、歸るまで何ともござりませなんだから、しまつて置いて、去年長崎へもはいて參るし、そして又今度はいて出ましたが、御覽じませ、まだ何ともござりませぬ。」侍「はて扨、お手前は身共より道が巧者ぢや。如何致せば、その樣に久しく草鞋がはかれますな。」彌「ナニサ、草鞋ははきづめにしても切れませぬが、その代り私は、どうも脚絆が切れてなりませぬ。」侍「それはどうして。」彌「私は旅へ出ますと、馬に乘りづめに致しますから。」北「おきやアがれ、ハ、、、、。」彌「サア行かう。あなた御ゆるりと。」アイおせわ。」トこゝの勘定をして立ち出で、此の宿はづれより、二人共二川までの駕籠をかりて、打ちのり行く程に、はや高師山、橋本の北に見ゆれば、彌次郎兵衛例の狂歌を口ずさむ。

鳶がうむ高師の山の冬はさぞゆきに眞白く見違へやせん

此のあたりにて、向うよりくる二川の駕籠に行き合ふ。ふた川のかごかき「どふだや親方、かへて行かずに。」こちらのかごかき「なんぼおこす。」ふた川「げんこやらずに、それでいぢやござい。」こちらのかご「まゝよ、棒組まけてやらアず。」トかごの相談ができて、兩方のかごかき「旦那樣方、駕籠をかへますから、乘りかへて下さりませ。」北「二川まで打ちこしだがいゝか。」ト此の内、二川の駕籠に乘り來る男、こちらの駕籠に乘り替れば、北八も彌次郎も、先の駕籠に乘り移る。北八を乘せたる駕籠かき「旦那は仕合ぢや。コリャア宿屋駕籠でおざりますから、蒲團がしいてあるだけ、お前がたは替へさしやつたが、お德といふものぢや。」北「ほんにさうだ。」トいひつゝ、駕籠に下敷の蒲團高くなりゐたるに心づき、何心なく蒲團の間をさぐり見れば、四もん錢一本あり。さては今まで乘つて來た男が、爰において忘れたと見えた。何でもこいつせしめうるしと、北八そつとかの一本を、おのが懷へ著服して、そしらぬ顏をしてゐる。このうち、早くも白須賀の驛に至る。

白須賀より二川へ一里十六丁

口の茶屋女、表に出で、呼びたつるを見て彌次郎兵衞、

出女の顏のくろきも名にめでて七難かくす白すかのやど

此の宿をうちすぎ、程なく汐見坂にさしかゝるに、これなん北は山つゞきにして、南に蒼海漫々と見え、絶景まことにいふばかりなし。

風景に愛敬ありてしをらしや女が目もとの汐見坂には

北八かく口ずさみたるを、駕籠の先棒聞きつけて、「ハア旦那は偉い歌人ぢやな。アレ向うの山を見さしやりまし、鹿がゐをります

わこ」北「ドレ／＼、是れはおもしろい。」さきぼう「めいえう、お江戸の旦那がたは、あんなおもしろうもない畜生めを、珍らしがらしやつて、昨日も發句とやらをいはつしやれたお人があつた。」北「おれも今の鹿で一首よんだ。貴様たちにいつて聞かせたとつて、馬の耳に風だらうが、かういふ歌だ、おく山に紅葉ふみわけなく鹿の聲きくときぞ秋は悲しき。なんと奇妙か／＼。」あとぼう「旦那はえらいものぢや。わし共は皆目しらぬが何にしされ、歌が直にひゆつと出るといふものぢやから、えらい／＼。」北「一寸した所が、此のくらゐなものよ。イヤ貴様たち、あんまり讃めてくれたから酒が吞ましたくなつた。爰は立場か。」さきぼう「猿が番場でおざります。サア棒組、一ぷく吸つて行かアず。」ト茶屋の門に駕籠をおろし休む。北「みんな一杯ヅ、吞まつし。コレ女中、そこへ酒を一升でも二升でも、うめえ肴をつけて出してやつてくんな。」彌次郎兵衛、駕籠の内にて、彌「オヤ北八どうした。でえぶ大風なことをいふな。」北「ナニサ、ちよつと吞ませるが、どこでもこの位なものだ。」トさきほど拾ひし四文ぜに一本を出し見せかける。彌「手前、それを皆おごるか。」北「知れた事よ。」北「おもしろえ、おいらも御馳走にならう。」ト彌次郎かごを出て、店先に坐ると、やがて女が酒肴をもち出る。北八を乘せたる駕籠の先棒、「これは有りがたうおざります。旦那頂きます。コリャ／＼棒組、どこへいつた。ヤイみんな來されの。さつきの猿丸大夫様が、御酒を下されるは。」トかごかき四人よりこぞりて吞みかける。彌次郎もをかしく、おもいれ吞みかける。北八は一番へこまされてだんまりなり。彌「サア／＼御亭主、いくらだの御酒代は、駕籠の旦那がお拂ひだ。」ていしゆ「ハイ／＼、酒と

肴で三百八十文でおざります。」北「コリヤがうてきに食らやアがつた。」ト ふしよう／＼にかの錢を拂つてしまふ。駕籠かき心づき、「ヤほんに棒組、先刻の一本の錢はどうした。」ぼうぐみ「オ、それ／＼。モシ旦那、あなたの乘つてござらつしやる蒲團の間に、四文錢一本いれて置きましたが、あるか見て下さりませ。」ト いはれて北八びつくりし、北「ナニ爰にか。イヤ見えないわえ。」かごかき「ナニ無い事はあらまい。慥かにいれて置きました。」彌「さつき見りやア、北八、手前が蒲團の下から出して、捻くり廻してゐた錢ぢやアねえか。」かごかき「それでおざります。」ト 北八心の中に、いま／＼しい事をいふと彌次郎を睨む。彌次郎をかしく側の方をぐつとふり向いてゐる。北八しかたなく懐より一本だして蒲團の下へそつと入れて、北「オ、／＼爰にあつた／＼。」かごかき「サア棒組、この元氣でやりからかさう。」ちや屋「ようおざりました。」ト 駕籠をかき出す。彌次郎をかしく、こゝは猿が番場にて、柏もちの名物なれば、

ひろうたとおもひし錢は猿が餅右からひだりの酒にとられた

かく打笑ひて行くほどに、境川といふにいたる。こゝは遠江三河の境にて橋あり。彌次郎地口にて詠める、

遠州へつぎ合はせたる橋なればにかはの國といふべかりける

程なく二川の驛に著く。［二川より吉田へ一里半二丁］此の所、家毎に強飯を商ふ見ゆれば、

名物はいはねどしるきこはめしやこれ重箱のふた川のしゆく

両側の茶屋ごとに、旅人を見かけて呼びたつる。女「お休みなさりまアし。暖かなお吸物もおざりまアす。無塩の肴で、酒でもお飯でも上りまアし。」此の茶屋の門口にゐたる雲助、北八彌次郎をのせたる駕籠舁を呼びかけて、「ヒヤア八兵衛、かへてうせたな。畜生め、早ういて嬶が番をしされ。密夫めがしけこんでけつかるは。」彌次郎をのせたるかごかき「あはうめ、己が所の親仁めが首釣つてをることたア知らずに、くそたれめハ、、、。」ト爰を行き過ぎ問屋の少し手前に駕籠をおろす。彌次郎北八こゝよりおり行くと、此の宿は、いづれの殿様にや、お小休と見えて、御本陣の前に乗物たてつゞき、あまたの御同勢はせちがひ、とひや、侍腰をねぢりて駈けまはり、野侍ふんごみのお侍衆、御本陣へ相つめゐるを見て、北「ハ、ア、お屋敷だけ、大屋様も二本さしてゐるな。」彌「ばかアいふな。踏込さへはいてゐると、おほ屋だとおもつてけつかるさうだ。」北「アノ乗掛を見な、がうぎに蒲團が重ねてあらア。」彌「その筈だ。のつてゐる人の天窗を見や、叶福助といふもんだ。ハ、、、。ソレ馬がきたア。」馬「ヒヒ、、、。」彌「アイタ、、、。わりい所に合羽かごを置きやアがる。」トけつまづいて小ごとをいふを、おやとひの中間ていに見ゆる男、「コノ野郎め、合羽かごへ土足を踏みかけやアがつて、太え事をぬかしやアがる。横頬アかぶりかくぞ。」彌「ハ、、、大江山の飯時ぢやアあるめえし、頬アかぶりかくも氣がつええ。」中間「何だこいつ、ぶちはなすぞ。」彌「貴様たちの赤鰯で、ナニ切れるものか。」中間「さうぬかしやア切らにやアならぬ。コリヤ角助、お身の腰の物を一寸借しやれ。」ト朋輩の角助が腰のものを取りにかゝる。かく介「コリヤ〳〵、切るならばお身の刃物でなぜ切らぬ。」中間「ハテやかましい。どれで切つてもいいぢやアねえか。」かく介「イヤよくない

よくない。」中間「ハテしはい男だ、ちよつと借しやれな。」かく「イヤさて、お主も氣のきかぬ男だ。おれが本當の脇差は、槍持の槌右衛門に二百のかたに取られたを、お身様も知つてゐるぢやァねえか。」中間「ホンニさうだ。エ、コリヤおのれ、打ちはたす奴なれど許してくれう。早く行け。」彌「イヤ、行くめえ。サアきれ〳〵。」ト突懸る。皆々この喧嘩、をかしがりて、引分けもせず、見物してゐると、かのお中間「エ、、さうぬかしやァ料簡がならぬ。突き殺してなとくれう。」ト引いて突きにかゝる竹光を、彌次郎引摑んでねぢ倒すと、件の男、中間「ヤアレ人殺し〳〵。」ト此の内早殿様のお立ちと見えて、おさへの拍子木「カッチ〳〵〳〵。」トそりやお供揃と騒ぎたつ御同勢につれて、喧嘩もそれぎりとなる。彌次郎もこれ幸ひに北八諸共爰を遁れ、足早に行き過ぎ、彌「ハ、、、大笑ひの喧嘩だ。」

　わきざしの抜身は竹と見ゆれども喧嘩にふしのなくてめでたし

それより、此の宿を出てたどり行くに、早くも大岩小岩を打過ぎ、岩穴の觀音をふし拜みて、

　行きがけの駄賃にをがむ觀世音尻くらひとは岩穴のうち

げにも旅のきさんじは、差合くらず高聲に話しものしてゆく内にも、さすがに退屈の欠伸しながら、北「ア、くたびれた。ちつとばかりの風呂敷包や紙合羽も、なか〳〵邪魔になるものだ。コウ彌次さん、お前の荷とわつちの荷を一所にして、坊主持にしようぢやァねえか。」彌「コリヤアおもしろえ。さいはひこゝにいい竹が捨ててある。」ト拾ひ取つて二人の荷物を竹のさきに括りつけて、彌「サア〳〵北八、手前から持つてこ

いゝ。」北「年役にお前はじめさつせえ。」彌「そんなら狐拳でやらう。サアこい〳〵、ヒイフウミイ、おつとしめた。」北「エ、いめえましい。」トひつかたげ行く向うから来る旅僧は、法華宗と見えて、僧「だぶ〳〵。だゝだぶ〳〵。フニヤフニヤ〳〵〳〵。だぶ〳〵〳〵〳〵。」北「ソリヤ彌次さん渡したぞ。」彌「ナツト受取つたりや。其の次の坊様はどうだ。早く来ればいいに。」ト又向うより来る乗りかけ馬の鈴の音「シヤン〳〵〳〵〳〵。」馬上うた「たかい山から谷底見ればエ、おまんかはいや布さらすナアエ。どう〳〵。」彌「来たぞ〳〵。お繪符は勅願所、ソレ馬の上に御出家。よしか。」北「あんまりはやいな。」ト受取つて、ひつ擔ぎ行く道の傍に、躄「御覧の通り、足のかなはぬ躄に御報謝。」北「イヤアこいつ坊主だ。壹文やれし。」彌「前から見ると坊主のやうだが、後を見や、ぼんのくぼに毛があるは。」北「おきやアがれ。ハヽヽヽ。」此のうち、うしろより比丘尼が三人づれにて、指につけし管を鳴らしてうたひ来る。うた「身をやつす賤が思ひを、夢ほどさまに知らせたや。えいそりや、夢ほどさまに知らせたや。サアサ、さんがらえ〳〵。」北「あざやかな聲がするの。」トふりかへり、「ヒヤア比丘尼だ〳〵。サア彌次さん渡しやす。」彌「エ、いめえましい。」北「人に荷を持たせるは中々いいものだ。これでお供を連れた心持だ。ヤア〳〵こいつらア、まんざらでもねえ。彌次さん見ねえ。こちらの比丘尼がおれを見て、アレいつそにこ〳〵と愛敬が溢れるやうだ。畜類め。」彌「愛敬のいいのぢやアねえ。アリヤア顔にしまりのねえのだわ。」北「わるくいふぜ。」トこの内、後になり前になり行く比丘尼は、まだ年も二十二三、今一人は年増、十一二の小比丘尼ともに三人づれ、中にも若い比丘尼が、北八の側へよりて、

びくに「モシあなた、火はおざりませぬか。」北「アイ〳〵今打つてあげやせう。」ト すり火打を出して、かち〳〵。北「サアおあがり。時にお前がたァどけへ行きなさる。」びくに「名古屋の方へ参ります。」北「今夜一所に泊りてえの。何と赤坂まで行きなせえ。一所にしやせう。」びくに「それは有り難うおざります。モシどうぞお煙草を一ぷく下さりませ。とんと買ふのを忘れました。」北「ナニわつちやァよしさ。皆あげよう。」びくに「それでは、あなたお困りでおざりましよ。」北「サア〳〵煙草入を出しな。時にお前方のやうな美しい貌で、なぜ髪を剃りなさつた。ほんにさうして置くは惜しいものだ。」びくに「ナニ、私らがたとへ髪が有つたとて、誰も構ひ手はおざりませぬ。」北「あるだんか、わつちらァ一番に構ふ氣だ。何と構はしてくんなさらんか。」びくに「オホヽヽヽ。」北「早く一所に泊りてえ。彌次さん此の先の宿へもう泊らうぢやァねえか。」彌「ばかァぬかせ。あやにく坊主の來るがとぎれた。」ト 小言いひながら行くほどに、火うち坂をうち過ぎ、二軒茶屋にいたると、此の所より比丘尼はわき道へはひる。北「コレ〳〵お前たちやァどこへ行く。そつちぢやァあるめえ。」びくに「ハイ是れからお別れまうします。わしどもはこの在郷へまはつて参りますから。」ト 野道をさつ〳〵と行き過ぎる。北八あきれて見送ると、彌次郎をかしく噴き出し 彌「ハヽヽヽヽ、北八、手めへ今日は大分つけが悪いぜ。」北「エヽ、飛んだ目にあつた。業腹な。」ト うつかりしてゐる後から、ばつたり行きあたる往來の人。北「アイタヽヽヽヽ、目を明いて通れ。誰だ。」ト ふり返り見れば旅僧。彌「オツト荷物渡した〳〵。」北「コリヤはじまらねえ。」ト ふしよう〳〵に、荷物をひつかたげ行くまゝに、やがて吉田の宿にいたる。

「吉田より御油へ二里半

四丁

旅人をまねく薄のほくちかと爰もよし田の宿のよねたち

此の宿外れより、遠國同者とは見ゆれども、少しきいた風しやべる手合ひ五六人、高聲に話して行くを聞けば、中にもめひきの縦縞に、肩の所、縞がら變りたる布を當てたる袷をひつぱり、風呂敷包といとだてを背負ひし男、後の方をふり返りて、「オヽイ源九郎義經、ヤアイ／＼、早く來さいの／＼」トよぶ聲に彌次郎北八をかしく、この義經と呼ばるゝ男を見れば紺の紋付の廣袖袷に、これも包といとだてを背負ひ、顏は大あばたにて、少し片小鬢はげたる男、「かめ井兄ァや、片岡兄ァは、やくと足が達者だァのし。己ァ踵の坼切さァへ、石ころがつつ入つて歩かれ申さぬ。」かめ井「靜御前はどうしさつたァのし。」よしつね「ヤレさて聞きなさろ。後の立場で、靜御前が持病の疝氣さァ起つたと、金玉ノウつり上げて、うつ死ぬべいと、西風東風に騒ぎやる事よ。それにハァ六代御前が、牡丹餅さァ三十許も打食つたげて、食傷のゥして、ぢたんばたん切ながりやる。まんだそれに、辨慶は團子の串さァで咽笛のゥつゝいたと、涙ァこぼして泣きやつたげで、うらが新家の知盛どのが、三人のゥ介抱して、やらやつと後からつるんで來申すわ。主たちやァ何も知らずに、うつ走つて仕合だァのし。」彌次郎、この話をかしく、後になり先になりて 彌次「お前方ァどけへ行きなさる。」よしつね「お伊勢さまへ參り申すわ。」彌次「さつきから聞けば、お前がたァ義經だの、辨慶だのといひなさるが、どういふこつたね。」よしつね「ハァ其方衆の聞きやつたら可笑しかんべいに。コリヤハァわし共が、國さァつん出て來る前に祭禮があり申して、千本櫻といふ芝居のゥし申

したから、それでハァ義經だァの辨慶だァのと、狂言さァおつ始めた時、忘れないやうにと、その名をやつぺし、いひつけた癖さァ、今でも戯にいふのでおざるわ。一「聞えやした。そんならお前は義經になつたお方と見える。一よしつねさうでおざる。其の前にわしどもが國さァへ江戸芝居が來て、天神樣の狂言のゥし申したが、聞きなさろ、たまげた理窟よ。あにかハァ時平とやら五兵衛とやらいふ惡人どのが、讒言のゥせられたげで、天神樣の島流しにならしやます時、輿に乘つてお出やると、あにかハァ見物のゥしてをる婆樣たちも、嬶さまたちも、ヤレ／＼いとしぼいこんだと涙ァ零して、御門跡さまの通らしやますやうに、米だァの錢だァのと、舞臺さァへまき散らかいて、悲しがりやる。そこでハァ見物の中から、博勞の與五左といふ無上い人が、舞臺さァへ驅けだいていやるにやァ、この芝居ァならないぞ／＼、あぜ天神樣ァ島流しにせるのだ。最前お出やつた、長樂寺樣の閻魔樣ァ見るやうな、お公家どのが惡人だァ。あにも天神樣に科ァない。いがに芝居だァとつて、人を馬鹿にしたこんだァ。天神樣の尻ァ、此の博勞の與五左衛門が持つわ。時平どのはうらが相手だと、あにハァ御年貢米の二俵べしよ、差しやァげる力のある兄ァだんて、誰もうつたまげて、挨拶のゥせる人ァなし、見物も口々に、與五左殿さうだ。その時平とやらァしよびき出してぶつ叩けと、あにハァ村中の若い人達が樂屋さァへ刎ねこんで、らんごくをやると思ひなさろ。さうせると江戸役者の時平どの

は、コリヤ堪らないと、尻のウおつ端折つて、つん逃げ申した。それからハア名主どんへ寄合つけて、もう此の村へ江戸役者ア入れさるなと、談合のウして、わし共が其の跡の芝居さァで、狂言のウおつ始め申したが、江戸芝居よりかァ、ぶち割れるほどはやり申した。」ト息せいはつての問はず語り、自慢らしく話しもて行くまゝに、いつの間にかは大雲寺にいたる。この處は、甘酒の名物なれば、彼の人々は打ちつれて、此の茶屋に休む。彌次郎北八は、急ぎこゝをうち過ぐるとて、

いやたかき御寺の前の名物は是れもほとけになれしあまざけ

斯くて此のあたりより、早日も傾き暮るゝに近ければ、いざや急がんとて、草臥れし足を早めて辿り行く道すがら、北「どうだ彌次さん、埒があかねえの。」彌「大きに草臥れた。」北「何と昨晩の泊りは中くらゐな宿で有つた、今夜はかうしやせう。赤坂までわつちが先へ行つて、いい宿を取りやせう。お前くたびれたなら、あとから靜かに來なせえ。宿から迎ひの人を出させておきやせう。」彌「それよからう。しかし宿はどうでもいいから、女のありさうな内にしやれし。」北「のみこみ山〳〵。」ト此の所より驅けぬけて先へゆく。彌次郎あとより辿りゆくに、ほどなく御油の宿に入りたる頃は、

御油より赤坂へ十六丁

はや夜に入りて、兩側より出でくるとめ女、いづれも面をかぶりたる如くぬり立てたるが袖を引いてうるさければ、彌次郎兵衛漸うと振りきり、行きすぐるとて、

そのかほでとめだてなさば宿の名の御油るされいと逃げて行かばや

彌次郎兵衛、あまりに草臥れければ、先づ此の所はづれの茶店に腰をかけたるに、あるじの婆「アイ

茶ァまゐりませ。」彌「モシ赤坂まではもう少しだの。」ばゞ「アイたんだト六丁おざるが、お前ひとりなら此の宿に泊らしやりませ。此のさきの松原へは、わるい狐が出をつて、旅人衆がよく化され申すわ。」彌「そりやァ氣のねえ話だ。しかし爰へ泊りたくても、つれが先へ行つたから仕方がねえ。エ、きついこたァねえ。やらかしてくれう。ァイおせわ。」ト茶代を置き、此の所を立ち出で行くに、暗さは暗しうそ氣味惡く、眉毛に唾をつけながら行く。はるか向うにて狐のなく聲、「ケン引〳〵。」彌「ソリャ鳴きやァがるわ。おのれ出て見ろ。ぶち殺してくれう。」ト力み返つてたどり行くに、北八も先へかけぬけ、此の所まで來りしが、これもこゝへ狐が出るといふ話を聞き、もしも化されてはつまらぬと、彌次郎をまち合はせ、つれ立ち行かんと思ひ、土手に腰をかけ、煙草のみゐたりけるが、それと見るより、

北「オイ〳〵彌次さんか。」彌「オヤ手前なぜこゝにゐる。」北「宿とりに先へ行かうと思つたが、爰へは惡い狐が出るといふ事だから、一緒に行かうと思つてまち合はせた。」トいふに、彌次郎心づき、こいつ、きやつめが北八に化けたなと思ひければ、わざと弱みを見せず、彌「糞を食らへ。そんなで行くのぢやァねえわ。」北「オヤお前何をいふ。そして腹が減たらう。餅を買つて來たから食ひなせえ。」彌「ばかァぬかせ。馬糞が食はれるものか。」北「ハ、、、ハ、コレ己だわな。」彌「己だも凄まじい。北八にその儘だ。よく化けやァがつた。畜生め。」北「アイタ、、、。彌次さんコリャどうする。」彌「どうするもんか。ぶち殺すのだ。」トうつかりした所をぐつと突き倒して、彌次郎その上へのり懸り、おさへる。北「あいた〳〵。」彌「痛かァ性體を現はせ〳〵。」北「アレサ尻へ手をやつてどうする。」

彌「どうするもんか、尻尾を出せ。出さずばかうする。」ト三尺手拭をとき、北八が手を後へ廻してしばる。北八をかしく、わざと縛られてゐると、彌「サ

アヽア、先へ立つてあるけ〳〵。」ト北八をくゝり、後から捕へて、おつたてゝ〳〵、あか坂の宿にいたる。はやいづれの旅籠屋にも客を泊めて、門に立ちゐる女も見えず。彌次郎は宿からむかひの人が、もはや出さうなものと、うろ〳〵くうち、北「コウ彌次さん、いゝかげんに解いてくんな。外聞のわるい。人がきよろきよろ見て悪いわな。」彌「エヽ、糞をくらへ。ハテ宿はどこだ知らん。」北「ナニ己はこゝにゐるものを、誰が先へ宿を取つておくものだ。」彌「まだぬかしやアがる。畜生め。」トこのうち、向うより來る宿屋の男、宿「あなた方は當宿お泊りではおざりませぬか。」彌「きさま迎ひの人か。」やど「ハイおさやうでおざります。」北「それ見たか。此の化けぞこなひめ。」ト北八を杖にてつくらはせる。北「ヤイタ、、、、。どうしやアがる。」ト宿屋の男きもを潰し、「あなた方、外のお連様はまだお跡でおざりますか。」彌「ナニもうわつち一人さ。」やど「ハアそれでは間違ひました。私方のお泊りは十人様ぢやと承りました。」ト此の男は、刻々行き過ぎる。又ある旅籠屋の店先にて、ていしゆ「お泊りかな、もし。」トかけよつて掴へる。彌「イヤ連れの者が先へ來た筈だが。」北「その連れはおいらだわな。」彌「エヽ、いけしぶとい奴だ。もういい加減に尻尾を出しをれ。イヤまて〳〵。彼所に犬がゐる。コ、、、、シロ、コ、、、オ、シキ〳〵〳〵。ハヽア犬が來ても、いけしやアノヽとして居をるから、さては狐ではねえ。ほんたうの北八か。」北「知れた事。わりい洒落だ。」彌「ハ、、、、、サアお前の所へ泊りやせう」。ト心解けて、北八が縛めをもとくと、宿屋の亭主、「サアお入りなさりませ。ソレお湯をとつて來い。お座敷はえいかな。」北「アヽ、飛んだ目にあつた。」ト足を洗ふ。此のうち、宿の女荷物を座敷へ運ぶ。二人も座敷へうち通りて、彌「ホンニ北八料簡しやお

らア實に、ほんたうの狐だと思ひつめた。」北「ばか／＼しい目にあつた。未だに此の手首がひり／＼する。」彌「ハヽヽヽ、併し待てよ。斯うはいふものゝ、やつはりこれが、化かされてゐるのぢやアねえか。どうやらをかしな心もちだ。」ト無下に手を叩き、「御亭主々々。」ていしゆ「ハイお呼びなさりましたか」彌「コレ、どうも合點が行かぬ。こゝはどこだ。」ていしゆ「ハイ、赤坂宿でおざります。」北「ハヽヽヽ、彌次さんどうしたのだの。」彌「エ、未だはぐらかしてゐるやアがる。」トいひつゝ眉毛を濡らして、「御亭主さん、なんとこゝの内は、卵塔場ぢやアねえか。」ていしゆ「エ、何ヲおつしやる。」北「ハヽヽヽ、おもしろえ／＼。」ト此の内、勝手より宿の女、女「お湯にお召しなさりませ。」北「サア彌次さん、先づ、湯にでも入つて氣を落ちつけるがいいよ。」彌「畜生めが、糞壺へいれようと思つて、その手を食ふものか。」ていしゆ「ナニ湯は清水でおざりますから綺麗でおざります。マアお出でなさりませ。」ト勝手へゆく女、茶をくんで來り、「モシ御さびしかア、女郎さんがたでもお呼びなさりませ。」彌「ばかアいふな。石地藏を抱いて寢るこたア嫌だ。」女「ホヽ、ホヽ、異なことをおつしやります。」北「そんなら先へ入りやせう」ト北八湯殿へ行く。このうち亭主また座敷へ出で、ていしゆ「時にお客樣へ申し上げます。今晩は、私方に少し祝ひ事がおざりますから、御酒を一ツあげませう。」トいふうち、勝手より酒肴もち出る。彌「お構ひなさるな。何ぞおめでたい事かの。」ていしゆ「ハイおさやうでおざります。私の甥めに嫁を貰ひました。今晩婚禮をいたさせますから、お喧しうおざりましよ。」トいひすてて立つて行く。北

八ふろより上り 北「何だ、おごりかけるの。」彌「こゝの内に婚禮があるといふ事だ。コリヤいよ／＼きやつめがはばからかすに極つた。もう水風呂へも入るめえ。」北「エ、お前もいいかげんにしな。さりとは、執念深えこつた。」彌「イヤ／＼、めつたに油斷はならぬ。この硯ぶたも、こんなに甘さうに見えても、性は馬のくそや犬の糞だらう。」北「ホンにさうだらうから、お前は見てるなせえ。こいつは有りがてえ。お辭氣なしにやらかしやせう。」ト北八手酌にて、さつ／＼と呑みかける。彌次郎例の意地がきたなく、流石に見てもゐられず、まじ／＼して、彌「いめえましい。氣を惡くさしやァがる。」北「氣遣はねえ。一ぱい呑みなせえ。」彌「イヤ／＼馬の小便だらう。ドレ匂ひをかゞして見せや。ムウ／＼こりやァほんたうのやうだ。どうも堪へられぬ。エ、まゝよ、やらかせ。」ト一ぱい注いで呑み舌打ちしながら、「酒だ／＼。ドレ／＼肴。ナツト此の玉子はどうも色合が氣にくはねえ。海老にしよう。カリ／＼／＼。こいつはほんたうの海老だ／＼。」ト引掛け／＼、差いつ押へつさつ／＼と呑みかける。此の内勝手の方は、わんかぐの音がたびしと騷がしく、取込み最中。離れ座敷ではや婚禮の杯ごと始まりしと見え、謠の聲する。「四海波しづかにて、國もをさまる時津風、枝をならさぬ御代なれや。あひに相生の松こそめでたかりけれ。」北「ヤンヤァ。」彌「コウ喧しいわえ。」北「喧しいはいいが、お前さつきから杯を放さねえ。ちつとこつちへ廻しな。ホンニ馬の糞だの小便だのといふかと思やァ、やみくも獨りでくらふやつさ。ハ、、、、。」彌「おらァ正直化された氣になつて居たが、今思やァ、さうでもねえ。とんだ苦勞をさせやァがつた。」北「エ、お前の苦勞したよりかァ、

おらアしばられて、へんちきな目にあつた。ハ、、、、。」ト此の内、勝手より膳も出て、かれこれするうち、座敷にて又謡うたふ。「千代もかはらじいく千代も、さかえさかゆる松梅の、ふたばの竹のよをこめて、老いとなるまでも結ぶぞたのしかりける。めでたい／＼。三國一の嫁をとりすまいた。しやん／＼／＼。」ト手をうち叩き、さゝめきわたる。此の内勝手より女来り、「あなた方、もうお牀をとりましよか。」彌「そんな事にしやせう。」北「コレ女中、祝言はもう濟みやしたか　定めて嫁御は美しからう。」女「アイサ、壻様もよい男、嫁御様もえらい器量よしでおざります。お氣の毒なことは、あちらの座敷に寢やしやりますから、睦言が聞えましよ。」彌「何だ、そんな手合と割牀はあやまる。」北「こいつは大變々々。」女「モウお靜まりなさいませ。」ト出て行く。二人も、そのまま寐かけると、はや襖一重となりの座敷に、壻と嫁が寢るやうす。ひそ／＼と話するをきけば、した地から色事にて貰ひし嫁と見えて、たが／＼初對面とは見えず、ぶつたりつめつたりして、いちやつく様子手に取るやうに聞え、彌次郎北八は寐もやらず　彌「エ、飛んだ目にあはしやアがる。」北「ホンニ悪い宿を取つた。人の心も知らずに。何だか恐ろしく睦まじいな。畜生め。」彌「サア話聲が止んだからむづかしい。」ト　だん／＼蒲團から乗り出て、隣のやうすを御耳たて、ねられぬ儘に、彌次郎そつと起きたち、襖の隙開からさし覗く。北八も裸のまゝはひ起きて、北「コウ彌次さん、嫁は美しいか。おいらにもちつと見せてくんな。」彌「コリヤ靜かにしや。肝心の所だ。」北「ドレ／＼見せねえ。」彌「アレサ引つぱるな。」北「それでもちつと退きなせえ。」ト彌次郎が夢中になりて覗きゐるを、引きのけんと引つぱれども、退かじと意地ばるはずみに、はつたり襖があちらの間へ倒れると、二人も共に襖の上へ轉げる。壻も嫁もおしにうたれて肝を潰し、むこ「あいた／＼／＼。コリヤどやつぢやい。なんぜ、唐紙を打ちこかいた。」トはねおきた所が、

行燈をひつくり返してまつ暗闇。彌次郎はちやつと逃げて、おのが寢所へはひこむ。北八まご〳〵してかの壻につかまさり、せん方なく、「御免なせえ。手水に行くとつて、ツイ戸まどひをしやした。全體こゝの女中がわりい。夜座敷の眞中に行燈をおくから、それにけつまづいてお氣の毒だ。あゝ小便がもるやうだ。ちよつと行つて來やせう。こゝを放してくんなせえ。」むこ「いやはや呆れたお人たちぢや。夜著も蒲團も油だらけになつた。コリヤ、おさん〳〵、誰ぞはやく起してくれぬか。」ト呼びたつる聲に、勝手より下女が火をともして來り、そこら片付けるに、北八も手もちなく、はづれし唐紙をはめて引きたて、やう〳〵に斷りいうて、もとの寢所へかへり、すご〳〵と寢かける。彌次郎をかしくふき出し、

ねて聞けばやたらをかしや唐紙とともにはづれし頤のかけがね

北八も、夜著うち被りながら、

壻嫁のねやをむしやうにかき探しわれは面目うしなひしとて

斯くうち興じて、夜も更け行くまゝに、雙方しづまり、只鼾の聲のみ高くなりぬ。

【赤坂より藤川へ一里九丁】鷄の聲萬戸に響きて、ひきつるゝ課役の馬の嘶き勇ましく、既に夜明けければ、彌次郎北八も起き出でて、あらましに支度とゝのへ、早くも赤坂の宿を立ち出でけるに、此の宿の出端より、跡になり前になり行く三人づれの旅人、これも江戸者と見えて、少しいさみ肌の巻舌にて、話し行くを聞けば、ひとりの男「コウ、昨夜の泊りは可笑しかつたなア。」今一人「ソレヨ、何だ

か奥の間に泊つてゐた奴らァ、氣のきかねえ野郎どもだ。宿に婚禮があるを羨ましがりやァがつて、襖の間から覗きをつて夢中になり、とう〳〵襖をぶつこかしやァがつた。大笑ひなべらぼうどもだ。」今一人「それからその壻にあやまるざまァ。あの騒ぎでおいらもろくに寐られなんだ。いめえましい。」一人の男「そしてァノ一人の野郎めは、何だか宵に宿の亭主を呼びやァがつて、こゝの内は卵塔場ぢやアねえかと、いやァがつたが、あのべらぼうめは、どうでも氣がふれてゐると見える。」ト此のてやひ、ゆうべ彌次郎北八が泊りし内へ、一しよに泊つたと見えて、此のはなしをする。彌次郎聞きておほきにあつくなり、足早に驅けより言葉をかけ、彌「コレ貴様たちやァ、さつきから默つて聞いてゐりやあ、おいらが事をべらぼうたァ、何のこつた。」さきのをとこ「ナニこんた衆の事ぢやァねえ。こつちの事だわ。」彌「こつちの事といふ事があるものか。昨夜の宿での事を吐すのだらう。その襖をぶつこかした、べらぼうといつたァ、おれが事だわ。」旅人「ハァ、こんたそのべらぼうか。」彌「オ、其のべら棒だ。」旅人「ハヽヽヽ、べらぼうだからべらぼうといつたが、いいぢやァねえか。」彌「イヤこいつ、悪くしやれやァがる。」旅人「糞をくらへ。」彌「なんだ糞を食へ。コリヤ面白え。食ふべいから持つてうしやァがれ。」ト彌次郎眞黑になつて力む。されど相手は、血氣盛んの勇みでやひ、馬の糞を杖の先につゝかけ、さし出し、「サア持つて來たから、食らへくらへ。」彌「イヤ馬の糞は嫌ひだ。」旅人「嫌ひといふ事があるものか、是非食はせにやァおかぬ。」ト三人かかつて彌次郎を手ごめにする。北八をかしく中へ入り、北「イヤもう御免なせえ。食べたも同然でござりやす。」三人「ハヽヽヽ、堪忍し

てやらう。」ト行き過ぎる。彌次郎とてもかなはぬと見て、たゞ口の中に、ぶつくさ〳〵。此の内、桐の木、中柴を打ちすぎ、山中にいたる。
爰は麻の編袋、早繩などを商ふなれば、北八、

御佛の誓ひと見えて寶藏寺なむあみぶくろはこゝのめいぶつ

かくて藤川に到る。「藤川より岡崎へ一里半七丁」棒鼻の茶屋、軒ごとに生肴をつるし、大平皿鉢、
店先に並べたてて、旅人の足をとゞむ。彌次郎、

ゆで蛸のむらさきいろは軒ごとにふらりとさがる藤川の宿

それより此の宿をうち過ぎ、出はなれのあやしげなる茶店に休みて、北「何だかがうてきにむしがかぶる。婆さん素湯はあるめえか。」ちや屋のば、「ハア素湯はござらぬ。水を進ぜませうか。」北「エ、くすりを呑むのだわ。コリヤ堪らなくなつた。ときに雪隱はどこにある。」婆「どこにとつて、そんなに屋上を見廻しても、雪隱が疊の上にあるものか。裏へ行かつし。」北「ヒヤア、つきあたりに見える〳〵。」ト裏へ出で、雪隱へゆき、暫く用たして出で、あたりを見れば、この裏に物置を住居とせし、一つ家あり。内に十八九の娘、髪は取亂しゐれども、なか〳〵の上代物、唯獨りゐる樣子。北八例の惡洒落にて、ずつと此の内へ入りてわらひかけ、北「モシ御無心ながら、水を一つ。」ト手を洗ふうち、娘はげらげらと笑つてゐる。北「コウ姉さん、お前何を笑ひなさる。そして獨りでこゝにゐなさるのか。無用心な。」トあたりを見れども、外に人はなし。北八腰をかけて、煙草をすひつけ、「へ、氣味の惡い、何を見て笑ひなさる。コレサ何を笑ふのだよ。」ト娘の手をとつて引張るに、流石振り切りもせず、やつぱり笑つてゐる。北八、こいつは有り難い。もう占めたものだと、ぐつ

と引きよせる。いつの間にやら子供が見つけて、「ワァイ〳〵。あの人は氣違と、色ごとをせるやァ。ハ、、、。」ト大聲をあげて、笑ひ驅け出す。北八びつくりして、にげのかんとするに、娘は摑みついて放さず、娘「エヽこの男め。放さん〳〵。」北「これは情ない。」トむりに引き放さんとする所へ、この娘の親仁たち歸りて、親仁「コリヤ我が徒は、若い女を捕へて、何せるのぢや。」北「イヤ何にもしませぬ。」おやぢ「せんものが、なんぜ女一人をる内へ、入らつせえた。コリヤ承知ならんわい。」北「ナニサ、今用たしに行つて、ツイ水を貰つたばかりさ。」おやぢ「インニヤ、あれは氣違でござる。こなさん、氣の違うたものを捕へて、慰みかけさつせえたに違ひはあらまい。」北「ナァニ、飛んだことを。」おやぢ「インニヤ、すまん〳〵。氣違と侮つて、ひゆつとこなさんが、やりからかいたに違やしよまい。とかういはつせるな。此の分では濟まんぞ〳〵。」トわめき散らかし、大騒ぎをやらかす。此の內彌次郎、表の茶店に待ちゐたりしが、北八手水に行つて歸らぬ故後から見に來り、さきほどより此の樣子を片陰に見てゐて、をかしさ堪へられず、倂しもう出かけてやらうと、うそ〳〵出で來り、彌次郎「御免なせえ。わつちやァ、此の男の連れのものだが、委細聞きやした。こいつめもあの樣に見えても、ありやうはちつと氣がふれてゐやす。料簡してやつてくんなせえ。エ、此の野郎め、よく世話を燒かせる。アノ顔はよ。アレ見なせえ。きよろ〳〵する顔が證據。娘御は女だけまだしも、イヤモこの氣違には、こまり果てやす。」おやぢ「イヤ〳〵、さうではあらまい。ナニあの人が氣違なものか。」彌「ハテサあの頬付を見なせえ。アリヤ〳〵あのとほりだ。」北「なんだ、おれを氣違だ、コリヤおもしろい。ハヽァ降るわ〳〵、アレ〳〵花の吹雪が、ちりやたら

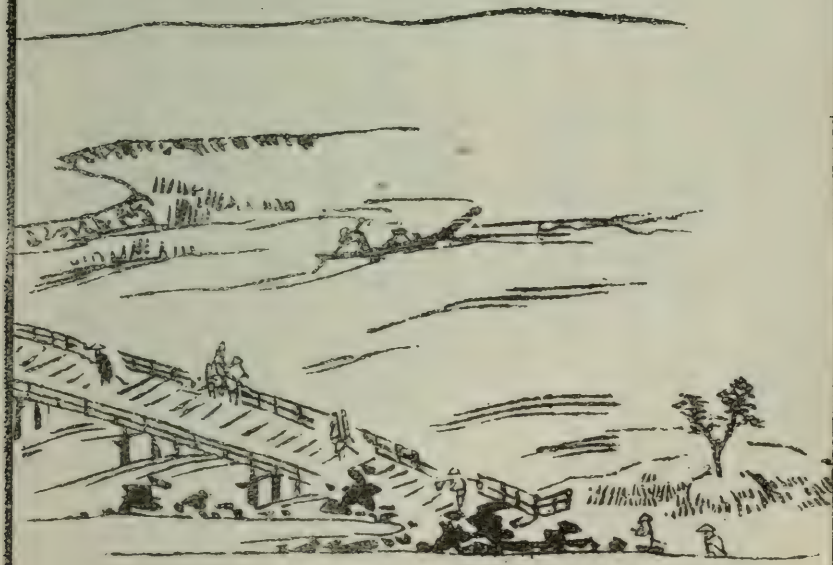
り、うんきんたらり、かんきんちりゝ、散りかゝるやうで、おいとしうて寢られぬ。トヽ、ノ〳〵。ヤア、そこにをるは女房どもか。イヤ能い女房ぢやにノ〳〵。コリヤ、のほい、ほゝい、さんなあろかいな。ヤンヤア。」北「アレ御覽じろ、あのとほり。其の癖あのつらで、いろ氣違さ。それだから女と見るとびろ〳〵して、ほんに恥をいはにやァ、理がきこえやせぬが、こいつめはわしが弟で、イヤモ、こんな困果なこたァござりやせん。」おやぢ「ハァ、こなさんがさういはつせると、わしも悲しい。見させる通り、たんだ一人のむすめが、この病で、わしは大きな苦患でござる。」彌「察してをります。」おやぢ「マアエ、この馬鹿やらうめ。何をげら〳〵笑ふのだ。時に親仁さん、お喧しうござりやした。」彌「もう參りやせう。サア氣違め、うせをれ。」ト彌次郎がちやらくらに、やうやうとまひをさまり、彌次郎、北八をつれて、こゝを通れいで、はては大笑ひとなりて、

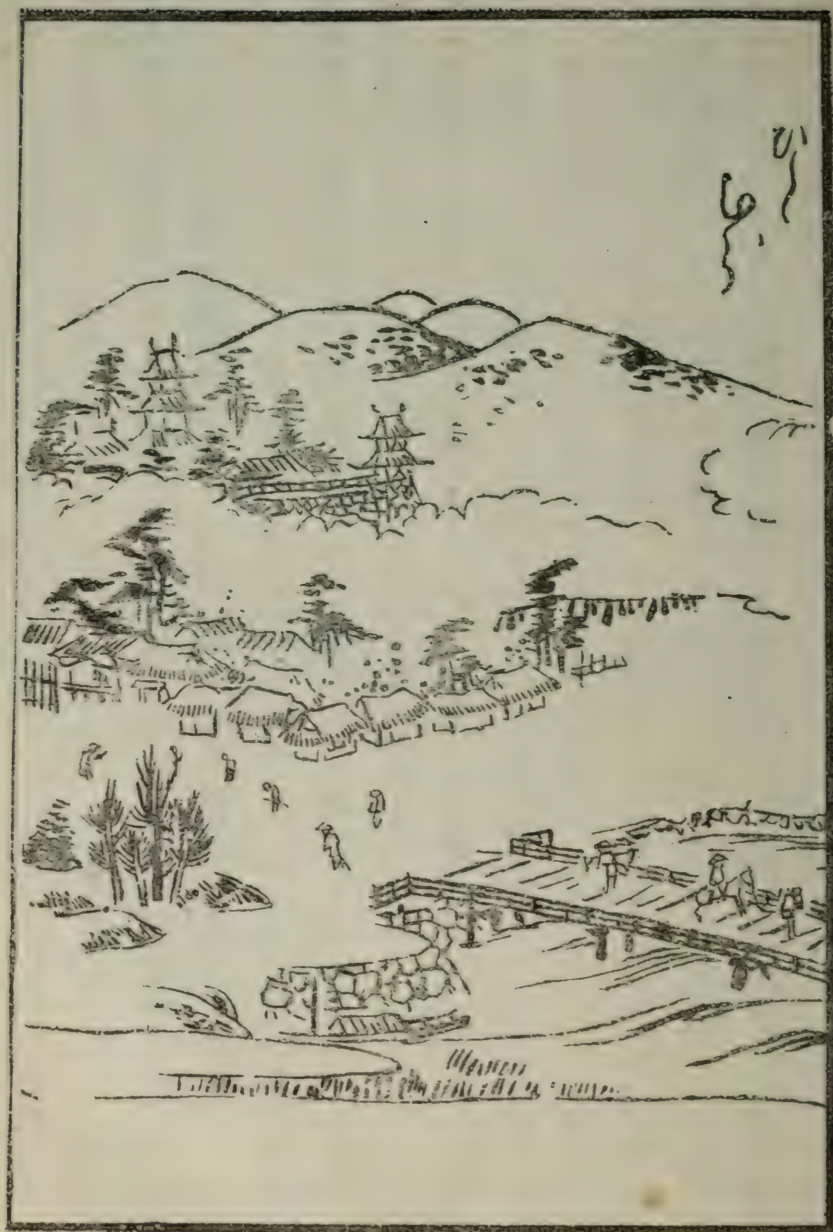
くどきたる娘はほんの氣ちがひにこちや間違ひとなりし目ちがひ

かく打興じて、こゝを立ち出で行く道すがら、彌「コウ北八、手前も飛んだものだ。氣の違つた娘をとらめえて、どうしようと思つて、業さらしな男だ。」北「へ、面目次第もねえ。併しわつちまでを、氣違とは、彌次さん、おりや一生の出來だぜ。」彌「酒でも買やれ。ときにそれについて話がある。丁度手前のやうな氣紛れものが、氣違の女を捕へて、じやらつきかゝると、其の女の親父が見つけて、腹

[illegible] 矢矧乃橋

名にし
世を
うつし
て
ゆく
あつさ弓
矢はぎの
川の
流るの





をたて、ヤイ此の野郎めは、人の内へ断りなしに牛込ァがつて、娘をちよろまかさうとか。ソリヤア赤坂べイだわえといふと、手前も負けぬ氣になり、イヤうぬ何だ、嘴を尖らかして、四ッ谷鳶のやうだと茶かすと、先の親父が、イヽおれが四ッ谷鳶なりやァ、うぬは八幡様の鳩だといふ。コリヤをかしい。此の北八がなぜ八幡様の鳩だといふと、親父が、ハテ貴様は氣違の豆を食はうとしたぢやアねえかと、ハヽヽヽヽ。」北「なんだ、市谷の地口はおそれる。ハヽヽヽヽ」打笑ひつゝ行く程に、あづき坂を過ぎ、岡の江、ゆふせん寺を打越えて、大平川にいたる。

　岸に生ふ芹のあをみに小鴨までみづにひたれる大平の川

それより大平村を過ぎ行く程に、岡崎の驛にいたる。（岡崎より池鯉鮒へ三里三十丁）こゝは東海道に名だたる一勝地にて、ことに賑はしく、両側の茶屋、いづれも綺麗に見えたり。おふぢ「おやすみなさりまアし。おめしをあがりまアし。よい諸白もおざりまアす。お入りなさりまァしノヽ。」彌「ナント、腹がすごしござつたちやアねえか。いかさまこゝでお小やすみとやらかさう。」トある茶屋へはひる。うちの女「ようお出でなさりました。」彌「あねさん、お飯にしよう。なんぞ味えものはなしかの。」女「ハイ、よい鮎のさかながおます。」北「ナニ、鮎のなますだ。」女「オホヽヽヽ。」トわらひながら、やがて鮎の煮びたしをつけて、膳を持ち来る。彌「ドレドレ、こいつはうめえ。そしてがうてきに白い飯だ。」北「ヱヽ、外聞の悪いことをいふ。アレ女が笑

つていかァ。彼奴めは顔中が凹だわえ。」彌「凹ならいいが、頬べたが凹んで、踏返しの馬蹄石といふもんだ。ハ、、、、、」ト例の悪口たら〳〵しやれてゐると、此の内奥座敷には近在の客三人ばかり、此の宿にゐつゞけし、歸りがけと見え、相方の女郎、この所まで送り來りしと見えて、別れの酒盛大騒ぎにて、此の宿のこうき節歌ふ聲、賑やかに聞ゆる。うた「菊にませがき結ひこめられて、今は忍ぶに忍ばれず チツテレ、トツテレ。」ト大騒ぎをやる故、北八、彌次郎奥の方を覗きみれば、一人の客の聲として、「コレ〳〵、太兵、杯はどうせるのぢや。」太「イヤ、仁兵の側にあらァず。」仁「ドレ、おれ拾はう。」太「改めていこしやれ。」仁「オト、、、、此様に受けてはとかうはあらまい。ソレ差そかい。」太「オットうけた、ひゆつとやりからかいて、これから門もつこう八戻らうまいか。但しは桝屋か丁字屋へ行かうまいか。」女郎いくの「何ぢやいし、アノ太兵さんはナア、醉ひなさるとナア、あの樣な事いうておぢやがナア、外へやります事はナア、ならまいわいナア。」

太「イヤ〳〵、かかる折から、橘屋で手形受取つた代物があるから、行かざならまい。」女郎「ムウ、さうかいし。」仁「さうとも〳〵。チツテレ、トツテレ。豫て手管とわしや知りながら、欺されて咲く室の梅。ハ、、、、。」ト此の内からしり馬二三疋、おつたて來り、此の茶屋の軒に繋ぎて、馬士共中庭より奥へ通り、「旦那方、お迎ひに參りました。」三人「御大儀御大儀。お名殘をしいが、これで別れざならまい。」女郎「久しぶりで、是れから又鳴海のおつるさんぢやおませんかいな。」太仁「ハ、、、、サア行かうまいか。」茶屋の女「御機嫌よう。」トそれ〴〵に挨拶するうち、三人の客はめい〳〵からしり馬に打乘り、暇乞して乘り出す。女郎送り出て、さま〴〵の酒落もあれども略す。彌次郎北八始終この體を見て、女郎買の、からしり馬で歸るもをかしいと、打笑ひながら、

三味線の駒にうち乘り歸るなりをかざき女郎しゆ買ひに來ぬれば

かくてふたりも此處を立ち出で、宿はづれの松葉川を打ちこえ、矢矧の橋にいたる。

らんかんは弓のごとくに反橋やこれも矢はぎの川にわたせば

それよりうたふ坂町、尾崎の鄕、今村の立場につく。茶屋のはゝ「名物砂糖餅、おめしなさりまァし。お休みなさりまァし〳〵。」北「オイ、この餅はいくらヅ、だ。」餅屋のていしゆ「三文でおざります。」北「こいつは安い。こちらの鶉燒はいくらだ。」ていしゆ「それも三文でおざります。」北「イヤこれは三文では高いやうだ。ナント御亭主、かうしなせえ。これを二文にまけてくんなせえ。其のかはりそちらの丸い餅は、四文に買ひやせう。」亭主、こいつは變ちきな事をいふと思へど、どちらにしても損のいかぬこと故、亭主「ハイようおざります。お取りなさりませ。」北八、煙草入から、錢二文取り出して、「四文あらば、丸いのを買はうと思つたが、二文あるから、この鶉燒にしやせう。」ト鶉燒をとつて、うちくらひながらゆく。彌「ハ、、、、こいつは北八でかした。さすがの亭主も、肝ばかり潰してゐやァがつた。」北「ナント、智慧は凄まじからう。」彌「へ、べらぼうめ。おれもその位な事をしかねるものか、ハ、、、、。」

僅かでも欲にはふけるうづらやき三文ばかりのちゑをふるひて

かく興じ笑ひつれて、西田街道より半里許り北の方に、名にし負ふ八ツ橋の舊跡を思ひて、

八ツ橋の古跡をとのむもわれ／＼がおよばぬ恥をかきつばたなれ

ほどなく池鯉鮒の驛に到る。池鯉鮒より鳴海へ二里半十二丁 馬士のう主「みやで泊ろか、お龜にしようかナア。たゞしや岡崎、よい女郎衆ナア。ドウ／＼。」彌「いめえましい、草鞋で足を痛めた。ちつとの間草履で行かう。モシ／＼、此の藁ざうりはいくらだね。」ていしゆ「アイ／＼、十六文でおます。」彌「こいつは安い。」ト、こゝの亭主、伊勢ものにあきなひ巧者なり。ていしゆ「アイ、お安うおますわいな。わたしとこの草履は、ひゆつと丈夫で、ねから切りやいたしませぬ。」北「ねからァ切れめえが、先の方から切れるだらう。」ていしゆ「イヤ、おはきなされては堪らまいが、しまつておきなさると何時までもおますわいな。」彌「さうだらう。そしてお前のとこの草履は、鼻緒があつて調法だ。」北「鼻緒のねえ草履がどこにあるものだ。」彌「何にしろ安いものだ。」ト吊しある草履を、引ききり取つて見て、「イヤ、この草履はちんばだわえ。かた／＼は大きくて、こつちらは小さいやうだ。コリヤア八文ヅヽにしちやア、大きな方は安いが、小さい方は高いものだ。ナント御亭主、片方の大きな方を九文に買ひやせうから、こちらを七文にまけてくんなせい。」ていしゆ「アイようおます。おめしなされ。」彌「なむさん、錢が足りない。一足買はうと思つたが、たつた七文ほつきやァねえから、アノこつちらのかた／＼の方ばかり買ひやせう。」北「ハヽヽヽ、こいつは大笑ひだ。おいらが眞似をしようと思つても、餅ならいゝが草履かた／＼が何になるものだ。」

ていしゆ「お左様でおます。一足お召しなさりませ　どうもかた／＼離しては上げられませんわいな」「ナニ片方は賣らねえか。さすが田舎だけ物が不自由だ。」北「エヽ、江戸だとつて、ナニ草履をかたかた賣るものがあるもんだ。」ていしゆ「何ならこれになさりませ。これぢやと一足で七文にして上げませうわいな。」彌「エヽ、馬の沓がはかれるものか。人じらしな。」北「一そく買ひな。お前かたつぽ買つて、どうするつもりだ。」彌「また先へ行つて、かたつぽ買はう。」ていしゆ「ハヽヽヽ、十四文にいたしませう。一足おめしなされ。」彌「きさま、とつくにさういへばいい。」トやう／＼の事にて草履をとゝのへ、草鞋をぬきすてて、はきかへ行く。かくて此の宿を打過ぎ、早くも八町なはて、さなけ明神をふし拜み、今岡村の立場にいたる。この處は、いもかはといふ麵類の名物、いたつて風味よしと聞きて、

名物のしるしなりけり往來の客をもつなぐいもかはの蕎麥

それよりあなふ村、落合村を過ぎ行きて、有松にいたり見れば、名にし負ふ絞の名物、いろ／＼の染地、家ごとにつるし飾りたてて、商ふ兩側の店より、旅人を見かけ、「お入り／＼。あなたお入り。名物有松しぼり、おめしなされ。サア／＼、これへ／＼、お入り／＼。」彌「エヽ、喧しい奴らだ。」

ほしいものありまつ染よ人の身のあぶらしぼりし金にかへても

北「ナント彌次さん、單衣でも買はねえか。」彌「おもいれ、見倒してやらうぢやァねえか。」北「よから

う。たんと買ふ顔をして、慰んでやらう」トあちこちを見廻す中、此の町のとつ端に、小店なれども、染地いろ／＼表につるしある内へ入り、彌「コレ、此の絞はいくらします」トいふに、此の内の亭主と見えて、將棊をさしてゐたるが、餘念なく有頂天となりて、ていしゆ「サァしまつた。時にお手は何ぢやいな。」彌「コレサ、こりやァいくらだといふに。」ト少し聲高にいふと、亭主肝をつぶして、ていしゆ「ハイ／＼、それかな。」彌「いくら／＼。」ていしゆ「カウト、あなた幾何だと仰しやる。そこでかやうに致そかい。」彌「エ、小じれつてえ。コレ賣らねえのか。値段はいくらだといふに。」ていしゆ「ハテさて喧しい人ぢや。そちらの方へ引返して、符帳を見せなされ。唯知れるのぢやないわの。」彌「こいつは飛んだ商人だ。符帳にウの字とヱの字が書いてある。」ていしゆ「オ、さうぢやあろ。カウト、三分五厘ぎれぢや。」彌「高い／＼。まけなせえ。」ていしゆ「ナニまけい。イヤならまい、此の下手將棊に。」將棊のあひて「次兵さん、マア商をしよまいか。あなた方が待つてござらつせる。」ていしゆ「よいわいの。とても、敵等はとのう買やしよまい。ハテ買ひたうても金銀はあらまい。ない筈ぢや。私が手に坐すぢやて。」彌「何だべらぼうめ。金銀があるまいと人を見くびつた事をいやァがる。あるから買はう。是れは褌だけでいくらだえ。」ていしゆ「なんぢや褌買はう。イヤぶしつけ千萬な。」彌「こいつ、おいらを嘲しやァがる。賣物買物に無躾もなにもいるものか。はなつたらしめが。」ト大きな聲する。亭主、はつと心づき、さう／＼將棊をやめて、「へイ／＼、是れは麁相申しました。何なと負けて上げませずに、おめし下されませ。」北「さういひなさりやァ、しこたま買

つて上げやすわ。彌次さん、お前おふくろや内儀様へのお土産には、あれがよからう。いくらだの。」ていしゅ「ヘイ、十四匁八分でおます。」彌「ソレ、そつちらのは。」ていしゅ「これは十五匁。」彌「もつといいのはねえか。」亭しゅ「ありますとも。ヘイ、これがなア二十一匁ヅヽ、こちらが二十匁、下のがナ十九匁ヅヽでおざります。」彌「もつとこれよりいいのが欲しい。」ていしゅ「イヤ、もう皆斯様な物でおざります。」彌「ムヽヽ、そんなら大事にしまつておきな。誰ぞが買ひやせう。わつちやァいつち初手に見ておいた、此の三分ぎれを手拭だけ、切つてくんなせえ。」ていしゅ「へいさやうかな。」ト肝を潰し、二尺五寸切つて出す。彌次郎、此の代をはらひて、こゝをたち出で、彌「とんだ奴らだ、既にいい三太郎にしようとしやァがつた。肝潰しな、ハヽヽ、時に大分道くさをした。ちと急いでやりかけよう。」トこれより少し道を早め行くほどに、はやくも鳴海の宿につきければ、「鳴海より宮へ一里半十二丁」

旅人のいそげば汗に鳴海がたこゝもしぼりの名物なれば

かく詠み興じて、田ばた橋をうち渡り、笠寺観音堂にいたる。笠を頂きたまふ木像なるゆゑ、この名ありとかや。

執著のなみだの雨に濡れじとや笠をめしたる観音の像

それよりとべ村、山ざき橋、仙人塚をうち過ぎ、漸く宮の宿に到りし頃は、「宮より桑名へ海上七里」

はや日暮前にて、棒端より家ごとに、客をとゞむる女の聲かしましし、女「あなた方ァ、お泊りぢやおませんか。お湯もちん〳〵沸いております。おあひ客はおません。お泊りなされませ〳〵。」彌「泊りはどこにしよう。錢屋か瓢箪屋か。」北「向うの内はなんだ、鍵屋か。」女「モシお泊りかな。」北「オイ泊りやせう。旅籠はいくらだ。」女「オホヽヽヽようおます。お泊りなさんせ。」北「何だいいとか。たゞで泊めるか。」彌「むしのいい。」ト笠を取つて入る。宿の亭主「お湯をあけうず。お足がよごれてなけらにや、すぐにお風呂へ御召しなされませ。」ト荷物を座敷へはこぶ。此のうち、彌次郎北八も草鞋をぬぎ、奥へ通る。女茶をもち來り「お茶あがりませ。」座頭のあんま「お療治をなされませぬか。」北「療治もしてえが、マァ腹がへつた。」彌「うどんでも食つて來や。こゝの名物だ。」あんま「さやうなら、のちに來ませず。」ト立つて行く。あとより二三人づれにて弓張提燈をともし、「ハイ、お泊りでおざりますか、是れは當驛のおんばこさま、手水鉢の建立、お心ざしをお頼みもうします。」彌「ハイ、北八そけへ上げてくりや。」北「是れは少しながら。」ト錢八文出してやると、帳にしるし、出て行く。入りかはりて、坊様が一人、出「ハイ、私は六十六部の石碑を建てます。お心もち次第、御施主につかつせえて下されませ。」彌「何だ。石塔の施主につけ。忌々しい事をいつてくる。ソレ持つて行きなせえ。」ト同じく八文はうり出してやる。入りかはりて此のうちの亭主、ひよつくり顔をいだせば、彌「エヽ、又八文か。貴様は何の建立だ。」ていしゆ「イヤ、明日はお舟でおざりますか。又佐屋まはりをなされますか。」北「すぐに爰から舟にしやせう。」彌「舟はいいが、おいらァどうも、舟ではなぜか小便

をするが怖くて、そしてねつから出ねえには困る。七里乗るといふもんだから、堪へてはゐられず、どうしたものだらう。佐屋へ廻らうか、ノウ北八。」ていしゆ「イヤ、それにはよいものをあげうず。さやうのお方には、私がいつも竹の筒を剪つてあげますから、それでお小川なされるがようおざります。」彌「そんなら、それをお頼み申しやす。」ていしゆ「ハイ〳〵、先づ御膳をあげう。」ト立つて行く。此の内、女膳を持つてくる。こゝにても色々あれども畧す。やがて膳もすみたる頃、先程の按摩來り、「旦那方、致しましよかいな。」彌「サアやらかしてくんなせえ。」トこれより彌次郎按摩にもませる。この内鄰座敷に泊り合はせし瞽女二人が、慰みに三味線を出して、伊勢音頭を唄ふ聲する。うた「花も移ろふあだ人の、上氣も戀といはしろの、結びふくさのときほどき。ハリサ、コリヤサ、よい〳〵よいとなア、ツテチレ〳〵。」北「イヤ、こいついい聲だ。ナント按摩さん、わしは踊が上手だ。おめへ目が見えると、あの唄で一つ踊つて見せてえもんだがな。」あんま「わしも好きだがなア、踊らつせる音を聞かアず。一つやらつしやらまいか。」北「やるはやらうが、賞めて貰はにやア張合がねえから、かうしよう、わしが踊りしまつた所で、おめへの頭をちよいと撫でようから、それをきつかけに、やんやアと賞めてくんな。よしかよしか。ソレをどるぞ。」となりのうた「とけぬおもひはふたつ箱、みつよついつも泊りぶね、それがくがいのゆきちがひ。ハリサ、コリヤサ。」ト三味線に合はせて、北八手を叩き、踊るまねをして、北「よい〳〵よいやさア。」ト踊りしまひ、座頭の頭を、ちよつと足にてなでると、あんま「ヤンヤア、えらい〳〵、ハ、、、。」北「なんともおもしろからう。も一つやらう

か。」又となりのうた「さす手ひく手にわしやどこまでも、浪のうきねの梶まくら。」北「よい〳〵〳〵よいやなア。」ト又足にて、座頭の頭をなでる。あんま「ヤンヤ〳〵。」北「ハ、、、、、おもしろえ〳〵。」ト此のうち宿の女、「お湯にお召しなされませ。」北「彌次さんもうしめへか。しめへなら湯にいりなせえ。按摩さんがをどりを賞めてくれた代りに、これからわつちも揉んでもらはう。」彌「ドレ、そんなら入つて來よう。」ト彌次郎は湯に入りに行く。後にて按摩は北八をもみにかゝり、按摩「時に旦那がたは、ちと當宿のおつるでもおよびなされ。」北「イヤ、それよりかァ、鄰の三味線は、こゝの娘か、何人だの。」あんま「あれは二三日前から、こゝの内に泊つてゐる瞽女でおますが、よい聲だなもし、併しまんだ、わしが甚句を旦那方へ聞かせたい。」北「コリヤよからう。やらかしねえ。」あんま「その代り私も賞手がなけらにや、張合がない。唄ひ了つたら、旦那賞めて下さるかな。」北「オツト承知々々。」あんま「ドレ、やりからかさう。」ト北八がつむりをもみながら拍子をとりて頭をぴしや〳〵。あんま「じヤジヤジヤン〳〵、エ、、、醉うた醉た〳〵五勺の酒に、壹合のんだらさま又よかろ。」ト唄ひさして、北八が耳のなかへぐつと指をつつこみ「こいつがさいぜん、われらがあたまを足蹴にひろいだ、はつつけやらうめ、かつたいやらうめ、うぬがよなやらうは、ろくではゆくまい、あげくのはてには、首でもつるだやろ。」トいひさして、耳の穴より指をぬけば、耳はボンとなる。あんま「やとさのぜ〳〵。」北八耳の穴をふさがれて、うぬがことを惡くいはれたをも知らず、北「ヤンヤ〳〵。」あんま「ジヤジヤジヤン〳〵。」ト拍子にかゝつて北八が頭を、ぴしやぴしやと叩く。北八顏をしかめて、「おもしろえ〳〵」あんま「も一つやろかいな。」

北「イヤ、もう御免だ。あたまがたまらぬ。」あんま「ハ、、、、えらうおもしろかつた。」此の内、彌次郎ふろより上り、このやうすをちらと見て、彌「をしやう、もつとやらかしねえ。」北「イヤ、おいらはもう湯にはひつて來よう。按摩さんもういゝによ。」トいひすてて風呂場へゆく。按摩は暇乞して歸ると、うちの女牀をとりに來り、蒲團を敷きて勝手へ行く。彌次郎ははやそのまゝ寢かける。此のうち、北八もふろばよりかへりて、北「オヤ、彌次さんもう寢かけたの。時におめへ、鄰座敷の代ものを見たか。飛んだ美しい瞽女だ。」彌「瞽女なら目があるめえ。」北「目はねえが、滿更ぢやァねえ。今湯からあがつて來る時、一人の瞽女めが、手水場にまごついてゐたから、小當りに當つておいた。なか／＼やほでねえ代物よ。」彌「ドレドレ。」トはひおき乘り出し襖の間からさし覗き、「ハ、ァ、後姿はなか／＼意氣な風俗だ。コリヤァこの儘ではおかれぬわえ。」北「イヤ、さうはならぬ。」トいひつゝ夜著を引きかぶり、心の内にはおのれ今に違ひかけてやらうと、わざと寢るふりにて横になると、ぢきに空鼾をかく。此の内となり座敷もひそまり、二人の瞽女もねた樣子。夜もしん／＼とふけ渡り、後夜の鐘「ゴオン／＼。」彌次郎そつと起き上り見れば北八はほんたうにねいりし樣子。襖をそつとあけて、鄰座敷へ入りみれば、ごぜ二人前後も知らずねいりばな。彌次郎ごぜの懷へはひらんとせしに、さすがは目のみえぬものとて用心きびしく、風呂敷包を兩手にしつかり抱へてねてゐるゆゑ、これが邪魔になりて入りにくく、彌次郎そろ／＼此の風呂敷包をとりのけようとすると、ごぜ目をさまし片手に包を抱へ、片手にて彌次郎が手をぐつととらへて、ごぜ「盜人よ／＼。お宿の衆／＼。」ト喚き散らされて、彌次郎はあてがちがひ、襦袢一ツの此のなりを、見つけられては業ざらしと、ごぜが手をたゝき放して、そう／＼にこなたの座敷へかへり、夜著をかぶり、そしらぬふりして寢てゐる。北八、とくより目をさまし、くつ／＼と笑つてゐると、此のうち勝手より、亭主「ごぜさま、どうさつせえました。」ごぜ「わしが此の抱へてゐる包を、いんま誰やらが取らうとしをりました。雨戸でもあいてあるか、見てくれなされ。」ていしゆ「イヤ、どこも開いてはゐをりま

せぬ。」ごぜ「それでも今の盗人は、どこから來なりましたらうな。」ていしゅ「ハ、ア、襖があいてある。モシ／＼、お鄰のお客様方、およつてござらつせるか。」彌「ア、ウ、ムニヤ／＼。」ていしゅ「ハ、ア、爰に落ちてあるは何ぢや。イヤ、褌ぢやさうな。モシお客様方、これはあなた方のではおざりませんか。」ト大きな聲するに、彌次郎はつと思ひ、そつと頭をあげて見れば、わが褌が、ごぜの枕元から、敷居越しに、わが枕元まで長くなつて落ちてゐる故、をかしさもをかしく、流行おれがのだともいはれず、もじ／＼してゐると北八、わざと意地わるく起きあがり、北「何だえ、さう／＼しい。褌がおちてあるとは、ドレ／＼それか。コリヤア彌次さんお前の褌ぢやァねえか。」彌「エ、、情ない事をぬかしやァがる。」ト北八が夜着の袖をひく。亭主もさてはと承知して、心の内にをかしく思ひながら、ていしゅ「イヤもう旅の事でおざりますから、お互にお氣をつけて、御用心なさるがよい。ごぜさま。もうおやすみなされ。」ごぜ「氣味がわるくて寐付かれませぬ。よう閉めて行つてくださりませ。」亭しゅ「さやうなら。」トそこらを立て廻して出て行く。彌次郎そつと手を延して褌をたぐり寄せる。北八をかしくふき出しながら、

瞽女どのにおもひこみしは是れもまた戀に目のなき人にこそあれ

すでに夜もいたく更けわたれば、みな／＼漸く一睡の夢をむすぶ。あかつきの風樹木を鳴らし、浪の音枕に響きて、つき出す鍾に驚き、目さめて見れば、はや明方の烏「カア／＼。」馬のいなゝき「ヒイーンヒイン。」長持人足の唄「坂はナア、てる／＼ナアエ、鈴鹿はくもるナアンアエ、どつこい／＼。」出ふねをよぶこゑ「ふねが出るヤアイ／＼。」此のときやど屋の女おこしに來り、「モシ、いんま一ばん舟でおます。御膳を上げましよ。」

彌「オイ〳〵、北八サアおきや。」ト二人はおきて、手水使ふうち、膳も出で、食ひしまひ、かれこれするうち、宿の亭主「お支度はようおざりますか。舟場へ御案内いたしましよ。」北「それは御苦勞。サア彌次さん、出掛けやせう。」トそこ〳〵に支度して、表のはうへ出かける。宿の女房、をんな「御機嫌よう。又おくだりに。」彌「アイ、お世話になりやした。」ト暇ごひして、舟場へゆく。亭主こゝまでおくり來り、「船頭しゆ、お二人様ぢや。賴みますぞ。」彌「時に忘れた。御亭主さん、昨夕お約束の、かの小便の竹の筒は。」ていしゆ「ホンニ、ちんと切らして置きましたに、ドリヤ取つてまゐりましよかい。」ト亭主かの竹の筒をとりに歸る。此の渡舟、七里の海上、一人前四十五文ヅヽ、其の外駄荷、乘物、皆それ〴〵に賃錢を拂ひ、舟に乘る。此の時亭主竹の筒を取つて來り、「サア〳〵、お客様そこへなげますぞ。」北「何だ火吹竹か。」彌「これをあてがつてナ、とやらかすのだ。よし〳〵。イヤ御亭主さん、大きにお世話。サアこれで大丈夫だ。ハヽヽヽヽ。」

おのづから祈らずとても神います宮のわたしは浪風もなし

かく祝しければ、乘合みな〳〵いさみたち、やがて、ふね乘り出して、順風に帆をあげ、海上を走ること矢のごとく、されど浪たひらかなれば、船中おもひ〳〵の雜談に、顎のかけがねもはづるゝばかり、高聲にわらひのゝしり行くほどに、あきなひぶね、幾艘となく漕ぎちがひて、「酒呑まつせんかいな、名物蒲燒のやきたて、團子よいかな。奈良漬で飯食はつせんかいな、〳〵。」彌「アヽ、よく寐たわ。いつの間にやら、がうぎに來たぞ。時に小便がもるやうだ。」ト宿屋の亭主がくれたる竹の筒を出し、こゝでこそと、前にあてがひ、小便を

すな、この竹の筒は火吹竹の如く、先の方に穴をあけたるなれば、舟の縁にもたせかけて、小便をするつもりの所、彌次郎の心には、穴のあいてあるには心つかず、尿筒のやうにおもひ、竹の筒へ小便をしこみて、後でうちあける事と心得、舟の中にて、すゞに竹の筒へしこみければ、先の穴より小便が流れ出て、船中小便だらけとなり、乗合みな〳〵肝を潰し、「コリヤ〳〵、何ぢやいな、水がえらう流れる。」のり合「誰か土瓶をうちこかいたさうな。ソレ〳〵、煙草入も紙入もびつしよりぢや。コリヤ堪らんわ。ハア お前小便ぢやな。」ト とがめられて、彌次郎、竹の筒を隱し所にうろたへて、まご〳〵する。北「エ、彌次さんどうしたものだ。おめへ小便をするなら、そけへ上つて、竹の筒の先のかを海へ出して、しこむのだわな。めつさうな船の中が小便だらけになつた。エ、汗ねえ〳〵。」彌「おれは又こゝでしこんで、後でぶちまけるのかと思つた。」のり合「イヤはや途方もない。コリヤア臭くてならんわい。船頭衆々々、もう敷物は外にはないか。」せんどう「誰ぢやぞい。小便をしたのは。船だま樣が穢れる。早くコレ拭かつせいな。」北「エエ氣のきかねえ人だ。」せんどう「エ、、ソレまだ竹の筒からおちる。それもほかしてしまはつせえな。」彌「イヤ、これはそつちへやらう、火吹竹にならうから。」北「エ、、おめへが小便したものを、ナニ火吹竹になるものだ。早く拭きなせえ。埒のあかぬ。」ト いぢめられて、彌次郎ふんどしをはづし、そこらを拭くうちに、北八はうすべりを引つくり返して、敷き直し北「サア〳〵これでいい。どなたもお坐りなせえ。」彌「コリア皆樣御免なせえ。飛んだ番狂はせをいたしやした。」ト 遂にない精氣かへりて、そこら取りかたづける。乗合みな〳〵苦笑して、だんまりでゐる。此の内早くも、船は桑名の岸につく。のり合「來たぞ〳〵。小便にこそぬれたれ、船はつゝがなく桑名へ來た。めでたい〳〵。」ト 皆々これより上りて、此のしゆくに、よろこびの酒汲みかはしぬ。

道中膝栗毛四編 終

膝栗毛五編序

歌人は居ながら名所をしり、雅人は行きて名所を探る。今年五篇目の膝栗毛を十返舎の主人心の手綱をかいくり〳〵くりかけ見れば、伊勢の海千尋の濱に深く穿ちて洒落を花なる貝盡し、古跡を温ねて新しき、趣向を見する筆のすさみに、予も寝ながら名所をしり馬、はねる顔にて序すること、是れ作者の需めに應じてとはうその皮、もとふもせぬに筆を採りしは、跡の一杯がすぎ田のむめの、香にひかれたるうかれ心、これも亦餘慶の仕事と謂はんか。

文化丙寅春　　　　亀山人蘭衣誌

附言幷凡例

予今年神無月二十日あまり、六日の朝思ひたちて、東海道に杖をはせ、伊勢路に赴き、内外の宮巡をして歸りしは、雪見月の五日になん。それよりして此の五編目の著述にかゝり、彫工机のもとにたえず、須臾も筆をおくまなし。然るにいづれの人の綴りけん、膝栗毛續編といへるもの、皇都の書肆より下したりとて、上總屋忠助なる人のもとより、予が方におこせたり。予是れを閲するに其の排設つゞまやかにして、滑稽もとも工みなり。をしむらくはかかる筆の文をもて、などて自立せざるこそ不審しけれ。そは名を索むる人に非ず、欲にはするの徒なるべき歟。されど予が爲の引札にして思はざるの幸甚なりき。此の故に今五編目にいたるまで、頓て見ん事を競ひ給へる人のあなりと、書肆の喜びは、ます／＼膝栗毛の尾に尾をひかんことを、おしはかれるにやおぼつかなし。

或人曰く、此の書初編より四編に及ぶまで、彌次郎兵衛北八なるものの、髮結月代をせし所を見ず。こは大江都を出で立ちしより以來、其の事なきはいかにぞや。予答へて曰く、こたび旅行の刻しば／＼その光景を見るに、風土人情の差別、方言のをかしみ、其の洩れたること、缺けたることゝ、算ふるに十指を出でたり。さればその足らざるを穿ち難じ給はるこそ、予が爲に幸ひなれば、取りあへず其の事をもて追加に出せり。

羇中飯盛おじやれの戯れは、卷中毎にほゞあらはして事ふりたれど、こたび作者の旅宿にて、實に夜這といへる事を、仕損じたることのあなれば、其の事をもて彌次郎兵衛北八が四日市泊りの趣向とす。

東海道追分までを上巻とし、其の餘伊勢路にかゝりて、事繁く記すに遑あらず、漸く山田に此の卷の筆を止めて、續編に妙見町の奇宿古市の遊樂、相の山の宮めぐり等をあらはし續けて出板す。

兼々聞及貴公才　一遍相逢親十回
探得神都神代穴　翩々乘膝栗毛來
右初逢十返舍一九生自勢州還戲賦以送

瀬　芳　園　艸

東海道中膝栗毛五編

十返舍一九著

宮重大根の太しくたてし宮柱は、ふろふきの熱田の神の慈眼す、七里のわたし浪ゆたかにして、來往の渡船難なく、桑名につきたる悅びの餘り、名物の燒蛤に酒汲みかはして、かの彌次郎兵衛北八なるもの、やがて爰を立ち出で辿り行く程に、此の頃旅人の唄ふを聞けば、「しぐれ蛤みやげにさんせ、宮のお龜が情所。ヤレコリヤ、よすレノ\よし。」馬士「コレ旦那衆、戻り馬乘らんか。」彌「よすしよし。」馬士「安いに、たんだ百五十でやらまいか。」彌「よすしよし。」北「しやうろく四文で乘るべいか。」馬士「そんならよすせよせ。」馬「ヒインノ\。」長くちにてそく「船はナア、追手に帆かけて走るナア、ホヽ はやくサア、熱田に泊りたやナアンナアエ。八兵衛どうした。馬でものんだか。何だかはねらア。どつこいノ\。」北「なんと彌次さん、何もなくさみだに、かうしようぢやアないか。お前の荷物とわしがのを一緒にして、一人がひつかついで、半日がはりに旦那と家來の仕打はどうだらう。」彌「コリヤおもしろい。それよからう。まづおいらから旦那をはじめるぞ。」北「そりやアいいが、今日はもう八

ッだから、七ッがはりにしやせう。勿論旦那と供のあしらひは、互に番狂はせなしにやらかしやせうぜ。」彌「知れた事よ。」トいひつゝ、あたりに竹一本を才覺して、彌次郎が荷物と北八が包を兩方に括りつけ、北「先づ年役におめへ旦那よ。おいらは上下といふもので、出かけよう。ナントよつぽど氣がきいてるだらう。」ト後から荷をかつかたげて、北「モシ旦那え。」彌「なんだ。」北「いい天氣でござります。」彌「オ、サ、風が凪いであつたかだ。」北「さやうでござります。」トかりに主從の如く、打語りつゝ行くほどに、早くも大ふく村安中村をうち過ぎて町や川にさしかゝれば、彌次郎兵衛とりあへず、

旅人を茶屋の暖簾に招かせてのぼりくだりをまちや川かな

かくうち興じて、なを村おふけ村にたどりつく。此のあたりも蛤の名物、旅人を見かけて、火鉢の灰をあふぎたてゝ、女「お入りなさりまァせ。諸白もお飯もござりまァす。お支度なさりまァせノ\。」かご「駕籠いかまいかいな。これから一里半の長町場ぢや。安うして召さぬかいな。」彌「イヤ、駕籠は入らぬ。」かご「あとの親方、旦那を乘せ申してくだんせ。もどりぢや。やすめに。」北「旦那はおひろひがお好きだ。」かご「さういはずと、モシ旦那安うしてやらまいかいな。」彌「安くてはいやだ。高くやるなら乘りやせう。」かご「そしたら高うして三百頂きましよかいな。」彌「嫌だノ\。もちつと高くやらねえか。」かご「ハア、まんだ安いなら三百五十で。」彌「壹貫五百ばかりなら乘つてやらうか。」かご「エ、めつさうな。わしどもも商賣冥利、そないにやつとは頂かれませぬ。せめて五百で召してくだんせんか

い。」彌「それでも安いからいやだ。」かご「ナァニやすいこんではあらまい。そしたら別れに七百くだんせ。」彌「イヤ／＼面倒だ。何かなし一貫五百よりまからぬ／＼。」かご「はてさて困つたもんぢや。それよりちつともまからまいか。」彌「まからぬ／＼。」かご「エ、何の事ぢや。駕籠舁の方から値ぎるといふは珍らしい。まゝよ棒組、一貫五百でやらまいかい。サ、旦那召しませ／＼。」彌「それでいいか。高く乗つてやる代りに、酒手をこつちへ貰はにやならぬが合點か。」かご「あげませぬとも。」彌「そんなら先へ行つて、一貫四百五十こつちへ酒手にさし引いて、このり五十の駕籠賃だが、それで承知かどうだ。」かご「エ、そんなこんであらず。とひやうもない。」彌「そこでまづ縁きりだ。ハヽヽヽ。」北「こいつは旦那ができた／＼。」

たび人をのせるつもりでかごかきの高い値段にかつがれにけり

かくて朝飼川松寺をうち過ぎ、富田の立場にいたりけるに、爰は殊に焼蛤の名物、両側に茶屋軒をならべ、往來を呼びたつる聲にひかれて、ちや屋に立寄り腰をかくると、女「お早うござりました。」ト茶二ツ汲んで來り、彌次郎へさし出す。彌次郎は旦那のつもり故、草鞋のまゝ茶屋の板の間に胡座をかき、彌「北八、支度はいいか。」ト北八も約束なれば、ともかくお指どりにて、北「宜しうござりませう。」コレ女中お飯を二ぜん出してくんな。」女「ハイ／＼、蛤でおあがりなされますか。」彌「イヤ箸で食ひやせう。」女「ホヽヽヽヽ。」ト箱にした臺のやうな物の中へ、蛤を並べ、松かさを掴みこみ、煽ぎたてて焼くうち、彌「コレ、酒はいい



尾陽
蛙白水

日坂川

今こそし
あき物の
さゝも
まさられくれ
真葛の日坂の
眺めうられて

仝
南亀蔓人



のがあるかの。しかし諸白ではなくて片白には困る。そして江戸ぢやァうめえ物の食ひあきしてゐる體だから、道中のものは根から食へぬ。馬に乘ればあぶなし駕籠はあたまがつかへる。店の者どもがお宿の駕籠をおつらせなさるが、ようござりますといひをつたが、なる程さうすればよかつた。不承して乘れば乘るものの、もう〳〵道中駕籠には厭きはてた。北八これからは歩いてゆかう。いい草履があらば買つてくりや。はきつけぬ草鞋で、コレ見や、あしぢうが豆だらけになつた。」北「ほんになア、今日はじめて草鞋をおはきなさつたから、古い垢ぎれが再發いたした。」彌「飛んだことをいふ。これはあんまり足が柔かだから、草鞋の紐が食ひこんだのだ。ヤ、時に蛤は。」女「ハイたゞ今あげます。」ト大層に燒蛤をつみ重ねて出し飯を二膳持つてきてすゑる。北「コウ彌次さん、見なせえ、色をとこは違つたもんだらう。コレこゝの娘がおめへの飯はちつと盛つて、おいらがのは、この通り山盛、餓鬼道の一里塚といふもんだ。ア、うめえ〳〵。」彌「へ、、、べらぼうめ。アノ娘が、杓子あたりのいいのを、惚れたのだと嬉しがるも可笑しい。ソリヤア手前を安くするのだわ。」北「なぜ〳〵。」彌「すべて此の街道では、上下の者や、供の者へは飯を山盛にして出すといふことだ。それだから誰が目にも、おれは旦那、手前は御供と見えるから。」北「ハアさうか。いめえましい。」彌「ハ、、、、蛤をもつとくんなせえ。」女「ハイハイ。」トまた燒きたての蛤、大皿にもつて出す。彌「お前の蛤なら、なほ甘からう。」ト女の尻をちよいとあたる。女「オホ、、、、

旦那様はようほたえてぢや。」北「おれもほたえよう。」ト同じく尻をつめりにかゝれば、女「コレよさんせ。すかぬ人さんぢや。」北「どうでもおいらをば、安くしやァがる。」トぶつ／＼小言をいふうち、あたりのてらの鐘がゴォン。北「女中、あれは何時だえ。」女「もう七ツでござります。」北「しめた／＼、約束の通り、是れからおれが旦那様だ。コリヤコリヤ彌次郎兵衛、おれはもう馬にも駕籠にも乗りあきた。是れからそろ／＼ひろひませう。いい草履を買つて来やれ。はきつけぬ草鞋で、コレ見や、豆中が足だらけだ。」彌「ばかをいふ。なるほど手めへは足だらけだ、一つの足がいくつにも割れてゐるから。」北「イヤ旦那に向つて手めへとは何のことだ。この荷物もそつちやへらう。」彌「ハテ現金な男だ。マァそつちにおきやれ。」北「イヤさうはならぬ。」トつきつけるを彌次郎兵衛つき戻すはずみに、蛤を盛つてある皿をひつくり返す拍子に、焼蛤が彌次郎兵衛の懐へひよいと入ると、彌「アツ、、、、蛤のつゆがこぼれて、アツ、、、、。」北「ドレ／＼。」ト懐に手をいれて蛤をつかまへ、「アツ、、、、。」ト取り落せば、蛤へその下へおちる。北八うろたへて、彌次郎が股引の上から金玉と蛤を一しよにつかむ。彌「ア、アツ、、、、コリヤどうする。金玉がこけらァ。」トいふうち、やう／＼股引の前のあはせめを明けると、蛤はぽつたり落ちる。北「ハ、、、、まづは御安産でおめでたい。」彌「しやれ所ぢやァねえ。飛んだ目にあつた。」女「お怪我はござりませぬか。」彌「怪我はせぬが、まだ腹の中がひり／＼する。」北「ハ、、、、。」

膏薬はまだ入れねども蛤のやけどにつけて詠むたはれ歌

それより此所を立ち出で、はつ村八幡を打過ぎ、七ツ家あくら川に至りし頃、四日市の宿引出で迎

へて、「是れはお早うございます。私お宿をお頼み申し上げます。」彌「わつちらァ帯屋へ行きやす。」宿引「イヤ今夕は、お大名様おふたかしらお泊りで、帯屋は兩家ともお差合でございますから、私かたにお泊り下さりませ。」トいふは譃なり。御小身様のお泊りで、下宿はわづかなれども、それをいひ立てに宿引わが方へ泊めんとする計畧なり。二人共ぼんくらなれば誠と思ひ、彌「そんなら貴様の所はいくらで泊める。」宿引「ハイ、それはいか様とも。」彌「ゆうべは宮の斧屋で泊つたが、とんだ丁寧にした。百五十で燭臺をつけて飯を食はせるか。そして酒も菓子も出したから、コリヤア默つてもゐられめえと、別に茶代を二百やる積りの處、やつはり遣らなんだから、大きに安かつた。貴様の所もそのつもりで馳走するがいい。」宿引「かしこまりました。」トだん／＼話しながら、打ちつれてゆくともなしに、四日市の棒端に至れば、宿引かけだして、「ザア是れでございます。コレお泊様ぢや。」やどの女房「お早うお著きなさいました。」ト挨拶のうち、二人は草鞋を解きながら見廻せば、至つてむさくろしき宿にて、入口に煤けかへつて、横にいがみたる膳棚と、壞れかゝりし竈のある内なり。亭主「今晩は、私方もこみやひました。お氣の毒ながら奥のお客と御一所になされて下さりませ。」彌「隨分よしさ。」女房「左様ならこれへ。」ト案内して奥の閒へつれ行く。あひ宿、田舎者二人あり。彌「御免なさい。」ゐなかもの「お早うござらつせえた。」北「ア、くたびれた。えいとこな。」女「すぐにお風呂にめしませ。御案内致しませう。」北「ドリヤお先へ參らう。」ト手拭をさげて湯に行く。此の内、十四五の前髪ふろしき包のはこをさげて、「おたばこは入りませぬか、楊枝はみがき、鼻紙はよろしうございますか。」田舎「久しかぶりで、吉田の大竹へのたりこんで、おやまに淺柄のたばこ貰ひをつたが、みな吸つてし

まうた。」今一人のゐなかもの「四文粉はあらまいか。」商人「イヤ、それはござりませぬ。是をあがつて御らうじませ。」田舍「ドレ〳〵、パツ〳〵〳〵。こりや根からたわいがない。こつちらのは如何ぢやい。」トきせるについですぱ〳〵。商人「それがようござりませう。」田舍「イヤこれも根から火がつかぬ。見やんせ。吸うてをるうち消やらかいた。」商人「ソレ、貴方の膝に燃えてをります。」田舍「ヤアコリヤ〳〵、大事の著物を燃やらかいた。フツ〳〵。イヤこないに膝の焦げる煙草はいらない。持つて行かんせ。」商人「ハイさやうなら。」ト小ごといひながら出て行く。北八湯より上りて、北「サア彌次さん、湯にはひらねえか。」女「あなたお召しなさりませ。」彌「イヤ大分あだな奴らがちらつくぜ。」北八、小聲にて、「今のやつを風呂場で、ちよいと契つて置きは早からうに。」彌「ソリヤほんたうにか、どうして〳〵。」北「己が湯にいつてゐる所へ、おぬるくはござりませぬかといつてうせ居つたから、すぐにそこで約束した。まだ一人いい年增が見えるから、お前湯に入つて待つてゐなせえ、大方そこへ來るには違へはねえから、そこで口をかけるがいい。」彌「承知々々ドレ入つて來やせう。」ト彌次郎は湯にいる。またひとり商人、「ハイ燒酎は入りませぬか、白酒あがりませぬか。」北「オツトその燒酎を少しくんな。オト、、、よし〳〵。」ト茶椀に注がせて錢を拂ひ、かの燒酎を足にふきかけ、「よし〳〵これで草臥がやすまるだらう。どなたも御免なさい。ヤアえいとこな。」ト横に寢かける。このうち、彌次郎は湯に入つて、をんなの來るのを待てども〳〵、一向に來らず。手足の指を一本々々にあらひて、しばらくかうち待ちぼうけとなり、あまり長湯をして湯氣にあがり、ふろばの破目にもたれて、ぐにやりとなりゐる。北八はあまりに彌次郎が長湯なるゆゑ、そつと風呂場へのぞきに來り、このてい

を見て、北「ヤァ／＼／＼。彌次さんどうしたノ＼。コリヤたいへんだ。」ト彌次郎がかほに水をふきかけ、「彌次さん／＼。」彌「ウ、／＼ウ、ウ、、、引。」北「いゝか／＼、どうしたのだ／＼。」彌「どうしたどころか、手前おれをえらい目にあはした。」北「なぜ／＼。」彌「湯に入りながら、もう女が來るか／＼と思つて、あんまり長湯をしたから。」北「それで湯氣にあがつたか。ハヽヽヽヽおゑのねえはなしだ。」彌「手前のお蔭でまだ足がよろ／＼する。」北「ハヽヽ、こいつは可笑しい。サアたちな。」トやう／＼に著物をきせ、北八が肩にひつかけ、座敷につれて歸ると、彌次郎そのまゝたふれて、さも力なささうに、「アヽ／＼、今少しはつきりした。」北「お前も飛んだものだ。いゝかげんに上ればいいに。」彌「イヤおれも手前のいつたとほり、おほかた女が來るだらうと、待つたほどに／＼、向うの流しにかの年増らしい奴が、何か洗つてゐるから、コレ脊中を流して下せえといつたら、ハイとこいて六十許りの婆ァめが、たわしを持つて來やァがつて、お脊中を洗ひませうかとぬかしやァがる。」北「こいつはいい。」ト夢中になり、寢腹這つてゐながら、足の指にて足あとの方に寢ころんでゐる田舍者の耳を引つぱつたり何かして持ちや遊びにする。此の田舍者とんだ氣のよい男にて、そつとわきの方へ頭をよけると、北「それからどうした。」彌「きいてくれ。おれも餘り業腹だから、いま／＼しい婆ァめだ。たわしをもつてどうしやァがるといつたら、ハイ／＼とぬかして引込んだが、やがて又庖丁の折れたのを持つてうしやァがつて、これでお脊中の垢をこそげ落して上げませうかと、おれを鍋か釜のやうに思つてゐやァがるさうな。忌々しい。」北「ハヽヽヽ、こいつはでかした／＼。」ト夢中になりて、又田舍者の頭を足に

こ探し廻し、耳をいぢりかけると堪へかねて北八が足を提へ、田舍「コレ／＼最前から默つてをれば、なんぜ此の足でわしが耳を嬲り物にさつせえた。」トいはれて北八心づき、北「ハイこれは御免なせえ。」田舍「イヽニヤ扠、御免では承知ならまいわい。それもこなさんが夢中にならつせえて、話しさつせる手そゝぶりにやァあらまい事でもないが、こつちで頭をよけようとすると、又足で探り廻いては嬲りものにさつせる。なんぜ人の頭を土足につつかけさつせえた。すまない／＼。」彌「ソリヤお氣の毒な事だ。御免なせえ。此のやうにお合宿するも他生の縁とやら、どうぞ料簡してやつて下さりませ。」田舍「こんたがさういはつせりやァ聞かまいものでもないが、餘り人を馬鹿にさつせるから。」北「イヤもう生醉だから、堪忍してくんなせえ。」田舍「イヤまんだこなさんは私どもを馬鹿にさつせる。最前から見てをるに酒も呑まないで、生醉とは猶承知ならまいわい。」北「はてし、わつちは酒を呑みやせぬが、此の足が生醉だから。」田舍「ナニ足が酒を呑むもんか。馬鹿アつくさつせるな。」北「おめへ大分あつくなるの。あしが醉つたといふは、先刻燒酎をふきかけたから、それに此の足めが醉ひくさつて、ソレ御覽じろ、ひよろり／＼、ソレまだお前の頭にからかはうとする。コリヤ／＼／＼。」田舍「ほんにこなさんの足は、わるい酒ぢや。」北「さやうさ。足は下戶の足がようございやす。わつちは誠に困りはてる。」田舍「そんならようござる。モウ寝まらまいか。女中々々寝所を頼みます。」ト此の中、女來り、それ／＼床をとり寝かすと、田舍者二人はそこへ轉けるや否や、前後も知らずすう／＼と高鼾。彌次郎、北八、この女どもにこあたり文句

もさま〴〵あれど、此のところと飯時の洒落まぐつとはしよる。女共は牀をとつてしまひ、勝手へ行くと、彌次郎小聲になりこ、「北八々々、實に手前さつきの女と約束をしたのか。」北「知れた事よ。併しこつちへは來ぬつもりだ。此の次の間の壁を傳はつて行くと、行き當つた所の襖をあけろ。そこに寢てゐるといひをつたから、今に行かねばならぬ。」彌「おれが先へ行つてやらう。」北「そねまずと早く寢なせえ。」ト後をふり向いて寐入る眞似する。彌次郎も北八が邪魔をしてやらんと、寐入りしふりして考へゐるうち、二人共草臥づかれにや、思はずすや〳〵と一寐入し、暫くすると、彌次郎ふつと目をさましみれば、行燈消えてまつくらがり、あたりもひつそり靜まりたるに、時分はよしと拔けがけし、北八に鼻あかせんとそつと起きたち、差足にて次の間に出で、かねて聞きおきたるとほり、さぐり〳〵壁を傳ひこゆくうち、彌次郎あまりに手を上へ延したるにや、つりたる棚板に手がつかへると、どうしたはずみやら、がたりといつて棚が外れたると見え、彌次郎兵衞大きに肝を潰し、「こいつは變ちきだ。あんまり己が手を延したから、棚板がはづれたさうな。手を放したら、落ちるであらうし、何かがらくたがしこたま上げてある樣子、落ちたらみんなが目を覺すだらう。こいつは難儀な目にあつた。」ト兩手を棚につつぱつて立つてゐるも、ねから詰らず。手を放せば棚がおちる、襦袢ひとつで寒くはなるし、コリヤ情ない目にあつた。どうぞ仕樣はないかと立ちはだかつて考へてゐるうち、かくとも知らず北八も目をさましおき出で、これもだん〳〵壁を傳ひてくる樣子。彌次郎それとすかし見て小聲にて、「北八々々。」北「誰だ、彌次さんだの。」彌「コリヤ靜かに靜かに。早く爰へ來てくれ。」北「何だ〳〵。」彌「これをちよつと持つてくれ。こゝだ〳〵。」北「ドレドレ。」ト手を延ばして、何かは知らずおち懸つた棚の下を押へると、彌次郎はそつと手を放し、北八に持たせて側へ外したるに、北八驚き、北「コリヤ〳〵、彌次さんどうするのだ。」ト手をはなさうとすると、上の棚がおちかゝる故、北「ヤア〳〵〳〵、コリヤなさけない目にあはせる。コレ〳〵彌次さんどこへゆく。ア、手がだるくなる。コリヤもうどうする〳〵。」トうろ〳〵してゐる。彌次郎は晴紛れ、そろ〳〵と先の方へゆき、腰壁を傳ひ

て勝手の方へ出るに、庭の向うに見ゆる有明の火影ほのかに、透して見れば、かの行き當りの襖の側に一人ねてゐる者ある故、扨こそ北八が約束の代物、しめこのうさぎと、いきなりに手をやつて探りみれば、こはいかに、石の如くひえ冰りし人倒れゐたり。さながら生きたる者とも見えず。これは不思議とこはごは撫で廻せば、荒菰にくるみてある故、彌次郎はつと驚き、俄にきみが悪くなつて、がたがたと震ひ出し、やうやう北八がゐる所へはひ戻り、歯の根もあはぬふるへ聲にて、彌「北八まだそこにか。」北「オヽ、彌次さん、お前どこへ行つた。コウ、ちよつとこゝへ。」彌「イヤそこ所ではない。彼處に死んだ者へ菰がかけてあるから、もう〳〵薄氣味の悪い内だ。」北「ヤヤ飛んだ事をいふ。」彌「イヤサほんたうに、アレ彼處に。ア、飛んだ内に泊り合はせた、恐ろしや恐ろしや。」トそう〳〵にはひ出しにげゆく。北「コレ〳〵〳〵、おれをこゝに置いてどうする。エヽ、それにとんだ事をいやァがつて、どうやら氣味が悪くなつた。コリヤ堪らぬ〳〵。」トがた〳〵震へる拍子に、手が緩みて上の棚ぐわら〳〵〳〵。こりや叶はぬと北八にげ出せしが、うろたへて戸惑ひをし、一向わからずまごつくうち、この物音に、勝手よりは亭主の聲として、行燈さげて出てくる様子。奥の間からは田舎者が出てくる體ゆゑ、いよ〳〵うろたへ、店の方へはひ出る。手もとに菰一枚ありしを幸ひ引き被りて息を殺しかゞみゐると、亭主あかりを持ち出で肝を潰し、「ヤァ〳〵〳〵、コリヤなんぜ棚がおちた。膳箱も何もらりこくたいになつた。」トそこら取りかたづけるうち、何事やらんと、田舎者二人ながらおき出で、「ヤレ、えらい音がせると思うた。道理こそ。コリヤ地藏さまのねきにまで箱が飛び散つてをるが、ヤァ〳〵〳〵、お鼻がぶつ缺けてしまうた。」今一人の田舎者「ドリヤ〳〵、ほんに地藏様の鼻アなくならかいた。そこらにや無いか。イヤ爰に寐てをるは誰ぢやい。」ト菰をまくれば、北八はつとばかり顔を上げて見るに、側には菰に包みし石地藏あり。さては彌次郎が死んだものゝありしといひしは、この石地藏ならんと思ひゐるうち、亭主北八を見て、「ヤァこなさんは、こちへ泊らせえたお客ぢやないか。それに今時分なんぜ此様な所に、コリヤ合點がいかんわ

い。どうぢややらこなさん達のなりそぶり、胡散臭いと思ひをつたが、若しやごまの灰ぢやないか何ぞまたしよしめるつもりか。あり様にいはつせえ。」田舍「イヤそればかしぢやござらない。大方こなさんが此の棚を落したもんで、なんぜ地藏樣のお鼻をうち缺いた。コリヤわしどもが村で、今度建立せる地藏樣ぢや。きんのふ石屋殿から受取つて、明日は早々長澤寺樣へ納めにやならぬが、お鼻がうちかけては持つて行かれぬ、元の通りまではつせへ。」これは此の近在の人々、村の御寺へ納める地藏なり。石屋より持つて歸る所、おそなはりしゆゑ、今宵は爰に泊りしと見えたり。てい主いよ〳〵やつきとなり、「お地藏樣のお鼻もお鼻ぢやが、お前方のお荷物なんぞなくなりはせないか。どうでも合點のいかぬ奴らぢや。有樣にいひをるまいか。」北「イヤ、わしらはそんな者ぢやァねえ。めつたな事をいひなさんな。素几帳面の旅人だ。」田舍「インネさうぢやあらまい。又それでなけらにやア、何故今時分そこに寢てるさつせえた。」北「イヤこれはの、手水に行くとつて。」亭主「たはけた事をつくさまい。手水場は座敷の緣先にあるものを。定めし宵にも行つたであらうに、そないな間似合くやせんわい。」北「さういはれちやァわつちも面目ないが、恥をいはにやァ理が聞えぬ。有體にいひやせう。」亭主「オ、サ、いはいで如何せるもんぢや。」北「イヤどうもお羞かしいが、今頃わつちがこゝにまごついて居つたといふ理は、ツイ夜這に來て、此の棚の落ちたに狼狽へたのでござりやす。」田舍「ナニ夜這に來た。イヤはや、こなさんはたはけた者ぢや。どこの國にか、石地藏樣の所へ夜這に來て、

どうせるつもりぢや。」亭主「いへばいふほど碌な事はぬかしをらぬ。」北「コリヤとんだ災難にあふことだ。彌次さん〳〵。」トよび立てる。先刻より彌次郎は立聞して、筋をよりゐたりけるが、よい時分と立出で、彌「コリヤアどなたもお氣の毒な。ありやアわつちが受合ふ。胡亂な者ぢやァござりやァせぬ。料簡してやつてくんなせえ。又地藏樣の鼻とやらが缺けたといひなさるが、どうぞわつちに免じて、後ではどうとも致しやせう。」トいろ〳〵ちやらくらと斷りをいひ散らし、亭主も今はせん方なく、さながら惡者とも見えぬ手あひ、一通りはいつたものの今は納得して濟ましければ、

はひかけし地藏の顏も三度笠またかぶりたるしゆびのわるさよ

かく即吟の彌次郎兵衞が狂歌に、おの〳〵どつと笑ひを催し、漸ういさくさ收まりけるにぞ、未だ夜の明くるには程もあらんと、めい〳〵寢所に入りたるが、暫くありて、はや一番鷄の告げ渡る聲々、馬の嘶き表に聞え、彌次郎兵衞北八急ぎおき出でて、支度とゝのへ、軈て此の宿をたち出づるとて、

やう〳〵と東海道もこれからははなのみやこへ四日市なり

それより濱田村を打過ぎ、赤堀にさし掛りたるに、往來殊に賑はしく、男女大勢こゝかしこに集まりたるは何事にやと、彌次郎兵衞北八も片寄り行きつゝ、ある親仁に向ひて、彌「モシ〳〵、何でござりやす。」おやぢ「あれ見さつせえ。」北「喧嘩でもござりやすか。」おやぢ「インネ、天蓋寺の蛸藥師さまが桑名へ開帳に行かしやるので、今爰を通らつせるから。」彌「ハ、ア、なる程向うへ見える〳〵。」ト此の

内だん〳〵人足繁くなり、講中とおぼしく、眞先に村の名を染めたる幟をおし立て、いづれも大音にて、から中「なアまアだア〳〵。」北「蛸藥師樣ァゆでだこぢやアねえ。なまだと見える。」から中「なアまアだア。」彌「幟を持つて行く奴のつらァ見さつし。智慧のねえ顏だぜ。」から中「お賽錢はこれへ〳〵。是れは海中より芋畑へ出現したまふ所の天蓋寺蛸藥師如來。御信心の方は、おこゝろもち次第あげさつしやりませう。サア〳〵お心もちはようござりますかな。」

北「今朝程は中かさで三ぜんほど食べました。」彌「ソリヤ蛸どのがござつた〳〵。」ト此の内、御厨子に入れたる藥師如來、大勢にてかつぎ通る。後より天蓋寺の和尚、乗物にて來ると、こゝかしこに集まりゐる婆嚊共、十念を願ひける。わかたう「お十念〳〵。」トいふと乗物を下す。若黨駕籠の戸を引きあくれば、和尚はゆで蛸の如きあから顔にて、大痘痕髭だらけのでつくり和尚、さもしかつべらしく、「なむあみ。」みな〳〵「なむあみ。」をしやう「なむあみ。」みな〳〵「なむあみ。」和尚なむあみとだん〳〵唱へ、十念のしまひに、どうしたはずみやら、鼻の穴がむづ〳〵として、をしやう「ハアくつしやみ。」トいふ。皆々十念の後ゆゑ、これも口眞似する如く心得、みな〳〵「ハアくつしやみ。」をしやう小ごゑにて「糞をくらへ。」みな〳〵「糞をくらへ。」彌「ハヽヽヽ、飛んだお十念だ。アノ和尚は、くつしやみから長老だハヽヽヽ。」から中「なアまアだア〳〵。」トさゞめき立ち行き過ぎる。彌次郎北八はをかしく後を見送りながら、

十念を申しながらのくつさめはあつたら口に風をひかせし

かく詠みすてゝうち興じ行くほどに、早くも追分にいたる。こゝの茶屋、饅頭の名物あり。ちや屋女「お休みなさりまアせ。名ぶつ饅頭のぬくといのをあがりまアせ。お雑煮もござりまアす。」北「右側

の娘がうつくしいの」彌「かぎやの中だよくあらも愛きやうらしい」ト茶屋に入り、女「お茶ァあがりませ」彌「饅頭もやらかして見よう」女「今あげませう」トやがて盆にもつて來る。このうち琴平參りと見える、ぬのこの上に白き單衣の半纏を引つぱりたる男、同じくこの茶屋に休み、雜煮餅をくひ懸る。彌次郎饅頭をくひしまひ、彌「もつとやらうか。いくらでも入るやうだ」北「イヤ、おめへも雨風胴亂だ。いゝ加減にしなせえし」こんぴら「あなた方ァお江戸かな」北「さやうさ」こんぴら「私もお江戸へ行た時、本町の鳥飼の饅頭をかけどくして、二十八食つた事がござりましたが、また格別なものぢや」北「鳥飼はわつちらが町内だから、毎日茶うけに五六十ヅヽは食ひやす」こんぴら「それはえらいお好きぢや。私も餅好きで、御らうじませ、此の雜煮を息なし五膳食べました」彌「わつちやァ今こゝの饅頭を十四五も食つたらうか、まだその位はいけるだらう。根から食ひ足らぬやうだわえ」こんぴら「イヤ、しかしわる甘いものは、もうそのやうには上られますまい。十四五も上りやァ關の山だ」彌「ナニまだ食へやす」こんぴら「どうして／＼、あなた、口ではさうおつしやるが、その樣に食へぬものぢやて」彌「ナニ食へぬ事があるものだ。しかし費えだから食ひやせぬが、誰ぞ食はせるとまだまだいくらでも入りやす」こんぴら「コレハおもしろい。モシ無躾ながら、何と私がお振舞ひ申しませう。もうそれだけあがつて御覽じませぬか」彌「食ひやせうとも」こんぴら「もしあがらぬと、あなたのお倒れぢやがようござりますか」彌「そりや知れたことさ」ト勝つにのつて饅頭を取りよせ、食ひかゝりしが、十許り食つて、後はもう喉に出る

どなれど、おのれ琴平鼻あかせてやらんと、むりに押込み皆食つてしまふ。こんぴら「コリヤたまらぬ。えらい〳〵。もう〳〵私は叶ひませぬ。」彌「おめへもやらかして見なせえ。こんな小さなものはいくらでも食はれる。」こんぴら「イヤさうは參りませぬ。しかしわたくしもあまり殘念な。十ばかり食べてみませう。」彌「ナニ二十ぐらゐ、二十食ひなせえ。その代り一つものこさず食ひなすつたならば、饅頭の代は勿論、外に百文琴平樣へお初穗をあげやせう。」こんぴら「そりや有り難い。てんぽのかはやつて見ませう。」ト饅頭二十取りよせ、唯もじ〳〵と見てばかりゐたりけるが、軈て食ひかかると、ぼつか〳〵十ばかり食つてしまひ、後はいやさうな顏つきにて、やう〳〵と殘らず食つてしまふ。彌次郎兵衛はあてが違ひ、彌「コリヤ恐れる〳〵。」こんぴら「お約束のとほり、饅頭代はさし引いてお初穗の百文下さりませ。」彌「今あげやせう。しかしあんまり見ごとだから、もう二十食ひなせえ。今度はお初穗三百文あげやせう。そのかはり食はねえと、こつちへ二百文取りつこだが、どうだ〳〵。」こんぴら「おもしろい〳〵。何も慾徳、腹のさけるまでやつて見ませう。」彌「サア〳〵今度は現錢だ。お前も二百そこへ出しておきな。」ト彌次郎三百文をつきだし、何でも今取られたお初穗の百文に、利をつけて取る氣になり、よもやもう食はれめえと思ひこんで、饅頭を又々二十取寄せ、琴平へすゝめるや否や、この度は何のくもなく忽ち二十食つてしまひ、手早くかの三百文を着服して、こんぴら「これはありがたい。饅頭の代も宜しうお頼み申します。ハヽヽヽヽ、思ひがけないおさうさに預りました。ハイゆるりとこれに。」トおみき箱をせなに負ひ、後をも見ずして出て行きたるに、彌次郎は呆れはててゐる。北「ハヽヽヽヽ、大方こんな事にならうと思つた。」彌「いまいましい目にあはしやァがつた。はじめの百が惜しくなつて、うはのりをした。業腹な。」ト此の内下の方

より駕籠かき
らぶら来りて、「旦那方はお駕籠はいらしやりませぬか。」弥「駕籠所ぢやァねえ。偉い目にあつた。饅頭の食ひごつこをして、錢三百唯取られた。」かごかき「ハヽァ今の琴平めぢやな。てきめはあないな風をして歩きをるが、アリヤ大津の釜七といふ偉い手品使ひぢやげな。こんぢうも坂の下で餅の喰ひくらでヒト八とやら食つたと見せて、錢は人に拂はせ、餅をば皆袂へ淡へこんでうせをつたといふ事ぢやが、旦那も一杯はめられさつせえたの、ハヽヽヽ。」此の話のうち、伊勢参りの子供二人、饅頭を三ッ四ツづゝ手に持ちて食ひながら、この門口に來りて、「ハイ旦那さま、ぬけまゐりに御報謝。」北「コレ手前たちやァ、その饅頭を誰に貰つた。」いせ参り「ハイ、コリヤこの後で、琴平参りの人が、袂から出してくれました。」弥「エヽ、そんならあいつめが食つたと見せやァがつて、おいらを眩惑しやァがつたか、いまいましい。ほつかけて打ちのめさうか。」北「いいはな。おいらも神まゐりだ。堪忍してやりなせえ。皆こつちが間抜だからよ。ハヽヽヽ。」弥「それだとつて餘り業がにえかへる。」北「ゆうべの泊りでおれをえらい目に合はせた、その報いだと思ひなせえ、ほんにいい業さらしだ。」

盗人に追分なれやまんぢうのあんのほかなる初穂とられて

弥「エヽ、おもしろくもねえ。しやれやんな。モシ／＼饅頭代はいくらだね。」女「ハイ／＼残らずしめて貳百参拾参文でござります。」弥「せうことがねえ。」トふしやう／＼錢を拂ふと、かごかき「旦那、まん直しに安く召し

てくださりませ。」彌「いや／＼。」かごかき「酒手で参りませう。」彌「きさま酒を呑むか。」かご「ハイ酒はすきで一升酒を下さります。」北「また酒の飲みつくらしようと思つてか。もう嫌だ／＼。サア北八出かけよう。」トこれより伊勢参宮のみちへはひる。神風や伊勢と都の分れ道なる追分の立場より、左の方の町をはなれて野道をたどり行く程に、向うより来る農行の馬に横乗りしたる男、甲張聲にて、うた「見てもぬくとさうなヨ、お方とねたりやナア、手おり布子の一枚、ねつこに、つんぬけたア、エ、、、、。」彌「コウ見さつし。アノ向うから乗つてくる馬士を降して見せようか。」ト駒差をぐつとぬき出してさし、合羽の袖を前の方へ折りて、刀の柄に持ち添へたる體に見せかけてゆくと、馬士やがて馬よりおりて行く。彌「ナントどうだ／＼。」又向うより横乗りの馬士「晩のとまりにヨ、いことてやめたナア、なァぜいきやらぬ、裸でおかにあはりよかえナア、、、エ。」彌「こいつも降してやらう。エヘン。」馬士「シツ／＼。」ト俄に狼狽へおりて行き過ぎる。彌「北八、どうだ奇妙か。」北「二本ざしを見ると乗打のできねえこたア、皆知つてゐらア。」彌「それだからよ。おれを侍だと思ひをつて。」北「ばかアいふぜ。あとを見なせえ侍が二人くるから。」彌「エ、ほんにか。」トふりかへる拍子に、このお侍にばつたり。こ「ハイこれは御免なさいやし。神戸へはもうどれ程ござりやすな。」此の侍衆は、此邊の郷士と見え、此の「ソレ向の堤からつつとそらへ上らせると、もう半道もあらずにな。」彌「ハイ有り難うござりやす。」北「堤から空へ上れたア何の事だ。蝮が天上しやァしめえし。ハ、、、、。時にこの川は何といふ川だ。」はしばん「ハイ橋錢が貳文ヅ、出ます。

この川は宇都部川といひます。」彌「ソレ貳文ヅヽ、四文よ。」

拔參りならばぶさをもうつべ川わたしの錢もかりばしにして

それより高岡川をうち渡り、早くも神戸の宿にいたる。入口に寶珠山火除地藏堂あり。

安穩に火よけ地藏の守るらん夏のあつさも冬の神戸も

かくてこの宿はづれなる茶みせに休みゐたるに、馬士「モシ、おまいがたァ馬に乘つてくだんせんか。」彌「いかさま、戻りなら乘るべい。」馬士「上野までもどる馬ぢやわいの。荷をつけて二百五十くだんせ。」北「二寶荒神で百五十やるべい。」馬士「今日は枠をもてこんわいの、爰から上野まで三里の所ぢや。白子へ一里半代りやつて乘つて行かんせ。」彌「二人のられにやァ嫌だ。」馬士「そしたらお二人共馬の鞍へ括しつけて行くまいか。此の繩でしめりや、氣遣ひはないがな。」北「飛んだ事をいふ。それぢやァ煙草ものまれぬ。」彌「それなら代り〳〵乘らうが、百五十でやるか。」馬士「まゝよかし。やらかしましよ。」

トむまの相談できて、二人の荷をつけ、此所よりまづ北八が乘つて出かける。彌「おらァそろ〳〵先へ行くぞ。ソレ北八、右のはうへかしぐやうだ。」馬「ヒイン〳〵。」鈴の音「しやん〳〵〳〵。」此の内向うより來る男、紺縞のせんだくしたる引廻しを著て、草履ばき錢一貫許り、さしこのふるき風呂敷に包み肩に引掛け、けにて來り、この馬士を見つけて、「ヒヤア、主ァ上野の長太ぢやないか。今、のしが所へ行た戻りぢや。えい所で行きあうた。」馬かた長太「ハァ權平次樣かいな。コリヤさて、わしや面目がないがな。」ごん「あろまい〳〵。あ

ろ筈がないわい。晦日々々にいこす筈を、まんだ鐚一文もいこさんがな。どうしさるのぢや。ソレ聞こわい。」馬士「マア／＼こちへ來て下んせ。」此の馬士借金の斷りと見えて、かの男を目當りのよい處へ伴ない、己も土手にいう／＼と腰うちかけて、「そないに業煮やらかいて下んすな。マア爰へかけさんせ。イヤそこのねきには犬の糞がある。今日おいでると知りをつたら掃除しておこもの。コリヤ／＼權平樣へ茶なとあげんか、酒買うて來いといふ所ぢやが、こゝは大道中でそれもでけぬくい。」北「コリヤどうする。早くやらぬか。」馬士「ハテせはしない。ちと待たんせ。いんま大事のお客がある。さてマア聞いて下んせ。去年の冬から内の嬶めが病氣を煩ひをつて、がき共にはせちがはれる、雜役にさへ出やせんものを、何ぢやろとかうして下んせ、四五日の内には、ひゆつとこちから持ていこがな。」ごん「イヤ承知ならんわい。其樣にいうても、よう戻しやしよまいがな。大事無い／＼。もう三年越といふもの貸した錢ぢや、利に利がくつて二十貫餘りといふもんぢやもの。いこすな／＼。その代り、あの馬をとていこかい。ハテまさかの時は、主が馬をわたそと、證文に書いたぢやないか。そしたら言分ありやしよまいがな。サア／＼もし、馬のうへな旦那さま、いんま聞かんす通りぢや。借金の代りに請取る馬ぢや。どうぞ爰から下りさんせ。氣の毒ながら。」北「ハア、おいらも先刻にからじれつたくてならなんだ。ひよんな馬にのり合はせたは、こつちの不仕合。しかしまだ錢はやらず、是れまで乘つたを德にして、ドレおりて行きやせうか。」トかの權平に口

を取らせて、馬からおりると馬士かけより、「モシ旦那、お前がおりてはこの馬を取られる。マァ乘つてゐて下んせ。」ごん「イヤならんわいの。」馬士「ハテ、どないにもするわいの、旦那をおろしては氣の毒な。サァ／＼召して下んせ。」北「又乘るのか、しつかり頼むぞ。」ト北八又馬にのれば權平やつきとなりて ごん「コリヤ／＼長太、どうしさるのぢや。旦那おりて下んせ。」北「エ、又おろすのか。イヤ貴様たちやァ己をいいちやうさいばうにする。おろしたり上げたり、足も腰もくたびれはてた。」ごん「それぢやてわしが馬ぢや。どうぞかしおりて下んせ。」北「エ、面倒だ。」ト小じれが來て、バつと飛びおりる 馬士「はて扨おりさんせずとよいがな。コレ權平様かうして下んせ、わしも途中ぢやしよことがない。せめて内へいぬまで待つて下んせ。その代り、こゝでこのぬのこを渡すに。」ごん「そしたら往んでわけ付けるか。」馬士「もうよいわい。サァ旦那めさぬかい。」北「ナニまた乘れか。もう堪忍してくれ。おらァこれから歩いて行かう。何なら少々は錢を出しても、乘ることァ嫌だ。」馬士「さういはんせずと乘つて下んせ。もうよいがな。サァ／＼。」ト馬の口を取りてすゝむる故、北八またしかたなく馬に乘れば、權平「サァ約束の布子ぬごまいか。」馬士「イヤ、其様にはいうたものの、これも内へ往ぬまで待つて下んせ。」ごん「イヤ、己もう料簡ならんわい。サァ／＼旦那又おりて下んせ。」北「エ、この唐人めらァ、又おりろとぬかしやァがるか。もう嫌だ。サァ早くやらねえか。どうしやァがるのだ。」馬士「旦那さうはかいの、おりずとよいに。」ごん「イヤおりずとえいとは何でぬかす。」ト眞黒になり、馬に取付きにかゝる所を、馬士つきのけて、馬の尻を

思ふさま叩き立てると、馬は一散にかけ出せば、北八うへにて眞蒼になり、大聲あげて、「ヤアイ／＼たすけてくれ。コリヤどうする／＼。」ごん「馬をにがしてはならん。オヽイ／＼。」ト おつかける。北八は後生大事に、馬の鞍に取りつきても、馬は闇雲に走るゆゑ、北八飛びおりようとして、鞍の縄に足がひつかゝり、まつ逆様におちて腰のほねをうち、「ア、いたい／＼。誰ぞきてくれ。アイタヽヽ。」ト 獨りもがきて苦しむ處に、馬士一散にかけつけ來り、「モシ旦那、お怪我はないかな。ドリヤ／＼。」ト 手を取りて引き起すうち、權平は馬を捕へんとかけぬける。馬方これを見てさうはさせぬと、北八に構はずかけだして行く。北「オヽイ待ちあがれ。おれをばひどい目にあはしやァがつた。」ト 小言をいひながらおき上り、腹はたてどもせん方なく／＼、おつかけんには足腰が痛み、やう／＼の事にて踏みしめ踏みしめ、そろ／＼とたどり行きつゝ、

借錢をおうたる馬にのりあはせひんすりやどんとおとされにけり

ゆく程なく矢ばせ村といふに到る。彌次郎兵衛は神戸の宿はづれより先へ來たるが、かの馬のいさくさをば露知らず、餘程先へなりたるを不思議に思ひ、こゝに待ち合はせゐたりけるが、それを見るより、彌「オヤ／＼、北八そのなりはどうしたのだ。」北「イヤもう、話にもならぬ飛んだ目にあつた。」ト 最前よりの一伍一什を話せば、彌次郎をかしく、幸ひこの所は、かまくらの權五郎が古跡ありと聞きて、彌次郎兵衛とりあへず、

權五郎ならねど馬士のいつさんにおつかけてゆくかけとりの海

それより玉垣をうち過ぎ、白子の町にいたり、福徳天王をふし拜みつゝ、子安觀音の別れ道にて、

かぜをはらむ沖の白帆はくわん音の加護にやす／＼海わたるらん

この宿を過ぎて礒山といへるに著く。此所に吹矢のいろ〳〵飾りつけたる小見世の親仁、往來を見かけて、「サア〳〵お慰みにやてかんせ。外題は忠臣藏十一段續き。ソレ吹かんせヤレ吹かんせ。お當てなさると忽ち變る、新板の上細工はこれぢや〳〵。」北「ハヽアなんだ、勘平おかる、魂膽夢の枕、イヤこいつやらかして見よう。」ト吹矢筒に矢を入れて、フ、、、引。カチリガツタリ。北「何だ、ハアえらい松茸が出た。コリヤ可笑しいハヽヽヽ。與一兵衛子故の闇の夜は何が出るだらう。フツ〳〵フヽヽヽ引カチリガサ〳〵〳〵〳〵ヒヤア、みこし入道ハヽヽヽ。向うのは何だ。北八其方へ寄りや。」ト引きのける拍子に足元に寐てゐたりし犬の足をふむ。犬「キヤアン〳〵。」彌「この畜生め。」ト吹矢の筒にてくらはしに懸る。犬はワンといつて噛みつく。彌「ア痛タヽヽうぬ打殺すぞ。」ト追掛くるはずみに、どつさりと轉げたそばにおいてあるは煙草入。彌「轉んでも損はいかぬ。こゝに煙草入が。」ト拾ひにかかると、向側にゐる子供が絲をひくと、煙草いれはする〳〵〳〵。彌「エヽいま〳〵しい。一番はバヽらかしやアがつた。」子供「おはうよの、ワハハヽヽ。」北「こいつはいゝ業さらしだ。サア行きやせう。」ト吹矢の錢を拂ひ、出かける。向うに又きせる一本おちてあるゆゑ、北「ソレ彌次さん、又拾はねえか。」彌「イヤもう、その手はくはぬ。アレあとからくる親仁が拾ひをるだらう。」ト行き過ぎて振返り見れば、後より來る親仁、かのきせるを拾ひて懐に押込み、さつ〳〵と行きすぎる。彌「ハテ、騙しでもなかつたさうな。」北「ハヽヽヽ、お前豪氣にまんがわるいぜ。」ト打笑ひつゝ行く程に、やがて上野の宿にいたる。爰に此のあたりの人と見え、羽織はつちにて、小野郎を供につれたる男、後より來りて彌次郎兵衛に近づきて、「一卒爾ながら、あなた方アお江戸でござりますか。」彌「アイ、左様さ。」かの男「私は白子の先から、あなた

方のお後について參じたが、道々の御狂詠を承りまして、及ばずながら感心いたしました。おもしろい事でござります。」彌「ナニサ、皆出はうだいでござりやす。」男「イヤ驚き入りました。先達てお江戸の尚左堂俊満先生など、當地へお出でござりました。」彌「ハアなる程、さやう／＼。」男「貴方の御狂名は。」彌「わつちやア十返舍一九と申しやす。」男「ハ、ア、御高名うけたまはり及びました。十返舍先生でござりますか。わたくし南瓜の胡麻汁と申します。さて／＼よい所でお目にかゝりました。此の度は御參宮でござりますか。」彌「左様さ。かの膝栗毛と申す著述の事について、わざ／＼出かけました。」ごま汁「いかさま、あれは御妙作でござります。是れへお越しなさる道すがらも、吉田、岡崎、名古屋邊、御連中方、御出會でござりましたらう。」彌「イヤ東海道は宿々殘らず立寄る所がござれども、參ると引止められまして、饗應にあひまするが氣の毒でござるから、皆直通りに致しやした。それ故御覽の通り、態と麁服を著致して、矢張道者の旅行同様に、心安く何でも氣任せに風雅を第一と出かけました。」ごま汁「それはお樂しみでござります。私宅は雲津でござりますが、何卒お供致したい。」彌「思召し有り難い。」ごま汁「實に御珍客、近所の社中共へもお引合はせ申したい。何れ御一宿をお願ひ申しませう。マア／＼不思議な御縁でよい所でお目に懸つた。時に爰が小川と申す所、饅頭の名物、一服上りませんか。」彌「イヤ饅頭には懲りはてた。すぐに參りませう。」ト打連れて此の所をゆきすぐるとて、

から尻のうまい名代をたび人に食ひつかせんと賣れるまんぢう

これより行く程なく、津の町に到る。前に高田の御堂、右の方に見ゆる、石井殿といふこれなり

おまな板なほしに鯉のひれふるはこれ佐川姫が石井殿かも

津の入口、左の方に如意輪觀音堂あり。又かうの阿彌陀といへるもあり。此所は上方筋より參宮の人おちあふ所にて、往來ことに賑はしく、中にも都方の若き人々、小袖の上に揃ひの單衣を引つはり、つゞら馬を引きながら、うたふ「チ、、、チン／＼エイ、、、引 ござれ都の名所見せん。祇園清水やれ音羽山。ヤア、とこなアヨウいやさア、ありややこりやや、コノなんでもせエ、、、引、チ、、、チンチンエイ、、、引 おちしゆの櫻に幕うちまはし、霞がくれにものおもはする。ヤアとこなアコウいやさア、ありややこりやや、コノなんでもせエ引。」彌「コウ、北八見や、がうぎに美しいたぼが見える。」ごま汁「アリヤみな京都のしゆぢや。あないに立派にしてお出やつても、ねから錢はつかやせんがな。」京の人「御無心ながら、火一つ借しておくれんか。」ごま汁「サア／＼おつけなさい。」トくはへた煙管をさし出せば、京の人、吸ひつけにかゝり、京「パツ／＼／＼。」ごま汁「まんだつかんかいな。」京「パツ／＼／＼。」ごま汁「何ぢや、お前の煙管にや煙草がついでないがな。ハヽア聞えた。吸ひつける振して人の煙草をのむのぢやな。モよさんせ／＼。ノウお江戸の先生、京の衆は、あないに吝いのねつこぢやわいの。ハヽヽヽ。とさに

先生、もう一ぷく下さりませ。」彌「京のものを吝いといふが、お前も先にから、わしが煙草ばかり呑んでゐる。」ごま「イヤ、私は煙草入を持ちやせんもの。」彌「忘れて出なさつたのか。」ごま「ナニ忘れもせんが、あり様は、全體がないのぢやわいな。そのわけは私はえらい煙草好き、一日に拾匁では足らぬ位ぢやゆゑ、コリヤ自分で買うて呑んでは堪らんと思うて、それから煙草入はやめて、煙管ばかりもて歩きをります。」彌「そこで人のばかり呑みなさるのだな。」ごま「さよぢやわい。」彌「そりや京の人へふくりんかけて、お前があたじけねえといふもんだ。」ごま「ハアさうかいなハ、、、。」時にいかう遅なつた。ちと急ぎましよか。」ト足を早めて行くに、ほどなく月本に至り、
此の邊より烏の宮へ參る道ありと聞きて、

照りわたる秋の月本ならば今うかれまゐらん烏御前に

かくて雲津にいたり、南瓜のごま汁、おのが家に案内するに、これも旅籠屋と見ゆれど、折ふし相客もなく、奥の間に請じ入れ、彼是ともてなしければ、彌次郎兵衛はあらぬ名をいつはり、かかる目にあふも一興なりと、北八諸共心の内にをかしく、やがて湯にも入りしまひ、悠々と坐しゐたるに、亭主ごま汁出でて「コレハお草臥れでござりましよ。ようこそお入り下されました。併し折あしく、此の頃は不漁で、何もお肴がござりません。それ故何も御馳走がでけぬくいが、當所は至つて蒟蒻がよござりますから、マア是れでも上げましよと存じて、申し付けおきました。」彌「もうお構ひなされ

なア。イヤ御主人、この者は未だお近付にならぬけな。」亭「いかさまあなたは。」北「私は十返舎の秘藏弟子、一片舎南鐐と申します。ふしぎな御縁で御厄介に預ります。」亭「ナニサ、とつとねからいお構ひまうさんおりやて。イヤ先生、ちとお寛ぎなされまいか。」女「御膳がよござります。」亭「早うあげんかい。御ゆるりと召し上りませ。」ト亭主は勝手へ立つて行く。女、ぜんをもち出で、彌次郎へすゑて行く。彌「まんざらでもねえの。」北「いい女だ。しかしこゝおりやアお前も先生様だ。おとなしくせざアなるめえ。」トこの内、又十一二許りの小むすめ、膳を持ち北八にすゑる。兩人箸を取り、ゝひかゝり見るに、膳の向うに、平なる皿の中に大福餠の大きさの如き黒き物をのせて出せり。平には蒟蒻を盛り、味噌は別に小皿にあり。彌次郎小聲にて、彌「ナント北八、この皿にある丸い物は何だらう。」北「されば、何であらうか。」ト箸にてつゝき見るに、至つて固く、挾めども動かず。よく〳〵みれば石なりけるはゑ、を潰し、彌「コリヤ石だ〳〵。」亭「ナニ石な物か、ノウ女中。」女「それは石でござります。」北「それ見なせえ。」女「蒟蒻をおかへなさりませ。」北「いか樣。もう少し。」トひらを出して、女の立つてゆくを待ちかね、彌「コリヤ、何と馬鹿々々しい、どうして石が食はれる物か。」北「イヤそれでも、くはれる仕法がありやアこそ出したであらう。さつき當所の名物を上げませうといつたア、何でも此の石の事だ。」彌「それだとつて、ついぞ話にも聞かねえ。」北「イヤ待ちなよ。江戸で團子の事をいし〳〵といふから、大方コリヤ團子であらう。」彌「ハヽア、なる程そこもある。よもや本當の石でもあるまい。」ト又箸を以てつゝき見るに、やはり石なり。これは不思議と箸の齒音にて、叩き見ればかつたり〳〵。彌「どうでも石だ〳〵。コリヤどうして食ふ物だと聞くも業腹だが、どうも堪つ

から合點がいかぬ。」此の中亭主勝手より出で、「是れは何もございません。宜しう召上りませ。イヤ石がさのみは致しませんか。コリヤ／＼ぬくとい石をかへてあげ申せ。」トいはれて、二人共いよ／＼ぎよつとせしが、いかにしても此の石のくひやう、知らぬといはれんも業腹と、彌次郎兵衛これをくひたる貌にて、「イヤもうお構ひなさるな。石も最早宜しうござる。扨々珍らしい物を賞翫致しました。江戸表などで、折節小砂利を唐辛醬油で煎りつけるか、又は煮豆などの樣に致してたべる事がござります。それに又石塔なども、嫁をいぢる舅婆などに食はせたが藥だと申して食べまするが、私も隨分好物でござります。今度府中に逗留致した時、馬蹄石を泥龜煮にして振廻はれましたが、ツイ私四ツ五ツたべました所に、お聞きなさい、腹が重くなつて、立たうとした所一向立たれず。仕方なしに兩方の手を棒縛りの樣に致して、擔いで貰つて、やう／＼と手水に行きやした。御當所の石ころは、格別風味もようござりやすから、又たべすぎたらば御厄介になるだらうと存じて、お氣の毒でござりやす。」ごま汁「ナニ、その石を上りましたか。」彌「食べました段か。」ごま「イヤそれは滅相界な。石をあがるといふは、けしからんお齒のお達者な事でござります。併し火傷はなさりませんかいな。」彌「それはなぜな。」ごま汁「イヤ、あの石は燒石でござります。總て蒟蒻といふ物は、水氣の取れぬものでござりますから、あの燒石にてお叩きなさると、水氣がとれて格別風味がよござります。その爲の燒石でござります。あがるのではございませんわいな。」彌「ハ、ア、なる程／＼、聞えました。」

ごま汁「マアさうしておかつて御覽なされ。コレおなべよ、石が熯とくなつたら持てこんかい、早う早う。」ト此の内、皿に石の燒けたるを載せて、女もち出で、引きかへてゆく。彌次郎北八亭主が言葉の如くして、かの蒟蒻をはさみ、件の石にうちつけ見るに、シウ引といふて水氣とれたるところを、味噌をつけてくらふに、風味格別輕くして、いはん方なければ、大きに感心して、彌「まことに珍らしいお料理、御仕法感心致しました。そしてかやうに同じ樣なる石が早速によく揃ひました。」ごま汁「イヤ、それはかねて蓄へおきます。お目にかけませう。」ト勝手にかけ入り、吸物椀を入るゝやうなはこをもち出で、「御覽下されませ。こないに二十人前は所持致してをります。」トかの箱を見するに二人はをかしく、其の箱の横の方に何か書き付けてある故、よんでみれば、蒟蒻の叩き石二十人まへとかき付けたり。此の内、近所の狂歌よみ、おひ／＼に來りて、「御免下さりませ。」ごま汁「ヤ、これは小鬢長ハ成樣、サア／＼どなたもこれへ／＼。」一「ハイ／＼、是れは十返舍一九先生、はじめてお目にかゝりました。私は富田茶賀丸と申します。次は反歯日屋呂、水鼻垂安、金玉の嘉雪、いづれもお見知り下さりませ。」ごま汁「時に先生、お喧しうはござりませうが。」おむづかしからうといふ事をおやかましからうといふ國詞なり一扇面、短冊等お願ひ申したいが、何なりともおもち合はせのお歌を、お認め下さりませ。」ト扇短冊をつきつけられ、彌次郎しかつべらしく取上げて、何の出放題、やらかしてくれんと色々考へても、わが詠みし歌には、これぞといふ歌もなく、早速に思付もなければ、これまで聞き覺えゐたりし、人の歌を書きてさし出せば、ごま汁これを頂きて、「これは有り難うござります。お歌は、ほとゝぎす自由自在に聞く里は酒屋へ三里豆腐屋へ二里。ハ、アなる程、どうか聞いたやうなお歌ぢや。きぬ／＼のなさけをしらば今ひとつうそをもつけや明六ツの鐘の イヤこれは千秋庵大人のお歌ではござりませんか。」彌「ナニ私がよみ歌、しかも江戸中

大評判の歌、誰知らぬ者はござらぬ。」ごま汁「イヤ、さよぢやあろが、先年、私お江戸へ参じた時、三陀羅大人芍薬亭大人などにもお目に懸りまして、すなはちお短冊もいたゞいて帰りましたが、御覧なされ、その屏風に貼つてござります。」トいふ故彌次郎ふり返りて見れば、なる程屏風に三陀羅と書きて有の歌あり。北八をかしく氣の毒なれば、「イヤ私の先生は、そゝつかしいが癖で、人の歌だのわが歌だのといふ差別は、一向ござりませぬ。コウ彌次さん、イヤ先生、是れまで道中筋でよみなさつた、お前の歌をかきなさればいいに。」ト氣を付けられて彌次郎面目なけれど、押しの強い男なれば、いけしやア〳〵として、あとの短冊へは道中筋の歌をかく。此の中、北八も手もちなければ、はりまぜの屏風を見て、「ハヽア戀川春町の繪がある。モシあの繪の上にある讃は何でござります。」ごま汁「イヤあれは詩でござります。」彌「此方の布袋の繪の上にあるは詩と見えますが、誰が致したのでござります。」ごま汁「イヤあれは語でござります。澤庵和尚の。」トいふ故、北八心の中にこいつ忌々しい奴だ、讃かといへばしだといふ、しかといへばごだといふ、何でも今度は一ツ餘計にいつて、まごつかせてやらうと、そこら見廻し、北「モシ、お掛物の畫の上に出てあるは、大方六でござりませうな。」ごま汁「六か何か知りませぬが、あれは質に取つたのでござります。」ト此のうち勝手より女たち出で、「ハイ、ひげつら様からお手紙が参じました。」ごま汁「ドレ〳〵、何ぢやあろな。」ト此の手紙をひらきて、高々とよみて見れば、手紙「鳥渡申上候。唯今東都十返舎一九先生、私宅へ御著有之候、勿論名古屋連中幷吉田大嶽よりも書状参り申候。早速貴公御噂もいたし置き候事故、追付貴宅へ同道參上可致候間、右御案内申入置候。已上。」ごま汁「コリヤどうぢやいな。とんと合點のいか

ぬ。ノウ先生、たゞ今朋友共から、かやうに申しこしましたが、定めてこやつ、尊公のお名前をかたつて參つたものと見える。さいはひ追付これへ參るとあれば、ナントお遇ひなされて、慰んでやらぢやござりませぬか。」北「さて／＼大變な事だ。いやはや横著な奴もあればあるものだ。しかし私はあひますまい。」ごま汁「なんぜ／＼。」彌「イヤどうか先刻から持病の疝氣が起りました。さやうでなくば、その贋物、致し方がござるものを、さて／＼困つたものだ。」ト思ひがけなくこの仕儀に及び、流石の彌次郎しよけ返りてゐる。亭主ごま汁を初め、皆々先刻より彌次郎が振舞、合點ゆかずと思ひし處は、さてはと心づき、こいつ化の皮を現はしてくれんと、互に袖をひきあうて、ちやが丸「何と先生、コリヤおもしろいことがでけました。御不快ではござりませうが、ぜひその贋物には、お遇ひなさるがようござりませう。」

彌「ハテさて困つた事をおつしやる。」たれ盃「イヤ、時に先生のお宅は、江戸表では何處許でござりますな。」北「されば何處でかござつた。オヽそれ／＼、鳥羽か、伏見か、淀竹田。」かゆき「山崎の渡を越えて、與市兵衛とお尋ねあれか。おきやアがれ。ハ、、、。」ごま汁「イヤ、確かあなた方のお笠に、江戸神田八丁堀、彌次郎兵衛と書きつけてありをつたが、その彌次郎兵衛樣といふは、誰さんの事ぢやいな。」彌「ハア、聞いたやうな名だが、誰でかあつた。オ、聞いた筈だ。わしが實名を彌次郎兵衛といひやす。」ごま汁「ハ、ア、つねにや參らぬ、ちよろ／＼とまるらぬ、彌次郎兵衛でござるといふは、あなたの事であつたか。」彌「さやう／＼。」ちやが丸「時に彌次郎兵衛先生、その贋物の一九を、いんま連

れて來まいかい。」彌「イヤ、わしはもう出立いたさう。」ごま汁「なんぜ、今頃何時ぢやと思うて、もう四ッぢやがな。」彌「さればの事、わしが疝氣は變つたことで、此のやうに畏まつてばかりをると、だんだん惡くなる。いつも夜分外を歩いて冷えさへすりや、ぢきによくなるから。」ごま汁「ハヽア、それで今立たうといふのか、さうさんせ／＼。たとへこなさんが居ようというても、こゝにやもう置きやせんのぢや。はやう出て行かんせ。ようも人の名を騙つて、だまさんしたの。」彌「ナニ騙つたとは。」ごま汁「ハテ騙つたわいな。ほんまの十返舍先生は、名古屋の川竝連中から、狀がついて來て、ありや違ひはないがな。」たれ安「初めからこなさんの不都合たら／＼、此樣な事であらうと思つた。こちからほからかし出されぬ中に、ちやつ／＼と出て行かんせ。」彌「なんだほかし出す。コリヤおもしろい。」北「コレサ彌次さん、力んでも始まらねえ。全體お前の思付きが惡い。サア爰を出て、どこぞ木賃にでも泊りやせう。コリヤアどなたも眞平御免なさりやし。」ト北八がだん／＼の詫言に、亭主は腹はたてども可笑しさも半分、みな／＼この二人がはう／＼の體にてそこ／＼に支度し出て行くなりを見送り、家内のものども手を打ち叩き、どつ／＼と笑ふ。彌次郎兵衞は、始終ふくれ面して力み返り出て行くをかしさ。北八後にしたがひ、

いとはまじとほり一ぺん旅の恥かきすてゝゆく扇短冊

かく詠みて、後は笑ひを催し出かけたれども、はや亥の刻過ぎたると見え、家竝に戸を閉ぢて密まりかへり、いづれを旅籠屋とも見えわかたず。泊るべき方もなくして、うか／＼とたどり行く程に、あ

はや軒下の犬どもが、起き立ちて吼え懸れば、彌次郎兵衛きよろ〳〵して、彌「エ、この畜生めらア、悪くふざきやアがる。」ト石ころを拾ひて打ち付くれば、猶々犬は怒りたちて取卷く。北「構ひなさんな。犬までが馬鹿にしやアがる。オヤ彌次さん、乙な手つきをしてお前何をする。」彌「イヤ犬に取卷かれた時は、宙へ虎といふ文字を書いて見せると、犬が逃げるといふ事だから、先刻から書いてゐるが、ねつから逃げやアがらぬ。こいつらア皆無筆の犬ださうな。シッシ〳〵。」トどうやらかうやら追ひ散らかして行くともなしに思はずこの町を出離れて、「コリヤ詰らねえものだ。まゝよ北八、夜どほし歩かうぢやアねえか。きついこたアねえ。やらかせ〳〵。」北「おめへ飛んだことをいふ。まだ九つにやアなるめえ。またどこぞへ泊りてえものだ。」彌「それだとつて、今頃に起きてゐる内はなし。イヤあるぞ〳〵、はるか向うに火が見える。アノ火を目あてに行つて、宿をたのまう。」北「オ、サ、それがいゝ〳〵。しかし提燈の火ぢやアねえか。」彌「飛んだことをいふ。戸の隙間よりもれる火だものを。」北「ほんに、家のうちで焚く火だ。何でも是非あそこを頼んで泊りやせう。」ト足に任せて急ぎ行く。やがてそこに近づきたるに、かの目あての火は、おのれとだん〳〵先へ歩み出して行く體に驚き、彌「ヤア〳〵〳〵、あの家がどうか歩いて行くやうだ。」北「ほんになア、こいつは可笑しい。」彌「イヤ、をかしくない氣味がわるい。どこの國にか、家が歩くといふは唯事ぢやアねえ。」北「ナニサ、これも赤坂の泊り位で、みんな狐めがすることだらう。弱味を見せると猶つきあがりがする。構ふこたアねえ。さつ〳〵とあよびなせえ。」トわざ

とカみ返つて、足早に件の火におひつき、くらまぎれに透しみれば體の車なり。小屋のうちにて火をたき茶をわかしながら車をおしてゆくのなり。二人は可笑しくこゝを過ぎ行くに、折ふし月は出たれども、草木もねぶる眞夜中のうそ寂しさ、後にも先にも唯二人、うはべはがまんに強ばつても、心は至つての臆病者、こはごは通りゆく後より一人來るものあり。彌次郎ふり返り見れば小山の如き大男、長脇差を腰に横たへ來るは唯ものならず。我々をめがけつけ來るならんと、北八に囁きて、彌「コウ、後からをかしな奴がついて來る。ちつといそいでやらかさう。」ト足早に走れば後の男も又走る。

北「待ちなよ。呑口がはづれさうだ。」ト小便をすれば、その男もたち止り待つてゐる故、彌次郎聲をかけ、「モシ、おめへ今頃どこへお出でなさる。」トこはごはいへば、かの男存じのほか優しきものいひにて、「ハイ〳〵私は松坂へ戻りをる者ぢやがな、夜さり獨り怖うて怖うて、モどうしよいなと思ひをつた所へ、お前方が通らんす故、コリヤよい連れぢやと、後からお二人を心だよりに參じたわいな。」北「イヤ、お前なりには似合はぬ弱い音を出しなさる。そしてそんな長いやつを差してゐるながら。」かの男「ハヽ、ア是れかいな。コリヤあとで拾うて來た竹片ぢやわいな。」ト腰から拔いて杖について行く。彌「ハヽヽヽ脇差ではねえの。わつちらア又、お前が怖くて〳〵、さつきにから、コリヤひよんな奴に見こまれたと思つたが、マアお前臆病者で、わつちらも落著いた。」北「もう〳〵、これから三人といふものだから大丈夫だ。」男「イヤ〳〵、このさきにとつとえらいことがあるがな。」彌「何がえらい。」男「聞かんせ。わしや今日江戸橋までいて、歸りにきつう遲なつてな、いんまのさきこの松原に來をつた所が、たんぢややら向うに大きな白い物が立つてるをつて、それがあつちやへ行たりこつちやへ來たり、ぶうらり〳〵。もう〳〵〳〵、わしや怖うて、コリヤ死ぬかと思うたわい

な。そぢやもの、どうして向うへ行かれるもので、コリヤならんわいと後戻りして、どうぞよい連れが欲しいと思ひをつた所へ、お前方に行きあつたのぢやわいな。」彌「エ、その白い大きな物がゐたといふは、何處らに。」男「イヤ、ぢつきにこの先ぢやわいな。」彌「エ、何が出るものだ。おいらが先へ行かう。俺について來な。」トうち連れてこの松ばらを一丁ばかり行きたる時、かの男「アレ／＼向うに、ア、コリヤ堪らぬ／＼。」トがた／＼震へる。二人も怪しく、遙か向うを月明りに透し見れば、何とも分らぬ白き物、凡そ一丈許りも高く、街道一ぱいに廣がり立つてゐる樣子。是れは何だらうと先へも進まず、たち止り見れば、又きゆる樣にばつたりなくなるかと見れば、又すつくり大きくなつたり、小さくなつたり、その形分らず。彌「ヤァ何だらう。」北「裾がねえから亡魂に違へはねえ。」男「ア、アレ、あれぢやもの、どうして先へ行かれましよいな。」彌「正體が分らにやァ猶氣味が惡い。コリヤ行かれぬ、後へ戻らう。」男「わしもお前方をたよりに又參じたが、どうも怖うて行かれんわいな。おとへ戻つて又つれの人が出來をつたら、又爰まで來うわいな。二三度も其樣に行たり戻つたりしをつたら、ちやうど夜が明けようわいな。」彌「何でも白裝束だから、何ぞの亡魂にちげへはねえ。」北「アレアレ、青い火が見える。」男「エ、、どうかこつちへ來をるやうぢや。」彌「コリヤどうしよう。とてもさきへは行かれぬ／＼。」ト三人ながら色青ざめて、がた／＼ふるふ。折から向うより人の來ると見え、うた「戀の重荷をナ、積んだら馬にへ、いく駄あろやら知れぬくいナアンアエ。」ト唄ひながら來るは、助郷の人足四五人。彌「モシ／＼、お前方ァどつから來なさつた。」人そく「ハァ、わしらァこの近在ぢやが、役に當りをつて、津まで行きをるのぢやわいな。」彌「ソ

リヤアいいが、こゝへは如何して來なさつた。」人そく「ハテこな人は、其の役で津へ行くのぢやといふのに。」彌「但しお前方も幽靈ぢやァねえか。どうも人間なら爰まで生きて來よう筈がない。」人そく「何いはんすやら、根から葉から分らんわい。」北「イヤ、向うに化物がゐるのに、どうしてお前方アその前を通つて來なさつたといふ事さ。」人足「コリヤこなさん達は、三渡の藤九郎狐が、いこいたのぢやな、ハ、、、。」北「ナニサ、向うを見なせえ。」人そく「向に何がゐるぞい。」北「アノ白い物が、アレアレ。」人そく「白い物とは、あれかノ\。ありや道中で馬の沓や草鞋が燃えてをるが、その煙が月に映つて白うなつて見えるのぢやわいな。」彌「ハ、アさうか。ハ、、、。コリヤ有り難うござりやす。」卜人足に別れて、三人ともほつと溜息をつき、打笑ひつゝ聽てその所に辿りつき見るに、成程草鞋、沓などを積み重ねて火をつけ燃したるにて、その煙白く立上り見えたるなり。此の處を過ぎて松坂に到り、まだ夜深ければ道づれの彼の男を頼み、寐る許りの事なれば、當りまへの旅籠を出すも費えなりと、町の入口に木賃宿を世話して貰ひ、そこに泊りて一夜をこそは明しける。斯くて月落ち鳥鳴きて、時の鐘明六ツを告げわたる。彌次郎北八早くも起きいで、此所を立ち出づるとて、

鳶も輪になりて舞ふ口ぞたび人のをどり出でたる松坂の宿

右の方小山の藥師を打過ぎ、櫛田といふに到る。こゝにおかん、おもんといへる二軒の茶屋あり。餅の名物なり。

旅人はいづれに心うつるやとおもんおかんが賣れる燒もち

それより祓川を打渡り、齋宮を過ぎて明星が茶屋に休みたる時、こゝに上方者と見えて、はでな大縞の引廻しを著て、帳面と風呂敷包を春負ひたる男、馬の値をつけこゐたりけるが、馬士「モシ／＼お前方ア、其の荷をつけてお一人、此の旦那と三寶荒神で乗らんせんかいな。」上がたもの「お前方も大方參宮ぢやあろ。わしも古市まで掛取に行くさかい、一緒に乗りなされ、話もて行こわいな。」彌「いかさま、昨夜の夜道で大疲勞だ。北八おらア乘つてゆくぞ。」北「そんなら此の荷をつけてもらはう。」ト此の所にて馬の相談ができ、上方者と彌次郎と三寶荒神にて出かける。馬「ヒイン／＼。」上がたもの「お前がたァ江戸衆ぢやあろな。」彌「さやうさ。」上がた「江戸はえい所ぢやが、わしや去年行てえらい目にあうたがな。アノ江戸に似合はん、どこへ行ても手水場が、とつともうえらいむさくろしうて／＼、わしや百日ほどをるうち、とんと手水にいた事がないがな。それから江戸を立つて、鈴が森たらいふとこへ來て、ヤレ嬉しや、こゝでこそ小用して來まそと、海の中へため／＼た小用を、いつきに三斗八升ばかりしをつたが、えらうよかつた。あしこは綺麗で、えらいおつきな小用擔であつたわいな。ハ、、ハ、、。」彌「京では小便と菜と、とつけへこにするといふ事だから、小便も大切なもんだに、おめへ海の中へ惜しい事をした。その三斗八升で取りけへたら、菜が馬に五駄や六駄は來るだらうに。それだから京では屁をひるにも、出さうになると、ちやつと裏の畑へ驅けて行つて、生えてある大根や菜の上へ屁をひりかけるといふ事だが、なるほど是れも肥料になるだらう。」上がた「さうぢやわいな。其の

屁をひりかけた菜をよう刻んで、土にまぜて壁をぬりをるがな。京ではその土をへなつちといふわいな。」彌「そうてえ京と言ふ所はあたじけねえ所よ。前度わつちが行つた時分は、三月で花見の最中、てん〴〵に幕をうつて、結構な高蒔繪の重詰なんどを取散らした所はいいが、その重の中に何があると思へば、かくやくの香の物に、きらずの煎つたやつは、恐れる〳〵。」上がた「イヤ、それよりかお江戸の衆が、吉原の櫻はえらいと、いかう自慢せらるゝさかいで、私や態々吉原へいて見たが、何の櫻はありやせんがな。」彌「そりやお前いつ頃いきなすつた。」上がた「私がいたは、確か十月時分。」彌「何の十月櫻があつて堪るものか。」上がた「ハアさうかいな。それでも京の小室や嵐山には、年中櫻がちんとあるがな。」彌「そりやァ木許りだらう。花は年中ありやァしめえ。」上がた「さよぢやわいな。イヤ又江戸衆は長唄をよう唄うてぢやが、京の宮園や國太夫は又格別な物ぢやわいな。」彌「國太夫といふはどのやうに唄ひやす。」上がた「國太はかうぢやいな。」トまじめにこゑをはり上げて國太夫、「聽て私が年あけて、お前と女夫になるならば、肩を裾へはまだなこと、足を耳にかけてなりとも添ひませう。チン〳〵〳〵〳〵チンチリツン〳〵。」彌「イヨ〳〵、おもしろえ〳〵。ナントわつちに一くさり教へてくんなさらねえか。」上がた「そりや安い事ぢやわいな。私についてやりなされ。」ト此のうち、北八は細長き竹一本拾ひて、上方者があまり高慢くさい事をいふゆゑ、つゝき落してやらんと馬の後から狙つて來ることをば知らず、上方者は夢中になり、また國太夫節、「チンチリツン〳〵チンチン。ほんに女は執念の、深いといふ

は譃ぢやない。死んでも呵責の夜叉羅刹、杖ふりあげてちやうどうつ。」トいふ所にて北八手を延し、かの上がた「ヤア、コリヤどやつぢやい。人の頭へ礫うちをるがな。」彌「ハ、、、もう一ぺん今の文句を。」上がた「ほんに女は執念の、深いといふは譃ぢやない。死んでも呵責の夜叉羅刹、杖ふりあげて。」北八うしろより又びつしやり 上がた「アイタ、、、何奴ぢやい。どめつさうな。えらう礫うちくさるがな。」ト振り返りみれども、北八はやつと彌次郎が乗りたる方の馬の陰に隠れて、一向見えず。彌「おもしろいが、どうも節がむつかしい。もう一遍やつてくんなせえ。」上がた「ソリヤ何度でもやるはやるが、又頭を打ちやしよまいか。」彌「ナニサ、わつちが見てるよう。」上がた「そんならま一度やりましよかい。死んでも呵責の夜叉羅刹、杖ふりあげてちやうどうつ。」トこんどは北八うろたへて、彌次郎が頭をびしやり〳〵〳〵。彌「アタ、、、北八己だが、コリヤどうする。」上がた「ハア、さつきから私が頭を打たんしたのも、こなさんぢやな。何として打たんした。」北「私は打つた覺えはない。」上がた「ナニ、ないとはいはしやせんわいな。」北「ハテおいらァ知らねえ。いけしつこい野郎めだわ。」上がた「野郎とは何ぢやいな。こなさんえらい頤たゝかんすな。」北「なんだ此のべらぼうめ。先刻からそうてえ氣に食はねえ野郎めだ。あんまり戯言つきやァがると、引きずり下すぞ。」上がた「おもしろい。サァおろして見やんせ。」北「オ、、まつさかさまにおつことしてやらう。」ト馬の尻をぴつしやり。馬驚いてはねあがり、上がた「ヤアコリヤたまらん。何するのぢやや。」彌「おれもたまらん。コリヤ〳〵どうする〳〵。」馬士「エ、畜生め、

ドウ〳〵。」ト此の内、じんちや屋あけの原を打過ぎ小幡につく。この所より馬をおりて、三人とも茶屋に休む。上方の者、北八に向ひていふやう、「コレ、おまいは何としてわしが頭をうたんした。」彌「もういいにしなせえ。おたけへに旅ぢやァいろ〳〵な事があるもんだ。料簡しなせえ。わつちが一ばい買ひやせう。モシ女中、何ぞ肴があらば爰へ一ぱい出してくんな。」トこれより酒盛となり、上方者も、一つなる口ゆゑ、だん〳〵酔ひが廻りて、「コリヤえらう酔うたわいな。コレ彌次さんとやら、わしやお前がえらう好きぢやが、此のわろはいかんぞや。とんといかんけれど、お前の連れぢやしよ事がない。斯うしよぢやないかいな。これから山田の妙見町に一所に泊つて、古市をおごろかいな。わしやあこではえらう切れるがな。千束屋の鼓の間、柏屋の松の間、私が案内するさかい、行かんせんか、どうぢやいな。」トやたらに大風な事ばかりいふ故、彌次郎こいつをおだてあげて、遊ぶ積りの胸算用して、彌「奇妙々々、どうぞお供致してえの。」上がた「是れから世古の松坂屋で支度して、妙見町の藤屋としよぢやないかいな。サア〳〵もう行こわいな。」彌「ドリヤ出かけやせう。」トこゝの酒代を拂ひ立ち出づる。此の町の出はなれに宮川といふ舟渡しに至りて、

宮川や神に機縁をむすばんとすくへる水のかげのしらゆふ

是れより中河原を打過ぎ、堤世古をうち越えて、山田の町にさしかゝりける。

東海道中膝栗毛五編　終

膝栗毛五編後序

たび人のすなる日記といふものを、作者のして見るひざくり毛、筆のあゆみのはかどりて、早くも伊勢路にさしかゝりぬ。いでや天地は古市の宿屋のごとく、光陰は同社に似たり、人間行路の難きことは、宮川のはにあらず、相の山の山にあらず、たゞ襟もとの錢かけ松こそたふとき、神のほくらには比すべけれ。末社めぐりの十返舎、こゝに感ずるところありて、あまのいはとのあなをたづね、ふたみの海の底をさぐりて、かひあることばをえりつゞりつ、あつはれ明星の茶屋にはねたる三寶荒神、その尾にとりつくおかげ參り、賓導堂に筆をとりて、ひがごとすなる伊勢街道、島さんこんさん仲成しるす。

膝栗毛五編追加緒言

荒海の障子に手脚を屈め、乘合の寶船に天窗を搔く、忠綱が齒空しく、齒磨を費し、眉間尺が額いたづらに剃刀を勞す。話長ければ棕櫚箒鯱立をして、災害履物に及び、幕長ければ蜜柑の皮羽翼を生じて、餘波留場を閙がす。古人不用物を指して長物と呼ぶ、宜哉。唯り長くして美なるものは飛頭蠻、長くして奇なるものは膝栗毛なるべし。今既に五編追加成りて長袖よく舞ふ古市の娯樂、長舌巧みに囀る宮雀の滑稽を盡せり、實に二子が鼻の下の長より出でたる滑稽の骨にして、價良馬の骨より貴し。卿が文さんげ／＼の提灯と光をあらそひ、卿が名法性寺入道とともに長く傳ふべし。

文化丙寅仲夏　喜三二書于芍藥亭

附言

作憚口上でなし
自序ともつかぬ

氣のききたる化物足をあらひて引つこむ時分、ひざくり毛の作者圖にのりて、又しても彌次郎兵衛北八がしやれもむだも洗濯す。此の五編目追加に至つて足もとの明るきうち、先づ今日は是れまでの筆をおくにしく事なしと漸く滿尾し、こじつけたれど、御見物のしびれをきらせし所に附け込み、京へのぼるの一段を拾遺に書けよと、書肆のもとめに是非なくとは嘘の皮、やつぱり作者も欲の皮ひつぱりたこの手をくみて、ひと工夫せしあとの二册は、京大坂の穴さがし、ほじくりかへして御覽に入れんと、しこたま趣向はとつておきの正月物、それははれ著、此の一册は不斷櫻の伊勢道中、をはりかとおもへば拾遺のはじまり、こゝはざつと致しませうと、あとをはらんでそのためおことわりさやうと、例のなまけものがいふ。

東海道中膝栗毛五編追加

十返舍一九著

川崎音頭に、伊勢の山田と唄ひしは、和名抄の陽田といへるより出でたるにや。此の町十二郷ありて、人家九千軒許り商賈甍を並べて、各質素の莊嚴濃やかにして、神都の風俗自ら備はり、柔和悉鎭の光景は餘國に異なり。參宮の旅人たえ間なく、繁昌さらにいふ許りなし。彌次郎兵衛北八は、かの上方者とうち連れ、此の入口に至ると、兩側、家毎に御師の名を板に書きつけ、用立所といへる看板竹葦の如く、爰に袴羽織ひつかけたる侍、何人となく馳せ違ひて、往來旅人の御師に至るを迎ふと見えて、一人の侍、彌次郎兵衛に近づき、おしの手代「モシ、貴方方は何れへお越しでござりますな。」彌「知れた事、大神宮樣へ參りやす。」手代「イヤ太夫はどれへ。」彌「太夫は竹本義太夫殿さ。」手「ハア義太夫と申すは、何所許ぢやいな。」彌「その義太夫といふはな、大阪道頓堀。」北「京は四條、お江戸はふきや町河岸において、永らく御評判に預りましたる。」手代「片輪者はお前方であつたかいな。」北「戯言ぬかすとひつぱたくぞ。」手「えらいあごぢやな、ハ、、、、。」上がたもの「ちと休んでいこかいな。」北

こゝらは汙ねえ所。みな御師の雪隠と見えて、用立所と書いてある。」彌「おきやァがれハ、、、、、」三人共ある茶屋へ入り、暫く休む。此の内上方道者大勢揃ひのなり、女交りに聲張上げ、うた「ござれ夜店は順慶町の、通り筋からソレ瓢簞町を、ヤアとこさァよいとさァ。チ、、、チンノ\。素見ぞめきは阿波座のからす。ソリヤサ。かはいノ\もヤアレ格子先、ヤアとこさ、ヨウいとなァ、ありややこりやや、コノなんでもせ。」チ、チンノ\チンノ\チンノ\ト此の一群通り過ぎたる後から、太々講とみえて二十人許り、いづれも御師より迎ひの駕籠に打乗り來たるが、御師の手代先にたちて、「サアノ\、これぢや、ノ\、先づ何方樣も是れで御休息なされませ。」ト駕籠は殘らず茶屋の門におろす。此の太々講は江戸と見えて、何れも小紬ぐるみに、短いおたちをきめた手合、めいノ\駕籠を出て座敷にとほる。此のうち一人の男、彌次郎を見つけて、「イヤ、これはどうだ。彌次どのノ\、きさまも參宮か。」ト聲かけられて、彌次郎びつくりし、見れば町内の米屋の太郎兵衛なり。江戸を立つとき、此の米屋の拂ひをせず立ちたることとなれば、何となく彌次郎しよげ返りて、「ハァ太郎兵衛樣か、よくお出かけなさいました。併し、こゝであなたのお目に懸つては面目ない。」太郎「ナニサノ\、わしも仲間の太々講で、そのくせ講親といふものだから、據なく出かけましたが、よい所であつた。旅へ出てはとかく同國がなつかしい。奥へ來て一ツぱいやらつし。」彌「有り難うございやす。」太郎「連れは誰だ。ハァまんざら知らぬ顔でもない。ナント貴樣たち幸ひの事だ。太々講拜まぬか。それも飛入といやァちつとばかり金が出るから、無躾ながらわしらが供になると、一文も入らず、大分馳走になつて拜まれるといふものだから、どうだらう。」彌「それは願つてもない有り難い事でございやす。しかしそれが出來やせうか

ね。」太郎「ハテわしが講親だもの、どうでもなる。マア何しろ奥へ來さつし。」彌「ハイ左樣なら。モシ上方の、ちとこゝに待つてくんなせい。」つれの上方もの「よいわいの。いてごんせ。」太郎「サア〳〵ふたりとも、來さつし、〳〵。」ト此の太郎兵衞に誘はれ、彌次郎も北八も草鞋をとつて奥へ行くと、上方者は一人店先に酒など呑みて待つてゐる中、奥は太々講の事なれば、御師よりの馳走にて、さいつおさへつ大騷ぎの最中、又表に一挺の駕籠、十四挺許り、これは上方の太々講と見えて、おしの手代さきにたちて、かご「ホウよい〳〵。えつこらさつさ、〳〵。」トこれも同じく此の茶屋にはひる手代「サア〳〵、御案内々々々。」ちや屋の女「お早うございます。奥へお通りなさんせな。」ト此の內、みな〳〵駕籠よりおりて奥へ通ると、すぐに酒肴を持ち出し、太々講二組の大騷ぎ、座敷の洒落、色々あれども、餘りくだ〳〵しければ畧す。やがて奥の酒盛も終りて、サアおたちといふと、二組の太々講が一緒になり、どさくさして奥より出づると、江戸組の御師の手代、いちはなだちて奥よりいで、「サア〳〵お駕籠の衆、これへ〳〵。どなたもサアお召しなされませ。」トあつちこつちを驅け廻り、駕籠にのせる。此の中又上方組の御師の手代も、同じく驅け廻りて、「こちらのお駕籠はこれへ〳〵。」ト横づけにして皆々をのせる。米屋の太郎兵衞生醉ひとなり、彌次郎が手をとり、太郎「コウ彌次公、貴樣おれが駕籠にのつて行かねえか。」彌「イヤ飛んだ事をおつしやる。」太郎「ハテ、私はこれから歩くは慰みだ。貴樣洒落に乘つていかつし。」彌「さやうなら、へ、へ、へ、こりや奇妙々々。」ト駕籠にのれば、サアお立ちぢやと兩方の駕籠が一時にかきあげ、混雜して彌次郎がのりたる駕籠の人足、とんだ間拔と見えて、上方組の駕籠の中へ紛れこみたるに氣もつかず、さつさとかいて行き、斯かるどさくさ紛れに、人もそれと心づかねば、だん〳〵と急ぎゆく程に山田の眞中すぢかひといへる所にて、江戸方の一組は內宮の御師なる故左の方へ別れ行く。上方組は外宮の御師にて、此の所より右の方へ別れ、田丸街道の岡本太夫の方につく。門前の帝日、盛砂に水うち淸め、玄關に幕打廻して、馳走の役々羽織袴に出迎へば、講中皆々駕籠をおりて玄關より打通る。この時彌次郎も駕籠舁のそさうにて、上方組の中へ紛れこみこゝに來れど、十四五挺もある駕籠、どれがどれやら分らず。彌次郎駕籠を出て同じく座敷に打通り、そこらをうろ〳〵見まはせども、皆知らぬ顏ばかりなれば、彌「ハテ合點のいかぬ。モシ〳〵

「米屋の太郎兵衛様はどれにお出でなさいます。」そばにゐた男「何ぢやいな、太郎兵衛さんとはこちや知らんわいな。そしてお前はねから見ん顔ぢやが、誰さんぢやいな。」彌二「ハイわつちは、ソレ太郎兵衛さんの町内の者ぢやが、ハテどうか違つたやうな。北八はどうした知らん。」ト無上にうろ／＼きよろ／＼とまごつき歩けば、みな／＼肝を潰し、互に袖をひきあうて、荷物など片寄せ囁きあふうち、講中の内二三人たち迎へ「コレ／＼、こなさん見なれぬ人ぢやが誰ぢやいな。」彌二「ハイハイ。」かう中「ハテこなわろは、何をきよろ／＼さんすぞいな。誰ぢやといふのに。」彌二「イヤ、わつちは米屋の太郎兵衛さんに、お目に懸れば分りやす。」かう中「ハテそないな人は、こちの講の内にはないもせぬもの。何ぢややら氣味の悪い人ぢやわいな。」御師の手代「ハアこな人は、貴方方のお連れではござりませんかいな。」かう中「さよぢやわいな。」手代「イヤ、それはどしたもんぢや。とつとと出ていかんせ。えらいへげたれぢやな」かう中「道中盗であろぞいな。ほり出してやらんせ。あたけたいな。」彌二「エ、そんなにいひなさる事アねえ。ほり出すとは何の事た途方もねえ。」かう中「ハ、ア、お前のものいひはお江戸ぢやな。それでよめたわいの。いんまの先、お江戸の太々講と一所で落ち合うたが、其の時お前乘らんした駕籠が、こちの中へ紛れこんでござんしたのぢやな。」彌二「なる程さやう、そんならわつちの行く御師どのは何處でございやすな。」手代「ナニ、おまいの行く所を誰が知ろぞいな。」かう中「めんめんの行く御師どのを知らんといふ事があろかいな。コリヤ我さまは、わざとこちの仲間へずりこん

で、太々講を食ひ倒ししようでな。」かう中みな／＼「エ、けたいな奴ぢや。天窓どやいてこまそかい。」彌「イヤ悪く洒落らア。手前達の太々講、丸つきり喰ひ倒した所が、たかが知れてある。あんまり安くしやアがるな。江戸ッ子だわ。おれ一人で太々講うつて見せよう。」ト どつきり坐れば、御師の手代肝をつぶして「ナニ、おまいがお一人でかいな。こりやでけた／＼。みんごとおまいが。」北「知れたこととよ。多少にやアよるめえ。これで頼みます。」ト うちかへの銭二百文かみに包み出せば、おしの手代二度びつくり「ハ、、、、、、代々講は安うて金十五両も出さんせんけりや、でけんわいな。」北「ナニ、是れではなりやせんか。」手代「さよぢや／＼」北「太々講がならずば、是れで蜜柑かうでも頼みます。」かう中「ハ、、、、、べつかかうにさんせ。ハ、、、、」手代「イヤおどけたお方ぢや。ハアよめた、お前の行く所は、慥かに内宮の山荘太夫どののおやかいの。さつきの手代が、あこのおやほどに、是れから妙見町をすぐに、古市のさきへいてたづねさんせ。」北「ハアさうか。コリヤ有りがてえ。ほんにお喧しうございやした。」かう中「えらいあほうぢや。ハ、ハハ、。」ト 手を打ち笑ふ。彌次郎腹立てどもせん方なく、しを／＼とこの所を立ち出づるとて、

鉢植のだい／＼かうにあらねども宙にぶらりとなりしまちがひ

それより彌次郎兵衛はもとの筋道に出で、妙見町をさして行く道すがら、北八はいかがせしや、米屋太郎兵衛と打連れて、御師の方へ行きしか、但しは上方者と妙見町に泊りしかと、思ひわびつゝ迪り

行くほどに、廣小路にいたると、此所のやどや「モシお泊りかいな。宿をとつてかんせ。」彌「コレ妙見町といふは、まだ餘程ございやすかね。」やどやのをんな「イエ、いんま少し此の先ぢやわいな。」北「ソノ妙見町に、ア、何屋とかいつた、道連の上方ものが泊るといつたわ。ア、それよ。」トいろ〳〵に考へても、藤屋といふを忘れて、さつぱり思ひ出さず、「ハテ口へ出るやうな、何でも棚からぶら下つてゐるやうな名であつた。モシ〳〵妙見町にぶら下つてゐる宿屋はございやせんか。」「ナニぶら下つてゐる宿屋はこちや知らんわいな。そないな事いうては、知りやせんがな。」北「なる程、こゝらで尋ねては知れめえ、もちつと先へ行つて尋ねやせう。」トそれよりこゝを過ぎて、急ぎ辿り行く程に、こゝに萬金丹の看板、妙見町山原七右衛門といへるを見て、さてこそこゝが妙見町ならんと思ひ、往來の人をよびとめ、北「モシ、こゝらに何でもぶら下つてゐるやうな名の内はございやせんかね。」往來の人、ふしぎさうに、「何ぢやいな、ぶら下つてゐる内とは、何屋ぢやいな。」北「宿屋さ。」わうらい「その家名わいな。」北「家名を忘れたからの事さ。」わうらい「イヤそれいうて行んせにやア知れぬくいわいの。何ぢやろと、ぶら下つた内というては、ハ、ア向うの角に人のたつてる内へ行て問うて見やんせ。あこは去年首縊りがあつて、ぶら下つた内ぢやさかい。」北「イヤ、そんなもののぶら下つたのぢやアございやせん」わうらい「ハテまあ、行て問うて行んせ。」あこも宿屋ぢやあろわい。」北「ハイさやうなら。」ト走り行く中、かの家の門に立つてゐた人も、どこへかついと行つてしまひ、さつぱり知れなくなり、まご〳〵して、ある内の前にたちて、北「モシ〳〵、ちと物が尋ねたうございやす。去年首をお縊りなさつたは、貴方でございやす

か。」この内の亭主居合はせ肝を潰し飛んでいで、「イヤわしや首釣つた事はないがな。」北「そんなら何處でございやす。」亭主「こゝらに首つつた内は知らんがな。此の二三軒先に棚から落ちた牡丹餅食うて咽をつめて死んだ内があるが、もしそれぢやないかいな。」彌「いか樣なア、何でも棚からぶら下つたやうな内であつた。」ト又二三軒先へゆき、ある内の門にて、「モシ棚からおちた内はお前ぢやございやせんか。」トとんだことをいふ。此の内の女房とみえて、女「イヽエナ、私が内は元から爰で、ついしか棚へあげて置いた事はおませんわいな。」北「ハア、外にはござりやせんか。」女「ソリヤお前、聞き違ひぢやあろぞいな。山からおちた内ぢやおませんかいな。それぢやと、相の山の與次郎の小屋が、此の間の風で谷へ吹き落されたといふ事でおますがな。大方それぢやあろいな。」彌「イヤそれでもねえが、コリヤア困つたもんだ。何だかかだか、さつぱり分らなくなつて、元も子も失つたやうだ。わつちも先から尋ねあぐんで、もう／＼がつかりと草臥れやした。どうぞ一ふくのまして下さりやせ。」ト此の店さきに腰をかける。亭主氣の毒さうに煙草盆をさげて奧より立出でて、てい主「サア一服上らんせ。一體お前はどこを尋ねさんすのぢやいな。參宮ぢやあろが、お一人か但しはお連れでもおますかいな。」彌「さやうさ、道連ともに二人の所、わつちはその連れにはぐれて、こんな困つた事アございやせん。」てい主「イヤそのお二人のお連れは、お一人はお江戸らしいが、今お一人は京のお人で、目の上へ此のくらゐな痰瘤のあるお方ぢやおませんかいな。」彌「さやう／＼。」てい主「それぢやと、こちの内にお泊りなされた

さかい、すぐにお前様のお迎ひを出しましたわいな。」彌「そりやほんたうにかッ ヤレ〳〵嬉しや。そしてお前の所は何屋といひやす。」ていし「アレ御覽なされ、掛札に藤屋と書いておますがな。」彌「ホンニそれ〳〵。棚からぶら下つだやうだと思つたが、その藤屋よ。さうして連れの奴らはどこにゐやす。」ていし「ソレ、奥へお連樣がお出でだというて行かんせ。」ト此の聲をきくより、奥から出る道づれの上方者、とんで來る。「コリヤようごんした。定めてそこら中尋ねさんしたであろ。こちもえらう尋ねまうたこつちやないわいの。ヤア〳〵奥へ〳〵。」彌「これはお世話になりやす。」トすぐに奥へ行く。上方者と北八は、江戸組の太々講について御師の方へいろいろきき合はせても分らず。せん方なくその御師の方を出で、尋ねたくもあてどなく、かねて妙見町の藤屋へ泊らんといひたる事も承知の事なれば、大方尋ねてくるであらうと、さてこそ此の所に泊りてまちかけしなり。彌次郎は太々講の駕籠が間違ひたる一伍一什を物語り、大笑ひとなりける。北八は髪結をよびにやり、髭を剃りにゐたりけるが、「まあ〳〵お互に別條なくてめでたい〳〵。」彌「いやもう飛んだ目にあつたといふはおれが事よ。時に髪結さん、その後でわつちも一つやらかしてくんなせえ。」北「おめへマア湯に入つて來なせえ。」彌「そんならさうよ。」ト彌次郎は湯に入りにゆく。「時に髪結さん、おいらが髪はぐつと根をつめて結つてくんな。何だかこつちの方の髪は、たぼが出て、髷がおつに長くて、とんだ氣のきかねえ頭つきだ。そして女の髪もがうせえに大きく結つて、何のことはねえ筑摩のなべかぶりといふものだ。」かみゆひ「そのかはり、女はとつとえらい綺麗でおましよがな。」彌「綺麗はいいが、立つて小便するにはあやまる。」かみ「イヤ、お江戸の女中もおつきな口を開かんし

て欠伸さんすには、ねから色氣がさめるがな。」北「それでも女郎は又江戸のことだ。江戸は意氣張があるからおもしろい。こつちのは誰が行つても同じことで、ねつから振るといふ事がねえから信仰が薄いやうだ。」かみ「イヤ、こちの方ではおまいのやうなお方が行かんしても振らんさかい、それでえいぢやおませんかいな。」北「きさま、おれを安くいふな。コレほんの事たが。」かみ「オツト、あたのかんすと切りますがな。」北「イヤ切らなくても、がうせえにいてえ剃刀だ。」かみ「痛い筈ぢやわいな、この剃刀はいつやら研いだまゝぢやさかい。」北「エ、滅相な、なぜ剃る度ごとに研がねえの。」かみ「イヤそないに研ぐと剃刀が減るさかい。ハテ人さんの頭の痛いのは、こちや二年も堪へるがな。」北「道理こそ、痛くて／＼一本ヅヽ、抜くやうだ。」かみ「なんぼ痛いとて、命に障る事はないがな。」北「エヽ、そりや知れた事よ。もう／＼月代はいゝ加減にしてくんな。」かみ「おまい逆剃は嫌ひかな。」北「エヽ、その剃刀で逆剃にやられて堪るものか。頭の皮がむけるだらう。もうそこはいゝから、ぐつと髪をつめて結つてくんな。」かみ「ハイ／＼、コリヤえらい雲脂ぢや。この雲脂の取れる事がおますがな。」北「どうすると取れる。」かみ「ほんま樣にならんすとえいがな。」北「エヽ、いめえましい事をいふ。」かみ「根は此樣でようおますかい。」北「イヤ／＼もつと引詰めてくんな。とかくこつちの方へ來ると髪は下手くそだ。根を固くつめて結ふことを知らねえ。無器用な。」かみ「さよなら、これではどうでおます。」ト此の髪結

これ見たかといふ程ぐつと根をつめると、月代に三ツほど襞ができて、目は上の方へひきつる位に固くひつつめられ、北八髪の毛がぬけるほど痛けれども、負惜しみにて顔をしかめながら「これでよし、これでよし。アヽいい心もちだ。」かみ「ナント、それでよござりましよがな。」北「あんまりよすぎて首が廻らぬ様だ。」ト此の内、彌次郎湯よりあがりくる。かみゆひ「サアあなた、髪なされませんかいな。」彌「イヤ、どうか湯にはひつたら、ぞく／＼して風でも引いたやうだ。わつちはマア明日のことにしやせう。」かみ「さよなら御機嫌よう。」ト出て行く。此のうち女、膳を持ち出で、めい／＼へ直す。かみがたものは先刻より寝轉びゐたりしが、起き直りて、「ドレ、飯食をかいな。」女「今日は不漁でお肴が何もおませんわいな。」彌「これは御馳走。サア北八どうだ。」北「彌次さん、わつちが箸はどこにある。」彌「エ、此の男は、ソレ膳についてあらア。」北「取つてくんな。どうもうつむくことがならねえ。」彌「なぜならねえ。オヤ／＼手めへの顔はどうした。目が引きつつて狐つきを見るやうだぜ。」北「あんまり髪結めが、がうぎに根を詰めていやアがつた。ア、タ、、首をいごかす度に、めり／＼と髪の毛が抜けるやうだ。」上方「ソレおまい、お汁がこぼれるわいの。アレお飯の上にお汁わんを置かんすさかい、アレこぼれたわいの。コリヤもうとつとやくたいぢや。」北「彌次さん、どうぞ拭いてくんな。」彌「いめえましい男だ。そしてマア俯向かれぬ程に、なぜそんなに固く結はせた。もうちつと緩くすればいいに、手めへ大方髪結をいぢめたらうから。」上方「そぢやさかい、そないな日に遇はんしたのぢやあろぞいな。」北「イヤもう、物をいふさへ頭へひゞけてならぬ。彌次さん、どうぞこの

難儀を助かるしやうはあるまいか。」彌「ドレ、おれが緩くしてやらう。」ト髪の根をもつて、いやといふ程、ぐつと引き立てる。北「アイタ、、、どうする〳〵。」彌「これでよからう。」北「ア、、ちつと首が廻つて來た、エ、飛んだ目に遇はしやァがつた。」

おなどりしむくいは罰があたりまへゆだんいならぬ伊勢のかみゆひ

みづから斯く詠みて打笑ひつゝ、支度仕廻ひ、はや膳もひけたるに、いづれも打寛ぎて話の序に、上「ナント、今宵これから古市へいこかいな。」彌「まだ宮巡りもせぬ先に、もつてえねえやうだが、まゝいかは、やらかしやせう。」上「いて見やんせ。わしやあこで、年々すてた金が、千や二千のこつちやないさかい、なんぼなとわしが受けこみぢや。サア早ういかんせんかいな。」彌「エ、、そんならおれも髪月代すればよかつた。」上「御亭さん〳〵、ちよつと來ておくれんかいな。」この宿の亭主「ハイ〳〵、御用でおますかいな。」上「お江戸のお客が、これから山へのぼろといな。」妙見町の通言に、古市へゆくを山へのぼるといふ。てい「こちらは何屋にありやす。」てい「太鼓ぢやおませんか、鼓の間のことかいな。ソリヤ千束屋でおますがな。」北「太鼓の間とやらでござりませよ。供して參りましよ。」上「アノ牛車樓か千束亭にしよぢやないかいな。」上「その千束屋がよござりましよ。」ト皆々支度するうち、はや日も暮れて、時分はよしと、亭主を案内として三人とも出かけ行く。妙見町のうへはすぐに古市にて、倡家軒をならべ、彈きたつる伊勢音頭の三味線いさましく、うかれうかれて千束屋といへ

るに至れば、女ども皆々走り出で、「ようござんした、直にお二階へ。」ふぢやの亭主「おつれ申してもよいかな。サア御案内致しましよ。」ト亭主を先におの／＼二階へ上り座につく。上「時に彌次さん、かうしよぢやないかいな。お前方をお江戸で偉い大きな店の番頭衆にしようぢやないかいな。」ふぢや「そないな事がよござりましよ。」上「併し、訛らんしてはあかんわいの。上店といふもんぢやさかい。京談でやらんせにや工合が惡かろがどうぢやいな。」彌「そんなことは持つて來いだ。すつぱりとわつちが上方でやらかしやせう、コレ／＼女衆、女衆、ちよと來ておくれんかいの、わしや何ぢややら、とつともうはや、えらう咽が乾くさかい、茶一つもて來ておくれんか。」女「ハイ／＼。」彌「ナント京談偉いか／＼。へ、畜生めが。」上「イヤ、きよといもんぢや、でけた／＼。」ト此の内女酒肴をもち出ですゝめる。藤屋始めてだん／＼に廻すと、京の人引受けて、「コレお仲居、おやまさんはどうぢやいな。コノお方はな、お江戸の偉いお店の番頭さんぢやさかい、何ぢややあろとおやまさんのありたけ出さんせ。お氣に入ると百日も二百日も御逗留で、お金の入る事は根から葉から、とんとお構ひないお方ぢや。」ふぢ「さよぢやわいな。私が去年お江戸へ參じた時、お店の前を通りましたが、なるほど偉い御大家ぢや。あなたの御支配なさる方は兩替店と見えましたが、これもおつきなお店でおますわいの。」彌「ナニサ、格別えらい店ではないわいの、間口がやつと二十三間あつて、佛の數が三萬三千三百三十三人ぐらしぢやさかい、えらい賑やかな事いな。」ふぢ「京のお店は、確か六條數珠屋町で

あつた。」彌「サイノ、わたしがとゝさんかゝさんは、さぞや案じてゐやさんすぢやあろに、こないにおやまばかり買うて、とつともう、えらいやくたいぢや〳〵。」女「これいいし、みなお出んかいな。」ト呼びたつるこゑに四五人たち出で、「どなさんもようござんした。」彌「ハヽア、どれもえらい出來ぢやな。」上「番頭さん、杯をちとあつちやへ差さんせ。」彌「アイ、もし一つあげうかい。」トその中で一番美しいやつへさして、にこ〳〵してゐる。北「おいらは、太鼓の間が見たいが、どうだ。」上「また太鼓の間といはんす。鼓の間ぢやわいな。」女「鼓の間には、これもお江戸のお客さん方が、子供衆寄せて踊らせてぢや。アレ聞かんせ。」ト此の内、太鼓の間に踊りはじまると見えて、三味線の音きこえる。「チテチレ〳〵、チ、ヽ、ヽ、トテチレ〳〵。」いせおんどうた「涼風や、ちりも拂うて木がくれの、池に浮べる月の顏、けはひは里の色々に、ヨイ〳〵〳〵〳〵よいやさア。」上「イヤア、奥で踊を始めをつたさうぢや。こちもコリヤおもしろなつて來た。ちと、おつきなもんでやろわいな。」彌「さうさ、飛んだおつに浮かれて來た。もう京談もなにも面倒になつた。ヨイ〳〵〳〵〳〵よいやさア。」上「イヨ〳〵、トテチレ〳〵。」又おくのうた「めだつ浮名も面白き、和ぐ歌や三味線に、足もしどろに立ち返り、又も今宵の約束は、ヨイ〳〵〳〵〳〵よいやさ。トテチレ〳〵。」上「コリヤえらい〳〵。時にと、下拙の私めが相方のおやまさんは、コレお前、名は何といふぞいの。何ぢやお辨、有り難いの。誰あらう、勢州古市千束屋のお辨女郎といふ、美しい可愛らしい女の辨才天女様は、忝くも尊

くも、京都千本通り中立賣ひよいと上ル邊栗屋與太九郎樣の相方ぢや。ちとねき寄らんせんかいの。」ト手を取り引き寄せる。この京の人は、酒に醉ふと何でも丁寧にくどくいふ事が癖にて、だん〳〵管を卷きかける。彌次郎は、初めにわが杯を差したるおやま故、自分の相方と思ひゐたりしに、京の男、わが相方のやうにいふ故、やつきとして、彌「コレ京のお客、ソリヤ私が相方のおやまさんぢや。」京「イヤ何いはんすぞいの、コレ女中のお仲居、お前名は何というてぢや。」た「ハイ、きんといふわいな。」京「ソレ〳〵、勢州古市千束屋の仲居おきん女郎に、京都千本通り中立賣ひよいと上ル處、邊栗や與太九郎が、先刻内々ひきあうて置いた、アノ美しい可愛らしい、辨才天女のお辨女郎といふおやまさんは、則ち京都千本通り中立賣。」彌「エ、喧しい。千本も百本もいるものかえ。何でもかう、しよてつぺんに、おれが杯をさしおいた。」トいふは江戸にて女郎の座敷になほると、直に杯をさして相方を定むれども、この邊にてはさやうの事はなく、只内内にて、茶屋の女房、或は女などに嚼きて、あれは誰これは誰と相方をきめておく故、京の人、先刻仲居にかたりて、此の中にていつち上代物を自分の相方と定め、殘りを彌次郎北八とおのれがさりやくして、極めておきし故、彌次郎はその事一向を知らず。江戸の格にて杯をさしたるおやまを、わが相方と思ひゐたりし故、さてこそこのいさくさ起りたり。仲居彌次郎をなだめて、「これいし、アノおやまさんはな、此の人さんの相方、お前さんはこの島田髷さんぢやわいな。」彌「ばかァいふな。此の中でアノおやまが目についたから、それでおれが杯を差したに違ひはない。そこで、わしがおやまかいな。」京「ハテ悪い合點ぢやわいの。こなさんは、アノ江戸はどこぢやいな。」彌「江戸は神田の八丁堀、とちめんや彌次郎兵衛樣といつちやア、ちと捻くつた奴樣だ。」京「その江戸の神田八丁堀とちめんや彌次郎兵衛といふ捻くつた奴樣が、京都千本通り中立賣、

ひよいと上ル所、邊栗屋與太九郎が相方のおやま、勢州古市千束屋の。」彌「ヱ、何を吐しやァがる。邊栗屋の與太九郎も呆れらァ。」京「イヤ、こゝなお江戸神田八丁堀とちやめんやの彌次郎兵衛どの、京都千本通り中立賣上ル邊栗屋與太九郎を、京都千本通り中立賣上る所、邊栗屋與太九郎と呼びすてにさんしたの。そこで以てからに、京都千本通り中立賣。」彌「ヱ、喧しい。よくしやべる野郎だ。」北「おらァそんな事より、太鼓の間が見てえ。太鼓の間はどこだ〳〵。」女「太鼓の間とは何ぢやしらん。鼓の間の事かいな。」北「ヲヽ、その鼓々。」京「イヤ鼓ぢやあろが何ぢやあろが、此の邊栗屋與太九郎が相方ぢやわいの。」彌「コレ悪く洒落るな。何でも鼓の間は己がのだ。悪い敵役ぢやァねえが、いやでもおうでも抱いて寝る。」ふお「ハヽヽヽヽ、あの廣い鼓の間をかいな。」彌「オヽ廣くても狭くとも頓着はねえ。誰が何といつても、おれが物だ。」京「イヤ〳〵〳〵そりやさゝんわい。」彌「ナニさゝんことがあるものか。京都千本通り中立賣とちやめんや彌次郎兵衛様が相方だわ。」京「イヤ此のお江戸神田八丁堀、あがる所邊栗屋與太九郎の買うたのぢや。」北「ハヽヽヽヽ、おめへ方は何をいふやら、どつちがどうだかさつはり分らなくなつた。」女「そして此のおかたは、京のおかたぢやといはんしたに、物いひがいつの間にやらお江戸ぢやわいな。」彌「べらぼうめ、この忙しいに京談が遣つてゐられるものか。」女「あんまりお前さんがいさかうてぢやさかい、ソレ見さんせ、おやまさんがたはみんな逃げて行かんしたわい

な。」彌「いめえましい。もうけへるべい。」女「マアようおますがな。」ふぢ「モシかうしよかいな。これから柏屋の松の間をお目にかけうわいな。たゞし麻吉へお供しよかいな。」彌「嫌だ〳〵。おらア是非けへる〳〵。」ふぢ「ハテよござります。」彌「イヤとめやアがるな。いめえましい。」トすつと立つて歸らうとする。仲居ども立ちかゝりて色々挨拶し、とめてもとまらず、振り放し出かける處へ、相方のおやま初江立ち出で、「これいし、何ぢやいし。」彌「とめるな。よせえ〳〵。」初「お前さん許りそないになア、歸る〳〵といいはんすがな、わしがお氣に入らんのかいし。」彌「イヤさうでもねえが、こゝを放せ〳〵。」初「わしやいやいし。」ト又かけ出しさうにするをひつとらへ、無理むたいに羽織をぬがせる彌「イヤ羽織をどうする。よこせ〳〵。」トいひながら、煙草入をとられる。又紙入「コレサおらア歸る〳〵。」初「情のこはい人さんぢや。」トいひながら、帶をぐつと引きほどき著物をぬがせようとする。彌次郎は垢染みたる越中褌をしめてゐたりし故、裸にされたら請らぬと、大きに辟易し、著物を兩手に押へて、彌「コレ〳〵もう堪忍してくれ。」初「そぢやさかい、こゝにゐるさんすか。」彌「ゐるとも〳〵。」仲「初江さん、もう堪忍してやらんせ。」ふぢ「サア〳〵、よござります。これへ〳〵。」ト彌次郎が手を取り、もとの所にひき据ゑる。北「ハ、、、、おもしろえ、おもしろえ、彌次さん斯うもあらうか。」

むくつけき客もこよひはもてるなり名はふる市のおやまなれども

この一首に皆々笑ひを催し、藤屋の亭主、仲居共がそこら取りかたづけて、それ〳〵に座敷を儲け、醉ひ倒れたる上方者を引立てて案内するに、北八も倶に出で行けば、あとに彌次郎兵衛ひとり殘りた

るに、女「サア〳〵、お前さんもちとおちらへ。」彌「ドレ行きやせう。どこだ〳〵。」トいなから立つて行く。此の彌次郎いたつて見えものにて、かの煮しめたる如き褌しめたるが、ことの外氣にかゝり、ひよつと見付けられたら恥のかきあげならんと、懐の中にてそつとはづし、櫺子の窗より庭の方へ投り出し、後先を見廻し人の見ざるに安堵して、仲居の跡に引添ひ行く。かくて夜も更け渡るに奥の間の川崎音頭もおのづから靜まり、旅客の鼾の聲喧しく、鐘の音もはや七ッ響きて、鷄の聲萬戸にうたひ、夜も白みかゝる明窗の障子に驚き、起き上りて目をこすりながら、京「サア〳〵どうぢやいな。起きさんせ。もういのわいな。」北「彌次さん日が出たア。けへらねえか。」ト兩人、彌次郎が寢てゐる所へ來りおこす。彌次郎起きて、「ヤレ〳〵、ばつと一寐いりにやらかした。」おやま「これいし、今日もゐさんせ。」彌「途方もねえ。歸る〳〵。」ト皆々支度して出かける。おやまども送りて、廊下に出で、一人のおやま、障子窗より庭の方をのぞき、「これいしこれいし、アレ見さんせ、庭の松に褌が懸つてあるわいなア。」彌次郎の相方おやま初江「のいてかんせ、ほんにいやいな。誰ぢやいな。」彌「ハ、ア、こいつは可笑しい。羽衣松ぢやァねえ、褌かけの松も珍らしい。」北「彌次さんおめえのぢやァねえか。」初「ホンニそれいし、あのさんの褌ぢやないかいな。」ト彌次郎が額を見て笑ふ。彌次郎は脊に櫺子よりすてたる褌、庭の松にひつかゝりてぶらさがりゐるを可笑しく思ひながら、流石それともいはれず、平氣にて、彌「ナニ途方もねえ。あんな汙ねえ褌を、ナニおいらがするものか。」初「そぢやてテナ、昨夜わしがこの客さんのきりものをぬがすとてなア、よう見たがあないな色の褌ぢやあつたわいな。」京「オゝさうぢやあろぞいな。」彌「ばかァいはつせえ。おらア木綿褌は嫌ひだ。いつでも羽二重をしめてゐる。」初「オホヽヽヽ、譃やり、あれぢ

やいし。」北「いかさまおいらも見覺えがある。確かにあれだらう。それが譃なら、彌次さん、お前今裸になつて見せなせえ。今朝ア宿入の奴様で、振つてゐるに違へはねえ。」初「さうぢやいし、オホ、、。これいし、久助どん、その褌はお客さんのぢや。とてくだんせ。」ト庭の掃除をしてゐる男を呼びかけて、かの褌をつつかけて取り、障子の前へぐつとさし出し、「さあらば褌をまゐらさう。ソレ取らんせ　どうぢやいな。」初「オヽくさ。」北「ハ、、、彌次さん、手を出しなせえ。」彌「エ、情ない事をいふ。おれがのぢやアねえといふに。」北「そんなら、お前のをまくつて見なせえ。」ト彌次郎が帯解きにかゝれば、振り放してそのまゝ逃げ出して行く。みな〳〵「オホ、、、、、ワハ、、、ハ、、」ト大笑ひして迯り出る。三人とも此處を立ち出づると、彌「エ、いめえましい。北八めがおれに赤恥をかかしやがつた。」北「松に褌のぶらさがつたも珍らしい。」

ふんどしをわすれてかへる淺間嶽萬金たまをふる市の町

かくて妙見町に立歸りたるに、其の日は空も景色いと長閑なれば、急ぎ内外の宮めぐりせばやと、支度あらましにしてたち出づるに、行くほどなく今戻りし古市の上り口に、はや見せいだして、めいめい小屋に引立つる。古のお杉お玉がおもかげを、うつせし女の二上り調子、「ベンベラ〳〵、チャンテン〳〵〳〵。」ト無上に彈きたつる唄のしやうが何とも分らず。往來の旅人、この女の顔に錢をなげつくるを、それ〳〵に顔を振りよける。彌「あつちらの新造が靨へぶつつけてやらう。」ト錢二三文なげると、ちやつとよけて當らず。「ベンベラ〳〵。」北「ドレ、おれがあてて見せよう。ハ

アこれはしたり。」京「何として、お前方がどないに投りつけさんしても、てきらがさすもんぢやないわいの。」京「今度は見なせゑ。ハアこれわいな。」北「オヤ／＼、さしぐるみやらかしたな。それでも當らぬ。コリヤしやうがある。あんまりつらがにくい。」ト小さな石ころを拾ひて投げつくると、かの女ばちにちよいと受け、投げ返せば、彌次郎の顔へひつしやり。北「ハ、、、、こいつは大笑ひだ。」彌「ア、いてゑ／＼。」

とんだめにあひの山とやうちつけし石かへしたる事ぞをかしき

かくて爰を打過ぎ、中の地藏町にいたる。左の方に本誓寺といふ勝景の地あり。又寒風といへる名所もあり。五知の如來、中河原、さま／＼記すに違なし。それより牛谷坂道にかゝれば、女乞食共けはひ飾りたるが往來に錢を乞ふ。又十一二三の女子ども、紙にて張りたる笠の彩れるをかぶりて、「やてかんせ。お江戸さんぢやないかいな。さきな島さん、はないろさん、頰かぶりさん、やてかんせ。投らんせ。」彌「やかましい。つくな／＼。」こつじき「アノいはんす事いな。お江戸さんぢや。ちやと下んせ。」北「エ、ひつぱるな。ソレまくぞ／＼。」トよい加減にばら／＼と錢を投り出せば、乞食どもめい／＼拾ひて、「よう下んしたや。」ト一人人禮をいふ。この先に又七八歳ばかりの男の子、白き鉢卷をして、袖無羽織にたちつけなどはきたるが、手にさいはい、扇などを持ち踊る。後に編笠をきたる男さゝらをすり／＼、「ヤレ、ふれ／＼、五十鈴川。ふれや／＼千早振、神のお庭の朝清め。するやさゝらの、えいさら／＼、えいさらさ、ソレ、てんちうぢや、はりひちおや。やてかんせ／＼。」北「ソリヤやてかんすぞ、しかも四文錢だ。」ト四

文錢なら、つりを三文くだんせ。」彌「こいつ蟲のいいことをいふ。時にこの橋は宇治橋といふのか。」京「さよぢや。アレ見さんせ、網で錢をよう受けてぢや。」北「ドレ／＼。」ト橋の上より覗きみれば、竹の先に網をつけ、旅人の投錢を受けとめる。京「彌次さん、小錢があらばちつと借さんせ。」ト彌次郎が錢を借りて、さつ／＼と投りなげる。下には皆々うけとめる。「えらうおもしろいな。よう受けくさる。もちつと投つてこまそかい。コレ北八さんお前もちと借さんせ。ソレまたほるぞほるぞ。ハヽヽヽ、えらい／＼。」彌「コレ京のお人、おめへ人の錢ばかり取つて投げる。ちとおめへの錢をも投げなせえ。」上「よいわいな。お前方の錢ぢやてて、わしが錢ぢやてて、變りやせんわいの。」彌「それだとつて、餘りあたじけねえ。」上「ナニ、わしが此の前參宮した時はな、聞かんせ、偉い阿房ぢやあつたわいな。こゝで、錢五貫か十貫投つたわいの。あんまり顏の憎い程よう受けをるさかい、何ぢやろと今度は網破つてこまそと、懷に丁銀が一枚あつたを、ツイと投つてこましたら、やつぱり網で受けくさつたさかい。コリヤどうぢやいな、丁銀投つたら網が破りよかと思うたに、根からたはいぢや。どして網にとまりくさつた知らんというたりや、下にをる奴めが、ソリヤとまる筈ぢやとぬかしくさる。何故ぢやといふと、ハテ網の目にかねとまるぢやと、えらう私をへこましくさつたわいの。ハヽヽヽ、サア／＼行こわいな。」

なげ錢をあみにうけつゝ往來の人をちやにする宇治橋のもと

是れより內宮一の鳥居より四ッ足御門、さるがしらの御門を打過ぎ、御本社に額きたてまつる。是れ天照皇大神にて、神代よりの神鏡神劍をとつて、鎭座したまふところなりと。

日にましてひかり照りそふ宮ばしらふきいれたまふ伊勢のかみかぜ

こゝにあさひの宮、豐の宮より始めて、河供屋ふるどの宮、高の宮、土の宮、其の外、末社ことごとく記すに遑なし。風の宮へかゝる道に、御衣裳川といふあり。

引きずりていく代かあとをたれたまふ御衣裳川のながれひさしき

すべて宮めぐりの內は、自然と感涙肝に銘じて、ありがたさに眞面目となりて、洒落もなく無駄もいはねば、暫くのうちに順拜をはりて、もとの道に立出で、頓て妙見町にかへり、こゝにてかの上方者と別れ、彌次郎北八兩人のみ、藤屋を晝だちとして外宮へまゐる。これすなはち豐受大神宮なり。天神七代のはじめ、國常立尊と申せし御神なり。神璽の宮、寶劍の宮、その外あまたの末社を拜みめぐりて、天の岩戶に登りたるに、彌次郎兵衛いかゞしけん、しきりに腹痛みてなやみけるゆゑ、そうそう此處をたち、傍に休みて丸藥など用ゐる、とかくするに堪へがたければ、いそぎ廣小路にいたり宿をからんと、そこゝを見廻すうち、ある宿屋の亭主「モシ〳〵、御泊りぢやおませんかいな」北「アイ、つれの者が少し蟲がかぶるさうだから、宿をお賴み申しやす。」亭主「サアお入りなさんせ。」

ソレおなべ、奥へお供せんかいやい。」女「ようお著きでおます。」北「サア彌次さん上んなせえ。」彌「アイタ、、、。」北「エ、汗ねえ顔をする。おめへコリヤア何ぞの罰が當つたのだらう。」彌「ナニサ、罰をくつた覺えはねえ。大方今朝の飯が中つたのだらう。」亭「おまんまも上りつけなさらんと、中る事がおましよわいな。」北「エ、コリヤ、意氣地のねえ事た。サア／＼奥へ／＼。」彌「アイタ、、、。」ト北八に介抱せられ座敷に通る。亭主も荷物をはこび、「さぞ御難儀でおましよ。お藥でもあがりましたか。幸ひ私處の妻が、今月臨月でおますがな、昨日からちつとすぐれませんので、いんま醫者樣をよびに參じたが、あなたも見てお貰ひなさんせんかいな。」彌「それはどうぞお頼み申しやす。」亭「かしこまりました。」ト勝手へ立つて行く。彌次郎は頻りに苦しがる樣子に、北「どうだ、湯でも茶でも、酒でも飲みたくはねえか。」彌「ばかァいふな。アイタ、、、無上に腹がごろ／＼鳴る。北八雪隠はどこにある、尋ねてくりや。」北「おめえどこに置いた、袂にでもねえか。」彌「阿房つくぜ、ナニ雪隠が袂にあるもんだ。どこにあるか見てくりやといふ事よ」北「ハァさうか。ドレ見てやらう。あつた／＼、アレ縁側の先に落ちてある。」彌「まだぬかしやァがる アイタ、、、。」トやう／＼の事に立上り用達に行く。此のうち宿の女、勝手より出で、女「ハイお醫者樣がお出でたわいな。」北「サア／＼これへこれへ。」ト此の内、近所の醫者の弟子と見えて、焦茶の木綿紋付に、黒縮緬の肩のひけたる羽織をひつかけたる坊樣、「エヘン／＼、これは不順な天氣あひでござる。ドレお脈を。」ト北八のそばへすわり、北八が脈を見ようとする。北「イエ、私ではござりませぬ。」いしや「ハテ、達者な人

の脈から見くらべねば、病人の脈がわからんわいの。先づ貴様お見せなされ。」ト北八の脈をとり、暫く考へ「ハヽア、なるほど、貴様なんともないやうだや。」北「さやうでござります。」醫者「お食はどうだや。」北「ハイ、今朝ほど飯を三膳、汁を三ばい食べました。」醫者「さうであろう〱。平はおほかた一杯だやあろ。かへては參るまい。」北「さやうでござります。」醫者「さうだやあろ〱。此の脈體では、どこもなんともないやうだや」北「さやうでござります。」醫者「ナニトよう當りましたらう　およそ醫は意なりと申して、脈體を以て勘考いたすところが第一でござる。氣遣ひない。もはやお暇致さう。」北「モシ〱、病人を御覧じて下さりませ。」いしや「ほんにさうだやあつた。わしは變つた癖で、とかく病家へまゐつても病人の脈を見ることを、どうも忘れてならんわいの　しかし見ずとも知れた事だやが、ついでに見て進じよ。病人はどれにござる。」北「ハイ、たゞいま雪隱へ參つてをります。コレ〱彌次さん、お醫者様がござつた。早く出なせえ〱。」ト大きな聲をすれば、彌次郎、雪隱の中から、彌「イヤまだ出られぬ。お醫者様、どうぞこれへお出で下さりませ。」北「エヽ、あつさうな。お醫者様がそこへ行かれるものか。無躾な事をいふ。」彌「そんなら、いま出る〱。」トやう〱雪隱より出づれば、醫者しかつべらしく、彌次郎の脈を見て、「ハヽア、貴公はコリヤ血の道だやわいの。とかく臨月などには起るものだや。」彌「イヤ、私、孕んだ覺えはござりませぬ。」醫者「イニ懐胎でない。ハテめんえうな。イヤコリヤわしが師匠がわるい。廣小路の伊賀越屋から呼びにおこ

したが、あこの病人は産月ぢやさかい、大方血の道が起つたのぢやあろ。そのつもりで薬を盛るがよいと教へておこしたが、そりや貴公の事ではなかつたわいの。」北「さやうでござりませう。血の道はこの内儀の事でござりませう。この男はそれではござりませぬ。」いしや「さよぢや。コリヤ私が間違ひぢやわいの。しかし何なら、貴様もそれにして置かんすと、薬盛るにも一緒にして、面倒にならうてよいがな。」北「なる程、コリヤお醫者様のおつしやる通り、彌次さんおめへも血の道にして置くがいいね。」彌「飛んだ事をいふ。男に血の道があつて堪るものか。」醫者「イヤ〱、ほかの病氣もおもしろかろ。何もわしが稽古の爲ぢや。一體貴様は何病ぢや。」彌「私は先刻から蟲がかぶつてなりませぬ。」いしや「大方コリヤ、腹の中でかぶるぢやあろ。」彌「ハイ、おつしやる通り、腹の外ではござりませぬ。」いしや「さうぢやあろ。コレ〱女中、供の者に薬箱おこせというて下んせ。」女「ハイ〱畏まりました。イヤもし、お供の人は見えませんわいな。」いしや「見えん筈ぢや、つれて來んさかい。薬箱は私がもて來たわいの。」トさげて來た風呂敷包を開き薬箱を取り出す。女「オヽをかし。あなたは竹の匙で煎豆盛るやうにしてぢやわいな」北「ハア聞えた。藪醫者様だから、そこで竹の匙をお使ひなさると見えた。そして貴方のお薬袋には繪が畫いてござりますが、どう致したのでござりますね。」いしや「イヤお尋ねで面目ないが、生得手習を致した事がないさかい。」北「ハヽア、あなた無宿ぢやな。」いしや「左樣々々。かいもく字が讀

めぬ。むしくぢやさかい、それでかやうに藥の名を繪に畫いておきますぢやて。」北「これはおもしろい。さやうならその道成寺の繪は何でござります。」いしや「コレハ桂枝ぢやて。」北「閻魔樣は大かた大黄でござりませうが、コノ犬が火に當つてをるのは。」いしや「陳皮々々。」北「コノ產婦の側に小便してゐるは。」いしや「知れた事、山梔子。」北「印判に毛の生えたは。」いしや「半夏。」北「鬼が屁をひつてをるのは。」いしや「それは枳殼。」北「ハヽヽヽ、おもしろい〳〵。時におくすりは。」いしや「煎じやう常のごとし。生薑一へぎお入れなさい。」北「山葵ではわるうござりますか。」彌「ばかアいふな。これは有りがたうござります。」ト此の內、なにやら勝手の方俄に騷がしく、人の足音とん〳〵ひゞき、亭主のこゑとして、「コリヤ〳〵、おなべやい〳〵。取上婆どのへ人をやれ。ソレ久介は湯をわかせ。はやめはあるか。はやう〳〵。」ト騷ぎたつうち、こなたにはまた彌次郎が頻りに腹痛みだして、「アイタタタヽ。」北「彌次さん、どうだ〳〵。」いしや「コリヤ堪らん〳〵。病人の側にはをられぬ。」トさう〳〵逃げ出してかへると、勝手の方には、ヤレ取上婆樣のお出でと、下女のお鍋がうろたへて、婆の手をとり、是れへ〳〵と、彌次郎が蒲團かぶつて寢てゐる處へつれて來ると、取上婆「これはしたり。寢てゐるさんしてはならんわいの。サア〳〵起きさんせ〳〵。」ト彌次郎を引きずりおこせば、顏をしかめて、「アイタ、ヽヽヽ。」ばゞ「しんぼさんせ、コレ、そこなひと、菰はどうぢやいな。」彌「アイタ〳〵。」ばゞ「そこぢや〳〵。」トこの婆もうろたへた上、一體目が少しうとく、內の產婦と間違へ、彌次郎が腰を引立て〳〵、「サア〳〵、皆來さんせんかいな。コレ〳〵、こゝへ來て、誰ぞ腰を抱いて下んせ。さあ〳〵早う〳〵。」トせきたつるにぞ、北八は呆れ返りて、可笑しく、こりやどうしをる知らんと、とぼけ顏で彌次郎が腰を抱きて引立つれば 彌「コリ

ヤ「北八どうする。ア、痛え／＼。」はゝ「そないな氣の弱い事ではならんわいな。ぐつといけまんせ、いけまんせ。」彌「こゝでいけんで堪るものか。雪隱へ行きてえ。放した／＼。」はゝ「雪隱へいてはならんわいの。」彌「それでも、こゝでいけむと、こゝへ出る。」はゝ「出るから、いけまんせといふのぢやわいの。ソレウ、ンウ、、ン／＼。そりやこそ、もう頭が出かけた。」彌「アイタ、、、、そりや子ではねえ。それを其樣に引張らしやんな。ア、コレ痛え／＼。」トもがくを構はず婆はぐつと引張れば、彌次郎腹をたて「ヱ、この婆め。」ト横面をはり飛ばす。ばゝ呆れて、「この血違は。」トむしやぶりつく。かゝる騷ぎの最中、勝手の方には、はや女房の安産と見えて、赤子の泣く聲する。「おぎやァおぎやァおぎやァ。」彌「そりやこそ生まれた。イヤこゝぢやない。どこぢやぞいな／＼。」ト狼狽へ廻る中、彌次郎も頻りに痛み雪隱へ走りこむ。亭主は勝手より飛んできたり「コレ／＼婆樣、先きにから尋ねてをるに、もう生まれたわいの、早う／＼。」ト婆を引立てつれ行けば、手の方はざゝんざのこゑ、勝「めでたい／＼。三國一の玉の樣な、男の子が生まれた。」ト喜びの聲とともに、亭主にこ／＼して立出で「コレハお客樣お喧しうござりませう。先づ私妻も安産致しました。」トいふ内、彌次郎も雪隱より出で、「さてさてめでたい。私も今雪隱で、思入れ安産したらば、忘れた樣に快くなりました。」亭主「それは貴方もおめでたい。」北「お互に、めでたい／＼。」トこれより喜びの酒汲みかはし、取上婆の間違ひやら何やらかやら話しあひて、大笑ひとなりける。めでたし／＼。

東海道中 膝栗毛五編追加 終

膝栗毛六編序

長いは〳〵、此の作者の長き事、支體は心と倶に長く、鼻の下は褌のさがりと侔しく長し。酒のあとをひくことは、行坐を飛脚にやりたるよりも長く、借金をひきずる事は、痳病やみたる牛の小便よりも長し。さるに仍つて膝栗毛の尾に尾をひいて、長道中の今に歸らず、漸く五編目に至りて伊勢路に筆をおくと雖も、例の長尻しびりをきらして、京へ登るの趣向を考へ、下手の長噺を七編とし、御見物が長喜世留の掃除し給ふ紙屑を賣出すも、固より爪の長き熊手性、長居はおそれも承知之助、ひとつ長屋の佐次兵衛とは鄰同士の彌次郎兵衛、せめて四國は遯らずとも、京大阪はあたりまへ、是れだけのところ御辛抱御一覧のほど、ハイお頼み申しますと志可伊布。

維時文化丁卯春正月

十返舎一九

附言 幷 凡例

或人予に謂つて曰く、此の膝栗毛、追々足下の骨折見ゆれども、五編目伊勢參宮までにて、大かたは事足れり。夫れ花は半開に詠め、酒は微醉にのむがよいと譬の通り、ものは十分ならざるを却つて壯觀と心得べし。不佞は足下が贔屓ぢやから云ひますが、今年も六編を書いたといふ事ぢやが、よしにすればよいになア。足下が胸の奥行も、もう大概は知れてある。此のうへ掃き出さば鼠糞やら鼻かんだ紙やら、色々の穢いもの引き出して、はては人の鼻に袖覆はするの罪にあはん。予答へて曰く、趣向は塵芥の如く、今日掃いて今日積る、胸中掃溜にひとしければ、狗の糞のしやれたるも、南瓜の花のむだなるも、作者が智慧のこやしにして、葛西船につむとも盡きず。そは御見物の贔屓組から、こゝの塵も掃いたがよい、あそこも埃だらけぢやと、こちの氣のつかぬ處ををしへて下さる岡目八もく、すかさず是れへと反古張團扇にうけとめた、塵埃の中から趣向は樣々、既に五編凡例にいへるが如く、彌次北八が髮月代をせし處なし、東都をたちしより日數を經て、其の事なきはいかにぞやと、或人の批判し給ひし事ありしを、オットまかせと、すぐさま追加妙見町泊りの趣向とせし事、御存知の通りなんでも人の懷をあてにする、そこが金ぢやと版許の慾心房がひとつ穴の狐、化あらはした

處が三文が智慧もない、作者のはらわたかくのごとし。

さて又此の書伊勢路より大和廻り御約束のところ、一足飛びに伏見から京大阪とやらかしたるは、和州名所巡覽の滑稽、其のおもむき珍らしからず、こぢつけあまりくだ〳〵しければ、此の所縫上げをせしうへ〴〵つとはしよる。

大和路より大阪へ出る順道なれども、予思ふことあれば、先づ花洛（みやこ）見物を前とし、大阪を後にす。京名所こと〴〵くしるすに際限なければ、たゞ祇園淸水知恩院、大佛さま御らうじたかえ、金閣寺拜見あらば、よい傳（つて）があるぞえといつたぐらゐの事をしるす。故に此の次ぎ七編は、京都見物をはり、千本通りより淀に出で、八幡山崎に參詣し、佐田守口の邊にてをはる。

道中膝栗毛六編

東都　十返舍一九　著

諺に云ふ、旅の恥は書き捨てて行く落書の國所は欄干にとゞまり、おのづから往來同國の人の目を慰め、被り行く聾の笠印は、わざとおのれ一人の心を喜ばしむるも、皆共に驛路のわざくれ、相宿の木枕に結ぶ緣は出雲の帳外、二寶荒神の鄰同士は、長家附合の外にして、其の心々に出る儘をしやべり、あくまでに喰ひ、掛取道連にせざれば三十日の愁へにあはず。米櫃脊負つて出でざれば鼠追ふ世話もなく、名にしおふ東男も薩摩芋に髭を撫で、花まだき京女郎も團子の串に頭をかき、知らぬ火のつくすたはけに缺落して走るあれば、雲居路の道草食ふ遊山旅ののろつくあり。立松の根に腰打ちかけて金毘羅參りの樽を開き、街道の眞中にひよくり出して、諸社順拜の鈴口を振る、臀中の有様まことに命の洗濯もの引つぱり、股引草鞋に、何國までも足に任する雲水の樂しみえもいはれず。こゝに東の都、神田の八丁堀に住む彌次郎兵衛北八といへる二人連のなまけもの、神風や伊勢參宮より足曳の大和路を廻り、靑丹よし奈良街道を經て山城の宇治にかゝり、こゝより都におもむかんと急

ぎける程に、やがて伏見の京橋にいたりけるに、日も西にかたぶき、往來の人足はやく、下り船の人を集むる船頭の聲々やかましく、「サア〳〵今出る船ぢや。乘らんせんか。大阪の八軒家ぢや。乘て行んせんかい。」彌「ハヽア、これがかの淀川の夜船だな。ナント北八、京から先へ見物するつもりで來たが、いつそのこと此の船に乘つて、大阪から先へやらかさうか。」北「それもよからう。モシ乘合もありやすか。」せんどう「さうさかいの。乘るなら早う乘らんせ。急に出すさかい。コレ〳〵草鞋といて乘らんせ。偉いへげたれぢやな。」北「エ、何をぬかしやァがる。氣のつえゝべらぼうだ。」彌「コレ北八、手めへの包も一緒に、おれが風呂敷に包んでおかう。」北「船頭さん、コリヤァどけへ坐るのだ。」せんどう「そこな坊樣のねきへ割込まんせ。」北「御免なせい。ヤアえいとな。」ト二人ながら艫の間へ割り込み坐る。のり合「コリヤえらう詰めくさつた。せんどうさん、蒲團一つ借さんせ。」せんどう「ソレ取らんせ。サア〳〵皆えいかな。下にゐてくだんせ。苫ふくさかい。」あきん人「錢かいなされ。錢はよござりますかな。」同「みづから砂糖餅、みづからさたうもち。」同「燗酒よござりますかいな。あんばいよし〳〵。」ト此の内船頭も苫をふいてしまひ、竿さし出して、うた「ふねは追風に帆かけて走る、われはこがれて身をあせる。ソウレソレ〳〵。なんぞい。コリヤえらう空がわるなつた。降るか知らんわい。」のり合「船頭さん、昨夜はちうじやう島ぢやあろ。精進が惡いさかい、コリヤ雨ぢやあろぞいのハヽヽヽ。時にどなたも、平座かいてるなさら

んか。今の内あんぢようせんと、後に工合がわる成るさかい。」京の人「コレ、おまいちと退いてかさんせ。粽の上に臀かつてぢやわいな。」大阪の人「コリヤ不調法、とかく乗合は、お互に何ぢやあろと、不肖してくれなされ。」京「よいわいな。おまい大阪はどこぢやいな。」大阪「わしや道頓堀。」京「かいな、どとんぼりの衆は皆藝子ぢや。ナント、こゝで何なと一つやりなさらんかいな。」長崎の人「コリヤよかたい、船中のねぶり目ざましに、彼方衆一つヅ、藝能やらしやつたらよかたい。うんどもは長崎のもんぢやが、能毛川島のぼうぶら枕で、かみさしぼつきりでも遣らうばいよす。」越後の人「コリヤえいことんし、わしどもは越後のもんだが、長崎の兄さがやらしやつたら、わしも國風のおけさ松坂でもかたるべいとこと。」北「こいつはおもしろえ。マア長崎のおきやくから始めなせえ。」長崎の人「よかよか、これしこやらうばい。」ト無上に手を打ち叩き、うた「おまへよかはたわしよふり捨てて、よんによう色女すとちぎらんす。コリヤ、蛙が飛ぶなら桶かぶせ。それでも飛ぶならきねおけ／＼、コリヤ／＼／＼。なんぢやいな。」のり合「イヨ／＼、えらでけぢや。」越後の人「わしどももやるべい。みんなそれから、トコトントコトンと、はやしてくれさつしやい。」長崎「よか／＼。合點あらう。」乗合みな／＼手を打ちたゝき、「トコトン。」あちごうた「おちよな、よつばらかんだ、まめでたかおちよな。」乗合みな／＼「トコトン／＼。」おちごうた「新潟一ばん、水牛のくしを。」のり合「トコトン／＼。」おちごうた「主にさつくれべいと、六百文でもとめた。」

のり合「トコトン〳〵。」彌次「ハ、、、、おもしろえ〳〵。」京「イヤ、江戸のお客になんぞ所望しよぢやないかい。」彌次「ソリヤもう、琴、三絃、鼓弓、なんでもちつとづゝはやりやすが、こゝにやア、そんな物はねえからはじまらねえ。」京「おまいの口跡では聲色が出るぢやあろ。誰なと江戸役者やりなされ。」彌次「聲色も二十や三十ばかりは使ひやすが、誰にしよう、源之助か三津五郎か、イヤ高麗屋にしやせう。しかし江戸役者は、お前方にやァ分らねえから詰らねえ。」大阪「ハテえいわいの、一つやりなされ。」彌次「みそぢやァねえが、聲色は江戸でも一番といふ男さ。誰でもうしろを唄ふ人があると、すつはりやつて見せるがなア。」京「後を唄ふとは、呼出しのことかいな。わし遣ろわい。口三味線ぢや。チ、ツ、ンチンシヤン。」うた「これはおえどの堺町や葺屋町に名も高き、役者聲色はどうぢやいな。誰ぢやいな。松本幸四郎でせい。チ、、、チン。」のり合「イヨ松もとオ。」彌次「まんまと奪ひとつた此の一巻、これさへありやァ、出世の手がゝり、大願成就、かたじけない。」京「コリヤやくたいだや、わしや江戸に五六年ゐて此の間戻つたわいな。高麗屋はそないな口跡ぢやないもせんもの。」大阪「わし一つやろわいの。」京うた「これはねつからでけませぬ。さてまたつぎの役者、名は誰ぢやいな。」大阪「やつぱり今のぢや。」ト此の大阪者は江戸にもゐて、聲色も滿更でなければ、わざと文句もそのまゝにていふ。大阪「まんまと奪ひ取つた此の一くわん、これさへありやァ出世の手懸り、大願成就かたじけない。トハ無調法。」のり合「イヨかうらい

やア」京「コリヤきよといノ＼。大阪のお方のがほんまおちや。おまいのはかうらいやとは聞えんわいな。」彌「聞えん筈だ。コリヤア信州松本の者で、幸四郎が弟子の胴四郎が聲色だ。」京「そんなこつちやあろございな。ハヽヽヽ。」ト船中、彌次郎のへこんだのを可笑しがりどつと笑ふ。彌次はしよげてだんまり。此のうち船ははや淀を過ぎて、彌「時に北八、飛んだ事を忘れた。船に乗る前に小便すればよかつたものを、例のとほり船ではどうもあぶなくてしにくい。困つたものだ。コレせんどうさん、ちよつくり船をつけてもらひてえの。」せんどう「あがるのかいの。」彌「小便々々。」せんどう「エヽ、ふなべりへちよノ＼こなつて、ひよぐらんせノ＼。」彌「それが出來りやア、いひ分はねえ。アヽもうノ＼、出さうになつて來た。」トうろノ＼する。此の彌次郎北八、艫の間と胴の間の境のところにゐるが、胴の間三人前借切にして、十二三の前髪つれたる隱居らしきぢいさま、宵より彌次郎北八と話などしてゐたりけるが、先刻より蒲團かぶりて寢ころびながら、いんきよ「モシノ＼、おまい小用にお困りなら、不躾ながらわしが尿瓶借してあぎよかいな。コレノ＼長松よノ＼、イヤこいつもう寢くさつたさうだや。モシそこらにあろざいの、だんない、そつちやへ持てかんせ。」彌「それはあり難うござりやす。」ト暗がり紛れに手を探り廻せば、箱火鉢の後に圖の如くの土瓶あり。上方にてはこれをきびしよと云ふ。彌次郎これを尿瓶と心得、取出して、江戸「ハヽア、こゝにござりやした。こいつは尋常なしびんだわえ。」ト手の所を口とこゝろえ前にあてがへども、穴なければ、さては口にこめてある栓が、奧の方へ引込んだものであらうと、指をいれて突きまはすうち、頻りに小便がもるやうになり、心はせく、蓋の落ちたをさいはひ、ハヽア、こゝにも口があると、上の方からシウノ＼と、小便をしてしまひ、「ハイ、有りがたうござりやした。」ト鄰へそつとやつておく。隱居やがて起きなほり、「コリヤえらうさむなつた。長松、おきて火をとちさんかい。酒

なとやろわい。コレ、目イさまさんか〳〵。コリヤやくたいぢや。」トそこをさぐりまはして、火ばちの火をつけ木にうつし、小提燈をともして船梁にぶら下げ、きびしよを取つて、「ヤァ、コリヤ何ぢやい。ハ、ァ、茶をたくつもりで水がな入れて置きをつたさうぢや。」トいひつゝ苫の開からきびしよを出し、彌次郎がしこんだ小便を川の中へ打明けてしまひ、すぐに樽の酒を入れ火鉢の上にのせながら、「モシ、江戸のお客、酒一口どうぢやいな。」北「コレハお嗜みでございやすね。」いんきよ「もうでけたさうぢや。」ト茶籠の煮しめなど出し、隠居、杯に少しついで、「ドレお燗見ましよかい。イヤこれはけたいな香がする。ペツ〳〵、コリヤ酒が悪なつたのか、よもやそぢやあろまい。一つおまい飲んで見てくだんせ。」ト北八に杯をさす。北「ハイ、これは、オト、、、。」ト引受けてぐつと飲んでしまひしが、何とやら鹹ばゆきやうにて、變なにほひのする酒だと心に思ひながら、胸をわるくして撫でさすり〳〵「ハイいたゞきました。」いんきよ「お連れのお方にあげてくだんせ。」北「そんなら彌次さん、ソレ。」ト杯をまはす。彌次郎は先刻よりこれを見て、不思議におもひ、なんでもあれはおれが小便をしたしびんだが、それで、酒の燗をするといふは、どうしたものだ。但しはおれがそさうで、しびんと思つて小便したのか。何にしても、とんだ事をしたと、心の中に、二人が顔をしかめるを見て、可笑しさ堪へられず。それと知らずに、あの中の酒をば北八がのみたるを、噴きだすほど可笑しく、じつと堪へゐたりし所、北八杯をさしければ、彌「イヤ、おらァ御免だ。なぜか今宵は酒が飲みたくねえ。お杯ばかり。ハイそれへ上げませう。」いん「あがらんのかいな。」北「ナニあびる位さ。彌次さんなぜ飲まねえ。酒といふと一番に咽をぐい〳〵するお前が、コリヤ何でも變ちきだわ。」いん「ハ、ァ聞えたことがあるわいの。今そつちやのお方が、暗がりで尿瓶を間違へて、この中へ小用しこみやさんせんかいの、どうも小川臭いとおもうたが、コリヤおまい、さうぢやさかい、飲まんのぢやあろぞ

い。」北「ソリヤ知れやせん、桑名のわたしでも、此の人が船の中で小便して、大騒ぎをやりました。そのくらゐの粗相はしかねん人さ。エ、汗ねえ。ゲエイ〳〵。」いん居「道理こそ、きびしよに何か一はいあると思うたが、わしや又此の童めが、水入れておきをつたと思うて川へほつたが、どうも小用のおどもりがのこつてあつたものぢやあろぞい。」北「飛んだこつた。胸がむか〳〵する。」いん居「ア、こりや、ゲエイ〳〵。長松よ脊中たゝいてたもッ。ア、むさやの。ゲエイ〳〵。」彌「これはお氣の毒な。モシなんぞ藥でもあがりやし。しかし小便のあたつたには何がよからう知らん。モシ〳〵どなたぞ丸藥でも御所持なら、少しくださいましな。」のり合「ハイどうも小便の當つたによい藥は持ちませんわい。」彌「ソリヤア困つたものだ。」北「彌次さん、苫をちいと捲つてくんな。」彌「どうする。」北「小便を。」彌「するのか。」北「吐くのだわな。」彌「ドレ、船縁へぐつと顔を出してやらつし。おれが捕へてゐてやらう。ソレよしか、シイ引〳〵〳〵。どうだまだか。エ、川の中だから犬がゐねえでわりい。」北「ナゼ、犬がゐるとどうする。」彌「てめえ小便を吐くのに、白コイ〳〵〳〵〳〵と呼んでやるわ。」北「エ、ばかァつくす。ゲエイ〳〵。」トこのうち、隱居はやう〳〵に吐いてしまひ、川の水にうがひし口を洗ひて、「どうぢや、そつちやのお方はえいかいの。」北「どうやらかうやら能くなりやした。」ト口をそゝぎて眞面目な顏。彌次郎は心の中にをかしさ隱してゐる。隱居結構人と見えて格別腹もたてず、いん居「イヤモウ、お互にどえらい目にあうたこつちや。口直しに後の酒やりたいが、燗をするものがなうなつ

た。どうせうぞいの。」長まつ「そしたら、こつちやにあるほんまの尿瓶で、酒の燗いたしましよかい。」いん「ホンニさうぢや。ほんまの尿瓶の方が綺麗ぢや。藤の森で、今日買うて來たまゝで、まだ一度も小用せんさかい、それで燗せうわい。」北「滅相な、あやまりやすね。」彌「ばかアいふな。茶は土瓶の茶がうまし、酒の燗は尿瓶の事だ。」北「ナニ、尿瓶の酒が飲めるものか。」彌「そんなら、モシ御隱居樣、やつぱり今のきびしよとやらになさいませ。」いん「きびしよは川へほつたわいの。尿瓶の方が新しいさかい、綺麗ぢやわいの。」ト樽の酒を尿瓶にあけて火鉢のうへにかけて。「長松、そこな茶椀おこせ。サア〳〵ほんまの酒ぢや。ソレおまい方差そかい。」ト茶椀をさし出す。彌次郎ちやつと引きとり、「いたゞきやせう。」いん「蟲のえいお人ぢや。肴あぎよかい。煎殼あがるかいな。」彌「ハイ〳〵、これは何でござりやす。」いん「ソリヤ鯨の油とつたあとの身ぢやさかい、煎殼といふわいな。」彌「いいものでございやすね。サア北八差さうか。」ト北八へ茶椀をまはし、尿瓶を取りて注ぐ。新しき尿瓶とききて、なるほど大事もあるまいと、一ぱい引受けてぐつと飲んでしまひ、「小便のまざらぬ酒は、また格別だ。ハイあげやせうか。」いん「みな乘合のお衆へ一つづゝ上げてくだんせ。」北「さやうならお鄰の。」ト次にゐた越後の人にさす。ゑ「ヤレふとつ、いたゞくべいとこと。」ト茶椀をとる。北八尿瓶から注ぎに懸る。「ソリヤ小便のするやきたごぢやァござらないか。」北「ナニ、この尿瓶は新しいから綺麗さ。」トついでやればぐつと下して、ゑ「ア、えいことん〳〵、サア長崎の兄貴さ、やらつしやるか。」ト茶椀を廻せば、長崎の人うけて、「ナイ、コリヤ氣のどんくうなことばよオ。」いん「だ

んだんそつちやのおかたへ上げてくだんせ。」長「しから、あんたへさんじますたい。」トそのつぎの人へさす。これは病人と見えて、色の青ざめたる垢だらけの男、襟に眞綿をまきて、蒲團によりかゝり、もつとも四人前ばかり借切にして、介抱のおやぢと二人づれにてゐたるが、病人「わしや酒はいかんさかい、こなん一ついたゞかんせ。」ト供のおやぢにゆづる。先刻より尿瓶の綺麗なる事もきゝゐたることなれば、一向構はず、おやぢ「モシ/\、憚りながらその尿瓶こつちやへ下んせ。手酌にやりましよかい。」ト此のおやぢ酒ずきと見えて續けて二杯やらかし、だんだん茶椀をもとへ送り返せば、彌次郎兵衞取次ぎて、彌「サア、隱居樣あげませう。」いん「イヤ、お前一つ飲んでおこさんせ。」彌「ハイ/\、さやうなら、モシ、その尿瓶こちらへ。」病人の所のおやぢ「ハイ/\それへ。」ト尿瓶を送りもどすと、北八取つて彌次郎兵衞へなみなみと注いでやる。彌次郎一息にぐつと飲んで、茶椀をなげだし、彌「エ、、、こりや飛んだこつた。ゲエイ/\。」北「彌次さん、どうした。」彌「どうしたどころか、コリヤ酒ぢやアねえ。小便だ/\。」おやぢ「ハ、、ア、これはしたり粗相しました。わしがとこの御病人の尿瓶と取り違へました。サア/\酒のはこゝにある。ソレとりかへて下んせ。」北「ハ、、、、こいつ大でき/\。」彌「エ、もう、どうしたらよからう。此の位なら、おれが小便を飲むはまだしも、アノ病人めが、エ、惡臭い。ゲエイ/\、ペツ/\/\。」北「ハ、、、あの病人の顏を見な。瘡と見えて頭から首筋のあたりまで、じく/\。」彌「エ、、、もういつてくれるな。咽がさけるやうだ。アヽ、苦しい。ゲエイ/\。」北「とかくおめへは小便がたゝる。船ではもう禁便にするがいい。そこで一首うかんだが、どうだ/\。」

せうべんを人にのませたその報いおのれも呑んでよいきびしよなり

此の騷動に船中おの〳〵眠りを覺し大笑ひとなる内、船は早ひらかたといへる處近くなりたると見え、商船こゝに漕ぎ寄せ〳〵、商人「飯くらはんかい。酒のまんかい。サア〳〵皆起きくされ。ようふさる奴らぢやな。」ト此の船につけて、遠慮なく苫ひきひろげわめき立つる。この商船は、ものいひ、がさつにいふを名物とすること、人のよく知る所なり。賣言葉に買言葉なれば、のり合「コリャ飯持てうせい。えい酒があるかい。」北「いかさま腹がへつた。こゝへも飯を頼みます。」商人「汝も飯食ふか、ソレ食らへ、そつちやの童はどうぢやいやい。ひもじさうな顏してけつかるが、錢がないかい。」彌「イヤこのべらぼうめ、何をふざきやアがる。」のり合「この汁は、味ない代り、根からぬるうていかんわい。」商人「ぬるかア水まはして食ひされ。」のり合「何ぬかすぞい。そして此の芋も牛蒡も腐つてけつかる。」商人「その筈ぢや。えい所は皆内で焚いてくてしまふわい。」長崎「イヤ此奴、大膽なやつよオ。いかなちうつるばつてん、そのぬかしやうばい。」ふち「天窗打してやつくれじいか。」商人「ちよこざいぬかさずと、はやう錢おこせいやい。コレ、そこな親仁錢どうぢやい。」おやぢ「この奸盜めらは、たつた今取りくさつて、コリヤ早ういねやい。定めしおどれが女房は、晝は袖乞して生米かな食らふさかい、今頃はぶつ〳〵と腹ふくらして、白い泡ふいてゐるよぞい。」商人「オヽ、汝が内は大方四條の蒲鉾ぢやあろ。雨が降りさうぢや。水の出んさき早ういにくされ。」彌次「イヤ、こいつらア、いはせて置

きやァ途方もねえ奴らだ。横つつらア張り飛ばすぞ。」のり合「コレ〳〵、おまい腹たてさんすな。アリヤ、こゝのあきなひ舟は、あないに物をぞんざいにいふのが名物ぢやわいの。」彌「それだとつてあんまりな。」商「ワァイ、あはうよ〳〵。」ト漕ぎだして行く。彌「コリヤ待ちあがれ。阿房たァ誰が事た。」ト力んで思はず立上がる拍子に、乗合の膝をふんで、どつさりこける。備後の人「アイタ、、、、コリヤ私が膝頭ふんだ。」長「うん共が、頼ふう、大分うつた。アイタ、、、。」彌「コリヤ御免なせえ。」トやう〳〵に坐る。かくて船はひらかた過ぎたる頃、雨催ひの空俄に暗くなり降り出し、あはやと見るまに篠をつく大雨となり苫を漏れば、乗合は上を下へと騒ぎたち、船頭もかくては、はたらき自由ならず。やがて堤に船を漕ぎよせ、暫くかゝりて見合はせけるが、こゝは伏見と大阪の半途にして、上り船も下り船もみな落ち合ひ混雑し、かたびしと岸によりて今やと霽れを待ちゐたるに、凡そ一時餘り過ぎたると思しき頃、漸く雨やみ雲きれて、月の影八幡山にさし出でたるに、船中おの〳〵勇みたち、彌次郎北八も苫ひきあけ顔さし出して、この景色を眺めゐたるが、彌「ハァもう何時だらうな。」時に北八、又困つた事があるわい。雪隠へ行きたくなつた。」北「エ、汚ねえ事ばつかりいふ。」彌「どうも船ではできぬ。イヤ幸ひこゝに繫つてゐる内、ちよつくり土手へ上つてやらかして來よう。」北「ホンニ、よその船でも人が手水に上るやうすだ。早くさうしなせえ。イヤ私もお相伴がしたくなつた。モシ船頭さん、ちよつと上つて來たいがいいかねえ。」

船「用たしになら早ういてごんせ。私らが今飯くてしまふと、いつきに船を出すさかい。」彌「草鞋はどこだ。」北「ナニサ跣足で上らう。乗る時足をすゝげばいいに。」ト両人船より堤にあがりて、彌「ナントいゝ景色だな。どこらでやらかさう。」北「オットそこには水溜りがある。もつとそちらへ。ア、なる程いい月だ。」

一刻を千金ヅヽの相場なら三十石のよど川の月

かく口ずさみて、思はず勝景に見とれゐたるが、このうち岸にかゝりゐたりし船も、追々こぎ出す様子に、北八彌次郎が乗つたる船も今出ると見えて、船頭ども、もやひ綱を解き棹さしのべて、二人を呼びたつるに、いづれの船にも、乗合の内土手に上りたる者ども、一時におりたち混雑し、彌次郎北八やうやうの事に人を押分け、飛び乗りたるは大阪八軒家の上り船なり。此の二人、あまり船頭によびたてられて大きにうろたへ、今まで乗つて來りし伏見の船と心得、その次に並びてかゝりゐたりし大阪の上り船にとびのりたるが、苫の内暗く、開遊ひたる船とも心付かず、ことさら此の船にも乗合のうち、堤に上りたる者も二三人あれば、それかと思ひて船中にも互に顔も形も知れざれば、これをとがむる者もなく、その中船は出るにまかせ、おのおの宵より話しつかれたるにや、押合ひへし合ひ、互に足をやりちがひとなし臥したりけるが、彌次郎北八も暗がり紛れ、そこら探り廻して、手ざはりよく似たればとて、人の風呂敷包をわが包と心得、引寄せてすぐにそれを枕として打臥し、それよりは前後もしらず高鼾なり。さるほどに船は右に棹さし、左に綱引きのぼるに、早くも八幡山崎を後になし、淀堤を打過ぎ夜も明近くなりたる頃、伏見にこそは著きたりける。苫もる影も白く、烏の聲告げわたるに、船著きたりと、乗合みなみな目を覺し立騒げば、北八彌次郎苫打ちひらきて、笠風呂敷包を手に引提げ、船頭があゆみ板渡すを打渡りて岸に上り、船宿にい

たるに、乗合の人々をつゞいて爰にきたるを見れば、見知りたる顔一人もなし。これは不思議と、そこらうろ／＼見廻しながら、彌「ナント北八、おいらに酒を飲ませた隠居どのはどうしたの。」北「さればの、そしてアノ長崎者や越後道者どもは来さうなものだが、大方爰へよらずに行つたと見える。おいらはゆるりと爰で支度して出かけようさ。」トもとの伏見に著きたることに、一向に氣が付かず。船宿の女「どなたもお支度あぎよかいな。」彌「オイ、爰へ一ぜん頼みます。」女「ハイ／＼。」トたきたての飯に、八杯豆腐の平をつけて持つて来る。これは伏見の船宿のお定まりなり。此の兩人初めてなれば、こんな事は知らず、もとより大阪へ著いたとばかり心得、平氣にて、彌「けふは斯ういたぞ。これから長町の分銅河内屋とやらいふ宿屋へ行つて、あれも大和の初瀬の茶屋でよこした書付の所だから、あそこへ泊つてすぐに芝居でも見ようぢやアねえか。」北「おいらアまた新町とやらを早く見てえ。」彌「オヽそれも満更でねえの。アヽアツヽヽヽ、がうてきにあつい汁だ。ベツ／＼／＼。」此の傍にも船あがりの四人づれ、おなじく支度しながら、太「太兵衛さん、おまいの虎屋の饅頭はどうしたぞいの。」太「六兵衛さん、聞かんせ。けたいなこつちや。昨日わざ／＼あこへいて買うて来て、とんと大佛屋に忘れたわいの。」六「つい一走りいてとてごんせ。爰から僅か十里ほかないもせんもの。」太「ハヽヽヽ、さういうてもくれんがよい。ハヽヽヽ。」此の話を聞いて彌次不思議さうに、彌「もシ、あなたがたが今いひなさつた虎屋といふは、たしか大阪でございやすね。」六「さよぢやわいの。」彌「その虎屋の饅頭忘れたと仰しやつた大佛屋とやらは、どこでございやす。」六「コリヤ新町橋西詰ゑ

南へ行くとこぢやわいの。」彌「その新町橋、南へ行くところまでは爰からいくらほどございやすね。」六「こゝからは十里ぢやわいの。」彌「はてなァ、大阪は思ひの外廣い處だノウ北八。」北「ナニサ、いい加減に聞いてるなせえ。わつちらを冷かすのだわな。爰から十里あつてたまるものか。途方もねえ。」太「イヤ、おまいはこゝをどこぢやと思うてぢや。こゝは伏見の京橋ぢやがな。」彌「ナニ伏見だ。コリャ北八がいふとほり、貴様たちやァ人をはぐらかすな。おいらァゆうべ伏見から船に乘つて來たのだわな。」太「何いはんすやら、桃山の狐にがなつままれたもんぢやあろぞい。皆こち退いてゐやんせ。」北「退いてゐろも凄まじい。そしておいらを狐つきたァ何の事た。江戸つ子だぞ。つがもねえ。」トいさくさなかば、此の大阪者のつれと見えて二三人かけ來り、「何ぢやい〳〵。何せりあうてぢや。そんなことより、こちやどえらい目に合うたわいの。こちとらが包を船でうしなうたさかい、いんま先までそのせいらくしてをつたが、根から葉から知れんわいの。」トいふうち、一人が彌次郎の傍にある包を見つけ、「イヤ權助さん、あこにあるわいの、そぢやさかい私がいふまいことか、先へ上つた衆を問うて見やんせといふたぢやないかい。」權「ホンニこれぢやわいな。」ト取りにかゝれば、彌次郎ちやつとひかへて　彌「コリヤ何ひろぐ。此の包はおいらがのだわ。」權「ナニぬかしくさる。おどれら、やばなこと働きくさるな。コリヤ見い。風呂敷の端にこちの名が書いてあるわい。」トいはれて彌次郎びつくりし、よく〳〵みれば自分の包でなし。肝を潰して、　彌「ホンニ、コリヤ間違つた。ソレもどすぞ。おいらがのはどこに

ある。」彌「おんだらつくせ。ナニおどれらが包を誰が知ろぞい。」彌「こいつはつまらねえ。北八どうした。」北「おめえ、おれがのも取つて一所に包んで、側においたぢやァねえか。どうしておらが知るものだ。」彌「ハテめいえうな。モシ、いよ／＼こゝは伏見に違へねえかね。」みな／＼「ハ、、、何ぬかしくさるやら。アノ顔見やんせ、けたいな顔ぢやな。」北「イヤ、こいつはふてえ奴らだ。」みな／＼「太いも細いもいるこつちやないわい。たかでおどれらァ奸盗ぢや。包に別條ないさかい免してこます。とつとと出ていにくされ。」彌「コリヤァ飛んだ目にあふが、さつぱり分らぬ。北八どうしたのだらう。」北「されば、わつちも分らぬ。ぜんてえ昨夜は何日だつけ。」彌「ム、かうと、ゆうべ、あの時分に月が出たから、大方二十四五日あたりだ。」北「今月は大か小か。昨日は何の日だねえ。」彌「さればかうと、此の間ソレどこでか泊つたとき、甲子だといつたぢやァねえか。」北「ソレ／＼、あの茶飯はうまかつた。」彌「平の牛蒡の大きさ、あいつは珍らしい。」みな／＼「ワハ、、、、コリヤどうでも、てきらは本氣ぢやないわい。ワハ、、、。」ト腹筋をよつて大笑ひする。この中でも年ばいの太郎兵衛、暫く考へて、太「ハ、ァ聞えた事があるわいの。なるほど餘り賢うも見えんわろたちぢやさかい、人のもの手盜へる程の働きはありやせんわい。コリヤかうぢや。コレそこなわろたち、ゆうべ伏見から乘らんして、途中で船のかゝつた時、川たしにがな堤へでも上らんした事があろがな。」彌「さやうでござりやす。」太「ソレ見やんせ。こつとらが乘つ

た船にも、あの時上りをつた人が大分ありをつたが、やがて船が出るといふと皆うろたへて乗りをつた、其の時こなん達は下り船と上り船を取り違へて、めんめんの乗つて來た船と心え、こちの船に乗らんしたものでがなあろぞい。」北「ホンニさやうでござりやせう、わつちも船に乗つた時は暗がりではあるし、取り違へた事は知らず、どうやら居どころも違うたやうでございやしたが、乗合のことだから、まゝの皮とそれなりに草臥まぎれに、ツイ寐てしまひやして、今朝こゝへ來て見りや、乗合の衆のうちに見知つた顔がひとつもねえは、不思議な事だといつてゐやしたのさ。」彌「さういへばなるほど、今のさき船のあがり場で、ハテ見たやうな處だと思ひやしたが、見たはずだ、やつぱり初手の伏見だもの、ハ、、、。必竟それゆゑ、お前方の包をわつちらがのだと思つて、粗相いたしやした。」太「それでものがさつぱり分つた。」北「これでものがさつぱり分つた。」彌「イヤ分ることたァ分つたが、おいらが包はどうしたらう。」太「それも分つてあるわいな。おまい方の乗らんした下り船に包ばかり殘つて、今頃はおさかの八軒家に、風呂敷包がうろうろと、おまい方を尋ねてゐるよぞいな。ハ、、、。」北「とんだ目にあつた。いめえましい。」彌「まゝよどうするもんだ。金は胴卷に入れて持つてゐるから、たゞ包は手めえとおれが著替ばかりだ。うつちやつてしまへ。そこらは江戸つ子だわ。」ト惜しけれどもせん方なく、これから又船に乗つて、大阪へ尋ねに行くもばかばかしいと、すぐに京へ行くつもりに相談きめて立ち出づれば、この人々もそれぞれにこゝを立ち出でけるに、北八彌次郎きぬけした顔付にて、ぶらりぶらりと京街道にさしかゝり、

伏見出て淀の車がまたあとへまはりまはつて来たは何事

それより伏見の町を打過ぎ、墨染といへる所にさしかゝりけるが、爰は少しの遊所ありて、軒毎に長簾かけ渡したる内より、顔のみ雪の如く白く、青梅の布子に黒天鵞絨の半襟まで、お白粉べた〳〵つけたる女走り出でゝ、彌次郎が袖をとらへ、女「もし、はひりなされ。ちよつと遊びんかいな」彌「なんだ、よせへ〳〵」ト振り切れば、北八をとらへ、又 女「おまいさん、どうぢやいな」北「かうぢやいな」トくびかこうをする 女「す、すかん、こちやいやいな」北「いやいやいなの三郎よし秀でもとまらんのだ、エ、放しやアがれ」女「す、こはこ」トおつはなして内へはひる 北「ハヽヽ、こゝがあとで聞いた墨染だな」

すみぞめのおやまのかほの真白さは石灰蔵のねずみごろもか

深草の里は、家毎に焼物、土細工を商ふ見ゆれば、

やきものの牛の細工に買ふ人もよだれたらして見とれこそすれ

かくて藤の森にいたりけるに、

稲荷山松のふぐりにかゝれるはふどしのさがり藤のもりかた

こゝに稲荷の社を伏し拜みつゝ、北「すこし、そこらで一ぷくやらうぢやアねえか」彌「よからう、よからう」ト葭簾かけたる茶屋にはひりて、彌「すヤ、醴があるの、婆さん一ぱいくんな」婆「はい〳〵〳〵、ぬくう

してあぎよわいな。」北「コウ彌次さん、こゝの婆さんが、おめえに氣があると見えて、アレこつちばかり見て、をかしな目つきをすらァ。」彌「ばかァいへ。婆さんどうだ。早くくんな。」ばゝ「まちつと待つておくれんかいな。」トいひつゝ此の婆、彌次郎の顏を見ては泣き、見ては泣きする故、不思議に思ひ、彌「婆さん、どうぞしたか。おめえ目がわるいのかね。」ばゝ「わしやお前の顏を見て、いかう悲しうてならんわいな。」彌「ソリヤどうして。」ばゝ「ワァイ〳〵。」北「こいつはをかしい。婆さん何が悲しい。」ばゝ「わしや此のあひだ一人の息子をうしなうたが、そのむすこにァノお方が似たとこそい〳〵。」彌「ハァおいらに似たとかえ。それぢやおめえの息子もいい男であつたらう。惜しいことをした。」ばゝ「ソレ、そのどうまん聲のものいひから、お前のやうに、やつと荒いゑつちやがあつて、色が黑うて、鼻は獅子鼻とやらで、目のいつかいところまでが、其のまゝぢやわいな〳〵。」彌「それぢやァ、わつちが顏のわるいところばかりがよく似たの。」北「わるいところばかりも氣がつええ。いいところは一つもねえもせんものを。」ばゝ「それればかりぢやないわいの。アノ片小鬢のはげさんした處までが、あないにも似るものかいな。」彌「人の顏の店おろしが濟んだら、その醴を早くくんな。」ばゝ「ほんに忘れたわいな。」ト茶椀二つに醴を汲んで差出す。二人ながらこれを飲んで、北「がうぎに薄い醴だ。」ばゝ「薄うもなりましたぢやあろ。わしや悲しうて、ツイ淚をその中へ落したわいな。」彌「エ、とんだ事を、淚ばかりならまだしも、見りやァおめえ水洟を垂らしてる

るが、それも此の中へおちやせんかね。」は「わしや見なさる通り、三ッ口おやさかい、洟水と涎を一つにその中へ落したわいな。」北「エ、、コリヤなさけない事をいふ。こいつはもう飲めぬ。」彌「おらァつい飲んでしまつた、いめえましい。サア行かう。」北「婆さんいくらだ。」は「ハイ六文ヅヽくだんせ。」北「水洟はおまけだの。アイおせわ。ペツ／＼。」トこゝをたち出で振返りながら、

くりごとに涙をまぜて水ばなもすゝりこんだるうばが醴

かくて二人は、足にまかせて辿り行く程に、だん／＼都近くなりて、往來殊に賑はしく、人の風俗も自然と温順にして、しかも衣裝は花やぎたる女のよそほひに、うつゝぬかして見とれ行くうち、早くも大佛前に到りて、北「オヤ／＼、がうせえなお寺だ。アレ山門の上から佛さまが覗いてゐる。」彌「ハア、これがかの大佛だわえ。なるほど話にきいたよりは、がうてきなものだ。そしてこの石を見や。えらい／＼。」

大佛の御堂は雲に入るとてやこれはおほきなものゝ天上

かく詠みて山門のうちに入り、やがて御堂にのぼりける。

大佛殿方廣寺、本尊は盧舍那佛の座像、御丈六丈三尺、堂は西向にして東西二十七間、南北は四十五間あり。彌次郎北八こゝに法施し奉りて、彌「ナント話に聞いたよりか、がうせいなもんぢやァね

えか、アノかうしてござるお手のひらへ疊が八疊しけるさうだ。」北「狸の金玉と同じ事だな。」彌「もつてえねえ事をいふ。そしてアノお鼻の穴から人が傘をさして出らるゝと。」北「ソリヤアまだしも、人がさして出るからいいが、おらが方のほうだら八が鼻の穴からは、蛎がひとりでにふき出したは。」彌「ばかアいふな。お後へ廻つて見よう。オヤお脊中に窗があいてるらア。」北「あれは大方汐を吹く處だらう。」彌「鯨ぢやアあるめえし。」北「オヤ／＼、アレみんなが柱の穴をくゞつてゐるは。」彌「ほんに、こいつは奇妙々々。」ト此の御堂の柱のもとには、丁度人のくゞるだけ切拔きし穴あり。田舍道者ども戯れにこれをくゞりぬける。北八同じくくゞり、「コリヤおもしろえ。併し己はくゞられるが、彌次さんは太つてゐるから拔けられめえ。」彌「おれだとつて、ナニこれが。」ト北八を引きのけ四ツ這ひになつて、柱の穴へからだ半分ほど入れかけて、一向にぬけられず。あとへ戻らうとするに脇差の鐔が横腹につかへて痛みこらへ切れず。彌次郎顏を眞赤になし、「アイタ、、タ、コリヤひよんな事をした。」北「オヤどうした。ぬけられねえか。」彌「コレ、手をひツはつてくりや。」北「ハ、、、こいつはをかしい。」ト彌次郎の兩手をぐつとひつける。彌「アイタ、、、。」北「よわい男だ、ちつと辛抱すればいいに。」彌「あとのはうから足を引いてくれろ。」北「承知々々。」トうしろへまはり、兩の足をとらへ、「ヤアえんさアえんさア。」彌「あいた／＼。」北「ちつとこらへなせえ。よつほど出かけたやうだ。ヤアえんさアえんさア。」彌「ア、待つてくれ／＼。腰骨が折れるやうだ。コリヤやつはりまへのはうから引き出してくれ。」トいふゆゑ、北八また前へ廻り、兩手をとらへて引く。北「ヤアえんさア／＼。ソレまたこつちへよつほど出て來た。」

彌「コリヤたまらぬ。アイタ、、、、。北八これではいかぬ。初手のやうに、またあとへ引きもどしてくれ。」北「エ、、いろ〳〵なことをいふ。」ト又うしろから足をとらへ「ヤアえんさア〳〵。」彌「まて〳〵〳〵。コリヤどうでも、前のはうから引いてもらはう。」北「エ、、そんなに前へ廻つたりうしろへ廻つたり、ひき出してはひきもどし、いつまでもはてしがねえ。コリヤいい算段がある。」そばに見てゐたりしさんけいの人をたのみて、北「モシ、どうぞこつちから、おめえ引張つて下さいませ。わしがあつちへ廻つて、足を引きずり出しますから。」彌「ばかアいふな。兩方から引張つては出る瀬がねえ。」北「出るせがなくても、兩方から引張ると、前へ廻つたり後へ廻つたりする世話がなくてわいはな。」さんけいの人「イヤ、兩方からあのさんの骸を引延ばしたら、ツイ出られさうなもんぢやあろぞい。」北「コリヤいい事がある。酢を一升も買つて來て、彌次さん、おめへに呑ませよう。」彌「なぜ、酢を呑むとどうする。」北「ハア、酢をのむと痩せるといふことだから。」さんけいの人「ハ、、、そないなことをいうたてて、いんまの間に合ふこつちやないさかい、かうさんせ、どこぞへいて槌借つて來さんして、頭を後の方へ打込まんしたがよいわいの。」北「なるほど、こいつが早い理窟だ。しかしそれでは命があるめえ。」さんけい「さればいそこはどうも請合はれんわいの。」トこのうち、田舍道者、一人「コリヤハア氣の毒なこんだアのし、私はハア遠國のもんだアから、あにも知り申さねえが、人の難儀さつせるこんだア、愚意のういつて見ますべいか。」

北「どうぞあの人の助かる事があるなら、いつて聞かしてくんなせえ。」だうしや「ハアそれだァからのこんだァよ。あんでもあのふとの足の先さを切割らつせえて、山椒粒のう挟まつせえたら、ふとりでにつん抜けべいのし。」北「ハ、、、そりや蛇が女に見こんだ時のことだらう。どうせそんなことであらうと思つた。」さんけい「コリャわしが智慧借そわいの。何ぢやろとあのさんの體を和かにして、引出すがよかろさかい、かうさんせ、土砂とて來てかけさんせいの。」ゐなかもの「すんだら土砂のゥぶつかけずと、一ぱんの桶さァ買つてきなさろ。手足をちとべしをん曲げたらはひるべいのし。」巡禮「エヽ、いめえましい事をいふ。むだどころぢやァやねえ。北八早くどうぞしてくれぬか。」北「まちなよ。ハ、ァお前脇差の鐔が横腹へこだはつていてえのだ。」トやう／＼手を差入れてひねくり廻し、脇差をぬいてとる。巡禮「いかさま、これでどうか寛ぎがあるやうだ。」北「ドレ／＼、イヤ、時にどなたぞ前の方から押出して下さいませ。私が足を持つてこつちへ引出しますから。ヤァえんさァ／＼。」さんけい「ソレ出るわいの、まちつとおや、いけまんせ。」巡禮「ア、ウ、、、、。」北「ハ、、、出る奴がいけむからおほわらひだ。」巡禮「ア、いてえ／＼。」北「しめたぞ。えんやァ／＼、ソリヤ出たぞ／＼。」トやう／＼の事にて引出せば彌次郎は大汗をふき／＼、ほつと溜息つきながら、「ヤレ／＼ありがてえ。コリヤどこなたも御苦勞でござい申した。わつちやァ伊勢の泊りで產をしやしたが、產むよりか生まれる身はよつぽどせつねえ。コレ、著物が擦り切れておばら骨が今にぴり／＼する。」

傘さして出るお鼻よりはしらなるあなおそろしや身をすほめても

かく詠み興じて大笑ひとなり、それより御境内をめぐり、蓮花王院の三十三間堂にて、

いやたかき五重の塔にくらべ見ん三十三間堂のながさを

これよりこの御門前を北へさして行くに、往來殊に賑はしく、げにも都の風俗は、男女共にどこことなく柔和温順にして、馬士、荷歩持までも、洗濯布子の糊こはきを、なりふり高に著なして、あのおしやんす事わいなと、なまめきたるもをかしく、二人は興に乗じ、目に見る物毎に珍らしくたどり行くうち、俄に往來騷ぎ立ちて、老若打ちまじり、走りゆく人毎に一「ホウホ、よい〳〵、えつこらさつさ。ホウホ、よい〳〵、えつこらさつさ。」彌「むしやうに人がかけるは何だ。イヤ向うに何かあるさうで凄まじい人だ。モシ〳〵、何でございやすねつ。」向うより來る人「あこにえらい喧嘩があるわいの。」北「京の喧嘩、珍らしからう。」ト足早に行きて見るに、見物山の如く、往來もならぬ位なるに、二人は押分け〳〵てこれを見れば、かの喧嘩の一人、肴屋とみえてそこに盤臺などおろしてあり。相手は職人ていのをとこ、いづれも屈竟のわかものなり。されど都は人の心も悠長にして、喧嘩と見ゆれど、さのみ頭から叩きあひもせず、日當りのよき處に二人向ひあはせて、さかなや「コレ〳〵。わが身の方から行き當りくさつて、そないな事いふもんぢやないわい。おのれ天窓打いてこまそかい。」あさこ、しよく人「おきくされ。こなんが手の動くのに、こちやぢつとしてるやせんわい。」トいひつゝ手拭を丁寧に折りて鉢巻をする。さかなや「よう頤なぶらすわろぢややな。一體わりやどこの者ぢやい。」しよく人「おれかい、おりや堀川姉が

小路さがる所ぢやわい。」さかなや「名は何といふぞい。」しよく人「喜兵衛といふわい。」さかなや「年はいくつぢや。」しよく人「二十四ぢやわい。」さかなや「おきくされ。おのれ二十四にしちやえらう若い。譃つきくさるな。」しよく人「何いふぞい、ほんまぢやわい。前厄で今年嬶めを死なしたわい。」さかなや「ソリヤえらい力落しをつたぢやあろ。えいきみさらしたな。」しよく人「イヤ、それ許りぢやない。乳のみくさる餓鬼めがあるさかい、えらい難儀な目にあうたわい。」さかなや「そぢやあろわい。おりや汝に二つ上ぢやわい。」しよく人「さうぬかしくさりや汝も若い。うちはどこぢやぞい。」さかなや「一條猪熊通り東へ入る處ぢやわい。」しよく人「かいやい、あこに盲目で目の見えん寸伯といふ針醫があろがな。」さかなや「オオ、針醫があうやどうすりや。」しよく人「イヤ、こちの一家ぢやさかい、おのれ通りくさるなら言傳してこまそ。」さかなや「いやぢやわい。何のわれが言傳、誰がいをぞい、えらい阿房めぢやな。」見物の人欠伸しながら「十兵衛さんもう去のかい。」十兵衛「またんせ、今に打ち合ふぢやあろ。」見物「イヤ、わしや内に客ほつておいて來たさかい。」十兵衛「そしたら其のお客つれてごんせ。序に薄べりなと一枚くさんせんかい。」又こちらの方にゐる見物、桁の下につくばひ、髭をぬき〳〵、「見なされ、あつちやの童がどうしても偉い奴ぢやわいな。」見物「イヤ、こつちやの男もえらい頤ぢやわい。」見物「ホンニ、その頤で思ひ出した。お家はどうぢやいな。痛所はえいかな。」見物「ハイ、おかたじけなうござります。とんとよいやうであつたが、昨日からえらう

わるなつて、ツイゆうべ死にましたわいな。」見物「ソリヤおまい御愁傷ぢやあろ。御葬禮はいつぢやいな。」見物「今出しますとこぢやあつたが、偉い喧嘩があると人が走るさかい、私もツイいて見て戻るほどに、それまで待てというておきましたわいの。」トおの／＼氣の長い者許り、いうと見物しておると、かの職人の男「コリヤヤイ、まちつとこつちやへ寄りくされ。日向がなうなつて寒なつたさかい。」さかなや「オ、寄つたがどうすりや。」しよく人「おのれ、今己が事を阿房とぬかしをつたが、何でおれが阿房ぢやぞい。」さかなや「阿房ぢやさかい阿房ぢやわい。」しよく人「なにぬかしくさる。さういふわれが阿房ぢやわい。」さかなや「イヤ、こちやあはうぢやない。かしこぢやわい。」しよく人「われがかしこなりや、おれもかしこいわい。」さかなや「オ、われも賢いか、そしたらこの喧嘩やめにせうわい。」しよく人「サア、ひよつと互にせりあうて、著物でも引きさいたら損ぢやさかい、やめにしてこまさうかい。」さかなや「えらう遲なつた。もういんでこまそ。」しよく人「おれは、われがいにくさる道ぢや程に、つれだつていんでくりよわい。今日はえい天氣ぢやあつたな。」さかなや「暖かうてえいわいやい。」ト互に挨拶して、この二人連れたちて歸る。見物もこそ／＼と、ちり／＼に皆歸りければ、彌次郎北八腹をかゝへて、彌「ハヽヽヽ、なるほど上方者は氣が長い。あんなうすのろい喧嘩が、どこにあるもんだ。」北「あの中で、損徳を考へてやめにしたから大笑ひだ。」

公家衆のいます都はおのづから喧嘩やめるもうたとよみなり

かくうち興じ早くも清水坂にいたるに、兩側の茶屋、軒ごとに煽ぎたつる田樂の團扇の音、喧すしきまで呼びたつる聲々、「モシナ、おはひりなされ。ちや〳〵あがつてお出でんかいな。」「名物なんば饂飩あがらんかいな。お休みなされ〳〵。」彌「なんぞ食つてもいいが、もつと先へ行つてからの事にしよう。」ト ほどなく清水寺に到る。境内をめぐり音羽の瀧を見て、

名にしおふ音羽の瀧のあるゆゑかのぼりつめたる清玄のこひ

本堂は十一面千手觀音なり。むかし沙門延鎭が夢中に得たる靈像にして、坂上田村丸の建立とぞ。北八彌次郎兵衞、しばし此の寶前に休みながら、

境内にうゑし櫻はすき間なくてもたくさんな千手くわんおん

傍の小高き所に机をひかへたる老僧、參詣を見かけて、「當山觀世音の御影はこれから出ますぞ。誠に靈驗あらたなる事は、盲がものいひ、唖の耳が聞え、歩いて來た躄がなほる。一たび拜する輩は、いかなる無病達者なりとも、たちまち西方極樂淨土へ救ひとらんとの御誓願ぢや。どなたも頂いてお歸りなされ。冥加錢は澤山にお心持次第。御信心の方はござりませぬかな。」北「よくしやべる坊主めだ。時に彌次さん、かの噂に聞いた傘をさして飛ぶといふは此の舞臺からだな。」僧「昔から當寺へ立願の方は、佛に誓うて是れから下へ飛ばれるが、怪我せんのが有り難い處ぢやわいな。」彌「爰

から飛んだら體が微塵になるだらう。」北「なり〳〵は飛ぶ人がありやすかね。」彌「さよおぢやわいな。えては氣のふれた童達が来て飛びをるがな、此の間も若い女中が飛ばれたわいな。」北「ハア、飛んでどうしやした。」彌「飛んでおちたわいな。」北「落ちてそれからどうしたね。」彌「ハテ、根どひするわろぢや。此の女中は罪障が深いさかい、佛の罰で目を廻したわいな。」北「鼻は廻さなんだかね。」彌「イヤ、瘡と見えて鼻はなかつたわいな。」北「そして氣がつきやしたかさ。」彌「氣がついていんだわいな。」北「いんでどうしたね。」彌「さて〳〵、しつこい人ぢや。それをきいて何さんすぞい。」北「イヤ、私が癖として聞きかけたことは、金輪際聞いてしまはねば、氣が濟まぬといふもんだから。」彌「それならいうて聞かそかい。それからその女中が、全體その下地もあつたかして、俄に氣が違うたわいの。」北「ハテナ、氣がちがつてどうしたね。」彌「百萬遍をはじめたわいの。」北「百萬遍はじめてどうした。」彌「鉦をたゝいて。」北「鉦をたゝいてどうしたね。」彌「なむあみだんぶつ。」北「それからどうだね。」彌「なむあみだんぶつ。」北「コレサ、百萬遍の後はどうしやした。」彌「なむあみだんぶつ。」北「そのあとは。」彌「ハテせはしない。百萬遍ぢやわいな。マア念佛すましてからのことといの。」北「エ、、その念佛百萬遍すむまで待つてゐるのか、途方もねえ。」彌「イヤこなさん、聞きかけた事は、根ほり葉ほり聞かんせにやならんといふたぢやないか。まちつと辛抱して聞かんせいな。退屈なりや、こなさん達

も百萬遍手傳うて下んせ。」北「コリヤおもしろからう。彌次さん、お前もこけへ掛けなせえ。サアサアサアなむあみだァんぶつ。」僧「とても事に鉦いれてやろわいな。」ト無上に鉦を打鳴らし、「ハア、なまいだア。チャン〳〵。」北「コリヤがうてきにおもしろくなつた。なまだァ〳〵。」僧「わしや手水して來るうち頼みます。」ト北八に鉦をつきつけ、いてしまふ。北八夢中になり、どこやら「ハアなまだア。」チャン〳〵チキチ、チャンチキチャン。彌「手めえ、鉦の叩き樣が下手だ。こつちへよこせ。」北「ナニ如才があるもんか。」チャン〳〵。「なまだアなまだァチャン〳〵〳〵〳〵。ト夢中に叩きたて騒ぐ故、内陣の番僧出で來り、この體を見て肝を潰し、番僧「コレナ〳〵、わごりよ達はどしたもんぢやぞい。勸化所にあがつて無作法な。」トしかられて二人は心づき、きよろ〳〵して、北「ハア、今の坊樣はどけへ行つた。まだ中廻向もすまぬ中。」番僧「ナニ戯言をいふのぢや。爰をどこぢやと思うてぢやぞい。」北「ハイ、こゝは清水、あつもりさんの墓所とけつかる。」番僧「コリヤおのれ、氣が間違うてをると見える。」北「氣ちがひ故に、此の百萬遍。」番僧「ナニぬかしくさるやら、とつとと出ていたんかい。こゝは御祈願所ぢやぞ。」ト聲高にいふ内、勝手より坊主きて追拂ふに、二人ははう〳〵この坂をおり立つて、北「つくにふ日が、とんだめにあはした。」

　舞臺から飛んだはなしは清水にひやかされたる身こそくやしき

此の山内を下り行くさきに、清水燒の陶造り、軒を竝べて往來の足をとゞむ。此處の名物なり。

天道のめぐみもあらんするものゝ師大日やまのつちを製せば

かくて其の日もはや七ツごろとおぼしければ、急ぎ三條に宿をとらんと道をはやめ行く向うより、小便桶と大根を荷ひたる男、「大根小便しよ／＼、」北「ハ、、、、唐茄子が笛を吹いた見せものは見たが、大根の小便するのは、ついぞ見たことがねえ。」彌「あれが、かのだいこんと小便と取替にするのだらう。」こえとり「おつきな大根と、小便しよ／＼。」ト呼んで行くこなたより、お中間らしき、しみたれの男が二人、「コリヤ／＼、わしら二人がこゝで小便してやろが、その大根三本おくさんかいな。」こえとり「マア、こち來てして見さんせ。」ト此處の辻子へ二人をつれて行く。辻子は江戸でいふ新道なり。彌次郎北八これを見て、どうするのだ知らんと、後よりついて行き、立ち止り見ればこえとり「サア、やらんせんかいな。」ト小便たご下し直すと、一人の男「アリヤ、わし先やろわい。」トこのたごの中へ二人ながら小便してしまふと、肥取たごをかたげみて、「もう此れ限りで出んのかいな。」中間「うちどめに屁が出たから、もう小便はこれぎりぢやわいな。」こえとり「コリヤあかんわい。ま一度よう體をふつて見さんせ。」中間「ハテ小便くすねて何にせうぞえ。有りたけしたんで、のけたわいの。」こえとり「それぢや大根三本はようやらんわいな。二本もていかんせ。」中間「コレ、小便は少なうてもこちとらがのは代物がえいわい。よその茶粥ばかり喰つてをるのとはちがうて、こちや肉ばかりくてをるがな。」こえとり「それぢやてて、あんまりぢやわいな。」中間「ハテ喧しういはんすな。内へもていんで水まぜりや、三升ばかりにはなろぞいな。はやう三本くさんせ／＼。」こえとり「そないにくせ／＼というたてて、これでくさるもんぢやないわいな　そこらへいて茶なと飲んで來て、

まちつとやらんせ〳〵。」トやつつ返しつゝいうてゐるを、人はをかしく見てゐたりしが、北八「モシ〳〵、さいはひわつちが小便したくなつたから、無躾ながらおめえがたに上げやせう。これをたして大根三本とりなせえ。」中間「お心ざしはおかたじけなうござりますが、それではお氣の毒様ぢやわいな。」北「ハテいいわな。どうせわつちも有合はせたもんだから、あまり輕少なれど。」中間「さよなら、お小便いたゞきませうかいな。」ト小便たごを北八の前へ持つてきたりなほす。北「イヤ〳〵、やつぱりそれにおきなせえ。わつちがのは一二間つゝ向うへ走ります。」こえとり「コリヤきよとい〳〵。イヤおまいのは地ではないわい。とかく小便は關東がよござります。地のは薄うて直打がない。」北「もちつと早いとまだ出たものを。わつちは生まれついて小便近いから、不斷小便桶を首にかけて歩いた男さ。」中間「そりやお羨ましいこつちや。」こえとり「さよなら、おまい此の桶を首にかけてお出でんかいな。わしやどこまでもお供していこわいな。」北「イヤ、近頃はそのやうにもねえのさ。」こえとり「お連様もあるさうぢや。モシ、おまいも序に手水してお出でんかいな。」彌「イヤ、わしは前かたは、一時に小便の一斗や二斗する分は、ねから苦にも思はなんだものだが、どうした事やら、近年は小用つまりでさつぱり出ぬには困りはてる。」こえとり「ハア、小用つまりならえい事があるわいな。いつきにようなる事ぢや。」彌「どうするとよくなるの。」こえとり「アノ酒屋などで、酒の樽の呑口から思ふ樣に酒の出ん事があるもんぢやわいな。そないな時は樽の上の方へ、錐

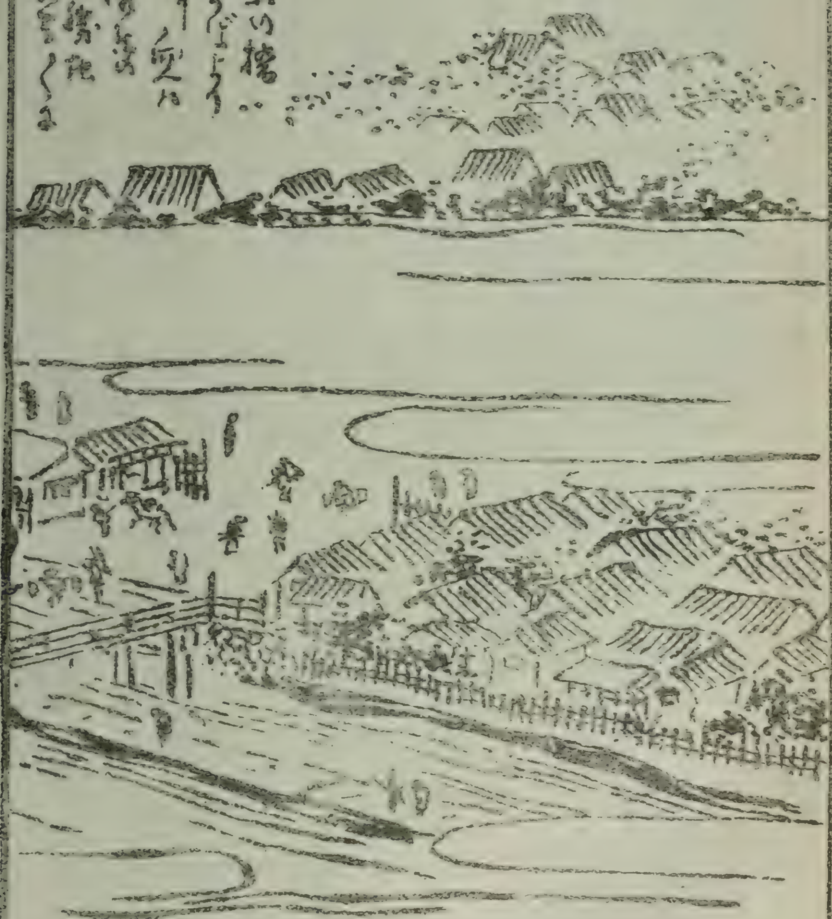
もみして穴あけると、ぢきに下からシウ／＼と、酒が走るものぢやさかい、おまいの小用のつまらんじたのも、額口へ錐もみさんしたら、すぐに小用が通じるぢやあろぞいな。」北「ハ、、、こいつは出來た。時に遲くなつた。サア行きやせう。」ト二人引別れゆく向ふの方より、かつぎを著たる女の二三人づれ、さすが都女郎の風俗しなやかにて、いづれも色白く、すきとほるばかりの代物。北「ヒヤア／＼、いきな女がくる。きれい／＼。」彌「じやうだんな女どもだ。みんな著物をかぶつて來るわ。」北「あれが被といふものだの。アノうつくしいやつと、おれがものをいつて見せようか。」トやがてかの女中のそばへ走り行きて、「モシ、ちとものがおたづね申したい。これから三條へはどうまゐりやすね。」ト聞くに、この女中御所方と見えて、とんだ横柄なり。「わが身三條へゆきやるなら、この通りをさがりやると、石垣といふ處へ出やる程に、それを左へゆきやると、ツイ三條の橋ぢやわいの。」ト一體御所方の女中は、人を何とも思はず、ちときいた風の男と見るとわるく冷かす風ゆゑ、五條の橋を教ふる。北「ハイ、これは有り難うござりやす。」トて、何も知らねば禮をいつて、暫く行き過ぎて、「彌次さん、アリヤア何だらう、がうてきに大ふうな女共だ。」彌「とんだ安く取扱はれやアがつた。業さらしめ。ハ、、、。」トそれよりやがて、かの石垣といへるを打過ぎ左の方へ、数へられたる道筋を三條へ行くとこゝろえ、早くも五條の橋に到りし頃は、はや日暮れて、往來の人「モシ／＼、しる谷の方へは、どう參りますな。」北「ハア、わがみ、しる谷へ行きやるなら、この通りをすぐに行きやると、ツイしる谷へ出やる程に、ソレ轉んだら起きていきやれ。牛の糞をふんづけたら遠慮なしに拭いていきやれ 往來の人「イヤ、こいつが粗雜なものゝぬかしやうぢや。こゝなあんだらめが。」北「ナニ、

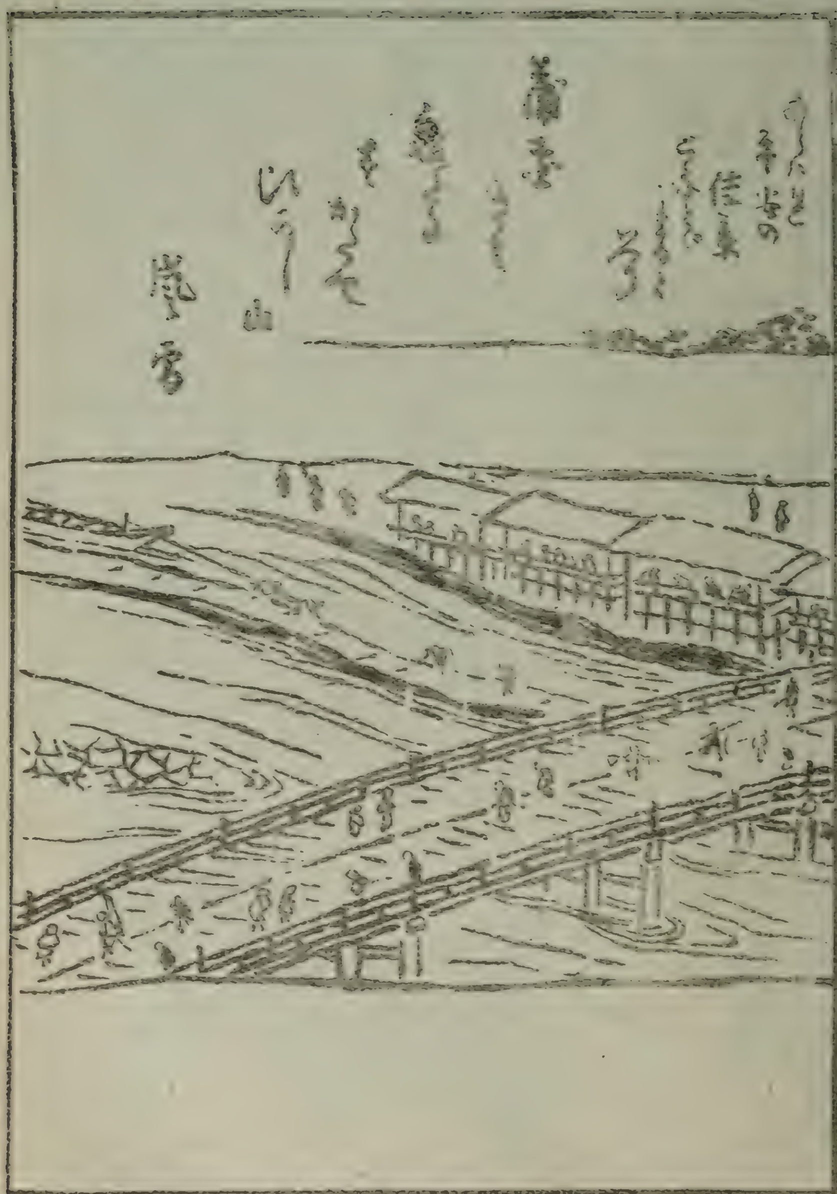
あんだらたァ何の事だ。道をきくから教へてやるのだわ。」往來の人「イヤ、細言ぬかすない。どたまにやしてこまそかい。」ト此の男のつれと見えたるが二三人立ちかゝるを見れば、いづれも見上ぐる如き大男ども、腰に長脇差をよこたへ、もののいひ恰好、いかさまにも相撲とりらしき者どもなれば、北八忽ちしよげ返りて、「ハイ御免なせえ。」彌「こいつは生醉だから、どなたも料簡してくんなせえ。」すまふとり「イヤ、料簡ならんわい。おどれらうちはどこぢやぞい。」北「イヤ、旅の者でござりやす。」すまふ「旅の者なら宿があらう。ソレぬかしくされ。」彌「是れから此の三條に宿を取らうといふのでござりやす。」すまふ「何ぬかすぞい。此の三條にとは何のこつちやい。こちとらは今三條の編笠屋から出て來たものぢや。ここは五條の橋ぢやわい。」彌「ヤァ、こゝは三條ではござりやせぬか。ソレ見や、北八、さつきの女どもが飛んだすつぽかしを教へやァがつた。」すまふ「貴樣達はどつから來たのぢや。」彌「清水の方から。」すまふ「ワハヽヽヽてつきり狐にがな抓まれくさつたもんぢやあろぞい。えらい暇費した。ほつておけほつておけ。さりとは阿房な奴らぢや。」ト打笑ひて行き過ぎる。彌次北八は思ひもよらず、五條の橋に來り、いまいましい番くるはせな目にあうたと、小言いひながら橋向うに渡り、そこゝまごつく中、往來の賑やかなるにうかれて、思はずも橋の袂を左の方へうかれ行くと、兩側に掛行燈軒ごとに照らし三味線の音賑はしく、ぞめき唄に頰かぶりせし男どものちらつくに紛れて覗きあるく。この所は五條新地とて、すこしのながれを汲む遊所なり。家ごとにかどの戸をたてたるが、潜戸ばかりを開きて、門口にたちたる女のさゝやかなる樣して、モシナ〳〵と彌次郎が袖をひくに、振返りて潜戸の内を見れば、店付のおやま竝びゐたりけるにぞ、彌「ナント北八、こゝはおやまやと見えるが、いつそのくされに今宵はこゝに泊りはどうだ。」北「いかさま、何も荷物はなし、まんなほしにそんな事もやほでねえ。」女「サァはひりんかいな。」

彌「はひる事ははひらうが、こゝはいくらだ。」女「ヲ、かたやの、お泊りなはるかいな。」彌「もちろんさ。」女「まだ初夜前ぢやさかい、七匁ヅヽおくれんかいな。」北「上方のおやまは直切つて買ふといふ事だ。半分にまからねえか。」彌「何がなし四百ヅヽなら泊つて行かう。それで出來ずば、御縁がねえとあきらめやうさ。」女「よござります。おはひりなされ。」北「それでいいの。ちやうどおやまさんも二人あらア。」トこの内へあがると、女が二階へ案内するに、屋根裏の低き二階にて、彌次郎頭をこつつり。「あいたしこ。」北「どうした。」女「ナホヽヽヽおおぶなうござんす。」ト煙草盆を持つて來る。此の内おやま二人、一人名は吉彌、今一人は金五、いづれもふとりの紬縞やうの著物に、黒びろうどのはんえり、梁のつかへる程のひくき二かいを、しやんと立つて止くしろもの、片手に著物の褄を横の方へ引上げて來り、オヽしんどといつて坐る。北「とんだ暗い行燈だ。サアもつとこちらへ寄りなさらんか。」吉「お前さん方はどこぢやいな。」彌「されば、どこやらであつたつけ。」金五「ナホヽヽヽ六角の朝市にこないなお方がよう見えてぢやが、訛つてぢやさかい、大方旅のお方ぢやあろぞいな。」吉「六條樣へ御出でたのかいな。」彌「マアそこらのものよ。」吉「モシナ、酒一つあがらんかいな。」彌「さうさ、酒が早く飲みてえの。」吉「さういうてやろかいな、お肴は何にせうぞいな。」金「角のおすもじがおいしいぢやないかいな。」吉「わしやア、かちんなんばがえいわいな。」彌「かちんでも家賃でも頓着はねえ、早くしてくんな。」吉「いつきにさんじるわいな。」ト此のおやま、酒肴をいひ付けに下へおりる。後に殘りしおやまは、此の内帶のあひより鏡を出し、行燈のそばへより顔をなほす。やがて下より銚子杯を出す。大平が一人前に一ツづゝ、ひろぶたにのせて持ち出す。彌次郎肝を潰し、彌「何だ、大平を人別割とは珍らしい。京はお

たじけねえ處だと聞いたが、こゝらは又がうせえだ。」北「四百には安いもんだ。」ト此の二人は、酒も肴も揚代の四百の中だと思ひ、無上に安いとほめる。金「サア一ツあがりなされ。」北「はじめよう。すト、、、、平は何だ。ハ、ア、葱にはんぺいは聞えたが、こつちではほんぺいを焼くと見えて、眞黒に焦げてるらア。」吉「すホ、、、ソリヤ歌賃ぢやわいな。」トこれは上方にてする、なんば餅とて葱をいれたる雜煮餅なり。此のおやま下戸とみえて、おのれが好物故に客にすゝめて取寄せたるなり。北八かちんといふ事を知らず、「ハヽ、かちんといふは聞いたこともねえ、どんな肴だの。」吉「オ、せうし。おもぢやわいな。」北「ムヽ鱧か。ドレ〳〵、ヤアこりや餅だ〳〵。」彌「おきやがれ、上方者は氣がきかねえ、酒の肴に餅とはどうだ。是れで酒が飲めるものか。」金「外のお肴いうてさんじようわいな。」トすぐに下へおりたるが、ほどなく肴物を持つて來る。中には上方にはやる鳥貝の鮨なり。此のおやまの好きと見えて、此の鮨をいひつけやりたるなり。北「なんだコリヤ、ばかの剝身を鮨につけたのだな。」金「とりがひのおすもじぢやわいな。」彌「出す物も〳〵も變ちきな物ばかりで、もう酒も飲めぬ〳〵。」トこの内、むだもいろ〳〵あれども畧して、こゝに蒲團をしき並べ腰屛風にて間をしきる。このうち四十許りの女、こゝの女房と見えてつとめを取りに來り、屛風をあけて、「おゆるしな。」彌「すイ誰だ。」女「ハイ、おつとめを頂きに參じました。」トかきつけをいだす。彌次ひらき見て、「なんだ、四匁ヅ、八匁の揚代は聞えたが、四匁かちんなんば、二匁鮨、壹匁八分御酒、五分蠟燭、しめて十六匁三分、コリヤとんだ話だ。雜用は別に取るのか。おらア又酒も肴も揚代のうちかと思つた。コレ〳〵、北八この通りだ。」北「ドレ〳〵、何だ、コリヤおめへがたア、わつちらを他國者だと思つて、酒代を別に取るさへある

に、がうてきに高えもんだ。此の四匁かちんなんばといふはアノ大平の事か、餅ならたつた三ッ四ッいれて、葱のちよつとばかりさらへ込んだ物を壹匁づゝとは、成程京の者はあたじけねえ、氣の知れた根性骨だ。蠟燭までつける事アねえ、こんな物はまけにしておきなせえな。」女「すゝ、、京の者を悪うおしやんすお前さんが、しゆみぢやわいな。五分ばかりの蠟燭代、まけいの何のとおしやんす事はないわいな、そして皆上りなされた後で高いの安いのとおしやんしたてゝ、あかんこつちやないかいな。」彌「エ、面倒な、ソレ壹分持つていきな。はした位はまけなせえし。」ト金一分投り出してやる。女房、不承々々に取つて下へおりると、彌次郎呆氣にとられて、顔付ぐにやりとなり、「ア、、飛んだ目にあつた。ノウ北八。」北「併しおらア惜しくねえ。どうかおつにもてさうな鹽梅だ。」ト此の内、北八の相方吉彌来つて、「す、しんきやの、あこに私ひとりおかんして、こゝに何してぢやぞいな。サア休みんかいな。」ト手を取りて、おのがかたへ引きずつて行く。北「コリヤ〳〵、おれが帯を解いてどうする。」トわざと彌次に聞えるやうに聲高にいふ。女、北八を引きこかし、「よいわいな。今宵はいかうぬくいぢやないかいな。お前さんぢつとしてゐなされ、私があぢようするわいな。」トすべて上方筋のおやまは初對面から帯紐をときて、うちとけたる體に客をもてなすこと定まれるおきての如し。中にもこの吉彌は大年増にて、如才のなき代物、北八に着物を脱がせて投り出し、おのれも帯をときて、北八におのが着物をうち掛け、さながら深きなじみの如くうちとけたる體にもてなしけるゆゑ、北八うつゝを抜かしてうち興しけるが、夜も次第に更けゆくまゝに、犬の遠吠ものさみしく、時の太鼓も、はや丑の刻ばかりなるに、吉彌、目をさましし様子にて、「モシナ〳〵、よう寐てぢやな。」北「アア、、何だ〳〵。」吉「わしや手水にいてくるぞえ。」ト起き上りたるが、枕元に投り出してある北八の着物きて帯をひきしめ、「お前さんの




嵐雪

著物、ちよと借しておくれ。わしやこれ著てとのたちのふりして、下の衆をだましてこまそわいな。」北「よく似合つた。奇妙々々。」吉「頭がこれぢやあかんわいな。」ト手拭を取りてうち冠り下へおりたるが、北八はそれより寐もやらず、待てどくらせどかの吉彌は一向にきたらず。さては外に客にてもあるやと暫く待ちゐたるに、はや七つの鐘も鳴り、ほどなく夜も明けなんとするに、北八こらへかねて無上に手を叩くと、下より女房かけたりて、「どなたぞお呼びなされたかいな。」北「オヽ、こゝだ／＼。コレ、わつちがおやまは先刻下へおりたが、それなりで顔出しもしねえ。ちよつくり呼んでくれなせえ。」女「サ、そのことで下は大騒ぎでござんすわいな。」北「なぜ／＼。」女「アノおやまが男のきりもん著て走つたさかい。」北「ナニ、走つたとは逃げたのか。ソリヤ大變だ／＼。その男の著物といふはおれがのだ。」女「かいな。ソリヤまた、何としてお前さんのを著ていたぞいな。」北「イヤ、下へ行つてみんなを騙して來るから、貸してくれろといつたによつて。」女「それで貸しなさつたのかいな。」北「さうさ。時にそのおやまの驅落したは、此方にやア知らねえこつたから、何でもこゝの抱に違へはあるめえ。著物はぜひとも爰の内からどうぞして貰はにやならねえから、下へさういつてくんなせへ、早く／＼。」女「マア何にいたせ、そないに申しませう。」ト下へおりる。程なくこゝの亭主と見えて、おにぶとりの縕袍を著たるでつくりとせし大男、料理番、男ども二三人引連れ、どや／＼と二階へ來り、亭主、北八の枕元に立ちはだかり、「コレ、吉彌にきりもん貸したといふ童は、こなはんかいな。」北「オヽ、おれだ／＼。」亭主「おどれかい。ほてくろしい事さらしたな。マア起きくされ。ドレ顔見せさらせ。」北「イヤ、この才六めらは何で己をそのやうに

ぬかしやァがる。」亭主「ぬかしたがどうすりやァ、おどれ、吉彌めにきりもん貸して驅落させをつたからは、行先は知つてけつかるぢやあろ。有體にほざき出してくれ。」北「飛んだ事をいふ。何おれが知るものか。」亭主「イヤ〳〵、そないにぬかしさらしても、汝が人に頼まれて、絲引きくさつたに違ひはないわい。」北「サア、貴樣達は、おつにいひかけをするな。」亭主「頤たゝかすな。しよびきおろせ。」トみな〳〵立ちかゝり、北八を手ごめにする。このどさくさに彌次日をさまし、この體を見て跳ね起き、飛んで出で、「コリヤ己が連れだが、うぬら此の男をどうする。」ト亭主を突き退くると、料理番「イヤ、こなやつも同盗ぢやあろ。二人ともにひつくゝれ。」トいづれも小力のあるものども、彌次郎、北八を兩方から引立て下へおろし、細引をもつて遂に二人をぐる〳〵卷に縛りたるに、彌次郎は一向合點ゆかず。委細の事を聞きて仰天し、北八も今更おやまに著物を貸したるあやまりを後悔し、疑ひうけたる上かゝる目にあひ、くやしけれども理の當然にいひわけたたず、臺所の柱につながれたる面目なさ。殊に夜もあけ放れて、近所の者どもおひ〳〵見舞ひに來るうちに、これも此の商賣屋の亭主と見えて少し口でもきかうといふ男、名は十吉、「わしや今聞いたが、吉彌めがきよとい事さらしたげな。その手引した奴らはどうしたぞいな。」亭主「あこに括つて置いたわいの。」十「店主呼んで預けさんせ。」亭主「旅のもんぢやてて譃つきさらして、ほんまのうちをえいはんわいの。」十「ソリヤ氣の毒なもんぢやわい。」ト二人が縛られてある側へ來り、「コレ、こなんたちは惡い合點ぢやわい。ソリヤはて、友だちづくなら頼まれまいもんぢやないが、もうこないにばれてはしよことがない。有りやうにいうて、めん〳〵の身ぬけするがえいわいの。」彌「イヤ、わつちらは、からきし何も知りやせん。只泊つたばつかりで、うたがひうけたといふもんだから、どうぞあなたの

お取りなしで、わつちらを助けて下さいませ。コレ手を合はせて拜みたくても縛られてゐるから、足を合はせて拜みます。コリヤ〳〵、北八もおたのみ申せ。」北「ハイ南無金毘羅大權現樣、此の災難をまぬかれますやうに、なむきめうちやうらい〳〵。」亭主「エ、何ぬかすぞい、金毘羅さま祈るなら、そないなこつちやきかんわい。幸ひおどれ裸でゐるから、水あびてこませ。垢離とつて祈りくされ。」北「イヤ、わつちは全體、金毘羅信心でござりやすが、是れまで願をかけやすに、人と逢つて水をあびて寒い目をしてはききやせぬ。何でも著物をたんと著て、殼汁に熱燗をひつかけた上、火燵へ首つきりのたくり込んで願ふと、すぐに御利生がござりやすから、せめて著物は著ずとも、一杯熱くして下さりませんか。」亭主「エ、屁ねずりくされ。」彌次「イヤ、御尤もでござりやす　わつちこそは此の男めがまきぞへ、ほんの災難。そしてこんな目にあひますと、持病の癪がさしこんで、アイタ、、、。」亭主「癪が痛いなら、胴中の繩をもちと堅うしめてやろかい。」彌次「イエ〳〵、わつちが癪は甚句をどるとをさまりますから、どうぞ此の繩といて下さりませ。」亭主「ハ、、、コリヤねからやくたいな奴らぢやわい。勘太さん許してやらんせ。たかで敵等はえらい阿房ぢや。成程吉彌めにたらかされくさつて、きりもん貸したまでのこつちやあろぞいな。」亭主「サイナ、そないにいはさんすりや、いかさま賢うも見えん童たちぢや。さしての事もありやせまい。いなしてやろかいな。」北「それは有り難うございや

すが、わつちやア此のはだかのまゝではけえられやせん。」亭主「いなれざいなんすな／＼、こちにもいひ分があるさかい。」弥二「イヤ、そんならめえりやせう。」北「サア／＼いなんせ。あたあほらしい業ぢやわいな。」トいこやると、二人が縄をと「北八、手前のお蔭で飛んだ目にあつた。」弥二「おめへよりか、おらア此の通り著物を取られて、ハアくつさめ、す、さむ／＼。」亭主「ハヽヽヽあんまり可哀さうぢや。何なと一枚くれてやろかい。」北「有り難うございやす。どんな物でも、どうぞ頂かして下さいやせ。」亭主「エエ、みだれめがいふ様な事ぬかしけつかる。てきに似合うたやうに納屋の菰一枚もて來てやれやい。」ド男「イヤ、こゝに昨日の俵がある。これを著ていかんせ。」北「ナニそれを著ろとか、エ、情ないことをいふ。」亭主「折角おれが心ざしぢや。著ていなんかいの。」弥二「ハイ有り難うございやすが、私はやはり裸が勝手でござりやす。」男「けえぶんの悪い男だ。おいらが合羽を貸してやらう。」ト彌次郎は木綿合羽を取つて北八に打著せながら、

うとましやかいたる恥も赤はだか合羽うかしき身とはなりたれ

はては大笑ひとなり、二人はやう／＼のことにて此處をのがれ立ち出でけるとなり。

道中膝栗毛六編　終

道中膝栗毛七編序

穆王は、駿に御して、王母が桃を甘んじ、靈鷲の說法を聽くも、ひとへに名馬の功によれり。こゝに彌次郎兵衛、喜多八は、心の欲する所に隨ひ、膝栗毛にのりが來るまゝ、四方に奔走して果もなきは、八駿にも勝りてたのしかるべし。かの生唼、磨墨ならば、八十うぢ川の爭ひもあるべきに、人喰ひ馬にも合口同士。勝手次第の道艸は、これ此の栗毛の德ならずや。盡きぬ趣向に七編の緒を、作者の乞ふに任せ、予も又乗りかゝつて筆を揮ふ事然り。

文化辰春　　　　龜山人蘭衣述

道中膝栗毛七編

十返舎一九 著

或人の句に、花尊都に本寺々々かなと詠みたりしは、實にも寺院堂塔の廣大無邊にして、その莊嚴麗秀なるいふもさらなり。殊に花の春紅葉の秋は、東西南北に名だたる勝景の地ありて、賀茂川名酒の樽とともに人の魂をとばしめ、商人のよき衣著たるは他國に異にして、京の著だふれの名は益西陣の織元より出で、染色の花やぎたるは、堀川の水に清く、釜もとのお白粉、川端の五倍子粉は雪をあざむき、御影堂の扇、伏見の團扇に、風匂ふ香堂前の粽、丸山輕燒、大佛餅、醍醐の獨活芽、鞍馬の木芽漬は庭訓往來にいちじるく、東寺の蕪、壬生の菜は名物選に鼻たかく、そのほか名産奇製の品物あまたある都に、たま〳〵入り込む騷客の兩人、彌次郎兵衞喜多八とて、ぬけ參りの刷毛序にまぐれ出たれども、淀川の下り船に門ちがひして荷物を失ひ、五條新地の一ぱい機嫌に、はや呑込みして丸裸となりたる北八の名にも似ず、同行の彌次郎兵衞が木綿合羽を借著せしほどの仕合なれば、かゝる洛陽の地もおもしろからず、うか〳〵と新地もどりの朝風身にしみわたり、五條の橋にさしかゝ

りたるに、此處はいにしへ牛若丸の千人切し給ふ處とあれば、北八しを〳〵と打ちかたぶきて、

　かかる身はうしわか丸のはだかにて辨慶縞の布子こひしき

かくて東に渡りて、河原院の舊跡、門出八幡も直通りとなして、高瀬船の綱に曳かれてたどりゆく道すがら、北「思へば〳〵つまらねえ事になつた。どうぞ古著屋でも見つけたら、どんなでも綿入が一枚ほしいが、彌次さん、いい智慧はねえかの。」彌「ナニ、買はずともいいにしたがいい。江戸つ子の拔參りに、裸になつてけへるはあたりめへだわ。」北「それだとつて寒くてならねえ。」彌「そんなら幸ひこゝに湯屋がある。ナント、ちよつくり暖つて行かねえか。」北「ホンニ、こいつは奇妙々々。彌次さんお先へ、ありがてえ。」ト一目散に、ある格子づくりの内の暖簾をくゞりてすつと入り、かけ上つて裸にならうとすれば、そこの亭主「モシ〳〵、こなさん誰ぢやいな。何さんすのぢや〳〵。」トとがめられて、北八あたりを見るに湯屋でなし。北「エヽ、いめえましい。湯屋かとおもつた。」亭主「ハヽヽヽ、こちの暖簾にゆの字があるさかい、それで錢湯かと思うてぢやの、アリヤ濟生湯といふふりだし藥の名ぢやわいな。」彌「ホンニ、こいつはおほわらひだ。」北「また一倍寒ひくなつた。いめえましい。」ト小言いひながら行くさきに、しみたれの古著屋一軒あり。見せ先に古布子、古袷つるしあり。北八彌次郎兵衞をくどきて、布子一枚求めんと件の見せに立ち、ひねくり廻して紺の布子を取って透し見、「モシ、この布子はいくらだね。」古著屋の亭主「ハイ〳〵、こつちへお掛けなされ。コレお茶もてこんかいな。お煙草の火もないわいな。赤いの一つ、ちやとくさんせ。」北「イヤ茶も煙草もいりやせん。

コリヤアいくらだといふに。」亭主「ハイ〳〵、そりやきやうとうよござります。お安うしてあげうわいな。」小ぞう「ハイ、お茶あがりなされ。」亭主「長吉そりやおぬるいぢやないかいな。なぜ熱い茶あげんぞい。」小ぞう「イヤ、お家様が朝は茶粥ぢやさかい、茶焚くなとおつしやつてで御ざります。それは昨日焚いた儘の茶でござりますわいな。」彌「いかさま、昨日のお煮花程あつて、とんと河童の屁のやうだ。イヤ屁の序に、尾籠ながら御亭主さん手水に行きたい、おうらをちよつと。」亭主「ハイ〳〵、雪隱へお出でかいな。」小ぞう「雪隱はぬるうはござりませぬ。よう沸いてぢやあろぞいな。」亭主「ナニ雪隱を誰が沸したぞい。」小ぞう「それぢやてて、今のさき私が參じたさかい、すぐ行て見なされ、ほつほと煙が出てぢやあろ。」亭主「エヽ、むさい事いふ奴ぢや。」北「そんな事より此の布子はいくらだえ。早くきめてくんねえ、寒くて堪へられぬ。」亭主「お寒くば、もつとそつちやへ寄りなされ。そないによう日がさしてぢやわいな。昨日も著物買ひにお出でたお方が、コリヤ氣疎い暖い内ぢやてて、そこに一日日向ぼこしていなれましたが、そのお方がもう著物買うて著いでもだんない。毎日こゝの内へ日向ぼこしにこうわいなと、こないにいうてぢやあつたわいな。」北「エ、じれつてえ、コリヤア賣らねえのか、どうだな。」亭主「ハイ〳〵、かうぢやわいな。」北「安くしてくんねえ。」亭主「ソノ紺のおひえぢやな。」ト算盤ぱつちぱつち「三十五匁、とんとぎり〳〵ぢやわいな。」北「高い〳〵。わつちらは江戸の者だが、

古著は商賣がらで、いくらも取扱つてゐるから、やるもんぢやァねえ。ほんたうの所をいひなせえ。」亭主「ハイ、御商賣がらとあれば、お前樣も古著屋なされてかいな。」北「イヤ、私は質商賣さ。」亭主「質とあれば何かいな、おとりなさるのか、置きなさるのかいな。」彌「おくのが此の男の商賣さ。」北「それだから質におく時の算用からしてかゝらにやァ買はれやせぬ。此の布子はどうしても一貫より外は貸すめえから、貳朱ばかりに買はにやァ損がいく。」亭主「何いひぢやぞいな。後家の質屋へもていても、金壹分は物いはず貸すわいな。」北「とんだ事をいふ。どうして壹分貸されやせう。」亭主「ナニ、壹分つかん事はありやしよまいがな。」北「それとも、おめへぢきに受けなさるか。」亭主「受けるわいな。」北「さういつてもあてにやァならねえ。それよりか、此の閒の股引の出入はどうしなさる。そして袷の時貸もあるし、それもおめへ、子供衆が脾胃虛して煩つてる上、內儀樣が疫病で死なれたけれど、佛かかへて葬禮を出す工面が出來ぬと、たつてのお賴みゆゑ貸して上げたものを、義理のわるい。いつそのこと此の布子は、その袷のかたに、たゞ取つておきやせう。」亭主「ア、これ申し、とつともう、やくたいもない事いうてぢやわいな。わしが嚊が、いつ疫病で死んだぞいな。あたけたいな事いはんすわいな。」ト亭主大きに腹立てる。彌次郎兵衞をかしく、「どうも此の男は口が惡くてなりやせん。料簡しなせえ。そして何角と面倒な、その布子も壹貫にまけてやりなせえ。」亭主「よござります。朝商ぢや。まけてあげよわい

な。シヤン〳〵〳〵。」北「まづは布子にありついた。」ト彌次郎に代錢を拂はせ、かの布子を著て彌次郎兵衛に木綿合羽をかへし、此の內を出るとて暖簾を見れば、とらやとあるに思ひよりて、

和藤內三貫あまりの古布子老一くわんにもとめこそすれ

それより北八は忽ちに元氣をえて、「ナント彌次さん、凄まじからう。古著屋めをちやらほこではぐらかして、壹貫に見落しは安いもんだ。見なせえし、まだ衿垢もつかねえ物を。」彌「紺の看板と見えて、おいらがお供のやうで丁度いいの。」北「時に、こゝらは何といふ處だの。がうてきに意氣な女がちら〳〵するわ。」彌「ハヽア紫帽子の野郎どもが見えるから、大方宮川町といふ見當だ。」北「くるぞくるぞ、美しい妓どもが來る。いい時おいらァ著物を買つてよかつた。まんざら裸の上にその木綿合羽ちやァ、あいつらに擦れ違つても外聞が惡い。」ト俄に襟かき合はせて見榮はりながら、向ふより來るおやま藝子に擦れちがひ通れば、一人の妓振り返り北八を見て、「はつねさん、見なませ。あの人さんの著物におつきな紋がついてぢやわいな。オヽ、をかし、オホホホホ。」はつね「ホンニあほらしい人さんぢや。オヽすかんやの。オホヽヽヽ。」ト打笑ひ行き過ぐ。彌次郎兵衛も心付きて、「オヤ〳〵、北八、手めへの著物を見や。脊中のよこちよに大きな紋所がくつ付いてゐらア。」北「どこにどこに。」ト振返りてよく見れば、幟を紺に染めたる布子故、ちよつと見ては知れねども、日あたりへ出ると大きな紋所あり〳〵とすいて見ゆる。北「コリヤ大變々々。」彌「ハヽ、ハヽ、裾の方には鯉の瀧のぼりが見えるから、こいつ幟のはぐらかしものだな。」北「エヽ、古著屋めが

とんだ目にあはしやァがつた。道理で安いと思つた。ぶんのめして來よう。」彌「ナニ、うつちやつて置きやれ。皆手前がべらぼうから起つた事だ。先は商賣だものを仕方がねえ。」北「エ、、いめえましい。」ト眞面目になりて呟きながら四條通りに出づれば、名にしおふ川東の生粹祇園町のはんじやうは、兩側の芝居、を打ちまじへ、櫓太鼓てんから／＼の音いさましく、狂言の名代看板はなやかに、對のはで模様著飾りたる東西の木戸番、鹽辛聲にて、「サァ／＼、評判ぢや／＼。いまが三五郎の腹切ぢや／＼。此のあとが、あら吉ととも吉が所作事、評判々々々々。」ト呼びたつる。江戸で火繩といふは、京、大阪にては皆女なり。北八彌次郎兵衞が袖をひいて、女「モシナ、お前さん方、一幕見てお出でんかいな。」北「いかさま、ナント彌次さん、京の芝居もひときり見ようぢやァねえか。」彌「おもしろからう。女中いくらで見せる。」女「よござりますわいな。私がどうなとするさかい、マアお出でなされ。」ト二人を兩方の手にひつぱり、引連れて芝居へはひり二階へ上ると、桟敷番來り二人を向桟敷の前側へ入れる。尤も幕の内にて中賣商人聲々に、「みつから宇治山、みづから宇治山饅頭よいかいな。」「ちやァあがらんかいな。ちや／＼どうぢやいな。」「番付、繪本繪本。」彌「がうぎに大入だ。しかし、江戸の芝居の半分でもねえ。」北「ア、退屈だ。一ばい飲みたくなつた。」彌「おらァ腹がへりまの大根だ。菓子でも買つて食はう。」商人「みつから宇治山。」彌「なんだ、手づからうつちやる。勝手にさつせえ。」商人「饅頭どうぢやな。」北「こいつがいつち分つて居る。コレ、饅頭三ツ四ツくんなせえ。」商人「ハイ／＼、三文ヅ、でござります。」隣桟敷の見物「コレ、饅頭やさん、どしたもんぢやぞい。こちの辨當へし潰しぢや。」商人「ハイ／＼、お許しなされ。」彌「アイタ、、、がう

きに足を踏んだ。」商人「ハイこれはモシ、ちつとお許しなされ。」北「コリヤどうしやアがる。人の頭の上を金玉を引きずつて通りやアがる。エ、汚ねえ〳〵。」二階棧敷の見物太郎兵衛「オヽ、權兵衛さん、何を買うておいでたごいな。」權兵衛「太郎兵衛さん待つてぢやあろ。わしや今、あこの棧敷でな、氣疎う味いもの喰てぢやさかい、ソレ見てゐて遲なつたわいな。サア〳〵、こないなもんぢや。」ト竹の皮づゝみを出す。太郎兵衛「ハア、鯖のすもじかいな。コリヤ氣疎い〳〵。その飯は辨當のかはりにして、さかなはへがして酒の肴にさんせ。それがよいわいな。」權兵衛「さよぢや。竹の皮はもていんで、草履の鼻緒たてるわいな。イヤ、時に一杯やろわいな。」ト小さな猪口を取出し、風呂敷に包みし德利より注いで飲む。北八これを見て小癪になり、「彌次さん見ねえ、うまさうに飮みをるが羨ましい。」彌「エヽ、いめえましい事をいふ男だ。」北「コレ、おばうさん、おまん一つ上げやせう。」トおのれが食ひ殘した饅頭一つ、鄰棧敷の子供にやる。これにてあしをつけて、酒を飲まうといふ下心なり。太郎兵衛「コレハお有り難うござりますわいな。」北「お前方アよい物をあがりなさる。」太郎兵衛「おまいも御酒はお好きかいな。」北「左樣々々、飯よりは好物さ。」太郎兵衛「ソリヤよいお樂しみぢやわいな。コレ權兵衛さん、も一つ頂かうかいな。すト、、、コリヤよい酒ぢやな。」權兵衛「さよぢや。ホンニお鄰のお客、御退屈ぢやあろ。これなと一つ上らんかいな。」ト茶碗をさし出す。北八、手に取るよりはやく頂きて「ハイ、有り難うござりやす。」太郎兵衛「併し冷めはせんかいな。モシ、お銚子ごとそれへあぎよわいな。」ト茶屋の土瓶を北八に渡せば、もつけな顔して受取り、注いで飮めばぬるい茶なり。北「エヽ、茶ださうな。ペッ

ぺッ〳〵。」太郎兵衛「お溫なつたぢやあろ。」北「とてもぬるい序に、どうぞ是れへその徳利のをうめて下さりませ。」太郎兵衛「これはしたり。コレ見なされ、こないになつたわいな。」ト徳利を逆樣にして見せる。彌「ハ、、、、業晒しな。」北八小聲に「いめえましい。饅頭一ッ棒にふつた。」トぶつ〳〵口の中に小言いひながら脹れてゐると、此の內樂屋にて、拍子木、「カッチカッチ。」見物「イヨ、口上さまァ。」口上「東西々々。」拍子木「カッチ〳〵。」ト此の內口上もすみ、幕の中にて、太鼓「てん〳〵、てれつくてん〳〵。」拍子木「カッチ〳〵。カチ、、、。」三味「ツ、テン〳〵〳〵。」幕開くと花道よりしだしの役者、大勢出ると見物の惡口、「イヨ大根ウ。十把ひとからげぢや。」北「ナニ、大根とはァノ役者のことか。何のこつた。」見物「ヨウでけますの。」北「ありがてえと申しやす。」ト此の北八、いたつて芝居好ゆゑ、幕があくと夢中になり、何もかもうち忘れて、無上に大きな聲してほめる故、見物みな〳〵をかしがり北八の方を見てゐると、「ヨウ〳〵、大根め〳〵。」此の大根といふ事は、上方にては役者の下手なものを大根といふ。北八、そのわけは知らず。人が大根々々といふを、きいた風に役者さへ見ると大根大根と呼び立つるを、見物、北八を小ばかにして、「イヨ盲錄さまァ。」ト北八を笑ふ。北八、上方にて盲錄といふは、江戸にていふ折介といふ事なり。北八、紺の布子を著てゐる故、見物、看板著たると思ひてかくいふなれど、北八盲錄のわけを知らねば、北「彌次さん聞いたか、こつちの役者にはいろ〳〵の變ちきな名がある。大根だの盲錄だのと、よもや俳名ぢやァあるめえ。」彌「大方役者の仇名だらう。」北「そんなら今出た役者が盲錄だな。ヨウ〳〵、盲錄ありがてえぞ。」トいふと、見物にどつと落ちが來て、狂言は見ずに北八の方許り見て、とつ〳〵と笑ひながら、「イヤ、向棧敷の盲錄樣、おほでけ〳〵。向棧敷のまうろくの阿房ャァイ。」北「何だ、向棧敷の盲錄たァ何のこつた。はなつたらしめら。」彌「ハ、、、、はなつたらしたァ手めへのこつたは。」北「な

ぜなぜ。」彌「上方で旨錄といふは折介の事だが、手めへ、紺の看板を著てゐるから、それでみんなに冷かされるのだわ。」北「エヽ、さうか。そんならとつくにさういつてくれればいいに。」見物「あほよあほよ。」北「イヤ、こいつはふてえ奴らだ。」ト無上に力むと、見物みな〳〵騒ぎ立ち、喧嘩よ〳〵と大騒動となると、棧敷番四五人來り、北八を捕へ引出さんとする。北「コリヤどうする。」さじきばん「おまい、狂言の邪魔になるわいな。こちへごんせ。」見物「そいつ、早ういなせやイ。」北「何ぬかしやァがる。」さじき「ハテよいわいな。」彌「コリヤ、貴樣たち此の男をどうする。」さじき「イヤ、お前もごんせ〳〵。」ト二人を宙に釣り上げ下へひきおろし、日々に何のかのとべちやくちや丸められ、のぼせ上り、せん方なく、エヽ、面倒だと兩人小言たら〳〵芝居を出て、祇園町の方に赴く。北「エヽ、業さらしな。ハヽヽヽ。」

木戸錢を棒に古手の布子にてしばるも紺のだいなしにせし

それよりゆき〳〵て祇園の社に參る。御本社の中央は大政所、牛頭天皇、東の間は八王子、西の間は稻田姫、聖武天皇の御宇、吉備大臣、唐土より歸朝の時、播磨の廣峯に垂跡し給ふを崇め奉れりといふ。其の外攝社、末社、記すに遑あらず。參詣日々に羣集し、茶店あまた祇園香煎の匂ひ高く、齒磨賣の居合拔、賣藥のいひたて、浮世物眞似、能狂言、境内に處狹きまでみち〳〵たり。こゝにもさま〴〵方言をかしみあれども、其の趣、感和亭の著す舊觀帳に事古りたればこゝに略す。彌次郎兵衞北八、悉く順拜して、南の方、樓門を出ると二軒茶屋、豆腐田樂の名物にて、赤前垂したる女ども大勢門に立ちてしやべる。「お休みなされ、お休みなされ、これへお入りなさらんかいな。コレナ、お支度なさらんかいな。」彌「ハ、





ア、こゝが川柳點に、豆腐切る顏に祇園の人だかりといつた處だな。アレ、北八見や。こいつは妙だ妙だ。」ト のぞいて見れば、女の豆腐切る音、「トントヽヽヽトン〳〵。」北「ホンニ面白〳〵。イヤ時に、こゝで一杯やらかしはどうだ。ちと腹が北野の御神木だ。」女「サア、奥へお入りなされ。」ト 此の内、兩人奥へとほる。「お茶あがりませ。」北「田樂で飯にしよう。酒も少し。」女「ハイ〳〵。」彌「京では何でも他國者と見ると、途方もなく高く取るといふ事だから、油斷はならぬ。」北「ホンニそれ〳〵、二文でも割をくつちや業腹だ。」ト 此のうち、女、杯をもち出で、口とりに菜の浸物、丼に入れ持ち出で、女「只今お田樂がでけます。マア一つ上りなされ。」彌「よし〳〵。モシ女中、酒はいくらづゝだの。」女「ハイ〳〵、わたくしの處の御酒はよござります。六拾文がへでござりますといな。」彌「エ、それぢやァ分らねえ。此の丼はいくら。」女「それかいな、五分でござりますわいな。」北「飯を早くたのみます。」女「ハイ〳〵、かしこまりました。」ト 膳を二ぜんに飯ばち、田樂を持ち出で、「ハイ、おでんが出けました。」彌「こいつは變な田樂だ。」女「ソリヤ葛ひきぢやわいな。おむしのは唯今。」彌「田樂はいくらづゝだ。」北「ハヽヽ、いかに先へ直を聞くがいいとつて、田樂は聞かずといいぢやァねえか。サア一ぱい始めねえ。」彌「オット〳〵、なるほどいい酒だ。水ッぽくてねから飲めぬ。もう一杯つゞけよう。」北「コレ、おめへ小言をいひながら獨りで呑む。ちとこつちへよこしねえな。」彌「ときにこれではいかぬ。モシ〳〵、何ぞ肴を一つ。」女「ハイ〳〵。」ト やがて硯ぶたを持ち來る。彌「この硯ぶたはいくらだ。」

女「ハイ、貳匁五分でござります。」北「こいつは高え〳〵。」彌「へ、うつちやつて置きや。あんまりあたじけなくしやァがると、己が困らせてやる仕法がある。」トだん〳〵肴を出すごとにその直段を聞きて、出ただけの物殘らず食ひしまひて、彌「サアサア、女中勘定をたのみます。」女「ハイ、それへ。」ト書附を秤に添へて持ち來る。彌「ドレ〳〵、北八見や、ざつとした處が此の書附だ。」北「オヤ〳〵、拾貳匁五分たァ、がうせえにたけえ〳〵。貳朱位のものだ。彌次さん、まけて貰ひなせえ。」彌「イ、ヤ、安いものだ。ソレつりを持つて來な。サァ〳〵、北八荷物ができた。これを皆持つてけへるのだぜ。」ト硯ぶた、大ひら、丼などをみな鼻紙にて拭きかたづけるゆゑ、北「彌次さん、それをどうする。」彌「コレ女中、コリヤ皆持つて歸りやすぞ。」女「イエ、それは。」彌「ハテ、さつきに此の丼はいくらだと聞いたら、五分だといつたぢやァねえか。そして硯ぶたはといへば、貳匁五分だといふ。よしか。大平が三匁、よしか。此の鉢はと聞いたら、これが三匁五分と貴樣がいつたに違へはあるめえ。そこで〆た處が拾貳匁五分渡したから、言分はあるめえ。」女「オホ、、、ようぢやら〳〵と、てんごういふお方ぢやわいな、オホ、、。」彌「イヤ、オホ、、ぢやァねえ。ほんたうに持つてけへる。」ト眞面目になつて風呂敷に包まうとする故、女肝を潰して、「モシナ私のいうたは、お肴の事でござりますわいな。」彌「ハテ、肴の直段聞く氣なら、此の硯蓋に盛つてある肴はいくらだと聞きやす。それを此の硯蓋はといつたら、貳匁五分だといつたぢやァねえか。」女「そぢやてて、それがまあ。」彌「ナニいさくさがあるもんだ。」

トやつつ返しつゝいふ處へ、委細をきいて前垂したる男、勝手より出で、「ハイ、これはあなたの御尤も、よござります、お持ちなされませ。その代り、道具の代物は頂きましたが、上つた物のお拂ひはまだ頂きませんわいな。それを御勘定下さりませ。」彌「成程〱、食つた物は高が知れてある、拂ひやせう、いくらだ。」男「ハイ、七拾八匁五分でござりますわいな。」彌「途方もねえ事をいふ　おいらを盲だと思ふか。コレエ、たつた五百か六百が物を食はせておいて、大それた事をぬかしやァがる。」男「イヤ、私方では何ぢやあろと、お肴は大阪から歩行荷で取寄せますさかい、駄賃がえらうかゝりますわいな。」彌「肴はそれにもしてやらうが、青物は高が知れてある。アノはじめに出した菜のしたし物はいくらにつく。」男「ハイ、あれはな、七匁五分。」彌「ヤァ、あれが七匁五分たァ、あんまり人をうつむけにしやァがる。三文か四文が物だ。」男「そないにおつしやりますな。ありや京の名物で、東寺菜と申しますわいな。私方では別に作らせまして、蟲のくた菜は退けますわいな。そして莖も太い細いのないやうに、えり出して上けるわいな。むさいお話ぢやが、糞も絹ごしにかけますわいな。」彌「飛んだ事をいふ。そんな事があるもんか。何でも食つた物の代は二朱ばかりやらう。」男「イエ〱、さよぢやなりませんわいな。ハテ、高いと思召すなら、あがつた物を殘らずお戻し下さりませ。」ト此の一言に困り、彌次郎兵衛やつきとなりてせり合うた處が理窟づめにあひて大閉口となり、まじまじすれば、北「エゝ、面倒な。彌次さんはじまらねえぜ。」彌「いま〱しい。言分があれど勘定づくで恰

好がわりい。料簡してやらう。よく覺えてるやァがれ。」ト睨み廻して立上り、はうはうこの處を出づれば、女「ようお出で、またお近いうちによへ。」彌「糞をくらへ、ハヽヽヽ。」

又しても祇園の茶屋に田樂のみそをつけたる身こそくやしき

それより境内を出で、もとの四條通りを行くに、日も早七ツ下りとなれば、急ぎ三條に宿を求め、足休めんとたどり行く先に立ちて、近在の女商人、いづれも頭に柴、薪、或は梯子、連木、槌などを頂きて四五人打連れだち「はしご買はしやんせんかいにやァ。連木いらんかいにやァ。」北「コウ、見ねえ。がうせえな物を頭へのつけて行くわ。」彌「アノまァ、尻を振るざまわい、ハヽヽヽ。」女商人「たきぎ買はしやんせんかいにやア。」トゆき〳〵て河原に出ると、かの女どもおか〳〵こゝに荷をおろし、すり火打にて煙草などのみて休む。彌「ハヽァ、さすがは都ぢや。どいつも小綺麗な面つきだ。ちと冷かしてやらうか。」北「またお前、へこまされようと思つて。」彌「ばかァいふな。手めへぢやァあるめえし。」ト煙管を出し、女商人のそばへ寄り、「御無心ながら火を一つ。パッパパッパ〳〵。時におめへがたァ、飛んだ重てえ物を、よく頭へきけて歩きなさるの。」女「さよぢやわいな。」北「此の位な物を、おいらなんざァ二十貫目や三十貫目の石を、頭で振廻したものだ。」女「お前さんは饂飩屋の粉ひきぢやあろわいな。」彌「エヽ、手めへ默つてるろえ。」女「お前さんがたァ、どうぞ、此の連木買つておくれんかいな。」彌「ナニ、すりこ木か。ァ、買ひてえがコリヤァ細い。わつち

らが處ぢやァ、なんでも材木のやうな、そして四角なすりこ木でなくちやァ間に合はねえ。」女「オホ、、、四角にした連木でおむし擂らんすなら、大方擂鉢も四角ぢやあろわいな。」彌「さうとも、さうとも。おいらが處ぢやァ穴藏で味噌を擂る。」女「オホ、、、、、けうといきさくなお方ぢやわいな。アノ連木おいやなら、梯子買うておくれんかいな。」彌「ハ、、、、はしご、おもしろえ、いくらだ。」女「今日は何もよう賣らんさかい、安してあぎよわいな、六匁下んせ。」彌「二百ばかりなら引受けようさ。」女「アノぢやら〱いうてぢや事わいな。もちと買うて下んせ。」彌「いやだ〱。」女「お前さん、こないに味ようしてあるわいな。モシ、五匁にあぎよかいな。」彌「いや〱。」女「よいわいな。是れ持ていんだら呵られよう。二百にまけてあぎよわいな。」彌「ヤァ、まけるか、情ないことをいふ。」女「けうとう安いもんぢやわいな。」彌「いくら安くつても、梯子買つてどうするもんだ、うちもねえ癖に。」女「よいわいな。サァ持ていなんせ。」彌「こいつはあやまる。有り樣は、己は旅の者で、今宵は三條に泊らうといふのだから、梯子を買つても仕方がねえ。」女「何いはんすぞいな。いらん物をつけさんす事はないわいな。」彌「ソリヤもう、直をつけたが不肖だから、いらねえ物でも袂か懷へ入る物なら買つてもやらうが、何をいつても此の梯子だから恐れる〱。」女「それぢやてて、私らを嬲らんしたのかいな。こちや商賣ぢやわいな。そないな事いやぢや。持ていなんせ。」ト女ども四五人、口々に喧しく彌次郎を中

に取巻き攻めたつる。すべて此の女商人は、皆いたつて氣の強き者故なか〳〵合點せず。物見高い京の人たち、何事やらんと折り重なりてぐるりと取巻くに、彌次郎兵衛逃げられもせず、大きに困りはて樣々にいひわけし、又張込みいつて見ても一向聞き入れず。相手は皆女の事なり、喧嘩にもならず。詮方なく錢二百文出してやり、たうとう梯子を買ひ取り、人の見る前捨てられもせず。見物はどつと笑ひてちる。彌「こいつは意氣地もねえ目にあつた。北八、そこらまで擔いでくれ。」北「エ、飛んだ事をいふ、お前持ちなせえな。」彌「又一番へこんだ、業腹な。」

いかにせん梯子の親とこのやうな厄介ものをひきうけし身は

かくて四條通りを寺町へ下りて行くみち〳〵も、梯子の持ち重りして呟きながら、彌「ナント北八、手めへ附合を知らぬものだ。ちつとばかり持てくれろえ。」北「いかさま、おめへ心がらとはいひながら氣の毒なこつた。さぞ重たかろ。かうしなせえ、アノ女どものやうに、あたまへきけて持つて見なせえ。」彌「なるほど〳〵。」ト手拭をたゝみ頭へのせ、その上へ梯子をのせ、兩手に持ちそへ行くと、往來の人「コリャ何ぢやいな。危うてならんわいな。」彌「ハイ〳〵、向うがさつぱり見えねえで歩かれぬ。」往來の人「コリャじやうもんが行くさうぢや、お水もて出やしやんせんかいな。」じやうもんが行くとは、火事があるさうなといふ事なり。往來の人「どこにじやうもんが行くぞいな。」「アレ、あこへ梯子持て行くわいな。あほよ〳〵。」彌「何ぬかしやァがる。」往來の人「ふぬけな童ぢや、ハ、、、。」彌「イヤ、このべらさくめら。」ト梯子を頭へのせたなりに、ぐつと振返れば、その梯子、後先にて往來の頭をこつつり。往來の人「アイタ、、、何ぢやい、どめつさうな。此の人中で長い物横たはしにしくさつて、えらい馬鹿ぢやな。」

天窗どやいてこませやい。」彌「ナニ戲言ぬかしやァがる。」往來の人「私が額の痰瘤がなうなつた。そこらにや無いか見て下んせ。」彌「エヽ、おいらが知るものか。馬鹿な面な。」往來の人「えらい頤な童ぢや。たゝんでこませやい。」ト何れもきかぬ氣の者と見えて、大勢どやどやと立ちかゝれば、北八とめて、「コリヤアこつちらが悪かつた。どなたも御料簡下さりませ。サア〳〵、彌次さん歩びなせえ。」彌「いめえましいやつらだ。北八、どうも一人では持たれぬ。あとの方へ肩を入れてくれぬか。」北「ドレ〳〵、コリヤアおれまでを飛んだ目にあはせる。」

是れもまたはなしのたねよはる〴〵と京へのぼりし梯子一脚

彌「エヽ、歌どころぢやァねえ、どうぞ打捨つてしまひてえもんだが。」ト今は二百の錢も惜しからず、厄介物の梯子、打捨てて行かんと往來少なき横町へ入り、そつと据ゑおき逃げんとすれば、折惡しく人に見付けられて、とがめられて詮方なく擔ぎ歩き、又何方へぞ捨てん〳〵と思ふうち、うか〳〵と三條通りに來りければ、宿引と見えたる男、「モシナ、お前様方お泊りかいな。」彌「とまり〳〵。」やご引「こちの内方へお出でんかいな。」北「おめへどこだ。」やご引「ツイあこぢやわいな。サァ〳〵お出でんかいな〳〵。」ト打連れて大橋の方へゆく。

既にその日もはや西におちて、家毎に燈火を照らし門さす頃、三條小橋を打渡りてかの旅籠屋の方に著きたるに、やご引「サァ〳〵お泊り様ぢやわいな。」やごやの亭主「コレハお早うお著きでござりますわいな。」彌「アイお世話になりやす。」亭主「お荷物は。」北「此の梯子一丁。」亭主「コレハ氣疎いお荷物ぢやわ

いな。」コレ〳〵おたこや、奥へ御案内申さんかい。」女「ハイ〳〵お出でなされませ。」ト奥へ案内するに連れ立ち、二人は座敷へ通ると亭主來りて、「今晩はお客様がいかう少なうござりますさかい、お湯は焚きませぬ。ツイあとの小橋下る處に、けうとう綺麗な湯がござります。これへなとお出でなされ。」北「おいらァいいから、彌次さんお前行くなら行つて來なせえ。京の水で洗ふと、がうせえに色が白くなるといふ事だぜ。」彌「この上白くなつちやァ詰らねえからよしやせう。」亭主「時にあなた方は、近在から御出でかいな。」北「イヤ、わつちらァ江戸でござりやす。」亭主「かいな、私は又梯子をお持ちなされたさかい、コリャ近在のお方で、お宿へ買うてお歸りなさるのかと存じましたが、どして江戸のお方が、梯子を何なされますざいな。」北「イヤ、これには譯がありやす。アリャ江戸からことづかつて來やしたのさ。」亭主「ソリャ何として、あないな物を。」北「聞きなせえ。わつちが心安い者だが、生まれは此の京の人で、今江戸に世帯を持つてゐやす處へ、京の親元の方からはる〴〵と、アノ梯子を擔がせてよこしやした。その譯はかの親御が無筆といふ事で、人に手紙を書いて貰ふも面目ねえと云ふ事かして、アノ梯子ばかりよこした心は、上つて來いといふ心意氣でござりやせう。そこで又その息子が返事をよこしてえが、同じくこれも無筆で、いろはのいの字も書けねえ癖に、飛んだまけをしみ、わつちらが今度御當地へ來るといつたら、幸ひの事だからことづけてえ物があるといふによつて、隨分何でも屆けて遣らうとい

ひやしたら、聞きなせえ、きたねえ乞食坊主一人とアノ梯子をよこして、是れを親父の方へ届けてくれろといひやす。そこでわつちが、コリャ梯子はいいが、坊様は生きてゐる人だから、持つて行くに難儀だといひやすと、其の男のいふにはそんなら梯子ばかり持つて京へ行つたなら、どうぞ坊様を一人頼んで、その坊様に撞木ばかり持たせて、梯子と一緒に親父の處へやつて下せえといひやすから、ソリャアなぜさうするのだと聞きやすと、イヤ京の親もとから上つて來いといつてよこしたから、その返事だと頼まれて持つて來やしたのさ。」亭主「ハヽヽヽ、梯子をやつて上れといふは聞えてぢやが、そのお返事に梯子と又坊様に撞木許り持たして遣るとはどうぢやいな。」北「ソリャ上りたいが金がないといふこゝろ。」亭主「ハヽヽヽ、でけましたわいな。しかしはる〳〵の道中、梯子のことなりや柳行李へもよう入るまいに、さぞ御難儀にあつたぢやあろ。」北「イヤなか〳〵さうでもござりやせぬ。道中するには梯子を持つて歩くが、とんだ調法なものさ、馬などに乘るに梯子をかけて乘ると、途方もねえ乘りよくて、そして川々を越すに徳な事がありやす。大井川でもあべ川でも臺越といふをすると、川越の賃錢が四人前に、かの臺の賃が一人前出やす處を、梯子持參といふものだから、川越の賃錢ばかりで臺の賃がかすりになりやす。おめへ方も、是れからもしも道中しなさる事があるなら、かならず梯子は持ちなさるがいい。コリャ人の氣のつかねえ調法な物でござりやす。」亭主「イヤ誰も道中すると

て、ナニ梯子もて行ことといふ氣がつくものかいな。ハ、、、、。時に只今おつしやつた坊様は、こゝでお雇ひなさるのかいな。」北「さうさ、是非雇はにやァなりやせぬ。」亭主「さよなら幸ひの事ぢやわいな。私方に世話致して置きをります、よい坊がござりますわいな。是れをお連れなされませ。只今お引合はせ申しましよかい。」ト立上らんとする。北八肝をつぶし、北「モシ／＼待つてくんなせえ。今急にはいりやせぬ。厄介物の梯子を引受けて困るさへあるに、又生きた坊様を取込んでどうするものだ。ノウ彌次さん。」彌「イヤ／＼、ソリヤ手めへの係だから、おいらは知らぬが、何にしろ其の坊様を早く頼むがよささうなものだ。」北「エ、おめへまでが飛んだ事をいふ。」亭主「ハテ今あなたのいうてぢや通りなら、ぜひともお頼みなさるのぢやないかいな。」北「それはさうだけれど。」亭主「何ぢやあろと、私へお任しなされ。」北「そんな事より、おらァ早く飯が食ひてえ。」亭主「御膳も今あげますが、坊様はどうぢやいな。」北「オ、サ坊様、早く食ひてえ腹がへつて堪へられぬ。」亭主「ハイ／＼畏まりましたわいな。」ト立つて勝手へ行くと、ほどなく女飯を出す。食事の内さま／＼無駄あれども、餘り／＼だゞ／＼しければ畧す。やがて膳をひきたるに、宿の亭主は北八がちやらくらに乘つた顔して、慰み半分、これもぶしやれものなれば、年の頃六十近き、薄汚れた毛むしやくしやの大坊主壹人誘ひきたりて、亭主「イヤもうめしあがりましたかいな。時にたゞ今お話し申しましたは、此のぼんでござりますわいな。」ト引合はすれば此の坊主鼻ひしやげにて鼻聾なり。「ハイ、是れはひやうお泊りなはれました。愚僧名は丸哲と申します。内かたの旦那どのがお話しゆゑ參りました。」彌「コレハ御苦勞。サア／＼これへこ

れへ。」北「コリヤ御亭主さん、だん／＼お世話だが氣の毒な事がありやす。」亭主「何ぢやいな。」北「イヤ、無躾ながらアノお方では間に合ひますめえ。なぜといふに、ちつと許り素人狂言でもしたといふやうな坊樣でなけりやアなりやせん。」亭主「ソリヤどうしたもんぢやいな。」北「イヤ、さつきお話し申した通り、さきの親元へ行つて、上りてえが金がねえといふ返事した上で、かの息子が三百兩なければ上られねえといふものだから、その心意氣をせにやなりやせん。處でかの盛衰記の梅が枝が無間の鐘の所作事、撞木を柄杓とこじつけて、チ、、、チン、ア、三百兩の金がほしいなアなぞと、その坊樣にやらかして貰はにやならねえと云ふものだから、むづかしい。」亭主「イヤよござります。此のぼんもありやうは、馬鹿村變之助と申して、以前は宮芝居の女形をやりをつたものぢやさかい。えら出來ぢやわいな。さいはひこちの娘めが、いま無間のかね習うてぢや。なにもなぐさみ、ちよぼ語らしてやらしましよかいな。」丸てつ「ひやりましよとも／＼、わしふめがえをぴやるさかい、どなたぞへん太をやてくだんせ。」彌次「コリヤおもしろい。鼻くたの梅が枝に、北八源太は手めへが相應だ。」北「エ、ばかアいひなせえ。わるいしやれだ。」ト眞面目になり小言いつてゐるうち、亭主が指圖に十三四の娘三味線を抱へて來ると、うちの女房、下女、飯炊まで次の間にかたまり丸哲坊をそゝのかしながら、見物する。彌次郎可笑しく、見「コレ北八、アノ通り内儀樣や女中たちが見物してぢやが、一番おちを取る氣はねえかどうだ。」ト袖を引かれて北八少し浮かれが來て、「いかさま見物が多いと張合がある。まゝよ源太におれ

がならう。そのかはり、いひぐさは出たら目にやるが、いいか。」ぐわんてつ「ひよござりますく。サア
サアおとらさん、へん太の出端からやて下んせ。」彌「ハヽヽ、髭むしやくしやの梅が枝もいいが、源
太がのぼりを染めかへした著物きてゐるも珍らしい。」北「コレく東西々々。」ト此の中娘浄瑠璃を語り出す。「夜ごと
夜ごとに通ひ来る、梶原源太景季、ちとせがおくを伺へば、ちやうどよい首尾さいはひと、すつと通
れば梅が枝は、火燵にとんと身をそむけ、そらさぬ顔でふくきせる。」北「コレ、何がきけんにいらぬ
やら、めつきりと持たせぶり、われらがやうな浪人の、黴びた衿にはつかれまい。」じやうるり「すんど
たつを待たしやんせ。」ぐわんてつ「ざひきばかりをふとめるひやすで、けふこゝほらはれたは、文でひら
せて合點ぢやないか。」じやうるり「憎い男と目にもろき、涙は戀のならはせなり。」北「ア、コリヤ寄るな
寄るな、臭くてならねえ。そつちへぐつと寄つたく。がうせえに臭い梅が枝だぞ。」ぐわんてつ「ひよ
りやぎごえませぬへんださん。」北「エ、寄るなといふに、コリヤ手短にやつてくれろう。コリヤ坊主、
イヤ梅が枝、産衣の鎧はどうした。」ぐわんこう「ひちなん即滅と、三百目にまげたわいの。」北「ナニうち
殺した。ソリヤなぜに。」ぐわんてつ「そもやわたしが便毒から、骨疼になつて、山帰来飲む程にく、
氣種はしくく、此のひやなを、助けたいばつかりに、ひやねならたつた三百目で、ひくいひやなを
落すか、アヽ、ひやなが惜しいなア。」三下りうた「二八十六でふみ付けられて、二九の十八でつい其の心、

四五の二十なら一期に一度、わしや帶とかぬ。」ぐわんてつ「エ、何ぢやの、人の心もひらずにふたいくつさるほんにひよれよ。」彌「イヤまつた。」トこれもこらへられず、勝手に行きて以前の梯子、店の閒に横倒しにしてありしを提げきたり、鴨居にうちかけ二階の氣取にて、彌次郎中段に上りながら、手拭をたゝんで大盡風にちよいと頭にのせて、「サア〳〵源太が母の安壽の役だ。サア和尚やらかしねえ。」ぐわんてつ「傳へ聞く、無閒のひやねをつけば有德自在心のまゝ、ほれよりはよの中山へ遙かの道は隔たれど、ほもひつめたるあが念力、此のひようづ鉢をひやねとなぞらへ、ひしにもせよ、ひやねにもせよ、心ざすところはふけんのひやね。」ト煙管おつ取りいろ〳〵ある。此の時彌次郎梯子の上より、うちがへの錢をばら〳〵と投げ出しながら、自身に淨瑠璃かたる。うち「そのかねこゝにと三百文、うちがへの錢投げ出す。み山おろしに山吹の、花吹き散らすやうにはあらで。」ぐわんてつ「ここに三文、かしこに五文、拾ひ集めてひやん百銅、コリヤ雇はれの賃錢先取とは有り難い。」ト掻き寄せて袂に入れんとするを、彌次郎梯子のうへから丸哲を引捕へ「ソリヤやるのぢやアねえ。己がのだ。」トひつたくらうとするに、丸哲はやるまいと爭ふ拍子に、鴨居にかけたる梯子はづれて、彌次郎兵衛ひつくり返りどつさり落ちると、梯子は丸哲の上になり、娘も、ひはらの骨を打たれて、わつと泣き出せば、彌次郎腰骨を撫でさすりながら、娘「アイタ、、、。」ぐわんてつ「アアウ、〳〵。」亭主「どうしたぞやい〳〵。」ト家内中がうろたへたちて、煙草盆ひつくり返すやら行燈を打壞すやら、座敷中只眞暗となりて、泣くやらわめくやら大騷ぎとなる。亭主漸く燈を持ち來り、「ア、コリヤ娘めはどうぢやい。イヤ梅が枝がをかしな目をしをるわい。コレ〳〵氣をたしかにせいやい。」ぐわんてつ「ア、〳〵くるしい。あしやびつくりして、はつとほもうたへいやらして、ひん玉が上のはうへつつたわいな。アイタ、、、。」彌「ソリヤ困つたものだ。モシ〳〵亭御主さん、

梅が枝が金玉をつるし上げました。」北「金玉の上つたにはよい事がある。先刻見ればこゝの見せに、錢膏藥といふ看板が見えたが、それをぼんのくぼへ貼ると金がさがる。」亭主「何いはんすぞいな。錢膏藥首筋へ貼つたてて、何さがるものかいな。」北「ハテさがる理窟だ。なぜといひなせえ。錢が上れば金がさがる。」亭主「エ、何のこつちやいな。」ぐわんてつ「ア、わしやどうやらよいやうぢやが、娘さんはどうぢやいな。」やどやの女房「コレ、たれなと一走り寸伯さんへいてたもらんかいな。」ぐわんてつ「わしやもうよいさかい、醫者樣よんでこうわいな。その代りお寺へは誰なと外の者をやらんせ。」亭主「エヽ何ぬかしくさるぞい。」北「ホンニお氣の毒なこつた。娘御はどこを打ちなすつた。」亭主「ひはら、えらううちをつたてて、痛がりますわいな。」彌「痛いひはらは都のうまれ、人にどやされ、ひよんな目にあはれて、お笑止千萬なことだ。」亭主「イヤお前、人の娘に怪我さして口合處ぢやあろまいがな。」彌「ハ、、ハ、人の娘に怪我さしたとは、わしやどうやら恥かしい。」亭主「イヤわらひ處かいな。總體こなさんたちはけたいぢやぞや。」彌「けたいとは何がけたいだね。」亭主「何がとはちよこいうてぢや。よう思うても見さんせ。わしや此の年まで宿屋してをつたが、終に梯子もてきた客を泊めた事はないわいな。いつたい遠國のお方が、何しに梯子をもて步かんすやら、こちやとんとよめんわいな。もしも屋根から躍りこむ衆ぢやないかと、家内のもんがぼやいてぢやあつたが、成程奇怪な事しかねん衆と見える

わいな。」ト亭主やつきと成り、少し言葉あら〳〵しくいふ。此の躍りこむとは、上方にては夜盜の事ををどりこみといふ故なり。元より彌次郎兵衛腹たちなれば、彌「イヤ、おめへをかしな事をいふ。わつちらアしらきちやうめんのお旅人様だ。おつに捻くつたことをいふと、料簡がなりやせぬぞ。」亭主「オヽ、いしこやの、なにいうたてて、こなんたちが梯子持てござんしたから、おこつたことぢやわいな。」女房「これいなア、そないな人にかまはずと、こち來てくだんせ。娘がアレ〳〵、ひよんな目つきしてぢやわいな。」ト涙ぐみて騷げば、亭主もうろ〳〵して、「コレ見やんせ。もしも娘めが死にをると、こなさんは解死人ぢや。さうおもてゐやんせ。」女房「アレ〳〵たわいがないわいな。」亭主「コリヤ目がまうたのぢや。ヤアイおとらヤアイノ〳〵。」女房「いとイのう〳〵。」ト夫婦は娘を掻きいだき、水よ氣付よとさわぎたちて泣きわめけば、彌次郎は俄にうろたへ出して、「エヽ、コリヤ北八どうしたものだらう。おらアもうこゝにやアゐられねえ。」亭主「コリヤコリヤ、おとら死んでくれな。どうぢやぞやい。」女房「おとらイのう。」亭主「おとらやアい。」彌「エヽ、情ない。コリヤ堪らぬ〳〵。」トうろ〳〵して立つたり、ゐたりさわぎたつと、亭主「コレ、こなさんどつちへもやる事ならんぞ。」彌「ハイ〳〵どこへも行きはいたしませぬ。コリヤ〳〵北八、ぜんてえ手めへが惡い。何の有體にいへばいいものを、ちやらくら譃をついたから起つて、無間の鐘だの何のと、碌でもねえ事を始めたからこの騷ぎになつた。もとは手めへが發頭人だから、解死人はそつちへ讓るぞ。」北「オヤ飛んだ事をいふ、當人はおめへだわな。」彌「そんなら拳をして負けた方が解死人だ。」北「ばかアいひなせえ。おい

らア知らぬ／＼。」ト此の内醫者も來り、藥など與へ、さま／＼介抱するうち、娘やう／＼息ふきかへせば、皆々安堵し、彌次郎胸なでおろし落ちつきて、此の上はあやまるに如くはなしと、北八を頼み、だん／＼詫言してあやまり、證文を書きてやう／＼と此のいさくさ收まりける。尤も北八が判にて、しかつべらしく書きたるその證文、

一札之事

一我等此の度ひらがな盛衰記淨瑠璃之內、安壽の役相勤候處、實正也。然る處、梅がえ無間之鐘相撞候節、其の金是れに罷有趣申レ之、打替之鳥目投出し候迚、梯子爲レ辷候故、丸哲どの陰囊御釣上被レ成、幷に貴殿息女へ怪我爲レ致候段、全右梯子鴨居へ打掛候より事起候趣、預ニ御腹立一無ニ申譯一段々誤入候處、御料簡被レ下忝存候。然る上者、已來御宿御無心申候共、梯子抔決而持參致間敷候。爲ニ後日一仍而如件。

月　日

當人　彌次郎兵衛

證人　北八

此の證文にて事收まり、宿の娘も次第にこゝろよく、中直りの酒汲みかはして夜も更けければ、二人はやがて打臥したるに、ほどなく夜あけて、家内の人々おきたちたる物音に、目をさまし、支度調へ、そこ／＼に立ち出づるとて、彌「コレハ大きにお世話になりやした。殊にいろ／＼な事でお氣の毒なこ。」亭主「御機嫌ようお出でなされ。」女房「モシ／＼、お梯子がござりますわいな。」彌「イヤ、もう

それはこちらに置いてくんなせえ。今日は所々見物して、晩程またお世話になりやせうから。」亭主「イエイエお持ちなされ。そしてこちや晩ほどは、おさし合があるわいな。」ト一體亭主はこの二人を胡亂に思ひゐたりし故、梯子も預ること氣味惡く、いかなる後難やあらんと受附けざれば、せん方なく又かの梯子をうち擔ぎ、この所を立ち出で、北「ナント、今日はどつちの方へまごつくのだ。」彌「イヤ、まだ東山に見物してえ處があるが、マア今日は北野の天神樣へ行きやせう。」トだん／＼道を尋ねて堀川通りに出で、北「時に思ひ出した事がある。ソレ伊勢の古市で京の人と一座したが、慥かにその人は千本通り中立賣といつたが、北野の天神樣へ行く道だといつたぢやァねえか。」彌「オ、サ、邊栗屋の與太九郎か。」北「ソレ／＼、そいつが所へ尋ねて行つて、酒でも呑んでやらうぢやァねえか。」彌「ナニ、あたじけなすびが呑ませるものか。」北「處をおいらが術に懸けて呑み倒さう。」ト往來の人に千本通りを尋ね中立賣に到り、邊栗屋與太九郎の方へやう／＼と尋ねあたりて、例の梯子を軒に立てかけて、彌「御免なせえ。」ト格子戸をあけて入れば、與太九郎「誰ぢやいな。コリヤ珍らしい、ようお上りぢやわいな。」彌「扨マア、伊勢では大きにお世話になりやした。」與太「何のいな、サアこち入りんかいな。」北「ハイ、お久しうござりやす。」與太「イヤ、これは／＼まだ表にお連樣があるさうぢや。」北「二人ばかり、誰もをりやせん。」與太「それでもアリヤ何ぢやいな。」彌「梯子の事かえ。」與太「何ぢや梯子おもたせかいな。コリヤきよとい。」北「イヤ、おめへの處は中立賣、ひよいとあがる處だといひなすつたから、もしも高い處なら梯子かけて登らうと思つて、わざ／＼求めて持參いたしました。」與太「ハ

ハ、、、コリヤおでけぢやわいな。時に何もお愛相がない。お支度はどうぢやいな。」亭「アイ、今朝宿屋で食べたまゝ、中食はまだ致しやせん。」與太「ソリヤお樂しみぢやわいな。酒なと上げたいがこの邊に酒屋はなし。」北「酒屋はぢつきにお鄰にあるぢやァねえか。」與太「イヤ、あこでは小賣は致しませんわいな。折角のお出で、お煙草でもあがりなされ。」北「煙草はこつちのだから勝手に致しやせう。」與太「おまい方、せめてもちつと先へ寄つてお出でなさると、けうとい物があるわいな。桂川の若鮎、生きてをるのを鹽燒か魚田にすると、根から葉から甘いのなんのといふやうなこつちやないわいな。イヤまだ四條の生洲が近いとお供していこもの。あこの鰻は賀茂川で晒して、とつと違うた物ぢや。けうとう甘いがな。そしてあこは、玉子燒をえらうようして食はすわいな。何ぢやあろとこれ程に大きう切りをつて、ほつほと息の出るのを南京の薄鉢に盛つて出しをるが、甘いというては根からくゝんでもつ樣ぢやわいな。ホンニそれよりまだ秋にお出でなさると、とりどりの松茸ぢや。當處の名物でこれが又外にはないわいな。新しいのをすましの吸物にして、ちよつと山葵落して酒の肴にいたそなら、とつともうなんぼ食うても根から厭きがないわいな。」ト話許りして何も出さぬ故、北八こらへかね、そつとぬけ出で鄰の酒屋へ呑みに行く。話に身を入れて與太九郎は一向北八の逃げたるを知らず。與太「イヤ、最一人のお方は、どこへ行かんしたぞいな。」亭「もう歸りやした。」與太「はてさて根から知らなんだわいな。いつの間にいんでであつたぞいな。」亭「今松茸のお吸

物の出た時、中座いたしやした。」與太「ソリヤ殘り多い。後段にまだお菓子のお話いたそもの。」彌「イヤもう、さきほどから大きにお馳走になりやせぬ、お陰でひもじい。お暇いたしやせう。」與太「イヤお待ちなされ、よい所へお出でたわいな。ちとお話があるわいな。アノ伊勢の古市でおつき合ひ申した時のことといな。あの時の入用金壹兩ぢやあつたがな、わしや算用違ひして金壹分貳朱こちから出して置いたさかい、コレ見なされ、道中の小遣帳におやまやの書付も、何もかもこないに細かに書きつけておいたが、うちへ戾つて算用して見ると、お前方一人前百二十四文づゝ、私の方へお貰ひ申さねば算用が合んはわいな。僅かのこつちやさかい、どしてもだんないが、取るに如くはないさかい、お二人分二百四十八文お貰ひ申しましよかいな。」彌「エヽ、おめへも今となつてきたねえ事をいふ。そればかりの事、うつちやつて置きなせえ。こつちでも立替へた事がありやす。」與太「ソリヤ上げるのがあらば上げるさかい、いひなされ。算用は算用ぢや。マアこちへ取るのが此の通りぢやさかい、斯うしましよわいな。はしたをまけてあぎよわいな。貳百文くしなされ。」彌「エヽ、外聞の悪い。その時取ればいいものを。」ト小言八百いへども合點せず。かれこれとせり合うた處がはてしつかず、彌次郎面倒なりとて二百文出してやるト、與太「ハヽヽヽコリヤ御きんとうぢやわいな。是れからお前方は天神樣へいかんすぢやろ。そしたら序に平野樣金閣寺へ行かんしたがよいわいな。おそなるさかい、早ういて戾らんせ。」彌「大きにおせわ。」ト脹面して立ち出づれば、鄰の酒屋より北八によつこり出で

来りて、北「どうだ、御馳走がありやしたか。」弥「いめえましい目にあつた。なんの手めへが尋ねて寄らずともいいものを、錢貳百たゞ取られた。」北「ハヽヽヽどうして〳〵」弥「いいわ、其のかはりにアノ梯子の厄介物をこゝに打捨つておいて、困らせてやりなせえ。」弥「ナァニ困るもんだ。ぢきに賣つて錢にするわ、あの野郎めに梯子までたゞ取られて詰るものか。やつぱり擔いで行かう。」トそれより道をたづね尋ね行くほどに、北野天滿宮社内へかゝる道に、茶飯田樂を賣る茶屋おびたゞしくあり。赤前垂の女、軒に出て「貴方お休みんかいな。茶飯おでん上らんかいな。」茶「上つてお出でんかいな。」弥「モシ〳〵、わつちらア天神様へ參詣して、けへりにおめへの處で休みやせうから、此の梯子をこゝに置いてくんなせい。」ちや屋「ハイ〳〵お預り申しましよわいな。お早ういてお出でなされ。」弥「おたのみ申しやす。」ト梯子を茶屋の門に立てかけておき、行き過ぎて「ヤレ〳〵重荷おろした。何のけへりに寄るものか。ナント北八、梯子を捨てた智慧はどうだ。」北「ハヽヽヽおもしろくもねえ。」ト供養塔前より右近の馬場にいたる。此處は例も借馬あまた出で、馬の稽古あり、見物夥し「オヤ凄まじい人だ。何かあるさうだ。」ト立寄りて人を押分け見れば、馬のかけを乗る人「ヒヤアドウ〳〵〳〵。」見物の圍の聲「ワアイ引。」見物「皆えらい下手ぢや。七軒戻りかして腰がふなつきをる。アノ蒟蒻玉見るやうな天窗の親仁めが、えらうよう乗りくさるわい。」見物「アリヤ知れたこつちやわいな。博勞の親方ぢや。」見物「かいな。アレおつちやの男児やんぜ。手綱をあやに取つてあないな手つきしてをる。アリヤ大方織屋の手傳ぢやあろぞい。そしてアレ〳〵十二坊の弟子坊が、數珠

つまぐるやうな事して手綱持つてぢやわいな。」北「おれも一鞍乗りてえな。向うに見てゐる姉様に。」トリ、人ごみの中、女づれが二三人立つて見てゐる後へまはり、見物しながら前にゐる娘の尻をちよいとつめる。娘「オヽいたやの、誰さんぢやいな。コレおまるさんこち來てかしんかいな。」まる「何ぢやいな。」娘「誰ぢややら私がおいどを抓つたわいな。」としまの女「ソリヤ女のない國で生まれた人さんぢやあろぞいな。構はんすな、投つておかんせ。」彌「エヽ北八か、悪い洒落をするなえ。」北「ナニおいらア知らねえ。」トいひざま、憎さも憎し、かの年増女の尻を抓つてやらうと、側目をしながら側により、年増の尻と思ひ、おぶつてゐる子の尻を思ふさまつめると、子「アヽいたい〳〵。」トわつと泣く。としまの女「誰ぢやいな。悪い事さんすわいな。」おぶさつてゐる子「アノをぢさんが抓つたわいのう。」女「エヽすかん人さんぢやわいな。」彌「かんにしなせえ。さりとは外聞の悪い男だ。」ト足早にすご〳〵と此處をすぎて、南の御門より入りて、天滿宮の本社へまゐる。

おまもりを首にかけつゝたふとまんさいふの宮をうつす神垣

北野天滿宮は、昔近江國比良社の神主良種、神敕を蒙り、朝日寺の僧最珍右京の文子等と力を合はせて靈祠を作り、天德三年右大臣師輔卿、巍々たる大廈を改め營みたまふ。今の北野宮これなり。社頭に渡邊の綱が納めしといひつたふ石燈籠苔むしてあり。

綱の名はいまだにくちぬ石燈籠むかしをいまに三ツほしの紋

東向觀音は梅櫻の二樹をもつて、菅神御手づから刻ませ給ふ所なりといへり。

御利益は四方にかゞれる觀世音梅櫻にてつくりたまへば

それより社内をぬけて平野の社にまゐる。此の御神は四座にて、今木神、久度神、古開神、比咩神なり。

こゝろよく飯くふために本膳のひら野の神をいのりこそせめ

こゝに紙屋川のほとりに一軒茶屋あり。二人は空腹となりたるに、支度せんと此の茶屋に入れば、女共出で迎へて、女「ようお出でたわいな。ツイト奥へお出でなされ。」彌「何ぞうめえ物があるかね。飯も食ひたし酒も飲みたし。マアちよびとした物で一杯早く頼みやすぞ。」ト奥の縁先に腰をかけると、女銚子杯をもち出る。肴は下鮎の煮びたしなり。彌「早速これはありがてえ。女中、一つ注ぎねえ。オツトありやす〳〵。」女「お肴あぎよわいな。コリヤわたしが心のたけぢやぞえ。」彌「ハア、此の鮎がおめへの心意氣とはどうだ。」女「私はナ、おまいさんが川鮎といふこつちやわいな。」彌「コリヤ有りがてえ、そんならおめへにも上げやせう。」女「オホ、、、。此の生姜が何としてお前さんの心ぢやえ。」彌「わしやはぢかみイ。」北「ハ、、、、こじつけるもんだ。時に女中、田樂で飯を早くくんなせえ。」女「ハイ〳〵、只今。」トやがて女、田樂と飯を持ち來る。二人は食事しながら見れば、衝立のあなたに、さもむさくろしき出家一人、麻の衣のよごれたるを着て、これも田樂にて飯食ひながら、一人の僧のいふを聞けば、「ナント役戒坊、貴樣髪はどこで結ふぞいの。」やく「す、持戒坊、わりさまも私が結ふ處で結はんせ。あこはけうとう、よう結ふわいの。」

わしや久しう、のんこ髷に結うてぢやあつたが、今ははやらんさかい、コレ見やんせ、雷子に結うて貰うたが、えらう氣持がようて堪らんわいな。」トいひつゝ淺葱の頭巾をとれば、此の坊様、身には麻の衣著たがら、頭は卷簀にて芝居のやつしといふ髪なり。彌次郎北八これを見て肝をつぶし、をかしさ半分、不思議さうに伺ひ見れば、やくかい「ハ、ア、なる程よう結ひくさつた。わしや又こちの弟子坊に結はせをるが、もう／＼月代がむちやぢやさかい、見て下んせ、いつの間にやら、こないにすりこかしをつたわいな。」トこれも頭巾を取れば、髷はぼんのくぼにある剃下奴なり。彌次郎あまりに合點ゆかず、こらへかねて、「モシお鄰のお客様、わつちらは遠國の者でござりやすが、處々歩いてゐるうち、いろ／＼樣々な珍らしい事も見聞きしやしたけれど、御出家方の髪結うたを見るは、まことに今が初め、どうも合點が行きやせぬ。卒爾ながらお前方はどこのお方でござりやすね。」やつかいばう「ハ、ア、この頭の御不審かいな、こちや空也堂の僧ぢやわいな。」彌「なる程な、話に聞いてゐやした、かの茶筅賣るお方だな。」やつかい「さよぢやわいな。こちの宗體は昔から由緒があつて、こないに身には染衣を著しながら、天窗は大俗凡夫ぢやわいな。」彌「それで聞えやしたが、なぜ又お前方のゐなさる處を空也堂といひやすね。」やつかい「さればいな、こちの宗體では、どしたこつちややら、代々皆えらい大食で、飯ぢやあろが何ぢやあろが、何ぼでもよう食ふさかい、齋非時に呼ばれて行ても、しひつけられて、もつと食ふやどうぢやいなと、人每にいうたを、すぐに空也堂といふわいな。」もつかいばう「そぢやさかい、コレ見やんせ。ちよとこゝへ來ても、二人でお

鉢三ばい食うたわいな。」彌「ソリヤ途方もねえ大ぐらひだ。尤もわつちらも食つたものさ。いつやらも信濃へ行きやした。ナニかあつちは飯どころでござりやすから、先づ朝ずつと起きると、茶受にとて座頭の天窗ほどある握飯を出しやすが、あつちの手合は、子供でさへそれを十四五程づゝも食ひやす。わつちは折悪く氣分が悪くて、ろくに食もいけやせなんだが、十七八許りも食ひやしたらう。さうするとやがて飯が出來たとて、そこの亭主がいふには、江戸のお客はお鹽梅が悪いといふことだから、今朝は麥飯を炊きましたとて、なにが、とろゝ汁をすつた程に、摺鉢の二十許りもそこに並べてあると思ひなせえ。さうすると椀へ盛るが面倒だと、家内の奴らは皆その摺鉢一ッづゝ引受けて、麥飯をその中へ山のやうに盛つて食らひをる。わつちも絶食同然でゐたが、麥は大好物で堪へられやせんから、せめて一摺鉢もやつて見ようと、食ひかゝつた處が、口あたりがいいから、ずる／＼と何の事なしに滑りこんで、たうとう、摺鉢に五六杯も食ひやしたらうが、今ではとんと食がへりやした。」やつかい坊「ソリヤお前も飯は素人ぢやないわいの。ナント飯盛さんせんかいな。」彌「アノ飯盛がこゝにもありやすかね。」やつかい「ハヽヽヽ、お前のいつてぢやのは道中の飯盛ぢやあろ。そぢやないわいな、こちとらが仲間でするは、酒呑む衆が酒盛といふかして、飯を互に食ひあふを飯盛といふわいな。ちとやて見やんせ　幸ひ、こちもまだ飯が食ひたらんさかい、相手ほしさの玉手箱ぢやわいな。」北「ど

うやらおもしろさうな事だが、それは如何するのでござりやすね。」やつかい「マア何ぢやあろとやて見なされ。モシ女中、ちよと來てくだんせ。お鉢のお替りぢや。」女「ハイ／＼。」ト飯鉢に一ぱい持ち來ると、やつかい「サアはじめんかい。イヤ亭主役にわしからやろわいな。」ト茶漬茶椀に飯を盛つて、さつさと食ひしまひて、「サア／＼おまいさそかいな。」ト彌次郎へかの茶椀をつきつけて、杓子を取り、「酒盛ならお酌といふところ、飯盛ぢやさかい、お杓子いたしましよかいな。」ト彌次郎が持ちたる茶椀へ飯を盛りつける。彌「コリヤわつちが食ふのかね。」やつかい「さよぢや／＼。」北「ハ、アきこえやした。さかづきをまはす心だね。」ト彌次郎かの一杯の飯を食ひしまひて、茶椀を役戒坊の方へさすと、やつかい「コリヤけうとい。おさへましよかい。」彌「イヤまづ／＼。」もつかい「はて、おまい最一ぱいかさねなされ。わし助けてあぎよわいな。」ト無理に又一ぱい盛り付けると、北「そんなら、お前助けてくんなせえ。」ト飯の盛つてある茶椀を持戒に渡せば、持戒坊、三口程食ひて、「これも酒ぢやと、つけさしぢやけれど、飯ぢやさかい食ひさしぢや。」彌「エヽ、おめへのその髭むしやくしやと、不掃除な口中で、食ひさしはあやまるの。しかも、ソレ／＼水洟をたらしてさ。」もつかい「ナニいうてぢやぞいな。そないな事いうて、飯盛附合がなろかいな。早う食はんして、誰になと差さんしたがよいわいな。」彌「ソリヤ情ない。さて／＼飯盛といふものは汚ねえものだ。もう／＼わつちは御免なせえ。」やつかい「イヤ、お前麥飯を擂鉢に四五杯も食はんしたと、いうてぢやないかいな。卑怯な事いはんす。かうさんせ。一拳いかんせ。」彌「そんなら拳で參らうか。」もつかい「よかろわいの。その

代り、否應とんと言はさんぞや。」ト かの茶椀の上へ盛りそへて、「サア〳〵、薩摩衾ぢや。サンナ。」彌「ムメで〳〵。」やっかい「トウライ、えらいか〳〵。サア〳〵、あがりなされ。そのくせ、お鉢のおかはりぢや。」ト 無理無體につきつけられ、彌次郎面倒なりと、我慢を起し、やう〳〵と食ひしまへば、やっかい「も一つやらんせ。お鉢のかはりめぢや。」彌「イヤ、もう〳〵御免々々。」やっかい「コリヤやくたいぢや。お前は田舎者ぢやな。麥や挽割のまぜたのを上りつけてるさんすさかい、こないな一本木の米ばかりの飯は、よう上らんもんぢやあろぞいな。」彌「ナニ、わつちらア猪の牙のやうな飯でなくちやア食ひやせん。」やっかい「さいな、これが猪の牙ぢやわいの。」彌「そんなら、おめへ、替目の相を賴みやす。」やっかい「ソリヤよいわいな。とてもの事に、大きなもんでおつもりにしよぢやないかいな。」ト 茶漬の入れてありし丼をうちあけて、飯を盛り、へろ〳〵と食つてしまひ、持戒坊へ廻すと、これもしこたまよそつて、食ひしまひ、「サアあぎよわいな。イヤ飯でにちや〳〵する。」ト 緣先の手水鉢へ丼をいれ洗ひて 「サアすましたわいの。おつもりぢや、おつもりぢや。」彌「イヤ〳〵もういかぬ。そして汚ねえ。人が雪隱へ行つた手を洗つた手水鉢ですました丼、それでどうして食へるものか。」やっかい「そしたら此の茶椀で。」彌「イヤ、もう腹がさける樣だ。それに聞きなせえ、今の一杯やらかしてゐた時、何か懷の中で、ふつつりといふ音がしたから探つて見たら、越中褌の紐が切れる位に腹が張り切つて來たものを。もう〳〵お許し〳〵。」やっかい「ハハヽヽ、もうよしなされ、おつもりぢや。コレ女中、なんぼぢや、勘定してくだんせ。」女「ハイ〳〵、

御一緒にいたしましよかいな。」やつかい「そぢやわいな。」女「御酒とおでんの代物は八十文でよござりますが、お飯は五百七十二錢頂きたうございます。」やつかい「ソリヤ氣疎う安いもんぢや。割合にいたそかいな。」ト此の代錢勘定して、半分の拂ひすれば、彌「ソリヤあんまりだ。お飯はお前方がしこたま食つて、わつちは、たつた一膳か二膳食つたもの、二ツわりとは不承知だね。」やつかい「何いはんすぞいな、一座で飯盛さんしたもの、よう食はんはお前方の勝手ぢやないかいな。」ト遣つつ返しつ、これも理詰に彌次郎詮方なく、とうとう二ツ割にしてこの處の拂ひをなしければ、た僧二人は、はやくも先に立ちて出で行きたるに、北「ハヽヽヽ、いい見せものだ。サア彌次さんどうだ、行かねえか。」彌「オヽ、サ、行きてえが、あんまり食ひすぎて動かれねえ。どうぞ手を引いてそろ〳〵立たせてくれ。」北「エヽ、意氣地のねえ、サア立ちなせえ。」彌「コレサ、手荒くしてくれしな。飯が口から出るやうだ。」北「テモ汚ねえ事をいふ。サア〳〵立ちな〳〵。」トいひつゝ彌次郎の手をとりひき立つれば、やう〳〵立上りて出かける。女「おゆるりとお出でなされ。」北「アイ、お世話になりやした。サア〳〵彌次さん行かねえか、どうする〳〵。」

はじめから人を茶にして何ばいもやたらにめしを空也寺の僧

是れより又天神の社内に歸りたるが、東の門より一條通りに入る道を知らず、うか〳〵ともと來し南向の門を入りたるに、思はずもかの梯子を預けし茶屋の門口近くなれば、彌次郎兵衛心づきて、「まてまて、さつきの梯子がやつぱりあそこに立てかけてある。エヽ、こつちの方へ來なんだらよかつた

ものを。北八また後へもどらうか。」北「なる程、あそこへ休まずに直通りにしたら、ひよつと見付けた時、例の梯子持つて行けといふだらうし、といつて又跡へ戻るも業腹だ。どうぞ、いい智慧がありさうなものだ。」ト立ち止りて思案してゐる中、右近の馬場の借馬一疋、博勞がひいて來るを見るより、「イヤア、いい事があるぞ／＼。アノ馬のよこつはらの方にくつついて茶屋のまへをとほれば、むまの陰になつてゐるから、よもや見つけはしめえぢやアねえか。」彌「オヽサ、それがいい、コリヤ大できだ／＼。」ト後より來る借馬を見合はせゐる內、やがて側近くなれば、二人とも竝んで馬の陰に隱れ行くと、ちやうどかの梯子を預けた茶屋の前に到りて、馬は立ち止りて動かず。二人は驅けぬけて茶屋に見付けられてはせんなしと思ひ、同じく馬の横腹の方へついて立ち止りゐる。博勞、馬を打ちて「エヽ、このならずめは何しをるのぢや。日が暮れるわやい。」ト打てども動かず、軈て馬は小便をしやア／＼、彌次郎北八にとばしり跳ねて小便だらけとなり、彌「エヽ、コリヤ又なさけない目にあふことだ。」北「アヽ、くさい／＼。ソレ彌次さん、お前の方へ流れるわ。」彌「畜生めが飛んだ目にあはせる。これは／＼。」ト飛び退けば、向ふの茶屋の門先にゐる女が、目早く見つけて、「モシナ／＼、こつちやでござりますわいな。サアお入りなされ。」北「ソリヤこそ見付けられた。」彌「コリヤ堪らぬ堪らぬ。」ト一目散に驅けいだせば、茶屋の亭主飛んで出で、「コレナ、梯子がござりますわいな。オヽイ／＼。」ト呼びたつれど耳にも入れず、二人は眞黑になり逃げてゆく。兩人はやう／＼と息をはかりに驅け出して、下の森を打過ぎ、元の千本通りに出で今宮は島原の郭中を見物して、安見世もあらば一宿せばやと申し合はせて、往來の人に道すがらを尋ね、千本さがりて行くほどに、町をはなれて東寺にいたる。

手折らんと手を出す人ぞ鬼ならぬ東寺わたりの花のさかりに

それより壬生寺に參りて、こゝに、葭簀、門先に立てよせあるあやしの茶見世に引きこまれて、その夜の宿とさだめ打臥したるが、あくる日島原を見物し、朱雀野より丹波街道をよこぎりに淀の大橋にいたり、爰より下り船に打乘りて大阪へと赴きけるこ

滑稽五十三驛七編　終

道中膝栗毛八編序

凡て事の十分なるは、缺くるの兆、九分なるは充つるの首なれば、八の數を以て永久の嘉瑞とし、もののめでたき極位とする事は、先づ大江都の八百八町、とこしなへにして盡きず。神に八百萬神、永く跡を垂れ給ひ、法華經の八部末世に傳へて弘く、歌書は八代集を最上とし、易に八卦、十露盤に八算、食言にも八百の相場あれば、質も八箇月を限りとす。予が膝栗毛も此の八編にいたつて足を洗ひ、引込思案の筆をおくこと、花の半開、酒の微醉に託けたれど、實の所は逃げ口上、智慧袋揚底なれば、はたき仕舞ひし栗毛の趣向、據なくおつもりの大阪著き、長町泊りから滑稽の始まり〳〵。

文化己巳孟春

十返舍一九誌

附言

膝栗毛初編よりさいはひに行はれて、今年八編に到り漸く滿尾し卒んぬ。近頃、此の書に類せし版本これかれと出ではべれば、その流行の圖をはづさず、むかう午には初編再版のもよほしあれば、それに發端一冊をまして二巻となし、そのあとへ引續き、木曾路の紀行をもとむれども、作者固辭して肯はず、こひねがくは諸君子の催促をまちてものせんとの事なれば、なほ追つて御披露に及ぶものならし。

書肆　榮邑堂　志

道中膝栗毛八編

東都　十返舎一九著

押照るや難波の津は海内秀異の大都會にして、諸國の賈船、木津安治の兩川口にみよしを並べ碇を連ねて、こゝにもろ〳〵の荷物を鬻ぎ、繁昌の地いふばかりなし。殊更花の春は川船に棹さして天保山に遊び、櫻の宮、引船の茶店に酔ひを催し、夏は大川松ヶ崎の納涼、難波新地松の尾登加久に螢をかり、豆茶に腹をこやし、秋はうかむ瀬大津湯の月、冬は解船町の雪景色、四季をり〳〵の眺め多かる中に、目枯れぬ花の曲中は、いつも盛りの春の如く賑はひ、道頓堀の芝居は、つねも顔みせの心地して羣集絶えず。かかる名譽の地を見殘すも本意なしとて、かの彌次郎兵衛北八なる者、伏見の晝船に途中より飛乘して、早くも大阪の八軒屋にいたり、爰より船を上りたるは最早たそがれ時にして、東西を知らず南北を辨へざれば、人に尋ね問ひつゝ長町をさして行く程に、境筋通りを南に向ひ日本橋へ出でたりければ、宿引どもこゝに居合はせ、兩人を見かけて宿の相談をしに來るに、早速きはまり、すぐさま此の長町の七丁目なる分銅河内屋といふにぞつれ行きける。宿引さきに驅けぬけて、「サア〳〵お客


堂島米市之圖



様を御供して來たわいな。」宿屋の番頭「これはようお出でなされました。おいくたりさまでござります。」彌「ハイ同行四拾七人。」ばんとう「ナニ四拾七人さま。コレ〳〵おさんどのや、大勢様ぢや。西の奥の間を打抜いて明けさんせ。よう綺麗に掃き出したがよいわいの。コレ久三、お足お洗ひなさるお湯はどうぢやい。ぬるてもだんない。水なとうめて上げませい。はやう〳〵。時に、もし、その四拾七人様は、いこお後かいな。」彌「イヤ、是れは先達て鎌倉へ發足。われ〳〵兩人はこれより泉州境の天川屋へ。」ばんとう「エ、何のこつちやいな。やつぱりお二人かいな。コレ〳〵、おつんや、お二人ぢやといな、こつちやのお一人居しやしやる狭いとこにさんせ。」おつん「ハイ〳〵、御案内致しましよかいな。」ト此のうち兩人は足を洗ひたりて見るに、此の宿は當所随一の大家にして、およそ間數七八十もありといへり。兩人女につれられて行くに、奥の口元の六疊ばかりなる小座敷へ入る。外に一人この間に泊り合はせゐることなれば、ばんとう「お許しなされませ。どうぞモシ御窮屈にござりましよが、御一緒になされてくださりませ。」此の旅人は丹波の人「だんないてや。サア〳〵此方へわせさつしやい。」北「これは御免なせえ。」彌「モシ、わつちらァ二三日も逗留して、處々見物がしたいからお頼み申しやす。」ばんとう「ハイ畏まりました。先づゆるりと。」トいひすてて勝手へゆく。たんばの人「コリヤわごりよたちは、どこから來よりました。」北「わつちらァ江戸でござりやす。おめへは。」たんばの人「わしは丹波のさゝ山在郷。今度高野へ行きよります。コリヤあぢいな縁で相宿しよりますわいな。」彌「とかく旅は道づれ、お心安いがようござりやす。」ト此の内、

やどの女、「まゝ上げましよかいな。」ト三膳もちきたりすゑる。食事のうち、色々あれども略す。やがて飯もすみ湯へもはひつてしまふト、大あばたの女按摩、いやらしき風にて探り〳〵來りて、「お療治はよござりますかいな。どうぞ揉ましておくれんかいな。」彌「イヤ按摩さんか、おめへ女だの。しかも生きてゐらア。北八どうだ揉まねえか。」北「こつちから揉んでやりてえ。」あんま「オヽ、なかし。何いひぢややら、お前さん方はお江戸ぢやな。わしやアノお江戸のお方が好きぢやわいな。殿たちは男らしうて、物いひぢやとこが、えらいすつはりとしてよいわいな。」北「おめへ、さつぱり目が見えやせんか。見えると此の内に飛んだいい男がゐるに、見せてえなア。」あんま「そぢやあろぞいな。」彌「ナント按摩さん、この男よりわつちがいい男か、さうして年はどつちがわけえ。あてて見なせえ。當つたなら、二人ながら揉んで貰ひやせう。」あんま「ソリヤ、いつきにあてるわいな。」北「コリヤ、おもしろえ。サア おいらは幾つぐらゐだ。」あんま「待ちなされ。お前さんは二十三四。」北「コリヤきついわ。男はいい男だらうね。」あんま「さよぢや、お顏はよう道具がそろうてぢや。」北「缺けてあつてつまるものか。」あんま「お目が、えらいいつかいお目ぢやあろがな。そしてお鼻が。」北「高いか低いか。」あんま「かういうたらお腹がたとか知らんが、たしかに獅子舞鼻ぢやあろぞいな。」たんは「ハヽヽヽ、きよとい、きよとい。」彌「おいらはどうだ。」あんま「あなたは、いこ老けておいでぢやわいな。お年は四十ばかりで、お色が黑うて鼻の開いた、髭だらけなお顏ぢやあろがな。」北「奇妙々々。」あんま「そして、

ほやけぶとりによう肥えてるなさるぢやあろ。」彌「イヤ違つた〳〵。おいらはひんなりとして色男。」北「嘘をつく。コリヤ按摩さんが勝だ。揉んでやりな。」彌「約束だからしかたがねえ。爰へ來てくんな。」あんま「オホヽヽヽヽそれ〳〵參ぜうかえ。」ト彌次郎が後へ廻りて揉みに懸ると、此の内へ女の菓子賣、箱を重ねて持ち來り、「ようお泊りぢやわいな。くわしん買うておくれんかえ。」北「ヒヤアだん〳〵と出て來るわ。なか〳〵いい菓子だぞ。おめへわつちらに賣る氣か。」くわしうり「さよぢや。こちやおまへさんがたに、賣りたうて〳〵ならんさかい、やう〳〵はしりまうて參じたわいな。」彌「上方の女中は手があるの。」くわしうり「手も足もないが、むちやにお前さん方に惚れたのぢやわいな。さうおもうて、どうぞくわしん買うておくれや。ドレちや〳〵汲んで參じようかえ。」ト菓子箱を突き出しおいて勝手へ行くと、北「エヽ、面の憎いほどしやべる奴だ。」トいひつゝ彌次郎に目くばせし、そつと菓子の箱の下に重ねてある箱より、何やら菓子を五ッ六ッ取出し、後へちやつと隠すト、かの按摩、手を出して其の菓子をそつとだつたくり、袂へ入るゝを北八一向に知らず。彌次郎も同じく菓子三ッ四ッ取出すに、勝手より人音するゆゑ、ちやつと箱はもとの如く重ねておき、かの菓子を、按摩とり、これをもそつとせしめて袂に入るゝを彌次郎も一向に夢中作左衛門なり。此のうち菓子賣の女、茶を汲んで盆に乗せもち來りて、女「サア、ぬくいのを上りなされ。」彌「せつかくお前來なさつたものを、滿更すげなくもしられめえ。」ト菓子箱の中より、「これはいくらだ。」くわしうり「ハイ〳〵四錢づゝぢやわいな。」彌「ソリヤもむない。こつちや上つてみなされ。」ト並べたてて勸むるに、彌次郎も北八も丹波の人も、てんでに取つて食ふ。北「コウ待ちねえ。無上に食つちや數が知れめえ。」くわしうり「よござります。なんぼなと上りなされ。こちやたゞでも上げよわいな。ノウお

たこさん。」あんま「さよぢやわいな。サアよござります。こつちやのお方、揉みましよかいな。」弥「すヤもうしめへか。」あんま「サア貴方、私がねきへよてかしんかいな。」北「ソレ、よしか〳〵。」くわしうり「ちやちや、最一つあがりなさらんかいな。」あんま「おなべさん、御馳走なされ。此のおかた〳〵はえらい御心よしぢやわいな。サアあなたお横に。」北「もう肩はしめへか。がうぎにはしよるの。」たび人「コリヤ、わりさまたちの、くちまつにかゝつて、えらう、くわしん喰てのけた。なんぼざい。」くわしうり「ハイハイ、お三人様で、百四十八せんでござりますわいな。」弥「ヤア飛んだことをいふ。何そんなに食ふものか。北八はいくつだ。」北「さればの、いくらであつたか。」たび人「私は四文のを五つくたから、ソリヤ二十やるぞ。」北「そんなら、あとは二人で出すのか、ばか〳〵しい。菓子よりか旅籠の方が安い。」くわしうり「てぢやてて、上りなされたものを、しよ事がないぢや無いかいな。」弥「オホ、、、、」弥「イヤ、オホ、、處ぢやァねえ。飛んだ目にあはせる。」ト小言をいひながら、せん方なく錢を拂ひやると、此のうち、按摩は揉んでしまふと、北「按摩さんはいくらだ。」あんま「ハイ、お二人でおあし一すぢおくれいな。」北「ナニ五十づゝか。コリヤ高い高い。」トこれもあとでは是非なく、百文出しにやると、二人は立つて行く。弥「上方の女にやァ油斷がならねえ。しかし菓子賣めが、おいらをいいやうにしたと思つてけつかるであらうが、さうは虎の皮、こつちにも荒神様があらァ。馬鹿なつらな。とつくに上菓子をこゝにはへ付けておいたを、知らぬやつさ。」トうしろを探すに、先刻の菓子見えず。北八も同じくこゝに

おいた筈だと探ねるに一向見えず。勝手より女、茶椀と薬罐をもち来りて、「御退屈様でござりましよ。お煮ばながでけました。」ト おいて行く。北「エヽ、今のがあるとちやうどいいのに、どうした知らん。」たんぼ「ソリヤいんまの按摩とりめが、とていんだもんぢやあろ。ハ、、、。イヤこゝにえい物がありよる。」ト うしろの柳行李をあけて、小さなまげものを取出し、「サア〳〵、コリヤ同修町の店でもらうてきよつたさたう漬ぢや。茶の子に一つやらつしやれ。」北「コリヤありがてえ。彌次さんどうだ。たんとやらかしねえ。」たんぼ「イニヤ、そないにくて貰うてはならんわい。こちくされ。」ト ひつたくりて早々にしまふと、このうち、女、蒲團を引きずり来りて、「もう、御牀のべましよかいな。」ト そこら取りかたづけるうち、勝手より今一人の女枕蒲團をもち来り、投りこんで行くを見れば、やつぱり今の按摩とりなり。みな〳〵肝をつぶし、彌「モシ女中、今そこへ来た女は、さつきの按摩ぢやァねえかの。」女「さよぢやわいな。」北「どうして目が見える。」女「アリヤお客さんがたへ出るに、目あきではお心おきがあつて悪いさかい、お座敷へは、あないに目の見えんふりして出てぢやわいな。こゝの内かたで過ぎられますさかい、いにしなには、いつもあないに勝手を手傳うていんでぢやわいな。」彌「ヤア、さてはおいらが事をよく當てた筈だ。目が見えるものを。」北「そんなら、おいらがものしたものを、ものしやァがつたにちげへはねえ。」女「オヽ、をかし。お前さんがたの源四郎してぢやくわしんぢやてて、私もこないに貰ひましたわいな。」ト 枕から出して見せ、打笑ひ勝手へゆく。北「大笑ひ〳〵。」彌「やつはり、あつちが、下つ腹に毛のねえのだわハ、、、。」

ろく／＼に按摩はとらずくわしまでもこちに目のないゆゑにとられた

斯く打興じつゝ、それより三人とも蒲團ひつかぶり打臥したるに、丹波の人ははや先に高鼾かき出せど、二人はいまだ寐入りもやらずかれこれと話しあふうち、裏通りの畑に犬の聲きこえ、割竹の音、時の太鼓もはや九ツの數打過ぐる頃、北八頭をあげて「コレ彌次さん、お前ごそ／＼となにをする」彌「なぜかあんまり寐られねえから、ふつと思ひ出して、コレ見や、足でこんな物を搔き寄せたわ」ト夜著の中から、ちひさな曲物を取出して見せる。北「すヤ、そりやさつきあの人の出した、砂糖漬ぢやアねえか」彌「コリヤ聲が高い。柳行李の側に出てあるを、先から睨んでおいたからよ」北「コウ、一ツよこしねえ。」彌「まてまて。」ト行燈暗く遠ければ、委細は分らず、かの曲物の蓋をとりて、一ツ摑んで口にかつぢり。彌「コリヤかたいは」北「ドレ／＼」ト曲物を引取り、これも摑んで口にぐしやりにちやり／＼。「エ、なんだ、いつも灰だらけなものだ。ペッペ／＼。」彌「コリヤ砂糖漬ぢやアねえ。何だかをかしな匂ひがする。」ト胸をわるくして、ゲイ／＼といふ聲を聞きつけて、丹波のおやぢ目をさまし、この體を見るよりびつくりして跳ね起き、丹「ヤア／＼ヤア、わりさまたち、コリヤなにしよる。わしが女房をなんぜ食ひよる。」彌「ナニ、おめへの内儀樣たア何のこつた」丹「何のこつちやとは情ないわいの。ソリヤわしが知音女房ぢやわいな。そのいれものの蓋をよう見やしやれ」トいはれて、彌次郎飛んで起き、行燈の前に持ち行き、かの蓋の書付を讀みて見れば、彌「ハア、秋月妙光信女。ヤアヤアヤア、そんなら此の曲物はおめへの内儀樣の骨だな。」北「ナニ骨とは、コリヤ大變々々。道理で胸

がむかつく。エ、どうしよう。」たんば「わりさまたちの胸のわるなつたより、わしの胸がつつはつたわい。コリャわしどもの村の處法則で、その骨を高野へ納めにもて行きよるのでござるわいの。ようマア大切ない佛を、なんぜ食ひよつた。わりさまたちは眞人間ぢやありやしよまい。鬼か畜生か、どしたのぢややい、どしたのぢややい。」ト袂を顔に押當て、おい／＼と泣く。彌次郎もをかしさ半分に腹たちて、彌「エ、、むつかしいこたアねえ。おめへがさつき柳行李をあけたとき、ころげ出たを知らずに居たのはそつちの無調法。それを砂糖漬だと思つて食つたのがわつちの麁相。ソリャ五分々々だ。何もいさくさはねえわな。」たんば「イヤイヤきかん／＼。もとのとほりに、まどうて返しや／＼。」ト息せいはつて、涙まじりにわめき散らせば、北八いろ／＼と斷りいひ、さま／＼宥めすかして、やう／＼と納得させ靜まりければ、彌次郎も心の中に、をかしさ紛らかして、彌「イヤモウ面目しでえもねえのさ。」

人の骨くふもことわり若いとき親の臑をもかじりたる身は

此の彌次郎が口ずさみに、丹波の人も心とけて笑ひを催し、漸く機嫌なほりて打臥したるが、程なく一するの夢さめて夜明けければ、勝手よりおこしに來り、手水つかふやいな膳をすうるに、三人とも食ひしまひ、丹波の人は高野へと出でゆき、彌次郎北八は二三日逗留のつもり故、けふは爰もとの名どころ一見せんと支度する内、番頭出でて、「コレハお早うござります。今日はどつちやへぞお越しでござりますかいな。さよなら御案内の者お連れなさるがよござりましよ。」彌「ホンニそれをお頼み申

しやす。」ほんとう「畏まりました。コレ〳〵左平次どの、ちよとごんせ。」ト勝手より案内の男。「あなたがたが案内頼むとおつしやつてぢや。」北「モシ、藁草履二足買つて來てもらひてえの。」彌「イヤ一足でいい。おいらは京雪駄買つて來た。どうも藁草履では、みす〳〵田舍者の上方見物と見えてわりい。」北「ナニ、旅で見えらへちまらいるものか。」左平次「お支度がえいなら出かけましよかいな。」彌「サア〳〵、早く參りやせう。」ほんとう、女ども「いつておいでなされませ。」トこれより三人うちつれて、やどを出かけて、左「ナント斯ういたしましよ。天王寺生玉は住吉御參詣のときにお參りなされ。今日はこつちやの方へ參ぜうわいな。」ト長町通りを北へ瓢のうへより高津新地に出で、まづ高津の御宮にまゐる。こゝは昔仁徳天皇の、たかきやにのぼりてみればと詠じ給ひし舊地にして、今に繁昌いふばかりなし。社内に、豆腐田樂の茶屋、參詣の人をよぶ聲、「サアサア、おはひりな〳〵。これへ〳〵。おやすみな〳〵〳〵。」寄進じやうるりの木戸「今ぢやア〳〵、紙屋德兵衛天滿やお半、かはらやばし白木屋の段、つぎは千本櫻の大川屋、辨慶の切腹、出がたりぢやア、出語りぢやア。」遠目がねのいひたて「サア、見なされ〳〵。大阪の町々、蟻の這ふまで見えわたる。近くは道頓堀の人くんじゆ、あの中に坊樣が何人ある、お年寄にお若いしゆ、お顔のゐつちやが何ほある。女中方の器量不器量、ほつこり買うて喰てござるも、濱側でしゝなさるも、橋詰の非人どもが襦袢の虱なんぼ取つたといふまで、手に取るやうに見ゆるが奇妙。また風景を御覽なら、住吉沖に淡路島、兵庫の岬、須磨明石、大船の船頭が飯何杯くた、何くた斯くたもいつきに分る。まだ〳〵不思議は、

此の目鏡をお耳にあてると、芝居役者の聲色、つけ拍子木のかたり〳〵、のこらずきこえて見たも同然、お鼻をよすれば、いろはの鰻のにほひぷん〳〵とあがつたも同然。たゞの四文では見るがおとくぢや。千里一目の遠目鏡、これぢや〳〵。」彌「めがねやさん、おとに聞いた新町とやらも近く見えるかね。」めがねや「さよぢや、このお山のツィねきに見えるわいな。」彌「それぢやァ、ちかく見えるのぢやアねえ。遠く見えるのだ。」めがねや「なぜもし。」彌「ハテ此の高津と新町との間は、たつた壹寸貳參分ほかねえもせぬものを。」めがねや「ソリヤおまい、大阪の繪圖で見てかいな。」彌「さやう〳〵、ハ、、ハ。先づお宮へまゐらう　ハ、ア、いかさまいいお宮だ。」ト三人とも神前にぬかづき奉り、

もろ〳〵の神に脊くらべし給はばさこそたか津のみやのたふとさ

これより境内の石段を西におりたち、谷町通りに出でたるに、何とやら腹寂しくなりたれば、幸ひと居酒屋めきたる店を見付けて立寄り、彌「モシ、何ぞありやすかね。」酒屋の亭主「ハイ、煎殼に烏貝、鯡の昆布巻ぢやわいな。」北「さつぱり分らねえ。その中旨え物なら何でもいい、出してくんな。」亭主「ハイハイ、いつきにあぎよわいな。」彌「イヤ、いつきんはいらぬ、三合ばかり頼みます。」北「時に尾籠ながら用たしに行つて來よう。雪隱はどこだ。オ、あるぞ〳〵。」ト緣先より向うへ廻りて、雪隱へはひると、此の内此方には酒肴出でたるに、彌「マア一つはじめなせえ。」あんない左平次「マアあなたから。」彌「そんならお先。オト、、、。ア、いい

酒だぞ。コリヤ北八、早く出ねえか。酒がみんななくなる。早く〳〵。」トせりたてられ、北八雪隠の中にて、呑みたくてこたへられず、北「オヽ、合點だ、今出るぞ。」トうろたへて戸をあけ、ずつと出た處が、不思議なるかな酒家の内にてはなし。そもそもこの雪隠は二軒前の雪隠にて、此の酒屋と裏に住む人と兩方にて使ふ雪隠なれば、あなたにもこなたにも兩口ある故、北八うろたへて入りし方の戸をあけず、向うの戸をあけて出たる故よその内なり。隱居らしき爺樣一人、何やら小細工してゐたりしが、北八を見て肝を潰し、目鏡の上からじろ〳〵と見るに、北八もうろ〳〵と一向に合點ゆかずまごつく中、かのいんきよ「モシ〳〵、こなんは誰ぢやいな。」北「ハイ、これは違つたさうな。モシ、酒屋へはどう參りますえ。」いんきよ「ハヽア、よめたわいの。こなんは表の酒屋のお客ぢやな。其の縁側を左にとつて、すぐに行かんせ。」北「ハイ〳〵、コリヤ行止りだ。」いんきよ「その戸をあけて行かんせ。」北「ハヽア、又元の雪隠へ入らにや行かれねえか。」ト雪隠の戸をあけにかゝると、内に「エヘン〳〵。」北「南無三ぼう道がふさがつた。」トいふを聞きて雪隠のうちより、彌「北八か、おつな方へ出てゐるの。」北「イヤ、彌次さんだな。おいらア戸迷ひをして飛んだ目に逢つた。早くそこを通してくんねえ。」ト戸をあけにかゝる。彌次郎、内より掛金をかけ、彌「イヤ、もちつと待つてくれ。そして、いけむこたア大毒だといふことだから、ひとりでに出てくる時節を待つてゐるのだによつて、少し暇がいる。アヽ退屈だわ。金にうらみでも語らうか。北八、そこで口三味線たのむぞ。」北「エヽ、飛んだことをいふ。はやく出なせえ〳〵。」ト外から押せどもあかず。内には悠々と道成寺のうた、「戀の手ならひ、つい見ならひて、誰に見しよとて臙脂鐵漿つきよぞ。みんな主への心中だて、オヽ嬉し〳〵。」北「氣のなげえ、何のこつたな。」彌「末はかうぢやになア。さうなるまでは、とんといは

ずに濟まそぞえと、誓紙さへいつはりか、譃か、まことか、どうもならぬ程あひに來た。」北「エ、、コリヤはやく出ねえかノ\。」トいへども内にはさつぱり何の音沙汰もなきゆゑ、北八せつこみて「どうだ、もう出たか、エ、、コリヤ彌次さん、彌次さん。」トいふ中、暫くムヽントンといふ音して、「ふウつウり、悋氣せまいぞと、たしなんで。」北「コレサ、どうするのだ。」彌「もう、とつくにいいが、まちやれ、山づくしまでやらかさう。」北「エ、、ばかなことをいひなせえ。」トいひさま、むりに戸を強く押せば、掛金はづれて、北八雪隱の中へころげこむと、彌次郎も酒屋の方へ戸をあけて出る拍子、戸ははづれて倒れる。その上へ、北八ぐるめ、どつさりと雪隱の戸は破れる。彌「アイタ、、、。」亭主走り來りて、「コリヤなんぢやいな。雪隱の戸がやくたいぢや。」北「イヤ、全體おめへがたア、こんなに兩頭の雪隱にしておくからわるい。」亭主「そぢやてて、二人つれまうてせついんへ行くといふ事があるもんかいな。あほらしい。」彌「かんにしてくんなせえ。わつちらがわるかつた。」ト膝頭をさすり〳〵、店のかたへ出で來れば、左平「何となされたざいな。」北「うち身には酒がいいといふことだ、早く一杯呑ましてくんな。」彌「こゝはつけがわりい。又先へ行つて呑みやれ。」トこの所の勘定をして、早早出かけると、酒屋の亭主、不承々々に挨拶もせず、小言をいひながらふくれ返りてゐるを、二人はをかしく、こゝを立ち出づるとて、

出ることの遲い早いであらそひしこれ宇治川の雪陣かそも

それより谷町通りを安堂寺町より番場の原に出で、話しものしてたどり行く程に、頓て天滿橋にいたりける。まことや淀川の流れひろく、行きかふ舟ども漕ぎちがひ、棹さしあひて唄ひ、あるひは遊山

船に三味線太鼓はやし立てて行くを、橋の上より往來の人立ちとまりて、「ヤアイ〳〵、おどれら、そないに斉てくさつても、内へいんだら借錢乞にせがまれて、吼えをろがな。えらい阿房ぢや。あほよあほよ。」ふねの中より「何ぢやい、そちが阿房ぢやわい。」はしの上「何ぬかしくさる。おどれらが阿房ぢや。」ふねの中「す、いしこやの、阿房くらべせうかい。こちにはよう叶やしよまいがな。」はしのうへ「何の、おどれらに負けてえいものかい。こちや阿房の偉いのぢや。」ト無上に力み返る。此の男の連れ、「ハテえいわいの。こなはんが偉い阿房は、皆知つてをるこつちや。ほつておかんせ。」ト引張りてつれて行くと、後から往來の人々ちりぢりに、「ヨウ〳〵、阿房のえらいの、阿房のえらいの。ハ、、、。」ト此の内、彌次郎北八も群集に押されながら、この橋にさしかゝり、橋の上と船との喧嘩、いづくでもよく有るやつと心にをかしく、打過ぐるとて、

眞黒になつてはらたつ喧嘩してあほよ〳〵と烏めかする

それより此の橋を北へおり市の側通りを行くに、爰は青物の市たつ處にて殊に繁昌の地なりけり。

あをもののうりかひながら商人に尾ひれの見ゆる市の側まち

程なく天満宮の御社にいたるに、まことや神德の彭々たるは、参詣の人どよみにあらはれ、料理茶屋の赤前だれ門になまめき、水茶屋、楊弓場のかんばり聲往來の心をうごかせ、或は山海の珍物、見せもの、芝居、輕業、曲馬乗、境内に充ち満ちたり。

なにひとつ御不足もなきごはんじやうまことに自由自在天神

かくて社内悉く順拜し、靈府の女の眞白き顔も横目に見なし、小山屋の門をも空しくうち過ぎ、天神橋通りに出でたる時、彌次郎兵衛の穿きたる雪駄、いかゞしてや横鼻緒ぬけたりければ、彌「しまつた。京のものは油斷がならねえ。がうせえに請合つて賣りやァがつて、いま〳〵しい。」トつぶやくむかうより、かみくづかひ「ディ〳〵、ディ〳〵。」これは大阪にては紙屑買、かくの如くディ〳〵と呼んで歩くを、彌次郎は江戸の格で雪駄直しと思ひ、呼びかけて、彌「コレ〳〵、此の雪駄頼みます。」かみくづかひ「ハイ、コリヤかたしかいな。片足ではどうもならんわい。見りや、その穿いてぢやも、鼻緒がどうやら損ねさうぢや。一緒にさんせ。」彌「ホンニ、こいつも今にぬけるわ。とてもの事に一緒にしていくらだ〳〵。」トいふ故、紙屑買是れを買ひ取る心にて、ひねくりまはし、「コリヤいこ安いが、えいかな。」彌「さうさ、何でも安いがいい。」かみくづ「さよなら、四十八文ぢやが、どうぢやいな。」彌「イヤ、それでは高い〳〵、二十四文ばかりでよからう。」かみくづかひ「エヽ、じやら〳〵いうてぢや。」彌「ハテサ、ほんたうに二十四文〳〵。」ト無上に穿物をつき付けるゆゑ、紙屑買は一向に合點ゆかず。賣る人の方から直段をねぎるは珍らしいと、をかしさ半分、何にしても損のいかぬ事なれば錢を差出し、「ハイ、そしたら二十四文にまけて上げて買ひましよかいな。」ト二十四文彌次郎に渡し、雪駄を取り荷の中へ入れて行かうとする。彌「コリヤ、まつた〳〵。おれに錢をよこして、その雪駄をどうするのだ。」くづや「ハテ、買うたのぢやわいな。」彌「飛んだことをいふ。鼻緒がぬけたから直してくれろといふのだわな。」くづや「イヤ、こなはん、

私をはきもん直しぢやと思うてかいな。コレ、紙屑買はわたなべから出やせんぞえ。あたけたいな童ぢやわい。」彌「イヤ、このよこつたふしめが、なぜそんならディ〳〵といつて歩くのだ。」トりきみかかるを、左平次おしとめ、「ハ、アきこえた。コリヤおまいが麁相ぢや。わしやさつきにから變つた事ぢやとおもうてゐたが、アノお江戸ぢや、はきもん直しがディ〳〵といふて歩きをるといふこつちやが、當地では屑屋どのが皆ディ〳〵というて歩くことを、御存じないさかい、御料簡ちがひぢや、コレ屑屋さん、こちが悪い、許しなされ。」くづや「ぢやてて、あんまりな童ぢやわいな。あんだらくさい。」北「ハテ、間違ひぢや。その雪駄をかへしてくんな。」くづや「嫌ぢやわいの。こちをはきもん直しぢやといひくさつて、こちや外聞が悪いわいの。」ト腹立つを、北八左平次がやう〳〵斷りいひて雪駄をとりかへし、それより彌次郎は藁草履をもとめて穿き、雪駄は腰にはさみて、天神橋を南へうち渡りて横堀通りをたどりゆくに、こゝに人だち騒がしく、喧嘩と見えて、くち〴〵わめき罵りて打合ひ〳〵、往來いやが上にかさなり騒動するに、彌次郎北八も人におされ〳〵、行きぬけんとしたるが、何か紙につゝみたるもの足もとに落ちてあるゆゑ、彌次郎何心なく開き見れば、

八拾八番

かくの如く書きたる札なり。今は絶えてその事なしといへども、此の時分は、座摩の宮に富のありし時節にて、往來の人々の群集に取落したると見えたり。

遙かにこゝを行き過ぎて、左平次「モシ、今あなたのお拾ひなされたのは、富の札ぢやないかいな。」彌「さうだらう。コレ八十八番とありやす。」左平次「コリヤ座摩の宮の札ぢや、しかも今日つく日ぢやわいな。大方、今頃はもうついてしまうたぢやあろぞいな。」彌「さうさ、どうせ落す位のもんだものを、からつぽの札であらう。へちまにもならねえ。」トそのまゝ捻りて打捨てるを、北八後よりちやつと拾ひて懐中し行くほどに、やがてかの座摩の社にいたりけるが、今日はくわんげ富の當日、殊に今つき

しよひたると見えて、羣衆下向おびたゞしく押し分けられず。その中に人の話しながら行くをきけば、「ア丶残念な事したわいな。あの八十八番、すでのことにわしが買ふ處ぢや有つたわいの。あれ買ひそこなうたは、こちの運の來らんのぢや。買うたら第一番で金百兩取りをつたものを、けたいがわるい。」ト話しながら行くを彌次郎聞きつけ、ぎよつとして、「北八聞いたか。今の札を打つちやらなんだらよかつたもの。エ、どうしよう、後へ戻つてもうあるめえか。」北「ナニ今まであるものか。」彌「エ、〱、残り多い事をした。」トあと振返り〱神前にいたり見るに、富はつきしまひて、第一番よりだん〱當り札の番付、一々記して正面に貼りつけあるを見れば、一の富八十八番と筆太に書きたりける。彌次郎餘りのことに呆れはてゝ、「エ、いめえましい。おらアもういつそのこと、坊主にでもなりてえ。とても運のひらける時節はねえ。」北「ハヽヽヽ、そんなに力を落すめえ。おれが百兩取つたら、おめへにも三兩や五兩は貸してやる。コレ見なせえ。」トかの拾ひし札を出して見せる。彌「ヤア〱、手めへひろつて來たか。出かした〱。こつちへよこせ。」北「イヤさうはなるめえ。おめへの捨てたものを、あとからちやつと拾つて來たなら、コリヤおいらにさづかつたのだ。」彌「イヤ〱、ひつきやうおれが先へ見付けて拾つたりやこそ、又手めへの手へも入つたといふものだから、もとはおいらが物だ。」北「それでも、お前一旦すてたぢやアねえか。」彌「ハテ、さういはずとマアよこせ。」トむりに引取らうとする。北八、いかな遣るまいとせりあふを、佐平次とゞめて、「コレ〱、静かになされ。そないにいふなら、ひよつと捨てたぬしが聞きつけて、出まいものでもないさかい。何ぢやあろと私が挨拶ぢや。半分づゝ分けなされ。そして私にもち

とはおくれぢやあろな。」北「ソリヤアおいらが承知の助だ。何にしろ善は急げだ。金はどこでうけ取るのだらう。」左平「ソリヤ、あこの世話人のをる處で渡しをりますわいな。」北「そんなら、そけへ行つて見よう。」トうち連れて、その處へゆきてみれば、かくの如くさげ札してありけるゆゑ、扨は今日の事にはいかずと、まづ神前に参りて、

御神の利生かくべつありがたや
罰にはあらであたる富札

口上
當日殊之外混雜仕候に付當り札の御方明日四ツ時金子御渡可申候　以上
月　日　世話人

かく詠じて大きにいさみたち、社内殘らず順拜して表の方にたちいで、北「ナント、其のうち捨てた奴が金受取りにいきはせまいか。」左平「ソリヤ氣遣ひないわいの。往たとて、札と引替にせにや渡さんさかい、なんぼ當人でも、無證據ぢやわいの。」彌「奇妙々々。がうてきにおもしろくなつたわえ。」北「明日は百兩、久しぶりの對面。」彌「エヽ、久しぶりもをかしい。ついぞあつた事もなくて。ハヽヽヽ。」ト勇み喜び、やがてかしこの茶屋にはひりて、まづ前祝ひと酒くみかはしぬ。

かくて彌次郎兵衛北八は、おもひもよらず百兩の富にあたり、忽ち勢ひをえて、座摩の社地をいでしより、煮うり茶屋に入りて酒汲みかはし、ほろ醉ひ機嫌となり、心おもしろげに浮れ立ちて、案内者の左平次にひかれ、難波御堂の穴門より御境内を順拜しながら、

お婦美さまと聞けば女の名にも似てあらありがたの穴かしこなり

それより仁徳天皇の社に参る。これは世俗に博勞の稲荷といふ。（博勞の稲荷は別に境内に見えたり。）

博勞のいなりといふもことわりや繪馬うりて食ふみせも見ゆれば

門前の田樂茶屋「お入りな〱。田樂の焼きたてあがらんかいな。」北「エ、、知れたことをいふ。田樂のさめたのがいけるものか。」芝居の木戸「サアいまが盛衰記、無間の鐘ぢや。評判で〱。」彌「無間の鐘もすさまじい。こつちは百兩取つてゐるわ。途方もねえ。コウ北八、ナント是れから新町とやらへ、女郎買ひにやらかしはどうだ。」北「おもしろえ、すぐに行かうか。ノウ左平さん。」左「ソリヤお出でなさるはえいが、無躾ながら、お前さん方のそのなりぢや、とつともうあかんぢやないかいな。ソリヤ局女郎なとお買ひなさりや格別、店つきぢやてて、ちと身なりあんぢようして、あすの夜さりなとお出でなされ。」彌「コリヤなる程、お前のいふ通りだ。ハテ、百兩といふ金が取れるものを、とても買ふなら、その太夫とやらを買つて見る心いきだ。」北「オヤ、もうくらへそばえて來たの。」左「ソリヤ其の筈のことといの。わしお供して、九軒の揚屋どつこへなとお連れまうそ。ときにこれが大丸屋、ナントえらいもんぢやあろがな。」呉服店大丸屋「あなた、是へ〱。なんでござい。おはひりな〱〱。」彌「ナント北八、こゝへいま著物を誂へて行かうぢやァねえか。」左「ハ、、、おまいさんもまんがちな。あすの事になされませいな。」北「さうさ。今にやァ限らねえ。サア〱およびなせえ。」彌「そん

ならあしたのことにしよう。北八、手めへは何にするつもりだ。」北「着物のことか。されば、結城のぐつといきな縞で三枚ばかり、羽織は龍紋のこり〳〵するやつの芥子あられなぞが、金持らしくてよからうぢやァねえか。」彌「イヤ〳〵、それでは店者めく。そんな著物きたら、コレお前、ゆうべは何ほ出た、ヨの字かキの字か、こちやホ久の代物で、位出たさかい、えらい徳したなどと、符帳でしやれようといふ風だから納まらねえ。おいらは縞縮緬揃へに黒羽織、お太刀一本ちよいときめの判官もりひさは妙であらう。たゞしはぐつと大ふざけに、緋鹿の子のへりとりむく、上に結城の棒縞、對の羽織はあんまり利いた風であらうか。八丈もやぼになつた。唐棧はおやぢめく。南部縞はもう湯屋にぬいであるやうになつたから、恐れる〳〵。」北「さうさ、なるほど著ようといふと、まさか著るものもねえもんだ。」ト夢中になつて話しゆく。あとから往來のもの、「きるもんがなかァ、やつぱりその後におつきな紋所のある、幟の染めかへしを著てるさんすがえいわいの。ハ、、、。」北「イヤ、こいつらァ何ぬかしやァがる。」うしろの人「おまいのこつちやないわいの。」ト一目散に逃げてゆく。北「エ、、いめえましい奴らだ。今に見ろ、明日はどんな物著るとおもやァがる。」彌「ハ、、、。コリヤ無躾ながら、お前方がそないにしゆんだなりして、縮緬ぢやの、羽二重ぢやのというておぢやさかい、笑ひくさるのぢやが、コリヤ敵等が尤もぢやわいなハ、、、。時に、これからあみだ池へ參じて、砂場の和泉屋をお目にかけたいな。」彌「イヤ、

宮寺も厭きはてた。それよりか、早く新町へ行きてえものだが、あすの晩まではがうてきに待遠な。」左「さよなら斯ういたそかいな。私、なんと損料のきりもの借つて上げるさかい、それ著て今宵新町へお出でなされ。お金は後でもだんない。わしが親方の知つてぢや揚屋へ行くさかい。どして明日は百兩お取りなさるのぢやもの、何ぢやあろとさうしなされ。」北「コリヤおもしろえ理窟だ。」彌「いか樣なア。そんなら直に歸つて、おめへにその算段をして貰ひやせう。」ト有頂天になり、心齋橋筋を南へ、早くも道頓堀にいたりければ、誠に當地第一のさかり場にして、前に島の内あり、うしろに坂町あり、おやま婪子のなまめき行きかふ樣、にぎやかなり。

いつとても調子くるはじ三味線のだうとんぼりのにぎはひはそも

其の日も早七ッさがり、大西の芝居打出して櫓太鼓の音喧しく、評判ちや／＼のころ、木戸口にあふれて、見物もどよみつれ押しあふ中を、やう／＼すりぬけ／＼行くまゝに、角の芝居、中の芝居の看板さへも目につかず。若太夫、竹田の切狂言もうち出しまへ、いろは茶屋の仲居、赤前垂と倶に毛氈を引きずりて走り、島の内の迎ひ駕籠、ハイ／＼馬ぢや／＼につれて揉まれ行くほどに、はや日本橋近くなりて、往來も空きたりければ、やがて走りいだして行くまゝに、はや長町の宿に著きたりける。左平次先に立ちて、「サア／＼、お歸りぢや。」やどの女ども「お早うございます。」北「アイ／＼、是れは左平さん御苦勞。時に今の損印の理窟はどうだらう。」左「かしこまりました。いつきに詮議して

參ぜうわいな。」北「そんなら、早く〳〵。」ト二人は奥へ通ると、女來りて、「モシナ、お湯にお召しなさらんかいな。おひもじかァ御膳に致しましよわいな。」彌「イヤ、飯も咽へは通らぬ。何だかそは〳〵して、倂し、湯へはちよつと入つてこよう。」北「遲くなる、湯もいいぢやァねえか。」彌「イヤ、貌ばかり洗つて來る。」北「おきやァがれ。ハ、、、。」トこのうち、彌次郎は湯にいりにゆく。暫くして、左平次損料物を風呂敷に包みて、走り持ち來り、「お待ちかねであつたぢやあろ。」ト包をとけば、北八かれこれとひねくり廻し、「モシ、無意氣物ばかりだね。」左「ぢやてゝ、是れがいつちえいのぢやわいな。おまいには此の黒紬がよかろ〳〵。」北「なんだ、途方もねえ紋所だ。そして丈がてんつるてんで、袖はてえそうに大きい。これを著たら無鹽の奴凧といふものだらう。そつちの縞はなんだ。」左「ふとりぢやさうな。」北「イヤ、この小紋がよからう。」ト引立てゝみれば女の著物なり。左「ハ、、、わしや男のきりもんかと思うて、とて來たわいの。」北「よし〳〵、斯うしよう。小袖一つぢやァしみたれだから、此の女小袖を下に著て、上はふとり縞ときめやせう。」ト二つ重ねて著替へ、帶をしめてゐる處へ彌次郎湯よりあがりて來り、「オヤ左平さん、早いな。エ、、北八めが著たわ〳〵。男ぶりがいゝから、どこへ出しても借著したとやつはり見える〳〵。」北「しやれずとはやく支度をしねえ。」彌「おらァ此の黒いやつか、よし〳〵。旦那と見えるやうにお太刀一本、かうきめて行くわ。」北「コレサ、おめへ著物を著ねえか。裸身にその脇差をさして行くつもりか。醫者殿が淸盛樣の脈を見に行きァしめえし。とんだうろたへやうだ。」彌「時に

羽織は。」左「おまい様は此のぬき紋にしなされ。」北「けちな羽織だ。干鰯の仕切に行かうといふなりだ。」彌「人の事をいふてめへの風は、蒂木寸伯さまの代脈に來たといふ風だ。ハ、、、。」左「お支度がよござりますなら、參じようわいな。」北「オヤ、おいらはまだ湯へ入らなんだ。」彌「ばかアいはずと、サア〱出かけよう。」ト打連れてこゝを立つ。左平次は二人が百兩の富に當りしにつけこみ、何でも割前をせしめんとて、無上におひやりちらかし、この宿の番頭へふきこみ、新町揚屋への手紙を貰ひて、打連れ此處を出かける。かくて三人は足も空に長町を北へ、境筋ますぐに行けば。早くも順慶町にいたりける。名にしおふ此處は夜見せ繁昌の町筋にて、兩側に内見せ出見せ、尺地もなく萬燈をてらし、呉服屋、道具屋、袋物、櫛笥、瑇瑁、珊瑚、瑪瑙の類あるかと思へば、その鄰には盥、小桶、飯櫃、すりこ木、杓子なんど、或は神棚もとめて代錢を拂ひきよめて行くあれば、佛像買うて尻くらひ觀音と、不足錢あたへて走るもあり。傘の買人に下駄をはくあれば、草履の賣人に草鞋はくあり。兩替やは目を皿になして天秤を打鳴らし、金物屋は口を利刀にひとしく切物を商ひ、肴屋、しろものはくされたれども、うりごゑはねて呼び立つるを聞けば、「ヤア、大きな鯛ぢやア〱。鱧ぢやア〱。くるまやアくるまやア。このしろやア。はつの身のきりうりやア〱。」さつまいもうり「ほつこり〱。ぬくいのあがらんかいな。ヤアほつこりぢやア〱。」上かんや「ぬくい〱にしんのたいたの、あんばいよし。」「ヤアまけた〱。しんまいの煎殼ぢやア〱。」すしうり「御評判のちくら酢。鯖ぢや〱。鳥貝やア

鳥貝やア。」北「アレ、彌次さん見なせえ。アノ鮓は京で食つたが飛んだよかつた。一つやらかさう。夕飯も食はねえで腹がへつた。」彌「ホンニさうだ。モシ、これはいくらだね。」すしや「ハイ、そつちやが四文、こつちやのが六文ぢやわいな。」彌「オツトよし〳〵。コウ北八、そんなに嗜と取つて食ふな。また長町で菓子を食つたやうな目にあはうぜ。モシ、こけへ參拾貳文ばかりを包んでくんな。」ト錢をはらへば、すしや、竹の皮に包みて出すを、彌次郎とりてみち〳〵食らふ。北「コレ、おれにもよこしねえ。」彌「あとで竹の皮をやらう。」北「エ、むしのいい、こつちへ。」ト取りにかゝる。彌次郎やるまいとする處に、下から犬がひよいと飛びつき引つたくると、彌「アイタ、、、。」北「どうした彌次さん。」彌「いめえましい。畜生めにしてやられた。」犬「わん〳〵。」彌「エ、、こいつめが。」ト足でけると犬は逃げる。おつかけるはずみに井戸側へ又ぐわつたり。「ア、いたた〳〵。コリヤとんだ處へ井戸を出しておきやアがる。四ツ辻のまん中に。」左「コリヤ井戸の辻といふところぢやわいな。」北「いいきみだ。おれに食はせねえ報いだわ。」

ひとつ下されと犬めがとり貝はさてもよいきみ團子ならねど

それよりも往來を押分けゆくさきに、編笠深くうち被りたる卜筮者の、口から出次第「サア〳〵、御遠慮はない。お出でなされ。當卦、本卦、墨色の考へ、濃いか淡いを當てるが奇妙、うせ物は存ぜず、預りものは仕らず、待人は遲いか早いか、來るか來んかの二ツ、當るも八卦、あたらぬも八卦、どつちやでも見料は十六銅づゝ申しうくる。これはかりは違ひはござらぬ。サア〳〵、これへ〳〵。」

彌「ナント北八、おいらがあした百兩とること、知れるか知れねえか、何もなくさみ、見てもらはう。」北「コリヤおもしろえ。」彌「モシ、わつちが運を見てくんなせえ。」ト十六文出せば、卜筮者、彌次郎の顔を横目に見ながら、蓍木をとり算木をならべ、しばらく考へ、「ハヽア、是れはおまい、とひやうもないえらい仕合なことがでけるわいな。」彌「さやうさ、大きに心あたりがありやす。」うらなひ「そぢやあろぞいな。卦は坤の卦、坤はこんくわい、俗に申す狐、即ち狐福と申して、誠に降つて湧いたやうな幸ひが來ると見えます。」北「コリヤ奇妙、よく當りやした。」うらなひ「しかし、變卦は乾の卦、乾は、けんけれつの象、本卦の坤と變卦の乾と合してこれを考ふる時は、易に曰く、乾坤二つの閒をぬけ、離の卦に當つて中たえたり。さては玉なき殼鐵砲と申す事ござれば、萬事にお心をつけらるゝがよござります。」彌「こいつはすこたん／＼。さういふわけぢやアねえ。もうこつちの手へ握つだも同然だものを、緣起のわるい。」うらなひ「イヤ、そこであたるも八卦、あたらぬも八卦。」北「もうよしなせえ。十六文たゞすてた。」ト小言いひながら、こゝを打過ぎゆくほどに、はや新町橋をうち渡りて瓢簞町にぞいたりける。さてこの曲輪は、寛永年中にはじめて御免許あり。田甫をひらきて新に町を建てたりしより、新町と呼んで郭の總名となせりとぞ。昔より今に至るまで繁昌いふばかりなく、兩側の六字店、賣物に花を飾りきらびやかに竝びたるを、一軒々々に差覗きつゝ、それより阿波座、越後町を見物し、局女郎の袖ひくを罵り興じて行くまゝに、やがて九軒町にいたれば、左「モシ／＼、こゝが

皆揚屋ぢやわいな。」北「なる程ごてえそうなやてえほねだ。」左「サアサア、こゝぢやぢや、おまいがたはそこにお出でなされ。」ト二人を玄関に待たせおきて、左平次一人、吉田屋の勝手口へはひり、かくと云ひいれる。この處は長町の河内屋より、をりふし客をおくりこす内なれば、左平次手紙をもち来りて渡しけるゆゑ、亭主早速羽織袴にて迎へに来り、亭主「コレハようお出でくださりました。コリヤコリヤ、仲居共御案内申さんかい。サアお通りなされませ。」北「そんなら許しなせえ。コウ北八、来ねえか。門口に立ちはだかつて、花屋の柳ぢやあるめえし。」左「コリヤでけましたハヽヽヽ。サアお出で。」ト玄関より上り、幾間もこえて行くほどに、ぐつと奥座敷のはなやかなるところに案内すると、左平次はわざと二人を大盡風にもてなし、はるか末座にすわる。仲居ども茶、烟草盆をもち出るうち亭主「ていすめでござります。御贔屓にようこそ、有り難うござります。」北「御亭主さんか。わつちらア、今度江戸から仕入れに上りやしたが、御當地は初めてでござりやす。逗留のうちは、どうせたびたびめえりやせうからお頼み申しやす。その代り、わつちらアちよつと来ても、はした金つかふ事は嫌ひだから、むだ使ひの一箱と二箱は、別に爲替に振つてよこしてあるから、そこは一向未練なしさ。併し生得が商人といふ者だから、初めからさうはいきやせぬによつて、マア今宵は、お前の方でも隨分安あがりに負けてくんなせえ。ハテ後の爲だから、ノウ左平次さん。」左「さやうさやう。斯う致しましよ。夜前お著きなされし、お草臥れでもあろさかい、マア今宵は太夫さんがた借つて御らうじて、御酒一つ上つて、お歸りなさるがよござりましよ。ハテまアあすの夜さりなと、お供いたしましよかい。」トこゝにて左平次ふと心づき、今宵金をつかはせた

處が、ひよつと、あすの百兩、どういふことにて閑遊ふまいものでもなしと手に入らぬうちは不定なりと、順慶町の卜筮屋が言葉をおもひあはせ、安心ならねども、今更このまゝにも歸られず、ちよつと一ぱい呑ませて連れて歸る目算ゆゑ、かくはいふと見えたり。彌「いづれとも宜しく〳〵。」左「そしたら仲居衆、太夫さんがたマアかりにやらんせ。」なかゐ「ハイかしこまりました。」ト たつてゆく。此の内酒肴出で、仲ゐども相手に呑みかけてゐると、鄰座敷には、ぐつと西國方のお侍と見えたる客人、太鼓持藝子ども引寄せて大騒ぎにしやれちらすを、襖のこなたよりそつと覗きみれば、藝子のうた「三すぢほどある薄鬢のあたま、やがてすぼうに鳴る鐘ならば、權八がよからうけんれど、是れから貞月と、いうておくれの神かけて、願ひたけ、トン。チツンシャン。」たいこ惣八「イヨイヨ、おしまさん、ソリヤ南の權八めが摺りものの唄ぢやな。」げいこ「さようぢやわいな。東南さんの手をつけてぢやあつたわいな。」客「コリヤ〳〵、我共が、是いからおくに踊ども踊るての、サア三味引きだいてたもれ。」ト 此のうち、客人たつて手拭をかぶり兩の耳を出し、羽織を横ちよに肩先を出しかけ、ぢんぢばしよりして手に扇をもつと、藝子が三味線、「トオチテントオテテン。」客うた「コリヨ合コリヨ合コリ〳〵〳〵。もちこいかソコ、ヨッチヨン。」三味「トオチテントオチテン。」うた「すゞ山お龜女は、すゞ山の山の古狐、龜女じりよふれ。かんべまくれ、ちやちよれちや。コリヨ合コリヨ合コリ〳〵。もちこいか、コリヤ、脊戸にや小屋がけ、龜女がばんそくばつたのづうからす、ぼうぶら枕にへこといて、そこねい、こゝねい、ずりさ[illegible]き、これしこ、よかこととしてのけた。ソコ、ヨッチヨン、トオチテン〳〵。」皆々「ヤレヤ、でけました。」客「ア、だりがていく〳〵。」こんがい醉ひくらひをつて、私共のしやんすめに、がらりうばあてや、おとろし〳〵。」藝「オホヽ、

ホ「何いひなますやら、こちやねからよめんわいな。」客二「なじかい〳〵。」藝二「す、すかんやつ。ヤノお顔見なませ。えらいおつきな目して、呵る様に白眼んでおやわいな。」客一「イヤ、こやつふたうなやつの。わいどもの顔よりお身のつら何ぢや、鰒とうどもの、横さるさせるやうな、佛頂面して、おもしろうないぞ。わいども最早いらんばい。いぬるぞ〳〵。」ト以てお外むかばら立ちて立ちあがるを、仲居ども引止め「コレイナア、おまいさん、そないに何でお腹たちますぞいな。」たいこ二「コリヤしま主が無調法。ナントから致しましよかいな。どうやらお座敷かしゆんで来たさかい、是れからわつさりと、額風呂へなりこみの、例の、ワヤ〳〵フツ、カ、ホカ〳〵けつこう〳〵なぞは、どでござりますぞいな。」客三「何ぢや、額風呂といふは、殻ふろのことぢやな。こやつ、わいどもをのろまぢやと思ひをるか。客共に向つて、あんがいおろよいことぬかいてよかばいものか。づくにうども、にやいてくれるぞ。」ト此の客人は腹立ち上戸と見えて、無上にわとり散らし、みな〳〵止めるを突き退け〳〵、せひ帰らうと大もめの最中、相方の太夫引舟、禿をつれてこゝにきたると、仲居三「ソレ〳〵、太夫主が来なましたわいな。」

太夫「ヲヽ、しんど、おまいさん何ぢやいな。」仲居三「今おかへりなますとて、えらうお腹立てておやわいな。」太夫「おまいさんも、マア、こちや洲濱のうちかたに出ておやさかい、ちとのあひだ待つておくれなませといふて、おこしたぢやないかいな。それにいま、おかへりなますは何のこつちやいな。それほどこちがお嫌なら、マアお歸りなませ〳〵。」客一「イヤ、わいどもそれでするといふではなかばい。

たんだ此のくるわども、すねふりにづらんばいといひをつたのぢや。もうよかばい〳〵。」引ふね「ようせ話やかしてぢや。サアあつちやへお出でなませ。」ト大勢に引立てられ、かしこの座敷にゆく。とてこなたには太夫十人ばかり、次の間に詰めかけ控へゐると銚子杯を別にもち出で、仲ゐる帳面と硯箱をひかへ、仲ゐ「あふぎやの折琴さん。これへおかし。」ト呼び出せば、折琴太夫座敷に出で、杯をとり飲むまねして下におき、仲居の額を見てにつこり笑ひ立つて行く。仲ゐ「つちやの雛松さん、これへおかし。」ト此の内だん〳〵と、太夫一人々々出で初めの如くみな〳〵杯をとり、飲むまねしてゆく。彌次郎北八は是れを珍らしき事におぼえ、こゝにもさま〴〵無駄あれども畧す。仲ゐ「どなたぞお氣に入りなましたかいな。」北「イヤもう、のこらず氣に入つた。その中三番目に出たは何といふ女郎だの。」なかゐる、帳面をとり、帳「ハイ、西の扇屋の東路さんぢやわいな。」弥「マア、今宵は御見物のみのこつちやさかい、あすの夜さりなと、おゆるりとお遊びなさるがよござりましよ。」彌「ナゼ、今夜でもいいぢやァねえか。」弥「ハテマア、わし次第にしておきなされ。」ト心に一物ある故、これぎりにしようとする。彌次郎もくさん違ひて不承々々に、「そんなら、酒でもたらふくやらかしやせう。」仲ゐ「藝子さんは。」弥「イヤ、それもえいわいの、おいそぎぢやさかい。」北「こけへ來て、酒ばかりぢやァはじまらねえ。何ぞ呼ばにやア、こゝのうちへ氣の毒ぢやァねえか。」仲ゐ「何のまあ、サアお一つお上りなませ。ホンニお羽織お取りなませんかいな。」ト仲居ども二三人立ちかゝり、彌次郎北八に羽織をぬがせてたゝみながら、羽織の裏にしるしあるを見つけて、くつくつ笑ひ出し、仲ゐのいさ「コレ見いな。十文字の絲ぬひがあるわいな。大かた損料の著物借つてお出でたのぢやあろ。」ト仲居どし小さな聲にて騒き笑ふ。すべて長町の損料にては、著物羽織とも、裏には白絲にて十文字のしるしをつけおくと見えたり。をり〳〵長町通りの旅人、これを借著して新町などへ行く事あれば、此の

さとのもんども皆かねて承知してゐることゆゑ、かくは囁き笑ふと見えたり。左平次はこれを聞きつけ、心の内にをかしく思ひをれども、彌次郎北八はつゆ知らず。彌「ナント女中しゆ、此のくるわ中に、太夫はいくたり程ある。皆總揚げにして遊んだらおもしろかろう。」北「わつちらが逗留の内、どうぞみんなへ、そろひの爲著せでも殘して行きてえもんだ。ノウ彌次さん。」仲ゐ「ソリヤお嬉しうおますわいな ソノきりもんの裏に、十文字の印つけてかいな。」今一人の仲ゐ「コレイナ、そないな事いはんすな。」ト袖ひきてわらへども二人は一向知らず。北「ナニ、裏に十の字とは、何かあたりのある事だな。畜生めが。成ほど、おめへなぞはいろがあらう。がうてきに仇物だ。ドレお杯いたゞきやせう。」仲ゐ「オホヽヽ、えらいあぶらいひなます。さよなら十の字のお方へあぎよわいな。」北「ナニ、十の字とはおれが事か。コリヤありがてえ。」トおのれがあそばれることは知らず、杯をとり上ぐると、仲居銚子をとつて注ぐとき、北八、此の仲居の膝をちよいと抓ると、仲ゐ「イヽ、いた。」ト飛びのく拍子、杯にさはり、北八の膝の上へばつたりと落ちると、そこら中酒だらけに成る。仲ゐ「オヽ、せうし。お氣の毒なこといたしたわいな。」今一人の仲ゐ「めつさうな。氣をつけさんしたがよいわいな。あなた、じみ／＼しておわるかろ。そして酒のかかつたのは、きはづくものぢや。ちやと、くゝみ水でなと洗うてあげさんせ。」仲ゐ「ホヽヽ、さつとなと洗うて參じよう。おぬぎなませ。」ト立ちかゝりぬがさうとする、北八は下に女の著物をきてゐるゆゑ、上著をぬぎては恰好わるしと、仲居をはねのけ、北「イヤ、洗はずとよし／＼、コリヤほんの不斷著だ。」仲ゐ「ハテ、御遠慮はおませんわいな、おぬぎなませ、おぬぎなませ。」トこの仲ゐども二人、北八の著物、これも裏に十の字の印あるを見てやらんと思ひ、うなづきあうて、むりに二人して帶をときにかゝる。北八肝を潰し、北「コレサ／＼、よ

いといふに。」彌「ハテ、コリヤ北八、えて吉ぢや。しみがついては、ナ、ソレ。ちよつくりとそこのところばかり、ゆすいでもらふがいいわな。ハテ火鉢でなりとあぶれば、ぢきに乾ることだ。」ト損印ゆゑ後で叱しからうと、目顔で知らせて北八にぬげと教ふる。北八大きに困りはて、北「エヽなんの、ちつとばかり酒のしみたぐらゐ。」彌「ハテさて、ちつとでも後がきは、ついちやァ、ソレ、わるいぢやァねえか。仲居衆、大儀ながら、ざつとつまみ洗ひしてやつてくんな。」仲ゐ「ハイ／＼、サアおぬぎなませ。」北「ハテ扨、情ない事をいふ。もうよいといふに。」トいろ／＼いひ紛らかして、ぬぐまいとすれども、たうとう二人して帯をとき、無理にぬがせた所が、下には女の著物を著てゐる。袖小さくゆきの短い所をかくさんと、北八両手をちゞめて尻ごみする。彌次郎不思議さうに、彌「オヤ／＼、手めへなんだ、女の著物をきてゐるか。」北「エ、とんだ事をいふ。もう／＼ひとつ脱いだら寒くてならねえ。」トだん／＼にうしろの方へちゞまる。彌「おさむかろ。一つ上りなされ。」北「彌次さん、そのさかづきを取つてくんな。」彌「ナゼ、手めへ手を延ばす事はならねえか。そこにある。取りやあ。」北「いま／＼しい。おめへまでが、おいらをへこませるな。」ト此のうち、仲ゐ、かの酒のかゝりし著物をあらひ、火に干して干あがりたるを持ち來り、仲ゐ「サア／＼、上の字がよござりますわいな。オホヽヽヽ、こちやいやいな。あなたのそのなりは何でおますぞいな。オホヽヽヽ。」ト無上に笑へば、北八むつとして、北「コリヤ、うぬらはさつきにから、おれが默つてゐりやァ上の字だの何のと、おいらに符帳をつけて慰みものにしやァがるが、何でおいらが上の字だ。それをぬかせ／＼。」ト何がな、あたりまなこにねぢかゝる。仲ゐども困りはて、「ツイてんがうにいうたのぢやさかい、お氣にあたり

ましたら、堪忍しておくれなませ。」北「イヤおくれなますめえ。何でも其の十の字のわけを聞かねえ中は料簡がならねえわ。」左「ハテえいわいな。そないにお前腹立つてぢやと、いんまの先のお侍のやうに、無粋ぢやぞえ〳〵。」北「ハテ、ぬしの知つた事ぢやァねえ。無粋でもさんすゐでも頓着はねえ。サアふんばりめら、十の字たァ何の事か、ぬかせ〳〵。」ト わめき散らすを、彌次郎左平次、いろ〳〵に止めても、酒機嫌にて一向に合點せず。ぜひ〳〵十の字のわけを聞かねば、料簡ならぬとのことゆゑ、左平次もした面倒になり、此の上はせん方なしとて、左「コレ〳〵仲居衆、あないにおつしやるものを、しよことがない、十の字のことといはしたがえいわいの。」仲「そぢやてて、それがまあ。」北「早くぬかせ。」仲「いうたらまたお腹たちなますぢやあろ。」彌「はらァ立つても、わつちが呑込んでゐるゑら、念晴しにいつてしまひなせえ。おいらもどうか聞きてえやうだの。」仲「さよならいうてのけるぞえ。アノナ、十の字とは是れぢやわいな。」ト 二人のぬぎおきたる羽織の裏を、ひつくり返して見せる。彌「すや〳〵、何で此の羽織に十文字がぬひつけてある。」左「ハ、、、コリヤモウ、とつとねからやくたいぢや。ハテ旅のお方々ぢやもの、そないに著物用意してお出でるお方ばかりもないもんぢやさかい、それで損料借つてお出でぢやわいの。」北「ナニ、おいらが損料の著物きて來るものか。とんだ事をいふ。」左「イヤもう、そないにいはんしてもあかんわいな。長町の損料屋のきりもんには、みな十の字の印ついてある事、敵等よう知つてぢやさかい、それであないにいふのぢやわいな。」ト 十の字のわけさらりと分り、二人はにはかに大へこみとなり、北八なまなかの事いひつのり、今更

恥のうはぬりし、くしや／＼思ふ内にもをかしく、なり、さう／＼支度して、こそ／＼とこゝを出かけけるに、そりやお歸りぢやと、仲居ども大勢目ひき袖ひき、笑ひをかくしておくり出るにぞ、三人やがて表にたち出でて、

損料のきものゝみかは太夫までかりてみたりの不首尾たら／＼

十の字のしるしありとは露しらず借りし羽織のうらめしきかな

かく打興じつゝ長町さして急ぎける。

かくて三人は新町の遊びに、思ひもよらず面目を失ひしも、道すがら笑ひの種となりて、うち興じつゝ曲輪を出でたりしは、最早子の刻過ぎける故、順慶町の夜見せもひけて往來さびしければ、おのおの足をはやめて長町に立歸り、翌日こそは、かの百兩をあたゝまり、今宵の恥辱をすゝがんと、胸工みして河内屋の奥座敷に臥したりけるが、何となく心さえて寐入りもやらず、漸く一番鷄のうたふ頃、とろ／＼とまどろみたるが、早くも夜明けて、こゝに泊り合はせし旅人追々起き出でて、話聲するに、彌次郎兵衛北八も目ざめて牀を出づれば、左平次目をこすりながら出で來り、はやとく／＼と勸めたつるにぞ、二人食事もそこ／＼に支度調へ、昨夜の損料著物引つぱり、立ち出でて急ぎはせ行く儘に、頓てかの座摩の宮なる富會所にぞ到りける。北「急ぎ候ほどに、もうこれだ／＼。サア彌次さん入らねえか。」彌「手めへ先へ入れ。」北「へ、、どうやら恥かしいやうだハ、、、。モシちとおたのん申しやす。わつちらア、昨日の一の富に當りやした。金子をお渡し下さりませ。」トいひ入れると、世話や

き講中と見えたるが一人、羽織袴にてさつそくたち出で、「コレハようこそ、サア〳〵こつちやへお通りなされ。」ト玄關に上げてしばらく待たせやがて又出で來「金子お渡し申しましよ。マアこつちやの方へ御案内いたしましよ。」トうちつれて、ぐつと奥の二十疊ばかりの座敷へ通す。三人こゝに坐りて見まはすに、琉球表をけぬきあはせに敷きつめ、牀の間、違棚のかゝりきらびやかに、塵ひとつなき座敷の結構いふばかりなし。このうち十三四歳ばかりの美しき若衆が、黑紬にもえぎちやうの袴にて、茶煙草盆をはこび、つぎに吸物、すゞりぶた、銚子、杯をもちいづると、かう中一人「只今金子お渡し申しましよ。先づ、御酒一獻めしあがりませ。」

彌「コレハ〳〵御丁寧な。ハ、、、ハ、、、。」北「ナニそれがをかしい事か。お辭儀なしにはじめなせえ。」かう中「誠にはやこの多くの札數のうちにて、一の富にお當りなさるといふは、御運のひらける瑞相、私などもあなた方にあやかるやうに、お杯いたゞきましよかいな。」彌「左樣なら、憚りながら。」かう中「イヤ、まづあなたへ。」北「コレハ御馳走でござりやす。オト、、、。」ト下地は好きなり御意はよし、無上にさいつおさへつ飲んでゐるうち、肴いろ〳〵出で、世話やき講中、かはり〳〵挨拶に來り、追從たら〳〵そやし立てて酒の相手となり、大方に生醉ひとなりたる頃、「御時分でございましよ。の出來合さしあげましよかいな。」ト酒をひきて本膳をすゐる。北「コレハいろ〳〵御念の入つた事だ。」彌「もうお構ひなさいやすな。ハ、、、、イヤモおもしろくて堪へられねえ。」ト三人とも、思ふさまに食ひしまふと、やがて膳もひけたるに、當社の神職と見えたるが先にたち、講中二三人つきそひ、南鐐にて百兩さんぼうに積み上げたるを、ふたわけにして目八分にもち出で三人の前へおく。彌次郎北八これを見るより、ぞく〳〵として有頂天となり、にこ〳〵ものにてひかへゐると、神主「さておの〳〵方には、はじめて御意えます。拙者神職の名代でござります。先づはお悅び申し入れましよ。おめでたい事でござります。」彌「ハイ〳〵。」かう中「金子お渡し申しましよ。」北「ハイ〳〵

「ハイ。」かう中「ときにお願ひがござります。當社御覽のとほり大破につきまして、再建のため興行いたした富にござりますれば、お當りなされたお方へは、どなたへもお願ひ申して、百兩の内拾兩寄進におつき申してもらひ申しますさかい、あなた方もさやうなされて下さりませ。」彌「ハイ〱〱。」かう中「まだ外にお願ひがござりますわいな。是れもすべてさやうに致します。金子五兩世話やきどもへ御祝儀といたして、おもらひ申したうござります。」北「ハイ〱。」かう中「まだ一つござりますわいな。今五兩あと札をおかひなされて下さりませ。」彌「ハイ〱〱。」かう中「さよなら、百兩の内二十兩ひきましてお渡し申しますさかい、それでよござりますかいな。」彌「ハイ〱、どうなりとも宜しくなされて下さりませ。」かう中「さよなら、その札をこれへお出しなされ。ひきかへに金子おわたし申しましよ。」彌「ハイ〱、是れにござりやす。」トくだんの札を懐中より出してわたせば、講中手にとり見てびつくりし「モシ札は是ればかりかいな。」北「ハイ、そればかりさ。」かう中「コリヤ違うたわいな。」北「ナニ違つたとはえ。アノ一の富は八十八番ぢやござりやせんか。」かう中「さよぢや。八十八番ぢやわいな。」北「そんなら何が違ひやした。」かう中「コの十二支が違うたわいな。當社の札には皆番付の上に、コレ見やんせ十二支がついてあるわいな。一の富は子の八十八番。こなさん方のもてこんしたのは、亥の八十八番ぢやわいな。」トいふはこの所の札はすべて十二支を後につけてあるゆゑ、同じ番號數の札十二枚づゝあるゆゑなり。北八これを知らずうつかりとして、そこに心づかざれば、この間違ひ出來たるなり。兩人これを聞くより、はつと

思ひ、ぐんにゃりと投首して、北「エ、そんなら三文にもなりやせんか。彌次さん、コリャどうしたものだらう。」彌「アア、どうといつたら、ねつからさつぱり力がおちて、おいらアもうどうも。」北「エ、なんだ。おめへ泣くか業さらしな。」かう中「コリャこなさんたちは、よう札を改めてごんしたがえいわいの。えらい阿房な衆ぢやわいの。」神主「いこやくたいぢや、とつとと出ていなしやれ。」かう中「サアサア、いんだいんだ。」彌「ハイハイ。コリャ思ひがけもない御馳走になりやした。なんなら十二支位は間違つてもようござりやすから、どうぞ今の金子を。」かう中「阿房なことぬかしやアがれ。こゝなならずめか。」北「イヤ物の間違ひといふ事はありうちだ。そんなに安くいやアがる事アねえぞ。」かう中「戯言いふと、どつき倒すぞ。」左平「コレイナ、もうえいわいの。こちが悪い。ハテこない馳走にあうて、氣の毒ぢやさかい、しよ事がない。サアサアこち來なされ。是れはしたり、彌次さんどしたもんぢやぞい。サア立ちなされ、立ちなされ。」彌「ア、コレコレ、北八おれがうしろをかゝへてくれ。」左平「何ぢやいな、お前腰がぬけたかいの。」彌「はつと思つたせいかして、どうも腰が延ばされぬ。アイタ、、、、。」北「エエ意氣地のねえこつた。サア立ちねえな。」彌「コレサ、そのやうにひつぱるな。あいたたた。」ト立ち上りしが、ひよろひよろとして歩かれず。せん方なくて四ツばひに玄關まではひ出づれば、そろひのかんばん著たる棒突の男ども、くちぐちに、「偉いあんだらぢやな。敵等は大方あないなことをいうて、酒飲みにがなうせをつたもんぢやあろぞい。晝盗賊めが、やばなことさらすな。」

北「何だ、いめえましい奴らだ。横つ面はりとばすぞ。」ぼうつき「ア、いしこやの、どやいてこませ。」トみな〳〵立ちかゝるを、左平次中に入り、押宥めて、「サアえいわいの。こちごんせ〳〵。」トむりに北八が手を引張り先へやり、彌次郎がよい〳〵めきたる歩きぶりを介抱しながら、やう〳〵と境内を出たれど、二人とも元氣おちて氣ぬけのしたる如く、ぐにやりとなりて、「ホンニ勘平ぢやァねえが、する事なす事易のはしだ。今おもへば、昨夜の占者めがきつい事をぬかしやァがつた。」

百兩の的ははづれてあたらねどよくあたりたるさきのうらなひ

彌「エヽ、歌どころか。コリヤもう詰らねえものになつた。」左平「サイノ、お氣の毒なこつちやわいの。」北「コリヤ全體左平さん、おめへがわりい、わつちらァ他國もので、この土地の勝手は知らず、アノ札の十二支の理窟もいつて聞かしてくんなさると、何もこんなに番狂はせはなかつたものを、いめえましい。いつそのくされに、是れからどこぞ遊びにつれてあよびなせえ。」左平「ホンニ、私もねから氣がつかなんだわいの。まあ何ぢやあろと、ひとかへり戻りなされ、其の著物の事もあるさかい。」トーの富の目算ちがひ、左平次も、おのれが受合ひし損料の事も氣にかゝり、又彌次郎が、うか〳〵と氣ぬけのしたる體に、もしや橋の上から、どんぶりとやりはせまいかと、心の中に油斷せず、さま〳〵にいひくるめて、まづやう〳〵と長町の河内屋につれ歸りければ、番頭はかの富の事も承知なれば、さだめし百兩せしめて歸りたらんと、出むかへて、「コレハお早うござります。ソレ、女子どもお茶あげんかい。マァ奥へ〳〵。時にお客樣方は、何ぢややら、おめでたい事があると、夜前ちらと聞きましたが、どうでござりましたな。」彌「イヤ一向やくたい〳〵。しかしいのちに別條なく歸りやした。」

ト ひよろ〳〵して二人とも奥へゆく、左平次番頭に囁きて、「イヤモ、偉いばんくであつたわいな。」はんとう「おほかた十二支違ひぢやあろぞい。ハヽヽヽ。」左平「サイノウ、そぢやさかい、アノ一人の年のいたお方が、どうぢややら氣の觸れたやうに見えるさかい、氣をつけさんしたがよいわいの。モシ雪隠へいたなら油斷さんすな。首などくゝりをろも知れんわいの。」はんとう「ソリヤ氣味の悪い。どうぞ早うほり出してこましたいものぢや。」ト 引分れて左平次奥座敷へ來り、「モシ、早速ながら損料屋が勝手へ來てでござります。もうお脱ぎなされて、お戻しなさるがよござりましよ。」北「アイ、けへしてくんなせえ。サア彌次さん、おめへも脱ぎな。」ト 二人ながら不承々々にぬぎて、もとの古布子を著る。左平次、これを紬だゝみとなして、「ハイ、損料錢の書付でござります。」ト さし出すを北八とり上げ、「なんだ、〆て一貫八百文。こいつ高え〳〵。ちとまけて貰つてくんなせえ。」ト やつつ返しつ いふうち、勝手より女きたりて、「たゞ今新町の九軒から、御勘定をいたゞきに參じたわいな。」ト 書付をさしおく。彌次郎とり上げ、「なんだ、拾五匁座敷代、三匁硯ぶた、壹匁五分すひもの、拾匁三分御肴いろ〳〵、貳匁五分御菓子、六匁八分六厘が酒、壹匁貳分四厘が蠟燭、〆て四拾壹匁四分。ヒヤア目が出る〳〵。」北「コウ、左平さん、他國者だとおもつて、あんまり人をばかにした。昨夜喰つたものが、何こんなにかゝるものか。總體上方者はあたじけねえ。氣の知れたべらぼうどもだ。」左平「イヤおまい方があたぢやわいな。何ぢやあろと、くたものを拂つて下んせにや、わしが濟まんわいな。」北「イヤおいらをあたじけねえとは何のこつた。ばか

なつらな。」左平「錢出してからなんなといはんせ。あたけたいな。」彌「コウ、左平さん、おめへいくら力んでも、此の新町の書出しは違つてある。」左平「違うたとは、なにが違うたぞいな。」彌「ハテ、わつちらが借りて來たは、子の四十壹匁四分、此の書出しは亥の四十壹匁四分とある。」左平「エ、、おきくされ。てんがういはずと金出せやい。」北「イヤ、このやろめは、ふてえ奴だ。」ト立ちかゝれば、左平次も一すぢでは行かぬやつ、互に負けず、すでに掴合ひにもならんかとおもふ所へ、この河内屋の亭主四郎兵衛かけ出で、左平を叱りちらし、北八をなだめて、委細のことを聞くに、此の亭主の樣子たのもしげに見え、ことに此の家の主と見てとり、ふたりも眞底なく委細をかたり、身の上のすかんぴんなる事も打ちあけて頼みければ、亭主四郎兵衛わけよき男にて、ぐつと飲み込み、「よござります。ハテ萬兩分限でも、旅では金に困る事もあるもんぢやげにござります。此の商賣いたせば、たとひどないなお方でもお客はお客、飯料がないてて、そんなら出ていなしやれとは申しませぬさかい、何日なと逗留しておかへりなされ。」彌「それは有り難うございやす。もうそんなに長逗留しても詰りませんから、明日は出立致しやせう。」亭主「ハテ、せつかくお出でたもんぢや。ゆるりと御見物なされ。ホンニ住吉はまだぢやあろ。幸ひ今日わしも住吉へ行くさかい、お出でんかいな。しかし、私ははかまや新田の方へ用事が有るさかい、船でいこが、お前方は生玉天王寺かけて歩行でお出でなされ。新家の三文字屋といふ茶屋に、お待ち申しましよさかい、ノウ左平次どの、こなさんも中直りにお供さんせ。もう四ツ過ぎぢやあろ。いつきにお出でるがよございます。」トいふに二人も幸ひのことなりと、その相談にきはまり、左平次とも互に挨拶して心とけ、やがて支度とゝのへ、亭主は船にて行くとの事なれば、こなたは生玉天

王寺をまはりて行かんと、また左平次の案内にてこゝを立ち出で、高津新地にかゝり行くほどに、早くも生玉の社にまゐりて、

御普請もあらたに見えて金もののひかりますなりいく玉のみや

當社は生魂命化現の靈玉を鎮めたてまつるといふ。常に參詣の人多く、境内に田樂茶屋たて續き、見せもの、齒みがきうり、女祭文、東清七が浮世物まね、その外さまざまあるが中にも、粟餅の曲春きは、此のところを元祖とす。 向鉢巻に、手杵しやにかまへたる男、一「サア〳〵、評判で〳〵。元祖名代粟餅の曲春きは生玉やが家の看板、ソレつくぞ、ヤレつくぞ、アリヤコリヤつく〳〵〳〵〳〵何をつく、粟つく、麥つく、米をつく。旦那はん方には供がつく。若い後家御にやむしがつく。隱居さんは、ちよちんで餅をつく。おやまはお客のえりにつく。藝子にや又してもあしがつく。コリヤ鐚の金たまへ砂がつく、ヨイ〳〵、サツサ〳〵、評判々々。」 一「おいらは年中うそをつくが聞いてあきれらア。」

商賣のうまみを見せて錢金をぬれ手でつかむ粟餅の茶屋

かくて境内を打過ぎ、馬場先通りに出でたるに、こゝは少しの遊所ありて、おやま藝子のなまめき行きかふ樣花やかなり。 こゝに嫂引はきて、ちよいと片つまはしよりたる男、茶屋めきたる門々に立ちて、いふを聞けば、「イヤア、新吉に、船場邊お醫者の娘出、ほつとりとした中年增お寐間のところはぐつ〳〵と、煎じやう常の如しとは申せども、そこにはちくと匙加減お用ゐなされて御らうじませ。 天王寺屋にこれはまた、さるところの飴屋の娘出、

につちやりくつちやり、澤山な水飴もどきの上代物が出ます。いづれもおたのみ申します。」ト ふれて行く。
北「左平さん、アリヤァなんだね。」左平「あれかいな、こゝの女郎屋に新造が出ると、あないにいうて、呼屋をふれて、あるきをるのぢやわいな。」彌「コリヤめづらしい、ハ、、、、。」左平「時にわしは、ちよと此の裏に用事があるさかい、お前がたは此の通りまつすぐに、先へお出でなされ。ツイこの先が天王寺ぢや。いつきに私追ひつくさかい。」彌「よし／＼、お先へめえりやせう。」ト こゝにて左平次にわかれ、二人は話しつれてたどりゆくに、突きあたりて少しまがるところ、いづれへ行きたるがよきや知れざるゆゑ、さきへ行く肥取のおやぢを呼びかけ、「モシ／＼天王寺へはどうめえりやすね。」こえとり「私が後へついてごんせ。」北「エ、ついて來いはおやまる。くさい／＼。」ト 後へ下らうとすると、肥取ふりかへりて、「コレイノ、わしや天王寺のツイねきぢやさかい、つれまうていこわいの。サァ／＼、ごんせ／＼。おまいがたはどこぢやいな。」彌「わつちらァ江戸でござりやす。」こえとり「ハァお江戸はえい處ぢやげな。アノお江戸は肥が一荷なんぼ程するぞいな。」彌「私らァそんな事は知りやせん。」北「コウ彌次さん、もつと後へ下つて行かう。」ト 彌次郎が袖を引いて、肥取のおやぢを先へやらんと、わざと小便をする。此の内、暫くしてかのおやぢを先へやり、彌「いめえましいおやぢめだ。おいらに糞の直段を聞いたとて、何の分るものだ。氣のきかねえ。」ト いひつゝもはや餘程隔たりしならんと、さつ／＼とゆく向うに、又今の肥取のおやぢ待ち受けてゐる體に、北「エ、情ねえ。あそこにまた待つてるやァがる。」こえとり「サァ／＼、ごんせ／＼。お前方、また爰で道が知れぬくかろ。サァ／＼ごんせ／＼。今見ればお前方、あそこで

小便してぢやあつたが、お江戸ぢや、あないに皆こき放しにしてぢやさうな。もつたいないことの。マアお前方は一日に幾度ほどづゝ、しよんべんしてぢやぞいな。」彌「ソリヤア三度する日もあり、四たび五たびする時もあり、定まつた事アござりやせん。」こえとり「ふとう出るか、ほそう出るかいの。」彌「エ、おめへもいろ〳〵な事を聞くもんだ。わつちなんどはそんなでもねえが、此の男のはなんのことはねえ、シヤア〳〵と瀧の落ちるやうに出やす。」こえとり「ア、、そりやようきくぢやあろに、惜しい事してぢや。」彌「ちと急いで行かうぢやアねえか。北八、オヤ手めへ何をする。」ト とがめられて、彌次郎の袖をひきとめ、北「アレ見ねえ、　肥桶の内に、銀の簪の頭が見える。」ト 彌次郎はかのおやぢと話しながら行くうしろの方にて、北八はあたりにありあふ竹きれをひろひ、簪となしてかの肥桶の簪をはさみ取らんとしたる時、肥取のおやぢ、やつとさと肩をかへんとする拍子、北八の持ちたる箸をはね飛ばされて、そこらあたりへとばしりかゝりければ、彌次郎も北八も、「エ、、これは飛んだ事をした。」ト 鼻紙を出してふく。此のうち、おやぢは前の方になりたる桶のうちに、簪を見つけ、「コリヤ何ぢやいな。」ト 頭をつまみて、ちよいと引き上げて見れば、よほど目方の見ゆる簪なれば、「コリヤえいのぢや、大かた雪隠の中へ落ちて有つたのぢやあろぞい。孫娘にえい土産ぢや。ドレお先へいこわい。ゆるりと跡からごんせ〳〵。」ト 委細かまはず、さつさと行く。北「エ、、業腹なことをした。」彌「ア、てめへ碌な事はしねえ、何だか體中が臭くて、やつぱり今の親仁めと連立つて行くやうだ。」ト 小言いひながら、行くともなしに早くも天王寺の西門にいたりければ、こゝにて左平次あとより來り、左平「ヤレ〳〵辛度やの、やう〳〵のことで追付いた。コレ見なされ、此の鳥居の額は、小野道風の書いたのぢやといな。」彌「なるほど、話に聞

いてゐやしたが、コリヤア何だかねつから分らねえ。」

唐めきて見ゆる文字に知られけりをののとうふのお筆なりとは

抑この四天王寺は、上宮太子の御草創にて、由來は太子傳記に詳しく見ゆ。まことに日本最上の靈場にして、堂塔の莊嚴いふもさらなり。

何となくこゝろは有頂天王寺われをわするゝありがたさには

御境内の廣大なる、記し盡すべからず。大方に順拜し、こゝにも、色々あれども畧す。それより安部街道に出でゆく道すがら、畑うつ男の唄ふを聞けば「坊さまよォ、大ぼんよォ、ちよつちよとめさるまいかいの。コノ大ぼんよォ。」彌「とつさん、精が出やすの。もう何時だえ。」男「アイ、きんのふの今時分ぢやあろざいな。」彌「おきやアがれ。お定まりの洒落をいふわ。時に北八、煙草の火でも一つ打たつせえな。」北「向うに乞食が呑んでるから、吸ひつけなせえ。しかも女の乞食だ。」彌「ナニきたねえ。」北「とんだ事をいふ。こつちの煙管で吸ひ付けるものを。ドレ〳〵、おいらが借りてやらう。コレ、火を一つ借さつし。」二十一二許りの女の非人、「ハイ、いんまツイ消しましたさかい。ちよと打つて上げましよかいな。」北「イヤ、打つ位ならこつちにもある。」女「そしたら、お前さん一つ打つてお貸しなされ。」北「いい事をいふ、併し貴様のこつたものを、打つて貸しやせう。ノウ彌次さん、見なせえ。乞食にしておくは惜

しい器量だ。」亭「ホンニ仇代物だ。コレ、てめへ男があるか。」女「ハイ〳〵、亭主には去年別れましたわいな。」亭「そんなら、又新しく片付けばいいに。」女「さよおやわいな。此の間も世話やいておやお方があつてな、先の男もよい男ぢや、年中裸でこそをれ、てん〳〵てんまのおてこが、ねからえらい上手ぢやてて、一生貰うて、食はせかねん男ぢやさかい、あこへ嫁かんかてていうておやあつたが、肝心のうちがないてて、よう參じませんわいな。」亭「おれがいい處へ世話をしてやらう。此の男はどうだ。」女「すホヽヽ。あの方のとこへなら、わしやどうぞ嫁きたいわいな。」北「おれも家がねえがいいか。併し、今普請最中だ。出來上つたなら呼びやせう。」女「ソリヤどこに普請しておやえ。」北「イヤ處は何といふ處か知らねえが、爰へ來る道に橋普請してるた處があつたが、あれが出來たら、その橋の下で祝言しよう。」女「そしたら、私も新しい筵なと貰うて、きりもんの支度せうわいな。」北「ドレ、結納に壹文やらうか。ハヽヽ、おれが乞食だと、手めへを女房にするものを。殘念々々。」女「ハヽヽ、お前さんは、アノわたしらが仲間の衆ぢやないかえ。」北「知れたことよ。おいらアしらきちやうめんのお町人樣だ。」女「わしやまた、そないに垢じみた、しゆんだなりしておやさかい、仲間の衆かと思うたわいな。」北「エヽヽ、いめえましい事をいふ。」亭「ハヽヽ。お見たて、えらいもんぢや。サアサア、お出でんかいな〳〵。」

かくて三人は、それより住吉街道に出たるに、貴賤老若打交りて、此の御神に歩行を運ぶ。道すがらの賑ひ引きもきらず。こゝに大盡風の男、末社數多連れたるが、騒ぎたちて團子屋の門に立止り、各々かの團子一串づゝ求めて、横ぐはへにしやれて出かける。この大盡の名は川太郎といふ。川太郎「コレばさまや、わしや團子よりほかに、買うて去にたいもんがあるが、賣らんせんか。」ばゞ「ハイ〳〵、何なと買うておくれなされ。」川太郎「そしたら、此の門に立ててある障子一枚賣つて下んせ。是れやろわいの。」ト前さげの胴亂より、金壹歩出してやると、婆肝を潰し、呆れた顔して ゐるうち、川太郎自らその障子をはづしにかゝれば、末社ども驚き、「コレハ旦那、こないな破れ障子百疋とはえらたかの數珠おやわいな。併し、これには何ぞきよとい御趣向がござりましよいな。」川太郎「わしや日向歩くとのぼせて悪いさかい、コレ久助、コノ障子もてこんかい。コリヤ、そちにも壹分やるわ。そのかはり、住吉まで、カウ縦にしてもてあるけ。オ、さうぢや〳〵。」ト障子一枚を縦に持たせて、その陰を行く〳〵といふ洒落なり。この川太郎といふは浪花名代の洒物にて、かかる洒落をなして樂しみとし、その名殘りたり。彌次郎北八、これを見てきよつとし、彌「イヤ、こいつはなか〳〵おもしろい。」北「上方もばかにやアされねえ。とんだ洒落者がある。奇妙々々。」トだん〳〵此の人々の後につきて行けば、およそ六七丁も行きたりと思ふころ、かの先へ行く大盡川太郎、「イヤ、障子も少し欝陶しうなつたわいな。」久助「ちと開けましよかいな。お庭はいこ廣い、泉水は御前崎、淡路島が築山とは、偉いもんでござりますわいな。」川太郎「久助、もう其の障子はほつてしまへ。」久助「もうよござりますかいな。」川太郎「おけ〳〵。」トいふに、かの障子道の傍へ投り出して行く。後よ

リ北「ナント彌次さん、此の障子を拾ひはどうだ。」彌「イヤ／＼、京の梯子に懲りてゐる。」北「ハテ、八、二人で代り〴〵持つて、おいらも障子の陰を行かうぢやァねえか。おもしろい洒落だぜ。」彌「成程、今日はがうてきに暖かで日向はのぼせる。北八持つて來さつし。」北「かはり〴〵持つのだがいゝか。」彌「承知々々。コリヤ奇妙だ。」ト北八に障子を持たせて、彌次郎その陰をゆくに、やがて天下茶屋村なる、和中散是齋の見せさきにいたりけるに、

麗かな天下茶屋から四方に名の羽をのす鳶のわちう散みせ

此の内向うの方より、下向の大勢づれ、「てうさや／＼、まんざいらくぢや／＼。ハ、、、アリヤなんぢやい、日傘のかはりぢやな。アノもていきをるやつのつら見いやい。だんじりのしるしもちと、障子もていく奴にかしこい面はないもんぢやわい。ハ、、、、。」北「コノさる松めらは、何ぬかしやァがる。」さきの相手「何ぢやい、おどれ病づかしくさるな。聲あげさせてこませやい。」北「コリヤ江戸つ子だわ。片つぼしから張り飛ばすぞ。」ト持ちたる障子を振りまはせば、先の大勢の中に、今宮新家の權七といふあから顏のでつくりしたる親仁、北八を捕へて、「コリヤ此の障子は、どうしておどれがこゝへもてうせたぞい。おれが内の障子ぢやわい。」北「ばかァぬかせ。ナニおのれが處のもんか。」おやぢ「イヤ、こないにおつきに書いてあるのが、おどれの眼にや入らんかいの。コレ見いゝ善哉餅三五團子、今宮新家さいかちやと、しかも私が書いたのぢや。今日この茱と、住吉講の月參りにいた留守に、ばゝ一人おいて出たが、コリヤおどれら、盜みくさつてもてうせたのぢやな。」北「ナ

ニ、泥坊したと。うぬふてえ奴だ。コリヤア道で拾つたのだ。」おやぢ「あほな事ぬかせやい。障子捨てて行くもんがあろかい。あんだらつくしあがれ。」左平「コレ〳〵、伯父さん、コリヤかうぢやわいな。誰やらおまいのとこで、この障子買うてもて來てぢやが、道へすてたさかい、このおかたがひろうて來てぢやあつたわいな。」おやぢ「エヽ、こなんも阿房つくさんせ。こないに書いてあるわ、コリヤわしがとこの看板ぢや。賣りもんぢやないわいな。」北「それでも、一分出して買うたをおいらア見てゐたわヽくそたれめが。」おやぢ「おきくされ。こないな古障子、たれが百にも買ふものかい。大方、おどれら團子食らひをるてて、はづしくさつたのぢやあろぞい。なんぢやあろと、此の障子おれがうちまでもてこい。サアあとへ戻りや〳〵。」左平「コレ料簡さんせ。ハテおまいの障子なら、こヽからもていんでくだんせいの。」ト障子を突きつくれば突き戻し、かれこれとせりあふ所へ、馬方一人、馬を曳いてこヽへ來かヽり「なんぢやい〳〵。往來あけてくだんせ。」ト曳いて通る鼻の先、障子をあつちこつちへ引張り合ひ、はふり出せば、この馬にあたり、馬「ヒイン〳〵〳〵。」ト驚きて跳ね上る拍子に馬方はねつけられ三間向うへのた打ち廻る。「あいた〳〵〳〵。」左平「コリヤどうしたざいな。」馬士「イヤどした所か、あいた〳〵〳〵。コレ金玉がなうなつた。そこらにや落ちてないか見て下んせ。」おやぢ「ナニ金玉が、こヽらにや見えんわいな。」馬士「それでもどこへか。」左平「袂にやないか見やんせ。」馬士「ドレ〳〵、ないはずぢや。廣袖ぢや。」左平「コリヤこなさんもて來やしよまい。うちへおいて來やせんかい。」馬士「あほいはんせ、しかもわ

しや疝氣もちで大金ぢやさかい、こないにふくろに入れて、首にかけてゐるわいの。」おやぢ「そしたら袋ふるうて見やんせ。」馬士「ドレ／＼、あるわいの。今のびつくりで、うへの方へつるし上つたのぢやさうな、もみ出してこまそ。イヤ出て來をつた／＼。」北八「ハ、、、、なるほど大金だ。」弥次「せがきの袋と同じことで、不承々々に一はいある。ハ、、、、。」馬士「イヤ金玉はえいがな、膝の皿すりむいた。コリヤおまいがたは、なんで此の障子をわしが馬に打ちつけさんした。」弥次「わしや知らんわいの。」馬士「知らんてて、コリヤ誰が障子ぢや。」おやぢ「わしがとこのぢや。」馬士「見やんせ、こないに錢がついては濟まんわいの。障子に、今宮新家さいかちやと書いてあるさかい、これが證據ぢや。サアごんせ／＼。なんぢやあろとこゝへいて、めきしやきと、せりふせにやおかんわいの。」ト障子をひつたくり馬につけ、細引にてからみ、委細かまはず、しやん／＼と曳いてゆく。おやぢ「コリヤ／＼、その障子、どこへもて行きをるぞい。待てやい待てやい。」ト追うて行く。みな／＼後より、「てうさやようさ、まんざいらくぢや／＼。」ト囃けて行く。弥次「ハ、、、、馬方めが乙をやつた。ハ、、、、。」

美濃紙の破れかぶれと喧嘩せしあとのしまつの障子せんばん

かくてそれより三人は、ほどなく住吉新家に到りけるに、げにも此の御神の繁昌ましまする事は、兩側の茶屋にあらはれ、いづれも家作美麗にして、赤前垂の女、門に立ち並び、「お休みな／＼。お支度

なさらんかいな。蛤のお吸物もござります。鯛も平目もござります。おはひりな〳〵。」北「ア、、どれもいい茶屋が見える。御てえそうな。」

ぴち〳〵と客のはねこむ賑はひはれうるさかなも新家町なれ

此のところの名物は、金魚、酢蛤、ごろ〳〵煎餅、唐がらし、昆布、竹馬、絲細工などあきなふ家あまたある中に、料理茶屋は三文字屋、いたみ屋、分銅屋、戎屋なんどいへるが、わきて客のたえまなく、繁昌殊にいふばかりなし。左平「モシ〳〵爰が三文字屋。チトお待ちなされ。」ト玄關より覗きて見れば、奥に長町の河内屋、早こゝに來りあはせ、「コリャ、左平次どの、早よごんしたの。」彌二「わつちらァ、やう〳〵たつた今めえりやした。先づ參詣致してめえりませう。」ト是より、打連れて御社にいたる。抑此の大神は、ちはやぶる神代の御時、日向の國小戸の橘の檍原より現はれ給ひて、當社の御鎭座は神功皇后紀十一年、辛卯四月二十三日とかや。四社は底筒男命、中筒男命、表筒男命、神功皇后これなり。攝社、末社、總て三十餘前、巍々として連なれり。まづ御本社にぬかづき奉りて、

海上をまもりたまへる神がきやいとおだやかに見ゆる並松

和かに歌と出かけて樂天の顏をよごせしすみよしの神

かくて御社内を廻るに際限なければあらましにして、出見の濱の高燈籠も指さし見たるまでにて、

いそぎ三文字屋にもどりたるに、女、ばら〳〵とたち出で「お早うござりました。サアあつちへ御出でなされ。」左平「アノ、河四郎さんはどこにぢやいな。」トいひつゝ、うち連れて奥へ通ると、かはちや「えらいお早いこつちやの。」北「がうてきに腹がへつた。」かはちや「マア一つあがりなされ。」ト杯をさす。北「彌次さん、お先へ。」彌「手めへ飲んでさしやれ。」北「もう口をかけるの。」左平「お肴は何がよかろ。」北「何ぞ、腹にたまりさうな物をくんなせえ。」彌「エ、、きたねえ事をいふ男だ。」北「へ、、人の事ァいひながら、ソレ、まだ杯もいかねえうちに、お前肴をしてやるぢやァねえか。」左平「コリヤ、えらいしゆみになつてぢやわいの。」彌「イヤもう、河内屋の親方のお蔭なりやこそ、こんなうめえものも食ふやうなものの、なるほど錢のねえ旅は、憂いもの辛いものだ。」トさすがの彌次郎、初めて弱い音を出ししよげ返りていふ故、左平をかしさを隠して、「ナント、お前がたは大阪者にならんせんかい。」北「イヤ、わつちらも何ぞ覺えた職でもあるといいけれど、是れで食はうといふ事が一つもねえから、どこへ行つても詰らねえものさ。」かはちや「ホンニ、えい事があるわいな、どうぢや、二人の内一人は賣り付ける口があるのになァ。」彌「どのやうなことでござりやすね。」かはちや「をとこめかけの口があるが、どうぢやいな。」彌「ソリヤほんにかえ。おもしろえ〳〵。」トあつかましくも俄に鼻をひこつかせ嬉しがれば、北八もずつと前の方へ出かけ、「モシ、わつちがやうなもんでもよくば、お世話なすつて下さりませ。」彌「ハ、、、、手めへぢやァいけねえ。しかし、御昨今の親方の前で、こんな事をいふは可

笑しなもんだが、わつちなら、先の氣に入るにやァ、ちげへのねえ事がござりやすから、どうぞそれがほんとの事ならわつちをナ、もし、へ、、、、ハ、、、、。」かはちや「コリヤ、せいもんほんまのこつちや、しかも先の代物はえらい美しうて、年は三十四五にもなろか、船場邊で、工面のえいとこの後家どのぢやわいの。わしやそこの番頭が心安うて、いんまの先こゝへ見えて、その話してぢやつたが、どうも役者買うて、金使うてならんさかい、厄介のない男妾抱へたいといふ事ぢやさかい、モシいこと思うてぢやなら、わし世話してあぎよわいな。マア何ぢやあろと、その後家どの見なさらんかいな。」北「ナァニ、見ずともようござりやす。せうノ\はめつかちでも鼻つかけでも、そこにやァ頓著はござりやせん。」かはちや「ぢやてて、その番頭が供して、あつちやの座敷へ來てぢやさかい。ドレ、私がマアちよといて、よう聞き糺してこうかいな。」彌「ハイ、宜しくお頼み申しやす。」ト杯機嫌に、無上にのりが來て頼む故、河内屋は立つて奥へ行くと、あとにて、彌「コウ、北八、おれが行くのだぜ。」北「氣の強いことをいふ。おめへ男妾といふ面か。ついぞ鏡を見た事はねえさうだ。」彌「ばかをいふな。男が悪くても手がある。手めへにやましだは。」北「ナニましなものか。ノウ左平次さん、おめへが女なら彌次さんに惚れるかわつちに惚れるか、どうだ。」左平「わしやどつちへも氣はないわいのハ、、、、。しかし人は惚れいでも、おまいがたはめんノ\が己惚れてぢやさかい、えいぢやないかい。」北「そんなら、男ぶりは五分

五分にしたがいい。年のわけえだけおれが行く。」彌「イヤ、お年役におれだ。」左平「かうさんせ。わし鬮を出すさかい、長いのを取らんしたのがお妾さまぢや。」北「コリヤよからう。南無住吉大明神様、わたくしへ長いのをおさづけ下さりませ。」左平「サア取りなされ。えいかいな、ソレすい／＼のすゐ引。」彌「コリヤ長いのぢや。しめた／＼。」ト有頂天になりて喜ぶうち、河内屋四郎兵衛帰り来り、「サアでけたわいな／＼。番頭に掛合つて來たが、何ぢややらうまいはなしぢや。給金はのぞみ次第で、別にまた牛蒡と玉子代がなんぼやら、しきせは後家御から年中やはらかなもの、何ぼなと拵へしだい、三臟圓と巨勝子圓は、通ひとて飲ませるといふこつちやわいの。」彌「江戸にも、山東京傳の見せに、讀書丸といふ藥がござりやすが、コリヤア洒落でなし、ほんたうに氣根を強くする事奇妙といふ藥だから、ハテ氣根が強くなれば、何もかも強くなるといふもんだによつて、是れも取寄せて用ゐませう。」かはちや「さよぢやわいな。時に、今その後家殿が、こゝへ見える筈ぢやわいの。」彌「ナニ、今こゝへかえ。ソリヤ大變だ。ア、このなりでは詰らねえ。モシ、左平さんこゝらに髪結牀はござりやせんかね。」北「エヽ、おきなせえ。むくろじは三年磨いても白くはならねえ。性の物を性でお目にかけるがいい。たとへにも、見ぬあきなひは出來ぬといふが、是ればつかりは、見たらおきにあつちからお断りにあひさうなことだぜ。ハヽヽヽ。」左平「時にむこの座敷から、えい年増が來をるわいの。」かはちや「あれぢや／＼。大方

こゝへ來るのぢやあろ。」彌「コリヤ堪らぬ〳〵。」ト無上に襟かきあはせ、俄に眞面目な顔してゐると、かの後家といふは、すつかりとした上代物、はへ下りふつさりとして、色は雪の如く白く、ふたかは目に愛敬がぼたり〳〵とこぼれ落つるばかり。縞縮緬の無垢三ツばかり重ねて、黒びろうどの帯、前に結び、桃色の縮緬に縫のある長じゆばん、裾からちら〳〵、すこしほろゑひ機嫌に番頭引連れて來ると、河内屋の亭主出迎へて、「コレハようこそ、サ、あつちやへお出でなされ。」ごけ「お許しなされ。オホヽヽヽ。」ばんとう「どなたも御免下さりませ。あつちやは女許りで、ねからはから御酒の相手がないさかい、幸ひと河四郎様のお出で、こなたの後室の大悦び、ついては私も、お相なといたさうと存じてまゐりました。」かはちや「サア〳〵、もちつとねきへお寄りなされ、早速ながら持合はせた杯、まづあなたへ。」トごけの處へさせばにつこりとしてとり上げ、ごけ「私もいこ酒が過ぎたさかい、もうそないにはようたべませんわいな。」トいひつゝ少し受けて飲み、「このお杯、御返杯いたしましよかいな。」かはちや「イヤ、私も先刻から、えらう過ぎました。マアどつちやへなとお差しなされ。」ごけ「さよなら、あなた近頃憚り樣ながら。」ト彌次郎へさす。彌次郎は始終夢中となり、この後家の顔ばかり尻目にかけて、じろり〳〵と見つめゐたりしが、杯をさされて、ぞつとする程嬉しく、うろたへ出し、「ハイ〳〵〳〵、いたゞきやせう。」左平「コレコレ、ソリヤ杯ぢやない。煙草入ぢや。」彌「ホイ、是れは取りちがへて麁相千萬。サア北八ついでくりや。」北「おらア知らねえ。勝手に注いで飲みなせえ。」彌「エヽ、しよにんな男だ。」ト仲居につがせて飲みほし、番頭へさすと、押戻して、番頭「えらいお手際ぢやな。最一つお重ねなされ。」彌「イヤもう、わつちはいつも酒を飲むと、だん〳〵色が白くなつて、後にはとんと白羽二重のやうになりますが、今日はなぜかこんな

に眞赤になつて、こたへられません。」ごけ「お相なといたしましよかいな。」彌「ハイ〳〵〳〵、ノウ北八、あなたへお相をおたのみ申さうかの。」北「勝手にしなせえ。」彌「ハ、、、、さやうなら憚りぢやけれど。」ごけ「なんとまあ。」ト杯をうける。かはちや「コリヤお二人して、あつちやこつちやへ、とんと婚禮の杯のやうぢや。」ごけ「オ、をかし、オホ、、、、。」彌「コリヤこてへられぬ。ハ、、、、。」北「靜かに笑ひなせえ。肴の中へお前の唾が入らア。」彌「入つてもいい。默つてゐろえ。モシ、とかくこの男めは、わつちがする事にけちをつけてなりやせん。わつちはこれでも唄もうたひやす。三味もかじりやすから、女中方をころ〳〵とおもしろがらする事が得手者でござります。そんな時には、とかく彼奴めがやきもちを燒いて困りやす。」ごけ「ホンニおまいさんは、どうやらおもしろさうなお方ぢやわいな。」ト思ひの外うけのよさに、彌次郎は心の中に、もら占めたと喜びゐるうち、後家が召使の女來つて、「モシ、たゞ今あら吉が見えまして、さつきにからあつちやの座敷で、あなたのお出でなさるをお見うけ申しましたが、御遠慮いたしてをりましたけれど、ちよつとお伺ひ申して往のてて、あつちやの座敷に待つてでござりますわいな。」ごけ「アノあら吉が來てかいな。コレハ河四郎さん、有り難うござります。皆さんこれはえ、ハイさよなら。」ト俄に立つて行く。彌次郎は呆氣に取られた顔をして、そは〳〵として、挨拶もそこ〳〵、番頭引連れて「コリヤ何のことだ。モシ、あら吉たア何の事でござりやすね。」かはちや「アリヤあらし吉三郎というて、今での立物、年は若し男ぶりはよし、大阪一番の役者

ぢやわいな。」彌「ハア、そんなら後家どのが、にはかにうろたへて立つていつたは、その役者に惚れてゐると見えるわえ。」かはちや「さよぢやあろぞいな。」左平「コリヤア彌次さん、いかいお力おとしぢやわいな。」北「ハヽヽヽ、おもしろえ〳〵、コウ彌次さん、こゝへ來がけに見たら、このちつと先に髪結牀があつた。おめへ今行つて髪月代でもして來ねえな。」彌「何とでもいやァがれ。」ト面ふくらして小言いつてゐる内、番頭又出で來りて、「河四郎さん聞きなされ。これぢやさかい、わしや心づかひぢやわいの。アノあら吉がえらい贔屓ぢやさかい、幸ひのこつちや、これからあら吉と一緒に、船でもういぬさかい、わが身は一人歩いていねてて、わしばかりまかれましたわいな。もう御相談の事もあかん話ぢや。お先へ參りましよ。どなたもこれにござりませ。」ト挨拶そこ〳〵にして出て行くと、やがて奥座敷から庭におりて、かの後家はあら吉を伴ひ、腰元下女打連れて、何やらおもしろさうに笑ひさゞめきて出かける體を、こなたより見て、左平「アレ〳〵、あら吉はなるほどえい男ぢや。」彌「アノ黒仕立の野郎か。ナニあれがいい男。くそが呆れる。色のなまじらけた、日影の瓢箪見るやうなしやつらだ。」仲居「おまいさんそないにいうてぢやけれど、あないなえい男は、やつとはござりませんわいな。そぢやさかい、あら吉に惚れん女は、大阪ぢうには無いわいな。」北「アレ〳〵、彌次さん見なせえ。何か後家めがさゝやいて、こちの方へ指をさして笑つてゐるは、大方おめへのこつたらう。」彌「いめえましい。河内屋の親方、お前が恨みだ〳〵。」ト無上に愚痴をいつて口惜しがる。後家は委細かまはず騒ぎつれて出てゆく。彌次郎うらめしげに、「モシ〳〵、わつちらももうけ

へりやせう。」かはちや「えい事があるわいな。私が船待たしてあるさかい、皆一緒に乗つて、敵等が船の邪魔してやろかいな。」彌「コリヤいい思ひつきだ。サアそんなら出かけやせう。」左平「しかしお待ちなされ。どうぢややら雨が落ちて來たぢやないかいな。」彌「雨でも槍でも頓著はねえ。サアお立ちなせえ。」ト一人氣をもみ、先へ出かけるところに、時ならぬ雷、彌次郎の頭のうへにて、「ごろ〳〵〳〵」みな〳〵「コリヤやくたいぢや。」彌「くはばら、くはばら。」ト うろたへて轉げもどる。此のうち雨は次第に大ぶりとなり、電光すさまじく、雷はしきりに鳴りつゞけ、雨戸をくるやら窓をしめるやら、三文字屋の家内の者も立騒げば、みなみな一つ處に寄りかたまり、北「コリヤとんだ目にあつた。此の雷鳴で羨ましいはあら吉だ。今頃は船の中で、ごろごろぴつしやりといふ度に、アノ後家めが、オヽこはなぞと、しがみつきをるだらうの。」かはちや「ソリヤさうはかいの。アノ後家はあら吉にえらはまりぢやといふこつちやさかい、この雷鳴を幸ひに、食ひついたり引づついたり、放れはしよまい。」北「さやう〳〵。アノ又後家が額付きや生下りの鹽梅では、堪へられめえ、のう彌次さん。」彌「拜むからもういつてくれるな。」左「ソレ又光つた。」かみなり「ごろごろ〳〵。」北「オヽこはやの。」ト後家の物眞似して彌次郎に抱きつくと、突きとばして、彌「アイタヽヽ。エヽ何をしやァがる。あ痛〳〵。」北「コレ、どこが痛え。」彌「この風呂敷に包んだ天狗の面が、痛くてこたへられねえ。」北「ハヽヽヽ、コリヤその筈〳〵。」左「時に、雨は止んださうぢや。この間、ちやと船へ出かけましよかい。」彌「サア〳〵、早くめえりやせう。」ト一人せきこみ、先に立ちて、玄關の方へ出かけると、大そうなる雷光、「ひかり〳〵」かみなり「ご

ろごろ〳〵ぴしや〳〵〳〵〳〵。」ト頭の上へおちかゝる如き大雷鳴に、彌次郎わつというてそこへへたばり、顔をしかめて、「あいた〳〵〳〵。」左平「何としたぞいな。」彌「エ、、何としたどころか、へし折れた〳〵。」北「なにをへし折つた。」彌「いまのぴしや〳〵で、はつとへたばつたはずみに、かの天狗の面の鼻柱が、ぽつきりといつたやうだ。あいたあいた〳〵。」ト金玉をかゝへて痛がるゆゑ、みな〳〵をかしさ、どつと打笑ひて興に入りけるうち、ほどなく雨も雷鳴もやみ、空も青雲となりたるに、かはちや「嬉しや天氣になつたさうな。ナント最一ぱいづゝ、わつさりと飲み直していのわいの。」ト又あらたに肴を取寄せ大笑ひとなり、おの〳〵よきほどに酒汲みかはし、それより打連れて長町へと歸りける。斯くて彌次郎兵衛北八は河四郎の方にまた〳〵逗留して、所々殘る方なく見物したる内にも、二人とも江戸氣性の大腹中にて、かかる難澀の身をへちまとも思はず、洒落とほして少しもめげぬ樣子に、河内屋の亭主大きに感心し、衣類など新しく著かへさせ、路用も十分に持たせ大阪を出立させけるゆゑ、此の度は木曾路にかゝり、草津の温泉に一廻りあそび、善光寺へまはり、妙義榛名へ參詣し、めでたく歸國したりける。此の紀行は追つて著すべく、まづこゝにて筆をさしおき畢んぬ。

道中膝栗毛八編

木曾街道續膝栗毛

木曽街道續膝栗毛三編叙

飛ざ栗毛の楽屋を覗んだ

酒なら知恵ならば

縁元より里ハ舞目

替きて
あかやう笑ハしく



さいちぢ

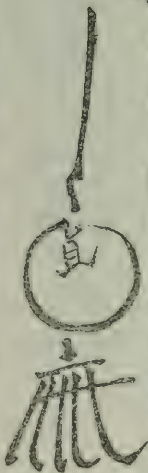
はなる　鳴呼（あゝ）

茶（ちや）売るの姉継ぎて化

壬申のふしし

者（もの）の肖乃はずろ長（なが）き夏（なつ）蓋（ふた）の親（おや）に

ゆく例（れい）の化（ばけ）ちしまく申



木曾街道 續膝栗毛壹編

東都　十返舍一九　著

笑ひの中に刃を研ぐといひしは、ぐつと昔の事、いやましに治まれる御代のありがたさは、一腰の脇指さへ、抜かぬやうにとつめをかひ、生酔ひも本性違はず、すつはぬきをせざれば、往來の乞食銚ものにあふ氣遣ひもなく、大道にあげまたうつて、高鼾かく世の中、千早振神代から備へつけし、人身御供も小豆餅にかへて上れば、とてものことに砂糖かけてと、氏神も紅の舌打したまひ、漣や湖水をわたる山王の神輿さへ、血を見ずに御機嫌よく、熊坂が物見の松も名のみ殘り、鳥居本の赤玉馬の疝氣にも妙薬なりと、とはうもなき事まで考へつける人のこゝろの長旅に、足曳の山留して、朝もよひ木曾街道を心ざし、今や東都へ歸り道なる、彌次郎兵衛きた八は、播州路よりすぐに尼が崎から、神崎のわたしをこえて、山崎街道を伏見に寄宿し、あくればこゝを立ち出でて、早くも札の辻なる追分町にぞ出でたりける。〔ちよと御ことわり申上けます。〕去春の二編には、此の兩人宮島どまりまでをあらはしたれば、今年は備前路より播州めぐりのところ、作者思ふことあれば、省畧していつそくとびに木曾かいだうをしるすものなり。此處は名にあふ大津繪の名物、みすや針十露盤など、家ごとにあきなふ見

えたり。

筆勢を見世にならべて商内も時に大津の得ものなるべし

爰は京と伏見との追分にて、往來賑はしき處なれど、此の程より降り續く雨に、人の心もしめりてもの寂しく、ひきつるゝ車牛のたり〳〵。牛かた「シッチョ〳〵。」馬士うた「馬は戻つたに、與作めは遲いのうコレ。關の小まんが留めたのか。ナ、サほんまにさうぢやにえ。ア、えらうふりくさる。ナント旦那衆、道がわるいに、草津まで乘つて下んせんか、岩馬ぢやさかい、浮雲氣はないわいの。」彌次「そのかはり、埒のあかねえことは請合だらう。北八、いつぱい呑んでいかうか。」北八「ホンニ雨のふるせいか、さむくてならねえ。むかうにとりたての鮎が見える、あいつを鹽燒にして、熱燗でやらかしてえの。」彌次「とんだ事をいふ男だ、是れから江戸まであてはめた路用、めつたに奢つてつまるものか。」トいふはもとよりありあまるほど、たくはへ出でし路用にもあらず、みち〳〵さま〴〵のさいなんにあひて、壹文なしとなりたることあれども、人のなさけにやう〳〵と、あてはめしうちがへの、ふところさびしくなりたれば、おのづからげんきもなく、よわりはてて、「それだからおいらが飮まうといつたはこれだ〳〵。」トあまざけやへはひる。北八「こいつはをさまらねえ。」彌次「よくふりやすの。」あまざけやのおやぢ「アイサとかく論議がむつかしいわいの。」彌次「あまざけはいつぱいいくらしやす。」おやぢ「八文じやわいの。」彌次「いつぱいくんなせえ。北八てめへと、半分づゝのまう。」北八「おそれることをいふ、おいらアいやだ、おめへひとりでやらかしなせえ。」彌次「そ

れはありがてえの。」ト あまざけちゃわんを兩はうの手にかゝへてのみながら、「コリヤあつたかでうめえ／＼、ときにとつさん、お前の處は小ぢんまりと、なか／＼いい普請だ、あそこにゐるはおめへの處の子供衆か。」おやぢ「アイ、わしの孫どもぢやわいな。」彌次「おめへ息子どのがありやすか。」「さよぢや、孫があるさかい、むすこもあるぢやあろぞいな。」彌次「ソリヤ厄介がおほくて、おめへ大ていのことぢやァあるめえ。」此のくらゐにくらして、月にいくらほど入りやす。」おやぢ「アイどうしても、三拾匁と四拾匁なうては喰へませんわいな。」彌次「さうだらう、こゝの地代はいくら出やす。」おやぢ「アイ年貢が一年に貳百目たらず。」彌次「ソリヤァ五節句ばらひかね。」おやぢ「イヤ盆と暮と二季ぢやわいな。」彌次「それはゆるりとしたものだが、急度その二季には、間違ひなく勘定が出來やすか」おやぢ「アイ出來やすとも。」彌次「合點がいかねえ、萬一滯ると地たてだが承知かね。」北八「ハヽヽ、なんのせわにもならねえことを、おめへこゝの地主ぢやァあるめえし、たつた八文の甘酒で、家内中の店おろしをするとはやすいものだ、サァいかうぢやァねえか。」彌次「まて／＼たばこも呑みてえがさつぱりしめつて火がつかねえ、とつさんいつぷくくんなせえ。」おやぢ「アイきつうてもよいかいな。」彌次「ドレ／＼いいたばこだ、きた八手めへも呑まねえか、サァいきやせう。」おやぢ「コレナ甘酒の錢が壹文足らんわいな。」彌次「壹文は今のたばこの代にさし引く。」おやぢ「ハァさうかいな、ようござりました。」ト こゝを立ち出て大津の町を打過ぎたるに、湖水まん／＼として八景ひと目に

見えわたるけいしよくまことに言語にはのべがたし。

風の手にかきならしたる琵琶の湖これ八景の外の一藝

かくて膳所の御城下を打過ぎける時、十二三歳ばかりの前髪、犬をけしかけながらかけ出してゆくひやうしに、何やら紙に包みし物をとり落したるに、カラリンとなるおとしければ、彌次郎はしりつきて拾ひとり、跡先を見まはし、たちまちにつこりと笑ひて、ふところへねぢこむを、北八ちらと見つけて、北八「すヤなんだ／＼。」彌次「いいものをひろつた、コレそつとおいらがふところへ、手を入れて探つて見や。」北八「ドレ／＼、ヤア小判だな／＼。」彌次「オツト密かに／＼、ナント天道さまはよつほど氣がきいてゐるぢやァねえか、定めて不自由だらうとお授けなさつたものを、無足にするもおきのどくだから、さきへいつて、何ぞ美味えもので一杯やらうか。」北八「ソリヤ奇妙頂禮往來、またもや御意のかはらぬうち、急ぎやせうか。」トゆく程なくやがて瀬田の長橋にいたる。此處はたはら藤太が昔三山上のむかでを、たいぢせし處なりといひつたふ。

其のむかしばなしを今もみかみ山蜈蚣の足に似たるはし杭

はるかに石山寺の觀世音をふしをがみて、

あらたなる佛の利生仰ぐなりこゝもあふみの要いし山

瀬田の町の兩側に、茶屋軒を並べて、呼びたつる女の聲々、「あなたこれへおはひりな、おしたくな

さらんかいな、名物のしゞみ汁に、鰻のつけやき鮒のおさし身もござざります、おやすみなく〳〵。」北八「サア彌次さん、今のをこゝで奢らねえか。」彌次「うなぎとしやれよう、アイ御めんなせえ。」トちや屋へはひる。茶屋の女「わるいおひよりでござります、御酒なとあがりなさらんかいな。」彌次「さけも喰はうし飯も呑みやせう、なんでもうなぎをありたけ出しなせえ。そして外には何がある。」女「しゞみ汁に、もろことうき菜のおひたし、宇治芋の煮〆もござります。」彌次「なんでもいいから、酒をはやく出してくんなせえ。」ト此のうち女くちとりさかなに、てうしさかづきをもちいづる。彌次「ドレはじめよう、さけはなか〳〵いい酒だが、この蜆はがうてきにかたい〳〵。」北八「かたいはずだ、おめへ貝ぐちかじつてゐるぢやァねえか。」彌次「ホンニさうだつけ、時に北八差さうか。」北八「コレあねさんついでくんな。とかくたほの酌でなければ、のめん夏の蟲ときてゐる、ノウあねさん。イヤがうせいにふくれた尻だな。葭町新道の外科醫者に見せたら、おくふかで膏薬が張りにくいと、小言をいふだらうに。」彌次「へ、こまいかきが、きせるを忘れて來やアしめえし、もつてまはつたしやれをいふぜ。」ト此の内いろ〳〵肴もいで、飯もかばやきもさう〳〵やたらにとりこんでしまひ、北八「サアこれでちつとばかり人間のやうな心もちになつた。」彌次「モウいいか、御亭主さんおせわながら、これを取替へて勘定してくんなせえ。」トくだんの拾ひしかねを、つかんだまゝさしいだせば、ていしゆ走りよりてうけとり、ひらき見て、「ハ、アなんぢや、瀬田村雀屋忠兵衛倅忠吉、コリヤわしがとこのちつさめが迷子札ぢやに、ハ、、、ありがたうござり

ます。さきほど子供にいひつけまして、膳所の町の錺屋から、とつてかへりがけに、ツイおとしたと申しましたが、あなたがたがおひろひなされてくだされたは、こちの仕合、おかたじけなうござります。」トむしやうにいたゞいて、喜ぶていに彌次郎きもをつぶし、「ナニ、ソレハ迷子札か、ドレ見せなせえ。」ト手にとつて見るにちがひなし。北八「ヤアこいつはとんだことだ。」彌次「とんだかはねたかしらねえが、コリヤ大變な目にあはせる、北八どうしたらよからう。」北八「おめへもそゝつかしいものだ、よく中をあらためて見ればいいに。」彌次「いめえましい、御ていしゆさんこゝはいくらだね。」ていしゆ「ハイ六百七十文でござります。」彌次「エ、しかたがねえ。」トぶつ〳〵こごとをいひながら、かんぢやうしてこゝをたちいづるに、北八をかしく、

　拾ひものせしかはりとてむだな錢すてしはよくにまよひ子の札

かくて雨はいよ〳〵降り頻りて、桐油をとほし、骨までもくさるばかりに、方言も洒落も出でばこそ、やうやく草津の姥が餅屋にぞいたりける。もちや「おはひりなされ、名物のうばが餅あがらんかいな。」彌次「いめえましい、此の雨はいつあがるやら。」草津の宿ひき「根わたしの吹くうちはふります、今にとい出になつたら止みましよかい。あなたがたはどつちやへおこしなさるやら知らんが、此の頃中の雨で、曲川は大水、中山道なら守山手前の砂川も安村も、先刻とまりましたさかい、當宿へおとまりなさりませ。」彌次「ヤァ川がとまつたとかえ、ソリヤァとんだ番くるはせだ。」やどひき「わたくし方

は駕籠や太郎兵衛と申します、どうぞお宿をお願ひ申します。」北八「わつちらア、定宿があります。」宿引「さよでもござりましよが、どつちやへお出でなされても、川支へでおさし合ひがござりますさかい、私かたは隨分綺麗で、おはたごも安いたしましよ、何ぢやあろとあれへおこしなされて、宿を御覽じたうへ、お氣に入りましたらお願ひまうします。」彌次「おめへさういふなら、マア見てからのことにしやせう。」トやど引を先に立て行くほどに、くさつのしゆくをなかば過ぎると、彼のやどやといへるいへの前にいたりて、やど引「これでござります、サアおはひりなさりませ。」北八「ナント彌次さん、家臺骨はがごうてきだが、をさまらねえ内だの。」やど引「イヤあなた方はおいくたりさま。」彌次「たつたふたりづれさ。」やど「さよならずゐぶんをさまります、わたくしかたは、五十や百のお客はいたしますさかい。」北八「イヤおめへさういつても、ナア彌次さん、からつきり出入は出來ねえぜ。」やど「ハテ御らうじるとほり、見せからなと玄關からなと、御勝手次第に、出入りは出來ますわいな。」ト此の内しぶ皮のむけたきいたふうの女はしり出て、彌次郎のそでをひつぱり女「モシナそないに御思案なさらずと、こちへおとまりでないかいな。」トひきずりこまれてたちまちぐにやとなり、彌次「わつちはどうでもいいけれど。」女「さよならあなたからおきはめなされ。」トまた北八が手をとりて引きこむ。北八「いかさま此の降るのにまごつくでもねえから、とまりやせう。」女「サアおみあしをお洗ひなされ、おひよりがわるござりますさかい、さぞ御難儀なされたぢやあろ。お脚半はあらはせましよ、そこにほつたらかしておきなされ。」ト此のうち

二人はあしをあらひて上へあがると、ていしゆ「せんこくお宿割がお出でで、奥はおとまりがござりますさかい、御窮屈にはござりましよが、二階へおこし下さりませ。コリヤおさん、御案内申さんかい。」おさん「こつちやへお出でなされ。」ト十二三歳ばかりのうそよごれた小女が、たばこぼんかた手にさげて二人を二かいへつれてゆく。彌次「コウむすめ〳〵、アノいろのしろいうつくしい女中は、こゝのかみさまかなんだ。」おさん「イ、エをなごしゆぢやわいな。」北八「それにしてはきれいだの、なんでもこゝの宿ろくめが、とつてしめるのであらう、ノウおむす。」おさん「オホホ、、わたしや知りませぬわいな。」彌次「なんにしろ。あいつたゞはおかれぬしろものだ。」北八「おしのつえゝ、またはじめかけたわ。」ト此うち下よりていしゆきたりて、「さぞお草臥でござりましよ、お風呂もおつけよござります、明日はどうやらお天氣でござりましよ。しかし川はことのほかの大水でござりますさかい、明後日ならではあきますまい。さいはひ明日は矢走の鞭崎八幡、御祭禮で、わたくしはいづれ世話やきにまゐりますさかい、お日和なら御參詣なされ、お供いたしましよわいな。」彌次「それはどうぞ參りやせう。」ていしゆ「サアおふろへおめしなされ。」ト勝手へおりてゆく。彌次郎もおりて湯にはひる。女「モシおぬるうはござりませんかいな。」彌次「アイお邪魔ながら少し焚いてくんなせえ。」女「ハイかしこまりました。」ト風呂の下をたきつける。彌次「コリヤありがてえ、しかしおめへのやうなうつくしい人に、わかしてもらつて入つたら、此のからだが、よこつちやうへつん曲るだらう。」女「オホ、、、じやら〳〵した事おつしや

るわいな。」 彌次「イヤじやらく でねえ、ほんたうの事さ。今宵こゝにとまつたも他生の緣とやら、おめへどうぞしてくれる氣はねえか。」ト いちやつきかけるうち ていしゆのこゑにて、「おつめや〱 はやう來さんせ。」ト 呼びたてられ ちもとから、ぞく〱 して、湯よりあがり、二かいへもどりて、 彌次「サア北八はひらねえか。」 北八「いま手水にいつて聞いてゐたら、おめへ何だか、かの女めといちやついてゐたな。」 彌次「どうでもこゝの亭主めが、抓んでけつかるやうだ、業はらな。」 北八「さうさ、今小をんなめが來たから聞いたら、こゝには女房がないさうだから、何でもきやつめを、おこなつてゐるに違ひはねえと、來た時から白眼んでおいた。」 彌次「うつちやつておかつし、今においらがやど六めに鼻をあかせて見せようから、マア湯に入つて來さつし。」ト 此の內、北八湯にもはひつてしまひ、膳も出てすみければ、彌次郎は下へ手水にはくと、れいの女來りてとこをとる。 北八「コウ女中、ナントおめへにはなしがあるが、後にそつと來てくれねえか。」 女「オホヽヽ、おありがたうござります。」 北八「イヤじやうだんぢやァねえ、ほんたうに。」 女「わたしの處は旦那さんがやかましうて、そないな事はでけんわいな。」 北八「ハヽァそれでよめた。おめへ旦那と色事だな、コノ畜生め。」ト おもいれつめると、女またつばりかへすその手をとらへ、 北八「コウ旦那がやかましくばいいことがある。あしたは矢走の八まんとやらへ、旦那がおいらをつれていかうといつたから、そこでわつちが作病をおこして、つれの男ばかり、旦那と一緒にやつてしまつて、ひとりあとに殘らうから、その時そつとはなし合ひは出來めえかね。」 女「オヽ、をかしや




感和亭鬼武

の。」北八「イヤサわらひごとぢやァねえ、承知か／＼。」女「アレサマアこゝはなしなされ、オ、いたいた。」ト此のうち、ていしゆばたばたとはしごをあがり、「コリヤ／＼、おつめ、何をしてゐる。おとこのべたらあつちやへいかんかい。是れはあなたもうお休みか、明日はどうやら日直りさうでござります、八まんへお供いたしましよ。」北八「アイつれの男が、是非參りたがつてゐますから。」ていしゆ「さよならマアおゆるりとお休み。」トいひ捨ててかつてへおりてゆく。彌次郎此の内てうづよりもどりて、そのまゝ打ちふしたるが、寐入りたるふりをして工夫をするに、いろの道から出る思案、おなじおもひつきにて、あすの八まんさんけいに、ていしゆと北八ばかりをやるつもり、なんでもさくびやうをおこして、あとにのこらんとおもひつゞけて打ちふしたるが、雨の日のたびづかれにや、ふたりともひとねいりにして、あくる朝おき出でたれど、彌次郎わざとかほをしかめ、づつうがしてはらがいたいと、くひたいあさめしをこらへてくはず、つくり病の下ごしらへをするに、北八それとはこゝろづかず、彌次郎をていしゆにつれさせ、その身ばかりあとにのこるさんだん、どうぞしてきふに人の目にたつやうなわづらひをしだしたいものだと、さま〴〵にくふうし、きつとおもひつき、なんでも二階のはしごから、わざとおちてけがをせしていにもてなし、あとにのこらんとて、やがて手水におりしなに、箱ばしごのふたつめから、わざと踏みはづしてころげ落ちたりしが、ほんたうにこしのあたりをしたゝかうつてこらへられず、北八「あいた／＼／＼／＼。」ていしゆ「ヤア／＼どうなされた、コリヤたれぞ水もて來いやい、はやう／＼。」女「ハイ／＼お顏へふきかけましよかいな、ブツプツププ／＼。」ていしゆ「ヤイおれが顏へ吹くのぢやないわい、エ、水だらけにしをつた。おつれさまはどうぢやいな。」トていしゆ二階へかけあがりて見れば、彌次郎もはちまきして蒲團にもたれうなつてゐる。ていしゆ「イヤあなたもどうぞなされましたか、今おつれさまが階子から落ちなされて、大騒ぎでござります。」彌次「ナニ怪我でもしやしたか。」トおどろきながら、飛んで出られもせず、やつぱりせつなさうな顏をしてゐる内、男ども二人して、北八をかきいだき、やう／＼と二かいへ連れてあがると、ていしゆ「これはこまつたものぢや、

お客さまがおふたりながら、此のていぢやに、私もけふは、八まんさまどころではない、なんぞおくすりはござりませぬか、醫者でも呼びにやりましよかいな。」トさま／＼かいはうするに、北八はやう／＼氣がはつきりとはなりたれども、心のうちにばかばかしく、わざとせし事おもひの外、ほんたうに腹のほねいたみ出し、苦しがるに、彌次郎もつくり病に朝飯もくはず、ひだるい目をするだけ、ねからうまらず、あきれはてたる顔付なり。彌次「コウ北八、どこぞ痛むか、おいらは大分よくなつて、がうぎに腹がへつてきた。」北八「ア、とんだ目にあつた、あ痛／＼／＼／＼。」ていしゆ「お腰がたちませぬか。」北八「アイどうも痛んでのされませぬ。」ていしゆ「骨でもまがつたもんぢやあろ、鐵槌でなとたゝきなほしてあげましよかい。」彌次「イヤそれより左官をよんで、鏝療治をして貰ふがいい。」北八「人の心をしらずに、茶ばかりいはずと、どうぞ醫者どのをよんでくんなせえ。」ていしゆ「さよなら幸ひ近所に骨繼ぎがあるさかい。」ト下へ醫者をよびにゆくと、彌次「エ、つまらねえ目にあつた。」北八「おめへよりか、おいらは痛いめをするだけうまらねえ。」トたがひにむねのもくさんちがひしことを、いはずかたらず心のうちには、をかしいやらばからしいやら、ぐわいぶん悪く、人にはなしもならぬ仕やはせ、あきれかへりてゐるうち、下より、そう髪の醫者さま、びんらうじの布子に、おなじはおりを著たるが、しかつべらしく來り、醫者「おれうぢはどなたぢやいな。」北八「ハイわつちでござりやす。」醫「はしごから落ちなされたさうぢやが、先づお脈を見ましよ。ハヽア是れはむづかしい、とくにお見せなされればよいに、時過ぎると療治がいたつて面倒でござるわいの。」北八「イヤ時過ぎたのではござりやせぬ、たつた今落ちたのでござりやす。」醫「ハテその落ちぬさきにお見せなされればよいに。」彌次「さやう／＼、全體此の男が氣がき

かぬからのことでござりやす　落ちるならそこへ蒲團を二ツ三ツも、重ねて敷いて貰つて、その上へおちると、怪我はいたしやすめえに。」北八「イヤおれよりか、こゝの内がわりい、どこの國にか、二階へ階子をかけておくといふ事があるものかえ。」醫「畢竟腰を打たれたればこそ、もし首の骨でも打折つて見なされ、たちまち命がないに、死んだ者の療治ならお斷り申す處、貴公はまだ御仕合といふものぢや。しかしこれは骨の折れたのぢやさかい、骨繼ぎの療治いたさずばなるまい。」彌次「骨の折れたのは、兩方を繼ぎ合はせて釜へ入れて、燒いたらつけやせうか。」醫「それは燒繼ぎの事でござろ。瀨戸物と人間とは違ひます。」彌次「アノ、人の骨の折れたのもつけますかね。」醫「つけるとも／＼。」彌次「ほんたうにかえ、合點がいかねえ。」醫「ハテちかい證據は、繼木をすると同じこと、柹の木の臺に梅でも桃でも、切口を合はせてしつかりとしばりておくと、自然と繼げる道理でござる。」彌次「ハ、、ハ繼木をするには、其の時候があつて出來るもの、人の怪我はいつなんどきしようか知れねえものだから、そのわりにはまるりやすめえ。」醫「そこがれうぢでござるわいの。」彌次「イヤ／＼、どうも呑み込めやせぬ。」醫「ハテそこもとは素人で、何も知らぬくせにちよこざいな。」彌次「ナニちよこざいとはなんの事だ。此の藪醫者めが。」醫「藪醫とは舌長なほいとうやらうめ。」彌次「ふてえやつだ、よこつ面アたゝきいがめるぞ。」ト腕まくりして、たちかゝれば、醫者きもをつぶして、そう／＼下へにげ行くを、彌次郎おつかけ行かんとするに、北八たつてとめようとして、北八「アイタ

タ、、、腰がまがつてまつすぐにはのばされねえ。コウ彌次さん、どうしたものだ。折角醫者が來たに、おめへいらざる事をいつて、ほい返してしまつたからつまらねえ。」ト此の内ていしゆかけてあがり、「モシ／＼なにかしらんが、醫者どのはほてたつて往なれましたが、さいはひ今奇妙な法印が見えまして、それはおれが加持してなほしてやろといふてでござりますが、どないになされますぞいな。」北八「どうぞそれはおたのみ申しやせう。」ていしゆ「さよなら唯今。」トかつてへおりたち、すぐにかのほふいんをつれて來る。北八「是れは御苦勞でござります。こんなに腰がまへのはうへかゞんでのされませぬ、どうぞこのからだのまつすぐになるやうに、御祈禱をおたのみ申しやす。」法印「こゝろえました、その腰のかゞんだのを忽ち祈りなほしんぜましよ。」トふろしきづゝみより、ころも出してひつかけ、ときんをかしらにいたゞき、しやくぢやうをふりたて、「そも／＼山伏と申すは、山にねふしをする故に山ぶしなり。此のときんは布切七八寸まつくろに染めひだを折つてかしらにいたゞく、頭巾の地口に依つてときんなり。又此の數珠は、いらたかではなうて、ほし見せにてえらう高う買うたゆゑ、えらたかのじゆずと名づく。かほど尊き山伏が、ひと祈り祈るものならば、などか奇特のなかるべき、ほろほん／＼／＼。」北八「コリヤ奇妙だ、かゞんだ腰がだん／＼とのびてくる樣だ。」彌次「ホンに最ちつとで眞直になるぞ、ソレ／＼もう少しだ。」法印「ほろほん／＼。」彌次「そこらだ／＼。」法印「ほろほんほろほん。」北八「エヽ、情ない、餘りいのりがききすぎて、うしろの方へ反つて來た。」ていしゆ「コ

りやなるほどいのり過ぎたのぢや。」法印「とかくわしの行力はききすぎる。しからば此の度はうしろのはうから祈り返してやりましよ。ぼろぼん〳〵。」彌次「そこだ〳〵。」北八「ア、コレ〳〵、又いのり過ぎて、前のはうへかゞんだ。」法印「そんなら又まへのはうから、ぼろぼん〳〵。」ていしゆ「ソレもうよいわい。イヤまたうしろへ反りかへつた。」北八「エ、この山ぶしめは、なぜ人をてうさいばうにする。」法印「イヤいのるのぢや。」北八「いのるもすさまじい、お猿の米舂きを見るやうに、前の方へかゞんだり、うしろへそらしたり、どうするのだ賣主めが。」法印「ナニまいすとは、もう〳〵祈禱はしてやらぬ、勝手にせい。」トれいも數珠もしまひてぶつ〳〵小言をいひながら、二階をおりると、北八後へそつたなりに、つつぱり返りて「コリヤヤイ、どうする〳〵。」彌次「ハ、、、、こいつはなる〳〵おもしろえ。」「イヤつまらねえことをした。」トもつけなかほをしてゐるところへ、女かけあがりて、「モシ〳〵唯今川があきまして、御狀箱がとほりました。」ト知らせくるにいよ〳〵氣をもみ、にはかにあんまをよび寄せ、もんでもらひなどして、やう〳〵の事に腰の痛みもなほり、もとの如くになりければ、やがていそぎしたくしてこの處をたちいでけるは、その日の九ツ時なりける。

うき戀の病つくりし狂言にどつとおちくる箱ばしごから

かく打興じて安村川にいたり見れば、高水にて舟わたしなるゆゑ、こゝをうちわたりて、鏡山の立場を打ちすぎ、砂川ちかくなりければ、彌次「イヤむかうにまた川が見えるが、橋もねえは歩行越しと見えた。」北八「それにしては川ごしが居ねえの、こいつははじまらねえ。」彌次「アレ〳〵川下を人がわた

つてゐる。おいらも彼處を越さうぢやァねえか。」北八「さうさ、きつい事アねえ、やらかしやせう。」ト川下へゆきて見れば、さきへ川をわたる男、きものを帶にてぐる〳〵まきて、あたまのうへにさしあげ、わたりゆきしが、中ほどへゆくと、肩のあたりまで水にひたり、首ばかり出してこえるやうすなれば、彌次「ヤア見さつし、アレあの通りだから、はだかにならざァなるめえ、ちとあやまりこのところゝ汁だ。」北八「いいわな、しかたがねえ、なにもはなしのたねだ、はだかになつてこしやせう。」ト北八そのまゝ帶をときはだかになれば、彌次郎もそのとほりにして、きものをくる〳〵まき、あたまの上へさしあげ、川へはひりて川上のかたを見れば、大ぜいのもの川ごしのかたくるまにて越しゆくやうす。さてこそ大水にて、川のこし場いつもとちがひたるにやと思へど、さうではなくて、彌次郎北八はひとり越してゆくものを見あてに、川下へさがりたるなり。川上はさのみふかくも無きと見ゆるに、彌次「コリヤとんだ事だ、あつちが往來の越場と見えるが、肩車で越すからには、そんなにふかくはねえと見える、どうして道を間違へたやら、まゝよ、わたりかゝつたものだ、サァ來い〳〵。」トいひつゝ、だん〳〵と川中へわたりかゝるに、さのみ川はふかくなし、やう〳〵とひざのあたりまで水つきけるに、北八「コリヤどうだ、さきへわたつた男は、ちやうどこゝらへ來ると、首だけであつたが、ァ、寒くてならねえ。」ト此の內、川上をわたるものどもも此の二人を見て、「ワァイ〳〵狐にでもつままれくさつたか、あはうよ〳〵。」北八「エエ何をぬかしやァがる、べらぼうめらが。」トからかひながら、なんなく川をむかうへ越したるところ、ひざの下までやうやく濡れて、寒さはさむし、かた〳〵とふるひ出し、きものを著ながら、さきへ越したるものを見れば、手に下駄をはきて、はひずりゆくゐざりなりけり。彌次「ハヽヽヽ、北八見さつし、さきへこしてうせをつたやつは、首だけはまつたも道理、あのとほり躄であつたは。」北八「ホンニなあさうとは知らず、あいつが瀨ぶみに、おいらをとんだ目にあはせをつた。ハヽヽヽ。」

瀬ぶみするはゐざりと知らでわたり川これにはまらぬものはあらじな

かくて守山武佐を打過ぎて、相の宿清水がはなといふところに到りし頃は、はや日暮れて、行くさき覺束なく、殊に足も勞れければ、相應の宿をもたづねて、一夜の夢を結ばんと、こゝかしこもとめあるくに、草籠を脊負ひてもどる男、二人を見付けて「コリヤお前方、泊りぢやないかい。」彌次「いい宿があらばとまりてえ。」男「こゝは相の宿ぢや、えいやどぢやアて、たけが知れてありよる、こちのうちへとまらんせ。」北八「なんだか今日はがうせえにくたびれた。彌次さんどこでもいい、たかが一夜のことだから、早くとまつて休まうぢやアねえか。」彌次「そんならモシおめへのところは。」男「マアこち來さんせ。」ト連れてゆくは、しゆくはづれのいかにもむさくろしき小家にて、六部じゆんれいなどのきちん宿なり。女房「おとまりかい。」ていしゆ「サア〳〵上らんせ〳〵。」彌次「こいつは大變なうちだ　せめて女でもいいのがあればいいが。」ト見やる女房は髪の毛にあぶらけたえて、かほもからだもふしくれたち、うそよごれたなりにちのみ子をはだにつけて、いろりの火をたきながら、はな水をたらしてゐる　北八「コリヤをさまらねえわ。」ていしゆ「モシ雜炊なと焚こかい、たゞしおまいがた、もらひためた米があるなら、めし焚かせなされ。」彌次「ナニもらつた米があるものか、おいらを乞食だとおもふさうだ。」ていしゆ「ハテほいとうぢやないかい、是れはしたり、そしたら、はたごでとまらんすか。」彌次「知れたことさ、えどつ子だものを。」ていしゆ「さうかい、しかし、なにもあげるものがない。コリヤおかたどうまんの燒干があるぢやろ、琉球芋なと

入れて焚かんせ。」女房「サア〳〵お客様、いろりのねきへつつとよつてあづくみなされ。」ていしゆ「おまいがた荷物がないうへ、そないにしゆみたれたなりしてぢやに、わしや抜けまゐりの杓ふりかとおもうた、堪忍なされ。」彌次「いゝえましいことをいふ、いかにわつちらがこんなふうをしてゐたればとて、侮りがましい。モシお邪魔ながら、あすの朝まで是れをあづかつてくんなせえ。」ト かねて彌次郎がどこぞで見えをすらうとおもひ、よいかげんの石ころをひろいて、ぐる〳〵と紙につゝみ、かねと見せてうちがへの中へ入れおきたるを取りいだし、こゝにて抜けまゐりと見たてられしをやつきとおもひ、かねと見せてきもをつぶさせんと、うちがへのまゝ、ひきむすびて、ていしゆへわたせば、手にとりてびつくりし、「ヤア〳〵おかねぢやな、こんなものわしどもがあづかつては、夜がよつぴとい寐ねられまい。コリヤおまいがたの方におきなされ。」彌次「イヤ旅では金を持つて寐るは、無用心だから、宿へ預けておくがいいと人がいひやすから、おめへのはうへ置いてくんなせえ。」

ていしゆ「それは迷惑ぢやわい。モシかうしよかい、爰の釣佛壇の中へ入れて置きましよ。コレ見なされ爰におくさかい、あす取つていかんせ、えいか爰ぢやに〳〵。」ト つりぶつだんの障子をあけて、入れておく處を彌次郎に見せて入れおく。此のやどは、ざしきにもだい所にも六疊ばかりのところたつたひと間、おしいれといふものもなく、やぶれしやうじを横にしてかこひたるは、夜具などの置き所と見えたり。ながしもとに、ていしゆと女房何やらぶつ〳〵さゝやき、夜食のこしらへするとて、煮もたくも鍋ひとつ。やう〳〵のことにて出來あがりしと見えて、ていしゆ「サアおかた膳だてせんかい。」女房「めし椀がひとつないさかい、コノ猫の椀なとあらうてもろかい。」ていしゆ「なんでもえいわい、はやうめしもろかい。エエソリヤふところのがりまゐが、小便たれよるさうぢやい、汁の中へほと〳〵落ちるわい。」北八「エ、き

たねえ、モシ小便の落ちた汁は御免だね。」ていしゆ「イヤかきまはさずに、そつとこつちやのはうを盛つてあげよかい。サア／＼おそなりました、あがりなされ。」トふたりへすゑたぜんを見れば、すゝけかへりしゝゆんけいのかくぜんに、わんもかけてふちのはげたるなれば、さすがのふたり、大きにふさぎて、北八「コリヤあやまるの。」彌次「こんな膳にすわるも、前生からの約束ごとであらう、しかたがねえ。」トひだるいときのまづいものなしとやらにて、わんの飯のまんなかの處ばかりを、ちつとづゝくひながら、しるは見たばつかり、ひらのふたをとりて見れば、めうがたけのにしめたる許りなり。彌次「コリヤへんちきだ、汁も平も茗荷の外にやア、何もありやせんか。」ていしゆ「こゝは茗荷が名物で、とりわけわしのところのうらには、早うでけた初ものぢやさかい、御馳走にたいたのぢやわい。」北八「いかに名物だとつて、めうがばかりとはあんまりだ、おめへはたごはいくら取りなさる。」ていしゆ「何もあげんさかい、はたごは百五十でえいわいの。」彌次「おしのつええ。」ていしゆ「その代りこないにむさいうちぢやけれど、ふとんはねから蚤のゐんのをあげましよわい。」北八「蚤はゐねえが虱がたんとゐるだらう。」ていしゆ「さよぢや、虱はやつとをるわいの。」彌次「コリヤとんだめにあふ、そして風呂はどうするね。」ていしゆ「湯屋はこのさきにありよるが、もうしまうたぢやあろ。」北八「とはうもねえ、はたごをとりながら湯もたかねえで。」彌次「手めへがとまらうといつたばかりで、こんな處へとまつてつまらねえ、まゝよ往生して寢てくれうか。」ト此の内、夫婦してぜんをかたづけ、やがてねござ一まいづゝそこへしきならべ、うすきふとんのつぎ／＼なるをうち著せて、ふたりをねさせ、ふうふのものはいろりのはたに、何も著るものなく、そのまゝころりと轉げながら、ていしゆ「あの衆はもう寐入りよつたさうぢ

や、あすのあさもめうがばかりたかんせ、何ぢやあろと、めうがやつとくふと、ものわすれしよるげな、てき等にめうがくはして、佛壇の金わすれさするつもりぢや。」女房「ホンニあの金わすれていんだら、わしがこん中の袷うけてくだんせ。」ていしゆ「そればかりぢやない、ちつさめにも一まい著せてやろわい。」女ばう「そしたら、となりのばゞさまの貳百ももどさんせ。」ていしゆ「麥一俵買うておこかい。」女ばう「わしのいもじもとうからない、紺のきれ四尺かうて下んせ。」ていしゆ「がてんぢや〳〵。」トうなづきあうてのひそ〳〵ばなし。彌次郎きた八はまだ寐入りもやらず、これを聞いてをかしさこらへられず、じつとこらへこゐたりしが、しだいに夜は更けゆけど、やぶれ戸の隙間もる風の冷やかなるに、寐つかれずして、夜のあけるを待ちかねけるが、ほどなく寺々の鐘のひゞきもあけがた近く、はやおもてにはすけがうの馬のいなゝくこゑ。馬「ヒイン〳〵〳〵。」人足の唄「とのせばナアよかつたにナアンァエ、長もちやおウもいナァンァエヨウさうだぞ〳〵。」ト此のうちやどのふうふとも起きいで、いろりを焚きつけ、めしごしらへしてふたりをおこし、ぜんをすゑけるに、よひのほどはひもじかりし故、目をねぶりてすこしづゝは食ひたりしが、けさはいかにしても胸わるく、食うたるまねして、そこ〳〵に支度し、立ち出づるとて、彌次「是れは大きにおせわになりやした。ハテなにか忘れたやうだ。」トいひつゝ立ち出で、彌次郎は此のやどのおもての片かげにたちどまり、せうべんしながら聞きゐるとも知らず、やどの女房、「モシ佛壇のかねわすれていんだか見さんせ。」ていしゆ「がてんぢや、さだめし忘れよつたぢやあろ。」トぶつだんをあけて見て、「イヤァいつの間にやらもていによつた、ハテわすれよるはずぢやが、イヤ〳〵かねはもていによつたが、外にわすれたものがあるわい。」女房「なにをわすれていんだぞい。」ていしゆ「はたごぜにをわすれていによつた。」トはなしをききて、彌次郎はらすぢをよりながら、彌次「ハ、、、、、こいつばかりはあたりで

あつた。」

　宿賃を忘れて來しは名物の宮重至極の仕合々々

　それより三ツまた三軒家を打過ぎ愛知川の驛にいたる。此のしゆく外れより、年の頃六十あまりの親仁、近邊のものと見えて、供の丁稚にふろしきづゝみをもたせ、その身はぱつち尻はしよりにて、あとになり先になりて行くとて、おやぢ「モシおまいがた、お江戸ぢやな。」北八「さやうさ。」おやぢ「お江戸はえいとこぢやげな、わしどもの方から、皆お江戸へ見世出してぢやが、何ぢやろと錢金はやつとあるとこぢやさうな。」彌次「イヤモウ土一升金一升といふ處で、小判小粒がみんな大道にうつちやつてありやす。」おやぢ「ハテ誰もそれひらやせんかいな。」彌次「ナニ貧乏な手合は、兩方へ籠をかついで、竹のさきに蚫貝をくゝりつけたもので、その金をすくつて拾ひにあるくのさ。」おやぢ「そしたらわしも一荷拾つて來て、畑のこやしになとしたいものぢや。」北八「そんなこつちやァねえ、おめへがたに見せてえは、吉原といふところだ。何でも一日に千兩づゝ落ちるといふところだから、繁昌な所だね。」おやぢ「ソリャ肝がつぶれたとこぢやわい。」北八「さうさ、おめへがたのやうな田舍ものが見ると、肝をつぶすによつて、其の吉原にはいつでも、五人十人は肝を踏みつぶされたものが、まご〳〵してるやす。其の筈だ、生きた女郎のゐる處だものを。」おやぢ「ハァ死んだ女郎はないかいな。」北八「ナァニど

この國にか、死んだ女郎を賣るものだ。」おやぢ「イヤそれでも上方でわしのかうた女郎は、死んだ女郎かして、ほんまの石佛抱いて寢たやうであつたわい。」北八「ソリヤお前ふ、られたのだ。」おやぢ「イヤふられはせん、しかもえい天氣の日であつた。」北八「ナニ狐の嫁入ぢやァあるめえし、ハ、、、。」ト此のはなしの内つゞら町を打過ぎ、高宮川にさしかゝりける時、二十四五歳の小野郎小腰をかゞめて、「ネイわしは高宮のえびすやでござります。名物の高宮嶋さらし布を、御用ならわしのとこで買うて下さりませ、隨分おやすう致してあげましよ。」彌次「イヤそんなものは入りやせぬ。」小野郎「お買ひなされずとよござります、マァおこしかけなされて、お茶でもあがりなされ。」彌次「アイ茶もしたゝか呑んで來やした。」小野郎「さよぢやあろか、マァ〳〵休んでお出でなされ、サア是れでござります。」彌次「イヤもう金がねえからはじまらねえ、なんならこつちから賣つてやりてえものだ。」小野郎「ハァあなたさらしをもつてかいな。」彌次「もつてゐやす、業さらしといふさらしをハ、、、。」

買ひもせず名物の名のたかみやに恥をさらしてとほるうき旅

此の狂歌を聞きて道づれのおやぢ、「コリヤでけた〳〵、おまいがたはなか〳〵はなせる衆ぢや。ナニトあこの茶やでいつぷくすうていかうわい。」北八「わつちも休んでいきやせう。」トうちつれて茶屋へはひると、おくのざしきに小ぞう一人つれたる、としごろの和尚一人、休みゐたるを見つけ、ずつと打通り、おやぢ「これは眞裸の宗高院さまか、此の間は御疎遠ぢや。」をしやう「イヤ畑村の伊左

右どの、ようごんした。」おやぢ「コリヤえい所でさいはひ〳〵、いつぱいあげましよか、お前がたも酒はどうぢやい。」北八「ようござりやせう。」おやぢ「御亭の、何がありよる。」ていしゆ「どぢやうのお汁ばかりでござります。」おやぢ「ソレよかろ、はやう出さんせ、しかしあなたはお精進を。」和尚「イヤわしには、いんまさういうておいた、豆腐の汁くだんせ。」おやぢ「ときに酒はこゝにあるわい、コリヤどなたへもわしがふれまひぢや。」ト こしにさしたる火ふき竹ほどのながさにして、黒ぬりにしたるすゐづゝ、しんちうの輪をいれ、管をつけたるをとり出せば、此のうちそれ〳〵にすひものをもち來ると、くだんのすゐづゝよりさけをつぎてはじめかけ、和尚「ナントえい酒でござりましよがや。」和尚「いかさま、此の邊で呑む並酒とは違うて、コリヤ生諸白ぢや。ときに伊五右どの、えいとこであうた、愚僧わざ〳〵こなさまのとこへゆくとこぢや。」おやぢ「ソリヤ何としてぢや。」和尚「きのふむすこどのがわせられて、意見してくれてて頼んだぢやあつたが。こなた隱居して、是れから後生願はうといふ身になつて、殺生が好きぢやさうな、わるいこつちやぞや。凡そ生あるものの命をとれば、地獄へ墮ちて未來永劫呵責を受くるといふこつちや。ア、恐るべし〳〵。」おやぢ「ネイ、さよなら殺生はやめましよかい、しかしこの鰌はうまいこつちやな。」彌次「ホンニお前方の吸物は、みなどぢやうだね、なぜおいらには豆腐汁をすゑたの。」北八「そのはずだ、お前のすひものと、アノをしやう樣の御註文のとうふ汁と、取違へてすゑたのだ。」をしやう「コリヤさうぢや、道理こそ甘味と思うた。」おやぢ「ヤアをしやう樣、どぢやうあが

りなさりましたかい。」をしやう「ツイ御亭主がもてわせたものぢやに、ハテとうふにしてはあたまや尾があつて、コリヤ珍らしいとうふぢやと思ひよつて、とんとどぢやうぢやとは氣がつかずに、くひよりました。とてものことに御ていしゆ、もう一ぜんかへてくだんせ。」ていしゆ「ハ、、、うまいはずぢやわいな、コリヤあなたのとこからとつておこしてぢやあつたもの。」をしやう「ハアきのふおこしたどぢやうかい。」おやぢ「イヤをしやう樣は、人に殺生をすなと今のさき意見いうたお方が、どぢやうとつてこゝへおこしたとはどうぢやいな。」をしやう「イヤもうしよことがない、ありやうは愚僧殺生が大好物、聞かんせ、昨日も裏の蓮池で、此の小僧めと二人、鐃鈸をもち出して、泥の中からどぢやうや鰻をすくうた程に／＼、墓場の手桶にちやうど三杯まで。すぐにこの内へもたしておこしたのでござるわいの。」彌次「とはうもねえ、人を極樂へ導くおかたが、それでは第一番にぢごく／＼おつこちなさるであらう。」和尚「さうはかいな、處で愚僧の觀念は、こちの檀方の中でも、廣大の善根功德をして、死なれた人もあるさかい、大方あの世で佛になつてゐらるゝぢやあろ。愚僧ぢごく／＼おちたならば、その佛賴んで檀方のお蔭で、われらたすかる所存はどうぢやあろハ、、、。時にそれはえいが、先刻からとんと氣がつかなんだ、ノウ伊五右この吸筒は、こなたの物好きで拵うたのか、但しこれで買うたのかいな。」おやぢ「イヤ是れは昨年上京致した時、四條の古道具見世で求めましたが、何にした物

やらあまり下直で、コリャ吸筒にしたらよかろと、調へてこしらうたのでござります。」をしやう「よめたよめた、ソリャ定めてそないに下地から黒塗にしてあつて、管もつけてあつたぢやあろ。」おやぢ「さよぢや。」をしやう「エ、埒もない、ひよんたくれな事したわい。」おやぢ「何でぢやいな。」をしよう「その吸筒の酒うつかりと呑みよつたが、ア、〳〵胸がむかつく〳〵。」彌次「なぜでござりやす。」をしやう「ハテそれは公家衆の小便しよる物ぢや。」みな〳〵「ヤア〳〵〳〵。」をしやう「そうたい禁裏の御葬送などの節、堂上方がみなもたせらるゝ完筒といふものは、それぢやわいな。あなたがたが急に手水にゆきたくならせられた時、それへなさるゝものぢや。江戸でも青竹を火吹竹程にきつて、大名衆のもたせらるゝ事がある。やはり江戸でも完筒というて、小便なさるゝものぢやわいな。」北八「エ、そんなら此の吹筒、もとは公家衆の小便擔かえ、サア〳〵大變々々。」彌次「エ、とんだめにあはせた。コレきさまはなぜ小便筒へ酒を入れて、己等に飲ませた。ア、コリャ胸がゲエィ〳〵。」北八「エ、きたねえゲエィ〳〵。」おやぢ「コリャ氣のどくぢやが、わしとんとそないなことはしらずぢやに、料簡さんせ、そのかはりくちなほしに、外の酒ふれまひましよ。」ト亭主にいひつけ、また〳〵酒肴色々出させてわびけるに、彌次郎北八もこごといひしがせんかたなく、ごふはらまぎれにしたゝかちそうにあひ、これにてやうやうはらをいて、いとまごひし、此のところを立ちいづるとて、

胸わるや公家衆のしたる小便と打つてかはつたさけは吹筒

それより鳥居本の宿にいたる。此處の神教丸名物なり。

もろ〱の病の毒を消すとかやこの赤玉も珊瑚珠のいろ

此の宿の棒端より、先にたちてゆく旅人は、いかさま此の驛にしばらく逗留せし者と見え、供の荷持と、このあたりのはなしなどしてゆくあとより、このところのめしもり、女郎「オイこれの彌弟さん、まちなさろ待ちなさろ。」トかのたび人をおつかけきたりしは、このところの女郎にて、このほどよりなじみの客と見え、ことにこの女郎も客も、おなじ信州のものとて、はなし合ひのわかりし中、まんざらでもなきやうす、客人あとをふりかへりて、「ヤレハア来ねえでもえい事よ。」トこの内おひつき、はなしなどして通りゆくにいに、彌次郎北八をかしくあとより附けば、女郎「おまい是れから又いつこつちィ来なさるよ。」客「あに蠶飼ひ仕舞ひをつたら来べいこたア逢ひはねえ。」女郎「ソリヤはあ、おさんねえとつて、せずこともねえが、國サアおんなじとこで、ねこんざいから知りやつてをる中だアもの、それにハア、たけへに根性骨ノウぶちまけて、女房にすべいなるべいとつて、御勿體ねえ天照皇大神宮さまノウ、誓文に書きこんだもんだアから、あんまりむげちねえこたアさつしやるめえナもし。」客「あによォそんなに氣サアもむこたアねえ、おれだアとつてふんぐりのある男だア、もしいげえのことがあつたァとつて、心のかはるべいたァおもはねえから、ヤレはあ泣くこたアねえよ。」女郎「そんだらハァ伏見の山田屋の女郎衆サア、譯ノウつけさつしやりまし。」客「ソリヤはあおらも友達のつきやひで、やあだともいはれねえから、二三度べしもいつたアけれど、あにハアこの

のちいぐもんだァ。お天道さまかけて譃サァかたらねえことよ。」女郎「そんだらハァわしあにもいふべいこたァござんねえ、どうしたこんだか、こんなにハァこつぱづかしいこんだが、でかくお前が可愛くなつたも約束ごとだんべい。そんだァからもういちにち／＼と、おつとめたァけれど、今別れるとおもやァ悲しくござらァ。わし大錢ノウ一本つん出しますべい、けふいちにち逗留ノウしてくれさつせえ。」客「ヤレはあとんだァことをいひなさる、けふは是非いぎますべい。」女郎「イヽニヤもどりなさろ。」客「ハテまた來べいに。」女郎「來べいとつていづのこんだァやら。まだでかくかたるべいこともあんべいに、戻りなさろ／＼。」トとりつきてやたらにひつぱるを、ともの男、やう／＼に引きはなして、男「アレけふはかへさつしやりまし、小旦那もそんなに長逗留ノウしちやァならねえことよ。」トむりに引きはなして行かんとするを、女とりつき、供のかつぎたるりやうがけの荷物をひつたくりて、女郎「やあだ／＼といはつしやるから、勝手にしなさろ、わしこの荷をもつていぎますべい。」ト雨がけの六七貫目もあらうといふ荷を、かる／＼とひつかたげ、尻をふつてさつ／＼ともちゆくにぞ、客「ヤレコリヤ、まちなさろ／＼。」ト肝をつぶし、供の男もろとも、そのあとをおつかけながらあとへもどるに、二人はこれを見て興を催し、それより程なくすりはり峠にいたり、茶屋に入つてこの處のめいぶつ、ざとうもちにはらをこやし、目の下に見ゆる水うみのけしきに見とれて、彌次「こいつは氣がはれて、とんだいいところだ。」

遠目鏡よりもまさらん摺針の穴よりや見る湖の景色

かくて鼻紙に記し、餅をつけてあたりの柱にはりつけると、その傍に相應の處の隱居らしき禪門

休みゐたるが、是れを見て、隱居「ハヽァおもしろい事でや、モシ無躾ながら感心しをりました、とてもの事に、そつちやのお人もどうか〳〵。」北八「アイわつちも一つやらかしやせうか。」

名物のさたうもちより唐崎に雨氣もなくてはれわたる湖

いんきよ「イヨでけました。コリヤ貴公方は餘程の狂歌詠みなや。見たとこがお江戸の衆ぢやな、狂名はなんでや。」彌次「わつちは江戸の三陀羅の社中で、あんだらとまうしやす。」いんきよ「ハァかねてお名は承知いたした事はないが、あんだら先生か、これは〳〵。」彌次「アイついにお近付でもねえから、コリヤァはじめてお目にかゝりやす。」いんきよ「さよぢや、時にわしは此のさきの番場ぢやが、トおまいがた今夜は私のうちへとまらせぬか、わし狂歌はでけんが、茶が好きぢやに、灑茶なとたてゝふれまひましよが、どうでや〳〵。」北八「ソリヤ有りがてえ、彌次さんどうする。」彌次「いかさま御世話になりやせうかね。」いんきよ「それは珍重ぢや、サア同志にいざござれ。」ト勸められて二人が顔を見あはせ、なんでもてんぼのかは、しやれちらして、ちそうにあはんとのむな算用、打ちつれてばんばの宿にいたり、かのいんきよのかたへゆき見るに、驛本陣ともいふべきたいさうのかまへ、おく〳〵の座敷へあんないせられて、打ちとほれば、下女たばこ盆茶などもち來りて、女「これはようおとまりなされました。」彌次「アイお世話でござりやす。」時に北八いいうちだの、上段の間もありごてえさうな普請だぞ。」北八「こんなうちではどうか又恥をかきさうなこつたぞ。」ト此の内かつてよりかきつばたの花をひろぶたにのせ、花ばさみをそへて小坊主がもちきたり、あとよりこの家のむすこと見えて、品のよき十四五のまへがみ、はんねらのはちに、根じめのかに二ツ三ツもち來りて、「アイお客

さまに御退屈でござらつせるぢやあろ。いんま此の花もらひをりました、御慰みにこれへ入れさつせえて下さりませと。」北八「サア〳〵大變なことをいひ出した。大かたこんなことであらうと思つた。」彌次「ナンノ此のくらゐのことにこまるものか、おれがすつぼりといけて見せよう、ドレ〳〵。」トはなをとつてひねくりまはし、軸の處を蟹の鋏にあてゝきらうとする。むすこ「モシ花鋏は下にあらずに、ソリヤ根〆にせる蟹ぢやもの。」彌次「ナニ是れを根〆とは、コリヤ鐵でこしらへたかにが、どうして根〆にいけらるゝもので。」北八「ハヽヽハいけるのぢやねえ、たしかにそれはその足のあひだへ、花をさしてもたせるのだらう。」彌次「エヽ知れたことを、手めへにそれををそはるものか、モシその擂鉢をこゝへくんな。コリヤめづらしい、なる程こんなものは備前のことだ。」むすこ「ナニそれがすりばちであらずに、はんねらといふ鉢ぢや。」北八「はんねらなら朝貌をいけるものだ。はんねら門兵衞あさがほ仙兵衞といふから。」彌次「たはこといふな、今に手際を見せよう。」トやう〳〵の事にどうやらかうやらかの花をつっこみ、水をつぎながら、彌次「ナント恐ろしいか、どうだどうだ。」むすこ「やつとおもしろもないやうぢや、そして葉の數がわるうて花がみなうしろむいてぢや。」彌次「うしろをむけたは此の方の流儀、こなたしゆの知らねえ傳授事だ。」むすこ「ハヽヽ、何でや〳〵。」彌次「傳授いつて聞かさうか、コリヤ牀のうしろの壁をぶちこはして見る花だ。」北八「ハヽヽ、とはうもねえ事をいふ。モシむすこさん、お前いけなさるであらうから、あの花を生け直して見せなせえ。」

むすこ「そんなりやわが徒がいけて見せずに。」トとしのゆかぬむすこのこと、なんのゑんりよもなく、彌次郎が插したる花を引きぬきて、ひねくりまはし、たちまち生けてしまふと、北八「ハヽア、なるほど〳〵、ナント彌次さん、ほんたうの花がいかつた、奇妙〳〵。」トこの内いんきよのぜんもんいで來りて、「コリヤ御退屈であらずに。ハヽア花がよくでけました、しゆつとお手際が見えをりました。」彌次「ナニサ此の位のことは。」いんきよ「イヤなか〳〵おもしろい。コリヤ千松アノ生け方を見ておけ、どうで〳〵。」むすこ「ナニありやお客樣いけさつせえたのぢやない、我が徒がいけをつたのぢや。」隱居「ハヽヽ、さうでや、是れはしたり。時に何も御ちそうもせずことがないに、わしのとこで此の間田舍相應の圍ひをおつたてをつたが、幸ひの事ぢや、御珍客ぢやにお茶一ッ進ぜませずか。」トこの内かつてより小坊主立ち出で、「いんま裏町の頓伯さまがござらせえたに。」いんきよ「オイ〳〵、すぐに是れへお出でまいかというてこい。」トこのことばのうち出で〳〵るは、此のきんじよのやぶ醫と見えたる、なでつけあたま、とんはく「これは御めんくだせえ。」いんきよ「サアサア是れへ〳〵。モシお客さま、コリヤ近邊の朋友ども、かかるをりから御珍客ゆゑまねきました。」彌次「是れははじめておめにかゝります。」とんはく「おまいがたお江戸ぢやな、ようこなたへとまらせえた。」いんきよ「さらばお茶のしたくせずに、いつとき是れにござらせえ。」トいひすててかつてへいたり、彌次郎北八はこれまでたいがいはなしには聞きかじりしが、茶のせきへ出るははじめて。さりながら知らぬといふもごふはらなり、いかゞせんと思ひしところへ、此の醫者きたりしはさいはひ、このものをさきにたてて、なんでもそのする通りにしたらよからうと、心のうちにうなづき、彌次「モシあなた、今お茶がはじまるさうでござりやす、今しばらくおはなしなさりやし。」

さんはく「イヤさうぢやてし、いんま使の人をおこされました。」トこの内聽てむすこ來りて「もうよからずに、いざござれ。」さんはく「御案内おたのみ申す。サアお出でまいか。」彌次「イヤまづお先へ〳〵。」ト無理にかのとんはくをさきにたてて、むすこのあんないに從ひおりたち、とび石つたひをかこひにいたり、にじりあがりよりはひりたるが、とこのかけものなど見るとて心づき、わきざしをさしてこゝへきたりしゆゑ、さんはく「ホイ是れはしたり。」トまたそとへわきざしをおきて來るばかりにはひいでければ、彌次郎是れを見て、さては一ぺん出直して來るものさうなと、是れもおなじく大事さうにそとへ這ひ出れば、北八もさうするものかと、あとよりはひ出る。ていしゆ「コリヤみなどうでや、どこもとへござらせるのぢや。」トあきれかへりゐるうち、とんはくは刀物掛へわきざしを掛けおきて又はひると、つゞいて二人もぬつとはひる。ていしゆぜんもんしかつべらしくちやをたてて、上客の前へちやわんをさし置くと、とんはく手にとりいたゞき、飲まんとする時、水なばをぽつたりとちやわんの中へ落したるまゝ、ひとくちのみて、さんはく「これはけつこうなお服加減じや。」ト飲みさしたちやをつぎへおくると、彌次郎くだんの水ばなを見たるなれば、彌次「エ、これをわつちが飲むのかえ、コリヤアとんだはなしだ。」トくちのうちにこごといひながら、水ばなの落ちたるところをむかうのかたへまはしてのみ、そのあとを北八へわたすに、これも顏をしかめながら飲まんとして見れば、はや茶はすこしにて水ばなのところばかりおどんでゐるゆゑ、兩はうの目をふさぎながら、北八「エ、、なんまみだぶつ。」トぐつと飲んでしまふと、ていしゆ肝をつぶして、ていしゆ「コリヤどうでや、わしも若い時分から茶が好きで、所々の會席へも出をつたが、念佛申して茶をまゐるといふ作法は、聞いた事もないに、めづらしいことでや。アハ、、、。」

トこの内やがてれうりもすみて、なかだちし、三人の客、待ちあひに知らせをまちてゐけるうち、彌次郎大あくびをしながら、「コリヤア繪心のない藥とりを見るやうに、寐るより外はしかたがねえ。」北八「オヤあそこに大きな竹の子笠がつるしてある、酒屋の小僧めがとんだところへ忘れていきやアがつた。」さんはく「イヤあれは雪雨などのせつ、客の被る笠でおらず。」

彌次「ナニ客へあんな笠をきせるのかえ、流石は田舍だ、わつちらが國だと蛇の目の傘といふ處だ。」北八「そしてあすこにある木像の佛さまはなんだね。」さんぱく「あれは利久居士の像でござるて。」北八「オヤとんだものをこゝへかざつておくの。」さんぱく「ナニとんだものではない、利久は茶道の祖師でござるわ。」北八「ハテ利久が茶の湯の祖師なら、助六は頭痛もちの祖師であらう、大わらひなはなしだ。」

トこのうち何にてやありけん、グワンとものをとりおとしたるおとしけるを、とんはく聞きつけて、さんぱく「サアしらせの銅鑼がなりをつた。いざござれござれ。」トさきに立ちて行くに、ふたりもそのあとに付いてゆけば、とんはくにじりあがりへかゝりて、戸をあけんとするとき、うちには亭主ぜんもん丸はだかになり、ゑつちうふんどしひとつのこい、花をいけんとこゝへかゝつてゐるさいちう、あけられてはなるまじと、ひだりの手に花生、右に藤の花を持ちながら、壁へかゝつてゐて右のあしにては、にじりあがりの戸をふまへ、おしつけて、ひだりのあしにて、ちからいつぱいふんばりゐるとも知らず、彌次「ドレ〳〵あきやせぬか、わつちがひとつあけて見やせう。」トとんはくにかはりてむりむたいに戸をあけんと、手はかけたれども、うちよりもちからあしつよくおさへたれば、中々あかざるを、彌次郎ちからこぶをいだし、戸をこじまはすに内よりふんばるあしと外から押すいきほひ、はづみにかゝつてにじりあがりの戸、ぐわつたりとはづれ、亭主ぜんもんうそよごれたゑつちうふんどしのまゝ、花いけもはふり出して、どつさりたふれるひやうしに、そとへあしをふみ出し、彌次郎のひたひぐちを蹴とばすと、彌次郎わつといつてうしろざまにたふれ、とびいしにてぼんのくぼあたりをしたゝかに打ちて、彌次「あいた〳〵〳〵、アタ、、、、。」北八「どうした〳〵。」さんぱく「コリヤどうでや、コレ、そこなみづもてござれ、ソレ〳〵氣附けぢや〳〵。」トこしのいんろうより取りいだし、彌次郎に飲ませかいはうするに、やう〳〵と起きあがれば、亭主も足こしをさすりながら、まづ〳〵これへと三人をかこひへ入れおき、その身はにはかに衣服をあらため、しきいらしくあいさつするに、こづらにくくなりて、彌次「さて〳〵さきほどは、めづらしいお足を、頭へしたゝかいたゞきまして、御馳走近頃添うござりやす。」ていしゆ「これは〳〵

ふとしたことで、かねて心がけませぬ故、足袋さへはかずに麁末な足を進ぜました。」北八「イヤわつちは何も知りやせんが、丸裸でゐつちうふんどしの御手前は、珍らしいお流儀でござりやすハ、、、。」

トみな／＼大わらひとなりて、その日のちやせきはむちやくちやにしてしまひ、はや日暮れたるに、もとの座敷へもどりて打ちふしたるが、早くも夜明けて、そこ／＼にいとまごひし、一禮を述べてこの處をたち出で、それより六はら山をひだりに見て、ひぐち村いしうちをすぎて、さめがゐの宿にいたる。こゝにさめが井の清水といふあり。

雨の手に掬ぶ清水の涼しくてこゝろの醉ひも醒が井の宿

此の宿にさし懸りける時、あとよりお屋敷がたの早打と見えて、二挺の駕籠に人足二十人ばかり、かはり／＼にこれをかき、駕籠の棒先へ細引を付けて引つぱりながら、「エイ／＼さゝまめこ。」「エイサツサ。」「さゝまめこエイサツサ。」トとぶが如くに問屋場の前へかきすうると、人足廻し、「サア／＼みないじやござい／＼、コレコレ作兵ヤイ、太郎十はどうでや／＼、ようべから役あてておきよるに、何して居よるぞい。」作兵「サアサアいかまいか／＼。」ト手をとつて引きずり來たる男は、女のかづら著たるものにて、顔はところまだらのおしろいべた／＼。是れは此處に氏神祭禮の芝居ありて、處の若い者それ／＼につとむるゆゑ、この太郎十、女形にて今きやうげんのはじまる處、にはかに役があたり、かはりの人を出さうにもみな休日にてゆく者なく、せんかたなくて引きずり出されて來るなれば、いまだ鬘を取るまもなかりし。太郎「ヤレコリヤ／＼、いんま、いかず／＼といひよるに、おこずるな／＼。」人足廻し「エ、早うやらまいか、そのあたまどうでや。」太郎「はらのにえる。いんま幕が明いて身が徒が出よるところぢやに、誰なとかはりに出さずと思うても、おぞいやつらぢや、どやつもいこまいとぬかしよる。」作兵「ハテかはり

がなけらにや、せずことがない、はやうそなたいこまいか。」太郎「エ、この髩がねからはづれんわい。」ト無理にとらうとするにとれず。その內駕籠の中のおさむらひせきこみ、「コリヤ〳〵遲滯いたすぞ、早くやらぬか。」人足邇し「ソリヤお急ぎぢや、マアこのかづらはいて來てから、ゆつくりとはづしよればえいに、サア〳〵やりからかせ〳〵。」トせき立てられて、此の男かづらをはづすこともなく、あたまは女、からだはじゆばんひとつにてかき出し、「さゝまめこ〳〵エイサツサ〳〵。」彌次「ハ、、、北八見たか、なんでも此の宿に素人芝居があると見えて、その女がたに役があたつたも、をかしいぢやアねえか。」北八「さればきめう〳〵。」トそのあとを見送り行くに、此のしゆくは氏神のさいれいと見え、辻々にのぼりちやうちんをたて、宿のなかば過ぎて、右のかたよこ町の入りくちより、人くんじゆして遙かにしやないのかた、しばゐのあるやうす、往還より見えければ、北八「ナントどのやうなことをするか、芝居をひとときり見ようぢやアねえか。」彌次「いかさまこゝだな。コリヤいい土産ができた〳〵。」トやがてかの社地に行きて見れば、かやぶきの舞臺を掛けてまくを張り、見物のゐる處は青天井にて、皆々むしろの上にすげがさをかぶり、すわりて見てゐる。此の芝居木戸といふものなく、かこひもなければあけはなしにて、ほふらくのしばゐなり。ひやうし木。「カツチカツチ。」口上「とうざい〳〵。御酒貳升、目ざし鰯十連、淺畑村若衆より、馬持の太五右衛門へ下さる。そば粉三袋、牛蒡十把、六はら山の長德寺樣より西町の伊茂七へ下さる。半紙十帖、煮附もの一重、二太郎後家樣より長松へ下さる。榾三束、蠟燭二十挺、脇本陣樣より馬喰の權野右衛門へ下さる。」ひやうし木「カツチ〳〵、とうざい〳〵、此處國姓爺虎狩の段はじまりさやうに。」「カツチカツチ〳〵〳〵。」ト幕あきたる處、舞臺のうしろほんたうの大藪、三四寸まはりの大竹いく本はえたるまゝ、おくふかに見えたるを、すぐに道具だての千里がやぶとせししゆかうなり。右の方すだれかけしうちにて、じやうるり、「をしへ

にまかせ和藤内、人家をもとめしのばんと、かひ〴〵しく母を負ひ、ひでうのごとくいそげども、すゑはてしなき大みんこく、人里絶えてくわう〴〵たる千里が竹にまよひ入り。」和藤内「のう母者人、この脚骨におぼえがあらず、もうやくと、四五十里も來られたぢやあろがい、ても〳〵藪の中、ム、ウ承知々々、方角知らぬ日本人、唐のけつねがいこすよな、いこさばいこせ。」じやうるり「ねざゝ大竹おしわけふみわけゆくさきに、怪しやすまんの人聲。」ト此のうちがくやにて、「エイ〳〵ハァイ〳〵。」トちやるめら吹きて、かねたいこたゝきたて、とらがりのてい、このとき見物のうちより、六十あまりのでつくりとした、あからがほのおやぢ飛んで出で、「ヤイ〳〵、此のしばゐならまいぞ〳〵。」ト舞臺のまん中へすわつて、何かいさくさをいふに、見物さわぎ立ちてときのこゑをあげはやせば、がくやより處の若い者頭とおぼしき男かけきたりて、「コリヤ下宿の八之丞さまか、此の芝居ならまいとは、何でや〳〵。」八之丞「す、サならまいというたは、この和藤内めはなんでや、馬指の金太がとこのあんにいであらずに、絹のえいきりもん著かざりをつて、なんぜこちのあんにいには木綿のきりもん著せて出いた。」和藤内「コリヤをかしい、馬持であらずがなんであらずが、身が徒は和藤内の役ぢや、お身さまのとこの八内どのは、身が母のやくぢやに、茶染の木綿ぎりもんはどこでしをつても定規なもんぢや、とかういはつせるな、狂言の邪魔にならずに、早うあちへいこまいか行こまいか。」おやぢ「イニヤ狂言ぢやあろがあらまいが、身が家は此の宿内でも元問屋しをつて、今年文化九申年まで、およそ百八十年もちんと相續せる家筋ぢや。錢金がなけらにやこそ、こまいにしてを

れ、五寸もひけはとらまいと、お御嶽様へ誓願たてらかいた男ぢや、なんぞこちのあんにいには木綿の衣裳著せて、馬持の所のせん松めに、ぎつぱな金入れの衣裳著せて出いた、きかまいぞ／＼。」トまつくろにはらたてゝりきむを、大ぜいよりていろ／＼になだむれどもきかず。とかくこのおやぢのむすこはわとう内のはになりて出たるゆゑ、木綿の著もの著て出たるを憤るなれば、せんかたなく、そんならほかのいしやうに著せかへよと、がくやのかり衣裳のながもちを吟味せしに、何も著せるものがなし。やう／＼きんもうるの上下ありしを、これなりと著せるがよいと、わとう内の母がこげちやのもめんぬのこ著てゐる上へ、きんもうるの上下を著せ、これにておやぢをやう／＼になつとくさせければ、やがてしづまり、狂言にかゝると、「とうざい／＼。」「ありや／＼／＼。」ト此の内うしろのやぶの中にて、らつぱちやるめらを吹きたて、せこのたう人「どん／＼／＼／＼。」「ぐわん／＼／＼。」トかね太鼓をむしやうにたゝきたてて騒ぎけるが、この藪の奥にきつねの穴いくつもありしが、あまりにものすさまじくさわぎたつおとに、虎がりにはあらで、ほんたうのきつねをかり出しければ、狐ども何疋となく、この物音におどろき、うろたへてかけまはる。せこのもの「ヤァ／＼／＼狐が出をつた。ソリヤそつちへ、イヤこつちへも、ありや／＼／＼ワァイ／＼。」かねたいこ「ドンチャン／＼。」トいよいよ皆々さわぎたつに、きつねはあちこちと追ひまはされ、見物の中へ飛び出せば、きやつといふて女子どもは泣きいだし、くづれ立ちてあたまを踏むやらあしこしをくじくやら、酒樽をひつくりかへし、べんたうばこをはね飛ばして、上を下へとこれかへし、わとう内はおくびやうものにて、このきつねにきもをつぶし、いろをうしなひ逃げまはれば、母はむかうはちまきしておつかけまはすに、がくやからはきんしやう女がゑつちうふんどしひとつにて飛んで出で、きつねを目がけて追ひまはす。このさうどうをかしく、彌次郎北八鼻をかゝへながら、これをはねに、このところを立ち出で行くとて、

和藤内おもひよらねば逃げたりし虎の威をかるきつね見つけて

かくて二人は此の、宿を打過ぎ、柏原にぞいたりける。

作者旅行中さま〴〵面白き趣向貯へたれども、みな信州路にいたりての滑稽なればこの此の編には符し難し、よつてこゝに筆をおく。やがて四編にくはしくすべし。

木曾街道續膝栗毛壹編終

木曾街道續膝栗毛貳編叙

去年此の街道を通行せし時横川の御關所を過ぎて、江戸よりかへれる、萬歳と道づれになりたり。其の夜、輕井澤の日野宿に同宿して、酒興の上、飯盛におだてられ、此の萬歳、柳骨利より、烏帽子素袍を取り出し、德若にと、うなり出して舞ひたりしは、水無月二十九日の夜にて、予も珍らしく覺えたりき。（この事次の五編にいだす。）それより諏訪の檜物屋にて、針箱の間違ひ、（此處にてめしもりの事を針ばこといふ、是れも五編目に委し。）福島の奇應丸にて、お屋敷を取りちがへ、大へこみにへこみたりしこと、（同上）大井泊りの夜、未だ明けざるに宿を立つて、十三峠にさし懸りたるに、浪人體の人と道づれになりて、おどしかけられ、此方にも弱みを見せじと、心遣ひたりしをかしみ、（此の卷中に彌次郎北八が太田どまりの趣向とす。）其の外御嶽伏見の遊びのおもむき、垂井の驛にて、月水早流しの藥を呑みて、腹を下せし始末、今須の茶店には、馬の失物、二階より出たる噺、予が旅行の身の上にありし事、また目下見聞きたる事ども、有りの儘に此の編の趣向とし、今年の新版と、こじつけるものならし。

木曾街道 續膝栗毛貳編

東武　十返舎一九　著

市中に住居すれば鄰家の病人に酒宴亂舞の遠慮あり、偏法華ありてたゝき鉦に使をたて、合壁の唐臼頭痛を踏むにひとしければ、條目の外の心づかひぞかしがまし。それに頓著せざるは旅なり。夜毎にかはるかけながしの木枕に、魂は山野をかけまはり、寐言八百誰に遠慮もなくして、諸事尻くらひ觀音の光明輝く、いびつなりの利生あらたに、邊土幽僻の宿にも飢ゑず、寒えず、目にもろ／＼の景色をながめ、耳にもろ／＼のめづらしきことを聞く、樂しみ證文書きても、ひとたびに十年づゝは慥かに命を延ぶる事、請合ひなり、されども彌次郎兵衛北八は、東海道を行きがけの元氣には似もつかず、ふところの中寂しければ、今こそ旅はうき美濃と、近江の境、寝ものがたり村にいたり、茶店にいたり休みたるに、夫婦と見えて、茶たばこ盆持ち出で挨拶しければ、かゝる身にも取りあへず、

夫婦して寝ものがたりは兩國もさぞやひとつに夜のたのしみ

ト此のうち神道者めきたるそうがみの男、おもての方より入り來るに亭主、「コリヤ嘉膳樣、待ちよりました、聞いてくれさつせい、こちの栗

木から來よつた男めと三太郎めが、言ひ合ばいて今朝がけからどつちへやら逐電しよつたが、それについてうしならかいたものがありよる、占うて見てくれさつせい。」嘉「ソリヤおぞいやつら、きのどくな事でや。」トふところより算木取り出し、ひねくり廻し見て暫く考へ、「ハ、ァ卦體は天上火、易に曰く、富貴天にあり牡丹餅棚にありとあれば、氣遣ひさつせるな、此の失物はいつきに出よらずに、何であらうと高い處にあると見えよる、あそこなてこゝなての棚の隅になりと、チントほりあげてあらずになァ。」亭主「エ、めつぽふかいな、棚へあげておかれるもんぢやござらぬ。」嘉「ハテかはつたことでや、失物はなんでや。」ていしゆ「馬でござるに。」嘉「ヤァ〱コリヤ肝玉がつぶれよる。」ていしゆ「イヤこなさまより、わし肝を潰らかいた、どこの國にか、馬が棚へほり上げておかれずに。」嘉「イヤ〱それでも易のおもてに、なんであらうと高い處にあらずこたァ違ひはない、棚でなけらにや鴨居の上か、天非裏なりとさがして見さつせい。鼠でもくはへてはしりよつたもんであらず。」彌次「ハ、、、いかさま桂馬の高あがりといふことがあるから、馬だとつて棚にあげてないともいはれめえ。」ていしゆ「コリヤお客までがとひやうもないことといはつせる。」嘉「身が等諜計はいはぬ、ちがはずこたァあらまい〱。」ていしゆ「ナニこなさまのうらなひは、りうと上手ぢやとおもひよつたが、あんまり人をてうらかすに。」嘉「なんでお身をてうらかさずか。」ていしゆ「イヤてうらかすでなけらにや、なんぜ馬が棚にあるとぬかしよつた。」

亭主「イヤぬかいたとはこのおござやらうめ。」トうらなひしやがやつきとなりてつかみかゝる。女房かけへだてていろ〳〵にとめてもとまらず、ふたりはをかしく見ゐたりしが、やがて彌次郎中をかけへだてて、彌次「コレサ〳〵マア靜かにしなせえ。」亭主「イヤ〳〵きかまいぞきかまいぞ。」ていしゆ「おどれより身が等がきかまいぞ。」トたけりかゝり、火吹竹にて相手とまちがへ彌次郎のあたまをこつりやると、彌次「あいた〳〵コリヤおいらをなぜぶつた。」北八「コノべらぼうめら、仲人をぶつてすむか、是れからはおれが相手だ〳〵。」トけんくわがむちやくちやになり、互にりきみ合ふさいちう、てんじやうじきのあひだより、水を打ちまけしごとく何やらこぼれかゝりて、皆々あたまからづつぷり濡れくさりたるに、是れはと肝をつぶすうち、二階にて馬の嘶く聲、「ヒ、、、、、。」ていしゆ「ヤア〳〵〳〵、二階に馬が居よるさうぢや。」亭主「ソレ見よれわし見通しぢやに。」彌次「ヤア〳〵そんなら、コリヤ馬の小便か、エ、汗ねえ〳〵。」北八「なんだかわる臭いとおもつた。エ、〳〵いめえましい、とんだ目に合はせる。」彌次「額口からぼと〳〵くちへはひらァ、コリヤどうしたらよからう、全體きさまたちやァ、なぜ二階へ馬をあげておきやァがつた。」女房「御氣毒なことでや、コリヤなんとしたらよからず。」ていしゆ「けさがけから馬が居よらなんだに、よもや二階に居よらうとはおもはなんだ、これは〳〵。」ト此の内馬はしきりにたかいなゝきして、二かいの板敷もふみぬくばかりに荒れいだせば、ていしゆあわててだんばしごをかけ、あがり見るに、馬ははしらにつなぎてあり。引きおろさんとするにおりず。すべてきよくのりなどになれたる馬はかくべつ、つねの馬は高き處へあがることはあがれども、きふなる處はおりかぬるものにて、亭主色々にたゝきて引きおろさんとするにおりず。これはこの亭主平生短氣者にていつこくなるゆゑ、人を使ふにも餘りにこゝろなくいぢめると見え、奉公人どもこらへかね、いひ合はせかけおちするとて、あとの難儀なる事をしておかんと工夫して、ふうふの留守のうち此の家の馬を廐より引きいだし、だんばしごから二かいへひきあげおきたると見えたり。ていしゆ「エ、よめた〳〵、大か

たやらうどもがいきがけの駄賃に、わるさであらずに、とひやうもないことしよつた。」彌「ソレ身が等がうらなうたに違ひはあらまい、えいきみぢや。ソレおろすには、なぞへに足代かけにや、馬がおりよらぬ、あんまり奉公人をがいにおめりよる報いであらずに、ワハ、、、、。」トうち笑ひ出てゆく。女房は彌次郎北八へだん〳〵わびごとして、にはかに湯をわかし洗足させ、衣類もつまみ洗ひして、焚火にほし、亭主もろともあやまり入るに、せんかたなく、二人はこといひすてにしてたち出でしが、あとはいかゞせしやら知らず。

諸共に喧嘩させしは二階から目ぐすりならぬ馬の小便

かくて今須をうち過ぎてゆく。ほどなく大關村といふにいたる。左の側に不破の關屋の跡ありと聞きて、

いにしへは關の扉も閉ぢにけんこれや鷄卵のふわ〳〵のさと

關が原を打越えて鷄籠山班女花子の古跡あるに、

傳へきく班女がねやのあふぎとてこゝぞ名所の要なるべし

このさき北國街道の追分あたりより、年の頃四十許りの男、木綿縞の羽織に小脇差をさし、少しの包を背負ひ、藁苞をさげたるが、あとより詞をかけて、ひとつふたつ話しゆくうち、かの男近邊のものと見え名は與太兵衛、「ナントおのさ達は垂井どまりであらず。」彌次「いかさま、もうそこらでござえせう。」與太「垂井どまりなら田尻屋といふへお出でまいか、りうとえいやごめがありよる。」北八「ナニやごめたァ後

家のことだらう、そいつうつくしいかね。」 彌次「器量にやァかまはねえ。そこの內へとまりやせう。」 與太「身が等の定宿ぢや、案內せずにサァ／＼いじやかつせ／＼。」 トすでにその日もくれちかくなりて、垂井の驛にいたり、かの目じりやといふ旅籠屋につきて、與太兵衛さきにたち、 與「とうでやく／＼、久しかぶりぢやにおかはりはあらまいな。」 宿の女「ヤア與太兵さまか、せんどはがいに人をだまくらかいて、つらの皮あつうようお出でられたことでや。」 與太「コリャたわけたことといふな、お客おこづつて來よつたぞ。」 トいかさま此の男定宿と見えて、いたつて心安きやうす。おくより後家らしき三十あまりの女、いできたりて、「ホンニ久しかぶりで、どつち風が吹きよりました。」 與太「こゝへ北風であらずに、コリャがいに隙さうな事でや。」 下女「與太兵さまがお出でるぢやあらうと、ざしきはチントあけておきよりました。ホンニどなたもようおとまりでござります。」 後家「サァ／＼こちへお出でまいか。」 トあんないしておくのざしきへ連れて行くと、下女茶を持ちきたり、 彌次「コウ女中こゝの內は後家御と聞いたが、大分ちひさな子供衆が見えるから、まだ御亭主にわかれて間のねえ、新米の後家さまだな。」 下女「イヽエもう七八年も後から連合はござりませぬ。」 彌次「そんならあの子供衆は誰が子だ。」 下女「オホヽヽヽ。」 ト與太兵衛に顏見合はせ笑ひながら、かつてへ行く。この與太兵衛といふは近在の金持にて、此のうちの後家を世話しておくだんなどのなり。それゆゑ後家の子供は與太兵衛の子なるゆゑ、下女あいさつにこまり、わらひて逃げいだしたるものなるべし。されど與太兵さあらぬかほして、 與「近年は亭主のあるやごめがはやりよるさうで、こゝの賢妻どのも毎年子を產みよるが、又ことしもがいに腹をふくらかいて居よるは、油斷のならぬ事でや。」 ト此の內下女ぜんをもち出しすゑると、皆々くひかゝり、 與太「ナントお前がた

酒はどうで、ひとつやらまいか。」北「それはようごぜえせう。」與太「コレおたご、えい酒ちくと出してくれさつせい、肴は何しかあらまいかい。」下女「はまぐりのむきよつたがありよります。」與太「ソレよからず〳〵、辛子味噌でやりからかそ、いつきにいこしてくれさつせい。」ト此うちかつてより後家きたりて、「これはお麁末でござりますに、ようおあがりなさいまし。そして御膳濟みましたら、風呂へお召しなさいまし。」トあいさつして立つて行くと、やがてぜんもとれて、かはり〴〵湯へはひりしまひたるに、下女鉢にはまぐりのむきみと、あさつきに辛子味噌を添へて、てうし杯とも持ち來ると、與太「サアサア酒のまいか。」彌次「おめへからはじめなせえ。」北八「ドレお酌しやせう。」與太「コリヤとかうなしにやりからかそ。オット〳〵ア、こつぺイとしたえい酒ぢや、ソレあげませず。」ト彌次郎へさす。これより差いつ押へつ、さかづきもよほどまはりしじぶん、後家かつてよりきたりて、「ちくとおあひでもいたしませずか。」北八「持ち合はせました、上げやせう。」後家「ハイいたゞきませずに、コリヤあなた方も與太兵さまの御近所でございますか。」與太「ナニ此の衆は道連ぢや、私こゝの內へゐりわざおこずつて來よつたのぢや。」彌次「うつくしい後家御と聞いて、おめへの所へ泊つたのさ。」後家「オホ、、、、、、、こそ〳〵といこしなさる。」トだん〳〵酒がまはりて、彌次郎北八もそろ〳〵としなだれかゝるゆゑ、與太兵衛すこしむつとしたるかほにて、後家のかたをにらめつけ、「コリヤ〳〵酒ももうよからずに、わし寢げたい、いこねぶたうなりよつた。」後家「ホンニもうお牀取りませず。」トたつて行くと、下女が夜著ふとん持ち來り、牀をとる。與太兵衛はからかみひとへへだてて、次のざしきへ寢る樣子、彌次郎北八はこなたのざしきへうち臥して聞けば、何やら次の閒にて與太兵と後家とひそ〳〵はなししながら、たゝいたりつめつたりさま〴〵のむつまじきてい、彌次郎聞きつけて起きなほり、「い

めえましい、こんな事であらうと思つた。なんでもアノ親仁めこゝの後家をいたしめてをると見えるわ。」北八「さうさ、最前からとかく二人の目つきが、おつりきだとおもつたに、氣のわりいはなしだ、どうぞしかたはあるめえか。イヤ時になんだかむしやうに腹がいたい、あいた〳〵〳〵。」彌次「おいらも急に蟲がかぶつて來た、コリヤこてへられねえ。」トせつちんへ驅け出してゆくと、北八も彌次郎のもどるを待ちかね、せつちんへ行くに、となりざしきの與太兵もしきりにうなりだして、「ア、〳〵何としてか蟲がかぶりよる、アイタ、、、、コレちくと爰さすつてくれさつせえ、コリヤどうしたもんぢや、けふは何も毒なものくうた覺えはないに。」後家「オホ、、、、、よめたことがありよる、オホ、、、、。」與太「イヤ笑ひ所ぢやない、よめたとはなんでや〳〵。」後家「オホ、、、あつちの衆も、いこむしがかぶるといはつせるが、コリヤからしみそのあたりよつたのであらず。」與太「ソレヤどうで〳〵。」後家「アノわし此のやうにお前の子を毎年々々産みよるも、あそこなて、こゝなての外聞わるさに、おそごい事ぢやが、今度の子はおろしてしまはずと思ひよつて、おろし薬買うて、辛子味噌の中に入れてのまずと、こしらへておきよつたを、おたごがまちがへて、はまぐりのむき身につけて座敷へ出いたを、それとは知らつせえで、おまいがたが食はつせえたものぢやに、それでむしがかぶりよるのであらずになア。」與太「ヤア〳〵そんならおろし薬を身が等呑みよつたぢやな、ア、道理こそはらの内がひつくりかへるやうぢや、アイタ、、、。」ト此のうちふすま越しの話を聞きつけ、北

八やつきとなりいたむはらをかかへながら、大きにせきこみ、「コウ彌次さん聞いたか、おいらにおろしぐすりを飲ませやァがつたと、エ、とはうもねえやつらぢやァねえかえ。」彌次「いめえましい、さつきから氣にくはねえやつらだと思つてゐた。コレエ宿のやつらは居ねえか、なぜおいらに毒を食はせやァがつたえ、アイタ、、、コリヤまだくだるさうな。」トせつちんへかけ出して行く。北八「コリヤこゝの後家もすさまじい、となりに居やァがるぢやァねえか、ものをぬかしやァがれ、なぜおろしぐすりをのませた、ア、あいた／＼／＼アタ、、、タ、彌次さんはやく出ねえか、おれがまた、いきたくなつた。」トせつちんへ行く。彌次郎入りかはり座敷へもどりて、「サア／＼すまねえぞ／＼、おもしろくねえぞ。」トとなりざしきのからかみをはづせば、與太兵衛のはらをさすりゐたりし後家飛んでいで、「モシどうぞおしづかにさつせえて下さいませ、なんのちくらくで、ふりわざあげよつたのぢやございませぬ、がらいまちがへてお氣の毒な事しよりました。」彌次「ナニうぬらが得手勝手で子をおろしやァがるとつて、おいらにまで飲ませやァがることたァねえ、さつきにからくだりつゞけて、雪隠へ百度參りをするわ、ア、又いかにやァならねえ、きた八はやく出てくれろ、あいた／＼／＼。」ト又かけ出してゆくと北八いりかはり、「イヤもうがうせえにくだるわ、なんでもコリヤすまねえぞ／＼、ハァ又出さうになつて來た。」彌次「サァ北八あいたぞ、いけ／＼もうかまふこたァねえ、ざしきの中へたれちらさう。」與太「イヤ、おのさたちはまだしもくだりよるからえいが、わしはねからくだりこなしに、いこいたみよる、ア、じゆつないじ

ゆつない、コレ醫者よびにやらつせえ。」ト無上に苦しがるゆゑ、後家はあわてゝかつてへゆき、近所の醫者を呼びにやると、さつそく来るはかはらけ色の木綿布子を著たる坊さま、あいくち壹本きめてしかつべらしく、ざしきへとほると、彌次郎、北八はせんこくよりしきりにくだりしゆゑにや、少しはこゝろよくなりたれど、わざとまだくるしきてい。後家「コリヤ道竹さま、御大儀でござらせる。」道ちく「御病人はどなたぢや。」彌次「アイわつちらはこゝのうちで、とんだものを食はせられて、大きな日にあひやした。」道竹「ソリヤなんでや。」彌次「おろしぐすりを飲ませられやした。」道竹「ドレお脈見ませう、ハテ懐胎のお脈とは見えませぬが、いこくだりよりますか。」彌次「イヤもうだらつびやうしに雪隱へいきつゞけでござりやす。」道竹「ソリヤ大かた水じものゝ下りよるのであらずに。」ト又北八がみやくを見てゐるうち、與太兵衛はしきりにうなり出して、ころげまはりてくるしがる。道竹「となりの座敷も病人か。」後家「ハイあつちのも見てくださいませ。」道竹「ドレ〳〵。」トとなりのざしきへゆき、與太兵衛のみやくを見て、與「イヤこの人はむつかしい。」與太「アイタ、、、。」道竹「さうであらず、あつちの二人はもうさしたることも見えぬが、コリヤりうとむつかしい、くだりよるとえいが、鍼一本たてゝいつきにくだらかしてやろかい。」トくわいちうより針を出してはらへたてると、與太「あいた〳〵アタ、、、。」道竹「こゝでや〳〵、いこしこりよつた。」與太「ア、じゆつないじゆつない。」道竹「コリヤしまうた鍼がぬけんわい、お家釘拔かしてくれさつせえ。」後家「エ、釘ぬきでぬいたらいたみませうに。」道竹「そんならちからいつぱい抜いて見よ。」ト無理に拔かんとするに、はらの皮へ巻きついて拔けず。與太「あいた〳〵。」ト手足をもがきくるしみ、ウ、ントうしろへそりかへりて目を見つめる。道竹「ヤアコリヤ目をまはらかいた、ソレ

水なりと早うもてござい。」後家「エ、めごい事でや。コレノおたこ水一はいもてこいやい。オ、イ與太兵さまァ與太兵さまァ。」道竹「コリヤいこやくたいぢや、灸すゑたがよからず。」後家「コレノそこの袋艾をもてこい、早う〳〵。」ト此の内下女艾をもち來り「ハイ〳〵もて來よりました。」道竹「サア傘灸ぢや、わしへさいて居よる、足の爪先へすゑさつせえ。」下女「こゝでや〳〵。」道竹「オ、アッ、、、コリヤ私の足ぢや。」下女「ハァお前のぢやなけらにや、誰の足へすゑよりませう。」道竹「されば誰の足がよからずなァ。」後家「エ、このお醫者樣は、肝心の病人の足ぢやあらずに。」道竹「ホンニさうでや、そこにはとんと氣がつかなんだ、サア〳〵こゝでや〳〵。」ト道竹がおさへてゐる與太兵衞の足のつまさきへ、しこたまもぐさをのせて、火を付けあふぎたてると與太兵衞すこしいきふきかへし、「ア、〳〵ウ、、、。」道竹「しめた、もうよからず〳〵。」後家「氣はついてえいが、道竹さま、此のお腹のはりはどうさつせえます。」道竹「どうもぬけんに、ほつたらかしておこまいかい、あまり邪魔にもならんぢやあらずに。」後家「エ、これが邪魔にならないものか、帶しよることがでけぬくからず。」道竹「そんなら鐵槌もてござい、たゝきこんでおかずに。」後家「エ、めつほふかいな、ぬいてくれさつせえまし、おぞいお醫者さまでや。」道竹「じようちく〳〵、コリヤはりに病がからみついてぬけんぢやあらずに、いま一本さしてやらず。」トまた外にはりをたてたるに、これもぬけず、二本まで、ひいてもしやくつてもぬけず、あまりのいたさに病人こらへかねてウン〳〵トうめきくるしむ。後家「コリヤ道竹さま、こちのお客さまをなんとさつせえます。」トなみだぐみてすこしはらだちごゑにいふ

と、道竹しばらく考へて、「えいてやく\、いつきにぬいてやらずに。そのかはり入川のものがある、食椀ひとつと元結が壹把、あみ笠に杖壹本と、錐壹本もてござい、それで抜きやうがあります。」トいふ故、後家はこゝろえぬながら右の品々を取りそろへていだせば、道竹く\だんのおしわんの雨はたをきりにてもみあなをあけ、それへもとゆひを雨はうよりとほし、よきかげんに切つて、此のわんを病人のはらなるかの針の上へ伏せておほひ、せなかへもとゆひをまはしてうしろにてむすび、道竹「サア／\是れからちくと病人を立たせたうござる。」トこしをかゝへて與太兵衛を立たせ、おびを締めさせて、又あみがさを着せて、杖を持たせると後家きもを潰し「ヤアコリヤどうさつぜえます、こんなことして針がぬけずか。」道竹「はてかやうにいたして、わし針を習うた師匠とこゐのへ抜いてもらひに、つれていきよるのでござる。サアサアいざかつせ／\。」ト病人の手をひいてつれてゆく。後家も呆れかへりて、皆々あとにつきて出でてゆくと、彌次郎北八はしじうこれを見て、をかしさはらをかゝへてゐたりしが、やがてうちふしばらくのうちおひとねいりしが、目ざめたるに、かの與太兵衛やう／\と針がぬけて、今歸りしやうす、家内の騒ぎ耳に入りてふたゝびねられず。彌次「コウ北八どうだ手めへは。」北八「イヤさつぱりとよくなつたが、何だかさう／\しくてならねえ。」彌次「さうさもうなん時だらう。ナント是れからは、ちつと早立ちにして、一日も早く江戸へ歸りてえの、七ツだちにしようか。」北八「イヤそれぢやァあんまりはやすぎて、道がさびしからう。」彌次「ナニさうでもねえ、いくらもその時分からたつ人があるものを。ときにあかりが消えた、オイちつとたのみやせう。」ト手をたゝけば、かつてより下女きたり、「およびなさいましたか。」彌次「コウ火をともしてくれねえ、そしてもう何時だの。」下女「ハイ七ツでもございませず。」トいひすてゝ勝手より火をともし來り、あんどうへつける。彌次「モシ七ツならもう立ちやせう、飯の支度をしてくん

なせえ。」下女「ハイ／＼御膳いつきにでけよりませずに。」ト勝手へゆく。此のうち二人はおきいでて、手水をつかひ仕度するうち、下女膳をもち來るに、早速二人は支度とゝのへ、やがてこのやどをたちいづるとて、

古郷へくだる腹さへこゝろよくなりしは重荷おろしぐすりか

かくて此の宿を打過ぎたるに、くらさは暗し、夜風身に染みてうそ寂しく、未だ往來の人も見えざるこそ道理なれ、やどやの女時をとりちがへて、七ッ時なりといひしは八ッ時分にて、世間潜まりかへり、唯並木の松風の音のみなり。北八「こいつはまだ七ッにやァならねえあんばいだ。」彌次「さればなんだか寒くて、ぞく／＼と脊中をつかみたてるやうだ。オヤ向うに火が燃えるはなんだらう。」北八「エヽをかしな匂ひがする。ハヽアきこえた、あれは人をやく燒場であらう。」ト見やる目さきへ、ぴかり／＼と飛んでゆくはひとだま、北八「エ、きみのわりい、人魂がとぶわ。オ、さむやの／＼。」彌次「なんだか知らぬが、がうてきに凄くなつて、體中がふるへて來た。」ト此のうち足もとの草の中からごそ／＼。北八「ヤア／＼なにか眞白なものが出たぜ。」犬「わん／＼／＼。」彌次「エ、此の畜生めが、あつたら肝を潰させた。時にコリヤアとんだ夜深に出かけた、さいはひこゝに辻堂のやうな所が見える、ナント爰で一ぷくのんで、もうちつと夜明け前になつたら出かけようぢやァねえか。」北八「いかさまさうしやせう。」トかの辻堂とおぼしき二間四面ばかりの、かやぶきの堂にたち寄り、格子戸をそろそろとあけて入り、二人はこゝにふろしきづゝみの桐油などを、しきものとして休みゐたるが、暫くして人のあし音聞え、此の辻堂の前にちかづきたるふたりづれ、一人はをんな、ひとりは男のこゑにて、「コリヤち

くとの間はよからず、宵からおのさをねつらひよつたのぢや、サア／＼こゝへはひりなさい。」女「わしがいにおそくならずに。」男「ハテちくとはよからず、わしそのだいにやァ朱塗の櫛買うてやらずに。」女「櫛よりかァ焼杉の下駄ァかうてくれさつせえ。」男「オ、サじようちした、じようち／＼。」トいひつゝ打ちつれてこの辻堂のかうし戸をあけてはひれど、もとよりくらやみの事なれば、外に人のをるとも知らず、「わし此の重箱にぼたもちがある、おのさひとつくはまいか。」女「そりやよからず／＼、私がいにひもじい、ひとつといはずと五ッ六ッくれさい。」男「サア／＼やらんせ、こゝでや／＼。」トかのぼたもちをむしやり／＼としてやりながら、ゑんりよなく／＼いちやつくそばに、北八いきをころしてゐたるが、ひざの下に竹ぎれのありしを取つて、かのおとこのこゑを目あてに、ちよいとつゝけば、男「アイタ、、、、コリヤ何しよる。」女「なんでや、わし何もせずことはないに。」トいふ女のこゑを目あてに、またちよいとつくと、てうどしりのねぶとのあたりをぐつさり、きやつと飛びあがりて、女「あいた／＼、オ、いたいいたい、お前なんぜわしの尻つゝきなさる。」男「ナニわしつゝくもので。」女「アイタ、、、アレまんだつゝつきよる。」男「エ、ちくらくいふな、アイタ、、、イヤお身わしを、アレ又、あいた／＼／＼あいた、コリヤ何しよるアイタ、、、。」女「わしもアイタ、、、。」トふたりはむしやうにつゝきたてられ、いたがるを北八をかし／＼、彌次郎もともにこたへかねてふき出し、北八「ワハ、、、。」彌次「アハ、、、。」ト大わらひに笑ひ出せば、ふたりはきもを潰し、まつくらさんばうかけ出して、いつさんに逃げて行く。北八「ハ、、、、とんだ殺生をした、もうちつとわらはずにゐたらおもしろかつたものを。」彌次「ホヽニいづくのうらでも色事はすたらねえものだな。」

觀音のおはすか知らず辻堂にふたり根太の尻くらひ逃げ

此の時はや往來の人聲して、助郷馬の鈴の音、「シャン〳〵。」馬士のうた「伏見女郎衆は情が深いよえ、あすの朝までのせからかいたえ、ドウ〳〵。」彌次「オヤもう夜があけるさうだぜ。」ト格子戸を開きて見れば早東の方より雲たな引きたるに、いざやとて二人は打ちつれ出でんとして見れば、ふろしきづゝみすててありけるゆゑ、北八「ハ、ァ今のやつらが狼狽へて、こんな物を忘れていきやァがつた。」トつゝみを解きてみれば、重箱あり、蓋をとればぼたもちなり。彌次「ハ、、、コリャいいものだ、北八もつていかつせえ。」トこゝをたちいで行く〳〵、程なく中山道大垣みちの追分にいたる。ちやみせのおやぢ、「休まつせえまし、茶のいればなのんでござらつせえまし。」北八「ナント一ぷくやらかしやせう。」ト茶店へはひると、ばゞ茶をさしいだす。彌次「こゝで今の物を茶うけに出さつし。」北八「ホンニそれよ〳〵。」トひつさげてきたりしふろしきのうちより、重箱のぼたもちをいだして、くひかゝると、ちや屋のばゞ目をはなさずこれをみてゐたりしが、やがておやぢにさゝやき、「あれを見さつせえ、よめぬ事でや。」おやぢ「オ、ほんになァ。」トぢゞばゞが不思議さうに、二人がぼたもちをくふ前へまはり、うしろへまはりて見てゐたりしが、おやぢ「モシそのぼた餅は、どこで買はつせえてござらせえた。」北八「ナァニ是れは道で拾つて來やした。」おやぢ「ハァその重箱に入れよつてか。」北八「さうさ今朝わつちらァあんまり早く宿をたつたから、道で辻堂へはひつて夜のあけるをまつて居るうち、そこへまた男と女とふたりづれで來て、此の重箱を捨てていきやしたから、ひろつて來たのだが、どうぞしたかえ。」おやぢ「ハ、ァ合點がいきよつた。ソリャ私の所の重箱ぢやに、よんべ倅めにぼた餅もたせて、垂井までやりよつたに、

いんまにもどりよりませぬて」〳〵 北八「ハヽアそんならお前の所の息子どのが出合ひであつたな、コリヤをかしい。」弥次「思ひがけねえ御馳走になりやした、ソレ重箱はおけへし申しやす。」トぼた餅は皆あけてしまひ、重箱をかへせば、おやぢ「コリヤかたじけなうござる。」北八「ハヽヽヽサア出かけやせう。」トこゝをすぎて青のがはらにいたる。こゝにくまさかがもの見の松のあとあり、

熊坂は名のみ殘れり松が枝をさしてのぼれる月の輪の照り

かくて赤坂の宿近き松原にさしかゝりたるに、草刈子どもが聲々にうたひつれて歸るが、あとになり先になりて、うた「木曾のかけはし太田にわたし、碓井峠にやアレ輕井澤、ヤアトコサヨウイトサ、コノなんでもせイ引。」このうち並木によしずたてかけたる出ちや屋の親仁、「モシ休んでいかつせえまし、茶ア參つてござらせえまし。」弥次「ア、えいとこな、いつぷくやらかさう。」北八「とつさんもう何時だの。」おやぢ「アイなんどきであらずか、おまい知らせえぬか。」弥次「エヽおいらが知らねえから聞くのだが、慥かにもう九ッ半ともいふやうな事であらう。」おやぢ「アイサその時分でもあらずに。」北八「インニヤそこ所ぢやアあるめえ、もう八ッだらう。」おやぢ「アイ八ッでもあらずか。」ト此の内又てんびんぼうのさきに、錢一貫ばかり繩からげにして、くゝりつけたるをひつかたげたる男同じくこゝにやすみて、「とつさま、もう七ツでもあらずか。」おやぢ「さうで〳〵、七ツでもあらず。」弥次「イヤ此の親仁どのは、人のいふ通りにばかりいつてゐる。ナニ七ツなものか、ちやうど九ツ半に違へはね

え。」おやぢ「ソレ知つてるさつせるなら、間はずこたァないになァ。」トいひつゝ茶を汲んで出すと、かの後より來りし男、「とつさま、こゝらにやァ、錢は貳朱に何ほしか賣りをる。」おやぢ「八百七十せるであらず。」男「そんなりやナゝト、おのさたちへわしちくとお願ひことがありをる、わしやこゝからまんだ六七里も戻りをるものぢやが、此の錢が邪魔くさになりをる、どうぞ貳朱がの買うてくれさつせえ、やすうしておかずに。」彌次「きさま壹貫もつてるの、それだけで貳朱なら買つてやらう。」男「ハヽヽ、あたけたこといはつせる、八十にしておかずになァ。」彌次「イヤそんなら九百五十で手を打たうか。」男「エヽ、憂いことでや、せず事がないに、九百五十にまからかいでやらずか。」トなはを解きて小錢九百五十文さし出すと、彌次郎ふところより南鐐ひとつ取りいだして渡せば、手にとりてしばらくひねくりまはし、「コリャ此のかねはどうぢややら氣つかひな、とりかへてくれさつせえ。」彌次「ドレドレわるいかねはないはずだに。」ト手にとりて見れば、どうみやくなるゆゑ、これはふしぎとおもひながら、そのかねをうけとり、又ほかに出してやると、男「ハイハイこれは。」トいたゞきてしまひ、錢をわたし、茶代をおきて出てゆく。彌次「九百五十とは安い錢だ、併し小錢だけやつかいものだが、北八そのふろしき包の中へ入れてもつてくれろえ。」北八「エヽ、邪魔なことを、それはいいがどうも合點がいかねえ、おめへそのかねを見せな。ドレ／＼コリャまんざらなものだ、今の奴めがどうやらをかしな手つきをしやァがつたが、コリャアあつちに品玉の種をもつてゐて、すりかへられたのだも知れねえ。」彌次「ヤヽヽ、さういへば成程、おいらがこのやうなかねを持つてゐたおぼえはねえ、

エ、いめえましい、あいつめはどつちのはうへいきやァがつた。」ト きもをつぶして、そとへかけ出し見たとちも見えず。これは道中にてえてはあることにて、どうみやくを持つてきたり、こなたより出すかねと手の内にてすりかへることとおり、途中にてかならずぜにをおふべからず、旅行の人こゝろえべき事なり。彌次郎勝手を知らねば、此の手れんをいつぱいくひたるなり。北八「こいつはいい業さらしな。」彌次「エ、手めへもそれと氣がついたら、なぜそのときいつてくれねえ。モシいまの男はさだめし此の邊のものだらうが、どこのなんといふやつだね。」おやぢ「ナニわしが知りませずか。」彌次「イ、やきさま知らねえたアいはせねえ、何だか近付きのやうな挨拶ぶりであつたぢやアねえか。」おやぢ「イヤあんなおぞいことせるやつは、誰にでも馴々しういうて來なるものでや、わしこつぺり知らずこたアないに。」彌次「なけなしの物をとんだ目にあはせやアがつた。」北八「それもお前の慾頰から、こんな目にあふのだ、しかたがねえ。」ト 彌次郎ひとりはらたて見てもせんかたなし。これもときのさいなんとあきらめながら、大きにふさぎ、此處をしを／＼とたちいづるとて、

壹貫の錢をば棒にふりもせでわれに胴脈かつがせにけり

北八「ハ、、、狂歌どころでもあるめえに、いいわな、どこぞへいつてその貳朱で又はぐらかしてやるがいい、氣を落すこたアねえによ。」彌次「思へばいめえましい。イヤァレ／＼むかうへ棒をかついでいくやつが、慥かに今のやつぢやアねえか。」北八「ホンニうしろつきがよく似てゐるわえ。」彌次「達へなし、あいつだ／＼。」ト 一もくさんにかけ出して追ひつき、「コノやらうめが。」ト つかみつきさうにすると、さきの男びつくりしふりかへるひやうし、かたげし棒にて

彌次郎のあたまをこつり、彌次「アイタ、、。」さきの男「コリヤなんでや、わしに肝をつぶらかさせた。」トいふ顔を見ればその人でなし。彌次郎あたまをかゝへながら、「またしくじつた、御めんなせえ。おかげであたまがくわんといふと、目の玉が未申のはうへ飛び出した、ア、いてえ〳〵。」トこごといひつゝ行く程に、杭瀬川六のわたしといふにいたる。

するほどの事に先非を杭瀬川ろくのわたしのろくでない旅

やがてこの渡しをむかうへ越ゆると、かごかき「モシ旦那さま、駕籠やらまいか、安うしていかずにな ア。」彌次「駕籠は嫌ひだ。」駕籠昇「ハテさういはつせずとナ、乗つてくれさつせえ、コレ〳〵旦那々々。」ト二人のあとよりついてきたる。北八「エ、いらねえといふにしつこい。」駕「さうではあらずが、わしどもも隙ぢやに、こつぺりくはずことがでけんわい、どうぞ乗つていざかつせ。」彌次「ハテどこまでついて來てもむだなはなしだ、のりたくても錢がねえから。」駕「エ、がいにちくらくばかしいはつせる。今年はまんだ通りがすけなうて憂い事でや。それになァ、聞いてくれさつせえ、こゝなては米が百に一升せるし、錢はやすし、諸色は高し。」北八「コレ〳〵そんなにならべたてて、ついて來ても出來ねえ相談だ、もうけへらつせえ〳〵。」駕「美江寺まで百五十くれさつせえ。」彌次「とんだことをいふ、きさまわたし場からもう壹里もついて來たらうから、美江寺はツィそこに見えるわ。」駕「そんなりや郷戸まで貳百でやらずか。」彌次「百五十なら乗つてもやらうか。」駕「エヽまけらかいてやらずに、乗つていざかつ

せ。」彌次「ナニまけるか、貴樣さういつても駕籠がこゝにあるか。」駕「そこなてへござらせえ、駕籠借りてやらずに。」ト此の内みえじの入口に到ると、かごかきぼうばなの小家に走りつきて、「どうでや太郎兵をるか、鄕戶まで片棒いかまいか。」トおもてより聲をかくれば、これも駕籠界の內と見えて、かの太郎兵衛、「いかずいかず、いんまめしくひをる、ちくと待つてくれさつせえ。」駕「旦那、いつぷくすはせえましよ。」彌次「そんなら早くさつせえ。」駕「サアサア、太郎兵やらまいか。」太郎「いんまいかず、もういつはいやりからかそ。」駕「ようくひをる、えいかげんにしていざかつせ。」太郎「麥飯でや、りうとふんだくに喰ていかんと、いつきに腹がへりをる、コリヤばんばあどの、もういつはいくれさつせえ。」駕「エ、此の男は、旦那が待つてござらつせる、どうでやどうで。」太郎「私片棒にいかずこたアいかずか、足にでけものがでけてナ、あるきをる事がでけぬくいが、それでもよからずか。」北八「ハヽヽアなんのこつた、駕籠舁が歩かれねえぢやアつまらねえ。」駕「そんなりやとなりの趾跛めをたのまず。」ト又此のとなりの内をさし覗き、「どうでや輻七、お身鄕戶まで片棒いかまいか。」ふく「いかずいかず、いんま飯くていかず。」彌次「エ、又飯か、コリヤアはじまらねえ、もう駕籠はよしにしよう。」ふく「イヤそんなりや食はまい、いつきにいかずいかず。」駕「ふく七お身の駕籠借らまいか。」ふく七「す、かしてやらず。併し私所の駕籠は底がぬけてをるが、それでもよからずか。」駕「底位はなうてもよからず。」彌次「ナニとんだ事を、底のねえ駕籠に乘られるものか、をへねえひやうたくれどもだ。」ふく「家

吉所にあらずに。サア旦那樣、こそ〳〵とござらせえまし。」トかけ出して半丁ばかり先にて、やうやうとかごをかり出して來り、駕「サアのらせえまし。」彌次「乘る事は乘らうが、見れば相棒どのが、とはうもねえびつこと見える、それでも駕籠が擔がれようか。」駕「かきませずとも、おそがい事アござらない。」彌次「イヤどうかびこしやこして乘りにくからう。」ふく「乘りぬくいこたァ違ひはなからず、しんばうしてのつていざかつせまし。」トかごに打乘れば、やがてかきいだす。先棒は、ふく七びつこの事なれば、かたひしとして、彌次郎大きにのりごゝろわるく、しりをいためて、

彌次「こいつはへんちきな目にあふ、どうぞおつことさねえやうに、やつてくだせえ。」彌次「コリヤァあぶねえ駕籠だ、きみのわりい。」北八「ソレ〳〵もつとこちらへよつて、道の高い方へかたあしふんがけてあるくがいい、それでつりやひがよくなつた。」あとぼう「ソレ道がわるからず。」ふく「オ、サジようちぢや。」ト長いあしのかたへよけようとすれば、道の地形たかく、みじかき足のかた、いよ〳〵ひくくなり、かごはよこつたふしとなりたるに、彌次「コリヤ〳〵どうする〳〵。ア、おつこちさうだ。」ふく「落ちたら又のらつせえまし。」彌次「イヤこいつとはうもねえやつだ。」トりきむはずみに、かごの中からころりとおちて、大きに腰の骨を打ち、

彌次「あいた〳〵〳〵〳〵。エ、コリヤ、うぬらさつきにから、おれをてうさいばうにしやァがつて、なぜこんなびつこめにかつがせて、おつことしやァがつた、猿まつめが。」駕「せずことがない、どこぞぶたつせえたか。」彌次「ぶつたどころぢやねえ、いたくてならねえ、いめえましいやつだ。」トはらたちまぎれに、あとぼうのおやぢをつきたふせば、よろ〳〵として、「コリヤどうさつせる。」トつかみつくを、突きたふし、いきづゑを取つて食らはせると、さきぼうのびつこやつきとなりて、立ちかゝ

るを、北八とつて突き飛ばす。そのうちあとぼうのおやぢ、彌次郎にしたゝかぶたれて、ふしたふれ、ウンノヽとうめきだしてかほもからだも血だらけになり、苦しむていに、あたり近所の者どもおひノヽかけ集まり、彌次郎をとりおさへて、手おひのおやぢをかいはうするに、ことのほか苦しきてい、ふくじ大きにいきり出し、「コリヤすまいぞノヽ、相棒に大きな怪我を出からかいた。」北八「エ、べらぼうぬかせ、うぬらが滿足でもねえなりをしやァがつて、駕籠かきも凄まじい。なぜおらが連れをおつことした。」彌次「おいらもあばら骨をへしをつたさうな、あいたノヽノヽ。」トわざと顔をしかめていたがるていに、北八いよノヽ大たばに出かけて、はりこみをくはせ、まひをさめんとする内、駕籠舁はしだいに顏の色かはりて、苦しむやうすに、皆々きつけよ水よと立ちさわげば、彌次郎きもを潰し、「コリヤもう、たがひにはりやひになつて、怪我をしたは五分々々だから、どなたもそこを宜しくお頼み申しやす。」ト少しをれて出かけたるに、ふくじつげこみむづかしくねぢかゝれば、彌次郎色々ことわりいひこ、かうやく代になんりやうひとつ出して、やうやく此のいさくさすみければ、「是れはどなたもお世話でござりやした。サアノヽ北八、はやくいかう。」トむしやうやたらにかけいだす。北八「コレサもう済んだから、そんなに逃げだすこたァねえ。」彌次「イヤサ早く來さつせえ、逃げだすには譯がある。」トやうやう七八丁もこゝを行き過ぎると、北八「なんのこつた、又貳朱ひとつ唯とられて、おめへ江戸までかへる金があるか、なんの乘らねえでもいい駕籠に乘つたからの事だ、ばかノヽしい。」彌次「ハ、、、おいらがぬからねえ事を見さつし、膏藥代にやつた貳朱は、さつきの胴脈、それだからむしやうにかけ出したのだわ。どうして卽席にこんなちゑが出るやら、ハ、、、。念のため改めて見よう。」トふところの金を出してひとつひとつあらためて見れば、やつはりかのどうみやくはのこつてあり。彌次「ヤアノヽノヽ、こいつはつまらねえ、胴脈だとおもつて出してやつたかねはや

つぱりほんたうのかねであつたさうで、こゝに胴脈めが殘つてけつかる、いめえましい。」

駕籠の内ころげ落ちたる怪我よりも唯とられたる貳朱はいたごと

かくて此の間違ひにいとゞ氣もふさぎつゝ、うか〳〵と絲ぬき柚木川を打過ぎ、鄕戸の渡しにさしかゝりし頃は、はや西の山の端に日影傾き、おのづから道ゆく人も足ばや過ぐるに、おくれて二人はしを〳〵とたどる跡から、浪人めきたるふたりづれ、いづれも髮髭ぼう〳〵として、眼ざしきよろつき、身にはへんべらもののあかづきたるを引つぱり、柄絲切れし大小をさし、壹人は鐵の銅金入れたる大脇差をよこたへ、少しの包を脊負ひ來るが詞をかけて、浪人「オイ〳〵、きさまたちは江戸ものだな、おらもゞうくにどうぜんだ、はなしながらゆくべい、待ちなさろ。」彌次「ハイ、あなたがたも江戸かね。」浪人「ナニ江戸近邊だが、あつちのはうへはつら出しをする事がならねえわけで、久しくいかねえが、きさまたちは何か伊勢參宮か、但しは商ひ用で旅行か、商賣は何をさつしやる。」彌次「イエもう商賣はしまうたや、御覽のとほりの風體、つまらねえ身の上でござりやすが、おめへさまがたはどこへお出でなせえます。」浪人「ナニおいらはどことつてあてはねえ、年中かうして旅をあるくがしやうばいといつたら、大體見脈でもしれさうなことだ。」北八「コウ彌次さんおいらはちつと急ぎやせう。モシあなた方、無躾ながらわつちらはお先へ參りやせう。」浪人「エ、泊りも知れてある、そんなにいそぐこ

たァねえ。ハテきさま、おいらををかしなものだと氣遣ひがる樣子だが、何もこはいことも恐ろしい事もねえ、たかでどろばうだよ、ハ、、、。」彌次「ナアニわりい洒落をおつしやる。」涙人「イヤしやれではねえ、コノ男もおらが仲間だが、昨夕大きにしくじりをつたノウ伴吉。」作吉「イヤ昨夕の奴めはをしい事でや、越知川から眼張つてつけをつたが、ふんだくなことはなからずが、金なりや五六十ばか・し持つて居樣子、青野が原でえい間に後からぶつかけたりや、たしか肩骨から大けさにやりからかいたと思ひをつたに、存じの外いつさんに逃げだしけつかつて、かいくれ見うしならかいたは、どしても大津の仕事から、間のそこねをつたのぢや。」ト何のゑんりよもなく大聲あげてのはなし、北八うそきみ悪く、これはひよんな者と道づれになりし、どうぞしてはづさんと、彌次郎のそでをひく／＼に、彌次郎は又此のものどもがしやれにこはがらして、我々をはぐらかしあそぶならんと思ひながら、されどもきやつらによわみを見せじと、がた／＼ふるへながら、彌次「ハ、アおめへがたはとんだ御商賣だな、わつちらも泥坊こそしやせぬが、年中旅をあるいて、山の中でもよる夜中獨りであるきやすから、こはいといふ事はねつから知りやせんが、中には、はじめて旅をする手合に、おめへがたのいふやうな事をいつて聞かせたら、さぞ恐ろしがるでござりやせう、わつちらはこんなに野郎は輕少に見えても、劍術は滅法流のゆるしをとつた男、まさかの時は百人でも千人でも造作はねえ。そこへいつちやァ大風なものさ。ハ、、、。」涙人「イヤきさまは話せる男だ、今夜は同宿して話さうか。」北八「エ、コレサ彌次さん遲くなる、もつと急ぎなせえな。」涙人「ハ、、、、つれの人は

大分おいらを氣遣ひがる樣子だが、ナアニたかの知れた貴樣たちの樣なものに、目をかけるものか、隔心なしに同宿さつしやい、加納は糟田屋がよからう、そこへいつしよにとまらつしやれ。コレ伴吉きさまは今の事を鹽梅よくやつて、跡から糟田屋へ來さつしやい。」伴「オツトじようち／＼。」ト何やら浪人ものとさゝやきあひ、一人あとへさがると、かの浪人はふたりに打ちつれだちゆくに、彌次郎も今は何とぞして、此のらうにんをまかんとおもひ、色々くふうたら／＼はづさんとするに、とかく浪人つきまとひて、とやかくするうち、加納の宿にいたると、兩側のはたごやから、女「おとまりぢやござりませぬか、おとまりな／＼。」浪人「イヤ引ツぱるな、糟田屋へゆくのだ。」女「かすた屋はこれでござりますに。」浪人「ホンニこゝだ／＼、サア／＼入らつしやれ。」北八「イヤわつちらア、もつとさきへいつて泊りやせう、ノウ彌次さん。」彌次「いかさまさうか。」女「モシイナおつれさまは泊ろとおつしやるに、サア／＼お出でまいか／＼。」トふたりをむりに引きこむ。ていしゆ「是れはようお泊りでござりやす。コリヤ／＼おかめ奥の六疊がよからず。」女「サアこつちイお出でまいか。」ト案内して奥へつれゆくに、二人もせんかたなく打ちとほれば、浪人「コリヤ女中、まだ一人あとから來をる、氣をつけて下さい。」女「おむかひでも出しませずか。」浪人「イヤ／＼こゝの内へさして來をる筈だ」女「すぐにお風呂へおめしなさりまし。」浪人「サアきさまたち湯はどうだ。」彌次「まづ／＼あなた。」浪人「ドリヤおさきへまゐらうか。」トふろ場へゆくあとにて、北八「コリヤとんだものと相宿した、おもしろくもねえ、なんのはづせばいいことに、おめへきいたふうに相手になつたから、つけこまれたわ。コリヤ今夜はよつぴといふつかりと寐

られはしねえぞ。」 彌次「なんのかまふことがあるものだ、おれもさうはおもつたが、あいつらに弱みを見せてつまるものか。たとへ護摩の灰だらうが、盗賊だらうが、此方はしらきちやうめんの旅人、何も頓著はねえわな。」 北八「それだとつて氣味のわりい。」 ト話のうちかの浪人湯より上り來て、 浪「サアござらつせえ、えい湯だに。」 トこれより二人もふろへはひりしまふと、かつてより膳も出てしたくしまひ、たがひに打ちくつろぎて、 浪人「ナントきさまも最前つまらねえ身の上だといはれたが、幸ひやつとうも出來るとのはなし、ものは相談だが、よい養子のくちがある、どうだそこへいく氣はねえか。」 彌次「ハイわつちらがやうなものでもかえ。」 浪人「お、サきさまの見こみは眼つきがきよろ／＼して、どうか小盗みでもしさうな顔つき、末たのもしい、さだめて酒もなるだらう。」 彌次「さやうさ酒は大好物でござりやす。」 浪人「ソリヤよいことだ、しかし酒も醉つて寢るやうぢやァつまらねえ、飲めば飲むほど根性骨がふとくなつて、少々は酒亂で、すつはぬきでもするやうな酒だと、云ひ分はねえに。」 北八「それもしかねはしやせぬ。」 浪人「それはいよ／＼たのもしい、をしいことには小氣ものと見えるが、それで膽玉がふとくて横道もので、人を絲瓜とも思はぬやうな氣性だと、直に相談が出來る事だになァ。」 彌次「ソリヤとんだお好みだが、さきはなんでござりやす。」 浪人「知れたことゝどろばう商賣だ。」 彌次「エ、道理こそ、とはうもねえ、わつちらはそんな事は嫌ひでござりやす。」 トはなしのさいちうに、せんこく道にて別れたる、浪人ものゝつれ作吉きたりて、「ヤレ／＼、やつと尋ねあたりをつた、親かたいん

ま來をりました。」トあいさつの中、作吉が膳をもち來ると、やがて食ひしまひたる頃、ていしゆあわたゞしく來りて、ていしゆ「さておきのどくな事がでけをりました。明日はなァ、どなたさまも早う立たつせることがでけませぬ、今夜なァ當宿へとまらせえたお旅人がた一統に、問屋から沙汰のありをるまでは、お一人でも立たせますろなと觸れて來をりました。」彌次「ヤァ／＼、そりやどうして／＼。」ていしゆ「イヤ宵のうち此のさきの松原でなァ、金を取られた人がありをりますが、その取りをつたやつ、當宿の内へ泊つてをらずと、旅籠や中一軒々々にせんぎしをりますとのことでなァ、その濟みをるまでは旅人がた一人も立たせることがでけをりませぬ。」北八「エ、それだからのことだ。彌次さんコリヤどうする。」彌次「ナニどうするとつて、こちとらはそんないさくさのある者ぢやァなし、何時立つてもかまひさうもないものだ。いつその事今からすぐに出立しようか。」ていしゆ「ソリヤならまい／＼。ハテあなたがたにかぎつて、そんなことのなからずことは、身が等もぢようちしてをる事でや。お覺えがなけらにや、がいにおそがいこともなからずになァ、おちつかつせえてござらせえまし。」トいひすててかつてへゆくに、作吉ふところよりふるきもめんじまの財布を出して見せかけ、「ハ、、、、親方いんまのはなしは是れでや／＼。」旅人「オ、出來た／＼。コレ見さつせえ、今こゝの亭主がいつたは此の事だ、あとの宿からつけて來た旅人を、この男に言ひ付けてとらせた財布、コリヤしつかりとあるぞ／＼。」ト財布をひねくり廻し、にこ／＼ものにてふところへ入れると、彌次郎いよ／＼きもをつぶし、「エ

エわつちは今まで、おめへがたが戯談をいひなさると思つてるたが、ほんたうにおめへがたは、そんな商賣をするのかえ、それぢやァ今宵相宿は御めんなせえ、今こゝの内へ斷つて、座敷を別にしてもらひやせう。」道人「ハ、、、、野暮な事をいふ男だ、どのやうな事があつたとて、道連のきさまたちに、難儀をかけるやうなおらでもない、しかしそれをたつてきさまが此の尻割りをしようといふと、おらがくちひとつで、倶に引きずりこむ事も知つてるる。マァ何にしろだんまりで見て居さつせえ、さりとは素人といふものは小氣なものだ、氣遣ひせずと酒でもいつはい呑まうぢやァねえか。」北八「イエもう酒も咽へはとほりやせぬ。」道人「ハ、、、、ハ、、、貴樣達は江戸つ子に似合はない、氣の弱い事をいふ、構はずともうねさつしやい。」彌次「どうして是れがねられるもので、何だかわつちらァ、石の上にすわつて居るやうで、くつた物も落ち著きやせぬ。」ト此の内下女きたりて、「もうおかたけなさりまし、お牀しきませずに。」ト夜具をはこびてとこをとり行くと、らう人ものふたりそのまゝところげてねるよりはやく高いびき、彌次北八は寐入りもやらず、北八「ナント彌次さん見なせえ、のぶといやつらぢやァねえか、アノがうせえな鼾は。」彌次「ホンニとんだめにあふ、なんぼあいつらがあんなにいつても、一緒に來たといふもんだから、まきぞへにあつちやつまらねえ、いつそのこと、おらァ今からこの內をぬけて出ようか。」北八「にげ出すならおいらからさきへ逃げよう。」彌次「イヤ/\、なまぜかし逃げだすを見つけられたら、どうかおいらがうさんくさく思はれて、結句

疑ひを受けるやうなものだぜ。」北八「それもさうだが、ぜんてい彌次さんおめへがわりい。」彌次「わりいとつてしかたがねえ、こんなこまつたことはねえ。」ト二人はまじくじ寝ものがたりしてゐる處へ、下女はしり來り、「モシイお客さま、問屋の役人さまがござらせえました。」トいひすてて駈けゆくと、大ぜいの人聲して、ひとこしさしたる男さきに立ちて、五六人づれ弓はりちやうちんをともし、どやどや座敷へはひれば、北八「ソリヤ來たわ、コレハたまらねえ。」トうろたへて、はだかのまゝはね起きてにげ出し、ふすまにばつたりつきあたると、つぎへはづれてたをるるに、皆々これはと肝をつぶすうち、北八はいちもくさんにかけ出し、勝手より來る亭主にばつたり行きあたり、中庭へころげ落ちたるが、そのまゝちやつとえんの下へはひこむ。亭主「エヽ今のは誰でや、わし肝をつぶらかいた。」トざしきへ來ればこのさわぎに、浪人者もめをさまし、起きあがる。亭主「いんま爰からはしり出いたは誰でや、今夜の樣にやかましい晩はなからず、それでも宵に金とつた奴が居所が知れて、モシイあなた方、もう何時立たつせえてもようござります。」浪人「それは珍重、時にこれは皆打揃うてよくお出で。」亭主「先生にはひさしかぶりで當宿へお出でたと、先刻作吉どのお知らせで、じようち致し、早速お尋ね申すはず、事多でがいにおそなりました。先づ御堅勝でおめでたい事でや。」トていねいにいふに、一緒に來りし者どもそれ〴〵あいさつし、ことの外うやまひもてなすていに彌次郎不審はれず、「モシ御亭主さん、さつきの金をとつたどろばうは、外でつかまさりやしたとかえ。」亭主「さうでや〳〵。」浪人「ハヽヽヽいづれも聞きなさい、けふ此の衆と道づれになつてから、例のわしが洒落で、何でもいやがらして慰まうと思つて、作吉もわしも護摩の灰か、追剝でもある樣に、段々噺をしかけて來た所が、誠にうけて氣遣ひがる樣子、所でこゝの御亭が、此のさ

きの松原で金をとられたものがあるといはれたをさいはひ、それもおいらが業のやうにいつたら、とはうもないこはがりやうで、とんだおもしろいことでござつた。ハ、、、。」伴吉「モシ旅人の金を取つて來をつたといふうて、お目にかけた財布の性體はこれで〳〵。」トいせんの財布をふところより出し、ふるひ出して見せたるにぎりめし二つ。彌次「ハ、、、とんでもねえ、そんなら皆お洒落かえ、ほんたうの泥衆かと、大きに心遣ひをした、つまらねえ。」ていしゆ「コノお客様はなァ、わしも知りこなしであつたが、いんま聞けば前方當所へござらせえて、劍術ををしへさつせえた先生さまぢやと、初めてじようちしをりました。それでなァ、此の衆は先生さまの弟子たち、みんな近所の衆で、わしが所に泊つてござらせると聞かつせえて、たづねて見えさつせえたのでござります。」トゐさいのはなし。此の浪人もの、顔に似合はぬとんだじやうだんものにて、わるい洒落とはいひながら、この様なる事が至つてすきにて、彌次郎北八をいつはりだませしわけ、さらりとわかりて、はては大わらひとなりたりける。此の内此の人々より、先生へ馳走を言ひ付け置きしと見えて、かつてよりさけさかなをもちきたり、やがて酒もりとなり、さいつおさへつ高でうしにはなしごゑして、わらひさゞめくにぞ、さきほどより中庭のえんの下へはひこみ、かくれゐたりし北八、此のさわぎを聞きて、何ともがてんゆかず、様子はいかにと床の下おくふかくしのびゐたりしが、そろ〳〵はひ出ようとするところへ、下女さかなばちを手に持ちながら、えんがはをとほりかゝりしに、北八がえんの下よりぬつと首をさし出したるを見て、膽をつぶし、さかなばちもそこへはふり出し、わつといひてざしきへころげこみたるに、皆々おどろき、ていしゆ「コリヤ何とした、どうでや〳〵。」ト寄つてたかつて尋ぬれども、唯わな〳〵とふるひ、歯のねも合はず、ものもいはれぬ様子に、「コリヤ大かた誰ぞにおどされたものであらう、ホンニわつちのつれの男はどこへいつたやら。」ト座敷をたち、そこらうろ〳〵とかつてのかたへ出で、「モシ〳〵、わつちのつれの男は此方へ參りやせぬか。」かつてにて、「イ、エこつちィは見えさつ

せえませぬ。」彌次「ハテどうしたやら、北八々々、どこへいつた、北八ヤァイ／＼。」トそこら呼びわめけば、かすかなこゑにて、北八「オ、イ。」彌次「どこだ／＼。」北八「こゝだよ／＼。」トしたやより聲がするゆゑ彌次郎上よりえんの下をさし覗き、彌次「どここにゐる。」北八「こゝに居るわ。」彌次「ハ、、、とはうもねえ、なぜそんなところにはひつてゐる、サァ出ねえか／＼。」北八「出てもういいか。」彌次「知れたことよ。」北八「浪人もののどろばうめは、もう引きずられていつたか。」彌次「馬鹿をいはずと、サア／＼出ねえか／＼。」ト此の内ていしゅをはじめ皆々手しよくなどともしてきたり、ていしゅ「なんでや、おつれさまはどこにござらせる。」トいふ内、北八はしたやより這ひ出たところ、顔もからだも土だらけやらすゝだらけやら、まつくろになりて、頭にくものすなどをひつかけ、丸はだかのまゝさむさはさむし、がち／＼慄ひ、きよろ／＼してゐる顔つき何ともたとへんかたなく、一目見るよりみな／＼ふき出し、「コリヤどうで、ワハ、、、ハ、、、。」彌次「べらほうめが、そのなりは何だ、そしてふんどしもせずに。」北八「オヤオヤほんに牀の下でとけたさうでおいてきた、エ、情ない、とりにゆきたくても、寒くてならねえ、彌次さんどうぞお前後生だ、とつて來てくれねえか。」彌次「たはことといふな、ナニたかの知れた手めへのふつちうふんどし、すててしまへ。」北八「しかたがねえ、オ、さむ／＼。」トかけあがり、ざしきへはしりこみ、からだを拭くやふかずに著物をきて、やつぱりがた／＼ふるつてゐる。彌次郎はかの浪人ものゝわるじやれにて、たばかりしことといち／＼はなせば、北八はじめて心おちつきたるが、さるにてもそれとは知らず、はやまつてえんのしたへ逃げかくれ、寒いめをせしをくやしく、あまりのことに小ばらたちて、「コリヤァつまらねえ目にあつた、さりとては恨めしいお人だ。」

定九郎とおもひし人はさもなくて縁のしたやにわれは九太夫



はては大笑ひとなりたるに、是れより又酒くみかはし、夜も更けたるに、皆々暇乞して立歸れば、あとはおの〱寢所に入りてその儘打ちふしけるが、はやくも夜あけて、烏のつげわたるにおどろきおき出て、かれ是れと支度するうち、北八心づきて、「コリヤアつまらねえ事があるわえ。」彌次「どうした。」北八「アノふんどし、どうもうつちやつてはおかれねえ。」ト手をたゝくと下女來りて、「お呼びなさりましたか。」北八「オイ外の事ぢやねえが、男衆をひとりたのみてえ。」女「ハイ〱さやう申しませず。」トかつてへゆくと、さつそく下男はしりきたり、「ハイ何か御用があらつせるさうな。」北八「オイ〱わつちが取りにいきてえが、さむくていやだから、どうぞきさまへ賃錢百文はずみやせうから、とつて來て貰ひてえものがある。」男「なんでやどこらへいきをるでや。」北八「イヤその中庭の縁の下のとつとおくのはうへ、きさまむぐりこんでもらひてえ。」男「エ、アノ牀の下へかな。」北八「さうさ、そこへ置いて來たものがあるから。」男「ヤア〱とひやうもない、ハ、、、あそこなてへ何をおかつせえました。」北八「ふんどしを忘れて來た。」男「エ、コリヤどうでや、かはつた處へわすれてござらせえました、雪隱ならそこなてにありをるに、縁の下へ手水しにござらせえて、おいて來さつせえたもんであらず。」北八「ナニ猫ぢやアあるめえし、縁の下へたれにゆくものだ。」彌次「ハ、、、手めへも醬油で煮しめたやうなふんどしを、そんなにをしがることたアねえ、ばか〱しい。」男「イヤそれでもなけらにや御不自由であらずになア、

私とつて來てあげませず。」ト立つてゆく。此の内はやぜんをもち來るに、皆々並びてしたくするさいちう、かの下男まつくろによごれしゑつちうふんどしを竹のさきへ突つかけ、膳なかばへ次の間よりぬつとさし出せば皆々きもをつぶし、「コリヤ／＼なんだ／＼、エ、きたねえ誰だ／＼。」男「ハイお客様のふんどしは是れでやく／＼、わし此の竿で中庭からひつかけて來をりました。」北八「エ、氣のきかねえ、そつと持つてくればよいに。」時にそのふんどしへくゝりつけておいたものがある。ドレ／＼、ヤアないわ、コリヤどうした。」彌次「何をくゝりつけておいたのだ。」北八「金二分むすびつけておいたから、褌はをしくもねえが、その金がをしさに、百出してとつて來て貰つたもの、なくちやァつまらねえ、大かたむすびめがとけて、おとしたものであらう。」彌次「なにをいふ、ソリヤきのふ手めへから此の二分を預つてくれろと、おいらが處へ預けたぢやァねえか。」北八「ホンニさうだつけ、さつぱりわすれた。」男「たゞ今の賃錢百文くれさつせえまし。」北八「エ、重ね／＼とんだめにあつた、いめえましい。」

また恥をかくふんどしに賃錢の百も承知としてやられたり

かくて皆々に暇乞をし、二人はやがて此の處をたち出でんとしけるとき、俄に雨ふり出しける故、雨具を出し支度するうち、しきりにふりてかぜはげしくおこり、なか／＼笠もかぶられまじきやうすなれば、しばらくそのはれ間をまちて居たりける。

木曾街道續膝栗毛貳編終

木曾街道續膝栗毛三編敍

反舌の、梅に來なくは珍らしからず、時鳥人家に慣れて、白晝といへども日に遮り、猿の聲、木曾川の流れとともに、耳につきて放れず、喧しといへども、高山幽谷の光景、奇樹怪石の、おのづからなる風色は、此の街道に如くべからず。土人上古の遺風を失はず、言語都會に異なりといへども、又雅言ある事有り。この膝栗毛も、是れまでは中山道をつくし、此の編御嶽驛より東を木曾路といふなれば、排設のおもむき變化し、僻地のありさま格別なるを趣向として、續五編に彫りつけるものならし。

文化戊春　十返舍一九誌

木曾街道 續膝栗毛三編

東都 十返舎一九 著

連歌師の牡丹花は、牛の角を金銀の箔にだみて紅の引綱をつけ、心の及ぶ所へ乘りまはすを天晴の出かし顏にて、これを奇妙な樂しみと思ひたりけん、今時そんなまはり遠きことをせずとも著のみ著たまゝ馬になりと駕籠になりと飛乘りして、行きたい所へ行く樂しみ、旅行程面白きものはなし。かの漢土の七賢藪にかくれて月の晦日に掛取の難は遁るゝとも、三伏の夏蚊に責めらるゝ苦しみは堪へ難かるべきに、それも苦は樂の基、旅は憂きものに譬へたれど、年寄りて月待日待の茶飯食ひ倒す噺の種には、是れにしく物なし。されば彌次郎兵衛北八の二人は、中山道加納の驛に泊りし時、同宿せし浪人者の惡洒落に生肝をとられたるが、はては大笑ひとなりて夜の更くるまでも、打混じ酒汲みかはして居たりけるに、丑の刻許りより大雨降り出して車軸を流し、漸く夜の明ける頃空晴れかゝりたるに、喜びてそこ／＼に支度し、出かけんとする時、又俄に降り出してこぼすが如く、風殊に烈しく、大道は闇夜にひとしくなり、庭の下草を打ちひしぎ、枯木をも打ちをるほどの景色なれば、なか

なか出もやられず、もとの座敷に押直りて、彌次「ナントきた八、コリヤアつまらねえ、もうちつと見合はせようか。」北八「今にやむだらう、何分此の雨ぢやァ出られねえの。」あひ宿の浪人「しばらくの内待ちなさい、わしらはどうせ、昨夜の衆がけふもまた來るだらうから、爰に待ち合はしてゐにやァならねえ、其のうち、もうひと寐入りやらう、ゆうべはさつぱり寐なんだから。」ト側にあるふとん引きかぶり、ころりとそこに寐かける。彌次「コリヤとんだめにあふわ。」トこごと八百立つたりゐたり、空ばかりながめやれども、雨は更にやまざりけり。北八「仕方がねえ、おいらも一寐いりやらかさうか。」ト枕ひきよせ二人とも横になりたるが、寐るともなしにとろ／＼としばらくまどろみてゐる内、雨はやみたれども川どめなりと、往來の人のわめきたつる聲におどろき目をさまし、彌次「コリヤ／＼北八おきろえ、大變が出來た、川がとまつたといふことだ。」北八「ナニちつとの間の雨にとまるものか。オヤ日和にならァ、そろ／＼出かけやせう。」ト支度するうち次の間にとまりし、おくどうしや、同者「コリヤハァでつかい雨でよんこ水サァ出來たんべい、あんちふすべい、きせちないこんだァ。」北八「ナニサかまふこたァねえ、おめへがたも出かけなせえ、川がとまつたといふはところの手合が錢儲けしようと思つてはぐらかすのだわな。」同者「コリヤハァさうだんべい、あんにやさたちも出來べいなら、わしどもも、ハァ同志にいぐべい、サァ／＼、出來なさろ／＼。」トみな／＼急ぎて支度すると、亭主かつてより出で來りて、「これはみな樣、おこずつて、いざござらせずと思うてか、まんだ川は水の出花ぢや、ゆつくりとござらせえませ。」北八「ナニちつぽけな川が止つたとて、きついこたァありやすめえ。」ていしゆ「インネおぞがい事

でや、此の先の渡しはゑいがなァ、鯰川といふ川の堤がきれよりまして、絲拔川の橋が落ちてナァ、あそこなてこゝなて、りうど水がふんだくに出よつて、こつぺり往來がでけぬくいと申します、こないに申せばナァ、わしどもが、ふりわざおとめ申して、お茶代でも申し請けずと、おぞい事に思召しませうがナァ、はたごや冥利、そないなちくらく申して、こんきとお客さまがたを、おとめ申す事は成らずにナァ、なんであらうと、こないになされ、川向ひにもナァ、お急ぎでなからずお旅人は、一人もござらせんぢやあろに、水がひけよつたら、いんまに越してござらせるもの、その衆がおもてを通らせたらナァ、いつきにおこずつてござらせえませ、一時こゝにお出でたとて、とかうはあらまいに。ハテお客早う立たせてナァ、ほつこりと息つきたいが、旅籠屋せる者の習ひであらずに、とても先へお出でる事のでけぬくいを知りつゝ、いざかつせとやら申す事が、致しぬくいぢやござりませぬか、おぞい事は申しませぬ、マァゆつくらりとござらせえませ。」ト宿の亭主がつべこべと、おしやべりに乘りがきて成程と納得し、又はしつた尻をおろし、彌次「いかさまこれもさうかえ、とてもいかれねえ處を出かけた處が始まらねえ、然し今に水がひきやせうかね。」亭主「お天氣に成りよりましたもの、いんまに水が引けよつたら知れませずに、マァお見合はせなされてござらせえませ。」トどうやらかうやら落ちつけて勝手へゆくと、北八「コリャア因果なこつたがしかたがねえ。」彌次「川留めはいゝが、段々懐の内に欠がたつには困りはてる。」ト頭をかきてふさぎゐるうち、勝手より宿の女房、「コリ

ヤ御退屈さまでござらせるぢやあろ、いんま溫飩打ちよりましたにナア、お珍らしうはなからずけれど、おあがりなされませ。」ト此の內下女饂飩を皿に盛りて持ち運びすゝめる。北八「イヤわつちらア、まだ腹もへらねえからよしやせう。」女房「そないに仰しやれずと、一つあがりなされ。サア〳〵、さめよりませずに、コレサおふくノウ、おかはりはどうでや、はやういこさんせ。」下女「ハイ〳〵持つて參りました。」女房「ソレ〳〵湯がこぼれよる。エ、前垂の紐をひきずらかいて、かいしよのない、そしてあなたのお箸がつけてない、早ういこさんせ。」下女「ハイ〳〵是れでや。」女房「エ、ソリヤ擔げ棒ぢや、お箸の事でや。」彌次「箸はわつちが持つてゐやす。折角かみさまの心ざしだ、北八一膳やらかせえ。」ト二人共箸をとつて喰ひかゝり、北八「コリヤなんだ、エ、をかしな匂ひのするしたぢだ。モシかみさん、此の猪口は本當のしたぢぢやアねえさうだ。」女房「ハイ〳〵、なんでや〳〵、オホヽヽヽ、コリヤ鐵漿と取りちがへていこいたのぢや。」北八「エ、道理で一口やつたら胸がわりい、なぜ又おはぐろと、したぢと間違つたものだ。」女房「ソリヤ銅壺の上にナア、溜りがかけてありよりますに、がらゐ其の溜りくむとてナア、かまどのねきにありよるおはぐろ壺くんで、來よつたものでござりませう。コレナ〳〵おふくのウ、そつちの猪口におはぐろやつと汲み出いていこさんせ。」北八「エ、コレおはぐろぢやアねえのに。」女房「ホンニ溜りぢやたまりぢや。」下女「ハイ〳〵、いんま上げませずに、がらゐ溜りのある土鍋をナア、私いんま取りおと

いてこぼしましたに。」女房「そしたら、いんまこさいてもて來よりますに、その内マァ其のおはぐろ付けてあがりなされ。」北八「とんだ事を言ふ、ハ、、、、」ト此の内したぢが出來て下女もつて來る。彌次「ドレ〳〵こゝへもくんなせえ。」北八「コリヤ一向くへぬ、もう〳〵御免だ。」女房「もう一つお上りなされ。」ト北八が食ひしまひし皿の内へ、盛りかへを無上にうちあける。北八「エ、そんなに食はれるものか。」女房「ハテそないにおつしやれずと、たんだもう一つ。」トべちやくちや言ひて無理にしひつけると、北八少し癇癪を起し、北八「ナニうまくもねえものを、錢を出して食ひながら辭儀をしてつまるものかえ、もう五六膳くひやせう、其處へならべなせえ。」トうどんの皿を並べさせ、一ぜん十六文のつもりにて錢を拂ひ、くだんのうどんをみな庭さきへ打ちまけてしまふと、女房肝を潰して、女房「コリヤなんでや、おぞい事なさる。」トあきれかへつて座がしらける。北八「ぜにさへはらやァ言分はあるめえ、江戸つ子の氣性だ、あんまり食はれもしねえものを、惡くつき付けやァがるから、此の通りだ。」ト苦りきつて言ふに、女房は挨拶もせず、とう〳〵たつて引きこむと、此の内傍に寢てゐたる、浪人者目をさまして、「ヤァ江戸の衆まだ爰にか、わしはどうせ逗留だが、きさまたちも逗留か。」彌次「イエ川留めにあひやした。」浪人「ナニどこの川が、大田の渡しでも止つたといふ話がござるか。」北八「イヤ鯰川とやらの堤がきれて、其の先の川の橋が落ちたとやらで、往來がとまりやしたと。」浪人「ハ、、、貴樣たちや、下りぢやないか、其の鯰川といふは鄕戸のさきの川、昨日貴樣達が通つて來た處だ。」彌次「ハァそんなら登りばかりが成らねえと言ふもの、わつちらの行先の事ぢやァねえのかえ、おきやァがれ。」北八「なんのこつた川留めと聞いて狼

狽へて、其處にやァさつはり氣が付かなんだは、馬鹿々々しい、昨日通つて來た川なら、水が出ようが堤がひつくりかへらうが、頓著はねえ所、いめえましい、溫飩だけ餘計の錢を取られて、つまらねえ目にあつた、爰の内のべらぼうめら、おいらを、いい鼻つたらしにしやァがつた。やどろくめが頬の皮をひんむいてやるべい。」ト小言たら〲と、つばくさとしたくして、浪人ものに挨拶し、おもての方へ出かけると、下女「もうお立ちなされずか。」北八「おたちなさらねえで、どうするものだ、おいらは下りだから、川もへちまもいらねえものを、爰の御亭主がつべこべと、とんだ目にあはせた。」女房「オホヽヽヽ、ほんにさうで、コリヤお氣の毒なことでや。」彌次「笑ひごとぢやァねえ、わつちらァ不案内のものだから、いいやうにしられたと思やァ業腹ぢやァねえかえ。」女房「御ゆるさつせえてくださりませ、その代今夜は、伏見おとまりであらずに、えい宿お差圖まうしませう、山松屋といふへ、ござらせえませ。おむつかしながら此の繼狀、そこなてへお持ちなされて、かなふの糟田屋からいこしたとおつしやれば、向うにじようちでござります。」

ふしみ宿
山松屋權七樣　　用事　　かなふ
糟田屋十八兵衛

ト此の狀をとり出しわたせば、彌次郎兵衛ふしやうぶしように請取り、此の宿を急ぎ立ち出づるとて、

いけもせぬうどんやたらに強ひられて一ぱい食うたうその川どめ

彌次「ナントいい頬の皮ぢやァねえか、あいつらが處から、差圖する宿、どうせいくぢやァあるめえ、そしておいらをとんだ目にあはせやァがつた上に、此の手紙を屆けてくれろと蟲のいい、引き破つて

しまはうか。」トかの状の上包をときて中の文言をよみて見れば、女の文體にて、女郎のとゞけ文封じ込めてあり。北八「なんだ／＼、山様参る門彌より。ハヽアこいつは女郎の文か。」彌次「聞えた／＼、伏見の山松やといふは昨夜おいらが泊つた宿の客で、馴染の女郎の文と見えた、それを屆けさせようと、いい宿の差圖するもすさまじい、おいらをおさきにしやアがつて、文使させようとは虎の皮の褌だ、どんな事が書いてあるか見てやらう。」北八「イヤ待つた、封をきらずに置きなせえ、わつちが是れで趣向が有りやす。」トかの文を引つたくり懐へ入れると此内あとよりかの同宿せしおくどうしや七八人づれ、中にも六十許りの親仁、彌次郎におひつき、親仁「モイ、コリヤハアあんにやさ、お早うお出來やつたアもし、私共もハア、くだりだアけれど、あにが宿やのゞだまめに、つるくられてハア、おだけたためにあひまうした。」

北八「ホンニ、お前がたア、昨夜一つ宿に泊つた衆だな、お互にとんだ目にあひやした。」おやぢ「私も、ハアこんな痩せからびたぢんだいだアけれど、國サアではふとになづきサア、ぶちあげさせべいたア思はない、ぎづむこたア、知つちつてもゐ申すが、神参りだアから、料簡のウし申した。」北八「ホンニ、ふてえ奴らさ、わつちらも胸をさすつて、堪へやした。」ト此の話の内、新かなふ村といふに到る。こゝに大神樂が、まりの曲をするに大勢人たかりてゐるゆゑ、彌次郎北八、道者もともに立ちとまり、うしろより覗き見れば曲まりに三みせんを彈き、うた「いさアめのかゞらを舞はうよチ、チインチンツルヂヤンヂヤン、あアくま外道を、ヨイコリヤ、はらつて／＼、チンチリチン／＼。」たいこ「ドンカラノ／＼ドド、ドン。」同者親仁「モイ太鼓ぶちめさる人に、ちくと、ものさア問ひますべい。」太鼓「なんぢやえ。」

おやぢ「主の、ぶちをるとこサア、あんでござる。」たいこ「コリヤア太鼓。」おやぢ「インネ、ハアそのどんがら鳴りをるとこサア、あんだつちふ。」たいこ「こゝかえ、コリヤ皮でや、馬皮といふではつた物でや。」おやぢ「馬皮と言ひめさるは、あんの事だ。」たいこ「馬の事でや。」おやぢ「そつちの又、かん〱鳴りをる太鼓の皮アあんでござる。」たいこ「コリヤ犬皮というて、犬でや〱。」おやぢ「なる程、ハア處かはれば品かはるだアもし、私共の國サアでは、おまのこたア、やつぱりおまと言ひ申すが爰いらぢやア、おまを馬皮、犬を犬皮たア、あだけたこんだアもし、ハ、、、。」北八「こいつは面白い事を言ふ、サア彌次さんいかうか。」おやぢ「私どもも、いきますべい。」馬かた「コレおまいたち鵜沼まで、安うして乘らまいか。」おやぢ「あんだ、馬皮に乘れ、ヤレハア、わし馬皮サアはきらひだアもし。」ト此の行く先に往來の山伏ほらの貝をふきて、山ぶし「紀州熊野山行者ブウ引。」トかのほら貝をふきて旅人に合力を乞ふ。往來の人それ〱に一文づゝやるを見てかの道者、おやぢ「ワハ、、、、あんにやさ達見なさろ、あんでもハア爰いらぢやア、ふとに物サア貰ふべいと思やア、熊野山行者ブウ引、と言ひをるが國風ださうだア、ホンニ、うつたまげたこんだアもし。」北八「ハ、、、、おめへはきつい、詞咎めがすきだな。」おやぢ「あにハア、わし國サアへの土産に、あんでも、ハア他國の詞のウ覺えをつての、かへるべいと思つてのこんだアもし。」ト此の内各務野といふ處にいたる。こゝは奈良漬の名物にてたてばなり。茶屋もあり。北八「奈良漬の匂ひを嗅いだら、氣が惡くなつた。彌次さん、いつはいやるべい。」彌次「いかさま、よからう。」ト

ちや屋へはひり、彌次「モシ、酒をちつと許り出してくんな。」おやぢ「ハアやるべいたア、酒のこんでござるか、コリヤアわしどもの國サアでは大根といひ申すが、にしたちやア、あんといひめさる。」北八「此の奈良漬のことかえ。」おやぢ「ハア大根サアなら漬と言ひ申すか、あんだのかんだのといふ事がでかく違ひ申す事よ。ワハ、、、。」彌次「御亭主さん肴はなんぞありますか。」ていしゆ「ハイ豆腐の煮よつたのばかしになりよりました。」彌次「そんなら夫れを一ぜんづゝ出しなせえ。」ていしゆ「ハイ／＼いんまあげませずに。」トやがてむかしふうの朱塗の椀に豆腐の汁をもり、あかい膳の上にのせてもち來り、酒となら漬の香の物を持つて來ると、彌次「ドレ／＼はじめようか、オ、いい心もちだ、モシおめへこれはどうだ。」おやぢ「あにハア、私どもは餅組だアもし。」ト此の内道者ども店さきにある菓子を取つてめいめいに喰ふ。その中に一人やうかんを喰ふを、おやぢじろ／＼見て、「ソリヤア、あんだんべい。」北八「やうかんといふものさ。」おやぢ「あにハア、やうかんたア、あんのこんだア。」北八「ハテ、小豆でこしらへたもので、やうかんといひやす。」おやぢ「これがハア小豆でござるか。」北八「あづき／＼。」おやぢ「あづきの事をやうかんといひ申すか、ハ、、、。」北八「なる程、處々でもののいひやうが違ひやすが、わつちの此の腰をかけて居るものは何だとおもひなさる。」おやぢ「ソリヤア木のかぶつちいであんべい。」北八「コリヤア洗濯物や何かをうつ臺で、これを大木の切口ふといの根といひやす。」おやぢ「ワハ、、、、がいにながつたらしい名でござらア、それにハアその赤いものサアあんといふ。」彌次「是れかえ、コリヤア朱椀、膳は朱膳

さ。」おやぢ「ハア赤い物を朱膳、朱椀と言ひ申すか、ハヽヽヽ。」トまたそこらあたりを見廻し、傍に鰯の頭ばかりはひつてあるを見かけて、おやぢ「コリヤ、あんだちふ。」亭主「ソリヤ魚油殻でや。」おやぢ「ヤレハア、なづきのことを魚油殻たア、あんたるめづらしいこんだア、ハヽヽヽ。」ト此の内馬士一人来り、馬士「わしや鵜沼のかたへ去ぬるおまおやに、おのさたちの荷をつけていかずに、酒手ちくとくれさつせえ。」おやぢ「また馬皮か、わしきらひだアが、ぶちのるべい、値段サアいぐら〳〵。」馬士「百五十くれさい。」おやぢ「やアだア、五十にまけなさろ。」馬士「百でやらずに、それで乗つていじやござい。」ト馬の相談が出来て道者共がめい〳〵に持つたる荷を一つにからげて馬につけながら、馬士「そつちやの旦那も、その包是れへつけさつせえ。」北八「ナニこれ許りの風呂敷包、あんだうだ、よしやせう。」雲次「ホンノ小づけだ、十六文酒手をやらう、つけていかつし。」トおなじく馬につけさせると、かの道者のおやぢ、「わしは、ハアうざねはいたア、ちくとぶち乗つていぐべいか。」ト馬の口をとらせて、えいやらやつとうち乗りたるに、馬士「コリヤ、わすれたことがある、一時まつてくれさつせえ。」トたづなをそのまゝ、はふりちらしていづくへか驅けだしてゆく。をりふしそこに、寝てゐたりし犬どもにはかに起きたちて、二三匹かみあひ、馬の足につき當ると、馬は驚きてはねあがりて、止めてもとまらずかけ出せば、おやぢ「ヤレコリヤ、あんとすべい、とめてくんされ、ドウ〳〵ドウ〳〵。」ト馬の上にてあせるうち、馬は一目散にあたりの大根畑へかけこむと、おやぢはまつさかさまにおちて木の切株へ頭を打ちつけ、血だらけとなりて大聲あげ、「アイタ〳〵。」トうめきたつに、みな〳〵走りゆき、抱きおこしたるに、腰の骨をいためて、足立たねば手かきにして、やう〳〵もとの茶屋へつれ来ると、馬かたはしりつきて、馬士「ヤア〳〵どないにして、怪我をさつせえた。」おやぢ「アイタヽヽヽ、わしアノ馬皮サアに、ぶちのつたら、あにがハア犬皮のウニ

三疋いがみやひをつたもんだァから、馬皮うつたまげて、奈良漬だァの、羊羹だァのとはえてをる畑さァへ、かけこんだァから、コリヤハァあんちふすべいと思ひをつても、私ちくとやるべいサァに醉つちやァ居申すがらるおつこちて、魚油殼のゥ大木の切口ふといの根サァへ、ぶつつけ申して、朱膳朱椀がながれ申すわ、あんでもハア藥サァあんべいなら、熊野山行者ブゥ引。」彌次「ハヽヽ、こいつはさつぱりわからねえ。」北八「イヤじやうだんな人だ、何にしろマァ藥でもつけなせえ、わつかな怪我だきついこたァねえわな。」ト とも〴〵いたはりしてやり、同行どもがたくはへし、あぶら藥などをつけて、疵ぐちを手ぬぐひにて、しつかりつゝむと、やう〳〵心落ちつきたるに、彌次郎兵衛をかしく、

から尻の馬の上よりおちこちのたつ氣もなけれ腰ぬけし身は

此の一首に笑ひとなりて、皆々、こゝを立ち出でけるに、かの親仁は足を痛めける故、また〳〵馬に乘せて出かける。彌次郎北八は遙かに先へ行きこしたるに、飛脚體の男一人後より來懸り、ひきやく「モシ今怪我をさんしたは、お前がたのおつれかな。」北八「ナァニ、さうでもござりやせん」ひきやく「イヤモ、あれぢやさかい、こちとらは馬には乘りませんわいな。」北八「さうさお前どこだ。」ひきやく「わしや京都ぢや。」北八「ゆうべは、どこにおとまりだ。」ひきやく「高宮から、今朝たつたわいな。」彌次「ソリヤ、とはうもねえ、こゝまでは何里程來なさつた。」ひきやく「十里あまり來たつたわいな。」北八「イ

ヤおめへはとんだ早足だな。」ひきやく「なんのいな、昨日はそんなこつちやないわいな、京をたつて十三里歩行で、大阪へいてナア、角の芝居三幕ほど見物しをつたからナ、晝の八ツ時分大阪を出て、日の暮れんさきに高宮まで來をつたが、ねからあるきたらいで、夜さりねてをつても、足はいごかしどほしぢやわいな。」彌次「ナアニその位の事は何でもねえ。わつちも足は早いが、この前伊勢へ七度、熊野へ三度、江戸へ日歸りにした事がありやした。」飛脚「ソリヤ、とひやうもない、どないにしたら其のやうに歩かれましよ。」彌次「ナニ不斷鐵砲玉を煎じて飲むと奇妙に足が早くなりやす。」ひきやく「さうかいな、わしや韋駄天さまのまもりかけてをる、足がはやいさかい、道づれがなうて退屈ぢや、おまい方はよい道づれ、走りながら話しましよかい、サア／＼お出で／＼。」ト此の男飛ぶが如くにさつさつとゆくに彌次郎北八もまけぬ氣になり、大汗をふき／＼、つゞいてさつ／＼と行くに連れて、ほどなく鵜沼の宿へ著きたれども、まける事嫌ひの二人、飛脚の早足におとらじと、むちうになりて、あとの馬にふろしきづゝみをつけたるを打忘れ、うか／＼と此の宿をすぎて十丁許りゆきこしたる時、北八「ヤア思ひ出した事がある、大變／＼。」彌次「なんだ／＼。」北八「馬につけた風呂敷包の事よ。」彌次「ホンニさうだ、鵜沼まできはめた馬だから、あの宿でおろしたものであらうに、コリヤつまらねえ、サア後へまた歸らざアなるめえ。」ト飛脚へは挨拶もせず、まつくらさんばう、とつて返す道の中ほどにて、向うよりかの同者ども來かゝり、馬士「ヤレハアにしたちやア、あとの宿サアで、おまかたがでかく尋ね申したに、早くいぎなさろ、門田屋といふ茶屋どのに、風呂敷のウ預けてあんべい、私どもは先へいきます。」彌次「アイお世話でござ

りやす、わつちらアツイ忘れて行き越しやした。」ト此の道者どもに別れて一目散に鵜沼の宿へもどり西のぎうばなの門田屋といふをたづねてはひり、彌次「モシお前の所へ、道者の荷をつけて來た馬士が、風呂敷包を預けておきはせなんだかね。」門田やの亭主「ハア、おまいがたのかい、おまかたがそこなて爰なて、一時おまいがたを捜いてあるきよつたが、ござらせぬもんぢやによつて、わし所へあづけておかずといひよつたが、イヤ人さまの荷物間違ひがありよつては悪からずと、わしの所へいひおいて、内へもつていによりました。」北八「そんなら馬士どものうちは知れてゐやすか。」亭主「アイ此の宿から貳里許り南の野出といふ所で、茂太郎といひよります。」彌次「ヤア／＼是れから貳里先へ、とりにいかにやアならねえか、コリヤつまらねえ、とんだ事だ。」北八「なんならうつちやつてしまひなせえ、たかの知れた物だアな。」彌次「イヤ／＼、金毘羅樣のおまもりや、伊勢のおはらひがあるから、うつちやつては土產がなくて、江戸へ歸つても言譯がねえぢやァねえか。」亭主「取りにつかはされ、たのむ人はいくらもあらずに。」彌次「そんなら、どうぞおたのみ申しやす。」トこゝにて、にはかに人をたのみてもらひ、待ち合はしてよけいの錢をつかひ、ちんせん四百文とられて、ぐんにやりとなり、

野狐の化かしたるかと思ふなりとりにやりたる紺のふろしき

それより、こゝへ一禮のべて立ち出でしが、往來四里をゆきかへる内、待ち合はせし事なれば、よほど日あしもたけて、急ぎたどる程に、かち山村の觀音坂を過ぎて、あしどの、ひとつ茶屋といふに到る。此處はえだ柿の名物なり。

赤恥を柿の名所におもひ出すはやきあしどの人におくれて

太田宿の渡場につきたるに、今朝の雨より水増して餘計の舟賃をとられければ、

宿の名のおうた子あらばこの川の淺瀬わたらん錢をしき身は

かくて、伏見の驛につきて、かの山松屋といふ旅籠やのあるを見れば、小家なれども、其の座敷向、萬端小綺麗に見ゆれば、やがてこゝに宿をとりて、風呂にもはひり、食事もすみたるに、下女茶をもちて來ながら、」 彌「主の心はおみたけさまよな、むねのこほりがまだとけぬ、ヅナ〳〵コイ〳〵。モシお茶あがりませ。」北八「がうせえに、あだな聲だな。ときに女中こゝの内に、内儀さまがあるかね。」下女「ハイ、たんだ一人有りよります。」 北八「さうさ、二人はあんめえ、こゝへ一寸内儀さまを呼んでくんな。」 下女「さうまうしませず。」ト勝手へゆく〳〵と聽て女房走り來りて、 女房「ハイお呼びなされたは、何しか御用がありよりますか。」 北八「オイ、お前内儀樣か、わつちらア昨夜加納の糟田屋へ泊りやしたが、お前の所へ此の手紙をことづかつて來やしたから。」トくだんの文を出し女房へわたせば、 女房「ソリャ、御大儀さまでござらせる。」ト手にとつて見てをかしな顏つきして立つてゆく。 北八「しめた〳〵、今にはじまるだらう。」 彌次「へゝ、若い男だ燒餅喧嘩をさせようとおもつてか。しかし、こいつ、おもしろからう。」ト此の話の内、下女來りて牀をとりて出でゆく。二人はそのまゝうちふして、かつてのかたを覗ひ寐もやらずゐたりけるに、あんの如く何やら大聲をあげて、夫婦がどなり散らすゆゑ、サア始まつたと、二人は、そとおき出て、だいどころのかたをのぞき見れば、女房ひたひにすぢをだして、 女房「ヤレハア見たくでもないヤァ、こんぢうからいぐまい〳〵と、わしよヲハァ、おまのりのひんぶくろのやうにつ

るくつて、いつの間にいきめさつた。わしやハァ去年から、紺のふんどしのウ一ツ買ひますべいと思ひをつても、マァ辛抱のウすべい／＼と、がらゝ買はずに居申すわ。それにハァひなたァ、おしやらくべいに、身上のウぶちこんで、あんとすべいと思ひなさる、むげちないふとだァ。」亭主「あに、けいもない、わしこんぢう桑ァあつらへに、出よつた時のこんてや、あにハァにしにべいてきない思ひのウさせからかいて、わしおぞい事をあにせるもんだ。」女房「ヤレハァ隠しやる事よ、今夜のお泊りか持つてござらせえた文サァよんで見なさろ、ある程ハァ、ひなたがぶちこむもハァ、ねつから無理ぢやァござらない、えい手のくせにでかい文者だァもし、そんだァからわしにやァあきたんべい、私もハァこゝサァつん出べいにも、腹ァでかくなつてる申す、ばんばあさんに貰つたびんらうじのゝかアなくならかいて、わしあかつぱたかで、出べいにもひくべいにもすべい事がござらない。」亭主「ヤレさて、げえぶんのわりい、ふとも聞くに、でこおとがいのウぶちあけるな。」女房「私ぶちあけたらあんとしめさる。」亭主「イヤ、こいつもう料簡のウならまいぞ。」トぶつてかゝればこなたもおとらず、女房「アニ、私も沓掛おやす、おしやらくべいまはいたなだァ、ひなたに負けて居べいか。」ト亭主が小びんさきのたんこぶへかぶりつく。亭主「ァイタ、、、、コリヤあんとせる。」女房「あんとすべい。」亭主「コリヤ、はなせ。」女房「やァだ／＼。」ト互に掴み合ひ、女房亭主のたんこぶをくひきると、此の内家内の者や、近所の人々おひ／＼かけつけとりさへ、やう／＼とひきわけると、亭主「ヤレさて、えつい、あにあはせよ

つた、すままいぞ〳〵。」鄰の人「ヤレ、ハァ靜かにさつせえ、マァあたまァふかつせえ、血がながれよる。」亭主「わし痰瘤のゥ、なくならかいた、そこなてにやァないか、めつけてくれさい。」ト此の內亭主のおやぢ、裏に隱居してゐたるが驅けつけ、此の樣子を聞きて、「コリヤハァ、魂消たこんでや、あんにせい亭主のどたまを、かぶりかくやうな女房もたせておくことは、おらがならまい、仲人をよび出いて、御代官樣へお檢使のゥ、ねがひまうさにやならまい〳〵。」ト大きに腹を立て理窟ばるを、みな〳〵とめても、いつかうにとくしんせず、亭主「そんなら、ねがつてくれさつせえ、私でかく痛みますわ。」鄰の人、名は門十「マァそれよりか、雲竹どのでもよんでござつて、療治のゥして貰ひめさるがよからずに。」隱居「わしあにも、じようちでござる、みんなの知らつせるとほり、私ハァ當宿の役人も勤めよつたもんでござる、倅共のどたまかぶりかかれて、そんなりに濟まさず事ァならまいぢやァござらないか。」門十「さう云はつせりや、せず事がないが、御代官樣へ願はせるにや、あんと言つて願はつせる。」隱居「私能筆でや、今に見さつせえ。」ト硯をとり出し訴狀を書くその文言、隱居「ヤレハァ恐れながら申上候。」門十「訴狀にヤレハァはいらまいこんでや。」隱居「そんでも、是れがなけらにや書きづらい、マァ默つて聞かつせえ。ヤレハァ恐れながら申上候、伏見宿山松屋伊野右衞門、どたまを女房づるがかぶりかき申候。」門十「お代官樣へ、あげよるにかぶりかきぢやァいこぞんざいな樣ぢやァござらないか。」隱居「そんなりや、食ひかき申候。」門十「ある程、さうで〳〵。」隱居「インネ、くひかきでもなから

す、コリヤハヤむつかしい、あんと書いたがよからず」門十「ハテな、イヤかうであらず、山松屋伊野右衛門、どたまを女房つるがたべ申候」彌次「さうで〳〵、よからず〳〵」だん〳〵その後の文言を書く内、かの女房かねてより懐妊にて、當月が産月なるが、此の騒ぎにとりのぼせ、にはかに、むしがかぶり出し、すでに今うまるゝやうなと騒ぎたてば、家内驚き、藥よ水よと立騒ぐ。亭主うろたへ出し、亭主「ヤア〳〵、折もなうと、おつるが産みよるさうでコレおちうのゥ、釜の下アもせい」エ、金太郎どこなてにるよる、觀音堂のおんばアどんを、おこすつて來よれ、エ、コリヤ早くいかすか、早く〳〵」門十「コリヤハヤ肝心の相手に産の氣がついて、訴狀もあにもいかなくなつた」彌次「さうで〳〵、コリヤ伊野右衛門とりあげばんばあを、御代官様へおこすりにやれ。」門十「お寺へはわしいかすか」亭主「エ、あによすいはつせる」ト此の内、女房はや安産して、家内中騒ぐ處へ、先刻呼びにやりたる雲竹といふ醫師、おきやゝの藥するに、そりやこそ出たと表より走り來り、雲竹「コリヤ、ハヤいこやかましいな、誰やら怪我をせられたげで乾口を縫つてくれさいと先刻呼びにいこされたが、がいにおそくなりました」その怪我人は誰で〳〵」亭主「コリヤ、雲竹様、御大儀でござらせる、私が嘘のかつかあどんが今安産のゥしよりましたが、おまいどうぞナア、そこをぬつてやつてくれさつせえ」雲竹「ハヤそりやそこなてが、裂けよつたとでもいふこんでや」亭主「イヽネ、ハヤ今度さけよつたぢやァござらない、えつからのでござるに」雲竹「アニ、そりよすぬつてしまひよつたら、此の後ひなた、不自由であらずに、第一御内儀がしよんべんしよる事が、でけぬくいにナア。」彌次「エ、、

此の伊野右衛門め、縫つて貰ふはわれがどたまのこんでや。」亭主「ホンニ、さうでや、私此の小鬢先の痰瘤のゥかぶりかかれた、爰なてをぬつてくれさつせえ。」門十「コレ／＼その痰瘤のゥ、私ひらひよつた、これでや／＼。」亭主「ソリヤ、りうとえいこんでや。ドレ／＼此の瘤元のとこへくつつけてぬつてくれさつせえ、蓋のとれたやうな所が塞がつてよからず。」雲斎「じようち／＼、その瘤いこさつせえ、こりや／＼爰なてでよからず、曲りやせんか見てくれさつせえ。」ト亭主が頭を手拭にてくゝりたるをとかせ、疵口の處へ、かの瘤をのせて見すると、隱居しやうめんへまはりすかし見て、隱居「マアちくとみぎりのはうへよりよつたやうでや。」雲斎「そんなりや、かうでかうで。」門十「オットよからず／＼。」トやがて、その瘤をくつつけて、もとの如くに縫ひつけて、あとへからやくなどをはりて醫者はかへると、此の安產の喜びにいさくさはどこへやらきえてしまひ、家内はじめて笑ひ聲してざんざめかすに、彌次郎北八しじうこれを見て、腹をかゝへながら、うちふしける。

あくれば伏見の驛を、立ち出で桶繩手といふに到る。此の處は、昔關の太郎といへる鬼の首を桶に入れて都に送るに、かの首次第に重くなりて、數十人の力に及ばず。此處に桶のまゝ埋めたるゆゑ、かくは名付けしと言ひ傳ふるよしを聞きて、

桶繩手今もその名は朽ちざりき鹽漬にせし鬼の首かも

かくて平岩、可兒川を過ぎて御嶽の宿に著きたりける。長持人足の唄「木曾のナァ、かけはしやナァンアエ、からみつく蔦がナァンァエ、わしにや蔦さへからみつかない、ナァンァエヨウ、どつこいどう

しんこゐものほうぐわん、じよでこい〳〵。」茶屋のはゝ「一休んでござらせえませ、節入れて焚いに豆腐と、蕨のお汁もござるに、飯めしよすあがつてござらせえませ。」ト此のあたりより遠國のものと見えし六十六部ひとり、あとになりさきになりて、六部「ハイ、旦那様達御報謝に一文くれさつしやい。」彌次「貴様どこだ。」六部「私はハイ駿河のもんでござるヤア、」彌次「おらァ又長門かと思つた。」北八「ソリヤどうして。」彌次「貴様の頭が、がうせえに長門だから。」北八「ホンニ福祿壽といふ頭だから、仕合のいい筈だが、なぜまた貴さまは六部に出たぞ。」六部「私ハイ、此の長い頭について、六部に出た理窟がござるヤア、聞いてくれさつしやい。私やァハイ、駿河の黒川といふ山家もんだがヤア、去年御地頭様のお役人様が、私とこの村の莊屋殿に泊らつしやた時、朝起きがけに、手水廻せといはつしやつたが、あにハイ、その手水たァあんのこんだんべいと、皆がすつたり知らないもんだんで、かしやつかァほつつかァしてゐると、お役人様が、エレチヤァ早く、手水まはせといはつしやる。そこでハイ、莊屋どのもこまつてせず事がないから、お寺様へかけ出していつて聞いたら、お寺様は物しりだァ、コリヤハイ、てうづたァ長い頭と文字にかくから、あんでも長い頭の人をまはせといふこんだんべいと、それからハイ、村中がよりやつて、エレハイ、だれの頭が長かんべい、梯子田のおんぢいの頭が長い事ァ長いが、コリヤハイ、さいこ槌頭だんて、横つ廣がりに長いのだから役にやァたつまい、イヤ彌弟が處のあんにいはどうであらず、コリヤ

長いの土天上だ、よからず／＼と、相談極めて、私見たてられたもんだんて、せず事ァなし、すんだらお役人樣の前へつん出るもんたんで、髪月代していきませずと、何がハイ、自剃にごぞつか／＼やつてる内にも、エレ／＼どうたい、手水はやくまはさないかと、お役人さまがせかつしやる。そこでハイ、莊屋どのが、てうづは今かみよオいつてるますに、ぢつきに廻らせませずと、わしよオエレエレとそびかつしやるものだんて、私ハイ、目まなこをうろたへかして、莊屋殿とつるんで、お役人樣の前へつん出て、ハイ長頭はこれでござるといふと、お役人樣が、エレチヤァどうしたもんだい、さつきから手水まはせ／＼といふに、埒のあかないと、しからしやるもんだんて、コリヤハイ、頭を廻らかすこんだと思つたから、わし此の頭を、くるり／＼、くるり／＼／＼と、まはらかいたら、あにをする早くまはさないかといはつしやる。わしハイ、そんなに早く廻らかいたら頭痛がせずとおもつても、お地頭さまのお役人樣が、いはつしやるこんだから、せず事がないと目のまはる程、頭ァ、くるり／＼、くる／＼／＼／＼と廻らかす程に／＼、そんでもハイ、お氣にいらないもんだかして、小言べし云はつしやる。そこでハイ頭百姓の太郎ざゑむ殿が云はつしやるにやァ、私若い時、お江戸へ行つた事があつたが、お江戸ぢやァ、しよんべんに行く事を、手水といつたつけが、しよんべんのこんであらず、頭ぢやァござるまいと言はれるもんだんて、それからハイ、しよんべんたごを座

敷へ持ち出すべいと、らんごくをやるもんだんて、わしハイ、こりやァお役人様の前へ、汚いその擔おやァつん出されまい、よし／＼せることがあると、新しい盥へ、しよんべんちくと汲みこんで、わし持ち出したら、お役人様が、出かしをつた、早くこりよォ持つてこないでと、そのしよんべんを、あんとさつしやると見てゐたら、御自分の頰ァ洗はつしやつて、口へもすくひ込んで、ぶく／＼とさつしやるもんだん、私ハイそばに見てゐて、コリヤァハイ御勿體ないこんだァ、私どものしよんべんを飲まつしやるたァ、どうしたもんだいと思つたから、ソリヤァハイしよんべんでござるに、もうよさつしやいませ、私どもの冥利がおざいといつたら、あにコリヤァしよんべんだァ、道理で異な匂ひがしをると思つたに、コリヤァあぜ、憎い奴等だ、しよんべん手水にあぜ出しをつたと、お役人様が頭ない聲をして叱らしやつて、おのれ侍を馬鹿にせる、ふといやつだ、手打にせるぞと、腰の物をひつこぬかしやる處へ、みんながとつついて、エレチヤァ逃げろ／＼と、わしをとう／＼ぬがしましたが、お役人様の前がすまないとつて、命のかはりに、わしをこんなに坊主にして、村中からわらんおせんくれたもんだから、そこでハイ、わし六部と思ひたつて、こんなに諸方を歩きますわ。」ト此の話に

二人が腹筋をよりながらたどりゆくに、

早くも、うたふ坂のたてばにいたると、茶屋の娘「休んでお出で、名物砂糖餅あがつてお出で、お休みな／＼」

彌次「おめへの顔を見たら休みたくなつたが、もうちつと先へいきませう。」

此の茶屋の娘がくちに乘りかけの馬もたいこをうたふ坂なれ

此のたてばに休みゐたるが、はや立ち出で二人の歩む先へ立ちて行くは、ちよくぐわん所といふ御繪符をさしたる雨がけのはさみ箱をもたせ、供の男一人召し連れたる旦那といふは、御出家にて乘物にうちのり、問屋のにんそくにかつがせゆく。かの雨がけはさみばこをかつぎたる人足は、坊主頭に鉢卷して身には衣やら繻絆やら分らぬ黑きひとへをひつぱり、さいりやうのをとこはなしながら行くあとより、　彌次「ハ、ァ坊さまの雲助も珍らしい。きさまみたけの人足衆か。」坊主の人足「アイわしやナァ坊主權太というて、御嶽中でのだぼうもんでや。」乘物をかつぎ行く人足「ぼんさん、よんべはどこでや。」坊主「ようべナァ、六平がとこの玄妻めが逮夜ぢや、來てくれさいと、鄰のおんぢいのおごさやらうにおこづられて、行きをつたがナア、私念佛はえい加減にやりからかいて、それからナァ、酒をのんで〳〵のみからかいた、後にや六平も醉うてきをつてナァ、コリヤ精進ではのまれないとこいて、鯖のすしをこさへるやら、とやから玉子おろいて、大根と豆腐の汁へぶちこむやらして、おてらのお所化とわし二人が、りうと飮みからかいてもどりをつたがナァ、いこえい氣持でありをつたわい。」彌次「ハ、、、此の坊樣はとんだ人だ、肴をしてやるとはなまぐさばうさまだ。」坊主「ナニかまはずこたァござらない。けつかで在家の人はナァ、精進日ぢやの何ぢやかぢやとやかましい、坊主の氣さんじな事ァ、ねからそこにやァ頓著はせないに、わし年中念佛講ぢやの、百萬遍ぢやのと、賴まれて步きをる片手間に、人足にも出をつてナア、こないにこんきと稼ぎをるも、うまい肴くうて酒呑みたいばかしぢやて、それがなけらにや、な

んのい、こないなおぞいまねせるものでや。」さいりやう「お駕籠に旦那が聞いていやしやろ。めつたな
こといふな／＼。」坊主「ナニ、旦那はよう寐てござらせる、かまはずこたァなからず／＼。」ト此のはなしのうち
あとより總勢が、かねたいこにて、はやしたててきたり、みな／＼「なもあみだァ／＼。」たいこ「ドン、ドン／＼。」かね「チャンチキ／＼。」
みな／＼「なもあみだ／＼。」トやがて此の乘物に追ひつき念佛かうのかしらぶんのおやぢ、雨がけもちを見つけて、「ヤァ權太坊か、最前からのしのと
こゝへ人をやつたに、念佛の導師が坊主でもなけらにやはずまんわい、わしその雨がけかついでやろ、
のし音頭にかはつてくれさい、コリヤえいとこであうた。」トかうがしらのおやぢかはりて、はさみばこをかつげば、權太坊はたゞきがねをうけとり、
「なもあみだァ／＼。」乘物かついで居る人足「コリヤみんな御大儀でござる。私どももなじみの佛ぢや、えい
とこで出あうた。なもあみだァ／＼。ナントそつちの佛肩入れてやろかい。」棺桶を擔ぎゐる人足「東町のあ
にいか、のしちくとかはらまいか、がいにおもたい佛でござるわ。」ト乘物を擔いでゐる人足とかはり、今まで棺桶をかつぎしをとこの乘物の
さきぼうをかつぎてゆく。すべてこのあたりのならひにて、葬禮の時施主は勿論、旗てんがい等を持つ人も棺桶を擔ぐ者も、皆ひたひへ三角の紙をあてる事なれば、今かはりて乘物をかつぎし男、やつぱり三角の紙を額へあててゐるながらかつぎ行くに、葬禮とごた混ぜになり、棺桶の先へ、諸法實法、諸行無常、色即是空、空即是色と書きたる四本の旗を持つたる者ども、うか／＼といつのまにやら乘物の先へたちて旗をもちゆくにぞ、乘物の内なる人はよくねいりて前後も知らず、つきそひ來りしさいりやうの男見つけて、「コリヤ／＼旦那のお乘物の先へ、その旗は何ごとぢや、そつちやの方へ
のきなされやい。」乘物の先棒「ホンニさうで、コリヤ葬禮がまちがうた、その旗こつちの葬禮へつくのぢ
やなからず。」さいりやう「ヤイあんだらめ、こつちやの葬禮とは何ぬかすぞい、けたいの惡い。」トしかりち

らして葬禮をかけ抜けさせんとすれば、葬禮も同じくはしりて、細久手の少し手前なる寺の門前に来ると、先にたちたる旗持、寺の門へはひれば、つゞいて乗物を門内へかつぎこむと、うろたへてくわんをけをかつぎしものどもは、さつ／＼と寺の門前を行きすぎんとする。さいりやうの男肝をつぶし、「コリヤ／＼、旦那のお乗物どつちやへやりをつた。」「コレそつちぢやないわいの。」ト引きもどされて乗物を擔ぎし人足、「ハヽヽヽコリヤ佛がちがうた／＼。」ト後へ引きかへす時、此の門前を通りすぎたる棺桶も、うろたへて寺の門へかつぎこむひやうしに、出るのりものの棒と棺桶の棒と突きあたりしはずみに、のりものをかつぎしをとこも、棺桶をかつぎしをとこも、あふのけさまにたふれてはふり出せば、棺桶もなはが切れて中から佛がころがり出すに、皆々驚きあわてて、かの和尚をひつとらへ、くわんをけへ入れんとする。和尚あきれて、「コリヤ／＼なんとする／＼。」さいりやう「何さらすのぢや。」ト大ぜいをつきのけたゝきまはす内、乗物をかつぎ来りし人足、「コリヤアお怪我はないか早う／＼。」トこれもうろたへ、まちがへて権太ばうずをひつとらへ、何いふをも聞かばこそ乗物のうちへおしこみかつぎ出す。さいりやうは大ぜいをしかりちらしながら、かんじんのだんなどの、したゝか腰の骨を打ちたるをかいはうしてゐるうち、乗物はさつ／＼とかついで行くを見て、さいりやう又きもをつぶし、「コリヤ／＼お乗物待て／＼。」ト呼びかへす。乗物からは権太坊主がとび出すをたゝきちらして、やう／＼和尚を助け乗せたるに、皆々ぶてうはふをわびごとする様子、彌次郎北八後よりついて来り、をかしさにこらへられず、大笑ひして、

すでのこと死んだ佛とまちがひてあぶなく寺へいき佛さま

ふたりは此のいさくさを見捨ててゆくほどに、早くも細久手の驛に到る。

貯へのなければこゝろ細久手も何いとふべき肝のふとさに

それより矢瀬澤の辨財天を拜し、琵琶峠にさしかゝりて、

やせ澤に辨財天のあるゆゑか霞ひくなるびはの山坂

かくて大久手の驛近くなりければ、此のあたりの宿引みな女にて、はら／＼と立ちかゝり、二人をとり卷き、女「おまい樣方お泊りぢやあろなア、何屋へいかつせる。」彌次「いかさまもう泊りだらう。」北八「笹屋といふがいいといふ事だ。」女「さゝやは、がいにお泊りがあるでナア、私とこへお出でまいか。」彌次「マアさきへいつてからの相談さ。」女「こゝではナア、處の定規で、一組より外に、お客樣とめる事がでけぬくいで、どこへお出でてもせずやうが有らまいにナア、私とこへお出でなされ、おつれ樣はおいくたり。」北八「影法師ともによつたりさ、おめへ御馳走をしなさるか。」女「なんなといたしませず、サア／＼お出でまいか。」ト先にたちて二人をつれゆき、やがて大久手の宿に入り、かけぬけて、女「是れでござります、おさんどんおとまりがござらせえた。」ト此のうち亭主出先へかけいで、「コリヤようお出でた。コレノばさま、お湯とつてあげさつせえ。」トやがて二人は足を洗ひ、奥へとほると、早速ふろもわきて、入りしまひたるところ、此の宿のめしもり二三人づれにて、客のある内をそゝりあるく。うた「わしがおもひは深山の猿よ、かく手はあるが、文さやらずいつてがない、おつちいさん、おとまりがござらせるか。」やごやの女房「皆あがりなされ、さいぜん釜戸の金太樣が、いこ入り組んでぢやあつたぞい。」めしもり「やアだよオ、わし金太樣たア本山からの馴染だアけれど、アニハア見たくでもないふとだア、此ん中お伊勢樣へござらせえて、歸つてからハア、上方の女はみんな好い器量だア、こゝらの女郎衆と比べちやア お月樣と泥龜ほど違ひ申すと、それぼつかし云ひ召さつたが、ソリヤハア、都の女衆だアから、き

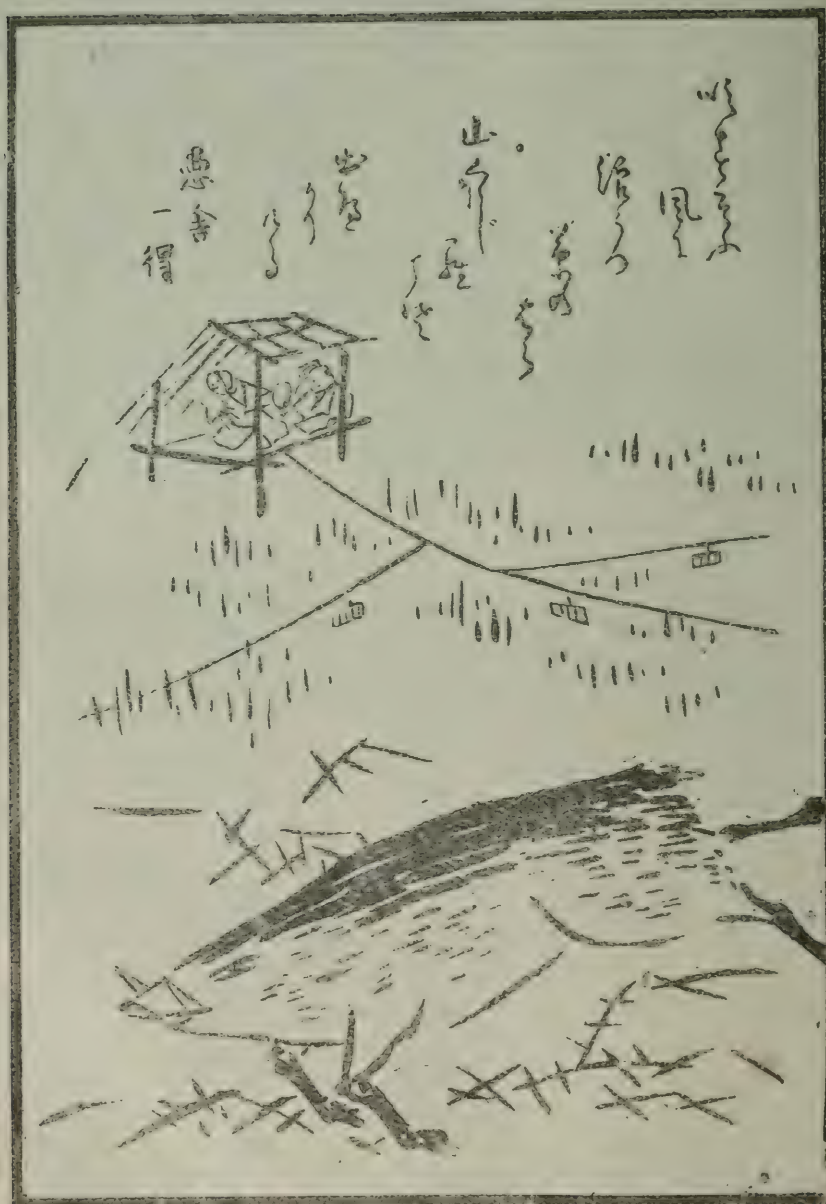
りやうもがいに好かんべいが、そんだいにやァわしらのやうに、麥だァの米だァのとつかせて見なさろ、いくぢやァござるまい、私どもはハアみそけぢやァござらないが、たほこを一服すふ内にやァ、ふと臼やひた臼はお茶の子でござるわ、ふとを馬鹿にしたこんだァ。」トいひつゝ座敷へ來り女「コリヤァハァよくとまらせえました、お前方さびしかんべい、ふとり呼んでくれさつせえ。」彌次「ハ、ァおめへ方は爰の女郎衆か、買ひてえが錢がねえ。」女「ヤレハァお氣の毒なこんだァ、私かしてやらずに、金サアこゝへつん出しなさろ。」北八「ハ、、、とんだおしやれだの、成程お前は心中者だ、金を出したら錢借す、凧やろながら聞いて呆れらァ。」女「道化た事言はつせずと買つてくれさつしやい。ドリヤ一服吸つていかずに。」彌次「イヤ此の女郎衆は、煙草の吸殼を手のひらへはたいてのむな、ハ、、、。」女「アニハァ、それがをかしかんべい、私どもの手のくほは蛸だらけだァから、お客樣にやア、がいにすひつき申す事よォホ、、、。」ト打ちわらひて出でゆく。この内ぜんを持ち出でくひしまふとすぐに蒲團を持ち來り、牀をとるをんなの手を捕へて、北八「コウ姉さん、わつちが一つ願ひがある、聞いて呉れねえか。」女「ハイなんでや。」北八「のちにわつちが處へ來てくんな。」女「ナァニ言はつせる、そないなこたァ知りませぬ。」北八「ハテ野暮な子だ、コレサ／＼。」彌次「その男の相手になりなさるな、瘡ッかきだから。なんならわつちが處へきなせえ。」北八「エ、又邪魔をする。コレ／＼戲談ぢやァねえ、どうだ／＼。」女「オホ、、、嬲らずとこゝ離しなされ。」ト突き倒してかけて

行く。此のうち彌次郎兵衛手水に行きしあとへ年増の女來り、女「お茶あげませず。」北八「コリヤ御馳走々々、時に今こゝへ來た女中は内の娘か奉公人かえ。」女「此の中から雇はれて來てぢやが、何としをりました。」北八「イヤ何ともしねえが、とんだいい新造だ、お前どうぞあの娘を取持つて、後にこゝへよこしてくんなせえ。」女「ナニあの子は今に脊戸へ猪の番にいきをります。」北八「ヤア猪の番とはこゝらへ猪が出やすか。」女「出をりますとも、いつきにそこなてのねきに畑がありますが毎晩畑荒しをります。此の中から小屋をこさいてそれへ番にやらします。」北八「そんならそこへいかうか。」女「オホヽヽ、お出でなされ、この脊戸口へお出でると知れませずに、もうおかたげなされ。」ト言ひすてて勝手へゆく。此の内彌次郎手水より歸り、猪を追ふなる子の音のみ聞えて、世間もひつそりとなりたるに、北八一寢入りして目を覺し、まじ〱しとしてゐたりけるが、此の道にかけては、まめな男、そつと寢所を拔け出で手水にゆくふりして緣側へ出て見れば、をりふし月夜にて白晝の如くなるに、雪隱の草履を出してはき、庭へ下りたち切戸を開けて、裏の方へ出かけ見れば、向うに猪小屋とおぼしきが見えて軒上に鳴子を引く音しける故、扨こそとそろ〱行きて見るに、その猪を追ふ小屋には、成程先刻の女の聲すれども、男の聲も聞えて二三人もゐる樣子に、北八これはつまらぬと後へそこ〱戻る畑中に、何かは知らず落し穴ありて、踏み外して落ちたりけり。北八「アタヽヽヽ、コリヤ何だ、エ、とんだところへおつこちた、あいた〱〱。」ト足腰を痛めながら上らんとするに、よほど深き穴にて殊更四方きつたてのやうにて壁の如くなれば、なかなかあがる事もならず、とほうにくれてゐたりける。これは猪をとる落し穴にて、此の邊にてはする事なり。いかにも井戸の如く眞直に深くなりて、穴の上には細き腐れ竹をすのこの如く竝べ、その上へそつと畑の土を均し置き、猪を追ひこんでこゝへ落す所なり。北八かかる穴ある事は知らず、その腐れ竹の上へ乘りたる故竹折れて下へ落ちたるなれば、顏も身體もひつこすり、そこらぢうがひり〱すれども、そこ所ではなく聲を擧げて、北八「オ、イオ、イ助けて呉れ〱、コリヤ誰も聞きつけねえさうだ、エ、いめえましい、オ、イ〱助けて呉れ

ヤァイ死ぬわいヤァイ。」ト聲の限り呼びわめけども、穴の中にて外へろくに聞えざれば誰も出で來る者なし。此の時座敷にて彌次郎ふつと目を覺し雪隱へ行き、戻りがけに氣がつきて見れば北八が寢所に見えぬをふしぎに思ひ、彌次「コリヤどこへいつた、北八〳〵、はてふしぎな。」ト言ひつゝあんどうを提げて勝手の方へ出で、そこらうそ〳〵見廻すと、亭主目をさまし、亭主「誰でや〳〵。」彌次「アイ私だが、連れの男が座敷に見えやせん、こつちへは參りやせんかね。」亭主「ハァそれはどこぢやあろ、しよんべんにでもござらせえたもんであらず。」彌次「イヤ私が今も雪隱へいつて、そこらぢう尋ねやしたが見えやせん。」亭主「ソリヤどうでや〳〵。」ト起きいでて彌次郎と打連れ座敷へ來り、北八が著て寢たる夜著蒲團をふるつて見て、亭主「ホンニ見えさつせえぬ、もしそこなてのふるしき包あらためて見なされ、其の中にぢやあらまいか。」彌次「ナァニとんだ事を。」亭主勝手のかたへ向ひて、「コリヤ〳〵おつちいヤイ、お客樣一人失らかいた、のし知らずかい。」女房ねぼけた聲して、「ソリヤァ戸棚の引出しに入れてあらずに。」亭主「さうでやさうでや、おつれ樣は戸棚の引出しにござらせるとハ、、、、それでまあ落ち著いた。」彌次「ナニとはうねえ、內儀樣ソリヤァ何が引出しにありやす。」女房「私いふは此の中の皮足袋の事でや。」亭主「何こきをる、皮足袋のこんでは無いお客樣でや。」彌次「イヤサ先まで、こゝにその皮足袋が寢て居たが、ハ、ァ聞えた、大方お前の處の女衆の寢所へ夜這にでもいつたものであらう。」亭主「ハイ私もうこゝに三四十年も宿屋商賣してをるが、皮足袋が夜這にいかずこたァ、つひに聞きをりませぬ。」彌次「イヤ皮足袋ぢやァなかつた、連れの男の事よ。エ、どこへいきをつたやら、北八ヤアイ〳〵。」トむしやうに呼

ははる内、裏の方にても頻りに人の呼びわめく聲するをかすかに聞きつけ、亭主「ヤァ背戸でも誰やらわめきをる。」彌次「ハァほんにあれが慥かに連れの男の聲だ〳〵。」亭主「私行つて見て來ませず、ドリヤ〳〵。」ト亭主さう〳〵かけ出して裏へ出れば畑の中にて人を呼ぶ聲するを行きて見れば、猪の落し穴にて、北八「オヽイ〳〵。」亭主「誰で〳〵、お客樣か、コリヤおぞい所へ何として落ちさつせえた。」北八「わつちだ〳〵、早くどうぞ上げてくんなせえ。」亭主「さいぜんから其處なて此處なていつぺん尋ね居りましたに、マァござらせる所が知れてえい、しかし男ども皆居ないでせず事がない、マァそこなてに寢てなとござらせえまし、その中にやァ夜があけずに。」北八「エヽ、夜の明けるまで爰に居てたまるものか、寒くて堪へられねえ、早く上げてくんなせえ。」亭主「ハテ困つたもんでや、オイ番小屋に虎七は居らんか、ちやつと來てくれさい。」ト大きな聲して呼ぶと、たちまち男ども馳け來り、虎七「旦那さま、何でや、猪でも落ちましたか、わし打殺さずに。」亭主「イヤ猪ぢやない、お客樣が落ちさんせえた。早う梯子とつて來てくれさい。」虎七「イヤ梯子はナァ、上の法印殿へ貸してやりなりました。」亭主「エヽ、なんぜ貸してやつたぞい、あの法印めはナァ、いけないおぞいやつでや、わし此の中も洗濯槌貸して呉れさいと法印の所へ言うてやつたらなァ、ちんと家に有らずこたァ違ひは無からずに、うしならかいたとこいて、貸していこし居らぬきたない奴でや、あいつが貸していこさぬとて、私困るものか、うちの洗濯槌取出して使ひ居つた、あの法印づらのおござめに、なんで梯子を貸してやつたぞい。」北八「コレ〳〵その

いさくさは後でして呉んねえ、私はもう死ぬ様だ、早く上げて呉んなせえ、ォ、寒い〳〵。」亭主「イヤそこ所ぢやない、わし膽がいれる、サア虎七どうで〳〵。」亭主「おまいそないに云はつせるが、わしがしたのぢやない、おまいが貸してやらつせえた。」亭主「ちくらく云ふな〳〵。」虎七「わしちくらくは云はん、がいにおめらつせえますな。」亭主「イヤのしは、そうたいさいばじけものでや、なんでわしに詞をかやす、此のおござやらうめが。」ト立ちかゝり一つくらはせると、虎七「え、なんでぶたつせえた。」亭主「ぶつたらどうでどうで。」ト父つかみつく。虎七もかんしやくもちにて、利かぬ氣になりとりあふを、ほうばいの男とりさへ、かれこれするはずみに、ていしゆ辷りこけて同じく穴へころげ落ちて、亭主「あいたあいたあいた。」北八「ヤア〳〵おめへも落つこちなさつたか。」亭主「これはお客さまこないにお前と一つ穴へ落ちると云ふは他生の縁でがなあらず。」北八「さやう〳〵無調法もの、是れからお互に、お心安くお頼み申します。」亭主「さうぢや〳〵、コリヤえいお住居ぢや、時に煙草盆は無いか、私一服すひたい。」北八「エ、悪くしやれずと、早くあがる算段をしてくんなせえ、寒くてがた〳〵ふるへやす。」亭主「ホンニ寒からず、こないな事なら蒲團かついで落ちればよかつた。」ト此の内俄にそこらぢうの番小屋にてさわぎ出し、「ォ、イ〳〵。」太鼓の音「ドン〳〵〳〵。」虎七「ヤア〳〵、猪が出をつた、ォ、イ〳〵。」亭主「ヤア猪が出た、コリヤコリヤ虎七〳〵、こゝなてへいこすな〳〵。」北八「ホンニ此の穴へ猪が落つこちては堪らない。」虎七「ししを落すためにゑりわざこさへた穴ぢや、そこなてへ追ひこみませずか。」亭主「エ、コリヤどひやう



もない事を云ふ。お客さまわめかつせえまし、わめくと猪めがきをりませぬ、オ、イ〳〵。」北八「オ、イオ、イ。」ト二人が穴の中で一所懸命の聲を出して喚き立つる。此の内猪は何處へ逃げ去りしや、太鼓の音も止みて男どもが長き竿を持ち來り穴へおろすと、下から此の竿をしつかり摑まへ、やう〳〵の事にて二人ながら引きあげられ、北八がた〳〵とふるへながら、顔も體もまつ黑に土だらけとなりて座敷へ走り戻れば彌次「北八か、どうした〳〵。」北八「イヤもうとんだめに會つた、小便に起きたら、あんまりよく月が冴えていい景色だから、うか〳〵と裏へ出て猪の落し穴へおつこちたわな、いめえましい。」ト著物を脱ぎて慄ふ内にも寒さ堪へ難く、早々夜著をひつ被り打臥しけるが、程なく夜明けにそこ〳〵に仕度し、此の宿を立ち出づるとて、始終のことを彌次郎に話して、大笑ひしながら、

大わらひなれや力を落し穴あてのはづれしあごのかけがね

此の大久手の宿より大井まで三里の間、十三峠と云ふは此處なり。二人はやがて西行坂までよぢ登りたるに、小屋掛けせし出茶屋あまたありて、茶屋のば〻「お早うお出でた、休んでござらつせえまし。」彌次「婆さん、何んぞあるか。」ば〻「まんだ何もござりませんでなア。」北八「煙草の火もねえな。」ば〻「今こゝなては來居りました、火を打つて進ぜませず。」ト火打鎌と石を出して、こつち〳〵。彌次「婆さん、そりやア何時まで打つてゐても、それぢやア火がつかねえ、火口を出しもしねえで、石と鎌ばつかりでさ。」ば〻「ホンニさうで〳〵、コリヤ附木を忘れて來をつた、鄰の婆さん附木を一つくれさい、コレお前そこらなての松葉や木つ片を拾うて來てくれさい。」北八「コリヤア有り難え、かしこまりやした。」ば〻「早う持て來

てくれさい、たきつけずに。これ／＼お前もそないにして居ないで、そこなてのねばり土を一掴み持て來てくれさい、團子の粉がいにすくないでたしにせずに。」彌次「エ、團子へ土をまぜるのか、途方もねえ。」ば、「私小便がもるやうでや、お前こゝなてへたきつけてくれさい。」彌次「ドッド承知／＼。」ば、「その手とり鍋へ水を入れてかけさい。」彌次「ハイ／＼。」ば、「ヤレ／＼せはしない、お前もうちくと、そつちの傍へよらつせえまし。」彌次「オヤ小便した手も洗はずに團子をこねるのか、コリヤあやまりこのとろゝ汁だ。」北八「この玉子はまだかえ。」ば、「いんま此の團子とひとつにうでをります。」ト卵と團子を鍋へ打込み、ひからびた小豆こね廻し、やがて鍋から團子を取り違へ、玉子を出して小豆をべた／＼とくつつけ、「サア團子喰はつせえまし。」彌次「コリヤうまさうな團子だハ、、、。」北八「婆さん此の團子はいくらづゝだ。」ば、「アイ一つ壹文宛でござる。」彌次「安い物だ、その代り團子の皮をむいて食はにやァならねえ。オヤ此の團子は翼が生えかゝつてるらア、ハ、、、。」ト小豆のついてゐる卵を壹文づゝと聞いて、むしやうに食ひしまひ、北八「婆さんおいらァ五ッ食つたから五文だな。」ば、「ハイお前は。」彌次「おれは七ッ食つたから二人で都合拾貳文ソレよしか／＼。サア行きやせう、コリヤアお世話になりやした。」ば、「アヽ、コレナ／＼、待たつせえまし、わし團子と玉子を間違へた、アリヤ玉子ぢや拾文づゝくれさい、小豆をつけたはまけにしませずに。」彌次「ハ、、、やつぱり太郎兵衛駕籠だ仕方がねえ。」ト立ち戻り拾貳文づゝ拂ひて出でゆく。

木曾街道續膝栗毛三編　終

木曾街道續膝栗毛四編序

穆王巡二行天下一驅二八龍之駿一、一九先聖道中を旅行して、一疋の膝栗毛に足る。しかも彌次喜多兩個を乘せ、駄賃出さずに編ぎ立てる筆の先觸れ問屋場に、傳馬ひま入らず岐蘇街道、十一宿も早過ぎて、荷物の目方の貫目より、本の續編十一卷目、東都のかたへ戻り馬、予も小冊の助郷馬ならで、一寸小荷駄に賴まれつ、酒料もとらず馬士々々と、序くちをとりて牽き出すものは。

文化乙亥睦月　　綠亭可山誌

再敍

山氣は壽多しとかや、是れその質素淳樸に應じて、古代の遺風を失はず、心物に移らず、自若として駭かす、一郡一邑の方語を守りて、おのづから優長なるに依りてなり。二條の大臣の筑波集に、草の名も所によりてかはるなりといふ句に、難波の蘆も伊勢の濱荻と、救濟法師の附けたりとぞ、言語及び物の名も、諸國皆異同ありて聞くに珍らし。就中この木曾路は言すべて、拗音にして上聲多けれど、そは筆にあらはしがたく、唯鄙言方語をそがまゝにて、今年續六編の趣向を編りぬ。稿成りて後、信州松本の何某より、予が方に云ひおこせたるは、去年五編の著述殊に俚言の違ひたるよしを記して、土人の風俗癖あることまで、精しく書きおこせたるによりて、予猶去年初秋の頃より思ひ立ちて、信州善光寺に參詣し、所々に遊歷して、これ彼を見聞せしに、松本の人のいひおこせたると、符合する甚だ多し。仍つてこの次七編には、目下予が聞き覺えたる儘を露はすべしと、今よりその理を述ぶる事しかり。

十返舍一九誌

木曾街道續膝栗毛四編

東都　十返舍一九著

月はをしまれて入り、櫻は散るをめでたしと詠み連ねたりしも理なるかな、都會と雖も生まれたる地は、不斷見るに見飽きて珍らしからず、東都の人たま〳〵江之島金澤にゆきて、鯛鰈を追ひ廻し鰹の生きて働くを見しより、尾鰭をつけて見ぬ人に咄すばかりも一興なりし。ましてや京大阪及び諸國に遊行して、日毎に變る山川の有樣、目なれぬ土人の風俗言語のをかしげなるをきく樂しみ、生涯忘れまじき旅行の面白さに、彌次郎兵衛、北八の二人連れ、國に待つ妻子もなければ、心に懸る事もなくて、今日は濃州大久手の宿を立ち出で、十三峠を打越して大井の驛にぞ到りける。近頃は此の街道殊に往來繁く行きちがふ駄賃馬の鈴の音。「シャン〳〵〳〵。」馬士唄「たれにこがれて主べいしぬか、つぼやおちしやどの喉かで散るしよんがえ。」宿はづれの茶屋のかゝ「お早うござらせえました、茶ァまゐつてござらせえまし。」北八「チト休みやせう。」ト此の茶屋へはひる。彌次「内儀さん何ぞありやすか。」女房「イエまんだなんにもござりませんでなァ。」北八「朝つぱらに何がある物だ、よく喰ひたがるぜっ。」彌次「喰ひたかァねえが、何もねえからわざとさう

云つたのだハ、、ハ。」ト此の内上の方より年頃六十近きおやぢ、あゐのふとりの古布子に木綿更紗のぶつさき羽織を著たるお侍一人來かゝり。「ドレ一ぷく吸つていかずか、どうぢやおかはりもないか。」ト同じく此の茶屋へ入れば なじみの茶屋と見えて、女房「今年はまんだお上りぢや無からずと思ひ居つたに、お早いこんぢや。」侍「貴樣の顏早う見ずく\と思うて急ぎからいて來をつた。ハ、、ハ、コレハ見さつせえ。」ト彌次郎の傍へ腰を掛ける。侍「爰許の茶は何時でも、りうと甘い事ぢや。」彌次「さやうさ、内儀樣が美しいと茶も甘く飲めやす。」侍「さうでく\、コリヤ貴樣たち、昨夜は何處へ泊らせえた。」彌次「ハイ大久手泊りでござりやす。」侍「ソリヤ早うござらせえた、身共馬込より罷り越しをつたが、今朝七ツ時に出かけをつた。」北八「貴方方は夜道をなさつても、二本さしてござると云ふ物だから大丈夫だ。」侍「如何樣さうでく\、道中は帶刀の事でや、第一船渡し假橋などでは、鳥目を出しをらずにすむて。」彌次「さやうでござりやせう。」侍「まんだお身達のでけずこんでや、宿へ附きをつてもよい座敷ども明けさせて、先客が有らうとも湯へは身どもらを先へ入れをる。」彌次「左樣々々。」侍「まんだある、支度なども餘人よりは先へ出しをる、コリヤ貴樣たちのでけずこんでや。」彌次「左樣々々。」侍「そのくせ宿賃も決してとりをらぬ。」北八「ナニ旦那方でも、ソリヤさうはいきますまい、旅籠錢はとりやせう。」侍「とる事はとりをるが一人前百五十文の外其の上はとりをらぬて。」北八「其の代りあなた方が出來ねえ事がありやす。宿の女に美しいのがあつても、わつちらとは違つて旦那方は急度してござる

から、いちやつく事がなりやすめえ。」侍「イヤ〳〵、でけるとも〳〵、一昨夜上松へ泊りをつた時、宿の女にいこよいのがありをつた故、亭主を呼び出いて、コリヤ〳〵今宵身共の伽にあの女いこせ、承知せずば問屋共へ申し付けるがどうせると、入り組みをつたら、亭主が左様ならばお伽に差上げませずといひをつた。」北八「ハアそんならその女が、さうして貴方の所へ參りやしたか。」侍「イヤさつぱり來なんだハ、、、。」女房「モシなにか、かんこ臭いやうでござります。あなた方の方ではござりませぬか。」北八「ホンニきなくさい。」侍「ヤア〳〵身ども羽織の裾へ吹殼を落しをつた。」ト驚きあはてゝ早速もみ消す。彌次「ハ、、、あなたあんまり話に浮れて飛んだ事をなさつた。」侍「イヤ身共の吹殼かと思うたら、身共の煙管にはまんだ煙つてゐる、コリヤ貴樣が今此の灰吹へはたかせえたのが身共羽織へ飛びをつたのぢや。」彌次「ハアさやうかね。」侍「コリヤ濟まないぞ〳〵、なんでお身此の羽織をこがらかいた。」彌次「さつぱり心付きませなんだ御免なせえまし。」侍「イヤ御免なさいと許りでは濟まず事アなからず。」北八「エ、なんの御てえそうな、すまねえとつてどうするものだ。」侍「イヤお身過言をぬかいたな。」北八「ぬかしたがどうだえ。」侍「云はいて置けば頭ない事をぬかす、承知ならんぞ。」彌次「コレサ北八は默つていろえ、先はお侍樣だわ、何にしろ私が無調法眞平御免下さりやせ。」侍「ム、お身の樣に詫ればせず事がない、不埒者めが。」彌次「ハイ〳〵。」侍「以後を急度嗜みをれ。」彌次「ハイ。」侍「あの男

は其の分に差置く奴で無いが、身共も主用をかゝへてをれば、料簡致すぞ。」ト此の内上の方より十四五の前髪、から尻馬に乗つて來り此の侍を見て、「ヤアこゝにぢや〳〵。」馬士「旦那お早うござらせえた。」ト此の門先に馬をつなげば、若衆は馬から降りて此の茶屋へ入ると、馬方柳行李と風呂敷包をおろしてかの侍へ渡せば賃錢拂ひて、侍「御大儀々々々、時に長休みをした。」ト云ひつゝ柳行李と風呂敷包を一荷にして棒を通し、自分のさしたる刀をその棒にそへてくゝりつけ荷造りするうち、かの前髪、「サァ父さん行かまいか。」侍「これはお世話になりました。」女房「さやうなら御機嫌よう、又來年お目にかゝりませず。」ト彼の侍はその荷をかつぎ、此の茶屋を出でながら二人を睨み廻して出でて行く。北八「いめえましい二本棒めが、あれだけの火傷をしたとつて仰山にぬかしやァがつた。」彌次「仕方がねえ、先が侍といふ者だからあやまるにしくはねえ、手前なぞはまだ若え〳〵。このう内儀さん、侍にやァどうもかなはねえの。時にありやァお前懇な樣子だが、何處のお國人だね。」女房「ナニあれは三河の萬歳衆でござりますになァ。」彌次「エ、萬歳めか、いめえましい、成程江戸をしまつて今頃歸る時分だ、そんならあの前髪めはうぬが息子で才藏だな。エ、そんならあんなにあやまらずとよかつたものを。」北八「ソレ見なせえ、お前をよく〳〵のべら坊だと思つたかして、がうてきにうけさせやァがつた。」彌次「ホンニ飛んだめに會つた、サァ出かけようか。」ト茶代を拂ひ此處を立ち出づるとて、

侍と思ひの外の萬歳にひやかされたる二本棒鼻

かくて大井の宿を離れて、早くも岩瀬村小萬場を打過ぎ、中津川の驛に著く。此の宿外れに往來の

人をり重なりゐるを、何事やらんと二人も立寄り覗き見れば、手品つかひ、口上サア／＼どなたもお急ぎでないお方は、ゆる／＼やはく／＼べん／＼だら／＼と御見物下さりませ。私事は京都にては四條河原北野の森、大坂は天満天神生玉道頓堀にて、御評判にあづかりました男手づま、一通りなら何なとござれ、綺麗な所がお慰み。扨お約束の煙管を唯今呑んでお目にかけますが、必ず後でれきおやぞえ。サアやりかけましよ。先づは此の煙管を呑んでお尻からたれてお目にかけまする、ひよつと尻へ出すに小便の出る方へ煙管が出かけると、ソリヤやくたいおやさかい、此處がむつかしい、去年伊勢の古市でお聞きなされ、私が此の煙管を呑んだ時、腹の中で行先が間違うてムントいけむはずみに、煙管の吸口が小便の出る所へぎつと出かけたと思ひなされ、サア後へも先へも行かん。コリヤどうしたらよかろと思うてもしよ事がなし、それから商賣お休みとなつてゐると、世界は廣いもんぢやわいの、妙見町の心太屋様から、コレ／＼穴吉、わがみは煙管の吸口が前の方へ出て難儀ぢやと云ふこつちやが、ナント私が所の見世へ雇はれて來てたもれ、賃錢はやろと仰しやるさかい、コリヤ遊んで居るよりはと其の心太屋様へいたら、コレ斯うするのぢやと私を心太舟の前へ丸裸にして立たしておいて、口からやたらに水をつぎこむと思ひなされ、そないにすると前の方の吸口から瀧の様に心太の中へ水がシウ／＼と出るさかい、コリヤ珍らしいと往來のお方が山の様にをり重なる。そこで心太屋様

が、ナントえらいか、世間の店に色々の水からくりしかけてあれど、こないなのはありやせまい。今に評判に成つて商ひがたんとあつたら、われにも賃錢を増してやろと、それから毎日そないにすると人樣が店先に、朝から晩まで押し合ひへし合ひ御見物はあれど、誰が一人心太を上るお方が無い。コリャ無い筈ぢや、私が小便の出る所から吹き出す水につけてある物を、食ひての無いは道理ぢやと、そこを斷り云はれて、コリヤつまらんものぢやと思うてをつたが、又ある所の鍛冶屋樣がお出でなされて、こちの内へ來てくれまいか吹革が損じたさかい、當分わが身をかはりに雇ひたいと、無理に引きずつて行かしやつて、どないにすると思うたら、私を店先の土間に坐らせて、口の中へ何やら撞木の樣な物を入れて、出したり入れたりさしやると、吸口からフウ／＼と風が出て火がおこるさかい。私も餘り可笑しうて、ツイ吹き出す拍子に尾籠ながらおならを一つフウとやると、鍛冶屋樣がコリヤ此の吹革はあかんわい、屁の用心が悪いと云はれました、ハヽヽヽヽ」ト此のうち股引草鞋にて、紺の合羽の上に風呂敷包を背負ひたるおやぢ見物してゐたりしが大あくびをして、おやぢ「あんのこんだか、がいに口べい叩いて、煙管のウいつ呑むのだやら、あだけた人だァ。私らの方にやァ家藏のウくん呑んでしまつた人がござらァ、だほうめが、行きませずい。」ト口小言云ひながら出かける。彌次郎北八も此のおやぢの後につきて、彌次「モシ／＼お前の今云ひなさつた通り、家屋敷田畑をも呑んでしまふ人があるから、煙管位呑むのは珍らしくござりやせん。」おやぢ「さうだ／＼、俺が村にもでこ大き

な身代の人が一人ござつたが、家職のゥぶち止めて俳諧とやらが好きで、發句べい讀んで、あに尻のしまひにやァ、その身代のゥ皆詠み無くならかいて、しまひをつた人がござらァ。」彌次「そんならお前方の方でも俳諧が時花りやすか、蕉門か美濃風かえ。」親仁「イヤ證文は美濃にやァ滅多に書き申さぬ、西の内へ書き申すわ。」彌次「ハヽヽヽその證文ぢやァねえ、俳諧の蕉門の事さ。」おやぢ「ハァ俳諧の蕉門たァ知り申さないか、横つ腹の蕉門なら此ん中うらァするゑ申した。」北八「ハヽヽヽ面白い親仁樣だ、お前その俳諧か出來やすか。」彌次「それが出來ると話しながらいゝ道連だ者を。」親仁「お前方ァ俳諧のゥさつせるか。」彌次「アイ私は江戸の者だが、江戸の三圍といふ所で、夕立や田を見めぐりの神ならば。」と云ふ句をして旱りに雨を降らせた男さ。」おやぢ「ヤァ〳〵〵お前ソリヤァたまげた人だァ、もしうらが兒にやァ息子もそんだァ事がでこ好きでござらァ、あんと今夜ァ己が所へ來て泊らせえぬか、お供申さずに。」彌次「いかさま何も慰みだ、お前の所へ行つてお世話になりやせうか。」北八「エ、お前又番狂はせをやるだらうぜ。」彌次「ハテかまふこたァねえ。行きやせうが、お前のお宅は。」親仁「うらが所は此の先の宮澤といふ所から二里べいも上で、福田と云ふ村でござらァ。」彌次「とかく錢のいらねえ事だ、北八行かうぢやァねえか。」おやぢ「サア〳〵いじやらつせ〳〵。」ト それより色々話しながら上おね村坂を過ぎ、古野坂より宮澤に至りて、左の方山奥へはひるに、往來は稀にして細き山道を上りつ下りつ辿り行く。此の内にも色々あれども、餘りくだくだしければ略して、すぐに彼の親仁の方へ著きて見るに、此の村の役人と見えて、門構へに用心つるべ大うちはな

どありて、よほど廣き住居と見えたり。おやぢ「サア〳〵今戻りをつた、コリヤびい〳〵、あんにやさア何處へ行ぎをつた。俳諧のお客樣アをなごらこゝへひこずつて來をつた。ヤイおかま來さい、湯のウ涌いてあらず洗足鉢へもうにくん出いて持つて來さい。」ト此の内ばゝも嫁も走り出でゝ ばゝ「コリヤ誰方もようござらせえました。」嫁「お足のウおいすぎなされてお上りなされまし。」彌次「中津川から此方と道連になりまして、お話し申すうちに、是非來て泊れと仰しやるから參じました、何もおかまひ下さりますな。」ばゝ「あにこんな山中でござらア、あげず物もござらないに。」おやぢ「虎七は内にゐすかい。」ばゝ「いんまお陣屋樣から呼びに來て、伊五左殿とつるんで行ぎをりました。」ト此の内二人は足を洗ひ上ると、おやぢ案内して奥の座敷へ通す。いかにも古き家作にて柱ゆがみたれば襖障子の建付けは合はざれども、三方椽の廣き座敷にて、牀の間に伊勢のおはらひを飾りて神酒德利供へてあり。腰張りは所々ふくれて雨漏りのつたはりたる跡つき、欄間の彫物の浪に牡丹の折枝を彫りたるが見えたり。やがて十二三の少女が手拭を被りたるまゝ茶煙草盆など持つて來る。彌次「これは何もおかまひなされますな。」おやぢ「あんでもあげず物はござらないが、遠方から鰌をもらひ申した、それで一つ上げませずと思ひをつて。」北八「そりや御馳走でござりやす。」ト此の内てうしと吸物を持つて來る。蓋を取つて見れば鰌と豆腐とごばうを煮たるなり。おやぢ「コリヤ酒がお口にやア合ひますまいが、マアゆつくらりと上らせえまし。」ト勝手へ立つて行く。跡にて一口飲んで見れば、一向に一口もいけぬ酒なれども、ひもじい時のまづいものなしにて、顏をしかめながら、さいつおさへつ飲みかけ、彌次「久し振りで鰌を食ふわ。是れに山椒をくはへると奇妙だけれど。」給仕の女「お吸物をお取つ代へなされまし。」北八「いか樣もう一膳、サア彌次さん一緒にやらねえか。」ト盆にのせて返しやり、北八「こいつを江戸の味噌

で食ふといいに、どうも玉味噌ぢやァあやまる。」彌次「何にしろ錢がいらねえからそれだけは不肖するがいい。」ト話のうち吸物をかへて持つてくる。蓋を取つて食ひかけて見れば、鯆の口へ山椒を一粒づゝくはへさせてあり。北八「ハ、、、お前が今山椒をくはへると妙だと云つたを聞いてかして、コレ見なせえ大笑ひだ。」トおやぢ勝手より出でて「モシお客様鯆へ山椒をくはせさせずとおもひをつても、でこ大きな鯆はくはへますが、がいに小さな鯆めはくはへさせづらいで困りはて申した。」彌次「イヤもう御丁寧に一つ／＼くはへてをります。」おやぢ「コリヤもうあんやさがをるとえい話相手だに、いんまに戻りをりませず。時にお客様嫁めがこんな物を出しをりました、これにその俳諧とやらを書いて下さりまし。」ト短冊一枚と硯箱を差出す。彌次郎しかつべらしく筆をとりて、人のしたる發句を出放題に書かんとしたりしが、文字を忘れをるゆゑ、ひらかなにて書いてやると、おやぢ戴きて取り上げ、「ヤイ／＼おかま出來たぞ、ばんばあどのも長松もみんな來さい／＼。」ト呼びたつる故何事の珍らしい物もあるかと、母も嫁も子供も家内の者殘らず走り出でひと所へ固まる。おやぢ日鏡を取り出して、短冊を手に取り上げ、「ア、かうと、あに／＼、エヘンエヘン、コレばんばあどの念佛はまたつせえ、讀むのに邪魔くさい。コリヤ長松、あかり先へ天窗をつん出すな、もつと後へ引込め／＼。」ばゝ「エ、ごた／＼云はずと早く讀まつせえまし。」おやぢ「オ、サいんま讀まず、ゴホン／＼。お客様、その吹殼のウ消して下さりましゴホン／＼。」ばゝ「エ、小豆が煮えこほれますわ、埒のあかない人だア。」おやぢ「ハテせはしない、マア默つて聞かつせえ、あに／＼、咽が鳴る粕味噌の屁の匂ひなり。ある程、かすみその屁なら臭からず、コリヤ面白い。」彌次「ハ、、

ハ、お前さんは讀みやうが違ひやす、咽が鳴るかす味噌の屁ぢやァござりやせん。」おやぢ「あんでござる。」彌次「長閑なる霞ぞ野邊の匂ひなり、といふ句でござりやす。ハ、、、。」ト此の内何やら勝手の方さわがしく、大勢の聲してどさくさするに、皆々驚き座敷を驅け出せば、おやぢも共に走り行くにぞ、彌次郎北八も何事やらんと勝手の方を覗き見れば、袴をはきたる男二人その外大ぜいてんでに繩よ細引よとわめきながら、一人の男を取卷きて縛らうとする。此の男ぬけ「コレ〳〵〳〵己にやァあんの科があつて、どうせるのだ〳〵。」ト涙聲にてうろす〳〵る。此の家の息子虎つくじりつして、七、村役人と見えて羽織袴を著たるが、人々をなだめて、虎七「マア〳〵よからず〳〵、何も騷ぐ事ァない、得心のウせる樣に云つて聞かせずい。コレ〳〵儀十にしにべい、何の科あるか知らないが、うらとこれの伊五左を御陣屋樣から呼び出いて、久野儀が頬の皮のウ引つぱいで持つて來いと、コリャお書付が此の通りだァからの事よ。ハテ久野儀といやァ、にしやァ久野屋儀十だァから、主のこんに違ひはなからず、常住心安くせるものを氣の毒なこんだァけれど、お陣屋樣からの云ひ付けだァからせず事がない、いんまも伊五左と談合のウして、にしに此の事をぶちあけていはす事もむげちないから、いつこの事だまくらかいて、ひこずつて行かずと思ひをつて、此の孫右だァの彦十だァの彌弟だァのと大勢を頼んで、ひこずらうとせるのだァから、何も己を恨みたァ思はないがよからず、のう彌五左。」彌五左「さうだァとも、わしらもたまげた理窟だァもし、サア久野儀、せず事がないと諦めたがよからず〳〵。」久野儀「そんだァとつて、私あにも頬の皮ァはがれる覺えはござらないに、にしたちも如何にお陣屋樣から云ひつけ

さつせえたアとつて、共々詫言のウしてくれさつせる筈だアに、むげちない、外に頬の皮の厚い人はいくらもあらずに、うらアどうぞ助けてくれさつせえ。」ト大聲をあげて泣く。虎七も彌五左も、氣の毒さうに貰ひ泣きしてゐたるが、とても此の儘にては云ひつけられし役前も濟まず、心弱くてははてしなしとや思ひけん、互に目くばせして摑みかゝれば、儀十一所懸命とつきのけて逃げまはる拍子に、煙草盆をふみ碎くやら絲車をけとばすやら、やうノヽ皆々おつとりまきて、手をとり足をとつて引倒しとうノヽぐるノヽまきにしたりければ、儀十はたゞ聲の限りを泣きわびてゐたりける

虎七「ア、てきない思ひをした、儀十はマアよいが、いんまの騷ぎでわしの足のウ一本なくならかいた、そこらにやアないか見てくれさい。」彌五左「あにひなたの足は、いんまのさきまで二本ありをつたぢやないか、ドレノヽハ、ア一本しかない、袂にやアないかふるつて見さつせえ。」虎七「インヤないでノヽ。」彌五左「イヤおつぺし折りでもしちやア悪からずと、お母樣が取つてしまやアせまいか。」虎七「ホンニおかまノヽ、主うらが足のウ一本知らないか、もし曲突へでもさつくべはせないか、おかまやいノヽ。」彌次「もしノヽお前の足は、ソレ袴の片つぽの方に二本ながらあるぢやアねえかえ。」虎七「ドリヤほんになア、仁義袋のウはくとつて、ソリヤ片つぽの方へ兩足のウふんごんだに、氣が付きをらなんだアもし。」伊五左「私案じをつたに、あつて仕合だアもし。」虎七「サア是れから伊五左、にし久野儀の頬の皮のウはいでくれさい。」伊五左「インヤノヽわし、ついに人の頬の皮アはいだ事がないに、さうして、あの頬アがじやほじやがあつて、素人にやア剝ぎづらからず。」虎七「あの三ツ口の所から、そろノヽとひつぺがしたらよからず。サアノヽみん

なかゝつてやりからかせ〳〵。」トやつさもつさの最中、當村の寺の住職と見えて和尙らしきが來り、みな〳〵を押し退け、「コレ〳〵またつせえ待たつせえ、久野儀が頰の皮のゥむかれると聞いたァから、むげちない、あんの科がある、ソレ聞かずと思ひをつて來たがあんでござる。」虎七「お殿樣がお細工物に入川だァと云ふこんで、久野儀が頰の皮アはいで來いと、コレお陣屋樣から此の書付のゥ出され申した。」ト懷中より陣屋の書付を出して見せると、和尙「ハ、、、、コリヤア字でかいたらひなた衆が讀みづらからずと、お役人が假名で書いただけに猶わからなくなつたのだァもし。これは久野儀の頰の皮のこんではござらぬ、椚桂の皮のゥ剝いて持つて來いと云ふこんでござらァ。」虎七「あるほどさうであらず、わしどもは又くのぎとあるから、此の久野屋儀十の頰の皮のこんであらずと思ひをつたに。コレ儀十、にしのこんでなくて仕合だァもし。」久野儀「そんだら私のこんぢやァござらないか。コリヤお寺樣のおかげで、わしの頰の皮ァ無事にかへり申す事よ。」トうれし泣きに泣けば、果ては大笑ひとなりて、久野儀の繩を解きみな〳〵歸ると、彌次郎北八これを見て吹きいだし、彌次「ハ、、、、なる程俺が書いた短冊をも、粕味噌の屁と讀んだ筈だ、久野儀の頰の皮はをかしい〳〵、ハ、、、、。」

　椚をば讀みそこなひて引剝ぎにかゝりし人ぞよいつらの皮

片山家の物寂しく、松風の音耳につきて夜も寐られず、明くるを待ちかね福田を立ち出でて山道を辿り〳〵、漸う落合の驛にぞ出でたりける。棒端の茶屋女共往來を呼びたつる。「お休みなされ〳〵、

お煮染の出來たてもござりますになァ、お入りなされ〱。」かごかき「旦那樣安く行きませずか、乘つていじやかつせませ。」彌次「イヤ〱駕籠には乘り飽きた、氣なし〱。」ト行き過ぐるに、猶かごかきは後よりついて來り、「そんな事を云はつせずと、乘つてくれさつしやいませ、まんだがいに通りも少ないで、私どもはなァ憂い事でや、聞いてくれさつしやい、米が一升百せるに、内のかつかあが此ん中から疝氣を病んで、私なァ肝がにえるから酒手でいかずに、のう旦那どうで〱。」北八「いくらで乘せる。」かご「ハテがいにねらすこたァなからず、えいやうにくれさつしやい。」北八「そんなら彌次さんそろ〱いきねえ、おいらァどうしたか足が少しなまけて來たから、乘つていきやせう。」ト此處にてかごの相談が出來て、北八はかごにうち乘ると、彌次郎は先へゆく。やがて、かごは十きよく峠にさしかゝる。此の處にて狐膏藥と云ふを賣る家多し。「サァ〱お買ひなさつてござりませ、當所の名方狐膏藥、御道中お足の痛み、金瘡切疵、ねぶと、はれもの所嫌はず、一つけにてなほる事受合ひ、外に又吸膏藥の吸ひ寄せる事は、金持の金銀を吸ひ寄せ、惚れた女中方をもひた〱と吸ひ寄せる事奇妙希代、おたしなみにお買ひなされ。」北八「いやこいつは面白え、かごの衆ちと待つて下せえ。モシその吸膏藥は女郎買ひに行つて、振られて寄りつかねえ女郎をも吸ひ寄せやすかね。」膏藥や「さやう〱、したがそこに仕やうがござります、そんな時には膏藥を紙へのばさずに、小判へのばしてその女郎へ張り付けてやりなさい、ぢきに吸ひ寄せます。」北八「おきやァがれ、そんなことであらうと思つた。」

女をも吸ひ寄せるとは出放題それは内股膏薬にこそ

峠の茶屋には栗の強飯名物あり。

澀皮のむけし女は見えねども栗の強飯こゝの名物

かくて此處の茶屋に駕籠をたてたるに、折ふし爰に居合はせたる男、これも駕籠舁仲間にて、「ヒヤア落合の勘太おんぢい、早いなア。」こなたのかごかき勘太「ム、太郎七か、にし此ん中はよくぬけたなア。」太郎七「そのぬけたで思ひつけた、主に話がある、マア一杯やらずか。」勘太「よからず／＼、コレばんばあ樣、酒をちくと、肴は何があらず。」茶屋のばゝ「豆腐と蕨ばつかござる。」太郎七「夫れでもよからず、サア勘太おんぢいいじやござい。」勘太「すイ旦那ちくと待つてくれさい。」トやがて酒を始めかけ、さいつ押へつ互に話しかけて飲む程に、後には二人とも舌もまはらぬ程に醉ひどれとなりて、太郎七「私、主の所へいかず／＼と思つておつたとこでや。」勘太「なんで／＼。」太郎七「外の事ぢやァないが、にし此ん中、中宿新田の芋ざふむ樣の所で、がいに入りくみをつて、らんごくをやりからかいたげな、わし芋ざふむ樣も心安くせるものだんて、うつちやつておかずこたァなからず、マァどう云ふこんでや。」勘太「ソリヤァかう云ふこんで。にしも知らずこたァなからず、あつこの内へむかざれによばれて行きをつた時、がいにざうさせるはえいが、私にとひやうとてつもない物を喰はせずと出いたは、人を馬鹿にしたこんでや、私そこできかないわ、モシ憚りながらべち

法よほなこんだが御亭主殿へちくとお目に懸らず、わし駕籠舁はせるが、是れまで蠅とりもちよす喰つた事はおざんない、人に此のもちよす喰はせて、口の中をひつつりひつはらせて、困らせずと思つてか、此のだほうどもめが、誰だと思ふ、落合の勘太様だァ、あて事もないと、それから入りくみ出いて、らんごくをやりかからかいたが、私無理ぢやァあらまい。マアどこにあらず事か、平の中へ牛蒡や薯蕷はえいが、此の位に丸くした蠅取もちよす入れて出いたもんだんて、私きかないわ。」太郎七「イヤその話を聞いたが、ソリヤァにしがおぞからず、ハテ蠅取もちぢやァなからず、麩であらず事ァ知れてある、ひなた燒麩は知つてるずが生麩といふは知らまい、その生な麩を莊屋樣がおなごらちそうに出いたを、ひなたが無理ぢやァなからずか、そればつかぢやァない、ひなた芋ざゐむ樣の事を芋ざゐむ殿とこいたげな。あの人も中宿の正法寺新田ぢやァ役人ぢや、私醉つて云ふぢやァないが、ひなたがその中宿の正法寺新田の芋ざゐむ樣の事を芋ざゐむ樣と云へばよからずに、それを正法寺新田の芋ざゐむ殿と云つたもんだんて、そこでもつてからに正法寺新田の芋ざゐむ樣が。」勘太「コレ／＼何も芋ざゐむ殿だんて芋ざゐむ殿と云つたを、芋ざゐむ殿があぜ芋ざゐむ殿と云つたと、ほて腹ァつつ立つ事ァなからず。」太郎七「インニヤサ、その芋ざゐむ殿と云つたァからの事よ、そこでもつて芋ざゐむ樣が。」北八「コレ貴樣達は何の分らねえ事をいつまで云つてるるのだ、早く駕籠をやらねえか。」勘太「イ

ンネ、そこどころぢやァおざんない、此の理窟がどうもすめないに。」太郎七「アニすめないこたァなからず、ひなた芋ざゐむ樣の事を芋ざゐむ殿と云つたもんだんて、ほてつつ立てさつしやつたも、無理ぢやァなからず、ハァテ、權兵衛が種蒔きやァ烏がほじくる道理だァもし。」勘太「アニ權兵衛が種蒔きやァ烏がほじくつたとて、あにも芋ざゐむ殿がほてばらァ立つ事ァなからず。」太郎七「エ、わからないふとだァ、ひなたが權兵衛樣の事を權兵衛殿と云つたもんだんて、そこで烏がほてはらァ立つて。」勘太「芋ざゐむ殿がほじくつたと云ふもんだな、ム、それぢやァわし悪かつた、それで理窟がすめたすめた、サア旦那行きませず。」北八「なる程ねつからよくわかつたハ、、、。」トやがて此の茶屋をかきいだし行く程に、早くも馬籠の宿に到れば、こゝにてかごのものに賃錢をやりて返す。彌次郎兵衛もこの處に待ち合はせゐて、それより打連れ坂道を辿り、女瀧男瀧と云へる二筋の瀧落つる處に到り、

二筋の瀧の中にて格別にふとく見ゆるは男瀧なるべし

それより馬籠峠を打過ぎ行くに、今朝福田を立ち出でたりしは四ツ過ぐる頃にて、落合まで出づる道知れ難く、彼是れ隙どりし事なれば、思ひの外道の程捗らず、はや此處に來り見れば七ツの日ざし過ぎて、妻籠宿の宿ひきと覺しき男二人を呼びかけ、「モシ〱お前方は妻籠お泊りでや。」北八「さればどうしやせうか。」宿引「もうお泊りでよからず、私所へお出でまいか。」彌次「イヤわつちらは定宿がありやす。」宿引「ソリヤ何屋ぢや。」北八「何屋でも貴樣たちの世話にやァならねえ、打つちやつて置き

なせえ。」宿引「イヤわし闇に當りをつて來たもんだんて、わし所へお連れ申さずに。」北八「途方もねえ人ぢやァねえか、宿はそつちのもの、錢はこつちのものだから、どこへでも勝手に行くわ、貴様の所へ是非泊らにやァならねえと云ふわけもあるめえ。」宿引「イヤ私どもも商賣だんて、定宿が無けらにやァしやつちお泊め申さずに。」彌次「エ、しつこい男だ、貴様の所へはいやだと云ふに。」宿引「やァだたァどうこんでや。」北八「どう云ふ事でたァべらぼうめ、貴様の所がどんな崩れかゝつた内で、化物の出る内やら、但しは昨日あたり葬禮を出した内やら、首縊りのあつた内やら知れもしねえものを。」宿引「イヤこの人は、私いつ葬禮を出いた。」北八「エ、うぬが葬禮を出したを、己が知るものか屎ッたれめが。」宿引「ハ、、、屎をたれないふとはなからず、にしもたれくさるであらう。」北八「知れたことだ、おいらァ毎日たれるは。」宿引「それ見あアがれ、ひなたこそくそたれだァ。」北八「うつちやつておきやァがれ、おれが尻でおれがたれるに、うぬ等が世話にやァならねえ、また世話になると云つて見やァがれ、横ッ面ァ張り飛ばすぞ。」宿引「アニこのたほう野郎めが。」ト摑みかゝるを彌次と北八突き倒して思ふさま喰らはせると、宿引はやう／＼起き上りて一散にかけ出しにげる。彌次「ハ、、、、とんだ奴もあればあるものだ。」

往來の客はさておき宿引の足をもとめず逃ぐるをかしさ

かくて日も西の山の端に傾かんとするに、二人はいそぎ坂道を下るに、年の頃十七より二十三四までの女道者三人連れにて、二人の先

へ立ちて行くを指さして、北八「ナント見なせえ女の尻をふつて行く後つきはどうも悪くねえものだぜ、コウ姉さん達、お前方ァ國はどこだえ。」道者の中にて年増の女「アイ私共は奥州から出來申した。」北八「ソリヤァ遠い所から伊勢参りだな、たつた二人づれか、男もついて來たらう。」女「インネまだ後から一人、女べい五人同志につん出來申したのだァもし。」彌次「かはえさうに、若い娘に此の山坂を歩かせるとはむごたらしいのう、姉御達足が痛むなら己がおぶつてやらうか。」ト傍へ寄れば、年のゆかぬ娘共は肝を潰した顔をして、ちやつとわきへ退くと、例の年かさの女「私どもはハァさうでもおざんないが、よつ遙かの道中で、此の衆はがいにうざねはき申した。それにハァ足どもよんこ痛め申して、アレ見なさろ、ちんばァ引いてきせちないこんだァけれど、路錢が尠ないもんでおざるから、あんちうすべい事も出ないで、めこいこんだァもし。」彌次「そいつはほんにいぢらしいものだ、けふはどこまで行くつもりだえ、なんなら今夜はおいらと一緒に泊らねえか。」女「アニハァ私共はにし達と同志に宿さァ取り申すこたァならないもし。」北八「なぜ〳〵。」女「木錢どまりにし申すわ。それにハァ同志のごゝ様たちやァ煩ひ申す、よんこ路錢のゥつかひ申して、今日も後の宿で鍋尻餅のゥ一つ二つ貰ひ申して、打食つたまんまだァもし、めごいこんだとおもつてくれさんせう。」ト涙ぐみて云ふに、そのなり風俗、いかさまにもと察しやられて、彌次郎これをふびんに思ひ錢二百文ばかり出して、彌次「ホンニかはえさうだ、女ばかりで錢がなくちやァさぞ心細からう、何にしろ食ふ物を食はずには猶の事難儀だらう、是れで何ぞ買つて食

つたがいい。」トかの二百文をやればよ無上に頂きて、女「コリヤハア御無用だァもし。」北八「エ、己が少し思はくがあつたものを、いつそ哀れつぽい話でしみつたれて來たから、氣がなくなつた、サア彌次さんちと急ぎやせう。」ト女づれを擲けぬけて行く向うへ上方者と見え、めい〳〵引きまはしの合羽に少しばかりの包を、わいがけにしたる三人づれ、一人の男がふり返りて彌次郎に聲かけ「お前方お江戸ぢやなア。」彌次「さやうさ。」上方者「大かた旅は初めてなさるもんぢやあろ。」北八「なぜえ。」上方者「ハテ今の女どもが云ひをつた事ほんまに受けてぢやさかい、ソリヤ遠國道者おさだまりぢやわいの、あないにわざとむさいなりして錢のない顏しをるは、護摩の灰やなどにとりつかれぬ爲ぢやわいの、よう思うても見なされ、遠國から女連れで出て來をつたもの、それだけの貯へがなうて何のまあ出をるもんかいの。それぢやさかいあないに云うたをほんまかと思うて、錢やらんしたはえらいあはうなこつちやないかいな。」北八「イヤもうぜんてい此の人は平生間拔けの上に、女と見りやァ猶の事いくぢのねえ人だからの事さ。」彌次「エ、さうかえ、なる程それぢやァ業腹な事をした、いめえましい、取つけえして來よう。」北八「ハテやつた物をいいぢやねえかえ。」上方者「ホンニ旅と云ふものは油斷のならぬもんぢやわいな、わたしどもは年中こないに旅ばかり歩きをるさかい、誰がどないな事云うて來たてて、ソリヤもう、喰はんわいなノ〳〵、のう八兵。」八兵「そぢやわいな、とかくお前方は、そないなこつては護摩の灰にだまされさんすぢやあろ、今宵はどこにお泊りぢや。」北八「もう先の宿へ泊りやせう。」

上方者「そんなりや、私共と一緒に泊つて見なされ、ソリヤもう五分もすかん旅雀の骨頂ぢやわいな。」ト此の話のうち妻籠の宿に著けば雨かはの旅籠屋より女ども出て引つ張る。女「お泊りなされ、お湯も沸いてをります。」上方者「コレひかんすな著物が裂けよるわいな、こちや黒股屋へ行くのぢや。」北八「モシその黒股屋と云ふはいい宿かね。」上方者「マア往て見なされ、えらい美しものがあるわいな。」ト此の内はや黒股屋の門先に到れば、上方者先に立ちてどや／＼とはひる。成程きれいなる宿なれば、彌次郎北八もこゝに泊らんと同じくはひれば、年の頃三十ばかりのきいた風らしき女房走り出でて、「これはお早うおざりました。」上方者「おまいの顔見よと思うて、えらういそぎに走つて來たわいな。」女房「オホ、、、あだけたことべいおつしやる、サア奥へおこずり申しませず。」北八「ナニおこずりする、まだ湯灌しねえうちにハ、、、。」トみな／＼奥の間へ通り、早速湯にも入り、夜食も濟みて、下女茶を五つ盆にのせて持ち來り、下女「ハイ入ればなでおざります。」彌次「いればなたア、さてはきさまが印だな、こいつはあやまる。」上方者「イヤお江戸さんコリヤでけた、えらい／＼。時に姉さん、こゝらにえい酒があるかいな。」下女「むかうにでこなるいえい酒がおざります。」上方者「何程買を、モシお江戸さんはどうぢやいな。」彌次「ようござりやせう。」上方者「そしたら一人一合あて、酒五合に肴なんなとかうて下んせ。」下女「ハイ／＼御酒のお相手は入りませずか、えいのべいおこずつて來をりませずに。」上方者「いか樣よかろ、お江戸さん附合ひなされ。」彌次「こゝのは何程でござりやす。」上方者「五百々々。」彌次「お前方が呼ぶに見てもるられめえ、のう北八仕方がねえ。」上方「オツトそれできまりぢや、サア

サア女中、今の酒五人とおやま五合たのみます、ちやつと〳〵。」下女「ハイ〳〵心得ました。」ト勝手へ行くと
しばらくして内の女房、巻きずるめとつけわらびの煮たのを皿に入れて、片手にてうし杯を持ち出で、女房「サア〳〵ふとつあがりませ、女郎さん方をいんまおこずりにやりましたが、今日はこゝの祭で皆お客様がおざりますで、五人様にやふとり足らないで、ばあず出の女郎様ふとり入れてはどうでおざりませう。」北八「ナニばあず出とはえ。」上方者「比丘尼のこつちやわいな。」弥次「ハヽア、そんなら女郎が四人あつて一人たらねえから、比丘尼を交ぜようと云ふのだな、こいつ面白だぬき。」上方者「そしたらそれを鬮どりかい、ソレよかろ、早う摑んで來やんせ。」女房「アニサまんだ、いつとき間がおざりませずに、コリヤ斯うなされ、お前達がおそべりなさつてから、此の行燈吹つ消して女郎様方を出しませずに、暗闇でふとりづゝ、ふつ抱へてお遊びなさるがよからずなアもし。」上方者「成程々々、暗闇にしておやまを探りどりか、コリヤえらい〳〵。そこで斯うぢやわいな、誰も比丘尼は氣がないもんぢやさかい、なんぢやあろと、づばうに取りあたつた人の揚代は、あと四人で出してやりつこにしよかいな。」弥次「いかさまそこらでござりやせう、面白え〳〵。」
ト是れより酒盛となりてだん〳〵と杯のまはるうち、めしもり一人次の間のからかみの陰から、「おかまさん、ちよつくりもし。」女房「誰だ、み山様か、こつちへ來さつしやいもし。」上方「イヤア美しいの、是れへおはひりでないか。」女郎「どな様もよくおざりました。」ト座敷へはひり。女房のそばへ片膝立ててすわる。女房「お前どこへ。」女郎「馬込屋で上州の商人衆だアもし。」女房「此ん

中矢野部の郷左衞む樣ァだれを呼んだもし。」女郎「わしどもの内の松江どのを。」女房「あぜおまいうらないもし。」女郎「わしあんなだんだいはおとましい、やァだよ。」女房「かぞう樣はふさしく來ないな。」女郎「ホンニ昨日文をよこつたが、私ずだいよみづらい、見てくれさつしやいまし。」ト懐より文を取り出して見せる。女房取つて見て、「男の文體だんて、わしもよめましない。」女郎「お客樣讀んで聞かせてくれさつしやいまし。」上方者「ドレ〳〵何ぢや、便りに任せ申し入れ候、玆は讀まずと知れた事、然れば此の間御越し下され候疝氣の藥、又々御こし下さるべく候、扨又此の襦袢遣はし申し候、殊の外虱集り候故よく〳〵御洗ひ下さるべく候。」女郎「オホヽヽヽおらやァだよ、アニそんな事がかいてあらずに。」上方者「譃を讀むものか、コレ此の通りぢや、後は、紺の木綿六尺許り御こし下さるべく候、我等褌此の樣にきれ候故これも持たせ遣はし候、睾丸の油にて垢染み候へども御洗ひなされ候て、佛壇の布巾にでもなさるべく候、藪原太野右衞門樣、加藏と書いてある。」女郎「ヤレハァ譃べい讀まつしやるもし。」上方者「ハテお前も疑ひ深い、此の通り書いてあるに、ハヽァよめたわいな、此の加藏といふはコリヤお前の客で奉公人ぢやな、此の人が親許へやる手紙と、お前のとこへおこす文と、一時に書いたもんぢやさかい、封じる時間違へて、親父の所へやる手紙を、お前の所へ封じておこしたのぢや、ハヽヽヽハヽヽヽ。」女郎「やァだよウ。」彌次「コリヤお前の色男だな。」女郎「おとましい、わし赤つ恥をかいたもし。」北八「マア

一つ呑みなせえ。」女郎「私酒はいけましない、おかま様明日こずに。」みな〳〵「ヨウ〳〵加藏さま〳〵。」

女郎「すホ、、、ごよやうだよウ。」ト勝手へ、かけ出して行く。上方者「わしや又、こちへ來たおやまかとおもうた。」

女房「お前様方のはいんまに來ませず、もうおそべりなされまし。」トはや酒もてうしぎりあけてしまひ、ねるいちだんとなりて、女房はそこらを取片付け、下女者共夜著蒲團を持ち運び牀をとると、折りふし勝手に大勢の女の聲聞ゆれば、女房「モシ〳〵女郎様方がお出でたさうな。」ト行燈を吹き消しまつくらがりにすると、皆々兩手をひろげてまちかけ、彌次「サア〳〵どうだ〳〵。」女房「そこへあげませず。」上方者「コレ〳〵誰やら一人さきへ出てぢや、もつと引つ込んで竝ばんせ、ソリヤえいぞ〳〵。」ト待ちかけてゐる所へ、五人の女郎を次の間からおし入れると、皆々いちどきにつかみ合ひ、一人の女郎を二人して引つ張るやら、男同士引き合ふやら大騒ぎとなり、やう〳〵一人に一人づゝ引連れてねかける。三人は奥の間、彌次郎北八は次の間へねる。いづれもくらやみなればわからねども、彌次郎があいかた何とやらばうずくさく、そろ〳〵とさぐり廻して見れば、さてこそ比丘尼なり、彌次郎はつと思ひしもよく〳〵思ふに、あげせん出さずの遊びなればこれも徳用向きなりと、心に悦び打ちふしたるが、暫くすると勝手の方に大聲上げて、何かわめき散らす故よく〳〵聞けば、此の家の亭主と見え、今外より歸りたる樣子にて、亭主「あんだあてこともない、わしどこに醉つぱらつた、たはごとこくな。のうおふり、にしと今夜寢連れずか、どうで〳〵。」女房「エ、見たくでもない、何處へ行つて醉ひ食らつておざつた。」亭主「アニ何處へも行かないが、となりの兵太とせどやのおんぢい野郎めが、ヤレハア一つ飲めと坂口の泥田屋で、もうにやりからかいて、醉つた〳〵見さいなアハ、ハ、。」女房「おとましいこんでや、毎日お客引に出て、一人もおこずつて來ないで酒べい飲んでや。」亭主「アニ今日も江戸の者二人連れしが鬮に當つて、おこずらうと思ひをつたら頭無いことをこきやアが





るもんだんて、己業腹を煮やらかいて、どたまァいがめてやらずと思つたら、私がいにどやされたもんだんて、兵太や熊十がそつつら打殺してやらずと追つ驅けたが、でこ足の早い奴等でつん逃げてしまひをつた、けちくそなこんでや。」女房「私うちへ泊らしやつたも二人は上方の衆であらずが、後二人は江戸言葉の樣だのうおふり。」亭主「アニ江戸者で二人連れか、ソリヤアふとりは色の黑い、ぢ團栗眼で、横小びんちよのぬけた男であらず。」女房「さうで〳〵。」亭主「まんだふとりは丸いひん袋の樣な頰で、鼻の平たくたい奴であらず。」女房「さうでや〳〵。」亭主「エ、其奴等であらず、ひこずり出いてふつぱたいてやらず。」ト大肌ぬぎになつて立ちあがるを、女房ひき止め、「おかつしやれ、醉ひ食らつてあぶんないに。」亭主「ウンニヤ、はなせ〳〵。」ト女房をふりはなし、座敷へかけこまんとする。一體この亭主は酒亂にて、酒を飲むと喧嘩好きのもてあまし者なれば、なか〳〵女房が止めても聞かず、大聲を上げて飛び出し、彌次郎北八がねてゐる間のからかみへばた〳〵とあたる。先刻より北八は目をさまし、このいさくさを聞きてゐたりしが、是れもむき者にてこたへられずはね起きて、「何だ、いけさう〳〵しい、さつきから默つて聞いてゐればおいらが事か、途方もねえ猿松めだ。」亭主「アニ猿松たァあにをこく。」ト飛んではひり、まつくらやみにて、ひきまはしある屛風に突きあたると、この屛風諸共彌次郎北八の上へたふれる。彌次「あ痛〳〵〳〵。」北八「何をしやァがる。」ト摑みつけば、こなたもまけずとつくみ合ひ、奥の間のからかみをふみはづし、三人のねてゐる上へ組み合つてころげると、此の三人も女郎も共に皆々起き出で、何かは知らずうろたへ騷ぎ、枕につまづきてころげるやら、煙草盆を踏み碎くやら、いづれも帶解きひろげ丸裸にて大さわぎをやる。女房かけ出て女郎どもを呼び立て、「コレ〳〵〳〵お前方に怪我があつては悪いに、皆早く逃げさつしやい。」トよびたつる。女郎どもはうろたへみな〳〵勝手へ逃げて行く。彌次「コリヤ〳〵痛いぞ〳〵、己が睾丸をどこへ持つ

て行く、誰だ〳〵。」上方者「ヤアお前かいな、わしや相方のおやまの睾丸かと思うた。」上方者の連れの男「わしや先にから、癪が起つてじのつなかつたが、此の騷ぎで、その癪がどこへやらいてしまうた、そこらにやるぬか見てくだんせ、あ痛〳〵、イヤどこへやら行たと思うたが又來をつた、あ痛〳〵、あかりもて來て下んせ、早う〳〵。」ト大騷ぎをやるに、女房行燈を提げて來り、亭主と北八が摑み合つてゐるのをみなみな打寄り、やう〳〵のことにて引分け、上方者がゐさいを聞きてだん〳〵挨拶し取靜めたるに、はや夜は明けて烏の聲告けわたる。女房「コリヤアどな樣もお恕し下さりませ、うちがあの通りのむかつ腹もので、お氣の毒でおざりました。もう夜も明けました、いんまに御膳をあげませず。」ト亭主を引連れて勝手へ行けば、みなみなほつと息つきて、あつけにとられし顔つきなり。彌次「コリヤア思ひがけねえ大騷ぎをやつたはいいが、肝心のたぼどもを無くなしたはつまらねえ。」

それ〳〵の相手の女郎取逃し喧嘩過ぎてのちぎり木もなし

上方者「ホンにお前方のいさかいで、代物をいなしてしまうて、あとのひとこうり、はしけずにしまうた。」彌次「その上にまだお氣の毒な事がありやす、私がつとめは、皆樣から出して下さらうといふものさ。」北八「なぜ〳〵。」彌次「ハテ比丘尼に取り當つた者の勤めは、後の四人から出すつもりぢやアねえか。」北八「ソリヤア知れたことさ。」彌次「それだから、己が比丘尼に當つたから。」北八「ハ、、、譃をつく、その手は喰はねえ、比丘尼はおいらが所へ來た。」彌次「へ、ぬかしをれ、揚代をかすらうとは

ふてえ男だ、づばうは己の所へ來たに違ひはねえ。」北八「イヤおいらが所だ〱。」上方者「コレ〱お江戸さん方待たんせ、コリヤ變ぢやわいな、わしの所へ引込んだおやまも比丘尼で、しかも今日は遠方へ齋に呼ばれて行くさかい、夜のうちに暇くれいとぬかしをつた。」上方者のつれの男二人も口をそろへて、「イヤわしも比丘尼ぢやわいな、その證據は袂のうちに數珠持つてゐをつて、こないに一夜でも枕竝べるは他生の縁ぢや、今度心願があつて石の地藏を建立するほどに、なんぼなと寄進についてくれと云ひをつたさかい、わしも比丘尼ぢや。」彌次「イヤみなうそだらう、おいらばかり外にづばうはねえはずだに。」北八「エ、聞えた〱、コリヤ一人比丘尼を交ぜようと云つて、五人ながら比丘尼を出して、宿のかゝあめがおいらをおこはにかけやァがつたのだ、道理こそ暗闇にしやァがつて。」彌次「コリヤ上方の、お前五分もすかねえ、旅の事ならやるもんぢやァねえと、昨日太平樂を云つたつけがどうしたものだ。」上方者「コリヤけたいのわるい。」ト互に爭ひ合ひ小言の最中、女房膳を持ち出で竝べる故、皆々やつきとなりてその事を云ひ出せど、女房は一向に取合はず、たゞ一人比丘尼を出したりとばかりにて、夜の明けぬうち、くらがりにて喧嘩騷ぎに取逃したることとなれば、何の證據もなく、かれこれむつかしく云つた所が果てしつかず、是非なく皆々その揚代を出し旅籠を拂ひ、仕度そこ〱にして此の宿を立ち出でけるとて、

五人まで比丘尼は出せど天窓から毛もない顏の女房にくらし

かくて五人は此の妻籠を出て道すがら、昨夜の宿にはぐらかされし事を話し合ひつゝ行けば、後より助郷の馬を引き來る男此の話を聞きつけ、馬士「ハヽヽヽお前方は昨夜道正寺の比丘尼を買はしやれ

たな。あの寺には比丘尼が二十人べいもありをつて、麥一升づゝでつとめに出をりますわ。」彌次「ハアそいつを五百文とはいめえましい宿屋のかゝあめだ、今から戻つて家臺骨を踏みこはしてやらうか。」

ト力み返つて腹立つるを、上方者になだめられ、詮方なく小言たら〳〵辿り行きける。

木曾街道續膝栗毛四編　終

木曾街道 續膝栗毛五編序

此の膝栗毛、假初に乘り出せしより、京大阪及び西國までも通し馬となりて、既に今岐蘇路をさして、歸りがけの駄賃にせんと、とつておきの趣向を附け出し、小附けを選ばず、作者がほんの酒錢どりに今年も編りし本馬の貫目、おさだまりの口米ながら、美登野宿から熱川まで、おつたて／＼筆の鞭、あてどもなしの道殼尻、踏馬御免とむかう見ずに乘つはしらかすこと、例の如し。

文化丙子春

十返舍一九識

木曾街道續膝栗毛五編

東都　十返舍一九編

風雅集に、出づる嶺入る山の端の近ければ木曾路は月の影ぞ短き、とあるは宜なるかな、山より出でて山に入る、往來の煩はしきもまた氣を養ふの基となりて、苦は樂の種とかや、身健かに、足達者なれば、馬駕籠の助けをもまたずして、膝栗毛に任する旅ほど面白きものはあらじ。かくて彌次郎兵衞北八は妻籠泊りを出て、美登野を打過ぎ、早くも野尻の驛に到りけるに、往來の旅人唄「しく／＼泣きやる其の頬見れば、道理よ諏訪の針箱だヤヨエ。あねさんどうした、ちよくと一服吸つていかずか。」茶屋の女「休んでござんし、おにかけの煮たがござんさァ。」彌次「コウおにかけたァ何の事だえ。」女「おそばの煮たのでござりまさァ。」北八「ハ、アさうか、おにかけといふからおいらは又、小栗殿の馬を煮て喰はせるのかと思つたハ、、、。」北八「チト休んでいきやせう。」ト此の茶屋に入り腰を掛けると、鹿島の事觸れその門先に立ちて往來の人を集め暫く鈴を振り鳴らし事ふれ「さて弘めます所は神慮神事なり、國は坂東の總社、常陸國鹿島大神宮の事觸れでござる。エヘン／＼。」彌次「こいつは面白いわえ。」事ふれ「扨、鹿島大神宮の一年の御神事は、七十二度の

御神事七度の御祭禮とござつて、いきがいおきどり湯樣の御神事と申して、一天地の容體を申してまかりとほる。當年は則ち天に陽明とござつて日照りが六分、地には感應水の雨が四分風が三分、春作が七分二厘大豆小豆が六分五厘、粟と稗が七分菜大根が五分稻作が八分五厘とござつて、千像萬物、生樹木までも、世はりん／＼と七箇年の開豐稔なれば悅べとある御託宣なれども、よき事は二時重ならぬとござつて、當年氏子には七分の祟りあると申す。是れより北子丑の方に當つて、きこん風さはら風といふ風、正四つ時より午の時まで吹き來るとござる。此の風を一人ひいては萬民に通ずると申し、又南東辰巳の方に赫曜星と申して紫の三角なる星いづる。この星に當れば疱瘡痲疹は黑疱瘡黑痲疹となつて命危しと、鹿島大神宮は氏子一人を黄金萬々兩樹木千萬本にもかへ難いと思召す、有り難い事だに皆信心得道してお聞きなさい／＼。ハヽアこれはしたり皆人が散つてしまつた、コリヤおへなくした、先づ一服吸ふべい、ハイちくと御免なさい。」ト茶屋へはひり、彌次郎の傍へ腰をかけると、茶屋のばゞ「茶ア參りませ。」事ふれ「婆樣今日はお天氣でえい。」ばゞ「インネハイ、此ん中の雨で牛蒡の根は腐る、麥は生えたまんまで、ずだいいけましない。」事ふれ「イヤ肝をいらつしやるな、今年は豐年でござるもさ。」彌次「お前方ア鹿島から出なさるか、飛んだ遠方へまで來なさるね。」事ふれ「私共はアニ何處と云ふ事アござらない。そこもと達はお江戸の衆だな。」彌次「左樣さ。モシ今年その悪い星に當ると云ふはどういふもんだ

ね。」事觸れ「ソリヤア子の年午の年未申の年の者が、その星に當つてひどくおぞい年もさ。」彌次「そんなら私は酉の年だから其の難はねえと云ふもんだね。」事ふれ「ないもさ／＼、殊にそこ許は甚く運のえい人だもさ。」彌次「左樣かね。」ト此の内事觸れ彌次郎の顏をじろ／＼見て　事ふれ「ハヽア當年より六十までは安樂でござるが、アヽ今まではおぞい事ばつかでござつた、とりわけ七年あとにそこもと、かのよい／＼と云ふ病で腰がつるくつて、足ャアつつ立たない事があつたんべいもさ。」彌次「コリヤ奇妙そんな事がどうして知れやす。」事觸れ「またそれから女の障りで難儀さつしやつた事もあつたんべい。」彌次「なる程／＼、その煩つた翌年の事さ、北八は知るめえが、おらが鄰の佐次兵衛が四國へ行つた後の事よ、あのかゝあは手前も知つてゐる通り、ソレ色は淺黑いが、アヽいきな女だによ、彼奴めをちよろまかした上に、向うの瓢簞屋の後家に又惚れられて、死ぬの生きるのと云つて長家中を騷がした事があつた。」北八「ナァニ譃々、お前に誰が惚れるものだ。」彌次「イヤさますな、是れでも其の時分は色も白しあばたもこんなではなかつた。」北八「ナニ疱瘡はお前小さな時したらうから、そんならあばたも昔からその通りだらう。」彌次「イヤ年のよるはこはえもので、小さい時のあばたが段々育つて、今ではこんなに顏中へ瘢がつたから始まらねえ。」事ふれ「それ／＼人の相は變るものだが、あんでも今見たとこではそこ許の相はァヽえいもさ、これからはしる事なす事禍ひも吉事となる相だ、アヽめでたい人もさ。」彌次「そいつは有り

難えの。」事ふれ「したが、たつたふとつおぞい事は、來年の秋時分、その七年あとに煩つた病氣が又おこる、コリヤァ前方の様なことではない、ひどく命もあぶんない程に、用心さつしやるがえいもさ。」彌次「エ、又それがおこるのかえ、こいつは氣がねえの。」事ふれ「ムンネ運強いによつて氣遣ひな事はあんまい、わしその除けをして進ぜますべい、アニ錢金サア取るべいぢやアござんない、ふとのためもさ。」ト懐中より紙にて切りたるかたしろといふものと小さき守を藏かせると、彌次「コリヤなんでござりやす。」事ふれ「コノ形代は是れで體ぢうを撫で廻して、川へ流さつしやい、又この守札は肌につけてよく信心さつしやい、そこ許の名はあんと云ひめさる。」彌次「わつちやア江戸神田の八丁堀、とちめん屋彌次郎兵衛と申しやす。」事ふれ「私國元サアで又御祈禱し申して、そこ許の宿へお札を送つてやりますべい。」彌次「有り難うございやす、わざとお初穗でもあげやせうか。」事ふれ「ムンネ錢サア入り申さないが、其の御祈禱するに供物料が入り申す、それもアニサ勸めはし申さない、志があんべいなら鳥目貳百銅つん出しめさい。」彌次「ナニそれだけの事は致しやせう、今もつてどうかすると、酒でもたんと呑んだ時は、舌が廻らなくなつたり又足ががくついてよい〳〵がゝつてなりやせぬから、どうぞ其の病難を遁れる様にお賴み申しやす。」事ふれ「それだからの事だもさ。」彌次「左樣ならば。」ト錢二百文包みてやりにかゝると、北八可笑しく彌次郎の袖を引きて、やるなと云ふ目付をすれども彌次郎きかずやつてしまふ 事ふれ「きつかいめさるな、是れでその除けをして進ぜますべい、コリヤ婆樣お世話でござつた。」

ト茶代四文そこにおきて事觸れはそう〳〵出て行く。北八「ハ、、、お前でもねえ、錢貳百只とられたな。」彌次「さう云うな奇妙に己が事を云ひ當てたから譃ぢやアあるめえ。」ト云ひつゝ二人もこゝを立ち出で行く程に、やがてこの宿の中ほどに到りて、彌次「ナント北八、何も慰みだ、これから一日代りに旦那と家來になつて行かうぢやアねえか。」北八「コリヤ面白だぬきの。」彌次「そんなら今から先づおれが旦那だ、てめへ此の風呂敷包を一緒にしてかついで來い。」北八「よしよし。」彌次「サア旦那だぞ、コリヤ北八今日はいい日和だな。」北八「左樣でござりやす。」トこれより主從の如くにして行くに、此の宿はづれにて馬士「旦那々々、ちやうどつこ歸り馬だ、乘つてくれさい。」彌次「ヤ、安くば乘りもせう。」馬士「こぎらつせるな、須原までたつた百だに、あそこにござらせるお侍樣も、今此の馬を百でとらせえた。」侍を乘せる馬士「これからは道がずだいだ、乘つてござらつせえ。」彌次「コリヤ北八身ども馬に乘る、その包をつけやれ。」北八「ハイ〳〵畏まりやした。」侍「コリヤ〳〵馬士あぢやかする、はやく馬をやらないか。」馬士「アイ〳〵サアござらつせえまし、旦那このおまはごんぢやおまだ、氣をつけて乘つてくれさいまし。」侍「アニ身共武士だ、乘馬でも頭なくあたける奴を乘つ走らかす男だ、アニこの駄馬あぜふするものだ。」彌次「左樣さ、わつちらも裸馬で驅けを乘るものさ、こんな駄賃馬豆もろくにやア食はせめえ、どうするものだ。」馬士「それでもあぶんない、此の上から乘らつせえまし。」ト茶屋の前にある牀几を引きよせてあてがふ。侍その上へあがりて、是れから馬に打乘り先へ行く。あとの馬士彌次郎を乘せんと、その牀几の傍へ馬を引き寄せる。彌次郎同じく牀几の上に登りて、馬に乘らんとする時、女どうしや七八人連れにて通り

り、か、唄「七つ八つから手習すれど、きれるきのじは習やせぬよえヨウ。」北八「ヤア／＼どいつも美しいな。」彌次「ドレ／＼ほんにうまい尻つきだな。」ト女共に見とれ、むちうになり馬に乗らんとして、牀几のはしをくつとふまへたる故、足の力に牀几はねて、彌次郎あふのけにどつさり倒れて、「あ痛／＼／＼／＼。」ト顔を顰めておき上らず、馬士あわてひき起して、馬士「ヤレコリヤどこぞぶたつせえましたか、あぶんないこんだ。」彌次「足の黒節の所をぎつくりといはせた、アイタ、、、。」北八「ハ、、、今の事觸れめが、お前の事を運強いと云つたが、そんなに怪我をする者をナニ運が強からう、貳百只取られた大きな鼻つ垂らしぢやアねえか。」彌次「ヤイおのれ忘れたな、旦那の事を鼻つたらしとは太え奴だ」北八「ハ、、、ほんにさうだつけ。」馬士「事觸れたア泥畑の賀藏野郎の事であらず、此ん中は疝氣の藥を賣つて歩きやアがつたが、今日見りやア事觸れになつて、さつき野尻で行き合つたが、旦那方アあのよたもののめがぐぜるに乗せられたなア」彌次「ナニありやア本當の事觸れぢやアねえのか。」北八「ソレ見たがいい。」彌次「仕方がねえ、これも厄落しだハ、、、。」

こはとんだ事觸れどののに貳百文かしまにあらで唯とられたり

彌次郎思ひがけなく足を痛め、やう／＼の事にてこの馬に打乗り出でたるが、とかくこの馬前脚の鹽梅悪しく、折々前脚をつきさうにて乗り心悪しく氣遣ひなれば、彌次「とんだ足が痛い上、此の馬から又落されたらつまらねえ、コリヤ馬のころばねえ様に氣を附けて引いてくれ。」馬士「エ、ころんだら又おこしませずに。」彌次「おこすは知れた事だ、手前居眠りをしながら引くからそれでさう云ふの

だ。」馬士「しちむづかしい、落ちさつせえたら又乘つてござらせえ。」彌次「コノべらぼうめ、うぬ此の馬をころばかすと首が飛ぶからさう思へ。」馬士「あんだとえ、馬がころんだら私の首がとびますか。」彌次「知れたことだ。」馬士「またつせえまし。」彌次「コリヤ／＼どこへいく。」馬士「いつとき待つてござらつせえ。」ト宿はづれより二三丁引き出でしが、馬の手づなをはなして一散にあとへ驅け戻り、しばらくして馬方長脇差をさして來りて馬を引き出す。彌次「なんだ、てめへがうてきに長い物をさして來たな。」馬士「アイわしも命がけだア、おまがおつころぶとわし首がないけな、そんだいにやア先の宿まで此のおまがおつころばずにいくと、旦那の首が飛ぶからさう思はつせえ。」彌次「イヤ此の野郎めとんだことを云ふ。」馬士「とんだもはねたもいらない、私も此の宿ちやアむたらくものだ、ぐざる事にかけちやアむずいかない男だ、あて事もない。」彌次「氣の強えことをぬかしやアがる、そりやアいいが、もつと馬を早く追はねえか。」馬士「はやくやるとおつころぶから、さうはならない、わし首のなくなるこんだもの、そろり／＼とやりますぜ。」ト蟻の這ふやうに馬をそろ／＼と引く、彌次郎上にて氣をあせるを、北八後より、「ハ、、、こいつは馬士どのが理窟々々、是れから須原まで壹里半、晩までかゝつてもいいからそろ／＼やりねえ、コリヤ旦那大へこみ。」彌次「エ、うぬまでがそんな事をぬかす、なんぼ日が長いとつて埒の明かねえ、サア早くやらねえか。」馬士「早くやるとおつころぶと云ふに。」彌次「ころんだらやアつまらねえ、今ぶつた足を又でえなしにするだらう、いめえましい。北八てめへ乘らねえか、

己はもう下りよう。」北八「ナニ旦那樣を步かせて、家來の私めがどうして御勿體ない、馬に乘られやせうか。」彌次「エヽとんだめにあふ、小じれがきた、おつころんでも料簡してやらうからしやん〳〵と早くやれ〳〵。」馬士「オイ怪我ァさつせえてもよかァ早くやりませず。」手づなを持つて馬の尻ぺたを、むしやうにたゝきたてて追つ立つると、馬はやたらにかけ出す。彌次郞鞍坪にしつかり掴まりながら、彌「コリヤ〳〵、そつと申せばぐわつと申すと、あんまり又早過ぎて、尻がひよい〳〵踊つて痛くてならねえ、もうちつと靜かにしねえか。」ト云ふと又馬方が意地惡くそろりそろりとやる。北八をかしく、「なる程旦那は運がつよい。」彌次「エヽこんなに難澁な目に會ふものか、馬士いい加減にしねえか。」

いかにせん馬士と喧嘩の意氣づくに首をかけ出す馬のあやふさ

かくて此の一首にいさくさ忽ち大笑ひとなりて、馬も常の如く引くに、程なく須原の驛に到ると、棒端の茶屋に馬を繫げば、彌次郞下り立ちてこゝに休む。馬士「ヤレ〳〵馬がおつ轉ぶかと、わし首筋がくすばつたくて、てきない思ひをした、のう旦那。」北八「飛んだ目に會はせたな、ソレ駄賃やるぞ。」馬士「アイ〳〵、コレこゝのかゝ樣ざつかけのぢつ樣がのえ、此ん中野尻の手越屋へ腰の物をぶち忘れた、序があらば取つて來てくれさいと云はつせえたから、わしこゝへさいて來た、ぢつ樣來たら是れやつてくれさい。」ト腰に差して來た脇差をぬいてこゝの茶屋の女房へ渡す。北八「旦那の首を取らうとつて差して來た脇差かと思つたら、ことづかりものだな、こいつも出來た。」彌次「エヽ業腹な、うぬ覺えてけつかれ。」ト馬方をにらみつけながら、

やがてこの茶屋を立ち出で、行くほどなく、大野萩原を打過ぎ小のの瀧といふにいたる。

落ちかゝり岩もぶつさく勢ひは山賤のもつおのの瀧なれ

それより寐覺の立場に到る。此のところ蕎麥切の名物なり。中にも越前屋と云ふに娘あるを見て、

あいぶつのそばきりよりも旅人はむすめに鼻毛のばしやすらむ

此のところに臨川寺と云ふ景地あり、寐覺の牀と云ふこれなり。昔浦島太郎釣を垂れし所なりと云ひ傳ふ。

浦島もかかるけしきの寐覺には小便よりもつりやたれけん

かくて先刻野尻宿にて、一緒に馬を取りたる侍の行くに追ひつき、後になり先になりて、彌次「旦那はお早い足だぞ、お一人でござりやすか。」侍「おらら國サァ出來申した時はひたり連れで出來申したが、大阪屋敷に連れの人は殘り申して、おらふとり旅もし。」北八「お國はどこでござりやす。」侍「奥州でござる。」彌次「お一人では御退屈でござりやせうね。」侍「きせちないもんだァからやんだァけれど、あじやかにもすべいやうがござんない、にしたちやァ江戸者だな。」彌次「左樣さ。」侍「おらもふさしいあとに江戸サァへつん出來申したが、よんこにんやかな所もし、今でも芝やサァはなつてあんべいもし。」彌次「近年芝居は大きにはやりやすのさ。」侍「その芝居サァある所は、あんとか云ふ所であつたも

し。」北八「さかい町かえ。」侍「イヤ何であつたチ、屋根や町もし。」北八「屋根屋町と云ふはござりやせぬ。ハ、ア葺屋町かね。」侍「ソレ／＼その葺屋町の市村羽左衛門の芝居サア、同役共と同志に見物に行き申した事がござつたが、其の時始めて芝屋と云ふ物サア見申した。ア、武士の見べいもんではござんない、業がわき申すわ。」彌次「なぜでござりやす。」侍「イヤその時澤村宗十郎とか云ふ役者共が、侍になつてよんこひんどつて出來申したが、ア、人品のえい男もし。さうすると、惡人方のあんとか云ふ奴が出來て、その侍と口論がはなつて、きづみをつたもし、そこでその侍が、なづきを下げてことわけを云ふ程、やくとう頭なく出來をつて、侍をぶちすゑをる、身共それを見ると、業が煮えて煮えてこらへられないから棧敷を飛び出來て、コリヤ／＼いかに狂言だァとつて、うぬくだま野郎めが、宗十郎は侍だ、侍が頭をさげてあやまるに料簡しない上、あぜに打つた、侍はあひみたげへだ、これから宗十郎の肩は身どもが持つぞ、サアうせをれ、身ども相手になるべいと、すはと云ふと打ちはなすべい、おらが勢ひにへこたれをつて、その惡人がため、口程にもない奴、牛蒡程な尻尾を振つて、樂屋サアへつんぬけ申した。身共それから國方でも芝居サア見た事がござんない、見ると膽がいれるもし。」ト此の話のうちにあげまつの驛に至る。彌次「面白えお話で、うか／＼と參りやした。時に北八さつき打つた足が、どうも痛んでならねえから、まだ早いが此の宿へ泊りとしよう。」北「エ、馬鹿々々しい、も

う泊るのか。」彌次「コリヤ又忘れたな。」北八「ハイ／＼。」侍「主たち泊りめさるなら、己らも同志に泊るべいもし」彌次「そんなら御一緒に。」ト宿屋を見たてゝ歩き、二荒屋といふはたごやにはひると、宿の女「お早うお出でなされました。」ト盥へ湯を汲んでもつてくる。侍さきへ足を洗ひて上る。彌次郎あがり口にこしをかけながら、北八の鼻のさきへ遠慮もなくぐつと足を差出し、彌次「コリヤ身共の草鞋を解いて、足を洗へ、コノ野郎め、はやく洗はねえか。」ト睨みつけると、むつとしたかほ、北八「あんまりだわ、お前一人でに洗ひなせえな。」彌次「イヤこいつ主人に向つて不屈な奴。」ト云ふほど北八は宿屋の女の手前見えがあるゆゑ、北八「彌次さん、もうよしやせう、馬鹿々々しい、主人だもすさまじい。」ト彌次郎よりも先へ足を洗ひて奥へ行く、彌次郎もをかしく、後にて自身足を洗ひて奥へ通ると、侍「サア／＼これへ。」彌次「コリヤァ不思議の御縁でお相宿致しやす。コレ北八どうしたものだ、ちやんと上座へ坐つて無作法な。」北八「エヽ旦那事は止めたと云ふに。」彌次「御覽じませ、旅と云ふものは、互に心おきが有つては悪いと存じて許しておくと、家來めがあの通り心安だて致すには困り果てますハヽヽヽ。」ト此のうち勝手より女來り「モシお湯にお召しなされませ。」彌次「サアあなた。」侍「わしうざねはいたア、さきへはひりますべい。」ト湯に入りに行く。彌次「アイタヽヽ、道理こそ、足が滅相に痛むと思つたら、コレ見やれ、ぶつた所がこんなに腫れたわ、なんでもぎくりと、云つたやうに思つたが、ひつくじいたと見える、コリヤつまらねえ、明日歩かれねえと大變だ。コレ／＼御亭主々々。」宿の女房「ハイ何でござります。」彌次「もし當所に泥鰻療治はあるめえかね。」女房「ハイ今の先まで私とこに居ましたが、ちよくと呼び

にやりませずか。」彌次「ソリヤア誰を。」女房「左官殿でござんさア。」彌次「ナニ壁を塗るのぢやァねえ、足へ泥鏝をあてるのさ。」女房「ハイへつつひさまを塗るこたァ上手だと云ひますが、足を塗るのはどうであらずか。」彌次「ナニ足をぬるものか、怪我をしたから鏝を焼いておつけるのさ。」女房「ハイそんだら、鏝はわしとこにあらず、眞赤に焼いてあげませず。」彌次「エヽ眞赤く焼いたら、足が焦げてしまふわ。」北八「焦げた方が、ばり〱して甘味からう。」ト此のうち、所のあきんど來りて、「ハイ御覧なされまし、豆のお痛み金瘡切疵打身のお藥は、御用ではござりませんかな。」彌次「オイ〱丁度いい所へ、コウ足を挫きやしたが、なんぞ膏薬はねえかね。」商人「ドレお見せなさんし、ハヽア骨がちくとこじけてをる。」ト足の甲をさすり〱ぎつくりと折り曲げる。彌次「あいた〱〱。」商人「一時、じつとしこつてござんし。」彌次「ア、痛え痛え、コレ〱骨が折れる。」商人「ハテ折れたらついで上げませず。」彌次「それだとつて、折れてつまるものか。」商人「ナアニ足の一本や二本ぶち折れたとつて、左程御不自由なもんではない、歩かれない分の事であらず、サアこれでよくござりまさア。」トもみ柔げて膏薬を貼つてしまひ、「一時風を引かぬやうに、足袋でもはいてござらつせえまし。」ト此の内また一人商人來り、「おはな紙お煙草、楊枝齒磨、足袋手拭の御用はな。」彌次「コレ〱足袋を一足くんなせえ。」商人「ハイ何文を上げませず。」彌次「十一文と十二文とを。」商人「一足づゝあげませずか。」彌次「イヤ片つぽづゝだ、わつちの足は片々が十一文、片つぽは十二

文。」商人「ソリヤどうして。」彌次「けふ怪我をして、片々の足が腫れてゐるから、それで十一文と十二文とを一足にした足袋がほしい。」商人「そんな片跛な足袋はござんしない。」彌次「ハテ田舍は不自由だ、江戸にはいくらもあるに。」北八「ナニ江戸だとつて、そんな馬鹿々々しい足袋があるものかえ。」彌次「仕方がねえ、そんなら手拭でも縛つておかう。」ト足袋はやめにして、脊藥代を拂ひしまふと二人の商人は出てゆく。此の内侍湯からあがり、だん／＼入りかはり湯もすみて、飯も喰ひしまひたるに、膳をひきて後女茶を持つて來り、「ハイおにばなあげませず、モシお前さん方ァおさびしからうに、女郎衆でもお呼びなさんせんか。」侍「身ども此の年になるが、どつこでもおしやらくサァ、買つた事がないもし」北八「一人呼んで御覧じませ。」侍「ありやうはおらら一人旅するも、老後の思出にその心持がないでもないで、コリヤ姉ぼう、最前見世のはなに、四本張サァ掃除してゐたァ、此處のおしやらくだんべい、あのびたいならおら買ひますべい、最前おららを見てぎんがりをつかつたやうだもしハ、、、、。」女「そんだらあの子を、あなたへ出しませず、お前さんがたは。」彌次「どうせうか。」ト懐中が乏しきゆゑ、にやくやの挨拶してゐるに、女きかずむしやうに進めて、とう／＼三人ながら、呼ぶつもりに相談極まり、女は勝手へ歸つて行くと暫くして侍の註文のめしもり、名はおいも、郡内縞の下著のうへに、ふとりじまを著て出で、侍の傍へ來て坐り、侍「よくお泊りなさんした。」彌次「まづは美しい、旦那あやかりものだね。」侍「おららこの姉ぼうをめつけたうへの謀叛もし、めごいと云つてくれさんせう。」いも「ソリヤァお互にのし。」侍「イヤ思ひつけた事がある、コリヤにし勝手へ行つて、こゝの亭主に逢はうと云つてくれさんせう。」

いも「あんだのし。」侍「あんでもえい早く〳〵。」いも「ハイ〳〵。」ト勝手へ行くと亭主來り「あにか御用でござりますかな。」侍「にし亭主か、身共がらこゝのおしやらくサア買ふべいこたァかひをつたが、にしに云はない事ァわからない、一夜でもおららそばにねまりをるもんだから、あじやかしたこんで、ドノびたいがひよつと孕みをるまいもんでもない、萬一懐妊ども致したとつて身ども決して構はぬこんだが、にし承知だんべい。」亭主「コリヤ御念だのし、アニ女郎衆にそんなこたァござんしない。」侍「ムンネないこたァないでもあんべいが、萬々一左様の事があつた時は、身共年寄りて國方共へ聞えては面皮にかゝはる事もし、コリヤアやんだァやめにしますべい。」北八「ハヽヽ、お武家方は堅い〳〵、ナニそんなことかまふもので。」侍「それとも懐胎致しても苦しくないと云ふ證文でも書いてつん出來めさるか。」亭主「イヤそれは異なもの、アニわし承知して居ればよくござりまさア。」侍「にし急度請合か請合か、そんだら早くおしやらくサア、よこしてくれさんせ、己らはもうそべりますべい。」亭主「とつくにあつちらへお牀とつて女郎衆が待つてるずに、早くござつておかたけなさんし。」侍「心得た、ドリヤえつとこな。」ト唐紙をあけて鄰の座敷へ寢に行く。彌次「モシ御亭主わつちらの女郎衆は。」亭主にがり切つた顔して、「アニだめなこんだに、こなたしはもうおけつちやア。」ト云ひ捨て行きさうにするを、北八「コレ〳〵どうするのだ、おいらにおけと云ふはなんのこつた。」亭主「あんのこんでもない、おのれらに出さず女郎はない、コノよたもの

どもめが。」北八「ナニ途方もねえ、コレエおいらに出す女郎が無いたァ飛んだべらほうをぬかす、侍のつかふ金もおいらの金も同じ事だ、何故女郎めらを出しあがらぬ。」亭主「コリャあんまりぐざるな、親代々から旅籠屋商賣しる男だ、てつへんからおのれらがなりそぶり、此のおだんん栗眼でめつけておいた。なるく云ふとつきあがつて駄目云ふな、あてこともない事をぐぜると、しやつ摑まへて、さらけ出すぞ。」ト大聲を上げて、むしやうに力む。二人は一向に合點ゆかず、大きにせきこみ、彌次「コリャお客様に向つて太え奴だ此の野郎めが。」亭主「アニ頭ない事をぬかす、道連が、お侍様だからぶつちやつておいたが、もうらがうちに置くこたァならない、夜食くれたを損にしる、出て行けつちやァ、おのれらを泊めると内の名題をおぞくしるわ。」北八「エ、耐へられねえ、頭のかけをひろはせてやらう。」ト摑みつかんとする所へ、女房始め家内の者ども驅け來り、兩方をしづめる。

一たいこれは宿の亭主二人の者を護摩の灰と思ひてかくは云ふなり。そのわけと云ふはすべて道中の護摩の灰と云ふものは身元善き旅人と見せんために、態と主人と家來のやうにとりこしらへて歩くことあるやつにて、かたちばかりは旦那と供のやうに見ゆれども、えては言葉つき挨拶朋輩の如く云ふことありて、かたちと言葉とつりあはざることあり。旅馴れたる人はよくわきまへてをることなり。彌次郎北八かかるわけは知らず、唯當座のしやれに主家來の如くしたるが、供の北八の言葉つき旦那の彌次郎へ向つて挨拶そぐはぬやうなれば、亭主これを聞きて、さてこそ護摩の灰と推量して、この騷ぎとなりたるなり。されども二人は何の覺えもなきことゆゑ腹立ちて、大喧嘩となりたるが、だん〳〵家内のものにとり靜められて、亭主の疑ひ二人の慰みにしたることとさつぱりとわかりて、亭主も惡口したるをいろ〳〵あやまり、はては笑ひとなり、機嫌直しにとて内に居合はせし女郎二人出すつもりにて、みな〳〵勝手の方へ行くと、やがて飯盛二人、一人の名はおかま、一人はおなべ打ちつれて出で來り、彌次「途方もねえ、こゝの宿六めが、おいらが事を護摩の灰だと云つてお前方の顏を見ずにしまふ所、あぶねえ事の。」北八「さう云つても餘りべらほうな亭主めぢやァ

ねえか。」おかま「私所の旦那様は、ずだいむきで常住お客様に腹ァつつ立たせますが、そんだいにやァあとはござんしない。」おなべ「おかま様のえ、わしのえ、ふとがでつかい聲をしると、おそがくてやァだがな。」おかま「ホンニお客様へ早く出ずと思つた所、肝が焦れてならなんだのし。」彌次「そんならもうねやせうか。」なべ「夜が更けず、おかたげなさんし。」トよぎ蒲團を取りに行く。彌次郎の傍へ坐りたるはおかま、北八の傍へ坐りしはおなべなり。きりやうとりなり、おなべの方拔羣勝れてよき故、彌次郎大きにのびて二人のゐざるを幸ひと、彌次「コウ北八手前に願ひがある、なんと代物をとつけへてくれねえか。」北八「イヤ／＼さうは虎の皮さ。」彌次「手前の方が餘程いい、おらァあいつにしてえものだ。」北八「止してもおくれ。」ト此の内はや二人の女郎來り牀をとり、眞中を屏風にてしきり兩方へ別れて寢る。彌次「成程旅をすれば色々の目に會ふものだ、おいらがやうな正直正道な者を、こゝの亭主はむごえ男だ。」おかま「ホンニあののえ、お前さんはのえ、さうでもないがのし、あつちらの人はあんだか知らないが、可笑しげな人だと、私共も思ひましたが、あの人は、供の衆は何だのし。」彌次「あつちらの野郎か、おいらが供さ。」おかま「お前さんあにを商賣さつせるのし。」彌次「おいらの商賣は金貸さ、上方の出店は呉服屋、田舍の出見世では酒も造る醤油も造る。」かま「お供の人はあにをさつせる。」彌次「あいつはなにもしねえ、おいらが處の居候で、わつちが世話をしてやらねえと宿無しだから、斯うして連れて出るにも、とき／＼の物を著せてわつちと同じ様に女郎衆も買つてやるし、云ひ分はねえが、性がべらぼうだから、心安だてをし

てふざけるには困り者さ。」かま「ホンニさう見えるわのし。」彌次「そしてお前そつとあつちの女郎衆へさう云つてやりなせえ、あの男は二三年あとにごうてきと瘡を煩つて體中が崩れた處、わつちが金を出して湯治にやつたが、それで治つた樣でもあるが、ぜんてえ根性が汚ねえから、喰らひ物をやたら無性に取り込むによつて、又少し再發の氣味がある、うつらねえ樣にしなせえと、呼び出してさう云つてやりなせえ。コリヤア供の男を惡く云ふ樣だが、かはえさうに、たつた一夜であの子へ瘡を背負せるが氣の毒だから。」ト いふは、北八が代物美しきゆゑ、彌次郎とりかへんといふに聞かざるゆゑの意趣返しに、北八をふらせんと、この女郎から吹き込ませるつもりにてかくはいふなり。屏風一重隔てて北八これを聞きすまし、北八「コレ／＼鄰の花魁、其の客人に氣をつけな、その男は性が泥坊だから枕探しをしようもしれねえ、頭の物や鏡入に氣をつけなせえよ。」彌次「ハ、、、今おれが云つた事を聞きつけたな、コウそつちの花魁、人の事を云ふ其の男こそ油斷しなさるな、さつきこゝの亭主が云つた通り護摩の灰だも知れねえハ、、、。」ト 互に惡く云ふを、二人の女郎眞面目な顏して聞きゐたりしが、てうづに行くふりして二人とも出て行きしが再び來らず。彌次郎なまなかなことといひ出してもとねにしかねまじ／＼しとして、彌次「コリヤ北八手前も一人だな、つまらねえことを云ひ出して、代物を取逃した、コリヤもううしやアがらねえわえ。」北八「お前が惡い、折角もてさうであつたものを埒くちはなくしてしまつた。」ト 此の内二人の女郎は、彌次郎北八のしやれに云ひたることを、まじめにうけて、膽をつぶし、きうさう内の亭主に此の事を云ふと、亭主は先刻北八に、ひとつくらはされたる事を胸に持つて居るところなれば、これを聞き、さてこそ推量の通りと、男どもを起して天秤棒をひつさげて、座敷へふんごみ、亭主「コリヤ／＼護摩の灰めら、うらが睨んだ通り、お

のれらが口からやく〳〵性體をぐぜり出しをつたは天命だ、出てつけつちやァ。」彌次「イヤ又しても護摩の灰〳〵とうぬ太えやつだ。」亭主「今女郎共へおのれらが、わがでにさうぬかし居つたからにやァちがひはなからず。」ト無理に二人を引き出さうとする故、北八跳ね起きて亭主の天秤棒をひつたくりなぐり廻す拍子に、行燈を打ちこかし、眞暗闇となり、滅多矢鱈に摑み合ひ大騷ぎとなりて隔ての唐紙を踏みはづし、亭主と北八とねぢ合ひながら鄰の座敷の侍がねてゐる上へどつさり倒れる。侍「あ痛〳〵〳〵〳〵。コリヤあじやかする、身共なづきがわれた。エ、眞暗でしれない、コレ〳〵おらの褌が見えない。」彌次「ナニ褌に構ふものか。」ト暗がり紛れに取違へて侍をくらはせると侍「ヤイ〳〵あんでぶつた、ア、なづきがぶち碎けた。」ト手拭を取つて鉢卷をする。此の內女房提灯をともしてかけいで、雙方をなだめると、皆々騷ぎ草臥れやう〳〵少し靜まり掛る。侍開きなほつて、「身共、あじやか譯は知らないがおかなくぶたれて武士が立たない、コリヤ〳〵身共の褌がない。」女房「これでござりますか。」侍「イヤそれは刀だ。」女房「そんでもあなたの褌はござんしない。」侍「無くてはすまない、コリヤ〳〵身共の越中褌が無くなつた、亭主々々、詮議しろ、出來ない中は合客ども一人でも立たすこたァならないぞ。」亭主「あなた褌かいてござりましたか。」侍「おどれ侍をひづるな、他所へ出來るに褌かかないもんがあるもんか。」亭主「そんでも、うらは年中かきませんでな。」侍「エ、おどれのこんではない。詮議しをろ〳〵。」女房「ソレ〳〵貴方の鉢卷から紐が下つて居る樣だが、それぢやァござんしないか。」侍「ドレ〳〵これだ〳〵。コリヤ亭主安堵しろ、身共の褌は頭にあつたぞ。」ト思はず是れにて皆々笑ひを含みたるに、此のいさくさ拍子拔けがしてそれなり治まり、夜も既に明けたりければ、何事も旅行の事ゆゑどう

やらかうやら料簡つきてさらりと濟み、やがて朝飯をしたゝめ、彌次郎北八はこれより
かの侍に別れて、先へ此の宿をたち出でゆうべの騒ぎを語り續けて可笑しさの餘りに、

暗闇の喧嘩は人をあへ物にしたる起りは黒ごまの灰

斯くて上松の宿を離れて、左の方御嶽權現の御山を伏し拜みて、

降りつもる雪の御嶽も諸人の願ひと共にとくる春の日

木曾の棧道と云ふは福島上松の間にして、右は高山連なり、左は巖石尖くして峙ち、木曾川の流れさかまき數丈の谷深く兩岨より掛け渡す橋、昔は藤蔓を用ゐて桁とし、板を竝べて往來通行したりしに、近頃は修造ありて石を疊み橋に欄干を儲けて、盲人小兒もたやすく是れを渡る　偏に有り難き御惠みなりけらし　こゝに俳祖芭蕉翁の碑あり。棧道や命をからむ蔦蔓と、彫りつけあるを見て、

命をもからみ付けたる藤蔓今はとけゆく春の雪道

斯く口ずさみつゝ、早くも彌生の茶屋立場に到る。此のところ蕨餅の名物なり。

早蕨のにぎりこぶしの餅なれば旅人にうち食らはせにけり

それより福島に到る。此の驛に御關所あり、景色よき所なれば思はず小橋の上に佇みながら、北八「ナント いい景色ぢやァねえかえ、些休みやせう。」ト橋の欄干に色々の落書してあるを眺めて　彌次「ハヽア書いたわ／＼、何だ江州臍村穴右衞門出介同行二人、此の處にて尻の根太ふき切り難儀すると書てある　ハヽヽヽヽ其方

らのは江戸お簞笥町引出横町とつてや鑵兵衛茶良七此の處罷り通る。ヤア〳〵この鑵兵衛と云ふはとんだ工面のいい男で、己が心安いから出合つたら金でも借りてやらうものを、何時こゝを通つたか殘念な。」北八「ドレ〳〵己も何ぞ書いてやらう、彌次さんその矢立を貸してくんな。」ト筆を取りて何やらむしやうに書きちらす處へ、宿役人と覺しく一本きめたるむづかしき顏の男來かゝり見て「コリヤ〳〵あぜ其處へだめ書きし居る。」北八「書いては惡いのかえ。」男「知れたこんだ、やく〳〵こん中かけた橋だに、此處を何處だと思ふ、むたらく野郎めが。」北八「ナニ己書きやァしめえし、此樣に幾らも書いてある物をそんなに云ふ事ァねえ。」男「イヤおぞい奴だ、しやつ捕へてくゝしあげずに。」ト聲高に云ふ時、棒をつきてお足輕體の人出で來りて、「何だと云ふ、だめ書きしをつて此の橋をずだいにしるのみならず、がいにぐざると其の分にやァならない、ひこずつていかず、サァうせをれつちやァ。」ト二人して北八の手をひつとらへ引きずり行かうとする。御關所前の事なれば彌次郎心付きて北八を引きのけ、彌次「眞平御免下さりませ、大きに無調法な事いたしました。」男「インネ濟ませないぞ〳〵。」彌次「濟まないと仰しやつても此奴めは氣が違つて居ります、アレ〳〵あの目付きを御覽じませ、あの通りでござりますから、どうぞ御料簡なすつて下さりませ。」ト無上にあやまりながら目顏で知らせると、北八のみこみ、北八「ホンニ氣違ひ、ソレ〳〵氣違ひよほうさいよ、コリヤすつてんてれつく〳〵てん〳〵〳〵。」男「あるほど此奴氣違ひずらァ。」彌次「アの通りで誠に困り者でござります。」足輕「エ、己れ亂心者で無いと其の分で置く奴で無いに。」北八「ハ、、、アノお爺が腹

を立てた頬と掛けて何と解く。」男「エ、まだ何をぬかす。」北八「是れをお神酒徳利と解く、其の心は口先が尖つたハ、、、。」足輕「エ、てつぺんからぶちみしやぐぞ。」彌次「モシもう御免なさりやし。」ト無理に北八を引張り足早に此處を打過ぎ 北八「もういいかい、いめえましい、とう〳〵おいらを氣違ひにしたな。」彌次「面倒だから氣違ひとはナント智慧か〳〵。」ト やがて關所を打過ぎ行けば、此のあたり所所にお六櫛名物あり。兩側の茶屋より「休んでござりまし、木曾お六櫛買つてござりまし。」北八「こゝで一服のみやせう。」ト茶屋へ入り休む。茶屋の亭主「お早うござりました、あなた方お土産に櫻皮の短冊墨流しの短冊お買ひなさんし。」彌次「コリヤ木をへいだ短冊だな、おらア又、經木かと思つた。」茶屋の女房「お六櫛、三つ櫛、すき櫛いろ〳〵ござります。」北八「魚串はねえか。」女房「ハイ此の魚盡しの模樣のついたのでござりますか。」北八「ナニ肴を燒くに、頭からソレ尻の方へぐつとつき通す串だ。」女房「ハイ尻へおさしなさる櫛はござりませんでな。」ト此の内年のころ四十近き尼、木綿合羽の上から高ばしよりして風呂敷包を脊負ひ、此の處に休みゐたりしが 尼「モシその赤い櫛は何程しるのし。」女房「これかのし、まけて六十四文にしてあげませず。」尼「えい櫛だがのし、餘りでかくて插しづらからず、そつちの櫛は、ドレ〳〵つほい櫛のし、コレ買ひませず。」女房「三つ櫛のえいのがござんさア。」尼「それもほしい買ひませず、その毛筋たてもなかつた。」女房「是れのし。」尼「この櫛うらがさすには悪からずか見てくれさい。」彌次「オヤおめへ土産に買ひなさるのかと思つたらさしなさるのだの。」尼「さうだのし。」彌次「ハ、、、お前頭に

毛も無くてさ。」尼「ほんにさうだつけ、うら頭に毛の無い事をすつたりと忘れた、もう〳〵櫛はいりましないが、やう〳〵買つた物コリヤうらがとこのお長老様に插させず。」彌次「お長老様も坊様だらう。」尼「さればのし、あんだつけか。」北八「思ひ出して見なせえ、坊様に違ひはあるめえ、さうしてお長老様なら男だらう。」尼「ソレ〳〵お長老様は男で、ばあすであつたのしオホヽヽ。」彌次「そんならそのお長老様のお大黑へ土産にしなせえ。」尼「アニお大黑はうらでござんさア。」北八「ハヽヽ、こいつは出來た、時にもう出かけやせう。」ト二人は此處を出かけると其の尼も續いて後より來り、道づれとなりて話しながら行く後より大聲をあけて追つかけ來るものあり。ふり返り見れば、今休みたる所の櫛屋の亭主汗水を流して走りつき、かの尼を亭主ひつ捕へ、亭主「コリヤばあずめ、主おぞい事しる、今のを出せつちやア。」尼「あにを云ふ、出せたア何のこんだのし。」亭主「エヽ、あんのこんたア三つ櫛がひたくみ見えない、にしがもつて來たらず。」尼「あに此のふとは云ひ掛けをしる、うら知るもんかあて事もない。」亭主「ヤイおけつちやアなるく云ふ内出さないとむげちない目にあはせずに、エヽ、肝がいれらア此のぬすつとばあずめ。」尼「うら何時盜んだ。」亭主「アニ此のよたくれめが。」ト摑み懸る。尼もやつきとなりむしやぶりつくと、北八「コレコレ待ちなせえ〳〵。」ト見かねて、二人の中へ分け入りいろ〳〵ととりさへる。二人は聞かず互にねぢあふをあちこちとなだめる拍子に、北八の懷から、三つ櫛の紙に包みしやつがばつたり落ちると、あ尼「ソレ〳〵うらぢやアなからず、あのふとだ。」亭主「オヽ、これだ〳〵、まだ一つあらず。」ト北八の懷へすつと手を突つこみ今一包あるを取つて引き出し、亭主「エヽ、にし盜んだな。」北八「面目次第もねえ、併し己は取らねえ、大方其の櫛が

俺の懐へむぐり込んだのであらう。」尼「おぞい人だ、こな様のお陰でうらひどくむげちない目にあつた。」亭主「かんさつせえ、此の野郎めが太いからだ。エ、盗人めが。」ト ひどく云はれても流石はきしんに横道なし。北八さながら面目無さに眞面目な顔をしてしよげ返る。彌次郎可笑しく 彌次「ハヽヽヽ外聞の悪い男だ、たかで四十か五十の物を何時の間にいがめたやら、泥坊根性の有る者は如才のねえ者だ。」北八「いめえましい、ちよつと洒落にやらかした事が尻が來た。ホンニお比丘尼様へお氣の毒だ。」ト 此の内早櫛屋の亭主後へ戻ると、三人は遙かに行き過ぎ後をふり返りて 尼「ヤレ／＼たまげた、危い事のし、うら盗つて來たを見て云ふのかと思つたに、コレ見てくれさい。己は是れを盗つて來た。」ト 懐から櫛二枚そつと出して見せる。 北八「エ、おめへもそれを盗んで來た物を、おいらばかり恥をかいたはつまらねえ。オ、イ／＼櫛屋殿々々々、この比丘尼殿も櫛を二枚盗つたぞ／＼。」尼「ヤレ遲がや早くぬげず。」ト 一目散に駈け出して行く。それより二人はこゝを過ぎて行く程に、やがてかの木曾殿の思ひ者と聞えし巴が淵山吹の淵と云ふ邊に到りて、

木曾どののはまり給ひしゆゑにとぞ淵となりたる巴山吹

それより宮のこしの驛に到る。

何神の宮の腰かは知らねども拂ひ淸めよ櫛の悪名

此の宿を打過ぎて吉田村大木坂にさしかゝる。此の邊すべて獸の皮を商ふ家多し。「熊の皮買つてござらつせえ、猿の腹籠り正眞の熊の膽はいりましないか。」北八「コウ彌次さんコノ皮はあつたかだ

らうな。」彌次「ドレ〱さても滑こくていい心持だ、アヽ死んだ嚊めがことを思ひ出した。」北八「面白くもねえ。モシこれはなんだね。」亭主「ソリヤ狼の頭でござらア。」北八「是れはえ。」亭主「それか天狗の臍。」北八「そつちらの丸い物は何だらう。」亭主「コリヤむたらくにやァ無い物だ、蝦蟇の金玉でござらア。」北八「あの蝦蟇に金玉がありやすか。」亭主「あらず〱、コリヤちくいのでござらア、でかいのは八疊敷もあらず。」北八「ナニ狸とまちがつてゐらア。」亭主「その筈もし、狸が功經ると蝦蟇になる。」北八「ナニとんだ事を。」亭主「アニ證據が有る。よく人が、狸和尚と云ふ事が有るが、えては狸めがばあずに化けるもので、そのばけた時はあんと云ふと思はつせる。」北八「何と云ふか。」亭主「その化けた時は蝦蟇だんぶつ〱と云ふげな。」北八「悪くしやれるわ。サアいきやせう。」ト それより早くも藪原の宿に到りけるに、

　醫者どのの名の藪原は飯盛も匙加減して客やつとむる

やがて鳥居峠にさしかゝりける時、宿駕籠の狹きに大の男打乘りて行くを見て、

　旅人はさぞ窮屈に思ふらん乘りたる駕籠の鳥居峠は

かくてなら井の驛に著きたるに、はや日も西の山の端に傾きければ、兩側の旅籠屋より女共立ち出でて、女「モシ〱お泊りぢやござんしないか、お風呂もわいてゐるずに、お泊りな〱。」北八「まだ少し早いけれど。」彌次「もう泊つてもよからう、のう姉さん。」女「お泊りなさんし、お夜食はお飯でも蕎

麥でも。お蕎麥でよかァお旅籠安くしてあげませず。」彌次「いかさま安い方がいい、蕎麥では何程だ。」女「ハイお蕎麥なら百十六文でござんさァ。」彌次「そんならそれと定めて、サァ泊りやせうか。」ト此の宿屋へはひり、二人とも奥の座敷へとほる。女「直にお湯へおはひりなさんし。」ト此の内二人とも湯に入りしまひ。女「お蕎麥をあげませず。」ト持ち來りて据ゑると早速食ひかゝりて、北八「此方の方では蕎麥はいいがしたぢが悪いにはあやまる。」彌次「その代りにお給仕が美しいからいいのう姉さん、もう一杯くんねえ。」女「もうお蕎麥はそれ切でござんさァ。」彌次「ナニもうねえのかえ、たつた二膳づゝ食つたものをつまらねえ、これぢやァ食ひ足りねえ。」北八「旅籠が安いも凄まじい、二杯許り食つて居られるものか。」彌次「そんなら初手に二膳ぎりと斷ればいいに、馬鹿なつらな、錢は出すから飯をくんねえ。」女「ハイそんだら御膳に致しませず。」北八「何のこつた、矢張旅籠がたかくつくわ、いめえましいやてえぼねだ。」ト小言云ふ内、膳も出で食ひしまひたるに、女宿帳をもつて出で女「宿帳でござんさァ、おつけなさつて下さりまし。」彌次「ドレ／＼、これへ私らの名をつけるのだな。」トその帳面をひろげ繰り返して見て、「ヤァ／＼北八とんだ事がある、今日福島で手前がしくじつた橋の欄干に書いてあつた、ソレおいらが心安いと云つた男、此の帳にもついてあるわ。」北八「ホンニ江戸お箪笥町引出横丁とつてや鑵兵衞上下二人、ハヽァ爰の家へ宿つたと見える。」彌「エヽ此の人に會ふと金でも借りてやるものを、コレコレ女中、爰に書いてある江戸の人はいつ爰へ泊つたね。」女「そのお方は今の先私所へお出でなさ

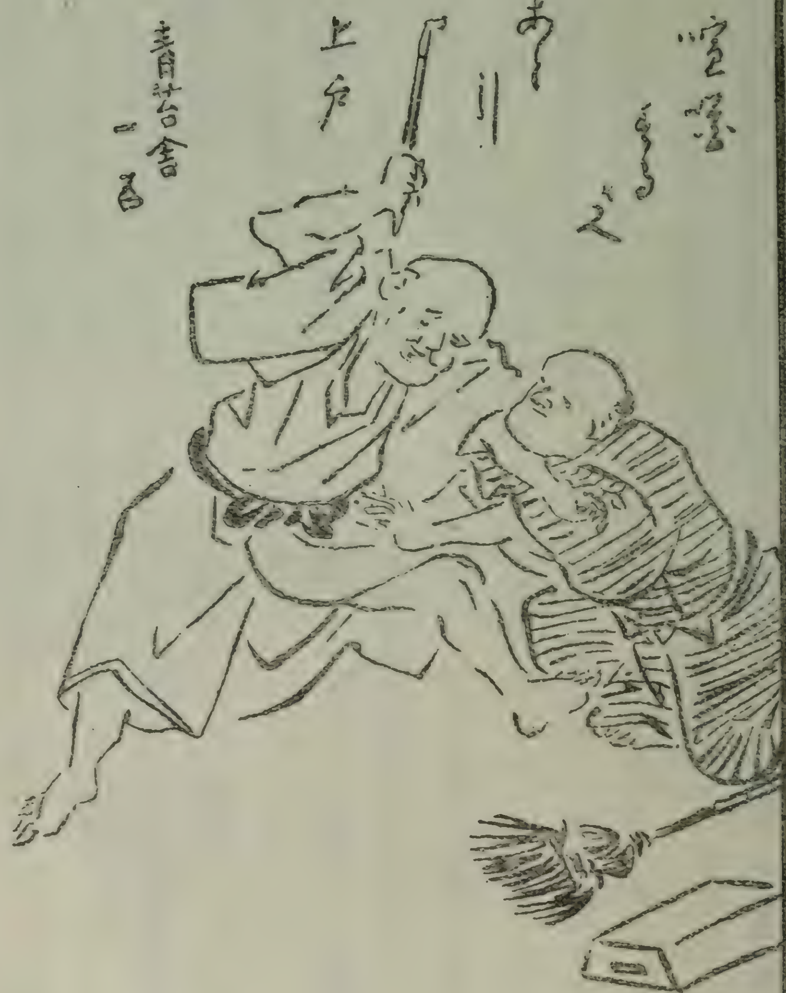
んした。」彌「ハアそんなら今此の帳へ書いたのだな、こいつは面白え。コレ女中此の衆は何處にゐやす。」女「お鄰のお座敷でござんさア。」彌「イヤ奇妙々々。」ト忽ち心勇み、早速鄰座敷の唐紙の隙間より、覗きて見れば違ひ無く、彌次郎兵衛かねて心安くせし者ゆゑ、すぐに唐紙をおしあけてはひる。顔を見て先にもびつくりしたる體に、彌次「鑵兵衛樣とんだ所でお目にぶら下りやす。」鑵「ヤア彌次殿かこれは／＼道理こそ、さつきにから聞いたやうな聲がすると思つた、貴樣伊勢參宮したと云ふ事は聞いてゐたが、逢はうとは思ひもよらねえ、連れは誰だ。」彌次「御存じの居候の北八でござりやす。マア／＼お前樣も御機嫌よくておめでたい、京のお店へお出でゞござりやせう、いい所でお目に懸つた、私共は金毘羅樣から安藝の宮島へ廻つて、なけなしの懐を空つぽに致しやして、誠にしみたれな道中でござりやす。」トそろ／＼出しかけて無心をいふつもり、此の男は腹ふくれにて至つて彌次郎を贔屓なれば早速見てとり、金の事承知にて小判五枚ばかりの惠みに逢ひ、思ひがけなく大きにいきり出して、彌次「コレハ／＼有り難うござりやす。コリヤ北八お蔭で是れからは大丈夫だ、心強く思はつせえ。」北八「引出横丁の旦那有り難うござりやす。」鑵「ナニサ／＼貴樣も此方へはひりなせえ。イヤ時に珍らしいことがある、此の近邊に能樂寺と云ふ寺がありやす。そこの住持は私が國者で心安くした者だから、先使ひの者を遣つたら、たつた今和尚が來て、今夜寺へ呼ばうと云ひやす、何も馳走はねえが鹿のなく聲を聞かせようといふ、コリヤア珍らしい、ついぞ鹿の音を聞いた事がねえからいかうと約束してやつたが、ナンと貴樣達も風流人の仲間だ、一緒に慰みながらその寺へいつてはどうだ。」

彌次「ソリヤ奇妙ちやうらいのう。」北八「どうぞお供致しやせう。」ト此の内宿の女來り彼の寺から迎ひの人來る由を言ふ。さらばとて彌兵衛は供の男に何かを言ひつけて後に殘し置き、彌次郎北八を連れて迎ひに來りし男に案内させ、此の宿を立ち出でて十丁ばかり裏の山へ登り行けば、其の寺に到ると住持と見えしが早速に出迎へて、住「これはよくこそよくこそサア／＼奧へ／＼。」ト案内してぐつと奧座敷へ通す。彌兵衛挨拶すみて、彌次郎北八をも引合はすると、彌次「私は此の旦那とは御懇に致す者でござりやすが、不思議に今晩一つ宿に泊り合はせて、珍らしい話を承りやしてお供して參りやしたが、アノ鹿と云ふ物は秋鳴く物と存じやしたが唯今でも鳴きやすかね。」和尚「さればそこでござる、秋鳴く物を今頃お聞かせ申すが御馳走でござる。コリヤア外にはござらぬ、愚僧が所の山に居る鹿に限つて其處が奇妙毎晩鼻の先で鳴きます。」北八「ソリヤ何よりの土產に早く承りたいものだ。」和尚「まづ／＼御酒一つ上げませず。コリヤ／＼西念々々お杯もつて來い。」ト此の内酒肴いろ／＼出で酒宴始まる。小僧「モシ和尚樣唯今新畑の開平殿が參りました。」和尚「ちよくと呼べ何の用でわせられた。」小僧「雨がちくとばらついて來たに、傘を貸せてくれと申してわせられましたから貸せてやりました。」和尚「コノだばうめが、コリヤ傘はふとに貸せない物だ、貸せると返すもんではない、今度からふとが傘を借りに來たら、扨々安いこんだが、皆貸し無くならかしましてたつた一本ござるが、こんな中の雨風にさいて出ましたらば、骨は骨、紙は紙とばら／＼になつてしまひましたから、繩でからげて棚の隅へほかし上げてござる。あれではお役にたつまい、氣の毒でござると、斷り言ふもんだ、さう心得てをれ、ど

んくさい奴だ。コレ〳〵お銚子が無いぞ。」鐘「イヤもう澤山に下さりやした。」和尚「はてゆつくらりとまゐりまし、今に鹿が鳴きませずに。コレ〳〵小僧又誰か來たな。」小僧「ハイ、門前の茂弟次がわせました。」和尚「ムウあぜわせた。」小僧「あした雜役に出ずとつて、馬を貸せてくれと言つて來ました。」和尚「何といつた。」小僧「もうぬかるこんぢやアございりましない、斷りをいつてやりました。馬は皆貸し無くならかして只一本あつたを此ん中の雨風にさいて出て、骨は骨、紙は紙とばら〳〵になつたから繩でからげて、棚の隅へほかしあげてござる。あれでは役に立つまい。氣の毒のこんだとことわりを言つてやりました。」和尚「ヤイ〳〵くそたれめが、馬があんとして骨は骨、紙は紙となるもんだ、馬鹿なつらめ、うらが言つたは傘のこんだに。ソリヤア茂弟次がたまげて歸つたであらず、今度から馬を借りに來たら、昨日秣をつけにやりましたが、女馬を見て駄狂ひしをつて谷へすつたり落ちをつたから、ないらが起つて役に立たないから、廏に繫いで豆ばつか打食はせてござる。ア、氣の毒なこんだと斷りいふもんだぞ。」小僧「ハイ〳〵今度からその通りに言ひませず。」和尚「お聞きなさい、愚僧が寺に居らないと埒がない、肝のいれるこんでござるわのし。ヤア又誰か來をつた、こんなにふとの來るにはたまげはてる。コリヤ〳〵西念々々。」小僧「ハイ〳〵又矢村の邊呂八殿から使のふとが來ました。」和尚「あんと言つて來た。」小僧「明日は志の日でござるに、和尚樣お手間さへながらお齋にござつて

下さりませと申すこんでござります。」和尚「オヽそれは行かず〳〵。」小僧「イヤ断りを言つてやりました。」和尚「アヽあぜうらにも聞かないで、あんと言つてやつた。」小僧「和尚は昨日秣をつけにやりましたら、女馬を見て駄狂ひしをつて谷へすつたり落ちまして、ないらが起りましたから、廏に繫いで豆ばつか打食らはせてござる。お齋には參られますまい、アヽ氣の毒な事でござると斷りを言つてやりました。」和尚「ヤイ〳〵己は〳〵あぜそんな事を。」小僧「そんでも今度からさう言つてやれと仰しやれたから。」和尚「コノ大馬鹿のたくらたァめが。いつ己が女馬を見て駄狂ひをした。」小僧「そんでも此ん中五佐七のかゝさまが來た時、奥へ連れてござつて駄狂ひをさつせえた事もあらず。」和尚「エヽあにをこきをる、アリヤア物をぬつて貰つたのだ、うぬ馬の斷りとうらが斷りとふとつに思つてけつかるか。」小僧「私は馬も和尚樣も同じこんだと思つたから。」和尚「あぜ同じこんだ。」小僧「そんでもふとが和尚樣のことを貧僧だといふつらァ。」和尚「アヽだめをぬかしをる。」ト煙管で小僧の頭をこつつり、小僧はきやつと言つてきう〳〵逃げて行く。和尚立つて行かんとするを彌次郎押止めて、彌次「マァ〳〵ようござりやす、どこのお寺でもお小僧達には世話のやけたものでござりやす。もう御料簡なさりやし。」和尚「うらにまで恥をかかせるむたらくものめが。」鐘兵衞「そこが子供でござりやす。時に御酒も大きに下されたが、鹿はもう鳴く時分でござりやすかね。」和尚「ホンニすつたり忘れた。一時待つてござらつせえまし、今に鳴きませず。」ト言ひつゝ和尚は立つて行きしが、暫くすると勝手の方騷がしく何か聲高に言ひ合





ふ聲聞えて、ばつたくさする故座敷にては何事やらんと聞耳立つれど分らず。和尚大きに腹たてたる顔つきにて座敷へ來り、悉ち顔色を直して、和尚「さても折悪く色々な取込で無駄走千萬でござる。」ト挨拶する内勝手の方より聞かない〱と大聲立て座敷へぬたくり込んだる生酔の男大目玉をむき、きよろ〱見廻し、「コリヤ和尚めは何處へうせた。己ぶたれちやァ聞かない、やァだ〱。」和尚「コレお客がござらせる、あつちへうせないか、コリヤ男共々々、權十めをひこずつていけ。」權十「インネいごかない、コウくそたればあすめあぜうらをぶつた。」ト和尚へ摑みつくゆゑ、皆々取りさへ北八「コレサ〱靜かにしなせえ、そんなに騒がずとも分る事だらう、マアどうしたことだ、譯を言ひなせえ。」權十「お客様か、聞いてくれさい。」和尚「コリヤ〱、あんにも言ふな〱、此奴めな生酔だにお構ひなさるな。ヤイ勝手へうせないか。」彌次「マア和尚様うつちやつておきなせえし。コウお前どうしたのだ。」和尚「インネそれをいつちやァ、むずいかない〱。」權十「そんでも譯を言はにやァ分らない、お客さま聞いてくれさい、うらァ此の村の權十と言ふ者だがのし、うら鹿の鳴く眞似をよくしる事が得手者だから、こゝの和尚が、今夜お客がある、鹿の鳴く眞似をして呉れさいと頼まつせるから呑込んで來たが、がらい男共と酒をむたらくひん飲んだもんだから、もう出來ましない。そんでやァだといつたら、アノばあすめが腹ァつつたつて己をずだいぶちをつたからこんだァのし。」彌次「ハ、、、そんなら鹿が鳴くと言ふは本當の鹿ぢやねえ、貴様を頼んで鳴かせる積りか、なう和尚様。」和尚「ハヤ面目次第もござらない。」北八「これも一興々々、和尚様のお心遣ひは受

けて居りやす。モシお前も機嫌を直して一杯飲み直しはどうだ。」北八「是れは面白え、コウ鹿先生持ち合はせやした、一つあげやせう。」權「己ア醉つてずだいいけましないがもう一つ飲んでくれず。」ト肌をいれて杯をうけ持ち、「お客さまあげませず。そんだいにやァやく／＼ござらつせえたもんだに、こゝで一つ肴に鹿の鳴くのをやつて見ませずか。」彌次「コリヤよからう、所望々々。」權「聞かつせえましこんなだァのし、カンヨウゴロ／＼ヒイ、、、引鹿の醉うたとこだァのしハ、、、。」鑵「ヤンヤ／＼、わしも三ケの津を股にかけて歩く男だが、鹿の聲色は始めて聞きやした。和尚樣、是れをはねにお暇致しやせう。」北八「ハ、、、鹿殿がこゝに倒れた、わつちも鹿の鼾を始めて聞きやしたがごうせえな鼾だ。」彌次「和尚樣大きに御馳走になりやした。」和尚「イヤ愚僧穴へもはひりたうござる。」ト眞面目になりて挨拶するもをかしく、皆々笑ひを隱して暇乞し、さうさうこの寺を立ち出づるとて、

權十は鹿なり和尚馬なればさて馬鹿らしきもてなしにこそ

かく打興じて宿へ歸り打臥しけるが、明くれば彌次郎北八は鑵兵衛に別れて先へ此處を出でけるが、これまでは路用貧しくして何事も心にまかせざりしに、鑵兵衛より金子を借り受け、忽ち心いさみて足元も輕く諏訪峠を打越し贄川の驛に到れば、

金かりて溫まりたる懷はお臍も笑ふお茶の贄川

この宿の棒端にて休まんと或茶屋にはひれば、茶屋の女房「お早うござりました。」彌次「内儀さん何時だの。」女房「まだ四つにはなりましない。」ト此の内亭主らしき男外より歸りきたり、「コリヤよくござらせえました。おへさお茶あげずか、アノ尾垂のよた者めはまだうせないか。」女房「インネござんしない。」亭主「昨日の客に入らずに、鯉を持つて來てくれと、やく／＼いつてやつたに、請合つてよこしながら、今にずだいうせをらない、彼奴めは何を言つてやつても間に合はせた事がない、おぞい野郎めだ。」ト何か獨言を言つて居る内、表より二十四五の男草鞋がけにてずつとはひり、「おつさま今來ました。」女房「丹太どのか、よくござらつせえた。」丹太「よかァ來ましない。わし言譯に來ました。鯉の事をいつてよこさつせえたがの、こん中からむずとれないで肝がいれたが、おなごら言つてよこさつせえたこんだに、どうかせずと思つてそこら中探して、でつかい奴を一本買つて、とてもの事だに活してこずと、わし背戸の川の杭へ繋いでおいて昨夜あげて見たら、聞いてくれさい、河童めが横腹を喰ひをつたから、私うつたまげてコリヤァ疵のついた物だに祝ひごとにやァつかはれまいと持つて來ましない。その斷りにやく／＼來ました。」亭主「エ、にしやァ來ないでもえいに律儀な男だ、きんのふの客は貰つた肴でおやしてしまつてもうえいに、にしやく／＼來たもんだから、あんにもないが一つ飲んでいけつちやァ。」丹太「ソリヤ忝うござるが、私酒も飲んで來ました。御みようにさつせえ。」亭主「ハテやく／＼呼びにやる筈だに幸ひの事だマァ上れちやァ。」丹太「そ

んだら上りませず。」亭主「にしのとこからは貰はないが、鹽尻のおつ樣から今朝鯉を壹本貰つた。にしはえいとこへ來た、あれを煮て食はせず、とてものこんだ、あんにせず好め〳〵。」丹次「うら煮たのがよくござる。」亭主「そんだら頭のとこを名古屋味噌でこと〳〵煮て山椒をはなして食はせず、それで酒を四五杯のんでくれさい。」丹次「わし下地がある。さうは飲ましない。」亭主「ハテ酒といふものはしひないとすだいのまれないもんだ。せつぴのんでくれさい。」丹次「そんなに言はつせるもの四五杯は飲みませず。」亭主「飲むか〳〵、ソリヤ嬉しい。そこで片身をつくつて山葵醬油で出さず、ナントいい肴であらず。」丹次「ソリヤえいのし。」亭主「そんだらそれを肴に、もう五杯ばかり飲んでくれさい。」丹次「イヽンネさうはむすいけましない。」亭主「はて扨いつはともかくも今日はせつぴ飲んで貰はすに。」丹次「そんだら呑みませず。」亭主「嬉しい〳〵酒の上では茶がいゝもんだ。こん中信樂のえい茶を貰つた。それを山吹色に出ばなにして飲ませず。」丹次「ソリヤ重ね〳〵御造作でござる。」亭主「そんだい主か歸る時褒めて貰ひたい。」丹次「褒めませずとも。」亭主「そこでにし、初手に五杯と又あとで五杯、十杯飲んだらいかな主も醉つて來て舌も廻らなくなつて、足元もひよろ〳〵しるであらず。ふとりでには草鞋もはかれまい。うらがはかせてやらず。」丹次「アニめつさうな、私がでにはかず。」亭主「イヽヱはかれまいからうらがはかせず。」丹次「アヽもし〳〵、私はかず〳〵。」亭主「はくか〳〵、ヽヽ、はいた

らそこで褒めるのだ。扨々今日は結構な御酒と申しお肴と申し、えいお茶まで下されて御造作になりましたか、辱うござると禮を言ふ程に馳走してやりたいが、マアさうはならない。汝の鯉を河童がくつたら、うらが鯉も鼬がくらつてしまつたから仕方がない。早く出て行けつちやァよくござつた、ワハ、、、。」丹太「エ、おつ様むげちない目に合はせた。」亭主「ワハ、、、お客様此奴は私の甥でござりますが、いつでも口先ばつかでかつころばかすことが得手もんだから、わしも口先で馳走したがあんとであらず。」彌次「ハ、、、コリヤ出來やした〱。あんまり面白かつたから、わつちらもついうかうかと聞いてるやした。其のかはり、お蔭で口先ばかりのお相伴をしてどうやら腹が空つた様だ、そこらで中食に致さう。」ト大笑ひして此の處をたち出でける。

木曾街道續膝栗毛五編（大尾）

風聲夜話

翁丸物語

風聲夜話 翁丸物語序

名醫類案に、白き狗の白衣を著せる少年と化したる怪を著し、獨異志に、赤き犬の首、瑯琊の一婦が奇疾を癒せしことを錄せり。されや畜獸本糧辨頑凝にして、よく奇怪をなす例稍なからず。昔時より西國及び四國に、犬首を祀るといへることあり。其の濫觴を探るに、豊後國松が崎の何某が飼ひ置ける犬の伊勢參宮して、一志郡藤潟に養はれ、其の恩に報いて、孝子を導きたる奇說、頓に籠中の一本を得て、表題不知こゝに摸寫し、則ち異名の翁丸物語と命けけらし。

于時文化丁卯春

龜戸寓居に於て

十返舍一九識

翁丸物語上編除目

忘井源太兵衛參宮の犬を救ふ話
源太兵衛妻かん奸佞淫悪の話
島貫丹平が娘配偶違變の話
故源太兵衛が娘りつ一家評定を妨ぐる話
かん、りつが智辯に攻められ藤潟退去の話
丹平愛情に迫り忘井親子を殺害の話
忘井が飼犬命を捨てて其の仇に報ずる話
藤潟騷動、忘井逐天の話

翁丸物語下編除目

丹平潛居おかん暴悪の話
旅僧石佛となりておかんを屠る話

修驗者觀乘疫神をのゝしる話
酒肆の主疫病に犯さるゝ話
觀乘人の夢を買ひ取り禍ひにあふ話
丹平奇疾觀乘を請する話
犬がみ明神勸請の話
觀乘實名忘井源三郎仇討の話
鼠の怪異觀乘立身の話

風聲夜話 翁丸物語上編

十返舍一九著

發端

勢州津より南に、一志郡藤潟といふ所あり。この地は大神宮の御厨にて、毎年鹽九斗を内宮に獻じ奉る故に、一名燒出の里ともいふ。今は昔こゝに一箇の奇談あり。狗子恩をかへして孝子を導き、後に豐後の國早川に、犬上大明神と勸請せられし其の本原をたづぬるに、忘非源太兵衛といへる鄕代官、代々この藤潟に居住して、安富榮昌いふばかりなく、他の恭敬に預り、何不足なかりけるが、源太兵衛老年に及び、子二人あれども、總領源三郎は、放逸惰弱にして、終に家を捨てて行方知れず。つぎは女子にて、當國の北畠何某どのの侯館に召使はれ、御嫡子絹太郎どのといへるが御情にあづかり、家に歸る事を嫌ひ、父の心に任せざれば、家業を讓るべき者なくして、ことし七十の老の坂に杖をつきて、二重の腰をそらし、重役を勤めけるが、例年の如く神供の鹽を奉らんと、課役の馬に負は

せ、其の身これを警護して、内宮に參る道すがら、三渡村の淚川といへるに到りけるに、向うより往來稼ぎの人足どもと覺しく、身に襤褸菰などをひき纏ひたる、屈竟の男ども四五人、棒薪などを打振り馳せ來るを見れば、一疋の狗を追ひかくるにてぞありける。此の犬首におびたゞしく鳥目を繫ぎ打ちかけたるを、かの者ども奪ひとらんとして喰ひつかれ、大きに怒りて中にとりこめ、うてよ殺せよと、手頃の石をとつて投げつけ、散々に打ちすゑんとするを、源太兵衛不便に思ひ、男どもをおしなだめていふ樣、「仔細はしらねど、畜獸のことなれば殺すとも詮なし。殊に大神宮へ參詣の犬と見ゆれば、其の儘に追ひ放ち遣はすべし。」と、引きわくれども聞き入れず。一人の男いふ。「御覽の如く我等の向脛を喰ひつきて、其の痛み堪へ難く、かかる惡獸は往來の妨げなる故、打殺し後の難を除くべきなり。御身老體のことにありて、怪我ばしあるな。」と取りあへぬ體に、源太兵衛この者共が樣子を見るに、いかさまにも貪欲の爲に、かかる仕儀に及ぶならんと推察し、懷中より圓金一枚を取り出し申しけるは、「兎も角も心なき畜生の殺さるゝを見るに忍びず。我おこと等に無心あり。少分なれども此の金子にてその犬を需めたし。かれが爲に疵をかうぶりたる人々の療用にそなへて、死刑を宥し與へられよ。」と申しければ、男どももこれを聞きて、互に顏を見合はせるたりけるが、忽ち面を和げ、「さ程までに仁惠を垂れ給ふ、御身の言葉背きがたし。さあらば此の犬が一命うり渡し申すべし。價を得る

は常ならねども、我々究竟にして、これが爲に疵を被り、もし難治に及ぶ時は、渇命にいたらんこと歎かはしければ、其の儲けとして、金子は申し受くべし」と手ばやく受取りて、各々心中喜悦の體に打連れて、足ばやにこそ立ち去りけり。されや昔も今も、犬の參宮する事其の例少なからず。往來の人これをたすけて、銘々散錢を貫ざしに繫ぎて彼が首に打ちかけ、與へゆく故に、後には數百の錢を負うて通行する事粗證あり。今此の犬かくの如くなるを、貪欲濁亂の兇黨ども打寄り、奪ひとりて酒肴に代へんと思ひしに、喰らひつきて自由ならざるを憤り、既に打ち殺さんとせしなるべし。幸ひに源太兵衞通り合はせて、金子に代へ、是れを救ひ助けしかば、畜類と雖も、其の恩に感じけるにや、忽ち源太兵衞が前に來りて、頭を垂れ拜謝する體に見え、尾をふり戲れて悅びけるにぞ、家來に命じて用意の苧繩をとり出し、これを繫ぎひかせて、軈て內外の宮廻りするまでも、いたはりしたがへ、神供の鹽も獻じ終りて、歸路にもかの犬を引連れて、ほどなく藤澤に歸りけるが、それより此の家に養ひ飼ひ置きけるなり。

第一章

然るにこの忘井源太兵衞は、もとは當家の家來にして、先主源太兵衞死去の後は、後家おかんの後

見たりしが、性質柔和廉直なるものゆゑ、終に上げ用ゐられて、おかんと夫婦になり、苗跡を相續したるが、もはや老年に及び、次第に身軀もよわりけるゆゑ、家門打寄り相談して、何卒相應の緣をもとめ、壻養子して家業をゆづり、其の身隱居し、しばしの勞を償ふべしと勸めにまかせ、かの北畠殿に奉公し居る娘おりつを呼びさげんと、其の事を申し遣はしけるに、此のおりつ兎角に肯はず。かれこれと故障をいひたて、幼き中より候館に出でて、其の當座は折節暇を乞ひて、藤澤へも來りけるが、さいつ頃より絕えて家にも歸らず、生涯主家に仕へんといひ放ちて取りあへず。いかにやといふに、北畠殿の若殿絹太郞どのと、人知れず馴れ染め、互に龜鶴の思ひをなし、偕老の末を契りて忍び逢ひけるが、計らずも去年絹太郞殿病に冒され、遂に空しくなり給ひければ、おりつも共に、御あと慕ひまゐらせんとまで思ひける程に歎き悲しみたるが、主家の御いたはりにめでて、惜しからぬ命をながらへ、心中には尼法師ともなりたる思ひをなし、親の許さぬ中とは雖も、再び夫には見えまじと、絹太郞殿をのみ絕えず思ひ暮しける故、たび〳〵父源太兵衞方より、御いとまを願ひ、家にかへり壻を迎へて、共に家業を襲はしめんと申し越すと雖も、「兎角家督の望みなし、いかやうの人をも養子となし、それに嫁をとりて苗跡を立てらるべし。」と挨拶して順はざりける。此の源太兵衞夫婦はなさぬ仲ゆゑ義理あれば、たつておりつに勸めけれども、固く辭して應ぜざれば、今は是非なしとて、頓て同

姓のうちに、清次郎といふ者を養子となし、家督を讓り、其の身は隱居し、漸く安樂の身とぞなりにける。其の頃松坂の南、蛸地村といふ處に、同國高樋家の浪人島貫丹平といふ者あり。源太兵衞とは舊友の交はり深く、折ふしは藤澤に來り逗留し、語り慰みけるが、元來性質奸佞にして淫欲深く、いつしか源太兵衞が妻おかんといへるに密通し、忍び逢ひけるに、此のおかんは故源太兵衞の妻なりしが、後家となりて暮しける中、今の源太兵衞に馴れ染め、終に後の夫となして、年來連れ添ひ居たるが、今年四十一歲なり。されど奸淫を好みて、丹平に親しみ、幸ひ島貫が方に、一人の娘ありける故是れを迎へとりて、清次郎に娶せなば、一家となりて互に行末賴もしからんと、密かに申し合はせ、表向媒妁の人を賴み、相談に及びけるに、折しも松坂の愛宕山龍泉寺に開扉ありて賑はしければ、かの媒妁の者清次郎を友引し參詣したるに、かねて申し合はせ置きたりけん、島貫丹平も娘おせちを連れてこゝに來り、境内の酒店によりて、清次郎に出會し、おせち清次郎がいやしからぬ風俗の、しかも當世めきて、言語應答のしとやかなるに、心中恍惚として、恥かしげに打ちそばみ居たるが、これよりして頻りにおこがれ慕ふ風情に、父丹平も是れを察し、急になかだちをせめて申し入るゝに、忘非の方にも、島貫今浪人たれども素性賤しからず、其の上舊友のよしみもあり、又妻おかんは、己がわけあるまゝ、ひたすらに勸めける故、早速相談調ひ、既に良辰を選み、新婚の日限ぞ定まりける。

然るに今年故源太兵衛の十七回忌にあたり、婚姻とゝのへざる前に佛事を營まんと、僧侶を招き、親類知音の者殘らず召しあつめ、酒飯を出し、供養をなしける時、北畠殿につかふるおりつ方へも斯くと申し遣はしけるゆゑ、おりつ實父の年回なれば、餘儀なく暫しのいとまを乞ひうけ、藤潟に歸りたるが、誠や人の心は、向ふ所の佳境にしたがひ、移り行く習ひにして、おりつ初めて清次郎が年頃といひ、容儀恰好、過ぎ去り給ひし主家の若殿絹太郎殿によく似たりと思ふより、頻りに愛情を催し、胸いたきまで思ひにたへかね、せめては心のほどを露ばかりも知らせたく、側仕へのこしもとに囁きて、かくと云はせたりけるに、清次郎は早、畠貫方の縁談も極まりたる上は是非なしと、心にあらぬ挨拶して取り敢へざりければ、おりついとゞ思ひに沈み、頓て母おかんの居間に來り申しけるは、「是れまで度々御諫めにあひしかど、御心に順はざりしが、よく〳〵思へば妾此の家の血脈にして、他の人に家督續がせんは、過ぎ去り給ひし父上の思召もさぞかしと、本意なく思ひ侍るなれば、今より仰せに從ひ、清次郎殿と夫婦になり、相續したき願ひなり。畠貫方の御契約は御斷り立て給はるべし。」と事もなげにぞ申しける。母おかん聞きもあへず「御身幼少より兩親に別れ、なさぬ中のわれ〳〵が手鹽にかゝり、我儘に育ちし故、かかる料簡もなき事を宣ふものかな。さる故にこそ、夫といひ妾まで、義理ある御身の事なれば、再三その事を勸めたりしに、飽くまでも肯はず、今は是非なし所詮總

領の源三郎は行方しれず、家名の退轉せんにはかへられじと、清次郎を養ひ子とし、蛸地村の島貫が娘をして、これに妻せんと、既に近日交婚の約束なり。今となりて變替へのせらるべきや、重ねてさやうの事宣ふまじ」とおりつ云ふ「母上の仰せさる事には侍れども、又父上の料簡もあるべきなれば、ひたすら此の事御申しありて、ともかくも、妾が心の本意なさをつぐなひ給はるべし」と遮つていふに、母心中大きに當惑し、島貫と申し合はせ、折角たくみつる事のいかにや成り行くべしと、樣々に拒めども承引せざれば、是非なく夫源太兵衞にかくといふに、源太兵衞聞きて「扨はおりつの先非を悔み、今當家を相續せんとの存念は、我に於て過分至極せり。早く島貫方へ變替へ申し遣はし、其の事に決着すべし」と云ふ。おかん案に相違して「こはけしからず、たとひいかやうの事ありとも、今更丹平殿方の約束違背せらるべきや、幸ひ今日佛事にておの／＼出席の序なれば、此の事衆議評の上決したまへ」と、頓て佛事供養も終り、僧徒も歸りたるに、一門中打ちくつろぎ雜談の折柄、おかん進み出でて、今度縁談の始末、おりつがしかじかの事ども具に語り「いかゞ計らふべきや。妾は偏に島貫方の契約、今となりて變替へせば、事むつかしからんと、夫を諫むれども承引せず、各々思ひ給ふ事もあらば、御申し給はるべし」と申しける。垂水の彌太夫といふ者、是れはおかんが別腹の兄なりけるが、膝をなほしていふ「丹平は當領主の執權飯木津氏と、内々縁者たる由聞き及べり。さあら

ば此のたびの一件、容易に變約せば、いかなる災ひや出で來らん、其の上一旦盟約せし事いかゞ斷り立つべきやうなし。おりつ事も、初めに再應諫めを用ゐざる不祥なれば、詮方なし。」といふ。側に故源太兵衞の弟、曾原の伊三次といふもの是れを聞きて、「彌太夫殿の詞道理に似たれど、約束をたがふる事、一分の義理立たずとは、近頃小器の料簡なり。故障出で來りて、事の妨げとなる時はいかにせん。まして是れは當家の血脈をして、苗跡をつがんとするに、小事に屈託する事あるべからず。恐れながら國主はその國を襲ひ、領主はその領地を襲ふにひとしく、われ／＼が家督居所は、則ち領地城郭なり。瑣細の事にあらざれば、島貫がかたを變約し、おりつをして清次郎に娶すべし。」彌太夫いふ。「そは銘々の勝手料簡なり。さやうの大切なる家督をつがする緣邊ならば、後日に違變なきやうとくと商議せし上、などて事を取究めざるやと、丹平批判せばいかゞ返答すべきやうなし。殊更おりつあるが故に、彼方にはあやぶみたるを、おしてかやう／＼と仲介の者にいはせ、今又それに悖り變心せば、譫言に似て誑かされしと、島貫なか／＼承引せまじき性質なれば、忽ち不良の事や出で來るべし。」伊三次いふ。「此方のあやまりは幾重にも慙謝し、其の上にて、理を說きて斷りたてんに仔細あらじ。殊に家業を讓る當人にもあらず。先方は娘の事なり。それにても丹平理非を聞きわけず、無法の舌頭を動かさば、其の時は又その料簡にて計らひ方あるべし、今より見越し推量の沙汰せば、際限

あるまじ。」と云ふに、源太兵衞聞いて、「とかく先源太兵衞殿の血筋なれば、大槪のことは理を非にまけても、おりつをして清次郎に娶せん事、亡靈の本意なるべければ、先づ〳〵それに定むべし。」といひも果てざるに、おかん會釋もなく進み出でていふ。「女のさし出がましくいかゞなれども、おりつ事は北畠殿の若との絹太郎殿に馴れ染め、去年はからずも身まかり給ひし後は、かの人に操をたて、再び夫はもつまじと、さてこそ此の度清次郎に添はん事を、堅く辭退せし天晴貞女と、わらは其の心を察し、強ひて勸めざりしに、今又家にかへりて、俄に清次郎が色香に迷ひ、忽ち絹太郎殿の高恩を忘れ、おして婚姻を望む。表裏惰弱の心底、さやうの我儘不埒なる者には、この家業は讓りがたし。いかんとなれば、清次郎は他家より來るものなり、彼にしまかされんこと案の內なれば、行末心もとなし。二つには故源太兵衞殿臨終の時、妾を枕近く召され、源三郎おりつ兩人とも、先妻の子なる故、その方が爲には義理あれども、成長の上若し見屆けざる事ある時は、遠慮なく是れを省きて、いかにも相當の者を見立て、苗跡をたてさすべし。我が血脈なればとて、枉逆惰弱の者には讓るべからず。先祖が膏血の家業こそ大切なれと、くれ〴〵の遺言なり。三つには今彌太夫殿演述の通り、島貫諱常の人にあらず、何とて合點すまじ。」とおしかゝつて云ふに、座中口を閉ぢて詞を出すものなく、こゝに清次郎が實父矢野村の太郎作といふ者、けふの佛事に招かれ、此の席にありけるが、額に皺をあつ

めていふやう、「われ漸く此の頃縁者となりて、なじみもなきにいかゞなれども、愚意申し見るべきなり。婚姻の事、おりつ方は本なり、島貫方は末なり。されど今末重くして、本にかへさんとするに事むつかし。此の上は暫く清次郎を連れ歸り、我が方に預るべし。其の當人なければ嫁を迎へんやうもなし。さるに仍つて清次郎儀は、仔細あつて實父方へさし戻したれば、先づ縁邊のこと延引に及ぶべしと、蛸地村へことわりをいはんに何の故障あるまじきなり。其の上にておりつが暇をこひ請け、當家にさし置き、改めてかやう〳〵の仕儀に及びたりとて、清次郎を婿入りさせんに、丹平いかんともいふ事かたかるべし。畢竟嫁をとらんとするゆゑに輿論むつかし。唯婿の穿鑿こそ肝要なれ。」と詞をはなちいふにぞ、源太兵衛大きに歸伏し、「まことに足下の料簡奇妙なり　さりながら清次郎に何の失もなきに、さし戻す事氣の毒なれども、唯今の難澀除くため、しばらく當家を退かせ、程なき時節に更めて迎へ取るべし。すべて物の約を變ずること、ある習ひなれども、拒むものありて面倒なれば、兎も角も足下の意にまかすべし。」と、頓てそれに決著し、太郎作直に清次郎を誘引し、歸宅せんといふに、おかん俄に詞あら〳〵しくいふ。「さあらば清次郎のみにあらず、夫源太兵衛をも此の家を追ひ出すべし。いかにとなれば、故源太兵衛殿の遺言に悖り、放逸奸淫のおりつをして、家名を立てさせんとする愚昧無謀の男、家にあつて用なし。」と、聞くより伊三次膝立て直し、「こは案外なる事を聞く

ものかな。源太兵衛に仕落ちなし、殊に重役を勤むる身分、おこと女の身として、其の夫を追ひ退けんといふは何事ぞや。」おかんいふ。「御身故源太兵衛殿の弟なれども、當座の理に迷ひて其の本を忘れたり。妾が夫もその如く、今當家を襲ふと雖も以前は家來の與太平なり。妾先源太兵衛殿に別れて後家となり、總領源三郎は不埒にして行方知れず、詮方なく與太平を後見としてありつる内、道ならぬ事ながら、心にあらぬ戯れより、終に與太平を取立て、後の夫と定めしも、畢竟女の遲鈍にて、家を思ふの餘りなり。さるを今驕奢にほこり昔を忘れ、故源太兵衛殿の遺言に背く心底心得がたければ、追ひ出さんといふに批判あるまじ。とく／＼何方へも立ち去るべし。」と居丈高になりていふ。各呆れ果てて一言を吐く者なく、源太兵衛も慘然として手を組み口を閉ぢて居たりけるに、おりつは最前より、次の間に此の樣子聞きて、おかんが前に出で申しけるは、「清次郎樣も御歸りの由、父上にも退去し給ふとの事、さあらば御身も、今より當家を立ち退き給ふべし。人の非は見ゆれども、己が非は見えずとかや。御身とても今は誰憚らず驕りに長じて、其の本を忘れ給ひしなり。今わが母と敬へども、以前は妾が乳母なる事おもひ知り給ふや。妾二つの年、母上に後れまゐらせ、其の後過ぎ去り給ひし父上、御身の切なる子供の介抱にめでて引上げ給ひ、後妻となし給へり。然るに父上死去の後、今の源太兵衛殿と因みて、おもて向後の夫となし給ふにあらずや。我は此の家の血脈なり。御身は本

は奉公人なり。妾父の尊靈になり代り、今より暇を遣はすべし。當家の大恩を忘れ、我意をほこり給ふ振舞、左樣の道ならぬ人、こゝにありて益なし。」と聞くよりおかん額に筋をあらはし、大きに急き立ちいふ。「あなをこがまし、御身こそ妾に養育せられし厚恩を顧みず、以前はともあれ今は眼前母に對して、言はれざる惡言なり。左樣に人がましく物のたまふも、皆妾が育てし故ならずや。御身如きの詞を出す所にあらねば、とく退き給ふべし。故源太兵衞殿の遺狀もあれば、如何なる事ありとも、妾此の家はえこそ退くまじ。」と席を打つてぞ申しける。おりついふ。「今までは穩便になさんと、御身の恥をあかさざりしが、今父上を追ひ退けんと宣ふ御身の我儘を聞くに忍びず、今は何をか包み參らすべき。島貫殿と不義ある事、人は知るまじと思ひ給ふや。證據となるべき彼方よりの密書妾拾ひ取りて、こゝに所持せし上は、あらがひ給ふとも叶ふまじ。」と懷中より取り出し、席上に押披けば、おかん仰天し、これを見るに、まがふかたなき島貫が手跡、さてはと俄に面目を失ひ閉口したるに、座中も互に顏を見合はせ、嘆息してぞ見えにける。おりつ重ねて彌太夫に向ひ、「先刻妾が事を放逸惰弱なりと誹謗せられし母の、反つて斯かる邪ある上は異議あるまじ。御身兄御なれば是れより引取つて御歸りあるべし。さりながら、かりにも一旦母と賴みつるなれば、此の事を穩密になし、此の席かぎり、決して他の耳にふれまじきなり。父上にも御憤りあらんなれども、妾に免じて其の沙汰し給

はぬやう、願ひまゐらせんは、聊か報恩の寸志なり。」と理非あきらかなる言句に、おの〳〵感心し、默然とひかふるにぞ、彌太夫心中に情念を含めどすべきやうなく、道理に伏して、竟におかんを引取り、友引してぞ歸りける。さるにてもおかんが奸佞淫欲の爲に、たくみし事も水の泡となりゆく、現罰の程ぞ恐ろしき。斯かりし程に、人をして島貫方の緣談變替へのこと申し遣はしけるに、丹平内々おかんが方より此の始末を承知せしことなれば、二言と返さず應諾しけるゆゑ、直に北畠殿にねがひて、おりつが暇を乞ひ請け、頓て清次郎と、新婚の取結びをぞなしたりける。

第二章

人よく人の容貌を見て其の善惡は言へども、己が後を顧ること能はず、おかん不良の心より、遂に禍ひ其の身に及んで、藤潟を追ひ拂はれ、蛸地村に來り、丹平に委細の事を語り、「いかゞはせん。」と云ふに、島貫も無念骨髓に徹れども、詮方なく、其の上緣談の事も變替へせられ、當惑の體に、娘おせち始終を聞きて大きに悲しみ、いつぞや松坂の龍泉寺にて清次郎を見初め、ひと筋に憧れ、念慮通じて配偶のこと極まり、交婚の日を指折りて樂しみ、待ち暮せし甲斐もなく、かかる仕儀に及びたるも、畢竟父丹平の淫惡より起りたる事、此の程おかんが爰にきたるより、初めてそれと覺り、あるに





もあられず晝夜泣き伏し、食事も絶えて進まず、女の淺智一圖に逼つて覺悟をきはめ、父へ怨みの數數を書き遺し、遂に自害して相果てけるぞ不便なれ。丹平物音に驚き、納戸に驅け入りて此の體を見るより大きに號哭し、悲歎の涙堰きあへねど、はやことされて如何ともすべきやうなく、書き遺したる一書を開き見て、さこそとおせちが心中を想像し、かかる業惡も流石は恩愛にふし沈み、おのれ娘が念ばらし、我が鬱憤も倶に散ずべき方法ぞあらんと其の折を覗ひ居たるに、又藤潟には、淸次郎おりつが婚姻も故障なくとゝのひ家内さゞめき渡り、家門知音よりの禮物數々、門前に市をなせり。然るに島貫丹平不敵にも一樽を携へ忘非方へ入り來るに、源太兵衞は元より柔和悉愼のをのこなれば、さあらぬ體に挨拶し、曾て其の事は口外へ出さず。他事なく是れをもてなしければ、丹平態と面伏せなる體にて申しけるは、「是れまで舊友の好意を忘れ、心得違ひの事ども、いかゞ足下の御聞きに入りし事あらんも知れず、我今更後悔臍を噬むにいたれば、何事も許容あつて、以前に變らず懇心願ふ處なり。我に於て隔意なき心底なれば、かくの如く一樽を携へ御悦びに參りたり。淸次郎殿には先達て面會せしかど、未だ息女おりつ殿には對面せず、何卒御近付きになり、祝賀も申し述べたし。」と言ふに、源太兵衞聞きて「如何にも足下先非を悔いて別心なき體、聊か此方にも違變なし。」と、頓て淸次郎おりつをも呼び出し、丹平に挨拶させ、酒飯の饗應を指圖するに、其の時丹平云ふやう、「斯樣の時

節に何がなと存じ、わが心をこめたる一樽、御開き下さるべし。さりながら酒肴に我望みあり、調理し給はんや。いかに。」と云ふ。清次郎進み出でて、「御毒忌みにてもありや、御所望の品承らん。」と云ふに、丹平一樽のかゞみを打抜き、思ひもよらず娘おせちが首を轉がし出し「方々見られよ。われ神魂を碎き、求め得たる此の酒に、望む肴と云ふは、御邊等が首なり。」と言ふ聲ともに拔き放し、清次郎が眞向より一刀に切りさげ、返す刀におりつが横腹、掬ひ切りに薙ぎ倒せば、源太兵衛怒つて、「己人非人言分は此方よりこそあれ、穩便の沙汰を以て、一命を助け置きつるに、かへつて恩を仇にて報ずる振舞、えこそ許さじ。」と切つてかゝるを、丹平得たりと打ち合はせたるが、相手は老人、此方は豫て覺えある手の内、何かは以てたまるべき。源太兵衛散々に切り付けられ、無念と焦れども其の甲斐も無く、息絶えければ、丹平今は本懐を達したりと、止めの刀を刺す處に、家内の者共、めい〳〵得物を打揮り、丹平を取りこみ、許さじものと犇きたれど、早業練磨に、各手を負ひ、終に四散し、重ねて出合ふ者もあらざれば、島貫悠然と庭に下りたち、立ち歸らんとするに、折しも黄昏近く、木立の小暗き陰より、かの源太兵衛が手飼ひの犬走り來つて、丹平に飛びかゝるを、身をかはし拂ひ退くれば、馳せちがつて左の膝口に噛ひ付き、打てども突けども離ればこそ。島貫怒つて心急くまゝ、かの犬の首筋より切り屠りたるに、軀は地に倒れ頭喰ひ入りたるまゝ、離れざりければ、大膽不敵の

丹平、臆する色なく其の儘いづちへか逃げ去りける、哀むべし。此の人々如何なる前世の業因にや、不期にして時も違へず、枉逆の爲に弑せられたる、無名の死こそ是非なけれ。さるにても、此の丹平が暴虐に事變り、畜類すら、その恩を知りて恩に報ゆる事例少なからず。先に源太兵衛參宮の途中にして、一命を助けし犬の今危急に臨んで、其の身を顧みず、終に切り斃され、頭に念慮留まり、島貫が膝口に喰ひ入りたるまゝ離れず。時來つて、故源太兵衛が實子源三郎を導き、養父の仇を討たせしこと、眞に古今未曾有の珍事なりと、後にぞ思ひ合はされける。

風聲夜話　翁丸物語上編　終

風俗夜話 翁丸物語下編

第三章

扨も蛸地村の島貫丹平は、己が淫惡をも顧みず、娘おせちが愛情に堪へかね、首を刎ねて藤潟に持参し、終に忘井親子を殺害し、一時の怨みは散ずると雖も、彼の方に手飼ひの犬が報仇の念に苦しめられ、頭のみ左の足に留まり、痛楚頻りなれども如何ともすべき樣なく、されども驍勇狼戾の島貫、杖をひきておかんを誘引し、國をたち退き美作の浦松と云へるに、知邊を求めて、此處に居住し作しけるうち、丹平は次第に行歩心に任せず、元より貯へも無き身の困窮に迫り、不良の事のみ業となして、漸く露命を繋ぎ打過ぎける。まことや貪慾無慙の者は窮して惡種を蒔き、死花を生じ、流轉永劫の間、呵責の盛り久しきを招くとかや。此の兩人が貧困を見かねて、近鄰の者世話しけるは、さる方に妾腹の倅當歲なるが、養育金を差添へ、何方へも遣はしたき由、聞くと等しくおかん其の金子に眼眩み、幸ひの事なり、妾方に養ひ子とせばやと、最早四十歲に及び、乳は出ざれども、此の間此處へ來らざる以前に半產したりと僞言を設け、終に金三兩を添へて、其の倅を貰ひ受けたるが、もとより

當座に金子は殘らず遣ひ捨て、養ふべき手便もなく、乳も無ければ小兒は次第に瘦せ衰へ、驚風の蟲おこり、終に空しくなりけるぞ不便なる。されども此の兩人は事ともせず、其の後また人の世話するありて、是れも當歳の子を貰ひ得たるが、養育の料のみを貪り、其の子は生きながら牀の下に埋め殺し、斯くする事三人に及びけるにぞ、頃しも文月精靈會にあたり、近邊には魂迎ふる松明を照らし、燈籠を揭げ、讀經の聲など聞えて心耳を淸し、秋風夜草を動かし、月の露庭に煌めき、蕭條寂々たるに、丹平夫婦は、何の設けもなく、夜の更くるまで端居にありて、まどろみたるが、何處ともなく小兒の泣く聲頻りに聞え、目を覺し覗へば、己が坐したる牀の下にてぞありける。兩人大きに恐怖し、必定さきに殺害せられし小兒どもの浮むこと能はず、此の怪をなすならんと、俄に身の毛立ちて恐ろしく、流石の大膽も、身體寒戰して寐もやらず、夜明くるを遲しと待ちたりける。是れよりして每夜斯くの如くなる故、兩人申し合はせ、家財調度をとり片附け、私かに此處を出奔しけるが、斯かる怪異のあれば此の空家に住む人無く、次第に壁落ち軒崩れて、悲草牀の上に生ひ出で、蔦蔓柱に纏ひ、徒らに荒れ果てたり。近鄰の者ども打寄り、おかん夫婦が小兒どもを殺害せし事は知らず、唯病死せしとのみ心得をれども、この怪異を見聞いて、如何さまにも其の餘念ならんと、急に石をもて地藏を刻ませ、此處に安置し香花を手向け供養しけるが、それよりして子の泣き聲もやみけるとぞ。さる程

に丹平夫婦は、浦松をたち退き、此處より僅かに五里を隔てて瀬の上山の麓に、人の住み荒らせし家居のいぶせきに、假住居して暮しけるが、斯かる暴虐の先兆にも懲りず、いよ〳〵道ならぬ事のみを爲しけるに、或日旅僧一人丹平が弊宅に訪れ、一夜の宿を乞ふに、おかん快く肯ひ、されど幽僻の寒地なれば、食事心に任せずと、麁飯を出し是れをもてなし、頓て奥の一間に破屏風ひき立てて、こゝに臥さしめたるが、夜の更くるを待ちて、此の旅僧を殺し、路用錢を奪ひ取らんと、おかん不敵にも山刀をひつさげ、覗ひ寄りて旅僧の胸元を一刀突くに、不思議や切先かつきと折れて飛び散りけるにぞ、猶振り上げて切るに、白刃悉く折れ散りて、其の甲斐なければ惘然と是れを見るに、旅僧忽ち嚇と眼を見開き、おかんをはたと睨む。眼光射るが如く、身體すくみて思はず後居に伏し倒れたるに、かの僧が懐より、三人の嬰兒這ひ出て、おかんに取付き肉を食らひ血を啜る。其の苦痛堪へ難く、是れを打てども拂へども退かず。聲をあげて泣き叫べども誰あつて助くる者も來らず。斯くする程に一人の小兒、おかんが咽の下に食ひ付きたるが、終に是れが爲に手足を藻搔き、七顚八倒して、苦しみ死しけるぞ心地よき。偏に是れ枉逆の素意を遂げんとするは、仰いで弓を射るが如く、女のあるまじき斯かる業惡は、天魔障礙の業なるをや。かの淺草寺の一つ家と唄ひし、古も斯くやと空恐ろしく、まことに積惡に報ずるの例恐るべきの怪なりける。此の時丹平は房間にありて熟睡し、何事も知

らざりしが、夢中に小兒來つて、おかんが腦を食み殺しけると見て、目覺めたるが、與におかんの叫ぶ聲聞ゆるに驚き、這ひ行きて見るに、夜もはや明け方近く、寄宿せし旅僧と見えしは石地藏の破蒲團打被りたるにて、その側に、おかんが身體朱になりてこときれたり。丹平夢に符合せしを怪しみ、眼前かかる靈異に、暴逆なるを顧みて、大きに愁傷し、天吏の默報を空恐ろしく思へども今更如何ともすべきやうなく、斯くては此處にもとゞまり難しと、其の儘急に用意し、是れを見捨て、痛みなやむ足を引きずり、乞食の如く潦倒の身の艱難を忍びつゝ、西國さしてぞ出で立ちける。此の時浦松の者共、石地藏の見えざるに驚き、此處彼處尋ね歩き、こゝにあることを聞きて、おかんが變死を怪しみ、扨こそ小兒どもの爲に、横逆の行跡ありつるか。それ故にこそ、斯かる非業の死を遂げたるならん。何者の手にかゝりしかは知らねども、目前地藏此處に來るは、殃を導き現罰を施し給ふに相違あらじ。誠に佛力妙用の不思議なりと、たゞちに大勢打ちかゝりて、此の地藏を浦松に持ち歸り、もとに復して勸請しける。今も猶此の影跡ありとかや。

第四章

扨亦藤潟の忠井が總領源三郎と云へるは、性質剛強にして、若年の頃身持放埒の上、家業に怠り、

終に國遠し、處々漂泊して潦倒の身となり、露命をつなぐべき術盡きて、同國岩徑山の奥羽黒山の配下に屬し、山伏となりて、名を觀乘と改め、風雲の思ひに各國を周遊し、普く神社佛閣に法施し奉らんと思ひ立ち出でけるが、先づ都の地を順拜し、それより中國を經て、豐後の國に到り、宇佐八幡より彦山に行く道すがら、早川の松が崎と云へるに近き、山の岨道にさし懸りたるに、杉の葉を集め結ひて小祠の如く作りたるを、傍の小高き岩の上に据ゑ置き、其の中に幣束數多勸請し、赤飯神酒などを供へ、賽錢夥しく紙に捻り、積み重ねあるを、かの觀乘と道連の旅人ども、怪しげに透し見て「こは何の設けにや」と問ふ。觀乘答へて「是れこそは疫病の神を送り出せしなり。幸ひなるかな我修驗の役なれば、此の散物ををさめて、酒肴の料に供ふべし」とおのれが懷へ入れんとするを、旅人止めて云ふ「如何樣かかる事をなして、供物を供へ疫神を慰め、村鄕を送り出す事聞き及べり。散錢は則ち疫鬼の路用に投じて、他國に行かしめんが爲なれば、これを貪り取る者、必ず疫鬼の爲に惱まさるゝとあれば、足下猥りに奪ふ事あるべからず、後の悔いを引き出すべし」と云ふ。觀乘索笑して「そは餘人の事なり。我業として何ぞ疫鬼を恐れんや、既に此の症に犯され苦しむ者をば攻め癒すの法を修す。彼等が爲の卽敵なり。あへて仇する事あるべからず。さりながら路錢は少々殘し置くべし」とて、漸く十二銅一包を差置き、殘らず奪ひ取りて貫差に繫ぎ、凡そ八百文もあるべし、思はざる

徳つきたるこそ可笑しけれと、打笑ひつゝ、彼の者共と倶に、程なく松が崎に到り、こゝに怪しげなる酒店に入りて、各休息の序に、觀乘が奪ひとりし鳥目を取出し、「さあらば是れにて酒肴を調へ、方々に振舞はん。」と云ふに、旅人共驚懼し、「いやとよ御身の鳥目にて調へたらん物は喰らふまじ。」と疫神の祟りを恐れて辭退しけるにぞ、觀乘可笑しく、「さらばわれ獨りのみ賞翫すべし。」と酒店の主に指揮して、酒肴數々出させ、飽くまでも喰らひ盡し、「あな心地よや。」と頭を叩きて、頓て其の料を與へ、此處を立ち出でけるが、行く程拾丁餘りも過ぎつると覺しき頃、後より農夫ども大勢、喚き叫んで馳せつけ、觀乘を中に取卷き、打てよ叩けよと犇きける。觀乘一圓不審はれず、「かかる狼藉は何故にや。」と云ふに、此の者共聞きも敢へず「おのれ修驗のいらざる事を仕出したり。當村より送り出せし疫神の散物を奪ひ取りたる由、今汝が休みし酒店の主、俄に惡寒發熱して、その事を口走れり。折角に送り出して晏然たるに、疫神又村中に立ち歸る事、偏に汝が路用錢を貪り取りたる故なれば、若し疫疾にて一命終る者の仇敵も同然たり。さるによつて汝を打殺し、疫神が怒りを宥め吾々が病難を免れんが爲なれば、速かに死につくべし。」と、面々得物を打振り／＼打つて懸る。觀乘ものの數とも思はず、錫杖を振り廻し、多勢を相手に爭ひけるにぞ、觀乘が道連の旅人ども、これを見て、されこそ、吾々が諫めを用ゐず、此の災害を引き出せりと、中に分け入り、雙方を押鎭め、農夫どもに

打向ひ、「畢竟修驗者の倏忽に似たれど、又その病を退くるも業なれば、方々誘引して前の酒店に到り主人が疫疾に加持祈禱させ、それにても本復せざる時は、その期に至つて如何樣にも糺明あるべし。今こゝに爭ふとて無益なれ。」と、頻りに諫められて人々納得し、「如何樣旅人が詞の如く、汝來つて疫神を追ひ退けば、一命は助けくれん。」と云ふ。觀乘聞きて、「散物を掠めし當人の我に祟りをなさずして、他の尫弱に付け入る疫鬼の何條事かあらん。いざ行きて追ひ拂ひ得さすべし。」と、此處より旅人に別れ、松が崎に歸り、以前の酒店に誘はれ入りて見るに、主人觀乘を見るより忽ち忿怒を現はし云ふ。「おのれ過刻我が輩が路川に儲けし散物を奪ひ取りたる不敵者、安穩に置くべきにあらねども、汝天性勇猛にして、內主の堅硬なるに、吾々取入るべき手便なければ、先づ此の主人が皮肉に分け入り、是れを初めとして暫く當村に留まるべきなり。さるによりて、惱む者皆此の修驗者を恨むべし。我が徒途り出されて、他所に赴かんとせしに、其の路錢を奪ひ取りたる、渠が強欲こそ敵なれ。」と大音に罵り終りて、あな苦しや堪へ難やと亂跳し伏し轉びぬ。觀乘聞きて、「こは云はれざる讒言かな。それ我が國は神國なり。疫鬼外道の何れにか居る處あらん。われ縮地の法を修し眞言祕密の九字をきりて汝が惡を攻擊すべし。」と、鈴打振り諸神を請じ、大音に經を讀み、丹誠を凝らし祈り懸けくしける程に、主人全身に玉の汗を流し、次第に身を縮め、尻込するを、觀乘幣を取つて打据ゑく、「早

く此處を立ち去るべし、さなくば蟇目にかけて一命を取らんか。如何にや如何に。」と責めければ、主人寒戰して云ふやう、「あな恐ろしや、梵天帝釋堅牢地神を首め八百萬神のこゝに影向し給ふ。許させ給へ許させ給へ。」と這ひ廻り、「如何にも唯今立ち去るべし。さりながら空腹なれば、一飯を與へよ。」と云ふ。觀乘聞きも敢へず、「おのれ空腹を償はば力を得て、なほ立ち去るまじ。村中を送り出さるゝ御、赤飯供物など供へたらんに、などて喰はざるや。如何に。」と云ふ。「そは鳥の嘴りよりて喰ひつくしたれば力なし。」觀乘云ふ。「おのれたはけたる事を云ふ者かな。其の鳥どもの打喰ふを、安閑と眺め居る腰拔神の取るに足らざる奴原かな。」と大きに哭笑し、「此の先汝等を捨てたる所まで、一飯を持たせ遣はすべし。早く行きて打喰ふべし。」と、頓て三字の符を認め、これを示すに、[illegible]廨乙（此の三字符に似て符にあらず、萋談採金に載す所の豫章の南舟渡の處にて疫鬼をさけんと、異人來りて津吏に教へたる文なり。時に乾道八年なり。）主人忽ち狼敗して、許せ／＼と立ち上りしが、其の儘倒れて生體無くぞ伏したりける。觀乘思ふ圖に當れりと、幣を納め件の符を指圖して門戶にはらせ、猶後淸めの內外淸淨六根淸淨の咒文を唱へ終りたる頃、主人依然としておき上りたるに、疫鬼立ち去りしと見えて全く本に復したる體なりければ、舉家悦び、觀乘に厚く禮謝し、奇特を感じて始終を委細に物語るに、主人是れまでは夢中にて何事も覺えざりしが、初めて斯かる始末を聞きて長嘆し、「誠に計らざる危急に一命を失はんとせしも、修驗者の丹誠に預り、病症快氣せしこそ有り難

けれ。」と、其の夜は觀乘を此處に留めて、樣々もてなしけるにぞ、此の事遠近に流布して普く難治の病を得たる者追々觀乘を招じて加持祈禱を願ひける故、思はず此處に四五日も滯留しける内、主人が或夜の夢に、一疋の犬枕上に立ち、默々と蹲踞し居たりける故、夢中に是れを見れば、此の犬體ばかりにして首なし。訝しくも何とやら心そゞろになり、追ひ退くると見て目覺めたるが、頻りに心ならず。明くる朝を待ちておき出で、觀乘に向つて此の夢の趣を語り、「よく〳〵勘考するに、さいつ頃我等が方に手飼ひの犬、當村の者共に從ひ伊勢參宮したるが、途中にして別れ、何地へ行きしや知れずと、其の者どもばかり歸國せしが、犬は今もつて歸らず。夜前夢中に見しに毛色恰好少しも違はず、誠に不思議の夢にして、如何なる事や、何にもあれ頭なきものを見たるか、今に於て心にかゝり、如何さまにも凶事の出で來らん瑞にこそと、臆念止みがたく侍るなれば、何卒此の惡夢の祓し給はらんや。」と云ふ。觀乘聞きて、「夢は思夢靈夢の外、思ひもよらざる事を見るとぞ。五臟の患ひとか申すなれば、さして心に懸け給ふ事もあるまじきなり。されど昔明雲座主の相者に會ひて、われ兵革の難あるやと尋ね給ひしが如く、相人此の詞を以て如何にも其の相ありと云ひしは、誠に傷害の恐れあるまじき座主の身にて、かりにも其の危みあるは、則ち其の兆なりと云へりし如く、さしたる事も無きに、御身心に懸け給ふは、直に凶事の先表なり。かばかりの事祓するに及ばず。我此の惡夢を買ひ





取るべし。」と、鳥目僅かに二三錢を投げ出し、「いざやこれにて賣り給へ。」と事も無げにぞ申しける。主人悦びて、「如何さま御身に賣り渡すべし。」と手を打つて打笑ひつゝ、「誠に御身は豪傑なり。諸々の惡邪降伏なすを業とする修驗の身は斯くありたきものなり。我柔弱にして何とやら心に懸りしも、御身に賣りて當に天氣快晴の思ひをなせり。」と感賞して、愈懇にもてなし差置きけるが、不思議なるかな、其の夜よりして、觀乘が夢に、件の頭無き犬の枕上に來る事毎夜なり。觀乘心中に奇怪として、敢て人にも語らず過ぎけるが、一日此の鄰邑の曾平太と云へる者の、異疾ありと人をして祈禱を頼み越しける故、觀乘快く肯ひ、頓てかの方に至り見るに、如何にも衰廢せし弊室の莚屏風立て寄せたる内に、主人と覺しく年の頃は五十に近く、顏色淺しく骨だちて、蓬髮なれども衰へし體も見えず。「病症は如何にや。」と云ふに、主人曾兵太の云ふ。「我先年一箇の犬を打殺さんとせし時、かの犬膝に食ひつきたるが、打てども突けども放さず、詮方なく其の首筋より切り屠りたるが、念慮頭に留まりけるにや、今以て斯くの如くなり。」と左の足を投げ出し見するに、果して犬の首膝口に喰ひ入りたるまゝ放れず。曾平太重ねて、「斯樣に祟りをなし、餘毒今に殘りて疼痛に堪へず。されど我鬱滯せずと雖も、行歩心に任せず、偏に積寃の致す所なるべし。足下よろしく此の災害を除き給はるべし。」と云ふ。觀乘これを見聞きて大きに怪しみ、此の程夢中に首無き犬を毎夜見たるが、今又此處に犬の

首ばかり見る事の不思議さよと、心中に思ひながら、畜類本願觀一圖にして、志の分れざるもの故に、かかる怨根を引く事例少なからず。速かに降伏すべしと、頓て幣立て高らかに讀經し、責めかけ責めかけ祈りければ、忽ち彼の犬の首、曾平太が膝口を放れ轉び落ちけるにぞ、側にありつる者も、一同に感歎し、誠に觀乘が信念懇祈の驗なりと、曾平太隨喜の涙を流し、敬恭拜禮して悅びけるに、觀乘いふ「我幸ひに此の奇禍を遁くると雖も、猶餘念を宥め鎮めんが爲に、此の犬の首をして祭るべし。」と、それより此處に小祠を營み、犬首明神と勸請せり。是れ今普く世に知る處の、西國犬首の濫觴にして、今も腰の痛楚を愁ふる者、凡て犬首の祟りなりと言ひ習はせしも、此の曾平太より起りたる事なるべし。其の夜觀乘旅宿にて、又夢中に、此の程見たる首無き犬の今宵は首體具足し、例の如く枕下に來り一聲吠ゆると見えけるが、忽ち人のもの云ふ如く申しけるは「我は先年伊勢街道にて、御身の養父源太兵衞殿の厚志に預り、一命を助かり、其の上藤潟に養ひ飼はれて、其の高恩報ずるに所なし。然るに今日御身の祈禱し給ひし曾平太と云へるは、勢州蛸地村の浪人島貫丹平と云ひし者にて、源太兵衞殿の妻女と密通し、事顯はれて意恨を含み、却つて源太兵衞殿並に、御身の妹おりつ殿夫婦とも殺害に及び、國遠して今改名し、此の邑中に居住せり。われ其の砌報恩の思ひを起し、彼が膝節に喰ひつき、一命を斷たれても猶念慮頭に留まり、今まで放れず苦痛をさせしも、聊か犬馬の忠

に似たり。此の事告げ參らせんと、此の程より夢中に見え參らせしが、首無くしてもの云ふこと能はず。我が業通の念を以て導き侍りしに、御身の祈念に會ひ、已むことを得ず膝を放れしも幸ひなるかな。年來憶念の一事を、今告げ參らする事の嬉しけれ。殊更我が怨魂を宥めて、犬首明神と勸請せられし、芳恩謝するに詞なし。今より御身の守護となり、行末を祈り、猶又諸人の宿願を聞いて、應驗を得せしむべし。返す〳〵も早く仇敵曾平太を討つて亡靈を慰め給ふべし。」と、言ふかと思へば夢さめて、觀乘奇異の思ひをなし、翌朝酒店の主人に、此の夢相の始末を語るに、主人聞いて、「さては我等方に飼ひ置きたる犬の參宮せしが、途中にして足下の養父に助けられし、其の恩による畜獸の所行感するに餘りあり。猶我が枕上に現はれしは古の恩に謝するの爲なるべし。幸ひに足下我が夢を買ひ取りしも、偏に皆かれが導く所ならん。」と語り終つて、觀乘云ふやう。「斯かる事を聞く上は、ゆるかせにすべきにあらず。養父及び妹夫婦の者が仇敵、曾平太を討ち斃し、泉下の供養に供へんものを。」と、既に其の用意をなしにける。

第五章

さる程に曾平太は、はからざる觀乘が懇祈によつて、畜獸の怨念を免れ、大きに悅び、やがて醫師

に託して補ひの膏薬を打貰ひ、今宵こそ從來の鬱氣を散じ安閑の枕に伏して、快く明かさばやと、一人打臥したるに、觀乘は急ぎ取る物もとり敢へず、兩刀を横へ、曾平太が住家に馳せ來り、簀戸蹴破り躍り入りければ、この物音に驚きおき上る處をとつて押へ、「おのれ先年、勢州藤潟に於て、養父忘井源太兵衞竝に我が妹おりつ夫婦を殺害し、立ち退きたる業惡の始末われよく知れり。斯く言ふは故源太兵衞が總領源三郎と云ふ者なり。幼年の時國遠したれば、其方は見知るまじ。以前は蛸地村の浪人島貫丹平、我が養母と密通し、却つて穩便に事をなせしに、其の恩を討ちたる人非人、見よ畜類すら、一命に換へて汝を惱ます報恩の所爲見るにつけ、我人間と生まれて、何ぞ倶不戴天の仇をゆるかせにすべきや。覺悟せよ。」と拔打に切りつくる。曾平太もしれ者なれば、肩先を切られながら、刎ね返してあたりに有りつる一刀を引き拔き、渡り合ひ「こは珍らしや、修驗者の如何してか、左程微細を知りたる上は包むに及ばず。汝が演述の通り、意恨ある源太兵衞を討ち殺せし、われこそは島貫丹平。さるにても不思議の對面、噂に聞き及びし源三郎とは、扨は汝が事なるか、けなげにも敵呼ばはり片はら痛し、返討にして呉れん。」と心は剛に逸ると雖も、進退任せず。豫て覺えある早業も、初めの痛手に手元たゆみて、受太刀しどろになりけるにぞ、觀乘いらつて、たゝみかけ／＼終に切り倒し、今こそ報讎の思ひたれりと、首打落して西の方に向ひ合掌し、亡き人々に手向廻向し終りて悠々

と立ち出で當村の名主方へ訪ね行き、此の始末を具に語り、「如何體にも公廨に訴訟し、示令を受けて取計らひ給ふべし。」と、少しも悪びれず申しければ、名主これを聞いて奥に請じ、懇にもてなして、やがて此處の目代に、斯くと訴へければ、早速召しいだされて委細御糺しの上、養父の敵打取りたるは孝心なれども、さきに其の事をも訴へずして、猥りに刃傷に及びし段は、上を恐れざるの罪科輕からずと、嚴しくこれを沙汰し給ひ、此の事領主に披露し勢州へも聞き合はせ相濟むまでは、押込め置くべしとのことなりける。領主は大内多々良義隆の流裔大内内記義益といへる人なり。此の松が崎に居城あり。義隆は家臣陶晴賢が爲に害せられ、晴賢又郡家に討たれし時、此の内記義益が先祖、郡家の扶助を得て、代々當國松が崎に居住せり。今の義益名將の器備はり、仁惠を垂れて下を撫育しける故、此の度觀乘が始末を殊に感賞あり、目代に仰せていたはり差置くべしとの事なりければ、目代細谷彌三郎が構へに明長屋をしつらひ、牢居の如く格子を打ちつけたる中に、觀乘を押込め、晝夜番士を添へ置き、懇にいたはりけるが、かれ是れ取調べの内既に五十日餘りも過ぎつる頃、或日觀乘番士に向ひて申しけるは、「遠からざるうち此處に火災あるべし。御心付け然るべし。」と申しければ、番士ども聞いて敢て信ぜず。哢言し居たりけるが、中にも心ある者は、彼は修驗者なり。物の吉凶を卜する事も知覺せし者なれば、左樣の先兆思ひ寄りしこともあらんも知れずと、内々沙汰して囁き合ひける

が、誰云ふと無く目代の耳に入り、如何樣にも何とやら心に懸る徵兆こそあれと、豫て其の用意せられけるに、果して三日過ぎたる曉の頃、廐より出火し、風烈しく、あはや大事にも及ばんと思ふ處に、目代指揮して前日に用水の手當をなし置きける故、忽ちこれを防ぎ消して、外は事無く鎭まりければ、目代此の事を領主に披露し、觀乘が先見の違はざるを感激し、禁獄を許し、頓て勢州の聞き合せも符合しければ、何の故障も無く免許せられ、その上數々の褒品をたまはり、觀乘面目身に餘りて本國に立ち歸り、再び忘井の家名を引起し、次第に富貴繁昌し、家門永久の瑞とぞなりにける。先に火災の兆ある事を覺りたるは、觀乘潛居の中退屈し、夜も寐られぬまゝに、朝夕の食事を少しづゝ除け置き、夜中鼠共に與へて樂しみけるが、かくする事每夜にして、後には晝も鼠ども夥しく出て、觀乘が手飼ひの如く膝に登り、懷に入りなどして手馴れければ、徒然の餘り興ある事に覺えて、これを友とし日數を送りけるうち、ある日如何しけん鼠ども一向に來らず。觀乘殘し置きたる食事を取り出し、此處彼處呼べども、敢て音もせず。其の口よりして夜中も斯くの如くなりけるにぞ、觀乘心中に思ふ樣、鼠はよく火災を知りて、其のさきに逃げうせるものなりと、諺に云へるが、左樣の異變にてもあるやと心付きて、さてこそ番士に斯くと告げたるなり。極めてその如く、觀乘が一言より、此の奇禍を防ぎたりと目代の褒稱を得たるも、これ皆至孝の餘慶なるをや。猶畜獸の恩を返せし言說、

まことに奇異なりと、語り傳へて、今西國に犬首明神と其の影響ぞ殘りける。

風聲夜話　翁丸物語下編　終

串戲
教諭

六あみだ詣

串戯教諭 六あみだ詣序

夫れ惟みれば阿彌陀佛、超世の悲願は、偏に末法の濟度にあり。故に法末時いたり、經道滅盡の終りにも、殘り給ふは唯此の本願にして、衆生を度し給ふこと量りなしとや。此の佛恩に報い奉らんとて、江都に六箇所の靈地をひらき、あみだ佛を安んじ、これを巡拜するを六阿彌陀詣といふ。予一とせ朋友にいさなはれて、此の靈場六番をうちめぐりたるに、往來心々にはなしもてゆく詣人のさま、かれと異に此れと同じからずして、聞くに下情の限りを盡したれば、それに思ひよりつゝ、此の卷に人のよしなし事をかいつけ、聊か教諭のことばを滑稽にあてて、淺智童蒙をさとし安からしめんと、平生卑賤の言語應答を、ありの儘にあらはす事しかり。

文化辛のとし末の初春日

東武逸民　十返舎一九題

武州六阿彌陀

○第一番　豊島村　三縁山西福寺
○第二番　下沼田村　甘露山應味寺
○第三番　西ヶ原村　佛寶山無量寺
○第四番　田畑村　寶珠山與樂寺
○第五番　下谷　延命山長福寺
○第六番　龜井戸　西歸山常光寺

是より
二ばんまで　十五丁
三ばんまで　二十五丁
四ばんまで　三十丁
五ばんまで　二十五丁
六ばんまで　二里
總道のり合はせ
四里二十三丁

但し参詣の人は五番より大かた逆に札打つことあり

巻中標目

欲頬嚊の子煩惱　不器量娘の男選び　扶持かた棒の荷役害
やすきをひのいくぢなし　田舎ものの生巧者　下手醫者の手前勝手
女郎買ひのふられ自慢　似た山の殼太平

串戯教諭 六あみだ詣上編

東都　十返舍一九戲述

㊀彼岸功德經に曰く、二八月七日の開無數萬億のほさつ、法を說きて衆生樂を與へ給ふなりと、其の外諸經にも見えて、春秋二度の彼岸には、人間の罪障消滅の緣深く、佛に法施し、僧に供養するの時なりとて、六阿彌陀詣といふこと、いつの頃にや始まりけん、六箇所の靈地に貴きも賤しきも、あみだの光も地獄のさたも、錢次第とてはやみちに、臍くりをとりこみ、巾著のひもながき麗かなるに打ちむれつゝ、一乘無外の色の世の中、とぢぶたとつれだつ破鍋あれば、餠をつく提燈は、ねれたる祖母の腰つきを思ひやり、佛性常住の吸筒をかたげ、一色一香のにぎりめしをふところにして、ぬらりくらりの牛は牛づれ、馬は馬づれ、話しつれてゆく中にも、處はぐつと場末の町、平長家の大屋どのとおぼしく、六十あまりの禿天窗、ひかる棧留の布子の上に、はんくわいの火事羽織笹緣のほつれかゝりたるをひつかけ、さきにたちゆく跡から、ひとつ長家の佐次兵衛後家をはじめとして、井戸ばたのおしやべり仲間、てんでに夜食のかたまりに、いつてうらを引ツはらせ、先づ龜井戸の常光寺

よりはじめて、はけついでに天滿宮をしり目に拜みて通りぬけ、妙見の堤傳ひを、向島さしてゆく道すがら、大屋「ナント今日はいい天氣だの、コレ兵太のばあさん内にゐて嫁をいぢつてるよりかァ、斯うして出かけた處がましであらう。」　兵太のばゞ「ホンニさうだとも、又しても大屋さんの、嫁をいぢるいぢると人聞きのわりい事を云ひなさるが、ほんに今日の日天樣かけて、わたしは大體氣がね苦勞をしてゐるこつちやァござりやせん。おたこさん聞きなさい、アノ通りの引きずりだから、朝もわたしが早くおきて、茶をわかしたり、子供のしめしを洗つたりして、サァおちやん、もうおきぬかといふと、アイまだ、三太郎めが乳を離しませぬと、よく寐てゐる子僧奴を、むりに泣かして、出もしねえ乳をつきつけをつて、子僧奴をねかすかと思やァ、うぬが先へ高鼾さ、ホンニ私やァ呆れもしやせん。それにァノ甚六のひやうたくれ殿が、鼻毛をよまれをつて、閑がなすきがな、二人よるとこそこそ話をしやァがるが、氣障だといつちやァござりやせん。昨日も聞きなさい、お鄰から塵取を貸して呉れろと云つてよこしなすつたら、アノおちやんめが、ハイ塵取は、慥か二階のつゞらに有つたと、ばた〳〵二階の梯子を上りをつたが、サァはてしがつかねえと思ひなさい。さうすると甚六めが、どうだおちやん、ナニ塵取が見えねえ、ハテ無い筈はねえと、あとからのさ〳〵、二階へ上る其ののろさ。ホンニ私やァくやしくてなりやせん、ナニどこの國にか、塵取を二階のつゞらに入れて置くもの

か、おつきに庭の隅に有るものを、わたしが出してかしてやつたも知らずに、二人が二階で、何をしてゐるやらと思つたら、有らう事か晝日中、ホンニノ\呆れてものが云はれやせん。それに聞きなさい、また出來やまわな、倅どもばつかり澤山に拵へるは好いが、ほんの産みばなしで、皆私に世話をおつかけて、もうノ\ノ\ノ\嫌でノ\なりやせんよ。」おたこ「ホンニおまへさんのとこの嫁御は、女だけまだしも、わつちがとこの宿六殿には困りはてやす。大屋さんの前だが、恥をいはにやァ理が聞えやせんが、早跡月から、店賃もあげねえ癖に、くらひ醉つては夜夜中、路次の戸の割れるやうに、叩きたてて、ちつと開けやうが遅いと、どなり散らかしやすが、ホンニわつちは斯ういふ氣だから、大屋さんの手前、お長屋の衆へもお氣の毒でなりやせん。それに此の長吉をなんぼ手めへの子で無いとつて、尻からこき出したやうに口ぎたなく責めせつてうするし、わつちが身にもなつて御らうじませ、もうノ\腹がたつてノ\なりやせん。それでどうぞ、はやく此の子を奉公にでも出したうござりやす。モシ大屋さん、どうぞいい處があるならお頼み申しやす。」大屋「オ、長吉か、幸ひのことだ、わしが心安くする處で、商賣は骨折り商賣だが、店の若い者も一人二人、身上が至つて悪い、その代り夫婦ながら、いぢくね悪くむつかしいの親玉と來てゐるから、そこへやらつしやい、あのやうな悪いうちもまた無いものだ。」おたこ「オヤノ\大屋さん飛んだ事を、そんな内へやつてつまるもんでござりや

すか。」　大屋「イヤ斯ういつちやァ悪いが、こなさんの手で育てたものを、何處へやつても居る事ぢやアないから、マア初めは悪い處へやつて、奉公といふものは、斯んなもんだと、見知らせて置くがよい。ハテこなさんの心では、大方どこぞよい大店向へ出して、末は番頭にでもしようと思つてるだらうが、さう味くいくものか、ソリヤァ大わらひの南風、頭痛鉢卷が聞いて呆れる。ハテ店向といふものは、けつく子供のうちは、三世相の荒神さま見るやうな天窗してゐても構はず、せいさい腹太餅かこはだの鮓で、蟲養ひしてゐる内はよいが、ちつとかの唐辛子のさきの方が、赤くなりかゝつて來ると、宿下りに仕著せの松坂縞を著ながら、紙入のけつかうさ、ろくに未だ煙草ものまねえ癖に、煙管煙草入の物好き、ばら緒の雪踏が青漆になり、後にくすべの裏付となると、サァむつかしい。今まであは雪かいくよ餅で、中食をすましたやつが、蒲燒としやれるやうになるは忽ち、まだしもそのうちは高が知れてはあれど、もう三ばんめ位と出世して見なせえ、こゝらがしくじる眞最中、田舎の得意を經節にして、芝居から吉原と出かけ、一度が二度、二度が三度となるにつけて、帳尻が無茶苦茶として來やす。ところでかの、羅漢樣の組頭見るやうに、錢箱のそばにへばりついて、不斷兩方の眼を耳のさきにぶらさげてゐる、隱居番頭といふ爺樣が、ハヽァこいつあやしひの木三本だわえと、かぎつけた鼻の先がひこつくを見こんで、三助まつたりをきめる奴が有りやす。そこでとう／＼冷飯草

履とはき出された處が、もう歸參は叶ひやせぬ。コリヤ叶はぬ筈だ、なぜと云ひなせえ、それが實體に辛抱して勤めおほせると、サア親方も仕方がねえ、店でも出してやるか、相應に元手の百や二百もあてがはねばなりませぬ。ハテ大概用に立つだけは立たせて、これまで使つたから、もうしくじつたを幸ひ、一文いらずに追ひ出すといふものだによつて、こんなもつけ重寶はないものを。ナニ歸參をさせるものか、大勢手代を使ふうちで、其の手代が殘らず實體に勤めおほせて見なせえ、親方の身代後にはみな、手代にひつたくられてしまふ樣なもの、半途でしくじる奴があるのでもつたものだ。サアそのしくじつた奴が何になる、店むきで大びらに錢金を使つた癖が失せぬから、小商ひは出來ず、肩に棒おく事は猶なるめえし、よいものは著たがり、味いものは喰ひたがり、ほんのあら打の手傳ひのふんどしが外れたと同じ事で、ちうにぶらりと、あとへもさきへも、いかねえ代物となるは知れたこと。それだから、兎角貧乏人の子供は貧乏な處へやるがよい。ハテ親方が貧乏なら、奉公人も錢を使ふ事がならず、人づかひが少ないによつて、味噌にも鹽にも使はれるから、中途でしくじつた所が骨折業も出來ようし、第一は貧乏な世帯を、くり廻す事を見習つてゐるものだから、小商ひしようが何をしようが、そこで算段がしよいといふものぢやアあるめえか。とかくこなさんの處の息子は、どこへ出しても辛抱してゐる氣づけへの無い代物だから、しくじるつもりで出すがよい。アノウ長吉、

エ、此の野郎奴は、ソレ青ばなが口へはひらァ、さつきからましくしと、團子ばかり喰つてけつかつて、おいらが云つた事は耳へはひらねえか、ソレ〳〵そこに水たまりがあらァ。エ、いくぢの無え野郎奴だ、ハ、、、、。

㊂多葉粉の煙眞直にたつ長閑さに、道草くふ馬の耳にも聞き所ある話に、此のひと連のうち、頬べたに痰瘤のぶらさがりたる親仁は、近邊の寺方へ出入する穴ほりなり。さすがおのれの商賣柄、その穴をうがちしはなしの尾に取付き、穴ほり「イヤもう大屋さん、なか〳〵實のある話だ、面白い〳〵。それについて、わしが姪に一人片付けたいがござりますが、どうも緣遠くて、今に相應な處もござりませぬが、何處ぞあなたの心當りはござりやすまいかな。」大屋「あるとも〳〵、きさまの姪御か、器量はどうだ。」穴ほり「その器量はちつとむづかしいが、併しまんざら打捨つた代物でもござりませぬ。たかで大あばたで、片小鬢から頬べたへかけて、ひつつりがある故、鼻が少し横つちよへ、ひん曲つてをるぶんの事でござります。」大屋「こいつはむつかしいの、併し器量は兎も角も、心いきで又一つ、おちをとることも有るもんだ。」穴ほり「ソノまた心意氣が、いつそ顏のやうに、いぢくねわるく根性のつつぱつた奴で、その代りには、縫針する事が大嫌ひ、唯錢づかひの荒いのと、亭主の横つ面をも、はり兼ねぬのが、とりえでも何でもござりませぬ。」大屋「ソリヤ緣遠いはずだ、誰がそんなものを、貰

ひてがあるもんだ。」穴ほり「イヤその代り、支度金はとりませぬ。先に金が澤山あつて、姑のない、結構人の處へやりたいと親どもが申しております。」大屋「途方も無え事をいふ人だ、大方その親達は、吳服店の店開きといふと、あつかましくも夜のうちから、戸を叩いて買ひに行くだらう。それを好い事だと思つてゐる貴樣も、四十七騎が腹を切つた時、穴掘を一人でうけ合へばよかつた、ハヽヽヽ」穴ほり「成程人の親といふものは、馬鹿なもので、其の娘をいつそ可愛がつて、あれは大事のひとり娘だから、何でもいふなりに育てたものだによつて、舅のない、氣樂で、氣の好い亭主を持たせたいと願つております。」大屋「それが大きな間違への八まん樣だ、ハテ大事の子なら猶の事、嚴しく育てれば好いものを、氣儘に育てたとは、ソリヤかはいのぢやねえ憎いのだ、成人してつぶしにもならねえ代物、どこに相手が有るものだ。それに舅のない、氣樂で結構人の處へやつたら、親や娘の心では十分であらうけれど、また貰ふ者の氣にもなつて見なせえ、そんな心意氣で、親もよこし娘も來るものを、貰つて何になるものだ。併しまだもその娘のとりえには、根性の惡いといふ處ばかりだ。とかく人の女房は、根性の惡いのが身上の爲になります、おのづと女房の澁い顏見ては喰ひ潰しもなく、ちよつと旦那のお羽織と、かりにくる人もない。何でもあそこの女房は、イヤ氣がさばけてゐるの、わかつてゐるの、通りものだなどと、人に譽めらるゝ女房をもつたが最後、身上に願以此功德平等利益

と、分散に近い〳〵。ハテ金を儲けるは亭主の役、延すのは女房の役、男といふものは吝くてもあたじけなくても世間を勤めるものだから、義理の附合ひのと、まんざらうつちやる様な金も使はにァならねえ事もあるものだ、女は何でも儉約をして、あすこの嚊衆はあたじけなすびだと、おのれがかぶつて、亭主を笑はせねえ様にしさへすれば、金は出來るに極まつたものだ。その吝くするといふは、根性がよくては出來ねえから、意地が惡くて、人に惡まるゝ様な女房でなければ、身上の爲にはならねえものよ。是れについて話があります。或質兩替の内のかみ樣、評判のしはん坊で、六月の天王祭に、内の子供には揃ひの浴衣もきせず、有合はせの單衣ですます算段、其の鄰の僅かな職人の息子、縮緬の襦袢三枚まで著て、肌を脱がせ、金絲銀絲にて雲龍の縫ひをさせたるを、ひけらかして遊び歩くを、兩替屋の亭主見て、内の女房に向ひ、アレ見やれ、僅か一日に、二匁か三匁とる職人の子でさへあの通り、こちの小僧にも、せめて新しい襦袢一枚でもよいから、著せやればよいのに、此の身上で鄰の親仁めにまけるが口惜しいといふと、上さまがにつこりと笑つていふには、ハテようござります。一年にたつた一度の天王樣、此方が負けてもようござります。その代り、いつでも冬のとりつきの寒さに、鄰の子はまだ、袷を著てゐる時分、こちの小僧は布子を著るし、暑くなつても鄰の子が綿入をきてゐるに、はや此方の子は單物を著るし、年中こちが勝ちどほしに勝ちてゐるものを、一度位

は、負けてやつても好うござりやすと、おつを云はれてさすがの亭主も、ハヽアと指をくはへて引込んだといふ話があるが、ナニト面白い處へ理窟をつけた。此の女房はさるもの、貴さまの姪御も、根性のわるいのは、直すにも及ばねえから、その錢使ひの荒いと、縫針のきらひな處を直してござれ、わしがよい處へ世話してやりませう。」

㊂霞ひく隅田の渡しの舟より上りて、眞崎の方へ行く道すがら、年の頃二十七八ばかりのお侍、供をも連れず唯一人、此の大屋連の一群と、後になり先になりて歩みたるが、煙草の火を無心いふ序に、大屋へ向ひて、侍「扨々先刻より貴公方の跡から、お話を承知致して參つたが、なか／＼貴公はよく物の理道の分つた者だ、面白いことでござつた。身ども主人は小身でござるが、幼少より召仕はるゝ事でござるから、奉公大切に暫くも閑暇なく、出精致して相勤むるが、今に於て五兩二人扶持の外、御加增も無く、立身出世を申し付けられぬは、如何致した事でござらうか、何とぞ生涯のうち、鑓の一筋も持たせて、歩行致したい願望でござるが、如何樣に致したら、立身致すでござらうか、近頃率爾ながら貴公の御判斷が承知致したいの」大屋「貴方方のお身の上の事、私どもが口から申すは憚りでござりますが、それはお前樣御奉公を大切にお勤めなさるから御出世がなり難い。」侍「イヤ此の男はとんだ事を云ふ、大切に勤めるから却つて立身が出來ないと云ふは合點が參らぬ。」大屋「さ

ればでござります。お前樣の大切にお勤めなさると云ふは、御奉公は二番め、第一番にはお身が大切だからお勵みなさると云ふもの、私が無くては叶ひませぬ。丁度親に孝行をして、何でも御褒美を貰はうとつて、孝行をする樣なもの、利欲の爲にすることは、影日向があつて、人の見出しにはあはぬ筈。お前樣が現在口へ出して、さう仰しやるからは、何でも立身出世しようと思召して、大切にお勤めなさると見えました。ソリヤ旦那樣の爲になさる御奉公ではねえ、お身の爲になさる御奉公、私のある證據には、無躾ながら御給金に比べては、お腰の物やお身のなりが立派過ぎやす。深切になさらぬお心から、外の事は兎も角も、金錢づくに懸つては、是非私欲になさる事があると見えます。其の御心では何として〳〵、御生涯の内槍を立てさせたいと思召すならお侍を止めて、道具屋におなりなされませ。」侍「ナニ馬鹿な事を、町人になつて槍が持たせらるゝものか。」大屋「ハテ道具屋におなりなさると、宿替へなどには、挾箱を持たせまするわ。」侍「ハヽヽヽ、お身、なか〳〵惡く洒落る男だわえ、左樣な戲氣た事言はずとも、そんならばどれから、その立身出世を致さうと思はずに、唯奉公大事と勤めればよいか。」大屋「イヤそれでも惡うござります。」侍「さて〳〵此の男は、どう言へばかう言ふと、皆目身どもには分らない、解せぬ〳〵。」大屋「ハテお前樣、立身出世しよう〳〵と思召してお勤めなさる故、表向の御奉公にばかり實が入り、陰の御奉公は自と疎略になるものを。そのお

心では出世を願はずにお勤めなさると、いよ〳〵影日向の出來るのは知れたこと、何でも立身しようしようと思ひ込んで、そして私の心をお持ちなさらぬ樣に、お勤めなさるがよい。兎角その立身と云ふものは、大體では出來ねえものと見えて、貴方のお屋敷にも、未だに立身出世せぬ者がござりませう。」侍「イヤ御身、よく身共が屋敷を知つて居る。未だに出世を致さぬ者とは、誰であらう、ハヽァ用役の犬子淵藤六左衛門のことか。」大屋「イヤ〳〵。」侍「但は佐渡山四茂九郎の事かな。」大屋「イエイエ、その十六文も、一山四文も存じませぬが、私の言ふのは、お屋敷の馬の事でござります。ハテ御家來も澤山にござりませうが、第一番の忠義ものと言ふは馬でござりませう。ソレ旦那樣の御出でと云ふと、夜が夜中でも引き出されてついど小言を云つた例はなし、御奉公を勤むるだけは影日向なくちやんと勤めて、其の癖御給金は一文も取らず、假にも私欲といふ事は微塵も無く、女郎買ひに行かねえから、翌日の勤めに怠りはなく、酒を呑まねえによつて、虚病を起したことも無く、偶々休息の時は、唯獨樂に太鼓を打つて遊ぶばかり。しかし大道で人の見る前もかまはず、シャア〳〵とひよぐるばかりは、失禮ながら、是れも諂はぬ正直者故、御奉公は一圖に勤めるものを。つひに是れまで馬が出世して、御家老になつたのイヤ御用人になつたのといふ噂も承りませぬから、馬でさへ立身といふものは出來難いもの、へらへいとに、御家來が御出世なさらう筈はござりやすまい。畢竟立身と云

ふものは、其の器量がなければ、見出しには預らぬものと思召せ、役に立たずが出世しようなら、一番かけに馬が出世せにやならぬ處、その身に能はぬ事をお望みなさるは、記念分け貰はうとつて、下女がやたらに空泣きすると同じ事、楠の左兵衛殿が、湊川では、眞實に泣いたらうが、三文にもならぬを見ては、兎角棊は勝たんとうつべからず、負けまじとうつがよいげな。お前樣も同じくは、立身出世しようと思召さず、お給金の五兩の減らぬ樣に、お勤めなさるがようござりませう。コリヤほんの盲目蛇におぢずとやらで、お前樣方に向つて私どもがいらざる事を、とんだ氣まぐれな親仁めだと、御免なせえ、ハ、、、、。」

㊃　程なく豐島の西福寺に到りけるに、此の門前に足の有る膝行、耳のある聾、手のなき乞食の藝無しども、一文やつて下さりませの外は、何もしやべる事を知らず、並び居たる中にも、至つて痩せがれたる色の青ざめたる男に、指ざして長吉の母親、ふたこ「モシ大屋さん、御覽じませ、あの男は、とつてくれ八と云うて、わつちらが元居た長屋で、評判のきほひでござりやした、平生負けるといふ事が嫌ひで、ホンに拔身の中へも飛び込み兼ねない氣性で、人にも立てられた者でござりましたが、瘡を煩つて、いけなくなつてから、とう／＼身上をしまひ、內儀樣とは別れ／＼になつて、宿無しに落ちてしまひやしたが、可愛さうな者でござりやすよ。」　大屋「ナニそれが可愛さうな者か、皆その身

の心がらと云ふものだ。本當のきほひなら、あんな者にやァならねえはずだ。人に負けるのが嫌ひだの、イヤ拔身の中にも飛び込む等とは、ソリャ無法者の身知らずと云ふものだ。兎角物に堪忍辛抱する者は、智力の強い人だによつて、これを大丈夫のきほひといふ。此の間長吉が見てゐた節用にあつたが、唐の韓信と云ふ者に、股をくゞらせた毛唐人の中にも、意地の悪い者は、屁をかがせた奴もあつたらうに、それを堪忍辛抱したは誠のきほひ、それだから後には、とてつもない出世をしたと云ふものだ。アノ宿無しも負ける事が嫌ひなら、どうして病には勝たなんだか、分らねえ奴だ。」おたこ「ソリャァ大屋さんの云ひなさるこつたが、病には誰でも勝たれやせんよ。」大屋「ナニ勝たれねえ事があるものだ、あの樣にして居ては、露霜にうたれ、藥も呑まず、養生もせず、遂には此の病で、命を取られるであらうから、そこを見きつて首でも縊るか、川へ身でも投げて死んだら、病で死ぬるを待つことなしに、己が手に死ぬるのだから、病に鼻をあかせる樣なもので、これ勝つのではあるめえか。凡て町人百姓は、天下の御道具、御役に立たぬ者は一人も無い、彼奴等は何のお役に立つ、畢竟臆病未練の心から、病に負けて堪難辛苦し、まだら／＼と、娑婆の大道を悪戯けて居るは、きほひもすさまじい、箸にも棒にも掛らぬ穀潰しと云ふ者だ。それもひけになるの負けるのと力むは、まだ親方の臑をかじつて、半人前にもならねえ内の事。潮來唄へばとて文句のしまひに、ツゥだの、カァだの、

といふ内の、向う見ずは仕方がねえ。若い時は、其の位の勢ひでなけりやァ、二十五の曉までは脊が育たぬと云ふものだが、もう男一疋になり、女房子持つてからのきほひは人に横頰をなぐられても、堪忍して理に勝つをきほひと云ふ。ハテその時くらはされたから、男が立たぬと先を食らはせかへせば、五分々々だからそれで濟めばよいが、先の奴が無法者だと、又食らはせる。それからは理非が無茶苦茶になつて、強い奴が勝つは知れた事。ぶたれた處が惡ければ、どうしたひやうりのひやうたんでころりと逝くまいものでもない。そんな無分別の者を便りにしてゐる、妻子眷屬の身にもなつて見なせえ、それが不便やしゆびんや、絲鬢頭の朝比奈でも樊噲でも、初手はたのみます〳〵と云つたらう、頭から門を破りはしめえ。夫れだから此方のもつてゆきやうが肝心。ハテ己より強い者は、世界には幾らもある、負けるが嫌ひと云ふは、ソリヤァ井の内の蛙、火燵にへばりついて居る辨慶が、己惚の殼太平と云ふものだ。早い話は、その當人に渡り引きもせず、顏に皺をよせたり、頭を白くしたり、齒を拔いたり、てうさいばうにする奴があるが、うぬなぜ人をこんなにしやァがつたと、力み立てても、相手に摑まへ處がなけりやァ、堪忍してゐるぢやァねえか。喧嘩口論にも向うからぶつてかかる奴は、摑へ處のない、無法不埒者と云ふものだから、よけて通すが眞勇大丈夫のきほひと云ふものだ。世界にして出來ねえ堪忍はねえものだに、それを堪忍しねえのは、知慧の力の弱蟲々々、ナン

ト子供面白いか、オヤ大きな口を開いて欠をするな退屈したか。今に何ぞ食はせよう、ソレもう渡し場へ来たぞ急げ〳〵。」

串戯教諭 六あみだ詣上編 終

串戯教諭 六あみだ詣下編

東武　十返舍一九　著

㊄ 徒然草に、曲折の木を愛づるは、支離者を愛するが如しと言へり。六阿彌陀参る道すがらは殊に乞食非人多く、往來に米錢を乞ふ中に、様々の不具あり。人皆これを卑しめども、己々が曲折の木なる事を知らず、參詣するにも足のある膝行は駕籠に打乘り、目のある盲は座頭の坊に行きあたり、耳のある聾、口のある啞はたゞ一心不亂に、さつ〳〵とかけ廻り、手のあるてんぼう算筆縫針も出來ざれば、尻に帆かけて出歩く事を好み、其の外鼻のある瘡かき、毛のある坊様など、その樣等しからず、心々に見ゆれども、豐島の渡し越ゆる時は一蓮託生の舟の内、田舍者と覺しく、年の頃三十許りの男菅笠を取りて、此の上り場より、大屋の袂を控へ、田舍者「モシ〳〵コリヤアハァどな樣か知らないが、俺共もハァちくとべい、お話が聞きたうござります。わしやァ田舍者でござりますが、儘よ田舍は猶住みよかろと、唄ひますけれど、俺共の在所も近年は不作が續いていけましない。そこでハァ代身サァぶつちまつて、爰許へつん出申したが、商賣すべいにやァ元金が無し、せうことがない、マ

ァ二三年、奉公でもすべいと、昨日目見えサァしをりましたが、そこの旦那殿の言ひめさるにやァ、にしやァ酒を飲むかと言ひめさるから、イヤ一口もいけましない、下戸でござると言ひましたら、又聞きめさるにやァ、女郎買ひは好きかと言ひめさる。アニハァこれもうらァ嫌ひでござると云ひましたら、旦那殿が、イヤにしやァ譃つつきだァ、もうかゝへやすまい。見た處が主も、二十八九三十にもなるべいが、その年になつて田舍から奉公につん出る者を、アニハァ酒も女郎も嫌ひだと云ふ事があるもんだァ、それが嫌ひなら、やつはり田舍にちやんとしてゐるだんべいに、江戸へうつ走つて出やるからにやァ、酒も女郎も好きだんべい、嫌ひたァ譃をつきやる。譃つつきやァ、うらが嫌ひだァと云ひめさつたが、ある程ハァ、うらァ酒も女郎も好きでござるが、さうべい云つちやァ悪かんべいと、僞りサァ云ひをりましたが、今度から目見えサァにつん出べいなら、あぜういつてよかんべいか、どうぞハァ、料簡サァ云つて聞かして下さりまし。」大星「ソリァ成程、その旦那が云ふが尤もだが、しかしそんな人ばかりも無いものだから、正直に云つてよい事もあり、又悪い事もあらうから、以前は好きだが今はとんと止めましたと、どつちつかずにいつておくがよからう。それは兎も角も、今貴樣の云ふには、近年不作で、田舍もいけねえと云つたが、ァ、勿體ない、貴樣は冥加知らずと云ふものだ。太平の御代に生まれ合ひ、冬は暖かに著た上に鰒を食らひ、夏は裸で涼しい上に舟と出かけ、

屁ッぴりが悪戯云ふ樣に、イヨ玉やァなどと洒落て、樂しみに樂しみが重なる故身過ぎが出來ねえと云ふものだ、貴樣もそこらで身上を棒ふり蟲とやつたと見える。ハテ各の分限を知り、ちつとも奢る心が無くば、假令不作が續いても、今此の御代の有り難さ、渡世の出來ねえと云ふことがあるものか。昔のエイ／＼ワイ／＼の時の苦しみ悲しみを、思ひやつて見さつせえ、御治世の安樂なは有り難い事ではねえか。丁度途中で日を暮し闇の夜にまごつく時、ふつと人が提燈を貸してくれたら、此奴は妙だとその時の嬉しさ、何時までもわすれず、折節はおもひ出し話し出して喜ばうが、日々お照らしなさる天道樣の事は、小提燈程にも思はず、うつかりひよんと暮して居るは、ナント冥加知らずではあるめえか。それに最前ちらと見るに、貴樣此の暖かいのに頰被してその上に菅笠を被り、丁寧に顏を隱すは、日にやけるを厭ふかと思やァ、目許り光つてもうとつくにから、日にやけて居る顏付、扠は人に頰を見られちやァならねえ、後暗え事の有る身の上だな。」田舍者「アニハァわしつひに、あにも惡い事をした覺えはござらないが、此の六七年あとまでは、田地のハァ七八町も作つて、相應に暮し居つた身分でござるから、ひよつくり知つた人に出合つちやァ、外聞が惡いからの事でござらァ。」大屋「ハ、、、、貴樣そんな根性では奉公は出來ねえ、もうよしにさつせえ。人のよく例にいふ、恥を恥とも思はぬ者は、役に立たぬと云ふが、ソリヤ大きな點違ひ、なぜと云はつし、誰にもせよ人の家

へ奉公に行つた處が、コレ權七や、ちよつと豆腐を買つて來てくりやと云はれた時、その權七殿が米でも洗つてゐるか、眞木でも破つてゐる時なら、定めて襷がけに尻をはしよつてゐるか、襦袢一枚で居るだらうが、ハイと云つてはしよつた尻を下し、襦袢ならちやつと著物を著て使に行くは、これ恥を恥と思ふ奴故、役にも立たぬ事に見えぼつて、形容をつくろひ出掛ける樣では、親方も度々用が言ひ付け難く、其の身もおのづと返事がにやくやになり、尻も重く、親方の氣に入らねえ初まり、そこを又恥を恥と思はぬ奴は、假令昔は萬兩分限でも、落ちぶれて奉公する身分になつちやア、假令襦袢一枚で居ようが裸でゐようが、知つた人に出會つても恥かしい事を構はねば、ハイと返事より先に、其の儘飛び出して親方の用を足す故、テモ彼奴めは尻の輕い奴だと、主人の氣に入るは必定、氣に入りさへすれば出世も出來る、給金もたんと取るから、是れその身を立てる基となる、そこで恥を恥と思ふ奴より、思はぬ奴の方が又身上を仕出す事があるものだ。ハテ貴樣の田舍から江戸へ出てゐる人もあらうが、ソリヤア大海の一滴富士の山程積んである、芥子の實の一粒でもねえから、途中で出會ふは萬がまれ、それに顏を隱して歩くなどとは、女の腐つた樣な根性骨、奉公しても役に立たねえ、早く田舍へ歸る方がよからうぜ」田舍者「ある程ハア聞えましたが、うらア奉公サアすべいと云ふにやアあて事のないこたア云ひませぬ、田舍もんでこそあれ、讀書算用は勿論、あんでも是れが出來ない

といふ事がござらぬから、さきの用にも立ちますべい。」大屋「ハ、、、、それが貴樣井の内連中だ。何でも出來ねぇ事はねぇと、口廣い事を云ふが、なんぼ萬能に達してゐても、出來ねぇ事が二つ有るだらう。」田舍者「二つたァ何が出來ましない。」大屋「昔は兎も角も、今貴樣の身の上では、土用干が出來めえ、それと又、その顏つきぢやァ、色事が出來めえぢやァねえか。田舍者「イヤうらが云ふは藝能の事でござらァ。」大屋「そんなら貴樣よい處がある、なんでも先の好みは、算筆が達者で、得意先の應對萬事商ひする事が小利口で、實體で素直で、主人の髮月代、其の外小料理もやらかし、折々は米もついたり、薪も割つたり、そして無病で煩つた事もない上に、給金は一文も入りませぬと云ふ、奉公人があらば抱へたいと云ふ處がある。貴樣其處へ行けば、きつと氣に入るは必定、ナント行く氣はねえか。」田舍者「アニハァ給金サァ取らない奉公人が有るべいか、でうけた事を云ひ召さる。」大屋「ハ、ハ、、それだとつて、貴樣何でも出來ねぇこたァねぇと云ふが、何でも出來る位なら、そんなにまごつくはなしやァねえ、それも皆譃つぱちだらう。」田舍者「さう云ひめさると理窟だァから、あにも云ふ事アござらないが、兎角己アのらりくらりと、遊んでゐる事がすきだァからの事でござらア。田舍でも新家のせなァや、かつ樣が度々の意見、魂サァ入れかへろと云ひ召さるが、こんな無理な意見はござらない、何として魂が入れ代へられるもんで、生まれついたハァ氣持はどうもせう事がござら

ない。」大屋「それが又貴様の點違ひだ。隨分魂も、入れかへの出來るものだ、ハテ貴様入れかへられぬといふ魂、何處に有るか知つて居るか。自分の物ながら腹に有るやら、脊中に有るやら、尻の尖先に有るやら頭の天邊にあるやら、知れねえはずだ。何も形のねえ摑へ處のねえものだものを。其の形のねえ物と又ねえ物と、入れかへるのだから、利息も入らねえけりやァ番頭を口說く世話も入らねえと云ふものだ。ハテ貴様が此の暖かなのに頰かぶりをとつて、長い著物を、びたら／＼と引きずつて步く魂を、入れかへようと思ふなら頰かぶりをとつて、尻もはしよつてあるかつせえ、それが魂の入れかはつたのだから、よく胸に手を置いて、考へて見さつし。どうだ／＼。」

㊅ 沼田村應味寺を出でてより、一僕を從へ藪醫めきたるが、羊羹色の小袖に、同じ縮緬の羽織、七ツさがりと覺しきをひつかけ、じんぢばしよりに、ちよこ／＼走り著き、大屋の脊中をちよいと叩きて、醫者「コレどこへ、ハ、、、、先刻から貴公とは見請けたが、挨拶もせなんだ、今日はお樂しみと出掛けたの。」大屋「コレは太田了竹樣、お前も六阿彌陀參りか、コリヤ珍らしい。」醫者「イヤはや我等が斯樣に出掛けるといふは、よく／＼の事だと思ひなさい。近年病家も人が惡くなつて、ア、よこさぬよこさぬ。外の商賣と違ひ書出もやられないから、齒をくひ縛つて打つちやつて置けば、先もにやァがばゝでのみ人知らずとする／＼べつたり、其の上人の定命といふものは、如何な耆婆扁鵲が力に

も及ばぬものを、その病人が死んだとて、イヤあの醫者坊の擂子木めが、己が大事の嚊衆を殺しやァがつた、彼奴めは女房の敵だなどと、恨みこそすれ死んだものの藥代は、權柄づけに一文もよこさぬは、迷惑千萬。しかし醫道は、仁を本とするとあれば、そこらを云ふは近頃卑劣の様なれども云はねば又、此の方家内猫ともに五人の暮し、頤を天井へつらねばならず。ナント貴公はよく物事に工夫をする男だが、醫者の藥代、残らず取れる勘辨は有るまいかの。」大屋「イヤ其の工夫外には無い、よこさねえ者は、打捨てて置きなさるがよい。ハテ貴方は損のいかねえ事だから。」醫「ナニ損のいかない事があるもんか、高い藥を唯呑まれて。」大屋「そこでございます、今貴方の言ひなさる通り醫の道は仁とやら、ソリヤァお醫者方に限らず、何でもべんべらものを引ッぱつて、渡世をする衆にやァ、丸で損のいく事もあらうし、格別德の取れる事もございませう、そこが長袖のあたりまへ、入れあはせが無くては叶ひませぬ。貴方の御病家の内にも、大身代の處もございませう、そんな處はお前の胸算用でも、あそこの病人は藥何貼程呑んだから、謝禮は大方レコサがものはあるだらうと、思ひなさる處、先が大風だから、存の外、餘慶の上に樽肴附けてよこすもありませう。其の時これでは藥禮が多いと、取りへいでお返しなさるか、よもやさうはなさるめえ、それが入れ合はせといふものさ。しかしながら、たらふく藥を呑んで、その挨拶もせぬといふは、こいつもむし鰈の天秤棒、ふとい奴に

違ひはねえけれど、お前もまた又無躾ながら、お心がけの悪いといふは、いつぞや私が、貴方へ參つた時、お机の上に諸方から來た藥禮の包んだなりで、まだ封じも切らねえのがござりましたが、殘らず包紙のまん中程に、親指の當るほど、手垢がついてござりましたは、必定文箱を開けるや否や、もう手紙より先に、包金の脈を引いて御らうじると見える。ハテそれには上書に、金何百疋と記して來るか、たとへ御肴とばかり書いてあるにもしなせえ、何時でも開けて見さへすりやァ分ることを、先づ手紙から先へ讀んで、そして藥禮ををさめて請取をやりなされぱよいことに、あとが先へなるといふは、畢竟慾がつつぱつてござるから、初めての病家などでは病人の脈より、先づそこの身代の脈をとつて見て、謝禮の多少を胸算用してかゝるやうでは、名醫とは、云はれますめえから、兎角渡世の爲に療治をせず、療治をして渡世にすると思ひなせえし。」醫「成程、貴公面白い所に目を付けるが、さうでもいかない、ハテ渡世のためにれうぢすればこそ、何でも此の病人をなほしてと、慾が手傳ふから、其の勢力で藥もきき病も治るといふものだ。」大星「イヤおめへの病は重い〳〵、マァ人の病より、御自分の病を治しなせえ。」醫「ナニ此方養生は手のもの、どこもかも達者過ぎる位で、病氣はござらぬ。此の前世間一統の流行風にも、我等は怪我にくさめひとつしたこともござらぬから、大分金まうけしましたが、どうぞあの風が、もう二三年も續いて流行ると、今頃は四まい肩で、モノモウ太

田了竹でござると、藥種屋の古借錢を拂ひに廻らうと存じたに、殘念な事でござる。」　大屋「ハ、、、ハお前も病人には變といふ逃道をあけて置きなさればこそ、解死人にもならねえと云ふもんだらう。それについて話があります。さる御大家の若との樣、お二つの年、何の御病症とも知れず、お瘦せなさつて、お色が惡く、お食もさつぱりいけねえから、何がお手醫者は勿論、有るとあらゆる高名の御醫者方に見せた處が、いづれもこれは癇の蟲との見たて十人が十人、その藥方聾ほどもきかねえ處に、ふつと或醫者殿が見て、イヤこれは蟲ではござらぬ、內損でござると云ふと、ほかの醫者たちがサア肝を潰すめえか、芋をくふめえか、お臍がぐら／＼と茶をわかして吹き出し、イヤはやとはうとてつ妙希代な事をいふ。二歲になるお子に內損と云ふことがあるものかと、どつと笑ふと、その醫者殿が、あります／＼此の若殿へ乳を上げる人を是れへ呼びなさいと、お乳母を呼び寄せ、茶椀の中へ其の乳を搾らせ、一口吞んで見て、さればこそ內損に相違なしと、此の乳母を吟味した處が、大酒吞にて酒樽を部屋にかくして置いて朝から晚まであほつきり、ぐつ／＼とやらかした。その乳を召しあがつたものを、內損なされたも理窟、丁度おめへも、私が脈をとつて見た處が、其の內損と云ふ病があります。」　醫「ナニとんだことを。われらは貴公御存じ、酒と云つては奈良漬にも醉ふ程の下戶だものを、內損致す筈が無い。」　大屋「成程、お前は下戶だらうが、お前を育てる人慾といふ乳母が、佗梨

毛久里の大酒食らひ年中生酔でゐるから、理非が分らず、手前勝手のぶう〱を云ひ、人をば蹈み倒しても理にする氣で、殼太平を並べ、人間の大道を行くにも、直には行かず。あつちへよろ〱、こつちへよろ〱、曲りくねつて歩くを、人がよけて通せば、よい事と心得て居る、乳母殿の乳で育てられる、お前の身に病がなくては叶ひませぬ。私が目からは大病人、追付け胃の腑が腐つては人に相談しても、餘人にお見せなせえと、相手になる者は有るめえから、今の中加減の薬を用ゐなせえ。」

㊆世界佛法腹念佛と、飮食の爲に後世を願ふか後生の爲に飮食をするか、畢竟遊山歡樂の佛ぜゝり精進物では酒が飮めぬと、むきみの韲で、やたらひつかけ、茹蛸の如くなりたる男、先に立ちて行くを呼びかけ、大屋「オイ太郎兵衛さん、何處へ〱。」太郎兵衛「イヤこれは横町の大屋さんか、私もあんまり内にゐて氣を腐らかすも壽命の毒だと氣晴しに出掛けやした。」大屋「ソリヤア奇妙だ、御一緒に詣りませう。」太郎兵衛「イヤもう大屋さん、此の間はがうてきにひしげやした。」大屋「ひしげたとは何か。」太郎兵衛「イヤ此の鼻がびつしやりとひしげやした。ホンニ金のねえといふものは口惜しいものさ、顔見せの木戸番ぢやアねえが、頭を逆樣にして金をかりにあやまつて歩けば、どこでも愛想をつかさぬ氣だから、貸されねえとよくいふ奴さ。此方は愛想をつかしてもいいから、借りさへすれば申し分はねえものをさうも云はれず、つまらねえ者になりやした。」大屋「ソリヤアつまつたよりかア、つま

らねえうちがまだ樂しみだ、商賣さへ精出しなさつたら、それでよからう。」太郎兵衛「ナニサその商賣を精出したくても、得手ものがねえからどうも種のねえ品玉は使はれやせん。」大屋「イヤ〳〵そりやお前の料簡違ひ、借金があらうが、金が無からうが、精出す氣になりさへなさると、どうでも仕方はあるものだ。今までお前がちよつとした風呂敷包も子供に持たせて歩く様な、見えがあつては出來難い。金がなくて精を出さうと思ふには、一段身を落して、お前が自身股引がけで、得意先を驅け廻つて見なせえ。イヤあの男は、大分精を出すわえと、心ある手合はもう贔屓するやうになると、そこで商賣が出來てゆきやす。借金方も其のとほり、あつかましく、お前が自身葬禮の供にたつた醫者殿を見るやうに、やたらちひさくなつて、斷りにあるきなせえ。中にはむつかしくひねくる處もありやせうが、さやうならばと、晦日まで言ひ延して、また晦日にことわりに行き、十四日にも向うから人の來ねえ内に斷りに行き、どう參つたかう參つた、鄰の婆さん茶を參つたと先の忙がしいに付けこみ、長々とやつて見なせえ、如何な我強い金持でも、金を返しに來たと違つて、さう又きつ〳〵と斷りに來られて、取込の中、面白くもねえ御託宣を聞くもうるせえもんだから、後にはエ、又斷りに來やァがつたと、そろ〳〵鼻であしらふやうにならうも知れやせぬ。さうなると此方のもの、一物前もいかずにおいて見なせえ、向うではァ、嬉しや、此のもの前には斷り殿が來なんだが、これからもうさつ

はり來ねえやうに此方から斷りを云つてやるがいいと、さう旨くいけばよいがハ、、、、コリヤア戲談だが、全體お前金々と云ふから惡い。とてもお前に金を貸す者はねえと思ひなせえ。なぜと云ふに齒が白い。齒の白い人と、長い著物を著てゐる人には金持は油斷しやせぬ。處をお前が無理に取り入らうと思つて、イヤ是れは外から貰ひましたなどと、まんざら高い錢を出して買つた物を、あやまつておはむきにやるなどは無駄なせんさく。金を持つ奴と云ふ者は、不斷貰ひつけてゐる癖があるから、何と思ふものか。丁度さる人が早咲きの水仙を貰つて、コリヤア珍らしい、今時分此樣によく開いた、是れはそんじよそこへ、金談のことを賴んでおいたから、はむきにやらうと、持たせてやつた處が、先が金を貯める奴だから、何の氣なしに、ハイ是れはといつたばかりで、佛樣へ上げてしまつたと云ふが、それ程料簡が違つてあるものを、なんの絲瓜にもなりやせぬ。ハテ袋物商賣や、初松魚賣る手合は、金持を相手にやアせぬけれど、それでも商賣は出來てゆくものを、お前も人の懷をあてにせずと、たゞ自分の商賣を精出しなせえ。」太郎兵衛「成程一々御尤もだが、私はさう思つても、此處に一つ難儀な事がありやす。御存じの通り、内の山の神めが意氣地なしで、錢遣ひが荒い癖に、わが儘者、あいつが有るだけ、家内の費えが多くてなりやせんから、隙をやらうと思つても、彼處の義理やこゝの義理で、それも出來やせんから、困り果てやす。」大屋「それがおめへのつまらねえ初ま

りだの。ハテ身上の爲にならねえ女房なら、去りこくつてしまふに、何のいさくさが有るものか。あそこの義理だの、こゝの義理が濟まぬのと云ふは、おめへの器が小さい〳〵。たかで身上の爲にならねえことを、わきまへのねえ女房だから暇をやるものを、去られるは先のあやまり、おめへに何の恨みが有るものだ、よし又恨むにもせよ、ソリヤ向うの得手勝手で、恨むのだから、頓著は生薬や、巾著は腰に下げると思ひなせえ。あの義理此の義理も、家の爲にやア代へられめえ、先祖代々への義理が肝心。ハテおめへの心で、眞實さう思ふならば、不斷内儀樣のすることが、あゝでもねえ、かうでもねえと、氣に入らねえこともあらう。これ夫婦和合せぬは身上破滅の基、定めて折々は、鞠子の喧嘩を見るやうに、擂子木の楯もあらうから、兎角人は見切りが第一、もうこれぢやいかねえと見たならば、さつぱりものを轉じかへて見るがよい。はやくさらけ出して、また新しく内儀樣を持つがよいぢやアねえかえ。」

太郎兵衛「それもわかつてゐるが、どうも倅めが有るからそんなことも二のあしさ。」

大屋「イヤはやお前も意氣地のねえ事だ、誰しも子の可愛いは知れたこつたが、ソリヤお前の私と云ふものだ。親御からゆづられた身上、立つか立たねえか知らねえが、關の地藏の開眼をした一休樣の樣に、ぶうらぶらと、ぶら下つて來てゐるものを、子の愛に溺れ、身代を見殺しにしては、死なれた親父殿への孝行は何處で立つ。親が重いか子が重いか、秤にかけて見なせえ。その根性ではおつつけ

私義勝手に付きとやらかさにやァなるめえから御用心々々々。」

⑧ 霞ひく刷毛序に王子稻荷へ參詣し、狐色の田樂茶屋に腰辨當を開きながら、樣々の浮世話、笑ひ樂しむ傍に、二十四五歳ばかりの男、南部縞の小袖に大福餅の如き紋所べつたり附けたるねごやちゝぶの羽織は、立派に見ゆれど、ちよつと一本きめたるお太刀は、梅川忠兵衛が遣ひ殘り、二百疋位の銀拵へをさしたるが、衿かき合はせて 男「モシ貴方ァさつきから、色々の面白いお話をなさるが、よく何角に行きわたつたお方、感心致しやした。それにつきわつちやァ女郎買ひが好きで、折ふし吉原へ出掛けやすが、ついぞもてたことがござりやせん。ナント女郎に振られねえ工夫はありやすめえかね」大屋「ござりますとも、お前吉原へ行つて振られめえと思ひなさるなら、先づ大門をずつとはひつて、五丁町中くる／＼廻つて、すぐに家へ歸りなせえ。さうすると振られる氣遣ひはござりませぬ。」男「オヤ知れたことを、女郎を買はねえけりやァ、振られねえことはわつちも知つてゐやす。」大屋「知つてゐなさるなら聞かずともよいぢやァねえかえ、おめへが又、近頃無躾ながら、女郎を買つて、それに振られめえと云ふこたァ出來ねえ事だ。何故と云ひなせえ、わたしは追從を云ふことが嫌ひだから、腹は立てなさるな、お前のその頬が、ふた目とも見られた頬か、さい槌頭に、目は四角で、鼻は風上へつんまがつて口が大きくて髭だらけで、小鬢てうのはげた處へ、土龍が持ちあげた樣な、痰瘤

が二つまで御念の入つた親御の作佛、凡て物は理詰めなもの。お前の顔でもてようと云ふ理は少しもねえから、其の工夫は私にも。」男「イヤ人の不器量の店下しは聞きやせぬ。たとへ片目でも、兎脣でも、先は金で買はれる身だものを、その買つた客を麁畧にするは、向うが無理ぢやァござりやすめえか。」大屋「イエ〳〵その金でかはれる女郎だから、なほ振りやす。ハテお前一人に買はれる身ぢやァあるめえし、毎晩得意のかはる商賣、其の中にいやと思ふ客は振りもしさうなもの。たま〳〵女郎買ひに行く客の心と、毎晩客をとる女郎の心とは、下駄と燒味噌、十露盤と合羽籠ほど、飛び違つてゐるものを、何として〳〵。その身にあたはぬ事を願ふは、ほんの蚯蚓の木昇り泥龜の居合抜き、及ばねえことに苦勞しようより、お前のお内儀さんがあるだらうから、女郎買ひを止めて、内儀樣を大事にしなせえ、コリヤァほつても振るといふ氣遣ひはねえから。」男「知れた事ばかり。女房に振られるひやうたくれもねえものさ。」大屋「イヤお前氣の強い、其の顔で女房に振られねえがまだしもだと悦んでゐなさるがよい。」男「ナァニ悦ぶ處か、いやで〳〵なりやせん、モウ〳〵いかねえ燒餅燒きだから。」大屋「ハ、、、、お前に燒餅を燒くとか、ハ、ァなる程夫婦の情合と云ふものは別なもの、感心しやした。私が女だと不男な亭主を持つは、兎と云ふ踊子だに、其のお内儀樣は可愛さうに、燒餅とはほらしい。ァ、私がお近づきなら、さう云つて上げてえな、御亭主が女郎買ひに行きなさつたとて、

必ず氣をもみなさんな。さだめしお前が、昨夜の女郎衆はさぞ美しかつたらう、それだからいつそ今日は、ねむがつて憎らしいの何のかのと、燒き掛けなさると、男の癖だから乘りが來て、さうさ、昨夜の女郎は濱村家に、杜若が愛敬をどんぐるみにしたと云ふ顏、その癖手のある奴、夜つぴといおいらを寐かさねえと譃ばつかり、一人寐ごかしにあつて、もう來るか〳〵と、蛙のつらへ、上段書きしたやうな顏をして、目ばかりましくしと、寐ずにゐたから、それで翌日眠いのだものを。さうてえ何處の內儀樣でも、御亭主が女郎買ひに行きさへすりやァもてるものと心得て、燒餠を燒くが、ナニめつたにもてゝたまるものか、燒かずともの事だ、うつちやつて置きなせえと、云つて上げてえ樣なものさ。お前も其處らがありませうから惡く內儀樣に氣をもませずと、可愛がつてやりなさるがよい。そしてお前母御がありますか。ナニあるえ。コリヤァ又女房より猶もてるものだ、親の慈悲と云ふものは、有り難えもので、お前がどんな不男であらうが、金が無からうが、振ると云ふことはねえものだ。その上揚詰のお客の親父樣の目を忍んで、臍くり金も出して借したり、こつちが邪見にすればするほど、向うからは戀ひしたつてくるものだから、兎角お袋や內儀樣へたて引きをして打ち込みなせえ、それがましだの齒入れでござりませう、ハ、、、、。」

⑨ 人の心は面の如し。その思ふ處云ふ處聞く處もひとしからず、身の成行も定まりなし。昔は遣手

か迎ひに出でしも、今はやう／＼長刀草履、尻きれ凧のふうらい者と、看板打つたるしみたれの男、こゝに休み居合はせたるが、話の尾にとりつき　男「扨々面白いお話を承りましたが、此のお方の仰しやつたとは、私が身の上はあちらこちら、二三年以前から、ふとした女郎に惚れられまして、引くに引かれず闇雲と出かけた程に、親兄弟は勿論妻子にまで愛想をつかされたは、ホンニもつけの幸ひその女郎めが兼ての約束には、年が明けたらたとへどのやうな稼ぎをしても、私を安樂に過さうと、深切に云つて呉れますから、私は親兄弟より、女郎を大切にせにやならない理窟。ものは一概には云はれないもの、いろ／＼の身の上が有るものでございます。」　大屋「ソリヤァおめへよいお樂しみだの。しかし人の心の早替りは、とんだ茶釜に結つて出た女形が、忽ち藥罐頭の敵役となり、道理で南瓜が唐茄子とうつり易い世の中、ひよつとその女郎の氣が變つたらどうしなさる。」　男「イヤそれは金輪際間違ひのないといふ證文を、當人が直筆で著腹して置きました。」　大屋「ハ、、、、ナニその證文があてになる物だ、たかで先は女郎のことだ、間違はさうと思へば何時でも勝手次第、お前を長竿でずいずいのずいとこなと、突き出してしまふに何のいさくさがあるものか。」　男「イヤ是れ程までに固めて置いた事、もし間違へたら百年目、男の意氣地だ劍の舞でもおつ始めて、女の胴腹をゑぐつてやります。」　大屋「成程其のヒイドロンコ／＼もよいが、先が腹に穴のあいてゐる國の人ぢやァあるめえし、

ゐぐつたら死ぬだらう、人を殺せばお前の命もねえぜえ。」男「ソリヤア承知の助さ、そこへいつちやア未練はござりませぬ。」大星「ハアそんならお前も死ぬ氣だの、それもよからう。とてもお前の馬鹿は死なざア治るめえから。ハ、、、、丁度おつこちた木を、根から切つて終ふやうなもので、こんな無理な意趣ばらしはねえ。女郎は人をだますが商賣、だまされたはおめへのあやまり、先に意趣も遺恨もナニあるものか。さりとては若い／＼。其の心では親兄弟に見離されなさつたも尤も。定めて勘當提燈世間の暗いお身の上だな。」男「さやうさ、イヤもう私が親父の堅藏ときては、鐵砲玉の座禪豆か石塔のころいり、鐵槌の頭を泥龜煮にしたよりかは、まだ一口もいけない代物、私とは馬が合はねえから、勘當しられて、いま友だちの所の居候、起き候が裸にして、此の著たなりたつた一枚、もう來年の三月は、ゐて吉めが年明け、それまでの辛抱だと、此の反齒をくひしばり／＼、折々は弟の所へ、一分二分づゝの無心も、此の頃ははや一向に請け付けませぬわ。さすが兄弟他人のはじまり、現在の兄を貢がねえと言ふはあんまりだと、思ふに付けても女郎の方が、どうも疎かにはなりませぬ。」大星「イヤもう／＼呆れたことを云ひなさるが、おめへ親御の家はどこだ。」男「ソリヤ私が身上しまつてから、親父は弟の方へ引取りました。」大星「ソレ見なせえ、弟が兄を貢がねえと云ふはあんまりだと云ひなさるが、其の兄貴が又、親達を貢がねえはどうしたものだえ。總領の世話をすべきを、弟に

おつかぶせて置く上に、お前が又取らうとは蟲がよい。さう云ふことなら先祖代々の年忌、その外みな弟御の方で勤めなさるだらうから、お前の役まはりを、あつちへ背負はせたかはり、せめて無心云ふだけは、たて引きでも堪へにやァならねえところだ。」男「それも知つてゐますが、お袋の死なれた時、記念だとつて金二十兩、私へくれたを、弟が預つて置きながら、性根を見定めないけりやァ、渡さぬの何のと今によこしませぬから、せめてそれをくれると、一商賣にとりつきますものを。」大屋「聞えた〳〵、おめへの二十兩があるから身がもてねえ。何の私がいかいお世話なことだが、聞かせてえ話がある、聞きなせえ。さる處の隱居殿が、毎日々々降つても照つても、淺草の觀音樣へ、日參する道すがら、往來の乞食や、寺内のはつち坊主、その外になんでも殘らず、四文錢一文づゝやられたげなが、毎日のことだから、貰ふやつらも隱居の顏を見知つて、もう向うから來ると、今日はお早うござりますの、イヤお暑いの寒いのと、挨拶しかけるやうになり、後には、あれはそんじよそこの隱居樣だと、町所も知つてくる位になつた處、ある時隱居の云ふには、私も年寄つて勿體ない事だが日參も太儀に思ふやうになつたから、先ももう長いことはあるまい。もしも私が死んだなら、此方衆へ一人前錢一貫づゝ施行するつもりに、倅どもへ遺言して置くによつて、今までの馴染だけ、その時は皆私が内へ取りにござれと云ふと、そこに居た宿無しども、ハイそれはと云つて悦び、頭を土にすり

こんで禮を云ふ。其の中に一人のはつち坊主が云ふには、イヤそのお志ありがたうはござりまするが、私は頂きますまい、お斷り申しますと云ふ。隱居頭をなでながら、ハテあの通り皆嬉しがつて禮を云つたになぜ手前一人、否だと云ふ譯が聞きたいと、不審云はれてかの坊主、さればでござります。此の年月毎日〳〵四文づゝ下さる、お志の有り難いのが、爰で消えてしまひます。ハテ貴方がおかくれなさつたら、壹貫づゝ下されうとあるにもう氣がいつて、一日あなたのお出でがないと、今日は隱居樣はお出でなさらぬが、おあんばいでも惡いか、まだ死にはなさらぬか、早く壹貫文が貰ひたいと、却つて貴方の御死去なさるを、今か〳〵と待ち遠く思ふ樣になり、其の壹貫の鳥目にばかり目がついて、毎日下さる四文づゝを有り難いとも何とも思はぬ樣になりますから、私はその壹貫文、お斷り申しますとの云ひ分。そこで隱居、成程ハヽア面白いところに氣がついた。手前は天川屋義平の子孫か、泥中の蓮乞食の中のはつち坊、出かしたと感心せられ、遂に其の者をひき上げ、相應の堂守にしてやられたと云ふ話がありますが、ナント聞き處だによ。丁度お前も其の通り、形見分けの二十兩にばかり目がくれてゐるから、時々貰つて來る壹分貳分を、嬉しいとも思はねえによつて、其の金を皆、四文一合にしてしまひ、商賣の元手にしようと云ふ氣のねえものだから、いくら貰つて來ても燒石に水、何の絲瓜にもならねえものを、さきで心よくくれぬも尤も、又その二十兩をうつかりと、

渡さねえのも尤も、彼方に無理は少しもねえから、お前その形見分けを、とんとない氣になつて、なんぞ商賣を初めて稼ぎなせえ。有ると思ふから、お前の身の害になる。ハテ壹文二文の商ひでも、商賣に恥はいらねえ、上を見れば限りがなし、下を見ればもうちつとと云ふ、お前の身の上、まだ友達が世話をしてくれる内は、ちつとばかり脈があると云ふものだ。人と云ふものは、親が見はなすと、親類が世話をし、親類が見はなすと他人が世話をし、其の他人が見はなすと、サァそれからは誰が世話をする。恐れ多くも、御公儀樣でお世話をなさるゝ。今お前友達の世話になつてゐる内はよいが、そこを愛想つかされると、もう、御公儀樣へ御苦勞を、かけねえけりやァならねえ身の上になるものだから、マァその女郎の誠は、來年の三月でなけりやァ、分るめえと云ふものだによつて、それまでなんでも、商賣を始めて稼ぎなせえ、其の内には目の覺めることもありませうから、さうしなせえさうしなせえ。」

串戲教諭　六あみだ詣下編　終

跋

作者此の六あみだ詣に託け、しちむつかしい事を說けども、みづから是れを行ふ事能はず、畢竟醫師のいか物喰ひ、家相見の我が居所を夜逃げする類にして、本より不學者口は減らず、盲人蛇を辟屑とも思はざれば、出る儘にしやべり、手の行く儘にかいつけたれど、強ち人の是非を諭すにあらず、唯雜說に譬喩して、夜なべ行燈の傍に居眠る腕白者の片小鬢を、チリ〳〵と燒かせざる爲なるべし。嗚呼いかいお世話にあらずや、お茶でも參れと言ふ人もあらん、予は茶よりも、酒が好きなりと爾云ふ。

東都

十返舍一九自跋

自序

連木に押しを掛けたるを、堂上方の笏と稱へ、章魚の足に履ける革足袋を、武家方の引皮と呼ぶ。予が蚯蚓のぬたくりたるを、六あみだ詣の次編と云ふは、眼の無き者に比して蛇を怕れず。熊坂が向う脚から、啼きたつ蟬の聲やかましく、喋り出しては留め度なき、筆の短き才を擧げて、壁からやつとひつぺがせし、惡脂茶の子供衆へ、ちくとんばかりの御爲ごかしは、かの坂へ引き懸けたる、車へ肩を貸してやる出來合仁者の類なるべし。

東都逸民

十返舍一九誌

文化申孟陬

串戯教諭 六あみだ詣嗣編上巻

東武　十返舎一九戯述

㊀年々花は替らずと云へども、歳々人同じ姿にあらず、昨日は厚鬢の婿と云はれ、今日は天窗に毛のなき親父と呼ばれて、壯年人に神がられ、色ある身に憎まれて、しようことなしの後生願ひ、をかしからぬ日を渡るは、門松の下を餘計くゞりし人の有樣。世は次第送りにて、意見聞きたる息子が、意見する親父と成るは、五十年ぶりにて小便せし盧生が夢と同じ事、悟めての上の御料簡と、寺岡が金言、兎角心の取置きが肝心なり。形容老いたればとて、兩頭の犬に見とれて氣をおぢにし、使の口上を忘るゝ三助殿も、釣りする側にあけらくわんと、非時に遲れて茶飯食ひそこなふ納所坊も、心持若き故にや。佛賴む六阿彌陀詣も、慰み半分の世の中。大原の人なら雜魚寢の夜は、留守番を賴まれさうな、役に立たずの婆嬶どもを、引連れて彼の大屋殿、田畑村近き畑中にて、唐茄子顏の八百屋の婆、後より追ひ付き來るを見つけて、大屋「イヤア誰だと思つたら八百半が所の婆樣。よく寐かして親父殿の、氣にいらうと思つて出かけたの。」 はゝ「また大屋さんの惡口が初まつた。さう云つてもお前

は、氣の若いお人だ。」 大屋「イヤ〳〵知盛の幽靈ぢやァねえが、氣ばかり強くて、腰より下はお留守だからつまらねえ。そこに達者な人は、こなさんの所の親父だらう。」 ほゝ「ホンニ私が所の親父殿には困り果てます、大屋さんちつと意見をして下さいまし。今もつて殺生好きがやみませぬ。一昨年の春兄の半兵衞に跡式を讓つて、私どもが隱居した時、もう是れからは後生の道に入らねばならぬと、親父殿に得道させて、嗜みの釣竿吹矢筒も、へし折つて火にくべてしまひましたが、此の頃は又そろそろと初めかけて、毎日釣りだの網だのと出かけますから、年寄つて罪つくりな、もうやめさしやれと意見しても、豆腐に鎹ねつから聽かぬにやァ困り果てます。」 大屋「打捨つて置きなせえ。親父殿も我が世帶を息子に渡し、浮世を樂にしたい事して遊ばうと、隱居せられたものであらうに、好きな殺生が則ち後生の爲になる。ハテこなさんこそ、そんなに云ふが、家の息子や嫁の身になつて見なさい。どうぞならう事ならお袋も一緒に、毎日釣りや網に出かければよいがと、陰ではさう云つてゐらるゝであらうに。親父殿の殺生より、こなさんが内にへばりついて、嫁をいぢる殺生がわりい〳〵。」 ほゝ「ナニ人聞きの惡い。私が何の嫁をいぢりませう。」 大屋「イヤ〳〵その天窓つきで知れてある。閻魔王の冠の呑口を見るやうに、その長い笄は何事、まだ色氣のある年寄は、兎角法界悋氣して、今日は庚申だよと嫁に聞けがしにいらざる世話をやき、夜も二階からたび〳〵咳ばらひして、下の有

明が消えると、とつぱくさ下りて火をうちかけ、可愛さうに長松を端に寢かさすと、二人のまんなかへ入れて寢さしたがよいと、いかいお世話。お茶でも上れと、陰口いはれるは、こつちの心の取りおきが悪いから。親父殿は男だけ、そんな事には頓著せず、すきの殺生に口がないちにち草臥れ、夜は寢るとすぐに極樂、なんにも知らぬが佛性、ナニ罪も報いもあるものか、一休和尚さへひち／＼する鯉を捕へて、汝生きて水中に遊ばんよりは、愚僧が糞となれと引導渡し、煮て食はれたと云ふ事がある。世界に人間程尊い者は無いに、それとくらぶれば何でもないうろくづ、丸きり命を取られたればとて、その恨みも報いも、ナニ人に歯が立つものか。それを此方の根性が弱いから、ひよつと子供に不仁が出來るか、其の身が病み煩ひでもすると、これは數年殺生した報いだと、自分から瑕瑾を付けて、あつたら頭を削り廻し、佛頼んで地獄へ落ちぬ用心とは。さりとては器のちつぽけな手合の云ふ事。ハテ殺生はせずとも、時の災難病難は有る習ひ、鳥類魚類の命を取つたとて、あいつらに報はれてつまるものか。丁度兩國や山下の見世物で、サア御覽じろ／＼。生まれは丹波の氷上郡、獵人の倅、親の因果が子に報つて、足が三本手が五本、首が三つで金玉が十八、當年は當り年で、鈴なりにぶら下つてゐる、葡萄娘は是れぢや／＼と、譃八百の云ひ立て、見物の方から道理をつけて、如何さま多くの猪猿の命を取つた獵人の倅、物の報いと云ふは怖ろしいものだと、何の思慮分別も無き、

いくぢなしの祖母嬶どもの評判。ハテ猪猿はおろか、人の命を取つても、滿足に一生を過ぎた人は、昔の世には幾らもある。斯ういへば物の哀れを知らぬ、邪見のやうに思ふだらうが、邪見にして人の爲になる事もあり、また慈悲情をして、人の害になる事もあるから、そこの處は臨機應變。ナニ魚をとつて遊ぶ位の事は、何でもない事。うつちやつて置きなさい。」はゝ「イエ〳〵それでも此の間道樂寺樣の御說法に、生有るものを殺すと、その報いで無間地獄へ落ち、永々萬劫の間、呵嘖を受けると仰しやつたから。」大屋「ハ、、、、何の死んだ者は、元の土になつてしまふものを。もしその魂魄か寸白か、疝氣の蟲でも殘つて居て、生ある物のやうに、いつまでも地獄にゐる位なら、每年七月是非娑婆へ來ずにやァゐやせぬ。何故と云ひなさい。死んだものの内でも、アノ嫁めがお前追從ばかりぬかし、陰では口が惡く、私が死ぬ時も、思ひ入れ空泣きした後で、大きなあくびをして茶漬飯を五六杯食ひ居つたが、其の心いきの憎さ、もうちつと生きてゐて、あいつに我儘をさせともないと、思ひ死した姑か、又は亭主のわづらつてゐる内から、早噺衆が手廻しに、後の亭主にするつもりで、居候とちゝくり合ひ、現在本當の亭主の側に、看病をしながら癡話をするを見ても、大病でもう舌が廻らねえから、心でばかりエ、口惜しい、いま〳〵しいと思ひながら死んだ者や、臍繰金に念を殘し狂ひ死したものは、是非とも七月の盆を待ち兼ね、出て來ねばならねえところ、何の沙汰もないは、地獄

にも極樂にも居ぬ證據。お經にも極樂の道程は爰を去ること遠からずと、云ふかと思へば、又十萬億土と途方もない遠道。その十萬億土も、日本橋から十萬億土やら、板橋から十萬億土やら、ねつから分らぬやうにしたは、天竺のお釋迦殿の發明。畢竟佛法と云ふものは、年寄の持ち遊び。人は色氣が去つてからは、心が邪見になるものゆゑ、内に居れば若い者と氣があはぬから、年中いさくさが絶えぬによつて、寺參りの談義のと、爺祖母どもを内に置かぬ樣にしたもの。そこでこんなに出かけた處は、其の身も極樂内も極樂。網や釣りに行くも寺まゐりするも、大きくとれば同じこと。斯う云へば佛法を茶にするやうだがさうでない。糞取と旦那寺は、麁略にはならぬ處、ハテ打つちやり處の無いものを、とりしまつしてくれるものだから、寄進奉加も心よく出し、施餓鬼の袋も、大きいとつて小言を云はず、固くつめてやるがよい。それさへしておけば、親父殿の殺生は打つちやつておいて、ただこなさんが人の物を借りて返さぬ殺生と、死水を取つてくれる、嫁をいぢめる殺生を、たしなんだが宵の明星さまだらうハ、、、、。」

㊂　風光る棧留の大縞著て、鐺のはげかゝりたる長脇差を横へ、皮提の大津三度に、朱羅宇すげたる芋張の煙管を捻くり廻しながら、大屋の袖を後より控へて、相手取「わつちはハイ、駿河府中在の百姓でござるかやア、お前の云はしやつた事道々聞いて來ましたがやア、そのぢんぢいどんは殺生好き、

私はまた、生まれ付いて相撲が好きでござるから、在所ではハイ、村の若い者を相手に、常住摑み合ひましたがやァ、わつちにやァ一番も勝つた者がござんないもんだんて、コリャ百姓をぶちやめて、相撲取にならずと思つて、去年の春から爰もとへ出かけましたが、成程ハイ、お江戸程ござるやァ、日本國の頭ない衆達が寄り合ひ、わつちらにやァ一番も勝たせましないやァ、どうしたら力が頭無くならずか、お前なんぞ藥はござりましないかやァ。」大屋「ハ、ァこなさん相撲取か押しの強い、丁度西行も富士の山がないと、鉢坊主と外見えぬやうなもの。こなさんも前髪がないと唯の男、著物の丈はいくらきるぞ。」相撲「三尺二寸程著るやァ。」大屋「ハ、ァ脊は低し、痩せッぽちなり、其の癖足は強敵な蹌踉と見えるが、それでも相撲取か、貴樣力が強くなりたいと思ふなら、其の相撲取を止めるがよい。」相撲「ナニ止めたら猶の事、力が落ちませずにやァ。」大屋「ハテたつた今こなさんの云ふには、在所では誰もこなたに勝つ者がないと云つたぢやァねえか、そんなら相撲取を止めて、元の故鄕へ歸り、やつぱり仕馴れた百姓をしてゐると、其の村の若い者に天窗を上げさせず、強い男と云はるゝであらうぢやァねえか。高のしれた田舍に住んで貴樣に勝つ者が無いとて、何處へ行つても其の通りだと思つて、四里四方の繁華な處へ出掛けたは不覺と云ふもの、そこが自分の家業を大切に思はぬからだ。百姓なら百姓の業を一心に勤めて、其の暇には好きな相撲を取つて遊ぶは格別、家業を捨てて、

あても無い相撲取にならうとは、身の程を知らぬ己惚からおこつた事。何故と云ふに腹は立たしやるな、とても立者にはなられぬ顔付、風上に坐つて居たとて、是れは關取氣がきかぬと、小言を云はれる氣遣ひの無い小男、定めし女郎買ひに行つても、まだ振袖を著てゐる小つぽけな新造にまで、ころりころりと投げられさうな風體、年中鵜の尻尾の口繩と同じ事で、ぬらりくらりと親方の屁ばかり嗅いで、つき歩くがせいさい、一本使ひの關取には及びも無い事。何として〳〵。」相撲取「イヤお前そんなにわつちを安くするが、相撲にも昔は四十八手あつたけれど、今は段々と新法の手が出來て、八十八手の餘、皆わつちは覺えてゐるにやア。」大星「ナニそれは、こなさんばかり知つて居るではあるまいし、相撲取る手合は、皆覺えてゐるだらうから、ソリヤお互長左衛門、とてもいかねえことは早く思ひきつて、國へ歸るがよからう、貴樣親達があるか。」相撲屋「アイサ今年八十になる爺がござるやア。」大星「ソレ見さつし、たとへにも親には勝たれぬといふ程の強い、親と云ふ關取を持つて居ながら、孝行の地取りが身に染みぬから、智力が弱くて無分別をおもひつく、さりとてはまだ稽古が足らぬ足らぬ。丁度軍の赤本にもある、平家の忠度といふ人が、腕の有るうち歌を書いて置かれたればこそ、千載集と云ふ本の中に、其の歌が今でも殘つてあるぢやァねえか、もうちつとそれを書かずにおくと、その腕は六彌太の郎等に切られてしまつて、書きたくても早叶はぬところ。貴樣も今親父の達

者で居られる内、精出して孝行を盡すがよい、品によつたら天下の御帳面にとまり、末代までも殘る事。もう先の近い親父、今にあの世へいかれた後で、孝行がしたいと思つても肝心の親が無くては、其の時悔んでも歸らぬ事、唯親の代からの家業を、わきひら見ずに勤めるが孝行の第一、身にそぐはぬ外の遊び事に、氣を移すが不孝の初まり。是れは貴樣の身の上とは、格別の人の話だが、同じ相撲好きのことだから道々話して聞かせませう。私が心安い、さる寺の住持、生まれついての相撲好き、近在近鄕の花相撲といふと、坊主頭に前髮鬘かけて出かけられたが、或時目の出るばかりに、手ひどく投げつけられ、悔心坊にて起きあがり、行司をとらへて、愚僧投げられたるは見えた事なれど、相手が袈裟がけの足どり、左の方浮きて蹈みはづしたからは勝負は其の時にあつて、勝負の後の投げだから、先の男の負けたものを、何故此の方へ團扇はあげぬと、紋白のまはし引きしめなほして力みかかると、見物の内に、此の和尚を信仰の念佛講中四五人居合はせ、さうだぞ／＼行司の眼つぶれめ、今のは和尚樣が勝だ／＼と、土俵へかけあがり、既の事喧嘩にならうとした處に、その處の目代殿棧敷より、使をたてられ、一寺の住職として、丸裸になつての力業、出家に似合はざる放逸の行跡、言語道斷の至り、此の後惰弱なる出家へ見懲しめの爲、其のまゝ裸にて追ひ拂へとの御下知、今更和尚面目を失はれ、褌の下りにて涙をふき／＼、木戶口を出られたるが、それから京へ上り還俗せられ、

その身になつても好きの道とて、辻々に立つて、ひとり相撲を取つて身過ぎとせられたが、いつの程にか、耳の根に枕蛸のしつかりある、女房に吸ひ付かれて、一人相撲が二人相撲になり、五尺の身體二つを九尺店に小さくなつて暮された處、昔和尚と呼ばれし時、理も非も知らず、唯此の和尚を、生如來のやうに信仰した正直や徳右衛門と云ふ者、本寺參りに京都へ上り、此の和尚が撥髮頭となり、辻中に一人相撲を取つてゐたるを見つけ、さても／＼おいとしやと詞を掛けられて、是れはしたり徳右殿か、恥かしい對面しますと、顔に袖を覆ふ處、裸でゐるから手持が無く、商賣がらの塵をひねつてゐらるゝを、いよ／＼氣の毒がり、イヤ／＼浮き沈みは世の習ひ、加藤左衛門重氏殿も、高野では味噌を擂れに困られたと云ふ事、恥かしい事はござりませぬ。幸ひ丹波の篠山と云ふ處に、相應の寺寺があつてお住寺を尋ねると、私が滞留致しをる旅籠屋、その寺の檀方衆が泊り合はせての譚、入院の物入り少々の事は、私呑み込みませうから、ナントそれへお直りなされませぬかと云ふと、和尚撥髮頭を打振つて悦び、それは御深切忝い。どうぞその寺へ坐りたうござるが、折々相撲は取らせて下さる様に、その旦那衆へ頼んでおいて下されと、まだ懲りもせぬ相撲の執著。それからその徳右衛門、和尚に連れられて、住居へ行つて見た處が、杉皮葺の平長屋、流しも張らず、一つ曲突、ふわ／＼する古疊角に、丸の内に三の字の燒印あるは、是れも相撲場の拂ひ疊かとをかしく、マア和

尙樣是れから私の旅宿まで、御出でとせきたてられ、さすがは昔忘れず、誰に貰ひて置かれしや、荒和布の如き麻の破れ衣をとりいだし、疊の緣にもとぞんじたるに、昔に返る錦の衣と、しやれ散らして引掛けた處が、天窗が奴にて、是れはならぬと、ごし〳〵押しもんで、自剃にぞり〳〵とやつてしまひ、出かけようとする處、内の嚊衆が衣の袖に取付き、お前は何處へ行かしやんす。わしは丹波の篠山へ。私も連れて行かしやんせ。女子連れは邪魔になる。胴慾な和尙樣ぢやと、わつといつて泣き出したに心引かれ、そんなら來いと、手を引いて出らるゝを見て、さしも信仰の德右衛門肝をつぶし、さては和尙樣には、此の相撲までお好きかと、愛想をつかし、見限られて、あつたら出世の綱を取りはづし、それからどうなられたやら知らぬが、此の和尙も家業を麁畧にし、外のことに身を入れられたから、渡世の冥利に盡きて、よい事をも取りはづし、尻のしまひは琴箱を竪に脊負つて行く人と同じことで、後へも先へも行かねえ身の上となられたは知れたこと。それだから貴樣も、相撲取を止めて田舍に歸つて親父殿に孝行をさつせえ。ナント合點がいつたかどうだ〳〵。」

㊂ 田畑村の與樂寺に參詣し、接待茶屋に入りて、腰打掛け休み居たるそばに、ぱつち尻はしよりにて、仁體よき男にじり寄りて、男「モシ〳〵今日はもう何時でござりませう。」大屋「されば、八ツ半でもござりませうか。」男「私は深川邊まで歸りますが、暮れる程の事はござりますまいかな。」大屋「ナ

ニサナニサ、しかし御遠方だの、王子様へでも御参詣でござりますか。」男「さやうさ、據ない心願で一昨日から七日の間、日参のつもりでござります。」大屋「それは大體の御願ではあるまい。御奇特なこつたの。」男「イヤそれには話がござります。總體人は神佛へ願望を掛けるに、是れをおかなへ下されたら、お禮に繪馬をあげませうの、イヤ提灯の燈籠のと、先へ御利生を見ませねば、錢金は離さぬつもり。さりとは氣が知れて神も佛も、ナニ納受はなさるまいと存じますから、私の流儀は、マア何も云はずに、先へ石燈籠一對、一昨日王子様へ上げましたが、それから、扨かやう〳〵のお願ひがござります、何卒お聞き下さるやうにと、はやさきへ手附を上げておくものだから、是非とも成就する理窟。人にものを賴めばとて、あとでお禮と言はうより、最初に酒でも肴でも、持參して賴んで置くと、先の氣請けもよく、賴まれたことを等閑にはせぬ道理、神佛とても左樣なものでござりませうか。」大屋「イエ〳〵それは御料簡違ひ、物を貰つて嬉しがる、欲のふかい人の心と、無欲の神佛とは格別々々、コリヤ無躾ながら、おまへの御願望は利きやせぬわえ。」男「ソリヤ何故でござります。」大屋「ハテお前のは、成程よく分つた、行き渡つた思召なれど、そんなに物のわかる人は、信心が薄いものさ。天窓から斯うして置くから、此の願望は是非叶ふだらうと、今お前が口へ出して仰しやるからは、最早おさへた算斷のつもり、自然と心に油斷が出來て、信心が疎畧になるもの、兎角轉んでも

唯は起きず、犬の糞でも摑んで起きる位の、欲の深い人物でなければ、願望は叶ひませぬ、そんな人は、第一理非が無茶苦茶で、片意地強く手前勝手ばかり云ふいつこくな者、願がけをすればとて、一筋に思ひこみ、道々も榮耀に錢をつかはず、餘所目に譏り笑ふにもかまはず、なか〳〵と勝手よきことをのみ、竝べ立てて祈り、歩きながらも大口開いて、眞言を唱へ、經文を讀みなどして、人に遠慮會釋もなく、ねから色氣の無い處が、則ち一心に凝つた處、爰でなければ願望は成就しやせぬ。其の譯と云ふは、萬物の靈長とやら云つて、人間程尊い奇妙な者は無いと申す事、それだから何でもその思ふ事を一筋に念慮を固めて願ふ時は、成らぬと云ふことは無いげな。仕課せぬは、そこまで心がいたらぬからの事でござりませう。すべて一切の所願神佛が叶へて呉れると思ひなさるは、大きな間違ひ、皆此方から叶へるので、向うにあてのない事は、一心が凝らぬものだから、そこで神なれ佛なれ、祈誓する目當を拵へ、譬にいふ虚假の一心とやらで、しやりむりこじつける氣になつて祈ればこそ、その一念で成就するといふもの、はやい證據は、よく流行る神には、皆人の氣が據つて、そんじよそこの親父は、血の道がさしこんで、金玉をつりあげたが、御利生で癒つたと云ひ出せば、あそこの婆様は、奈伊良がおこつて、太鼓もさつぱりうたなんだが、おかげで心よくなつたの、イヤ盲人は眼の開いた夢を見たの、ゐざりの鼻が高くなつて、聞えるやうになつたのと、評判をするにつけ、俄

に鳥居が新しくなり、金燈籠が光つて來て、手拭提灯いやが上に、ぶら下つて來ると、おのづから神も威を増し、陽氣になつて來るものだから、人の氣も募つて、何でも爰でこそと、一心不亂に願ふ心になるもの故、成就するは知れた事。流行らぬ處は鳩の糞だらけな中に、堂守があくびしながら、腫物だらけの子を、てうらかしてゐる處などは、ァ、物寂びてよい境内だと、錢のない手合は譽めもしようが、願がけをしたればとて、そんな處は利く事ではござりませぬ。爰が人の浮氣な處、信心が起らぬからさ。お前などは又、それ程ものが分りなさる位なら、神佛へ願懸けするにやァ及びさうもないもの。何故といふに、兎角其の身を愼み、上たる人を敬ひ下を憐み、奢りを省き、儉約を專らにすれば、家內安全の祈願、懸けるには及ばず。また大酒大食をせず、其の外一切の不養生を愼み、危いところへ立寄らねば、無病息災の願懸けせずともよいぢやァござりませぬか。そこらの處も、無茶苦茶な手合こそ、身を放埒に持ちながら、禍ひの來らぬ樣にと願ひ、商賣を無精にしながら金持になりたいとの願望などは、山椒魚の黑燒を、女に振り掛けたやうなもので、ひとつも利目の見える氣遣ひなし。丁度大山の石尊まゐりも、人に貸のあるものは本當の信心、大方は盆前を逃げるつもりの旅立ち、目黑の餅花も品川へ來ると、犬にでもやつてしまへと邪魔にし、妙義のお札も吉原へ廻ると、ャァ三番叟〱〱と、洒落の道具に使ふは、勿體ない事。その代り、こんな横着者の願ひは聾程もきき

やせぬ。唯あたじけなく片意地な人は、欲が突つぱつてあるから、商賣を精出し、奢りをせず吝くするゆゑ身代がよく、金が廻るから人に損をかけず、先祖代々の年忌佛事も懈怠なく勤め、世界の義理辭儀もあたじけなくはすれど、闕くといふことは無く、慈悲情には疎い樣なれど、是れも無い奴のわかつてゐるよりか、きたなくても、有る奴は何處ぞの程では間に合ふことがあるものだから、相應に人にも損をし、身持を質素に惡事をせず、其の上心が偏屈で、人の云ふ事はねから聞かぬ程の氣性だけ、弱い處が無いから、思ひ立つたる願望も、心一ぱいに世間構はず、人目をも恥ぢず、やりつける程の大丈夫、どの樣な事でも成就しさうなもの。又物に勘辨のある人は氣が弱く世間を兼ね人目を思ふ故、夢中になるほどの信心は、戲氣らしく出來ねえものだから、一心が屆かぬ道理。憚りながら、こゝの處をよくわきまへて御らうじませ。」男「成程御尤もでござります。何を隱しませう私の願ひは、近年不仕合にて身上に穴があき、節だらけの戶をささうかと存じますが、あまり殘念、今一度元の身代に、こぢ直したい心願を起しまして、諸道具を賣り拂ひ、その金子にて石燈籠一對、稻荷樣へ差上げ、此の志を御歎き申し、お願ひ申したれど、願ひ捨てにはなるまい。その身をも凝らさねばならぬと申すこと、合點はしながら、何をいふも一文なし、精出したくても叶はず、途方にくれてをりますが、ナントよい智慧はござりますまいかな。」大屋「ソリヤァお氣の毒な。無躾ながら御傳授いた

すことがある。お前御身上が悪くなりなさつたら、こちの身上はどうして、此の様に悪くなつたと、其の根本を考へて見なさるが肝心、是れは商賣の隙におはせては、内證の奢りが強いゆゑ、それでこんなになつたらうと思ひなさるなら、その奢りをやめて儉約を初め、又厄介が多いからと思ひなさるなら、成長した子供衆は奉公に出し、小さいのはくれてやり、人を減らすか、又内儀様が取締りがなくて、錢使ひが荒く、費えがある故と、お氣が付いたら、内儀様を離縁し、手代衆が放蕩で斷うだと思ひなさるなら、手代衆に暇をやり、何でもその病の根を斷つて、改めて事をなさるがようござりやせう」　里「イヤもうそんな悠長な處ではござりませぬ。段々と煎じ詰め、高足駄をはいても首だけにあまる借金、商賣は出來ず今日は店をさそうか、明日は驅落でもしようかと、思ふほどの早急な處でござります」　大黒「ハテもうそんなでござりますか、お前は御發明らしいお人だに、さう手詰にならぬ先何故御工夫はなされませぬ。此の有り難い繁華な處に住みながら、身上を潰すといふは、よく〳〵くのひやうたくれさま、分散の定業には、人參より貴い金がなければ、ほんの見殺し、いかいお力落しでござりますと、悔みを云ふより外はござりませぬ。是れは長休みをしたサア〳〵お出で〳〵」

串戯教諭 六あみだ詣嗣編上卷 終

串戲教諭 六あみだ詣嗣編下卷

東武　十返舍一九戲述

㊃ こゝにも富士の山をつきて、西行庵と號けし、麥藁細工の如き庵に、緣日商ひする植木屋が、今戸燒の瓦の鉢に、蜀黍殼の橋を懸けたる、築山めきし賣物にひとしき、庭の景色のをかしげなるを、打眺めるたる傍に、七十餘りの田舍親父、十四五歲の娘を連れて休み居たるが、風呂敷包に櫛箱やうの物を一荷にし、重箱に藁苞などをくゝり添へたるは、如何樣にも此の娘が奉公に出るを、送り行く體に見受けたれば、大屋「コレ〳〵親父殿コリヤアこな樣の娘か、よい器量だの。そして大人しさうな生まれつきに見えるわえ。」親父「ハイ辱うござります。是れも江戸へ奉公に連れて行くのでござります。」大屋「それはよい事だ、もう幾つになります。」親父「とつて十四でござります。」大屋「それにしては大體だの。コレ娘、奉公に行つたら隨分さきの氣に入るやうに、尻輕に返事などもしつかりとして、かりにも無性業はせぬがよい、えては油手のまゝで喰物拵へをし、又曲突の緣へ鐵漿をこぼし、敷居へあてゝ吹殼をはたき、炭團摑んだ手を、前垂でふいたり、燈心かきたてた簪を疊へ突きさし

てふくなどは決してせぬこと。それに膳棚のつまみ食ひは勿論、內儀樣が留守だとて、掻餅や味噌漬を、取り出してやたらに食らひ、押入のたたうから、小布を見つけてくすねかけ、後には人の櫛笄まで、むしやうに欲しくなるものだから、爰等が一番に嗜み處。男の子と違つて、女は格別、物ごと優しく、柔和に心を持つが第一、何でも主人の云ふ事を背かぬがよし。ハテ主は主だけの威光があつて、無理な事も通るもの、奉公人はたとへどのやうないやな事でも、云ひつけられたせうがには、小言をいつてもさせられ、云はいでもさせらるゝものだから、同じくば機嫌よくして、主人の用事を勤めると、主ものが云ひつけよくなるものだから、其の身に取りては、傍輩よりも威勢がついて、仕合のよくなる小口。閙がしいもなれてくれば、そのやうには思はぬもの。隙でゐるなら折々は灸もすゑようし、子守すればとて日暮前には必ず內へ歸り、暮れてから外へは出懸けぬもの。もう十四五にもなると、人も實を入れてなぶりかけ、まだちつぽけな小娘を、てうらかすと違つて、とつぱづしたら、本當のことにもする氣で、布やの息子が、裁ち落しの横布をそつとくれたり、菓子屋の調市上りが、松風の屑でもはずみかけ、齒みがき賣りの聲色を聞きながら、くつつき合うて、手がさはり、足がさはり、路次の隅つこうへ引つこまれて、こそ〳〵話に夢中となり、犬ころの足を踏んで、きやつと云つたに、おぶつた子が肝を潰して泣き出すから、仕力無しに別れて歸り、それからが面白くなる

と、子の泣く時の用心に、煎餅や田舍おこしを貯へる氣になるものだから、小錢が欲しくなつて、臺所の小遣錢をはつしかけ、えては寢しなに帶を解くとて、ばら／＼と落して恥をかくもの、兎角若い男には、近寄らぬが肝心、年をとれば猶の事、米とぎに出ては、井戸端にとぎさした儘はふり散らかし、犬が雞の米をねぶるも知らず、裏長屋に相應の綴蓋を見つけてはりかけ、物置から澤庵漬の仕送りして、後には仕著せの布子まで引きあげられ、内儀樣が書くを見眞似に、出來もせぬ手で蚯蚓をぬたくらしてやつた文も、男の方では笑ひ草。儘ならぬ身は籠の鳥もすさまじい、鳥は鳥でも、大方しめし籠におつぶせてある、梟か木兎だらうと腹をかゝへて可笑しがるをも知らず、手の平へ吹殼をはたいて、煙草のむ風をしながら、顔ばかりべた／＼とぬりちらし、已前寢しなには、眞木さつはを枕元に置いて、寢たことを忘れ、後には三助が持前の、火吹竹をふらつかせて、這つてくるを引きずりこみ、手代の中にもおもはくのある人は、杓子にて見しらせ、そこら中へ陰德を施した塊が、揚句の果には腹に突つはり、暇が出て突つかけものにせられ、せめて一人は、なぜしつかりと摑まへなんだと、宿の亭主が小言を聞くやうにならぬやう、身を固く持つが肝要、奉公を疎かにも思はず、大切に勤むれば、そんな惡い心は出來ぬものだ。なう親父殿、さうぢやないか。」親父「さやうでござります、何でも御奉公致して、追ひ出されて來ましたら、内にもおかぬ料簡でござります。」大屋「オ、

それがよい、兎角世間の親は、子に甘い毒を食はせるから役に立たぬ、貴様もその心得なら必ず奉公先へ、度々見舞ふ事はせぬがよい。娘一人うちやつた心になつて、死なうが生けうが、寒からうが空腹からうが、主人に任せた體、親が氣をもむには及ばぬ。唯盆暮にその主人へ、挨拶がてら顏を出せばよい事、度々行けば娘のかはゆいが一杯で、しみたれたなりして、流し元に意氣地無く働いてゐる體を見ては、可愛さうと心に思ひ、又そこの山の神が、外の女をとらへ荒れ出すを見ては、こちの娘もあのやうに云はるゝであらう、さても根性の惡さうな内儀様だと、世話にも成らぬことに、思ひ過しが出來て、路次の外へ呼び出し、どうだと聞けば、その娘がとてもよい事は云はぬもの。それも聞いてもどつて、心で濟ませばまだしも、内の愚癡婆に、娘がかうだと云つて聞かせるが最後のすけ、サアその婆が、理も非もわからず、堪へられなくなつて、そんな内におかれるものか。道理こそ此の間わしが行つたとき、おれがめろ〳〵と泣いてゐたから、どうしたと聞いたら、鐵漿を付けながら曲突の中へ、唾をしたとつて、お内儀様が目をむいて、叱つたと云ふことだが、なに田舍では、子供に小便糞を圍爐裏の中へさせるものを、唾ぐらゐしたとつてかまふものか。それにお客があつて膳の出る時、箸と間違へて擂子木を膳へつけて出したとつて、それを目の出るほど叱らしつたが、わしも若い時、奉公先で、飯櫃ととり違へ、おかはへ飯をうつしたことがあつたが、旦那も内儀様も、内障と

やらで目が見えさつしやれぬから、小言も何も云はしやれなんだものを。なにあそこの内ばかり日は照るまい、早く暇をもらつてござれと、矢も楯もたまらぬ樣に、爺親をせつくは母のならひ、極めてこんな母親は、娘が宿下りに、上州八丈か、縮緬のべんべらものでもひつぱつて來ると、サア低い鼻をひよこつかして悦び、鄰近所をひけらかしに連れて歩き、つひに齒の掃除もせぬうちから、鼠色の涎を流して嬉しがるものだが、大きな間違ひの八幡樣。ハテ田舎から初めて江戸へ出た時は、柳に蹴鞠を染めた、茜うらの布子一ッで出たらうから、それを忘れず、せいさいとめか、吝つて青梅縞でも著て來たなら悦ぶがよし、立派に著飾つて來たは、田舎の草深いところで育つた本原を忘れ、水道の水が染み込んで、段々惡く洒落て來たところ。そんな娘は、現在の親がたま／＼尋ねて行くと、オヤ外聞のわるい、もうそんなに來て下さるなと、えては親を神がり嫌ふものだから、可愛がつたところが、始終親の多足にはならぬもの、さう心得て奉公に出しもし、出もするがよい。ナウ親父殿、ア、口が草臥れた／＼。」

㊄　風和ぐ春の往來の花やかた、商人のよき衣著たるがおほき中に、紋羽太織の晝過ぎたる羽織を引つかけ、棧留の茶縞著たる四十餘りの男子、如何樣にも開口二三間ばかりの地借りと見え、酢にも味噌にもこき使ふ、赤頭の丁稚一人、供に連れたるが大屋に向ひて、男「さて／＼御尤も至極のお話、先

刻から承つて居りましたが、いづれ奉公人と云ふものはむつかしいもの、私も見世には手代ども四五人も使ひますが、よい人は無いものでござります。隨分と情をかけて、叱るべきところも、十に七ツ八ツまでは料簡をし、朝夕の給物も、私共より奉公人へは、三度に一度野菜をつけさせ、肴も毎日食べさするやうに致しまして、なるたけ不便を加へ使ひますが、兎角何にも役に立たずばつかりで、油斷のならぬには困り果てます。」「夫ア憚りながら、それはお前の御料簡が惡い〳〵。譬へにも奉公人根性と云つて、此方が料簡すればする程、つき上りのする者、丁度借錢も催促をせずに、だんまりでゐる處よりか、毎日うるさくせたげる方へは、どうでも拂ひ勝ちなもの。義理を云へば彼方此方、よくアノ男は催促もせずうつちやつて置く、さりとては氣の毒な事だと、心では早く濟ましたくは思へど、さしあたつてうるさく攻めらるゝ方を、片付ける樣なもので、奉公人も其の通り、是れは定めて親方の、大小言だらうと思つたに、よく料簡してござる、有り難いことだと、思ふこともあらうから、そんならそのやうに、已後を改めて大切に勤めさうなもの。さうはいかず、惡いことには乘りが來て其の方へ傾くものだから、何でも平生嚴しくして、成程親方は分らぬと陰口を云はるゝ程に、殼いつこくにあたじけなく、ひどくこき使つて、それがいやなら勝手にしろと、云ふ位にしてよい加減になるもの。ハテ世間によく云ふことだが、あすこの內は夫婦ながら虱の皮で、年中朝は白粥晝は引

割飯に、箕のたつた香の物も、一人前に二切れづゝ、茶もわかすが費えだとつて、月に一度か二度煮たなりで、後はぬるいので食はせ、鏡汁も五節句に顔を見せるばかり、定精進で不斷俎板や擂鉢まで、穴藏へ藏つて置くと云ふことだが、それにしては、よく奉公人が承知してゐる事だと、錢のない手合の口からは、不思議にも思ひやせうが、そんな内でもやつぱり人のいるだけは、奉公人も使つて居るは相縁機縁で、それ相應の人があるもの、結句其の内の奉公人は實體で、年季通りを滯りなく勤めるは、そんな處に辛抱して居る程の者だから、其の筈の事。又親方の料簡強い情深い處は、自然と見世がぞんざいになつて、朝も寢卷に細帶したなりで暖簾をかけ、湯にいつても内の前まで、手拭を天窗にのつけて歸る樣になるものだから、とてもよい事はねえものでござりやす。」男「成程々々、私も如才なく、罰利生はやつて見ますが、兎角手代どもに、しくじりの絶えぬは、二番目の奴が根性惡で、人のあらを見出しては陰口を云ひ、傍輩共の中の惡くなる樣な事ばかり、しやべり散らして、いさくさの絶えぬには、困り果てます。」大星「そりやあ一番よいことだ、そのやうな人が見世にあるはおめへ頓て色の白い手代衆を使ふやうな、大商人になりなさる瑞相、傍輩の中をも惡くし、憎まれる樣な手代があると見世に費えが出來やせぬ。奉公人が皆心よしで、殘らず中がよくて御らうじろ、ろくな事は仕出來さぬもの、氣を兼ねる奴が交つてゐるので、性根の惡い者は居付きやせぬから、し

くじるやつはしくじらして、また新しく抱へなせえな」 男「如何樣、それはさうでござりますが、ここは一つ難儀な事は子飼から居るもので、唯今は番頭役いたしてをりますが、生まれつきあたじけなくて慾の深い事は雁造りの雪隱といふ男、十露盤の玉を品玉に使ひ、筆先のちやうほこから盜むと見えまして、去年も二階で土用干を致しましたが、段々干し殖えのする衣類、臍繰金も大分溜めて、外へ預けて置きをるとのことでござりますから、私の身上に缺けのたつこと、いくら儲かつても、蟒が褌をかけずに飛脚を呑んだと同じことで、さつ／＼と尻へぬけるには困りますが、どうぞ仕方はござりますまいかね」 大「イヤその番頭殿はお前の所の福鼠、盜まれる身代はめでたいのだから、打捨て置きなせえ、それも盜んで吉原へでも持ち運ぶか、小茶屋這入りして、磯ぜゝりにでもかゝつて、埓もなく使ふやうな事なら、ソリヤ未練なしに追ひ出すがよけれど、はへつけても溜めて置く心なら、自分にしくじる氣はないものだによつて、帳面にも大概つじつまの合はぬことはせぬものだから、強敵なことはしやせぬ、唯むだ遣ひにやみと盜みかける奴は、お先眞暗になつて、途方も無い穴を開けるもの、さうでもなくて溜める奴はやつぱり親方の爲、何故と云ひなせえ、唯とつた金を遣はずに藏つて置く程の男だから、宿這入りをしても身上を稼ぎ出すは知れた事、其の時もしもお前の所が左前にでもなると、何時でも別家のことだから、合力させて身上を皆取らうと云つても、否應は云

はれぬ大法。彼方に延べさすは、此方の金を預けて置くも同然、精出して盗ませて置きなせえ。さういふ心の番頭は、自分が無駄錢を使はぬものだから、身持が固くて押しもきくし、氣が通らぬによつて、下々のしめしも嚴しく、陰では惡く云はれても、目先はきまつて見ゆるもの、下の手合がその眞似をしたがつたとて、道樂でない番頭に頭を押されて、その働きは出來ねえもの。それだによつて、ものに了簡するも、慈悲功德をするも、先の人によつて勘辨のあること。へらへいとに情深くしたとて、馬鹿な奴にかゝつては、何のおちやたうにもならぬことだから、大概にして置きなせえし。」

㊅日暮しへ出る道のほとりに、すこしの小屋掛けして、煤氣かへりし名號の一軸を懸け渡し香花を供へ、昔ぬき入れし額、たばこ庖丁の如く、眉間尺の法體せし樣な顔付きの坊樣、節だらけの机にかかり、當村地藏堂瓦の勸化と、往來を見かけて呼びたつるに、年の頃五十近き後家らしき女立ちどまりて、後家「もし瓦の施主につきやせう、一枚幾らでござりやす。」坊主「ハイ一枚十二銅づゝ。」後家「高いもんだね、儘のかは清水の舞臺からおつこちたと思つて、十二文上げやせう。そこへ書いて下さいまし。先祖代々の諸精靈、時節到來居士、頓死菩提の爲、そして家内安全無病息災で、長生き致しますやうに。」坊主「ハ、、、たつた十二文で、とんだ長たらしい事を書かせなさる。」後家「ホンニ女と云ふものはあたじけねえが持前、ちよつとしたことにも、損をしてはなりやせぬ。」大屋「さつき

にからおまへと、後になり先になり來たが、成程さうだ。兎角女中は物事質素にするがよい。そして
どうやら後家樣らしいが、女主の所帶は猶の事、始末をよくせねばなりやせぬ。併しお前は御亭主
のある後家御かも知れない。」 後家「さやうさ、亭主もたんとはござりやせぬが、確か七八人はござり
やした。」 大屋「さう見えやす。筑摩祭の氏子なら、鍋を車につけて引かせようと云ふものだ。時に御
商賣は何をなさる。」 後家「イエ〳〵まだ商賣はござりやせぬ、私もお恥かしい事だが、十四の年か
ら親達のために、勤奉公を致しまして、やう〳〵三十八のとし眉を下し、身儘になつて一人の母を大
切に、心一杯孝行をいたしやすが、今に黄金の釜も掘り出しやせぬは、天道樣がまだ御存じ無いか、
たゞしは誰ぞと間違ひはなされぬか、何の御沙汰も無いから、さう〳〵孝行にばかりかゝつてゐられ
やせず。念頃男は澤山あつても皆すかんぴんで、多足になる人はござりやせぬから、どうぞよい旦那
を見つけて、金をたんと借り出し、そして商賣はねつから元手のかゝらぬもので、直は高く賣つて、
よくはやる商ひがしたいと思ひやすが、何商賣がようござりやせうね。」 大屋「ハヽヽヽ、お前も角が
はえたら、犠も生のものでとらうと云ひさうな人、商賣を初めなさるなら、何でもよいから、商品
を高くして、たんと賣らうと思ひなさるなら、掛けうりにして物前が來ても、書出しもやらずにうつ
ちやつて置きなせえ。さうしたらがうてきに流行りさうな事だ。」 後家「ナニとんだ事を云ひなさる。

物を賣つた代を取らずに、商賣が出來やすものか。」 大屋「それだとつて元手のかゝらぬ商品を、高く賣つて金を取らうとは蟲がよい。お前ばかり智慧があつて、世間の人は皆三太郎だと思つてゐなさるか。一寸の蟲にも五分の魂、それ〴〵に、天照皇太神宮樣が守つてござるものを、お前にばかりうまい事をさせておくものか。そんなつまらねえことを云はうより、どこぞよい隱居樣の處へでも、茶呑み友達と云ふやうなことにはまつて、お袋ぐるめ世話になるがよからうぜ。」 後家「ホンニそれもさうかえ。しかし私は年寄は嫌ひだけれど、當座凌ぎに、どのやうな不景氣な男でも、上手を使つて甘い汁の垂れるだけは、思ひいれ絞り取つた其の金で、好いた男に商賣をさせ、一生樂しんで暮すもよからうかね。」 大屋「さう旨くいけばよいが、無躾ながらおめへの髮切をした處は、相馬燒の馬といふ天窗つき、下手な佛師のこしらへた佛樣と同じことで、横にふとりて四五百も後から、居敷を引きずつて歩くやうな風俗、誰が欺されて、此の大切な金銀を手離すものか、あつかましい。」 後家「おめへさんはそんなに云ひなさるけれど、人食ひ馬にも相口、器量ふうぞくにはよらねえもの、殊に私が後家めかしてゐるものだから、定めて色事には不自由してゐるだらうと、當推量して鼻の下の長いお方は、あそこからもこゝからも、ちゞれ髮の男が、女護の島へでも行つたやうに、ホンニうるせえといつちやァござりやせぬ。」 大屋「成程若い氣だぞ、それが一生の德でもあらう。しかしながら親のある

身はそれでは濟まぬ。そんなにうはついた心では、嘸お袋の苦勞が絶えまい、兎角親の氣を休めるが孝行だから、たとへどのやうな男でも、一生身を任せて、氣遣ひのない處なら、そこへ落ち着いて、お袋に安堵させるがよささうな事だぜ。」後家「ナニ私が母もそんな野暮ぢやァござりやせぬ。なんでもよい旦那にかゝつて、取るだけは取つて、後は好きな男に乘りかへると、それはノヽ通り者でござりやす。」大屋「コリヤア呆れたものだ。お袋までが一つ穴の貉、親も親なり子も子なり、大方母御も昔は何ぞの果てであらう。兎角勤めをした者は、人を欺しつけてゐるものだから、幾つになつても其の癖がうせぬもの、それは時節が違ひます。もう三途川の婆の處へ、養子にでも行かうといふ年頃になつては、世話をする人も、お寺の穴掘に手附けでもやつておきさうな人、うは氣な事はせぬものだから、めつたに錢金を使ふものか。たとへお前が物見遊山に、立派な形をして出ても、母親を供に連れては、總後架へたれる人と外見えねえもの。貫目がないからたま〳〵よい衆にかゝると、取る事ばかり先へ考へるものだから、直に愛想をつかされ、後には埒もない手合にたゞさまれ、因果と古血のかたまりが出來ても、持つて行き處がなく、産み落したところが、年代記にありさうな、首の二ツある精靈蜻蛉となるは必定、わしが惡い事は云はぬ程に、よくお袋と相談して、無分別をやめなせえ。前方私が知つた者で、京の深草の分限者、もう六十の上越していたつての遊び好き、御當地へ下り、

去る色茶屋へしけこみ、毎日女郎藝者を、大勢集めての大騷ぎ、されども相方ときはめた者もなく、如何にしても此の親仁、肝心の色事には、一向に目もかけぬ石部金吉、茶屋舟宿が打寄つて、ナントをしい者だに、此の大盡を手に入れたら、いつかどの金になりさうなもの、此の女郎衆のうちで、誰ぞ仕法をつけて見なさらぬかともどかしがるうち、海に千年山に千年住んで、頭の眞中に空地の出來た、禿山といふ女郎、人の煙草ををしげなくかわかし、輪を吹きながら云ふには、成程あの客人が、二十から三十までの内で、男自慢するやうな人なら、今頃はあつちの鼻毛でくゝりつけ、動きのとれぬやうな目に合はさうけれど、何をいつても六十餘りの堅親父樣、生まれつきが無器用で、薩摩芋の仕切取りに來たといふ風俗、しかも下戸で牀が嫌ひ、どこをとつてかきのめさうといふ手がゝりのない人、兎角その人が心の中で、算用合はす程の、誠に思ふことを持つて行かねば、附け込んで欺さるるものでなし、せめて聲なりとよければ、ほんに主の唄はとんだいきで、あだな聲だと、それからなりと附け込みもせうが、おれが唄は泣くやうだと、自身さへ見限つてゐられる程の破鍋聲。まんざらきよくるやうに譽められもせず。まだ此の上の欺しやうは、死なれた田舍の爺さんに其の儘でなつかしいと孝行ごかしに、持ちかけうより外はないが、よしく私が新手を出して、病みつかする魂膽がありますと、脣をそらして廣言を放ち、やがてその座敷へ出かけて、人が踊り騷ぐには委細かまは

す、隅つこうの方へ寄つて、物思ひありげに、顔を衿の中へ押しこみ、黙り返つてゐると、案の條その親仁が見咎めて、コレ貴樣はどうした、なぜそんなにふさいでゐるぞ。但しは此の座敷が氣にいらぬかと言はれて、此の丸山、さればでござります、さう仰しやればお氣の毒だから、打ちあけてお話し申しませう。貴方のお國は京の深草と聞いて、小さい時別れました姉樣のことがおもひ出され、懐かしさに、胸が一杯になりましたと、一調子低めて愁ひの思ひ入れ。夜は更けたり、此の親仁酒氣はなし、理に陷りてそろ〳〵這ひ寄り、姉のことを思ふとは、さては貴樣の姉は、深草にゐるかといふに附けこみ、左樣でござります、八ツの年別れまして、ことしで十七年、息災なか、煩つてか、つひに一度も便りは無し。去年伊豆屋の十河樣が、上方から歸つての話に、深草の墨染とやらに、勤奉公してゐるとのこと。たつた二人の兄弟、互の生死も知らず、こんなに離れてゐるかとおもへば、いつそ悲しうござりますと、見す〳〵の空泣き。調子に乘つて昔は小地面の一二箇所も、持つて居たもののやうに、素性をまことらしく言ひかけ、いま爺親はなく母一人を、勤めの内からはごくむやうに、譃を壹貫八百ばかりならべたて、是れに付けても姉樣と一緒に居たら、母樣へ苦勞はさせまいものをと、思ひ出す度毎に、上方が戀しくて、姉樣の居る處のお人だと思へば、貴方も外ならぬやうに思ひますと、けんほ梨子であけた鼻の穴を見るやうに、むしやうにスウ〳〵いつて、泣く眞似をし、親仁

の膝にもたれかゝつて、そろ〳〵ともつて參るに、此の親仁無常心になりて、頻りに不便に思ひ、それほどまでに姉を戀しく思ふならば、此の度そなたを身儘にして、國元へつれて登り、姉に會はしてやらうかと、軍のあるとき手明きでゐる、周倉のやうな、間抜けな顏して此の罠に引込まれ、亭主を呼んで身請けの事を掛け合はせ、そのうち禿山が母をも呼びにやれと、俄の騷動、使の者より早く勝手から、お袋のお出でと聞くと其の儘、禿山臺所へ驅け出し、母が耳をとらまへ、京の深草に姉樣が居ると譃をついて、それからのぼせかけ、こな樣達も、元は地主で大商人であつたが、今は昔に引きかへ、淺間しう暮してゐますと、よい衆の果ての樣に、客人へ吹きこんでおいたから、かならずさもしいこと言はずに、隨分と哀れらしくやりつけ、わしが留守中こな樣の賄ひ金、慾ばつてたんととらしやれと委細を呑みこまして、親仁の前へ連れ出し引き合はすると、かの祖母、借著の衣紋繕ひながら、不調法な娘に、御不便を加へられ上方へお連れ下されうとは、よく〳〵の御縁でがなござりませう。これが姉も貴方の方に居りますが、去年も御本寺參りに登つて來い、深草といふ處は、それはそれは賑やかな處で、奧山には、獨樂廻しやら豆藏やら、芝居もあり、いろ〳〵の見せ物もあるから、どうぞ見せたいと云つて寄こしましたと、耳をとつて鼻をかむやうな事を云へど、御江戸はじめての大盡、深草と淺草の間違ひたるに氣もつかねば、母親いよ〳〵乘りがきて、私共も、その昔は貴方

力にも負けぬ程の身代、つれあひが女郎狂ひに蒔き散らし、人の意見も聞かばこそ、大身代をちやちやむちやにして、揚句の果てには、大分の借金を、をしげもなく後へ殘され、不自由にして死なれましたが、後に殘つた私の憂き難儀、兄弟の娘共が、手を引いて袖乞ひもいたされず、せうことなさに二人の娘共を、賤しい勤めに沈めました。其の時の私が心、思ひやつて下さりませと、引き入るやうな哀れらしき長口上に、親父ほろ／＼と涙を流され、さて／＼いたはしい物語を聞きて、思はず袂を濡らしますと、茶屋の亭主を呼び出し、われら逗留中の遣ひ金とて、此の間貴様へ預けて置いた三百兩、もつて來てくりやれと、我が前へ取りよせ、ナント一座の衆中、いま母親の物語を聞かれたか。世界は皆あの通り、吾等も國元に娘二人持つたが、今の話を聞いて他所の事とは思はれぬ。親の心次第で、二人の娘を、女郎にしようと又相應の人の嫁にしようと、皆その親の一心から起る事。今あればとて金銀を澤山さうに蒔き捨てたら、此の冥加に盡きて、此の衆の爺親のやうに、身代を棒に振るは知れた事、是れはさきだたれたわれらの親達が、極樂の東門から覗いてゐて、わが放埒なる遊びを止めさせんと、兀山が母の口をかりて、云はさるゝ意見と思はるゝ、兎角遊びの自由な繁華な處に長逗留するゆゑだ。明日はさう／＼出立致さう。亭主明日の芝居の三軒つゞきの棧敷も變替へにやつて下されい。コレ兀山、こなたのお袋の教訓で、向後われらの一心を改めますから、その禮ながら、

爰で二歩か三歩ははずむ處なれど、その手のかゆい所を堪忍するが、御意見を用ゐるといふもの。お蔭で野へ出した、死人同然の三百兩の此の金が、蘇生つて無事に國元へ歸られますと、財布の口をしつかりとしめ、いづれもさらば〳〵と、暇乞ひして旅宿へお歸り。是れは〳〵と一座の藝者幇頭持、亭主を初めあつけに取られて、コレ兀山殿のおふくろ、よい加減にたはけを盡したがよい。今年中も逗留して、金を蒔くつもりの大盡を、そなたが口ゆゑ取逃したと、ぐんにやりなれば、さればでござる。娘が隨分身の上を哀れに、よい衆の果てだと昔を語り、歎きを云へと申した故、あの樣な氣の短い人とは知らず、よしない長物語に、あんまり氣を張つてしやべつたら、お腹が空つた。夜食食はして下されと、さりとは、厚かましい婆も有れば有るものだと、皆呆れ返つたといふ昔咄、わしが耳の底に殘つてゐたが、丁度お前方も其の通り、人を欺さうとかゝつても、向うにも荒神さまが、どつこいさうは虎の皮の褌をしめて、油斷せぬものを、何として〳〵。兎角無理に大金を儲けようと願はうより、地道な渡世を工夫しなせえ。なんぼふんだくに金が出來たとて限りのないもの、また三文も無いとて無いぎりにはしまはぬもの、千兩出して吉原の大門をうつたら、曲輪ぢうは濕ひもしようが、五十軒の手合はしめ出しにあつてまご〳〵し、又五丁町中で、ねつから餘德にならぬ、素見物もあればこそ、田町の酒屋は商賣が出來てゆくといふものだから、何も世界は案じたものではござりや

せぬ。お前もせかずに、とつくりと工夫して見なさいまし。」

㊆髭の毛に油氣絶えて、そゝくさしたる男、垢つきし萌葱の風呂敷包を脊負ひ、煙草入の金物落して胴中をこよりに、しばりたるをぶら下げながら、大屋の後にはしりつき、男「モシ／＼貴方は、とんだ捻つたことを仰しやるお方だが、ナント、私はいたつてむさい處の裏住居して火打箱程の世帶に、五合炊きの鍋尻を燒いて、今日を暮す一人者、近所にお屋敷方の金御用をきく分限者の娘、ことし十七八にもなりませうが、その美しさ、芋の子をむいたやうな頬べたへ、わんぐりと食ひついてやりたいと思ふと、其の儘鳩尾あたりがぞく／＼して、こたへられませぬから、隣のばゝあが折節そこへ、洗濯物の手傳ひに行くことを、知つてをりますによつて、ナント婆樣、あそこの娘は、片付けるさうだが、どうぞわしが處へは呉れまいか、きいて見て下されと申したら、此の祖母皺だらけな肝をつぶして、イヤ／＼とつけもない、此の間から歴々の地主株や、金持衆から、樣々手を入れて、貰ひかけられますが、兎角先の身代が不足だと、相談もせられぬ樣子、こな樣もあの娘御が欲しくば、十萬兩程の身上になつてから望ましやれと、一番にわしをへこませましたから、イヤ／＼さうでない、人の藏に積んでおく一萬兩より、わしが胸に貯へた金のはうが根強くて、息のあるうちは盡きるといふことがない。今日あつて明日無いは金、又今日なくても翌日溜るも金、欲しければ何時でも、儲け

る事を知つてゐるから、いアそれまでは當分用心がわるさに、世界中へ預けて置くと、太平樂を云つて聞かせましたら、なんの挨拶もせず、わしが顔をきよろ／＼見て逃げ出しましたが、氣でも違つたと思つたかして、家主へ吹きこんで其の晩から井戸へ蓋をさせ、長家中が刃物を藏してこはがるやうす。これはまた思慮分別もない、文盲な手合だと、私は可笑しくおもつてをりますが、倉の内の財は朽つることあり、身の内の財は朽つることなし。智は萬代の財といふことを、辨へぬ人心、唯當座の利慾に泥み、金銀ばかりを尊がつて、私のやうな智慧のたんとある者をば、なんでもないやうに安くするは、大きな間違ひ、金よりか智慧の方が尊いではございませぬか。あなたは何と思ひなさる。」

大屋「イエ／＼釋迦文殊の智慧でも、金銀には叶ひやせぬ。およそ金銀ほど尊いものはありやすまい。なぜといふに、金さへあれば主人へ忠も出來、親に孝行もなり、他人に信義も盡され、慈悲善根も自由になるは金の德。そんなら金の無い者は、忠も孝も出來ぬかと云ひなさらうが、その貧乏な者の忠孝も、やつはり金、喰ひ飲みはどこから出來やす、なんぼ智慧がしこたま有り餘る人でも、金が無くては、さう／＼は行きとゞかぬもの、現におまへがその金持の處の娘を、戀ひ慕つても智慧ではいかぬ。金を持つたら出來ようぢやアあるまいか。」男「イヤ先刻田畑の先の茶店で、貴方がどこやらの人に云ひなさつたことを、私聞いてをりましたが、人間程尊いものはない。どんな願望でも、一心さ

へ一節に凝る時は、成就せぬことはないものだと、おつしやつたではござりませぬか。スリヤ金づくにもよらぬもの。」大屋「そこでござりやす。最前私が云つたのは、神佛へ願懸けの事、先がものを云はぬものだから、こつちばかりの一心で叶ひもしやすが、お前の願ひは、先も生きてゐる人ぢやァないか、そんならこつちに、どうぞ叶へたいといふ一心があれば、先にもいやでならぬといふ一心があらうから、こゝで容易には出來ぬ理窟。あつちもこつちも人間、尊い處は五分々々、されどもお前の一心が強くて、向うの一心に勝たば、金はなくともその戀の成就する事もあらうけれど、先づはお前の一心が弱い〳〵。」男「ソリヤどうして〳〵。」大屋「まことお前がその娘の事ばかり、一心に思つてるる位なら、外へ心の移る筈は無いに、まだ娘の外に惚れてゐるものがある。」男「ナニとんだことを、その娘を除けて眞實外に惚れたものはござりませぬ。」大屋「イヤ〳〵娘の外にといふは、お前にやつぱりお前が惚れてゐる。とかく自惚といふやつがあるから、二道かけての戀だものを。娘を思ふ一心が弱いと云ふはこゝの事。それだから出來る氣遣ひはないが、全體一人や二人の女をあてに、戀したふとは器が小さい。とても惚れるなら世界中の女を、美しいばかり選り取りにして惚れてから、そこで金をこしらへる算段をしなさい。金さへあると、どのやうな硝子を逆樣に吊したやつでも、向うから持つて來やす。昔の淨瑠璃に、淡海公から頼まれて、満月といふ蜑が、龍宮から玉をとつて來て、

藏し所に困り、乳の下をかき切つて、玉を藏したといふ事があるが、昔の女はそれだけ野暮だ。ナニ乳の下をかき切つて、痛い目をせずとも、丁度よい藏し所を持つてゐるもの。今の女はそこをよく承知して、玉はおろか其の穴へは、田地でも家藏でも、むしやうやたらに引きずり入れる世の中。黑燒にせずとも、金銀は惚れぐすりに極まつたものだから、マアその金から先へこしらへる工面をしなさい。金さへあれば自分が手に惚れるにやァ及ばぬ、向うから惚れて來るから、兎角牡丹餅の雌のやうな、黄色な奴が無くちやァ、何の話も分らぬ〳〵。」

串戲教諭　六あみだ詣嗣編下巻　終

跋

一九先醒去年、六阿彌陀詣一編を著し、今年も春の彼岸中、板本よりの頼ひにて、もう一編とす、あられ、本木のもとより信心なれば、しかも其の日は雨あがり、沼田の如き道なれど、書かけし卷は東より、西ヶ原へと廻りつゝ、田端たばこを吸みながら、鼻の下谷を動かして、戲作のありたけ龜井戸の、底を穿ちし筆の文、串戲教諭の徳により、正路なりし行基菩薩、彫刻作者の開基にて、本の作者は十偏舍、はやるは手柄の高名偏照、十方世界の御買主より、阿彌陀の光も錢まうけ、本屋の仕合大吉利生。予も此の本の櫻木に、刻み殘しの木餘りへ、彌陀佛よりも亡言口を、一寸後書にしるす事爾云

壬申睦月　　緑亭可山識

六あみだ詣三編序

阿彌陀佛に、詣人のさまを視れば、佛頼んで地獄へ墜つると、かこつけの悪所狂ひに、佛の顔も三會目、地獄のさたも金次第と、しやれる息子あれば、鬼の留守に洗濯するをも知らぬが佛の姑女、鬼の目に涙こぼして有りがたがるあり、或は鬼も十七とつくりたてて、掃溜を出づる鶴あれば、鬼に鐵棒と、後生一遍に廻りしまふ年寄鳩、いづれ鬼神に横道なしとや、されど借りる時の地藏顔、忽ちなす時の閻魔顔とかはるは、世界の人情こんなもの歟と三編のいとぐちを綴りぬ。

文化癸酉春　　十返舍一九題

今日彼岸欲レ開レ鉢。
餘身貧乏雨晴稀。
無レ蓑無レ笠又無レ杖。
結句食レ犬引レ腰歸。

題彼岸　一休和尚

串戯教諭 六あみだ詣三編

東武　十返舎一九戯述

㊀後生を願ひおほせ、まんまと佛になりすませし所、ぶら／＼する蓮花の上に、常作衆伎樂とやらいうて、笙篳篥に耳やかましく、ものいふことも聞えず、菩薩天人の舞ひかなづるも、婆娑で見あきし歌舞伎芝居の所作事には似もつかず、唯眞の極樂といふは、生きて居る内、春の日の麗かなるに、心あひたる友みたりよたり打連れて、蒼々とせし野原へ出かけたるは、請合ひて十年ばかりも命を延ぶる氣の藥、内のいさくさも借金も、わすれはてておもしろやと、出るまゝにしやべりちらし、足のゆくまゝに道草をくらひどれの生醉は猶更なり。こゝに年のころ五十ばかりの男、風呂敷包と子供の著替などいくぢもなく肩にひつかけ、十二三の女の子と、七八ッばかりの男の子を兩方からひつぱりながら、日ぐらしの方より感應寺の境内に入る後から、四十ぐらゐの横にふくれた女、乳のみ子を負ひ、罌粟坊主の手をひきながら、三抱へもある棚尻をはるかあとに引きずり、額口から灰墨のまざりし汗をながして、やう／＼追ひ著き、女「ヤレ／＼人にはとんだ氣をもませて、不景氣な人だぞ。わつ

ちが此の子に小便やつて居るうち、斷りなしにつッぱしつて、ホンニ大體尋ねたこつちやァねえ、それにわつちが此のお腹であんまりかけたら息がきれる。そこらで休んでいきやせうか。」トある水茶屋へはひりおくの牀几に腰をかけて、休みゐるかの大屋づれの一むれを見つけて、女「オヤ／＼おめへさんがたおはやうござりやした。」大屋「ハヽァ王子の茶屋で一緒に休んだかみさまだな、おめへその大きな腹をかゝへてよく草臥れねえことだ。そして大勢子供衆をつれて、コリヤァ皆お前の御子達か。」女「さやうさ。」大屋「すさまじい子持だ、都合おいくたり。」女「ハイ十七を頭で、たしか十五人ばかりでござりやした。それに御覽じやせ、十六人めが、もうお腹に此の通りでござりやす。」大屋「ソリヤ毎年一人づゝだな。」女「ふたり産んだ年もござりやす。」大屋「それはどうして。」女「聞いてくださりやし、もう／＼うるせえといつちやあござりやせん。そのたびごとに親類うちや、近所となりから、酒だの肴だのと心づかひ、又數々といはれるが氣のどくさ、もう是れ限りで産むまいと、心安い醫者さまに聞きやして、石門とやら云つて臍の下に灸をすゑたり、其の上綿實や鳳仙花の實をたべやしてもいかな事、其のとしは一時にふたりまで、もう／＼子どもにはあきはて、いやで／＼なりやせんから、どうぞ子の出來ねえ仕樣はござりやすめえかね。」大屋「ソリヤ誰にきかずとも知れた事だ。おめへ御亭主の側へけつしてよりさへせにやア、子の出來る筈はねえに。」女「イエもう、亭主にわかれてから以來、ちやうど今年で五年あまり、

それから亭主を持つた事はござりやせぬ。」大星「それでまた、子の出来るといふはどうした事だ。」ト
りやおめへ外にいゝ男があるの。」女「ハイ世話になつてゐる人が二三人ばかりはござりやす。」大星「ハ
ハ、、、とはうもねえ。それがお座へ出されたはたしか、侍は二人の主に仕へず、女はふたりの夫
をもたずと、昔から誡めてあるとほり、そこが女の嗜みの第一。ふたりとなれば放埒もの、いやがる
ほど子の出来るは、淫悪といふものの報い。まだしも産のうへで命をとられねえがめつけものといふ
もの。女の風上にもおかれねえ。イヤはやあきれた人だぞ。」兄「モシ／＼わしはあの女のあにでござ
りやす。何もそんなに妹めをへこまして下さりますな。あれが働きで、家内中安楽にくらしてゐま
す。なるほどことなら、二三人はおろか、二十人も三十人も、男をこしらへさせたく思つてゐますが、
子どもの出来るがいやなばつかりで、それにきめておけと言ひつけておきやした。」大星「ハ、、、
おめへ、女中の兄御か、見たところが目も動く、口もきく、生きてゐる人に違ひはねえが、どこの国
にか、妹の陰でくらすをよい事だとおもつてゐる兄があるものか。いはゞ男と生まれたかひのない、
いくぢなしのひやうたくれといつたら腹をたゝなさらうが、ホンニ論にも評定にもかゝらぬといふ
はおめへの事だ。」女「その働きのねえやくにたゝずのひやうたくれどのを、わつちがはたらきで、暑
い寒いのもきぜずにおくは、ヤンヤ貞女とやらおやあござりやせんか。わつちも以前はれつきと

した侍の子。ハテ侍の身の上にも、ふたりの主をとらぬが道と、浪人して難儀さつしやる人もありませうが、その人ばかりで女房子のないものなら勝手次第。親も子もある身で、一分の道をたて、倶に年寄つた親にまで難儀をさせてもすみやすか。それもあの男は忠義ものだ、ふたりの主人につかへず、いまだに浪人してをると譽められたところがその身一人の譽れ。うぬが身ひとつをほめられようと思つて、親や女房子どもにまで難儀をさするも、あんまりほめたことでもござりやすめえ。それだからわつちも縦令人が道樂ものだの、性惡だのといはうと儘、兄や子供を安樂に過しさへすりや何といはれても構はぬ氣、こゝらが膽でござりやせう。」大星「麥藁細工の唐人笛ぢやあるめえし、おつにひねくつた理窟をいひなさるが、なるほどひよつととつぱづしてきいたら、尤もにおもふ手合もありやせうが、さうは虎の門の金毘羅さま、誠おめへが眞當の人なら、それ相應の女の手仕事するか、商ひでもして夜の目もねずに稼ぎ、家内の衆を養ふといふことなら、ソリャ極上々吉の貞女ともいひやせうが、ナニ自分が好きな道から、わが儘にしたい事してそれから繰り出す錢金、恩にかけて御ていしゆをはなつたらしにするは非道といふもの。道にかけたこととして世をわたるが何の手柄。それをせまいとて、銘々に骨を折る渡世ぢやァありやすめえか。しかし理非もわからねえむちやくちやな女の鼻のさき智慧ながら、おめへにはちつと脈があるが、ァ、氣のどくなは兄御だわえ。鼻の下が京間で

十間口もありさうなおかた、それでも見事犬猫をしからせては、天晴ひとりまへに見えやせうが、一向なしろもの、あきなひも何も出來ねえ無器用な人と見える。」女「イヤぬしはそのくせとんだ器用もので、讀書算用は達者なり、何あきなひさせても、賣ることが上手で、小細工は人のするのをちよつと見てもやるものではなし。又口をきかせては、どなたの前でもへこむといふことはいつかうござりやせぬ。」大星「その器量で又、おめへがたをすごす事のならねえといふはどうしたものだ。」兄「イヤわたしは生まれついて、唯ぬらりくらりと遊んでゐる事が好きで、手習はしやしたが、書く事が嫌ひで、十露盤も二十年このかた手にとつた事がなし、朝寢がすきで、夜はいつまでも起きてゐたくて、油火がきらひで、不斷蠟燭をともし、三度の食事も菜がなければくへず、よいものは著たし、酒がすきで、錢金を見ると人のものだの、わがものだのといふ差別なく、みなつかつてしまはねば氣のすまぬ性分。常にすわることがいやで、むづかしい人とはつき合ふことが出來ぬくせに、どこへでも出たがり、錢にもならぬ事に世話やくことがすきで、女といふと一ばんがけにのろくなり、おさきもので見えをする事がすきで、氣のつまつた事がきらひで人のいふことをきかず、自分のおもふとほりにせねば蟲の得心せぬ我儘もの。これで何商賣でも出來よう筈がござりませぬ。」大星「なるほど、えては何かにつけじよさいなく、口巧者で發明な人だといはれる手合に、錢のある者はひとりもないもの。

兎角外のことに利口でも、身上をもつことに利口でなくては、太郎兵衛駕籠およびやれで、何にもならぬことゝ。人中で口もきかず、役にたたずといはれても、商賣を精出し、金を溜めるやつが一番の利口もの。金さへあれば、おのづから御公儀樣の掟をも背かず、先祖をも心よくまつり、家内もゆたかに、商賣も繁昌するといふものだから、體も達者で、長生もするといふもの。おめへがたは惜しいことだに、妹御も、ひと器量ある人さま、洗濯をする時は尻へ足駄をはく法もあらうが、あにきを尻にしくといふは女の道にはない事。兄御も又まんざらの人でなし、心持を取直して、ともかせぎにかせいだら、金持になるは請合ひの西瓜。てうどきかせるはなしがありやす。わしが近所に、さる大店につとめた手代、傍輩と意氣張りづくのわけがあつて、主人へ無理に暇をねがひ、そこを出たが本當なら、金の百や二百は貰つて出ようといふ處、半途で出るから壹文も貰はず、著類までおさへられ、丸裸のまゝ追ひ出されて、ひとり小借家をかり、なんぞ商賣を始めて、今にこれ見たかといふ身の上に成つて見せうと、心は彌猛に思へど、ちやんこゐが壹文もなし。幸ひ人が世話をやいて、お屋敷がたに年久しく勤めた女中、少し老女房なれど貰ひうけ、祝言して三日めの晩に、その男が女房にむかつて、委細に身の上をうち明けてはなし、なんでも、一かせぎして仕出したいが、ナントそなたの衣類のこらず貸してくれまいか、それを質屋へ打殺し、その金を元手にして商賣が初めたいといふと、

女房しばらく考へて、なるほど貸しませう、まだ馴染もないわたしへそんな事いはしやる、心いきがおもしろい。兎角世界はあつかましくなければ金は出來ぬもの、おまへの氣性呑み込みました。衣類はおろか、櫛笄まで殘らずしんぜますほどに、質におかずと賣りはらつたら、少しなりとも金高が餘計になりませうから、心置きなく賣つておつかひなされと、簞笥の抽斗うち明けて、さらりと亭主へつき出した。此の氣性、女には珍らしい豪傑。サアそこで男もさるものだから、なんでも此の女を相手に、夫婦ともかせぎにしたら、今に身上仕出すであらうと、それを元手に商賣をはじめて、案の如く夫婦夜の目もねずにかせぎ出し、五年たつと、間口五間の太物店を出し、今ではきん／＼と、手代あまた、下女物縫ひまでかゝへて、何ひとつ不足のない身代になられやしたが、おめへがたも、今こそ料簡の行き違つたことはあれど、まんざら療治にかゝらぬ病人といふでもなし、こゝろをあはせて、何なりともひと商賣はじめて、稼ぎなさつたら、よささうなもの。ナント今夜から、寢ものがたりに、とつくりと相談をして見なさいまし。」

㊂花の盛りは雲の上野とよみたりし、御山内の曠々たるに、たばこの煙輪をふきながら、はつち尻端折りにて、四十あまりの、店ものめきたる男、大屋に向ひて、男「私は先刻からあなたがたのお後についてまゐつて、おはなしを承りましたが、あの衆とはあちらこちら、私は又子煩惱で、ほしいと

おもへばとんと出來ぬものでござります。若いときから嚴しい親方に勤めまして、一向自身のあそびには出ませず、此のとしまで、吉原は北をむいてをるやら、東をむいてゐるやら、知らぬくらゐで、勿論色事などと申すことは、怪我にもいたした事がなく、漸く四五年以前別家いたしてから、さいはひとちゞれ髪の女房をもちまして、サア是れからだと、若い時からの貯へをいちどきに精出す程に、是れではさだめし子どもも澤山に出來るであらうとぞんじましたが、いかな事、一向女房が、お腹のふくれる樣子も見えず、是れはさだめて田地のわるいのかと存じますればさうでもなし。かやう申せばちと自慢らしいが、まことに古今無雙の上田、是ればかりはわたくし人しれず淚をこぼして、每夜感心いたす程の事ながら、出來ないといふは、よく〳〵子に緣のない性分とぞんじまして、あらゆる神佛へお願ひ申し、その御利生やらえいやつと男の子ひとり儲けましたが、三ツまで育てまして、此の閒驚風とやらでなくなしましたから、げんなりいたして、最早商賣も嚊衆の上田も棚へうちあげ、死んだ子の年ばかりかぞへて、少しも忘れませぬから、自然と體が御覽の通り鐵火箸のやうに瘦せましたが、コリヤどうしたら子の事がわすれられませうか、御勘考はござりますまいかな。」大星「いかさま廂合の瘦犬、ながしの下の泥鼠、子をおもはぬものはねえが、おめへはその子の死んだのを、死ぬまじきものの死んだやうに思ひなさるか。」男「さやう〳〵。日頃病身者ならば、そのはずとも思ひ

あきらめませうが、いたつて無病で、疱瘡痲疹もかろくいたし、風ひとつひいた事もない生まれつきでござりましたが、ふと驚風で目をひき付け、それなりけりにこつくり往生。是れが不思議ではござりますまいか。」 大屋「死んだばかりをふしぎに思ひ、生まれるはふしぎではござりやせんか。生きて動くも皆ふしぎ。たとへていはば磁石の劔先、北の方へ向くを見ては、こいつ妙だとふしぎがれど、その磁石をこしらへる人の手はふしぎにおもはず、世界みなふしぎでない事はひとつもないに、ねつからふしぎとおもはぬから、死んだばかりをふしぎにおもひ、かれ是れと心を勞めるといふもの、生まれたをもふしぎに思はば、死んだとてさのみくよ〳〵おもふほどの事はあるめえぢやァござりやせんか。」 男「なるほどさやうでござりますが、畢竟それといふも、神佛の告子だけ、告子といふものは短命なものだと聞き傳へましたが、彌左樣でござりますかね。」 大屋「ナニ告子を短命だといはば、世界の人はひつくるめてみな告子。お前の處の子許りではねえ、禽獸蟲魚、草木の出生するまで、ひとつも告子でねえものはござりやせぬ。」 男「イエそれではちと御料簡がちがひませう。人皆告子ならば、ナニ男と女が汗水たらしてこしらへずとも、ひとり手に出來さうなもの。」 大屋「さればこそ大事の事をおたづねなされ。なるほどおめへのいひなさるとほり、いかに夫婦よつたればとて、四角ばつて唯白眼くらばかりしてゐては出來ず。今の汗半になつて精出すことがあるゆゑに懷妊するといふも

の。その精出す人、やつぱりもとは天地の告子。こゝで告子の悟りをひらきなせえ。はやくいはば田地と種は告子、耕すと種蒔くは人のちから、人力と告子と合體して、五穀稔るとおもひなせえ。はて人が人をうむとおもひなさるから大間違ひ、人に因つて人が生まれるでござりませう。」男「然らばもうひとつひねくりませうが、世界みな告子ならば難産といふはない筈。ところに難産するもの間々あるはいかに〳〵。」大屋「それは其の人の不養生、人力の過不及があるゆゑ難産をするといふもの、それだから鳥類畜類には難産がござりやせぬ。」男「なるほどそれはわかりましたが、どうもあきらめられぬは恩愛の道、かはゆいばかりでもない。先祖からつたはる家名、子がなければそのまゝ退轉。このところが歎かはしいから、死んだ子の年算へて悔むのでござります。」大屋「ソリャおめへ實子がなければ養子でもして、名跡をたてればいいぢやァねえか。」男「イヤ養子では何かにつけて水くさくて、しつくりとはいかねえものだからむつかしい。」大屋「それがおめへの料簡違ひ。世界に子を貰ふほど徳なことはねえに、はてむかうで育ててくれて、もうせわのねえ時分に貰つて、小用を足させ、もし實體で氣に入つたならそのとほり、不埒ならば何時でも實親のかたへ戻すに、何もいさくさはないといふもの。こんな丈夫なことはねえぢやァござりやせんか。そのうへ養子には義理といふことがあつて、コリャ長松、こゝへ來て足をもんでくれろといひなさつても、いやながら義理ある子だから

ハイと其の儘もみもしやせうが、實子ならなんとして、親を茶にしてさうはいかず。ソリヤもう世には孝行な者もありやせうが、まんが稀な事、今時の子どもなか〳〵甘い酢ではいけやせぬ。世間に繼子根性といつて、貰つた子に難をつけるが、ソリヤみな養ひ親の心しだい。今おめへがいふには、もらつた子は水くさく、しつくりとはいかねえものだといひなさつたが、つまらねえの初まり。そのもらつた子が水くさいやら、水くさくないやら、まだもらひもしねえさきに知れもせぬものを、もうこつちからさきぐりして、貰つた子は水くさいといひなさるは、先づおめへの心がさきへ水くさいからのことだ。他人がこちらの子にならうといつて來るものを、向うに邪氣はない道理。ハテ親を貰ふではなし、自分の目下につける子をもらふのだものを、こつちの料簡がよければ、それにつれてゆくは必定。わけへだてするは皆其の養親のわるいから、智慧のない子に智慧をつけるやうなもので、どうやらかうやらあつちをもわるくするのでござりやす。はて養子でも實の子だとおもへば、何もいさくさはない道理。ほんの子に獄道が出來ようやら、もらつた子に實體なものがあらうやら、きまつたことのない世の中。その養子の實體なよりか、實子のあはうが一倍可愛いは親の私、先祖よりの家名へ對しては一言もない理窟。既に今、私は子煩惱だといひなさつたからは、子のかはゆいに、人の子だの、わが子だのといふわけ隔てはありさうもないもの。よくとつくりと御思案が肝心々々。」

㊂「是れは此のあたりに、手跡指南をいたす筆道とまうす者にて候。我あまたの弟子をもち、五節句其の外天神講疊錢とて、過分の金錢を儲くるといへども、今において山の芋鰻にならず。貧乏はやはり貧乏。いかゞいたしたら金持にはなりませうぞ。御判斷がうけたまはりたい。」大屋「ハアあなたは手習のお師匠さまか。一生人の財となることを敎へなさる御商賣。其の冥利でお金がたんと出來さうなもの。はゞかりながら子供を取扱ふは、その親々をとりあつかふのだとおもひなせえ。なぜといふに、親はわが子のいふことを、僞りでも實におもひ、他人の實は譃にするものだから、師匠さまがかういつたの、どうさしつたのと告口するたびに、善いはよい惡いはわるいに尾がついて、いさくさのあるもの。それが御商賣不繁昌の基。」師匠「いやこれは貴公の明察ちがひない事。いづれ人の親といふものは身勝手なもの。お聞きなさい。我等弟子の内にも、物前毎に百疋、あるひは南壹、又は鳥目二百銅の旦那もござるが、それ〴〵の身代に應じて高下のある事。きはめてその二百旦那がやかましく、イヤ師匠のひやうたくれめ、おらが所は二百だけれど、物前にはきち〳〵と、つひに一度もやらずにおいたことはねえに、それにろくそつほうに敎へもしねえで、此の倅めは無器用だと、目のかたきにして叱りやァがつて、そのくせ日がないちにち、たばこの十六文買つてこいの、イヤ炭團を八百屋でとつてこいのと、使ひあるきばかりさせやァがつて、いめえましい師匠めだ。金持の所の倅ども

をばおばうさま／＼といやァがつて、此の間もおれが伊勢吉のかどであつたから挨拶したら、ホンニ龍宮の火の見にひつかゝつた土左衛門を見るやうに、がうてきに高くとまりやァがつて、ろくにものをもぬかしをらぬ。一分二分づゝ禮をする所よりかァ、おらがところの二百はよつぽど張り込んであるのだに、わけ隔てをしやァがる。いつそのこと、アノ師匠をぶちあけて、外の師匠へやるべいと、こんな得手勝手の不理窟いふ親達が澤山でこまりますが、ナントよくものをつもつても御覧じろ。おらが所は二百だけど、きち／＼とつひに一度もやらずにおいた事はねえと恩にかけるやうな言分、何の出すべき筈の謝禮を唯でもくれるやうに、又一度でもよこさずにおいてすむものか。そして金持の子どもと、貧乏人の子どもと、わけへだてをするとの不足。コリヤしさうなもの。ハテ一分下さる所は一分だけ、二百の所は二百のやうに取扱はねば、一分出した人がうまらぬといふもの。それを二百で一分の人とおなじやうに取扱はれようといふは、茶番狂言をして惚れられようとするとおなじ事、ちかごろおしのつよいといふもの。コリヤみな錢のない手合のよくいふことだが、もらふものの身になつて御らうじろ。金の威光をたててやらねば、一分のはうから尻が來ます。二百の尻はとりはづした處が高で二百、ちつとは不承もしうちの事。さきの心が僻んでゐるから、とてもたりひずみなく、氣に入るやうにはなんとして／＼、是れにばかりはあやまりますて。」大屋「なるほど／＼。桟敷より

か切落しがやかましいもの。さりながら、どちらもお客。わけへだてをしられては誰しも合點はせぬ理窟。無躾ながらおめへの饗應に、あてはめやうがわるいからのことだ。なぜといひなせえ、一分は一分、二百は二百だけに取扱ひなさるから氣がしれて卑劣にきこえやす。それを一分の所は二分のつもりであひしらひ、二百を二朱だけにあひしらつてごらうじろ。さきにいさくさはいひやすめえ。しかし商人とちがひ、長袖の御身分、欲情に拘はりなさるは御料簡ちがひ。それをおめへの心では、二百の弟子を不足におもひなさると見える。はて謝禮だからいくらといふ値段の定まつた事はなし。むかうからよこし次第。其の代り一分のお弟子だといつて、別にふたりまへをしへもなさるめえし、二百も一分も世話のかゝる處はおなじ事。こゝでいれあはせていくから、なにも二百だとつて不足におもひなさることはありさうもないもの。さりとてはおめへの業に似合はぬ卑劣々々。」

㊃山寺の春の夕暮來て見ればと、舌もまはらぬ衞足にて、入相の鐘の鳴るころ、道づれの下戸の首にまきついて來る生醉。大屋のうしろから肩さきへ突きあたりて、生醉「アイタ、、、、誰だと思つたらやつぱり知らねえ人だ。コリャ御免なせえ、酒に醉つたなまよひでござい。」大屋「生醉とあればしかたがねえが、とんだめにあはせた。」生醉「ナニなま醉ひだから仕方がねえ。コリャおもしれえ。きさましかたがねえとつて、おれこまるものかえ、くそたれめが。」大屋「なるほどわりい酒だぞ。」

生酔「ナニわりい酒だ。くそがあきれらァ。酒ほど結構なものはねえに。こなたは下戸だな〳〵。道理こそ酒呑みの徳を知らねえな。ほんのこつたが、酒は愁への玉帚といつちやァ、おそらく借金が山ほどあらうが、たとへどんな屈託があつても、一杯きこしめすが最後の助、さらりさつと掃き出して、泣顔もたちまちわらひ顔となるは酒の徳。まだある〳〵、素面のときは、心細くてひとり夜道など出来ねえものも、不思議や酒がのりうつると、サァ太平楽がすさまじい。エヽなんのこつた、とはうもねえ。だれだとおもふえ。酔倒れの權八さんといつちやァ、おそらくおれがちかづきの人に誰知らぬものはねえわえ。ほんのこつたが、大山の天狗さまが、猪の熊の提灯ともしてこようが、粂の平内を居催促にやつたよりかァ、まだちつとびくともせぬ男だなどと、根性骨がふとくなつて、野でも山でもよる夜中、あるくことを絲瓜ともおもはず。又いひにくい事も、酒の上ではどいつさまの前へ出ても、頓著は木薬屋、巾著はこしと、取つたか見たかにやつてのけるは酒の徳。下戸にはない事〳〵。ナントどうでござえやす。」 大屋「ハヽヽヽ、酒の醉ひ本性たがはずと、おめへほうだらになつて居ながら、おつなことをいひなさるが、ソリヤァみなおめへの勝手料簡。なぜといふに、その酒の徳だといひなさることは、みな酒の過といふもの。はて世間の人、たらふく長者でも、貧乏人は猶の事、それ相應に愁へのない者はひとりもないに、そのうち、主人や親兄弟でも、十死一生に煩ふか、死に

でもしられた時、おめへは酒で愁へをはらひ、泣顔を笑顔にするか。又ひとり夜道をゆき、野でも山でもおそれなく、夢中作左衛門になつて氣が強くなるをよい事だとおもひなさるか。ソリヤアみな災ひをまねくので、身知らずといふもの。又酒のちからでどなたのまへでも遠慮なくしやべりちらさば不禮をもし、不理窟をもいふはしれた事、畢竟さきが生醉だと思つて聞きながしにすればこそ、あくる日あやまつてあるく種をこしらへるやうなもので、なんのそれが酒のとくでありやせう。」生醉「イヤきさまがうぎに酒呑みをへこませるな。めつたにやアへこまぬ〳〵。それがすなはち酒の德といふは、どんな無禮なことがあつても、あれは酒のうへだからと人が料簡するぢやアねえか。これ損ではねえとくであらう。」大尾「イヤ又人によつて、あの男は酒をのまぬがまだしも、とり得だといふこともあるから、これは五分々々、勝負なし。こゝでめでたくをさめませう。」と、廣小路なる長福寺にまゐりて、六番までうちをさめぬ。

串戲教諭　六あみだ詣三編（大尾）

自跋

天子の劍、宰相の劍は既に沽りぬ。今一振元帥の劍あり。これを沽ふ人先生ならではと、張良のちやらほこに乗せられし、韓信これは迷惑と天窗掻かれしが、西蜀への通り劵を貰ひて、終に漢家四百年の基をおこしぬ。それにはあらねど、予が此の六あみだ詣、おまへならではと、雙鶴堂へ押賣りせしに、偶中の評判よく、次編三編にてたち消えのせざるうちと、筆をこゝにおきたるが、さるにても作者よりは版元の賣上手と、目利きせし子房もどきの予が當推、ナントそこらでござりやせうと爾云。

文化酉春　十返舍一九誌

討ちは致さぬ
金がかたき

世中貧福論

自序

鳥が啼く東の都を立ちて、おしてるや難波江の蘆の假寢にやどりしは、今年如月の頃になん。徒然なるまゝに、いにしへの浮世草紙に名だたる作者、二萬翁西鶴法師の慰本を見るに、言葉の林しげりて風流の花さき、こゝろのくさ〴〵生ひて玄妙の實をむすべり。予此の風製を慕ひ、及ばぬ筆をはせて通俗巫山夢といへるをあらはし、彼の地の書肆にあたへてかへりぬ。猶又その餘風しのばしく、再び西鶴の唾を嘗めて此の卷を編る。元來商家軍配といへる原本によりての作意なれば、自分の文談のみにあらず、人の褌に角力をとる、貧福の勝負附は智力もおよばぬ運次第なる、世の人の因縁果のことわりを、東西にわかちてかくばかりにこそ。

于時文化壬のとし申孟旦

東都　十返舍一九識

巻中標目

上之巻

一　禍福のまはり仕掛は前生の引道具

二　貧福は降つて涌く身代の棒振蟲

三　金銀も内證はめでたいことの累なる難儀

中之巻

一　宿駕籠の寐耳に水の洩る茶椀の掘出し

二　當の違ひは金よりも延びた髭題目講

三　頓て菰を著る親仁が六十の筵破り

下之巻

一　果報は寢て松の位　預人は半分の主

二　邪の胸に綴蓋した破鍋後家の色咄

三　手盛を喰逃げしられた慾の皮のひつぱり蛸

四　過去の惡業身に積る雪の夜の發心

通　計　十　條

討ちは致さぬ金がかたき　世中貧福論上卷

東都　十返舍一九著

一　禍福のまはり仕掛は前生の引道具

五十年ぶりにて小便せし盧生が夢の半分。二十四年の榮華の春も打過ぎ、壽永の秋に末期の水の鹽辛きを飲みて、八島檀の浦の土左衞門となり、龍宮の火の見に引つかゝりうせたりし平家の一門が、どかおちの盛衰かかる高位高官の人々さへ、長者二代なしの諺に洩れず。ましてや民間卑俗の身、貧福のまはりあはせは其の年のあたりはづれ。煮てかためたる事のなき世の中は、塞がつてある雪隱の如く、うんをまつには如くべからず。されど棚にある牡丹餅にあらざれば、その運をとり得ること積善の家に限れり。さるに仍つて朝暮身の行ひに必ず懈怠すべからず。唐土の花容は美しけれどもとんだ肝のふとき女、陽虎は盜人なれども、人相のよき男にして、心はかたちによらざる事、しみたれたる破れ著もの引つぱりし福の神あれば、當世模樣著かざりたる貧乏神あるがごとし。とかく親の代に

金のなる木を育てしもの、子にいたりて、此の木一本を目のかたきにして、いまだ實の熟さぬうちからむしりちらし、はては木も枯らししまひて、萬代不朽に動かさぬ積りの石の手水鉢銅樋までも、見たふしやの米櫃へおし入れ、家居は咸陽宮を布ぎせにして、粉屑でかためたるごときも、借金の淵にどんぶりこと投げ込み、二條の后の驅落にひとしく、きたまゝの其の日ぐらしとなるものおほし。されぱむかし〳〵平氏亡びて鎌倉一統の武威かゞやき、萬民枕を泰山のやすきにおく時にあたり、西の國にて糠俵百萬石をとりたまふ、太守何某殿へ仕おくりせし持丸長太郎といふもの、さしもに父祖が大丈夫にかまへし身代の堤、借金の淵より切れはじめ、住みなれし家藏もかしかたへ流れこみて、其の身をよすべき處もなく、故郷を出て鎌倉にきたり、百貫のかたにやりのこせし編笠に、紙衣すがたの破れかゝりしからおもひつき、紙屑拾ひとなりたるは、蛙の面に馬の耳もちたる、身のなるはてぞ淺ましけれ。しかるに或日長太郎、例の紙屑籠に拾ひためて立ちかへる途中にて、ふしぎや籠の反古のうちより、駄菓子やの紙袋見るごとき黑き玉、おなじいろの筋を引きてとび出で、ひらめきゆくにぞ、長太郎稀有の思ひをなし、是れは未だ年代記にも見あたらぬ珍事かなと、此の玉のあとを慕ひゆくに、扇ケ谷一丁目の角屋敷、近年の出來分限、始末から儲け溜めたる多羅福や孫左衞門といへるものの金藏の窗より、金色の玉ひかりをはなちて飛び出で、かの紙屑籠より出でたる玉と空中に行き

合ひ、新道の番屋のうしろへ、此の玉二つおつると見えしが、黒き玉は澀紙いろの瘦せがれたる、むさくるしき親父となり、手に澀張の團扇を持ちたるは、裾貧乏の神司と、看板うたぬばかりに見え、また金色の玉は、きん／＼たる一歩小紋の羽織に、桐のとうの紋付、小判縞の小袖、豆板絞の下著、二朱きの帶しめたる、福々しき男となる。是れ福神の重手代にして、始末大明神の落胤なり。貧乏神に向ひて、密かにいふを聞けば、「われら是れまで扇ヶ谷の多羅福やにありて守りし故、僅かなる小間物の仕入れより、今五六萬兩の分限となりしは、是れ過去よりの仕合の峠にして、最早此の上の果報は、親父ありがたい國へ宿替へし、跡とりの息子、かかる福家へ養子となりきたりし仕合はありながら、前生にて蒔きたる種なければ、親父一代限りの福力なり。これによりて、われら今日より多羅福屋を立退き、此の新道に近年不仕合うちつゞき貧苦にせめらるゝ、がらくた道具やの正作といふ者、以前は相應の身代なりし故、今において親類緣者には、歷々のはらふくれあれども、つひにびた錢壹文、無心合力をうけぬ篤實もの、貧乏の花ざかりも、やうやく今散りかゝりて、洪福の實のなる時いたれば、このかたへ立越え、内外をまもれと、福神達の指圖により、世にきこえたる有德人の福を削り、正作が貧と入れ替へに參る處なり。貴樣は是れより、かのたらふくやへまゐるべし。」と、申しわたしければ、貧乏神聞きて、「さあらば仰せにまかすべし。さりながら若し其の家に、果報力の殘があ

つて、意見などいたす手代はござらぬか。」と問へば、「いかな〳〵悋氣して泣きわめく筈の女房さへ、心がしやれて男をせくは初心の至りと、宿六が餘所へ出る時は、手づから小袖とりきせ衣紋繕つてやり、わが夫ながら、出立榮えのするよい男ではあるぞと、後から團扇で貧乏をあふぎたて、そなたを待つて居るやうにしかけておいた。氣遣ひなしに行かれよ。」と、互に聲を合はせて福德貧乏々々々々と、三度祕文を唱へ、またもとの二つの玉と化して、兩方へとび去りしは、奇なるかな〳〵。

二　貧福は降つて涌く身代の棒振蟲

旦に星をいたゞきて、寒前に酒屋の米を蹈みに通ひ、夕には月に向ひて草履わらぢをつくり、元手なしにすたりゆく藁屑までも拾ひあつめて、錢さしにこしらへ、僅かの錢からつなぎためて、次第次第に富貴の身となり、扇ヶ谷壹丁目の角屋敷をもとめ、商ひの工夫するにも、煙草はのまず酒も呑まねど、小間もの見せを出して晝夜精出し、始末を第一にし當時指折りの分限の數にいりたる、多羅福や孫左衞門前生の果盡きて此の度の大病、おもるとても乘物醫者を呼ぶべからず、必ずたかき人蔘など用ゐるな、唯金銀こそ大切なれと、養子孫太郎に、是れをいひ死して七十古來稀なる拵手と、同商賣のものども、死顏を拜みにあつまりける。さるほどに此の養子孫太郎といふは、近江の國の百姓の

倅十歳の時竹に虎の有松染著て、赤頭ふりたて此の家にきたり奉公し實體に勤めおほせ、親方の見出しに預り、養子となりしこそ理なれ。此の孫太郎養父にまさりて、人のにくむほどあたじけなく、親類出入りの下々までに、記念とて切れ一尺箸かたし散らさず。ありがね五六萬兩、家藏諸道具ともに、手も濡さず丸取りにしてやり、三日の仕揚げも貰ひものにてすまし、四日めより見世をあけて、家業をのみ大切とおもひこみ挊ぎけるほどに、此の頃こゝに來りし、貧乏神も呆れはて、是れは福神の重手代が我を一ぱいはめしか。但し名所を聞きちがひて、福力のつよき家に來つるかと、尻もすわらず貧乏ぶるひのみして見合はせけるところに、狐が崎の困窮屋といへる大家身上潰れ、貸方三十七人寄合するにつきて此のたらふくや孫太郎も小間物代金二十兩あまりも滯りあれば、賣掛の頭とて、仲間廻狀來るにつけ、貧乏神よろこび、扨こそ損毛の口あいたり。此の弱みよりつけこみ、今に身上を棒ふりむしとなすべしと、澀團扇をしやにかまへ、ひだりまへの裾をからげ、すまたを踏んでぞまちかけける。頓てかの仲間立合ひ、困窮屋の家財諸道具等、百兩の古證文壹通を添へてうけとり、賣り立てて見るに、やう／＼三分半に廻れど、いづれもせんかたなく是れにて濟し、古證文はとても埒のあかぬ反古同然のしろもの、もみくちやにして紙屑籠へいれよといふを、はした錢賣る小兩替屋の親父、ひと理窟もひねくりまはすものなるが、此の仲間にてかの古證文の文談をとくと考へ、「是れは

まんざら、ものにならぬといふしろものにてもなし。われらすこし見どころあり。兎も角も我に任せたまはば、あつぱれ金にして見すべし。」と、請けこんで證文を懐中し、それより兩替屋は、かの證文の借主のかたへゆき、段々掛け合ひ、ことによらば表向にもなすべき勢ひにねぢかゝりければ、其の借主は歴々の浪人もの、親類の取持にて、近日大家へ仕官せらるゝ支度最中、もしもおもてだちては立身の妨げと、挨拶人をたのみ、百兩を二十六兩にて曖はれければ、仲間には拾ひものと悦びそれにてすまし、捨てものにした古證文、兩替屋どのの働きこれは出來たと唯貰ふやうにいさみたちて、仲間寄合ひ割付けて取らんとするを、頭分の人申しけるは、「誠に死んだものの蘇生ることはあらうが、此の古證文金にならうとは、いかな釋迦文殊も御ぞんじあるまい。しからばまんざらひろひものといふもの。此のうち五兩少なくとりたればとて、さのみの事もあるまいに、何といづれも二十兩ばかり割りてとり、あとの五兩は此の連中の氣ばらしに、呑代として切通しの生簀へなりと出かけまいか。」といふに、一座もつともと同心し、すぐに打連れて生簀へしけこみ、めい〱懐の痛まぬ奢りに、はめをはづして呑みかけ、とてものことに、哥妓が二三まいほしい、つかみにやれ。」と金高のすくない、貸かたの若いものからいひ出し、化粧坂へ人を走らせ、名ある藝者三人まで呼びよせ、いづれもうかれたちて踊るやら唄ふやら、いけもせぬ潮來曲のとつちりものとなり、あの世へ片足踏みこんで

居る、佛具屋の親仁まで、けふばかりは極樂ぢやと、大さわぎをやりけるほどに、孫太郎は臍の緒きりて、かかる席へははじめてなれば、ひとり片隅の方に目をもち、まし〳〵と人のさわぐをのみ見物しゐたりけるが、やがて酒もしみわたり、興盡きて皆々歸支度するうちに、「此のおもしろき酒機嫌にて、此のまゝ歸るも殘念なり。銘々今一角づゝはずみ給へ。化粧坂にて呑み直し歸るべし。」と、一人がいひ出せば、これはよかろと東向きたる足を西のかたへひねくりまはせば、孫太郎肝をつぶし、「最早われらは是れぎりにて御用捨。」と、遁げいだす首筋へ生醉にまきつかれ、せん方なく打ちつれて、化粧坂の舞鶴屋へなりこむ、三十七人の大一座、座敷持部屋持新造、ひつくるめて鬮取りにせよと、請取普請に入札しつけて居る材木屋の手代が鼻紙をちひさく切りて、女郎の名を聞き、それ〴〵にかきしるし、ひんまるめて、「さあ〳〵いづれも、ちかうよつて御えんをむすばれませう。信心次第で、ちつともしほめのよい女郎衆にあたり給へ。」と、高坏の菓子盆に入れてさしいだせば、南無金毘羅大權現。きらひなものは一生たべますまい、何とぞわれら思ふ君へ、とりあたるやうにと伏し拜めば、イヤわれら宗旨の日蓮大菩薩、お禮には鰶と赤の飯をあげませう。そんじよそれへ當ります樣、願ひ上げますといふうしろの方から、眼鏡かけた親父がドレ〳〵おれもと洒落もいはず、地聲にてそのくせ人よりまんがちに、取りかゝるこそをかしけれ。中にも孫太郎は一番しまひに殘り、「イヤ私

は。」と斟酌するを、傍からとつてあてがひ、開かせて見れば、此の曲輪で當時第一番の全盛、清鶴といふしろもの、器量はびいどろを逆様に釣り上げ、顏にしまりのないのかと、人の惡口いふほどの愛敬、ほだ〳〵とこぼれかゝり、そのくせ千手觀音ほど手のある女郎。女房の外は色といふ事を知らぬ孫太郎、今を初めの旅衣、帶紐ときて、此の清鶴が牀入りの馳走ぶりに、魂を奪はれ、地女とは格別の世界と、のりの來たやうすに、猶もうごきのとれぬしかけを、面白き事に覺え、是れより喰ひつきとなりて通ふ程に、初めの内は、見世の手代共のおもはくを憚り、夜中に戻りて一夜も泊らざりしが、後には居續けして、我が内へ駕籠を横づけにさせ、世間をも構はず、兩親は無し金はあり、悋氣すべき女房は、貧乏神の守りにて、いつとても機嫌よく、さし櫛ぬきて亭主の鬢撫でつけて出でたたせ、其の身は芝居のかはり目、物好きの衣裝に氣をもみ、手代共は夜の勘定仕舞ふと、火鉢にをしげもなく堅炭を山の如くおこしたてて、眠がる調市をゆり起して、四ッ過ぎから近所の肴屋をたゝき起させ、肴取りよせ見世先にて、小鍋立の酒盛、大福餅夜鷹蕎麥賣此の家を得意として、呼ばぬさきから荷をおろせば、手代は腰の鍵をはふり出して、子供に錢箱をやたらあけさせ、摑み出しての買ひ喰らひ。下女は主人の次の間に寢ながら、遠慮もなく夜這をうけこみ、三助は飯米を外して持ち出し、家内忽ち亂脈となりて、身代の廻向前、願以至功德のちかよるも偏に、かの貧乏神のお手柄〳〵。

二　金銀も內證はめでたいことの累なる難儀

世の中にめでたい事ばかり重なるも、難儀のひとつ、悦びあれば悲しみあるべし。又愁へ事のつゞきたるも、歎きの中のよろこびといふことあれば、とかくさだまらぬでもつた浮世。多羅福屋孫左衛門に四人の子あり。總領お龜はことし十九歳にて養子聟孫太郎の女房、妹お竹十七歳、此の節相應の處ありとて、出入りの蒂の木寸伯が仲人に相談極まり身上は少しひだり前となりたれども、家柄なりと痩我慢をいたし、雪の下の地面を賣りて、箪笥長持五十棹、其の外手道具諸色、いちやうに定紋つきし絹の覆ひを打ちかけ、慥かに四五町は續く釣臺のおびたゞしさ、進物かれ是れのものいり、鎌倉中の目をさまし、三番目の男子松之助が十五歳にて元服の祝ひ。續いて末子の疱瘡、輕くすめども乳母への祝儀はずつしりと重い捌き、親父の血のあまりなればと、出入りの者まで呼び集めて、日頃のしわん坊に似合はぬ大ものいり。さてもこのやうにめでたい事がかさなるものかと、家名のたらふく呑んで仕舞ひ、まだその醉ひもさめぬうちに、女房お龜が初產、ぎやつといふより親類緣者の出入りしげく、七夜の振舞ひ宮參りの強飯もまだくばらぬ內、片付いた妹お竹が帶の祝ひ、孫太郎もことしから有卦に入るとて、振舞ひ〲が打ちつゞき、無益の釜の下へ大くべすれど、手傳ひに來る人の手

前、目を眠りて臺所のかけ引きもならず。燈心も一筋に限りしを、此の頃は油火の處を蠟燭となし。次の間の火燵も、木綿ぶとんをやめて、とつておきの郡内縞を打ちかけ、病人に喰はする爲とて、藥の樣に除けておきし、味噌漬なら漬もやたらにつかみ出して調市どもまで茶漬の菜にしてやる。手代も見世からあくびしながら出かけて、板の間を立廻り、茶椀酒のぐひ〳〵のみに、くみたててある硯蓋の抓み喰ひして、鼻の先から醉ひが廻り、謀叛をおこしこそ〳〵と出かけゆけど、人出入り多く內に居るやら居らぬやら咎むるものなければ、そはつき出していつともなしに、大分の金銀をへらし、孫太郎今目のさめたやうに驚き、是れではならぬと夫婦打ちよりて額をつきつけ、此の物前の志學をとつおいつ相談して居る處へ、念佛講仲間の道西坊きたり、人のきげんも知らず、「さて〳〵段々めでたい事がつゞいて、こなたのやうな果報なお人は、廣い鎌倉中に最一人とはござるまい。聞けばお妹御も頓て御平產なさるであらう。此の仕合では御男子にきはまつた。何でもめでたい〳〵。」とそやしたつれば、孫太郎あたまをかき〳〵、「イヤ〳〵最早めでたいことに飽き果てました。是れまでめでたいめでたいで、大分のかねをつかひましたから、妹のお竹も、どうぞ安產せねばよいがと案じて居ます。」といふ矢先、見世から手代が走りきたり、「唯今桐ヶ谷の一葉屋樣からお使が參りました。お竹さま今朝御安產なされ、御男子御出生とのことでござります。」と聞くより孫太郎、なむさんぼう又めで

たい事が出來てきたゝア、疎ましやと神色を變へ呆れ果ててぞ居たりける。此の孫太郎の身の上とはあちらこちら、かの新道の道具屋正作、昔は相應に暮した身分、さるに依つて一家一門には、大分の金持あれども今困窮すればとて、三文の世話にもならず、人に損かけぬ篤實ものなるが、以前目をかけし子分福平といふもの、わづかの小商ひより身上しだして、段々と仕合よく、若宮小路に見世をひらき、日増に繁昌しくらしけるが、或時食傷にて二時ばかりくるしみ、つひにあの世へ引きとられて、一子もなく女房は去年離別して、あととるものなく遺言にて、此のものの身代家財かけて三四百兩、正作其の儘ゆづりうけて、おもひがけなき身の上と成り佛事に念いれて、三十五日の齋過ぎに、はなれ山の伯父二階からおちられれどつさり往生せられしと、使のものの息をきつて申しきたる。是れはとおどろき、かけつくるに最早かなはず。野邊のおくりをして後、書置を見れば、ひとりの甥なればとて、觀音前の角屋敷捨賣りにして、二三百兩が所をゆづられ、涙とともにかたじけなく、まだ其の袖もかわかぬうち、松葉ケ谷の伯母たつた今疝氣があたまへさしこんでふくれあがり、瓢簞のごとくなられしが、どうした拍子のへうたんやら、ころりと往生せられて子達とてもなく、日頃おまへの御孝行にせられししるしが今見えまして、御居宅は申すにおよばず、星の井村の田地のこらずおまへへとの御遺狀と、使のものがさし出せば、是れはいかなる年のまはり合はせか、かかる愁ひのつゞく事

はと、つひに出しても見ぬ上下著るに間なく、世間の手前も迷惑なと、目をふきく葬禮の供にたちて、旦那寺へをさめ立歸り、その上下いまだ脫がぬ處へ腰越の舅御、鰒と豆煎りと南瓜を、にうめんにして喰はれしが、それがあたつてやら、目と鼻を一時にまはされ、醫者よ鍼よと大さわぎ最中、はやく御見舞としらせ來るほどに、さてもくたゞごとではないと、はしり行きて見れば、是れもごつとりとおちいられ、三日の仕揚げ過ぎて女房が里から戾つてのはなしをきけば、此の佛存生のうちは、さのみ豐かなる體も見えざりしが、死なれて見ればいつの間に溜め置いてや、封じた儘の小判三百兩、此の內娘へ記念とて百五十兩、正作かたへ參る筈と委細の物語。あまりのことに呆れを禮にやるくらゐ、歎きの中の悅びなれど、めでたい時とはちがひて、何となく陰氣になり、精進なれば、肴も買はず、物見遊山も遠慮し高聲高笑ひもせざれば、腹のへることなく、二食でしまふ時もありて、內證に物入りなく、諸方よりは處務わけの家屋敷、大分の金子はひりて、此の道具やは愁へ事打ちつづきて、俄長者とはなりぬ。よくく愁へ事の相應して、形見貰ふ生まれ性にや、跡の季使ひし出出しの下女に、ふと出來心で二三度、女房の內に居ぬ時、留守事をしたりしが、此の下女親元へ歸りて後、癆咳を煩ひて相果てしが、これさへすこしの情を忘れず、死際に道具屋の旦那どのへ、是れを形見に屆けて下されと、手織縞の袷に、銀ながしの耳かきそへておくりこせば、是れも形見貰つたと祝

つて佛事をつとめける。通り筋のたらふくや、此の正作のはなしを聞きて、「さても〳〵世の中はいろいろ。此方はめでたいことがつゞいて、大分の金をへらせしに、正作は愁へごとで金儲けせしこそうらやましや。こちの親類のうちでも、廣小路の伯母御が、死なれたら、しつかり形見があらう物を、因果と達者で、百までも生きさうな代物、とてもこちの運のないのぢや」と、投首して居る處へ、頭から湯氣の出る男かけきたり、「廣小路の伯母御、夜前牡丹餅をわづか五六十まゐられたるが、食滯なされて今朝より以ての外御大切のやうす、あなたをおよび申して參れとの事、唯今御出で下されよ。」と、使の口上。孫太郎聞くより、「サアしてやつた。」と悦び、とりあへずかけ出してゆくに、此の伯母といふは、去々年亭主過ぎゆき、五歳になる女の子を養育して後家をたて、二軒三軒の店の世話をひとりしてやき、ひとすぢ繩ではいかぬしろもの。おつとつて五六千兩の身代とは見えながら、あたじけ茄子の鹽からき性質なれば孫太郎が胸算用にも、レコぐらゐなもののほかくれまいと、つぶやきつゝ病架へ通れば、伯母枕をあげて、看病人を遠ざけ、小聲になりて申されけるは、「わしの病氣も今降つて涌いたる事ではなし。主に別れてより以來のだん〳〵の勞れ、中々本腹は覺束ない。それゆゑこなたへ跡の事をいひ置きたく、呼びにやりましたわけは、連合の死なれた時分、手代どもが勘定して見たれば、五百兩ばかりも不足。あつたら名跡をつぶすも殘念と、雪の下の芝居へ金をかす人から、三

割半の高利でかり請け、けふまでは世間をはつてやりつけたが、わしが死んだら、跡がつまらぬものになりませう。そこをこなたが呑みこんで、あのお露が後見して、家をたてて下され。さのみたんとのことでもござらぬ。千二三百兩もあれば、丈夫に相續の出來ること、賴まぬとても引きうけて、世話してくれうとはおもひますが、是れをこなたに話さぬうちは、此の胸がやすまらぬ。」と、番頭八兵衞をよびよせ、「向後孫太郎がお露の後見して、金は何ほども用立ててくれるであらうから、そち達も末賴もしくおもつて、隨分と奉公大事に、何事も孫太郎の差圖を請けて、相續賴む。」と、いやともおうともいはれぬ首尾。孫太郎仰天して、「さてはそのやうでござるか。それではわれらの胸算が違ひました。」と、にやくやに挨拶して、さう〳〵逃げ出して歸り、「さても悲しや。めでたい事に損をしたかはり、新道の正作にあやかり、愁へ事で金儲けせんと思ひしも、やつぱり太郎兵衞駕籠で絲瓜にもならぬ事、同じ道をゆきながら物拾ふ人もあり、又轉んで怪我するものもあり、禍福のたがひは是れ程にも違ふものか。とる算用の形見もとらずに、出入り大きな損毛。」と、あたまを抱へて戾りけるが、是れみな貧乏神の澀うちはにて、あふぎたつるゆゑなりける。

討ちは致さぬ
金がかたき　世中貧福論上卷　終

討ちは致さぬ
金がかたき

世中貧福論中巻

東都　十返舎一九著

一　宿駕籠の寝耳に水の洩る茶椀の掘出し

禍ひは身より出で、福ひは外より出できたるやうに思へど、是れとても其の身正しからざれば、三年三月寝て待つたとて、果報の來るべきやうはなし。小道具屋正作、一度窮鬼にせめられたれども、生得質素廉直なる故、終に福神の守護を得て、なす程の事洪福ならずといふ事なし。或時小田原驛まで用事ありとて、供のもの一人めしつれ、出かけたるが、大磯より駕籠を雇ひて打乘りゆくほどに、梅澤のあたりにて、向うより來る駕籠とかふるにつけて、「ナント旦那樣、あの駕籠とかへます程に、召し替へて下さりませ。」といふ。正作聞きて駕籠をおりたち、酒錢少々をとらせて、下り駕籠に乘り移れば、其の儘かきあげて走る程に、正作が乘りたる駕籠のうちに、封じ文一通とりおとしありしを見て、「是れは最前上から乘つてきたりし旅人の取忘れし文なるべし。呼びかへして是れをやれ。」とい

へば、駕籠舁共口をそろへて、「中に金さへござらずば、狀の一本やなど、忘れをつたらまゝの川、あのづうたえで是れまで乘つてうせをつて、酒手もくれぬしはい人、うちやつて置き給へ。」といひさま肩をそろへて、舁きいだす。正作ぜひなく此の狀をひらき見るに「文言」十兵衞殿被下候に付一筆申入候。彌御無事珍重々々。然者我等事、上下とも無滯致旅行候且茶入の繕ひ、留守の中に出來候樣御賴み申候。將又昨日關本の最乘寺へ參詣致し候道に、安卦村と申す所の出口に草堂有之候。我等咽かわき候故、立寄り茶を貰ひ給べ候處、其の茶椀今上方にて賞翫致し候三島茶椀にて、しかも至つて出來宜しく見え候故、いかさま何ぞ掘出しも有るべき所と存じ、見廻し候處、佛檀の間の腰張、勝手口より三枚めの反古、たしかに定家の三首物と見受け申候に付、早速庵主へもらひかけ申すべくと存じ候へども、連の中に、まんがちなる慾人有之候故、態と其の分にて歸り申し候。貴殿急に彼の處へ參られ、庵主の氣の付かぬ樣に少金にて貰ひ受け申さるゝ樣に、御差略なさるべく候。尤も慾の世の中、此の十兵衞殿へも御沙汰御無用に候。道具屋太郎助殿。龍齋よりと、讀みもはてず正作小首を傾け、此の名前の人々へ對しては、不實のやうなれども、おもひがけなく此の狀のわれら手に入る事、是れ天道より授け給はるさいはひなりと、押戴き懷中し、さて駕籠の者に申しけるは、「我等あとの立場に用事ありしを失念したれば是れより又立ち歸りたし。こなた衆には最早隙をやるぞ。」と駕籠

をそこにおろさせければ、駕籠舁どもは、「ヤレそれは御大儀な事。」と笑止なる顔はすれども、から身でかへるをよろこぶ樣子。正作はそれより一さんに、最上寺道へと心ざしくだんの草庵へ尋ねゆき、品よく庵主に貰ひうけて金子十兩相渡し、二色の道具を受取りて鎌倉へ立ち歸り、御屋敷がたへ三島茶椀を金五枚に賣り渡し定家の三首物は表具して、是れも過分の金子にかへて唯とる如き金儲けしたりし咄を、通り筋の孫太郎聞きて、此の程は段々身上くだり坂となるにつけ、人の仕合したるを羨ましく、われらも何ぞ掘出しして、大金を儲けんと、目を皿になし心懸けけるが、もとより正作とはいたつて懇意の中にはあらざれども、毎日湯屋にて暑い寒いの挨拶はする中、或日鶴が岡の社内にて出合ひ茶店に立寄り、兩人休息しながら、さま〴〵の世間ばなしして居たるが、正作あるじに向ひ、水ひとつと望みければ、茶見世の親仁さし心得、大きなる粟田燒の茶椀に水なみ〳〵とくみて持ちきたるを、正作心よげに呑んで仕舞ひ、あとにてその茶椀をためつすがめつ、何べんもくり返し〳〵見けるを、孫太郎傍にありて思ふやう、扨は此の正作は數年小道具商賣をなし相應にものの目利もすればこそ此の間の掘出しせし樣子、今あの茶椀をふしぎさうな顏して、ひねくりまはし見たるこそ、唯の茶椀にてはあるまじ。われら側にある故何ともいはず、其のまゝさし置いたるが、さだめて頓て後へまはり、安く見おとすべき底工みならん、よし〳〵と心にうなづき、芝居の敵役がするやうな手つ

きしてひとり呑み込み、打ちつれて爰を立ち出でけるが、孫太郎途中より引ッぱづして、かの茶店へ立戻り、親仁に囁き、「ナヽと今の茶椀、われらへ賣つてくれまいか。」といふに、親仁眉に皺をよせ、「是れはわしが不斷の茶呑茶椀賣物ではござらぬ。瀬戸物やで買はしやりませ。此のやうなちやわんはいくらもござる程に。」といふ。「イヤ／＼ほかにあつてもそれは望みにない。是非その茶椀、見所あれば求めたい。」とせきこむにぞ、親仁さてはと慾心おこり、「わしは何もしりませぬが、こちの内にふるく持ちつたへてあるから、ついわしが平生の茶呑ちやわんにしましたが、こちの先祖は、とんだ茶の湯ずきであつたといふこつたから、此の茶椀もなんぞでがなあらう。おまへいくらに買はしやります。」と足元を見込んだやうす。孫太郎猶このもしく、南鐐一片からつけあげて、とう／＼金二分にて手をうち、買ひとりてもどり袱紗につゝみ桐の箱に入れて持ちあるき、どこへ見せても相手がなきゆゑ、せんかたつきて孫太郎、正作かたへ持參し、對面して申しけるは、「貴殿見おぼえあるべし。われらこの茶椀もとめたり。何ほどの値打ありや、承りたし。」と件の茶椀をとり出し見すれば、正作もつけな顏して、「これは粟田の製にて、いづれの瀬戸物屋にも澤山にあるもの、せいさい二十四文ばかりもいたすものなり。」といふに、孫太郎肝をつぶし、さてはさやうか、何を隱し申すべし、ありやうはかやう／＼。」と、正作が鶴が岡の茶見世にて水呑みし茶椀の由をかたり、「畢竟貴殿がこれをものあ

りさうに、ためつすがめつ見られし故、是れには唯の茶椀ではあるまいと悪推廻して、何でも商賣人の目をつけたるしろもの、儲かりさうな事と慾心きざして、貴殿の目利をあてに、茶見世の親仁に無心いひかけ、金二百疋にて買ひ取りたるが、扨は何にもならぬしろものとや、但しは我等素人ゆゑ、わざとさやうにいはるゝや。何としてまた二十四文の此の茶椀を、あのやうに念入れて見られしはいかに。」と不審いへば、「なるほど／＼。そのわけは此の茶椀に入つた水が、手のひらへ洩るにつけ、ハテめんえうな、どこに穴も見えぬに水の洩るはいかにぞと、それゆゑに茶椀の内外にこゝろをつけて見たるなれど、えては藥のよくまはらぬやきもの、どこともなしに水の洩るものを、それとも知らずに二百疋出されしとは氣の毒千萬。畢竟われらが様子ありげに見しものの故の事なれば、近頃笑止のいたり。此の茶椀われら二百疋にて買ひうけ申すべし。」といふに 孫太郎兎角その眞僞を疑ひ、外の目利者にも見せたる處、いよ／＼粟田燒にきはまり、十六文か二十四文の折紙附き。これは一杯はまりしと後悔する故、正作しきりに氣の毒に思ひ、金貳分遣はし、其の茶椀を引取りたりしが、正作かねてさる高位の堂上がたに、御懇意を蒙る御方ありしに、此の茶椀のはなしをいかゞしてやきこしめしおよばれ、甚だ興に入らせ給ひ、其の茶椀御覧ありたきよし、御懇望によつてはる／＼都にのぼせ御覧に入れしに、鵆が間といふ銘を下され、事のあらましを前書として御歌を添へられ、又時の關白殿よ

りも御短冊を下されける故、茶椀はわづかの價安きものなれども、高位の御かた〴〵の御短冊添ひしゆゑ、忽ち三十兩にのぞみ人あれども、正作是れ家の寶なりとて、敢て放さざりけるとぞ。げにや隱徳は陽報の基なりといへるがごとく、正作おもひもよらず洪福を得たる芳運のめでたきと、孫太郎が不運のほど、することなす事、かかる違ひある禍福のほどこそ是非もなけれ。

二　當の違ひは金よりも延びた髭題目講

豐榮登る日の出といはれし、多羅福屋の身代も次第に西へかたぶき日影となりければ、是れではいかぬとさま〴〵に仕法をかへてやつて見れども、貧乏神の守り嚴しければ、見世の手代共不埒ばかりしいだし、臺所も取締りなく、費え多ければ、孫太郎思案して、兎角家内に年寄なきゆゑ不取締りにて萬事不都合なりとて、國元にをる實父を引きとり、役にはたたずとも、家内の番をもさすべしと、其の事を申し遣はしけるに、實親太郎右衛門は、近江國志賀の百姓次男太郎八に養はれゐたりしが、太郎八淫酒に耽り、身上仕舞ひ、いづく〳〵か行方知れず。父太郎右衛門は僅かの借家にひとりくらしてありければ、此の便りを聞きて大きによろこび、早速の旅立ち、身代のちひさくなりしも、こんな火急な思ひ立ちには重寶にて、疊四疊鍋釜ふたつ、半櫃に破蒲團ひとつ、一年半の店賃田舍のことな

れば二歩か三歩の滯り、家主へがらくた道具を其の代りとしてつきつけ、急ぎ鎌倉に著きて孫太郎に對面すれば、涙をこぼして悦び、いたはりてさし置きける。太郎右衞門は邯鄲の枕してよい夢見たる心地にて、野でも山でも持つべきものは子なりと、嬉しさのまゝに國元をたちしなに看經したる儘と、心の落ち著くにつきて後世の事を思ひ出し、持佛堂を開き見て大きに肝をつぶし、慌しく孫太郎を呼びつけ、「今佛壇をひらき見れば、阿彌陀如來が居らるゝが、其方は何者にすゝめこまれて、代代の經宗を改宗し、無間の業と日蓮大菩薩のきらはせられた念佛宗にはなりたるぞ。我等先祖代々法華宗にて、他宗のものさへ遠慮してむざとはうけず、相續しきたりしに、勿體ない、宗旨をかへるといふ事があるものか。さう〳〵あの佛壇を打碎き此方の有りがたい多寶如來にうつしかへ奉れ。」と、眼色をかへて申しけるにぞ、孫太郎聞いて、「是れは當家の宗旨にてわれら御ぞんじの通り、養子壻のことなればいかに實家法華宗歸依なればとて、養家の宗旨をあらたむべきや。さやうの無理仰せられますと、鄕に入つては鄕にしたがふと申す處、御合點なさるべし。それともあなたさま御心すまずば、佛壇を別になされて題目をとなへ給へ。持佛の拵へ料は、いかやうにも進じ申すべし。」といへば、太郎右衞門あたまをかきて、「不便や我が主人、から無間に落ちてゐらるべし。此のうへは我ら娶女をすゝめて法華の有りがたい事を申し聞かせ、此のはうの宗旨に改めさせん。」と申しけるにぞ、孫太郎親

父の堅法華を知つてるゆゑ、兎や角といはば例の癇癪を起されんも外聞あしゝと、何事もさからはず挨拶して、別に法華の持佛やうの處をこしらへてあてがひ、親の心を破らざるやうになしけるは、平生の心に似合はず。孫太郎が執計ひこそ殊勝なれ。然るにあるとき當時の執事職北條家の御息女御婚姻につき、御手道具其の外塗物一式、小間物類、金高五六千兩餘の註文をうけとり、何でも身代の半造作、金儲けの運が向いて來たとよろこび、前金少々拜借したれど、大分の仕入れ、下職方の手當にさし支へ、此の間茶椀の事より、懇意になりたる正作かたへまかりこし、段々の譯をかたりて何とぞしばらくの内、金子三百兩ばかり借用したきよし頼みければ、正作元より情ある男にて、以前相應にくらせし、たらふくやの身代、今わづか三百兩の金に、手つかへしを氣の毒におもひ、當分用に立ち申すべきよし挨拶あるに、孫太郎よろこびて立ちかへり、證文したゝめ、すぐさま金子請けとりに手代どもを遣はすべしと、かれ是れする内事おほく、見世の者も出拂ひければ、父太郎右衛門に向ひて、「かやう〳〵の金子我等請取りにまゐる筈なれども、唯今見世無人にて參りがたし。何とぞ御大儀ながら新道の小道具やへ此の手形を持つてござつて、金子三百兩請取つて來て下され。」と證文をわたせば、親父のみこみ下男をつれて出かけ、正作かたへゆき見世の若いものへ、孫太郎口上をのべて取次をたのめば、手代ども承り、「唯今親方少々内用ござれば、しばらくの内御待ち。」と見世のつぎな

る小座敷へ通して待たせおくうちに、亭主正作看經すると見えて、鉦の音頻りに、願以此功徳申しをさめて罷り出て、太郎右衛門に對面し「さては其許さまには孫太郎殿の御親父とや。向後は御子息御同意に、御心安く語り申さん」と、初對面の挨拶すみて證文うけとり、金三百兩持ち出でわたす時、太郎右衛門正作に向ひ「唯今是れにて承はれば、念佛の御聲がいたしたが、こなたの御宗旨は淨土宗と存ずる。伜孫太郎と御念頃とあるによつて笑止さに申す。無間業因の念佛をやめられ、うかみがたき女人までも、成佛いたす題目をとなへたまへ。忝くも高祖日蓮大菩薩、下化の衆生をすくひ、成佛せんことを、さま〴〵に御苦勞なされ、法華經を選み出したまふ。此の御經こそ、釋尊一代顯教の中の經王なることと疑ひなし。されば信解品にいはく」といそがしい中におし直りて、經文を引いてむしやうに法華宗にすゝめ入れんとするを聞きて「コレ〳〵親仁どの、それは何を仰せらるゝ。御覽のとほり、商賣殊の外いそがしく取込みの中、宗門處ではござらぬ。金子請取つて早々かへりたまへ」といへば「おろかや無間の業人、今でも閻魔王がおむかひに來らば、商賣が閙がしいとて行かずにゐられうか。一切諸佛祕藏の法、但し菩薩のために、その實事を演べ、我しかもこの眞要を說きとあれば、はやくその念佛無間の宗旨をあらため、題目をとなへて寂光淨土にいたり給へ。とふところの中より、守護の小さき八軸を出し、正作があたまをたゝき「今身より佛身にいたる。此の經をよく

たもつべし。南無妙法蓮華經。」とむりにいたゞかしてすゝめければ、亭主以てのほかに腹立して、「イヤおしつけわざなおやぢがある。其方が尊がる日蓮坊こそ、念佛をきらへり。諸宗の名僧、古今念佛を信用し給ふこと、諸書にあきらかなり。されば法華經の所々に、以深心念佛と說き給へる事をしらずや。その方たちは、謗法邪道の癖者といふ者、ものいひかはすも穢らはし、早々立つて歸られよ。」と、にが〳〵しくいへば、太郎右衛門やつきとなり、「忝くも上行菩薩の御再誕なる大事の祖師を、おのれごときの大俗凡夫の口から、日蓮坊とは推參な。今一言いつて見よ。あたまをはりくだきてのけん。」と、氣色をかへて罵れば、正作いよ〳〵腹にすゑかね、「しやらくさい、上行菩薩の生まれがはりとは、慥かな證文があるか。この方は商人、書いたものがなければうけとらぬ。日蓮坊おのれが身を慢じて、自身上行菩薩の再來といひなば、自稱顯他は人倫の法にあらず。我慢強狂にて、他宗をそしり、餘經をないがしろにいひなす、謗法の賊と取りやりせん事穢らはし。證文はかへす、金用立つ事まかりならぬ。」と引込ませば、太郎右衛門大口明いて打笑ひ、「かりてくれよとたのんだとて無間の業人が金は、唯でもいやだ。いま〳〵しい借りはせぬ。」と、證文引取り正作をねめつけて、「題目を嫌ふは追つつけ分散にあふべき前表。南無妙法蓮華經。」と、たからかにとなへながら立ちかへる。親の心子知らずと孫太郎は見世に算盤を控へ、諸職人へ渡す金のつもりしてゐる處へ、建長寺前の錺屋から

金子を少々お借り申したいと使のもの來りて申せば、「節句前の歩を引いてまづ半金も渡さうほどに、後程請取したゝめて來られよ。」と使をかへし、此の親仁殿は何をしてゐらるゝやら、さても隙の入る事と、待ちかねあくびしてゐる時、太郎右衛門佛頂頬して立ち歸り、「いま／＼しい念佛めが處へ、金かりにいつて、一生におぼえぬ宗旨の恥辱をとつてのけた。かさねてからはあいつが處よりは、唯やらうとぬかしても、金借りる事は無用。あんまり日蓮大菩薩をわるくぬかしをつたゆゑ、腹が立つて借りずに歸つた。」と、證文をはうり出せば孫太郎肝を潰し、「今金の入る最中やう／＼と頼んでえいやらやつと、借りるつもりにしておいた金を、借りずに歸つたとはどうした事。總じて商人は一時半時を爭ふ金の都合にて、格別の利分を得るものなるに、役にもたたぬ宗旨ぜんさくで、當てはめた金を借りずに戻らしやつては、どうも多羅福屋の身代の尾が見えて、商ひのさはりとなります。今のわれらが内證は張物提灯、たゝんだやうに潰れた時にはこなたまでが御難澁、此の金が調はねば下職の手當間違ひ、目先にぶらついてある金儲けをとりはづしますから、どうぞわれらが參りたいが、今少し見世をあけられぬ事がござるによつて、御苦勞ながらこなた今一度、正作かたへござつて、日蓮をたとへ一蓮半といはうとも、蟲をころし斷りいつて借りて來て下され。」と、子供欺すやうにすかし頼めば、「イヤ／＼淨土宗にむかつて、手をつかね斷りをいふ事は、首足をもがるゝともいかな／＼。此の

金が調はずして、身代が潰れたらば、それこそ宗旨ゆゑの滅亡、本望のいたり。不自惜身命とて、法義の爲には身命をもをしまぬが法華宗の掟。身上仕舞ふと儘、宗門を守り、淨土の小道具やから、金を借らぬのは日蓮大菩薩への御奉公、第一常から他宗のものと、取り遣りするが聞えぬとおもつてるたに、雨降つて地かたまると、今からあの念佛門の道具屋めと、愛想づかしが出來ようと思つて、おれは嬉しい。」と何をいふやら氣違ひの沙汰。孫太郎も呆れながら、「お年よられたれば、宗旨を大事におぼしめすは理ながら、こなたを養ひまする私の身分のたたぬこと、ひらに是れは子を救ふとおもつて、何事も堪忍なされ、是非道具屋へおこしなされて、金子請取つて來てくだされよ。さやうなければ、必至と家業のさし支へとなること。」と、心にはきこえぬと思ひながら、親の事なれば述懐もいはれず、事をわけてたのむに、いかな〱聞き入れず、「今もいふとほり、親代々の宗旨のために倒れてしまへ。二百兩のかねの調はぬ苦しみよりは、高祖さまの龍の口にての御難、法の爲に首の座までなほらせられた此の有りがたい御恩德をおもつては、身代分散にして丸裸になつても、御報恩は謝しがたし。道具屋で金借りるよりは、その方もとの法華宗に改宗して、萬事をすて首題をとなへなば、たちまち空より七字の題目の極印うつたる新小判が、千兩でも萬兩でも、望み次第降つてくる事ぢやほどに、身代にかまはず、數珠を切つて親の宗旨にもどれ。」と、手古でもゆかぬ片意地にさすが

の孫太郎もむつとして、「泣く子も目をあけといふことあり、家をたてての宗旨なり。此の金とゝのはねば身代のたたぬ事、題目處ではござらぬ。無間へ落ちても苦しうない。」と羽織引きかけ此の上はとて、自身正作かたへ出かけゆかんとする處を、親父引きとめ、「高祖は一切衆生を憐みて、妙法をすゝめ給へり。我もその方が不便さにすゝむるに、無間へ落ちても苦しうないとは何事。われらが息の通ふ内は、いつかな淨土宗の正作が金借りる事はさせぬ／＼。是非に借りようと思ふなら、先づわれをころして、其の上にて借用せよ。」と、當てはめた金を借りさせぬ親父の、ねちれん宗にもてあまし、此のやつつかへしつつのうちに日は暮れて、下職からは内金を借りにきたれど、手當間違ひ仕入れかたさしつかへ、最早正作かたよりも愛想つかして斷りにあひ、折角うけとりしおやしきの註文間に合はす。あたら金儲けをとりはづしたるも、親父の無分別よりとはいひながら、貧乏神の強く守るが故にて、貧相のものは手に入れたる如き德をも、思ひがけなき事にて取逃し、福相のものは、みす／＼損亡と思ひしも、存じよらぬ事出來て德分となることそれ／＼の禍福。終に孫太郎の身上仕舞ひしを見て、正作かたにはあの時の三百兩、今思へば用だたぬ方がよかつたと、內證にて手をうつて笑ひぬ。

三　頓て菰を著る親仁が六十の筵破り

人の身代かたぶく時は寄るもさはるも自分の身構へして、白鼠といはれし番頭までも、小判くはへて引きこむ事をのみこゝろがけ、後には互に言ひ合はせて、見世中ひつからめての盜人、旦那の加勢して忽ち身代を潰すにいたれり。されぱたらふくや孫太郎の身上、善種の果報盡きて、貧乏神の守りはじめは、牛饗の參會くづれより化粧坂の色酒に、魂を奪はれしが、やみつきとなりて大分の金を費し、内藏蜘の巣だらけとなりたるに目がさめてさとがよひをやめ、それよりは一心不亂に稼ぎけれど、とかく貧乏の小ぐち次第にひろがりて、する事なすこと、ぐりはまとなり、はてはやけ酒の呑み過しにあとをひきて、出歩くにつけこみ、手代どもが留守ごとに商ひものをこかして、さゝほうさの手傳するに心づき、とかく内にしつかりとした年寄がなきゆゑ、取りしまりが行き屆かぬと、國元より呼び寄せた親父、却つて身上のためにはならず、商賣の障りとなる片意地もの。是れはよく〳〵われらが因緣のわるいのぢやと、孫太郎ひとり氣をもみ、此の上はとて工夫して、手代どものこらず、暇をつかはし、わかき女ども二三人かゝへて、見世さきにならべ、小間物の手細工を教へ、女の手にあふほどのものをうちにてこしらへ、あきなひするに、當時武備嚴重の鎌倉も、根をおせば色の世の中、やさしき賣人におもひの外商賣繁昌し、そのうへ男どもとちがひ、酒のまず夜遊びにいでずして、引負ひする氣づかひのなき女手代、此のてうしで今一兩人もかゝへ、賑やかにせんと猶も澀皮の

むけし女を選みて、以上七人まで召抱へ、孫太郎見世をはなれず、かけ引きして精出しける程に、どうやらこれではもとのたらふくやにもなるべき小ぐちとよろこびけるが、とかく人の親たるものに、無分別いふ片意地ものあるは、子の身にとりて、身上破滅すべき基なりと諺にいへるにちがひなく、親太郎右衛門今年七十五歳、體はきかねど口は達者にて、いらざることに世話やき、四十に近き息子をしかりまはして、當世にあはぬ商ひの指圖し、又してもささいこさいいひて、邪魔になる故、孫太郎迷惑し、近所の題目講の頭分の人をたのみ、太郎右衛門家内の世話をやめて法體し、外へ隱居せらるゝやうに意見をさすれば、親を嫌ひて追ひ出すかと、たつた一くちの返答にぜひなく、その後は隱居の沙汰をいひいだすこともならず。おのれが此の身上をゆづりもしたもののやうに、我儘八百をいひちらし、家の行儀も亂れ、見世の女共も、次第にぞんざいになりて、晝も間がな透がな、二階へ上りて打ちふし、仕事はたゞ言譯ばかりになまけ出せば、孫太郎氣をあせり、是れでは商賣不繁昌のもとゝると腹立して、女どもの不奉公を折檻すれば、「此の月が産月にて、腹が突つばりどうも仕事が出來ませぬ。」とのことわり、「おのれ奉公人にてありながら、その身のいたづらをあからさまに、主を踏み付けたる申し分、不屆のいたり請人へあづけ、急度糺明するぞ。」とおどしかくれば、「イヤその不義の相手は親父さま。わたしらの若い身で、年寄を何おもしろさうに不義いたすもので、毎夜々々むたい

な事とはおもひながら、主と病にはかたれず、負けてあげて此のとほりのお腹。」といへば、かたはらに、「わたしも七月になります。」と腹がむかばら立てたやうな腹を見すれば、又青梅を好む女もあり、悪阻の最中に嘔吐するもあり、都合七人の女どもに、言分のなきはひとりもなく、詮議するほど相手替れど、主はかはらず、みな親父のよなべ細工。孫太郎あきれ果てて、とかくは家の滅亡と歎き、親類はじめ他人へも、はなしも出來ぬ始末とはおもひながら、鄰の酒屋の親仁、町内で小理窟も捻るものなれば、これへ委細に此の事を語り、「われら親ども獨寝の寂しさにや、見世の女どもに戯れらるゝゆゑ、それを鼻にかけて、われらの申し付けることを一向に用ゐず、商ひの勝手あしく家業の障りとなれば、何とぞ氣に障らぬやうに、御意見を頼み入る。」と申せば、酒屋だけぐつと呑み込み、太郎右衛門をよびよせて、品よく意見せられければ、親父聞きて「それは由もない御意見。獨身のわれなれば、道理ぢやとこそいつて下さるべき筈なるに、倅がかたをもたれ、重ねては女どもに手を指すなとは、人間のたのしみは是れより外になし、まだしもわれら大磯や化粧坂がよひいたさぬは、倅が手まへをおもつての事、さあらば向後見世の女どもに手ざしはいたすまじ。其のかはり急に二十四五ばかりなる、究竟の女房を世話やいてくだされ。」との頼み。「それはきこえぬ。御子息孫太郎どのは養子壻にて、家の娘お龜どのといふ女房のある上へ、また女房を外から世話やけとは、何を仰せらるゝ。」と

いへば、イヤ〳〵倅めが事ではござらぬ。われら女房をもたねば、永の夜が寂しくござる。」と、後生沙汰しながら、さてもつよい親父、女にも堅法華ぢやと、酒屋も興をさましておさらば〳〵。

討ちは致さぬ金がかたき　世中貧福論中巻　終

討ちは致さぬ
金がかたき　世中貧福論下卷

東都　十返舍一九　著

一　果報は寢て松の位預人は半分の主

德ある人に左傳の癖あり。尊き聖に敷島の癖ましく〱て後世の譽れとはなりける。されば道具屋正作生まれつきて、色慾の心深く、磯ぜゝりの癖あれども、小錢のいるもの故、今までは愼み、下戶なれども、樽酒の山の神ばかりをさいなみ、我が物を喰つて腹をふくらかし、をかしからぬ蟲養ひに山出しの下女を抓んで、片身分貰ひしなどは、俄雨の時稽楠屋へもかけこむ人あるが如く、さしかゝりては空腹時の麁味いものなしにて、脣をぬらしゐたるが、此の頃はや何不足なき身となりければ、多羅福屋の親仁とひつばりにて、ちと澀皮のむけたる女と見ると唯は通さず。とかく小まめにせゝりあるくゆゑ、女房の才覺にて、今年は下女に大あばたばかりをかゝへ、正作に大きな鼻をあかせけるにぞ、さすがのいかものくひもこれはならぬと、榮耀に餅の皮財布から、臍繰金を取りいだし、出入りのもの一兩人めしつれ、今まで患難辛抱してかかる身となりしも、何とぞ氣儘にしたき事して死な

んとおもひての事なれば、是れまでひとたびも見ざる大磯化粧坂の色酒も、呑みて見るべしと打連れて出かけ、舞鶴屋傳三といへる揚屋に入りて、あふぎやの要といふ、太夫をよびてあそびけるが、世帶染みたる縣下女どもの日向くさき體よりも、たよ〳〵として、眞綿の如くなるに、首筋をしめつけられ、一心九天のうへなる、有頂天にのぼり、女日照りもせしやうに、此の太夫が笑くぼの溜り水にはまりこみ、夢中となりて、游ぎ出しけるにぞ、家内を守る福神の重手代肝を潰し、我是れまで福力を添へて、かかる身代となし、最早氣遣ひなしと心ゆるみ、遊山がてらに此の宿より、江の島の巳待によばれ、十日ばかりも此の家をあけたる留守の間に正作が不埒、油斷も隙もなるものではないと、やつきとなりて守られけるゆゑ、忽ちばんとう徳助、其の外の手代ども申し合はせ、急度親方へ意見し、同道したる出入りの者共までも呼び付け、顏より火の出るやうな日にあはせけるにぞ、其の後は正作も是非なく、遠ざかりて、ましくしとこの太夫の事のみ、思ひ暮しける處に、日頃出入りする秩父どのの御家來に、五十嵐太次兵衛といふ人、案内して入りきたり、暗かに御意得たき事ありと、正作に對面し、膝つき合はせて申しけるは、身共年來に似合はず、近頃面目もなき事ながら、そのもとは至つての入魂ゆゑ、打明けて申す。われらふといたした事より、大磯の太夫に馴染み、ゆく〳〵は妾にも致す存じ寄りにて、桐ヶ谷の新道に地面借り受け、是れへ家作いたし、渠をさしおくつもりの

處、俄に主人どもより、國元への用向申し付けられ、明後日出立いたせば、先づ四五年も當所へは下られぬ仕儀でござれば、自然そのうち太夫を人手へ渡すも殘念と存じ、早速に受け出すつもりではござれども、主人持の身分、我等名前を出しがたく、其許へお頼み申したいは爰のところ、金子は持參いたしてござるから、其許請け出し分にて、やはり御自分の妾のつもりにて、われら借受け置きたる地面にさしおかれ、歸國いたすまでの内、お世話頼み申したし。」といふ。「それは心易き御用、さりながら、ありやうは私も此の間をり〳〵大磯へ出かけまして、家内のものどもの意見にあひ、まだそのほとぼりもさめぬところ、あなたさまの名代ぢやと申したとて、皆誠にはいたしますまい。此の處が迷惑。」と、正作あたまを撫で廻せば、「いかさまこれは御尤も至極。しからば御内證はじめ、番頭どのへもこのおもむき密々我らより申しておけば、其のもとへ疑ひはかゝらぬ事。」と折入つての頼み、正作さては難儀なことと、當惑しながら、「先づその太夫は何屋の誰と申すもの。」といへば、「イヤ扇屋の要太夫でござる。」と。此の太次兵衛かねて正作が執心の女郎とはしらぬが佛、鬼のやうな目を細くして、腰元を呼びよせ、家來にもたせし、袱紗包の文庫をとりよせ、其の中より金子八百兩を出し、「要が身の代は五百兩とかねてより聞き及びたり。殘り三百金は彼が住居の家作料。そのもと預り萬事よろしく頼み入る。そのうへ日々の賄ひ入用、われら歸國までは、一箇年百兩のつもりにて、相違

なく彼の地より差越すべし。」と鼻の下を長くしてのたのみ、鰻のすぢを油であげ、玉子とぢにしたやうで、是れはあまり美味過ぎると、正作口なめずりしてよろこび、表向は恩に掛けてうけこみ、先づ御酒ひとつと手をたゝけば、「イヤ／＼それも家來に申し付け置きたれば、御鄰家の魚吉より參る筈。」と、その舌の根もかわかぬうち、合羽籠の蓋見るごとき、廣蓋にたつぷりとした三ッ物、名酒一樽をそへて、お客さまの御持たせと腰元が持ちいづるに、正作これはと吹き出す程をかしく、扨も結構な人もあるものかと、亭主役に馳走にあひ、我が物入らずにもてなせば、太次兵衞さも嬉しげに打ちとけ、「鎌倉廣しと申せども、皆猫に鰹節。そのもとならで太夫を預け申すところいつかうなし。日頃の廉直、物堅う生まれつかれた其許の不肖といふもの、何分よろしくたのみ入る。」と、正作が女房をも呼び出し、酒機嫌の太次兵衞、鼻に油をのせて此のことを話せば、女房あきれはて、「外の事はする分いはせず、「年來お出入りして御恩を蒙るおやしき、殊にあなたさまの御吹擧にて何事も埒明き、家内大勢ゆるりとくらすは、皆あなたのお蔭なれば、たま／＼のお賴み、なか／＼違背にならぬこと。」とおのれが得手に引きつけ、いそ／＼として嬉しがれど、太次兵衞は何の心もつかず、「しからば身共ははや明後日發足。そのもと御承知で安堵いたし、聢かにぞんじて旅行いたすでござらう。」と、さても

さても結構な挨拶。正作ははなはだ痛み入り門送りして立戻り、これは迷惑なことを頼まれたと態と小言いひながら、女房に著替小袖羽織を出させ、いつもよりか辨慶の軍出立ちするやうに、とかく支度に隙を入れて、不承々々な顔付きしながら、門口の敷居またぐとそのまゝかけ出して、大磯に到り、舞鶴屋の傳三に掛け合はせ、我が請け出す分にして、要を五百兩にて手をうち三百兩をもつて、太次兵衛の借りうけし地面に家を建て、太夫をこゝに入れ置き、女男をつけてさし置きけるが、日頃抓み好きの正作なれども、横道ならねば何とやら心臆れ、あまりといへば道ならぬことと折々見舞ひには音信れながら、太次兵衛が手前を思ひ手を握らず。あつたらものをあそばしておくことかと、咽をならしながら、堪へ〳〵て二月三月もたちけるうち、太次兵衛國許にて急病さしおこり、臨終の際に假筆して正作かたへ返濟の金子貳百兩と書狀したゝめさせ、二包をそへて送りこせしは、全く借用もなけれど、要への記念ごゝろにやと正作推量してうけ取り、さてもおもひよらぬ仕合、われらふしぎの因縁にて抑緣者どもより記念わけ貰ひて、かかる身上となりたるが、いままた太次兵衛どののかたみとて、要太夫手もぬらさず、わが者となりたるは忝し、もはや憚るかたなしとて、家内へは太次兵衛どの死後、たのみこされしとほり、相應のかたづきあるまでは、此方の世話せんかたなしと、表向より要かたへ仕送りして、正作日毎に妾宅へ出かけて樂しみ、その手も洗はず太次兵衛が國のか

たへ向ひ、廻向して其の恩を謝しにける。或日仁體よき親仁、羽織袴いためつけて、供の男どもに數數進物をもたせきたり、正作に對面して、「私事は大坂近在福德富平と申す大莊屋の手代ども、先年主人のむすめおかなどの若氣のいたりとて念頃男と驅落せられ、その後男に死別れ、廻り／＼て此の大磯に、遊女奉公せらるゝよし、やう／＼ほのかにうけたまはり、一旦久離はきられたれど、主人夫婦殊の外不便に思はれ、世間の手まへあれば、とても古郷へは引取りがたけれども、せめてその賤しき奉公の身を請け出し、相應の方へも緣につけやるべしと、先達てない／＼手代ども差下し、大磯にて聞き合はせしに、此方さまへ請け出されしと承つて主人夫婦の悅び大かたならず。此の方娘の苦界救ひ給はる大恩、いかに不通なればとて、親の身として御挨拶申さぬも不義理と存じ、こなたさまより御取替への身のしろ金、五百兩と承りしゆゑ、則ち主人どもより御返濟申したく、私持參いたしたれば、何とぞ御受取り下さるべし。」といふ。正作又びつくりして、さても／＼此のやうに木に餅のなるものか。「いかにも要太夫稚名はかなと申して大坂在の生まれの由、かねて承りたれば、相違なし。まづ／＼對面せられよ。」とすぐに妾宅へ誘引し、此の手代を引合はすれば、かなめ見るより、「ヤア當兵衛か久しや／＼。よく尋ねて來てくりやつた。」と、家來あしらひするに、親仁頭を疊にすりつけ、涙をふき／＼、「誠に御稚顏見覺えをりますが、さても御成長なされた事。親御さまがたの御案じ

なされたも御尤も。しかしもはやこなたのお世話にて、御安堵の御身分。私どもも大慶、委細の事は母御よりのお文。」と、懷中よりとりいだしわたせば、要取つて開き見るに、今よりは一生不自由なきやうにと、年々化粧代として貳百兩づゝ、外に飯米三百俵、毎年船便りに下すべしとの文體。この要の親元は、田畑あまたもちて酒醬油を造り、隱れなき指折の金持。さすが親子の愛情とて、不埒せし娘の不便さ。かかる情も有福の家に生まれし仕合、正作が幸ひとなり、年々三百俵に、二百金の仕送りをうけこみ、おもひもよらぬ德つきたりと、かなめが朝寢などしてゐる時はうしろの方からどこやらへ燈明備へて、南無お妾大明神さまと、恐れ敬ひ尊みける。

二　邪の胸に綴蓋した破鍋後家の色咄

玄冬には、火燵を奢りの高櫓ととぢ籠り、九夏には蚊帳を榮耀の陣小屋と屯し、さしも堅固に構へたりしも、次第に根性の矢種盡きて、大將たらふくや孫太郎、身上自滅の時いたりければ、家の子郎等もこゝろ〳〵に落ち失せ、今は籠城かなひがたく、借金のかたへ明渡しにして、かの草臥ものの親父ばかりを脊負ひ出し、夫婦とも切りとほしの裏長屋へうつり、何商賣をするともなく、わづかの衣類手道具を賣喰ひとなしてくらしけるが、その鄰に年の頃三十あまりの後家、器量よく優がたにて、

柳の枝に櫻のさきたる風情、幼き時より大家の奥につとめて、三年以前漸くお暇を願ひ、相應の方へ緣付きたりしが、夫にわかれて今かかる身となりたりと、問はずがたりに孫太郎聞いて、あつたら生物煮ても燒いてもよかるべきに、たれも拾むやうすも見えず。さては網をはりてよい鳥のかゝるを待つかと推量して、或時ひそかに申しけるは、コナントそこもとに究竟の相談あり。われら念頭にいたすある大家のだんな、年頃の女しかも後家らしきものを世話してくれよ。金子入用の事は何ほどにても心任せとかねて頼まれたるゆゑ、ふと存じ付きたるが、かやうに申せば無躾ながら、そこもとひとりいつまでか、しみたれし暮しをせられんよりは、此の相談にのられまいかといふ。後家顏をあからめて、「お恥かしい事ながら、夫に別れてより一生この身でくらさうと存じましたれども、何を申すも女の事、商賣とてはなく、お屋敷にをりまする内、こしらへ溜めた衣裳、ひとつ賣りふたつ賣り、それでやう／＼今日を送りますが、もはや何も賣りつくして、此のうへはいたしかたのない處。いかにもその樣な御相談もいたしたけれど、此の著たなりより外には衣類もさつぱりござりませぬから、そこに當惑いたしますことと涙ぐみていへば、コレ／＼それは氣遣ひせられな。もしも旦那見らるゝ時は、こなさまの身の廻り只晴大家の後家樣のやうにわれらが才覺致さうこと、内心に此の後家を玉に使ひ金儲けせんとの工み、美味い事のありたけ言ひ聞かして呑みこませ、人喰馬にも相口の藪醫者寄すせと云ふ

もの方へ、孫太郎早速行きて對面し、扨金儲けの事ありと僞りを構へて申しけるは、われら懇意のさる歴々の處の後家をたらしかけて置きたるが、金次第にて何時なりとも、橋わたしするつもり。ナント相應の處の旦那株に磯ぜゝり好物の人あらば聞き出したまへ。器量は昔の小町衣通に十倍の美人、手跡もよし歌もよみ、諸事花車風の御やしき出本肉のしろものぢや。」と、小鼻をいからしはなしかくれば寸宅聞くより、幸ひ〳〵それにはかけて見る大盡あり。我に任せて必ず外へ沙汰無用。」と口堅めして孫太郎をかへし、寸宅とくより趣向浮んで、相長屋に天狗の佐五次といふ、のうらく者あるをまねき、「今度われらの智慧にて、そなたを大盡に仕立て、さる金持後家にかけて寺詣り金のとつておきを、此方へせしめる算段にかゝり、たらふくや孫太郎といふ男をさきにつかひ、此の後家を大かた魔道へ引きいれて置いた程に、その方隨分腹ふくれの旦那めかして、孫太郎ぐるめにいつはいくはせ、後家の氣に入り、何なりとも著服したもの、二つ割りにて承知ならば、その鬢先にちらつく白髪でもぬいて男こしらへて來るべし。小袖羽織は此方にて工面するぞ。」と委細に呑みこませければ、心得單甫の酒のかんして、ひつかけたるいきほひに、髪月代にゆき、頰べたの髭念いれて剃らせ、何はともあれ、右の手の人さし指と、丈高指と二本の爪はとつてゆかずばなるまいと、そこ〳〵に支度して來れば、寸宅その間に損料借りして、佐五次を本大盡にしたて、近所の子供を雇ひ、更紗の風呂敷包を

もたせ、供につれてねり出した處、いかな生馬の目にも、地面十箇所はある旦那株と見ゆる人體、打ちつれて孫太郎かたにいたり、寸宅出放題に取りつくろひて引合はすれば、萬事こずりこうなる孫太郎も、これはいつはいいたゞいてあたまを疊にすりこんで這ひ廻り「委細は寸宅老より御聞きなされたでござらうが、其の後家さまは今宮小路の兩替屋、手代衆十四五人ばかりも御つかひなさるゝ大家の後室、大ぜいの人目もあれば、今いつて今火急に首尾する事がなりにくい。ナントかやうに致しませうか。明日芝居でお逢はせ申したい。」といへば、寸宅聞いて「いかにも／＼。幸ひ狂言の替り目、西側の三軒めの棧敷を此方旦那の御座所と定め、後家御は二軒めか四軒めか此方の隣棧敷にして、よい時分に中の隔てをとつて打ちこみにして、それから魂膽をすれば請合ひの西瓜、美味い都合。」としめし合はせて引きわかれ、翌日兩方から契約のとほり、西のさじきの三けんめは大盡、四けんめは後家、こしもとふたりに賄ひらしき年增女附き添ひ、端手ならずして、目にたつ衣裳の物好きせしを著飾り、見物するうち、今ぞぬれごとのうまき最中、時分はよしと、孫太郎寸宅うなづき合ひて、あなたがたはかねてお知る人なれば、御遠慮はない、窮屈らしい此のへだての戸を取りませうか。」といへば、孫太郎の指圖にて、諸事初心めかしてゐる後家、氣の毒さうな顏して「殿達ばかりござる棧敷もひとつにして大事ないかや。」と斟酌の體。「それはわれ／＼卒忽な事はいたしませぬ。」と、へだてをと

つてひとつにし、「サア旦那是れへおよりなされて、後家御へ御杯でも」と進められて佐五次近くより、今までは互に隔たり、横顔のみ見つ見られつしてゐたりし後家、杯をいたゞく拍子に、顔見あはせて肝をつぶし、「是れは。」といふを佐五次目まぜして後家にそのあとをいはせず。孫太郎寸宅もひよんな顔して、「さてはかね〴〵近付きさうな。」と、根をおして尋ぬれど、「イヤ〳〵さうでもござらぬ。」と、兩人おなじ挨拶。後家手水にたつてゆくあとから、孫太郎追つかけて袖をとらへ、「アノ大盡とはどうしても近付きのやうす。有體にいはれよ。」といへば、後家小聲にて「かならずわたしがいつたといつて下さりますな。あの人はさるおやしきで、折助どのといひしお中間、年中看板いちまいで、草履や草鞋をつくり、賣りに歩かれたが、どうしてあのやうな身分の人にはなられた事。」と、ゐさいのはなし。孫太郎聞きすまし、さあらぬ體してもとの棧敷へ立ちかへれば、寸宅佐五次に向ひ、「今の後家はなんでもこなた見しつてゐる樣子、どこでの近付きぢや。聞きたい。」とせめたつれば、佐五次あたまを撫でながら、「是れはかならずわれら口走つたと申す事は御無用。あの女は尻べたのお鍋といつて、馬場先通りの原へ毎晩扛ぎに出た辻君であつたが、何として今宮小路の雨がへやへは緣付きした事やら、器量はよいが、くび筋に膏藥だらけの跡がある筈。こなさま達氣がつかぬか。」と、思ひもよらぬもくわれに、寸宅やつきとして、「エ、孫太のひやうたくれめ。辻君をしてゐた女を大所の後家な

どと、此の寸宅をちよろまかすつもりか。醫者は下手なれ、こんな事くふ男でない。料簡ならぬ。」と皺だらけな腕まくりして力みかゝれば、孫太郎吹き出し「あんまり氣の強い事をいふな。そなたが歴歴の大盡だといつたあの男も、折助どのといふ素性を聞いた。誠大盡ならば、そんじよそこの何屋何兵衛といふ者と潔白にぬかしをれ。それを紀さねばきかぬ男とマアいふはいふものの、コリヤ兩方慾から手もりをくつたといふもの。しかたがない。」と、苦笑ひして今日の芝居の入用、衣裳の損料、供につれし者の賃錢、殘らず孫太郎と寸宅がかぶりとなり、後家おなべにはねだられ「折角わしがやしき出のやうに見せかけ、よい旦那にかゝらうと、日頃こゝろを盡したも水の泡、こなさま故に夜鷹して居た事しらぬ人へまで風聽せられた。恥をすゝいでくだされ。」と、孫太郎にくつてかゝられ、損をした上、手をついて詫らねばならぬ仕儀、貧すりや鈍な日にあつたと、呆れ果てゝぞゐたりける。

三　手盛を喰逃げしられた慾の皮のひつぱり蛸

人は窮する時は、不善をなすとはかかることをや。尻べたのお鍋が化の皮あらはれ、今は隱しつゝむ事なく、邪根性をあらはし、慾づらのひつはりたる事を心がけ、孫太郎を相談相手とするに、うつり易きは人のならひ、むかしの姿に引きかへ、今は袂のある著物を著ず、四角な帯をしめずして、

天窓つき顔色までも變り、心もあら〳〵しくなりたるに、女房お龜はさすがにも、多羅福屋の世盛りに育ちしもの故、今零落しても心さま優しく、夫の行跡をうたてくおもひ、たび〳〵意見せしを憤り、終にお龜を離縁し、いつの程にかお鍋とちゝくり合ひ、毎夜の寢ものがたりに、さま〴〵の惡工みを工夫しけるが、金錢はもとより智慧袋もはたき仕舞ひ、鶴が岡の境内にて、德利子といふ見せもののあるから思ひつき、お鍋を三本足の不仁に仕立てる工夫をなし、お鍋の所帶道具あればとて、自分の家財殘らず賣つて小屋をしつらひ、舞臺の下から外の人の足を出し打ちかけにてくるめ、三本足と僞り見せしに、目明千人盲千人にて、是れはめづらしいと評判仕出して、大きにはやり、孫太郎夫婦、此のほどは絶えて見もせぬ錢を毎日繋ぎ溜めて大きに悦び、猶も口上に普留那の辯をふるはせ、木戸番にずゐぶんおとぼねの高き者を雇ひて、忽ち萬福長者にもなる心持にて勇みたちけるが、あるとき年の頃四十許りの尤もらしき男、一日に五六度も見に來りしは、いかさまにも樣子あらんと、勸進元木戸のものども打寄つての評議。今度來らば、度々見に來りし仔細を問へと、待ちかまへて居る處へ、また來りてじろ〳〵ながめて立ちかへらんとする處を、木戸の者ひきとゞめて、「こなたは今日これで以上七度も見にござるが、何ぞ仔細があらう。語つてきかされよ。」と、片陰へ呼んできけば、「成程御推察の通り。度々見に參るには仔細がござる。われら事は當地大佛前の與茂八と申す者、そ

なたに對面するは唯今がはじめて、折角兄方より申しこしたる事捨ておかれず、今日そなたの芝居へ參り、やうすをきけば生まれつきの三本足、片輪の者に紛れなき由、尋ねらるゝ女ではないと請けつけぬ故、すご／＼と歸つた處、いま又そなたが贋三つ足といはるゝは、なにとも合點ゆかず。繪圖ばかりを目當てにて、そなたの面體見しらぬ身ども、いよ／＼その譃か誠を見屆けたうへでなければ、金子はわたしがたし。」といふ。「その段はわたくしを丸裸にしてなりともあらためて下され、三つ足はおろか、怪我に蚤のくつたあともない。」と、潔白にいへば、與茂八うなづき「幸ひ家内のものは留守なり、外に遠慮はない、ともかく見屆けたうへの事。」と、お鍋が手をとつて奧の間へつれ行きしが、此の與茂八といふは腰越の權太左衞門といひて近國までもかくれなき惡者。お鍋をひと目見しよりおもひこみ、何とぞ手にいれんとおもひつきて、由緣あるものといひたて、親元合力の金子來りしと僞りいはば、女もさるもの、身に覺えなき事ながら、慾にまよひて此のはうへおもむき、金子をせしめんと來たるは必定。そこへつけこみ此の戀を叶へんとおもひてのこしらへ事。まんまとその圖へもちこみたれば、權太左衞門無體に押へて埒をあけ、「此の上は何を隱さうありやうはかやう／＼の次第にて、あとかたもなき事をいひたてしも、みな戀ゆゑと料簡あれ。われら與茂八といひしも僞り、此の宿もわがやどにあらず、誠は腰越の權太左衞門といふもの。」と打明けて、おもひのほどをかたりけれ

ば、お鍋驚きながら、かねて聞きおよぶ豪傑者。たのもしさうな男と思ひつきて、はや心移り、いくぢなしの孫太郎が手をきり、權太左衛門と夫婦とならんと、相談しかくれば大きによろこび、さあらば幸ひわが計略を此のまゝに、眞身の伯父と僞り、此のはうへ引きあぐる手段ありとしめし合はせておなべをかへし、翌日權太左衛門芝居へしかけ、孫太郎にむかひ、一夜前お鍋事われら方へ參り、段々話し合ひし處、われら姪に相違なし。しかればかやうな滿足なる身を、片輪者に取りこしらへ、諸人に恥をさらさするは、其の身ばかりの恥辱にあらず、親兄弟一家一門までの頰よごし、其の分にはさしおき難し。」とむづかしく捻りかゝれば、もとより僞りをかまへ人をたぶらかせし科ある孫太郎、言譯すべきやうもなく、さま／＼にいひ詫びれども、いかな／＼聞き入れず、挨拶人を賴み、やう／＼の事にて金子を出し、納得させ、そのうへお鍋も引上げられ、折角儲け金もはたきしまひ、このほどの入用借錢となり、誠に運に月夜の釜、ひきぬかれたる心地して、體ひとつぞ殘りける。

四　過去の惡業身に積る雪の夜の發心

死生命あり富貴天にありとは、聖人の語なり。然りとて銘々の所作家業を勉めず、其の身の上の貧福は天にありと思ひをらば、人の生死は命なりとて、平生淫酒のふたつに耽り、毒魚としつて河豚を

好み、さし合ひ合點で蕎麥切と西瓜の喰ひ合はせして死するがごとし。たらふくや孫太郎、其の身のこゝろがけあしきゆゑ、諸事喰ひ違ひ、不仕合打續き、今ははや今日を過すべき手便も盡き果て、頃は極月二十日あまりの夜、大雪降り積みて寒風はげしく、凌ぎがたけれども、身には破れ垢付きし襦袢ひとつにて、手足冷えこゞえ、赤肌となり鼻水は氷柱のごとく、其のうへ空腹なれば、ちからなくて杖にすがり、恥を捨て、顏押拭ひ正作かたへきたり、合力を賴みければ、正作情あるものゆゑ、早速對面し、「さても／＼氣の毒なる仕合。われらそのもとと緣者にてもなく、他人なれども年來同町にくらして、以前われら貧窮なる時は其許かた繁昌し、榮耀にくらされし身のかくまでも、零落れられしは、心がけのあしきゆゑなるべし。われらはむかしより、儉約を專一に守り、一日油斷すれば明日食事なき事を、眞底より骨身に染みて怠らず、一心不亂に稼ぎたるゆゑ、其の冥利にておもひがけなき德分を得、今安樂に妻子を育み、何不足なき身上とはなりたり。然れば其のもと一人を助くる事苦にならねば、心よく合力し參らすべし、さりながら重ねては無用なり、そのかはり此のたび金子五兩進じ申すあひだ、是れを元手に何なりとも商賣をはじめ、とかく大氣をやめて、地道にほそきみちを怪我せぬやうにわたられよ。」と懇に意見し、金子五兩を取り出しあたへければ、孫太郎さらに現とは覺えず、夢中となりて悅び泪せきあえねば、正作かさねて、「此の寒夜にさぞや凌ぎがたかるべし、

無躾ながら、古布子にても參らせよ。」と、女房に言ひつけ置き、「扠われら事は、據なき要用ありて今より外へ參るなれば、寛りと休息しかへられよ。」と、いひ捨てて下男に提灯ともさせ、靜かに出てゆく跡に女房、孫太郎の見すぼらしき體を見るに忍びず、いまだ襟垢もつかぬ棧留の綿入を取り出して與へ、その上正作がたしなみの劍菱を、あつがんにして出しければ、孫太郎心魂にこたへ、あつき泪をながしてよろこび、此のほどは絕えて匂ひをもかがざる銘酒、舌うちして三四はい引つかけ、「お禮は詞につくしがたし。夜もはや更けたればお暇申す。」と件の金子を懷中し、よい機嫌にて立ち出でしが、次第に雪降りつみて、人馬の通ひも絕ゆる程の夜なれども、酒機嫌にて元氣よく、正作夫婦のこゝろざしを感じ入り、我ながら先非を悔み、何とぞ此の金子をもつて商賣にとりつき、正作が大恩をおくるべしと一念發起し、おのが家居をさしてぞ急ぎける。然るに正作用向き埒あけ、立歸る道すがら、山のごとく積りし雪の上を、高足駄にてそろ〳〵と歩みつき、内に入りて、「さても近年におほえぬ大雪、足駄の歯にたまりて既に橫さまに倒れんとせしが、此の杖つきしばかりに助かりし。」と、足駄の歯にふみこみし雪沓ぬぎすててたゝきおとせしに、ふしぎや雪とともに、石よりかたき音して一間ばかりむかうへ飛びしを、何やらんと取りあげ見れば先刻孫太郎へ遣はしたる金子、紙に引包みたる儘なれば、是れはと肝をつぶす處へ、表をしきりに叩くものあり、誰にやと戸をあくれば、孫太

郎髻を拂ひ金を落したることを懺悔して、「今は世をたつる心にあらず、麻衣ひとつの外望みなければ、此の上の情にお賴み申す。」と思ひ切つたる風情。正作聞いて、「いかさまそれもよかるべし。とてもそなたの微運にて世に出る事難からん。」と合力せし金を拾ひしことを物語れば、孫太郎横手をうつて、「誠にかくまで貧福ちがひあるものか、なくて貰ひにきたりし我はその金をおとし、ありて下さる其許はまた拾ひてかへられし事、前生の業因、定まりたる約束ごと、人力のおよぶ所にあらず。」と、得道せし體に、正作世話して薙髪させ、相應の庵寺をもたせければ、爰にて生涯を安樂にくらし果てぬ。かの持丸長太郎はじめにふたつの靈玉のふしぎを見しより、心をつけて見聞きたる、此の兩人がなりゆきに感心して、其の身の過ちを悔み、是れより一心を堅固に勉めて、渡世に油斷なく稼ぎければ、わづかの金よりだん／＼と儲け溜めて、終に以前の身代に十倍ましの分限となりける。此の長太郎が一代の浮沈榮枯の事は、追つて後編にあらはすべし。先づは全冊の大尾めでたし／＼。

討ちは致さぬ金がかたき　世中貧福論下卷　終

世中貧福論跋

朱文公の詩に、耕牛無㆓宿食㆒。倉鼠有㆓餘糧㆒。と賦し給へり。夫れ耕す牛、力を盡せど、却つて食物に乏しく、倉の中の鼠、勞せざれども、自由に粮を貪るは、人の身の生まれ得たる禍福、富貧の道理におなじ。されど其の行ひの正不正に因つて、災ひも祥ひとなり、富貴も貧賤に變るは、不養生をなして、定命を過るに似たり。正作が如きは、天授不測の洪福とは言ひながら、はじめ其の身を愼むにより起り、招かずして自然の徳化を得る事、積善合感の故によれり。孫太郎吝嗇にして、祥ひを貪らんと需むるがゆゑに、却つて禍ひを招くは、惡種を蒔ける因縁によれるなり。しからば人々幸福を願はんよりは、唯主に忠を盡し親に孝行をなし、諸人に信義を專らにし、内に儉約して奢らず、勉むる時は、所願忽ち成就すべしと、此の書の餘意をこゝに述べはべりき。

世中貧福論後編序

鳶飛んで空に舞ふ時は油揚の用心し、人うかれて氣まぐれとなる時は、身代の用心すべしと。是れ濁富前生の果報盡きはて、身上棒に振る時の禁言なり。善種は祥ひに預り、惡種は禍ひに導かる。權兵衞種をまけば、烏のほじくる事、皆因縁のなす處にして、さしもに黄金の札つきし鶴も、掃溜におりては芥に交はる。紙屑拾ひの手にも渡り、薯蕷も鰻となりて天上せば、雷の臍にかへて、蒲燒を賞翫すべし、蚯蚓の木上り、石龜のじだんだも、時いたれば其の志を全くする事、人間の盛衰相同じ。卽ち爰に貧福論の書を著し、おつりきの評におひしより、書肆その嗣篇を索む。ナツトまかせと前編の餘意を演べて、相もかはらぬ新撰の戲本となすのみ。

文政五午初春

十返舍一九誌

巻中目次

第壹　身代の煤拂は十露盤の塵埃
第貳　坊主の鉢卷はしまり内儀の友稼ぎ
第參　欲に目の光る戀病の横著者
第四　明いた口へ持ち込んだ色と慾との二つ髷
第五　煩惱の犬骨折りて樓の色仕掛
第六　しらぬが佛造りて魂の入れ智慧男
第七　昔話に尾鰭のつく生ものの腐れ緣
第八　貧すりや鈍ちやんと內證の負軍
第九　泣く頰をさす八幡の勸進角力
第十　無心の種を卷舌に生醉の似山師

上件

討ちは致さぬ金がかたき　世中貧福論後編上册

十返舎一九著編

一　身代の煤拂は十露盤の塵埃

五體は違ひ無くして、人程替れる者はなし。前生にて、よき種を蒔き置きけるにや、不斷駕籠に乘りて地を蹈まざる人のあるに、それを又舁ぐ者あり。金銀も死すれば瓦石の如くなるが、生あるうちはこれに勝れる重寶はなし。されば力をも入れずして、天地を動かし、鬼神を感ぜしめ、猛き武士にもにつこり笑ひ顏をさせ、美しき娘の子の提灯に餅つかすも、金の威光にして、持つたが病の疝氣持より、金持の時なるかな。貧乏人はありてなきが如く、みな善い事はしてとられて、これ運の至らぬゆゑと、手前料簡するより外なし。この運と云ふものは、牡丹餅と對句に云へども、棚にある物にあらず。天より降りくだるに相違なければ、願はずして勉むべし。天道決して門違ひはし給はず、善に福ひし惡に禍ひを下すなれば、痔病みの雪隱に入りたるに等しく、吾より焦りいけまずして、運の到るを待つべきなり。さても鎌倉扇が谷一丁目の新道に、數年貧窮に暮せし、古道具屋の正作、正直の

頭に、福の神の宿り給ふより仕合よく、次第に濕地の土龍の如く、むく〳〵と身上を持ち上げ、今は何一つ、不足なき身となるにつけ、正作元來木の股より生まれしにもあらず、出處は知れたる同じ人間にて、美味き物は食ひたし、善き物は著たし。それも以前は馬の灸にて、貧窮の身なりし故、心の儘にはせられざりしものの、今は榮耀に餅の皮むきても食ひ足らず、自然と奢りに長じ、我儘になり、極めて磯ぜゝりの癖止まず、女さへ見れば粘賣り婆でも唯は通さず。中には思ひの外ゆすり取られて、一口物に頬を燒く事度々なれども、飯より好物の男、女房妾の外に樣々の食好みし、この貸し借りのむつかしき時節に、あたら小判を唯捨てること多かりける。然るに或年の暮、正作うたゝ寐の夢に、家内煤掃きして男共各々、帚采配を持つて、天井を拂はんとする時、何やらとんと音して落ちたる物あり。人々驚き見れば、人の形にて小さく、やう〳〵丈二尺ばかりの人間。されども白髪交りの色黑く、瘦枯れたる親仁、破れ汚れし、つぎ〳〵の單衣を引張り、手に澁團扇を持ちたるは、云はねど知れし貧乏神、こはいまはしやと男ども、帚追取り掃き出さんとするとき、棚のうへに聲ありて、「コリヤ〳〵押してくれるな又落ちる。」と、つぶやくにびつくりし、いづれも仰ぎて是れを見れば、棚の端より端まで、貧乏神ども押し合ひて竝び居たり。見るにぞつとし、いかゞはすべきと猶豫ふうち、朝日に霜の消ゆるが如く、其の者共の形は、じみ〳〵と消え失せける。正作目覺めて溜息を

つき、さてこそ我榮花のあまり、この程の身持放蕩なるを先祖代々の佛達、夢中に戒め給ふならん、恐るべし〳〵と、胸にはあたれど最早善果盡き果て、何時の間にかは福神の重手代貧乏神と入り替りたる事なれば、正作愈心轉じ、身上破滅の兆をぞあらはしける。

二　坊主の鉢巻はしまり内儀の友稼ぎ

耕す牛力を盡せど食物に乏しく、倉の中の鼠勞せざれども、自由に糧を貪るは、人の身の生まれえたる禍福とは云ひながら、その行跡の正不正により、災ひも祥ひとなり、富貴も貧賤に變り行くは、不養生をなして定命を過つに似たり。こゝに多良福屋孫太郎は、前生の報いにて次第に落ちぶれ、いつぞや雪の降る夜、正作より貰ひし合力の金子を、取り落せしより發起して、仕様事無しの俄坊主となり、正作の世話にて、火打箱程の庵をしつらひ麻の衣のつまらぬ身の上、日頃の女好きも夜鷹蓄妾さへろくに食はれず、蛸まぐろの安きにも、見た許り口なめずりして鐘打ちたゝき、修行に出たる向うより、來る親仁は、以前心安く、のたまく仲間の燗鍋屋長四郎。孫太郎坊主と見るより、「扨も久しや、よき處にて會ひたり。去りながら、變り果てたるその姿は、どうした理窟。」と呆れ果てたる樣子に、此方は面目次第も投首、「是れまで段々の不仕合、肝心の食はしてくれたる女房には置き去りに

おひ、今と云ふ今、食はねばひもじいといふこと、骨身にしみ、憂き世を捨て坊主ではなくて、捨てられ坊主。」と、鬼の目にほろりと泪をこぼせば、「さればその事に就きて、今わざ〳〵、そなたの處へ尋ね行く處、その譯と云ふは、そなた坊主になられし事は露知らず、金儲けの相談ある故、折角出合ひしにひよんな事は、その頭では間に合はぬ、これは近頃殘念。」と、頭を撫でて悔めば、孫太郎聞きて、「イヤ吾等これまで、何をしても間違ひだらけに倦んじ果て、いつそのこと剃りこくつてしまはうと、ふとした出來心に、坊主とはなつたれど金儲けとは耳よりな。どうしたわけぞ、聞かしてくれ。」と、此の身になつても、慾は止まず。鼻の先をひこつかしてかゝれば、長四郎打笑ひ「外でもなし、定めてそなたも名は聞き及ばん、桐が谷の大金持、福俵やの後家を始め、その親類のうち、いづれもはらふくれの女房娘達五六人、今度上方見物に行くにつき、うちの手代共や、出入の者の中、年取りし慥かなる者を附けてやらんと、人の云ふは氣に入らず。長道中のうち、氣のつまるものは望みになし。途中退屈をせぬ樣に、氣の輕い、小道樂でもした樣な、さばけた人が連れたいとの註文。賃錢にはかまはぬ、荷持ちもさせず、唯道中を太鼓もつて、もらひたいと云ふ事で、支度萬端あちら任せ、我が物入らずに上方を見物すると云ひ、殊に其の後家殿は、評判の淫物。品によりひよつとしたら、どのやうなよい目に會ふもしれず、さうなると忽ちお釜を起すこと、此の供は吾等第一番に望みなれ

ども、此の年になり槍先利かねば、幸ひそなた、竹馬の馴染、今難澁してゐる樣子を、かね〴〵聞いて氣の毒さ、そなたの爲になる事ゆゑ、先へ話したらあつちには、よく知つてゐて、孫太郎殿なら、あの身上を仕舞ふ程の道樂者、さぞ面白からうと乘りがきて、金錢は望み次第どうぞ賴んで下されとの事、オツト承知と受け込み、はや支度金を受取り、この相談しようと思ひ出かけた處、その坊主頭では埒が明かぬ。さても果報の無い男、殘り多し。」と、聞きもあへず、孫太郎せき込み「我心からの出家にあらず、善い事あれば何時でも、髮を生やすに造作も無きこと、今より延し少しにても毛足出來れば附け髮にても間を合はせ、何卒其の口へ參りたし、お賴み申す。」と、坊主頭を地にすり附けて云ふにぞ、「イヤ〳〵左樣の手延びなる事にはあらず、明日はや發足の心算、とてもそなたは間に合はず。さて〳〵笑止千萬。」と、挨拶そこ〳〵にして、別れ行くを孫太郎坊見送り、「さても氣の短い男、よくもあの氣で、腹に十月は居たこと。」と、つぶやきつゝ思へば近頃殘念の至り、去るにても我ながら、愛想盡きたる身のうへ最早出家もむやくしし。いらざる衣たゝき鉦、いま〳〵しいと大地へ打ちつけ悔みたりしが、又思案し、取り上げて己が庵へ立歸り、此の上は再び還俗し、今一稼ぎして見んと、心變じ、それよりは、頭を剃らず延すつもりなれど、そのうちの口過ぎとて、つく〳〵ばえの頭を頭巾にて隱し、容は坊主心は鬼の衣著て、日每に修行し暮しけるが、次第に髮も延びてつまむばか

りを待ち兼ね、足髪をしてやう〳〵自身に髷ぶしをこしらへ、最早これにて男となりたり。さらば何をがな、善き事もあれかしと、様々工夫の最中燗鍋屋長四郎、いそがしげに又入り來る　人音に驚き先づこの體を人には見せじと、孫太郎手ばやく頭巾をうち被り、さあらぬ體なるを、長四郎見て、「さきだつては折角吾等志にて、そなたの難澀を助けんと思ひし處、其の事かなはず氣の毒さに、此の度は又々そなたに、持つて來いと云ふ、究竟の事を聞き出せり。處は伊豆の國、溫泉近き處にて、裸佛を安置し、どらが如來寺と云ふ寺は、山中なれども至つての福地にて、山林田畑をしこたま所持し、暮し方萬事差支へはなき寺なれども、山奥の僻地にて、とかく住職住みつかず、村中寄つて幾度か、住持をなほせど不自由さに愛想をつかし、またしても空寺となるゆゑ、檀方村中相談して、これは山中に唯一箇寺の住居、もの寂しく事足らぬ勝ちゆゑ、住持の尻坐らざるにきはまりたれば、此の上當寺へなほらん者には、檀家村方とも呑み込んで、妻帶を許すべし、さあらば住持も居附くことあるべしと、評議一決し、今住職を尋ぬる最中、吾等その村方に懇意の者ありて、賴まれしこそ幸ひ、よくよく聞けば狸の金玉にはあらねども、一箇年に百兩づゝは延びる寺。されども山奥にて、とても學文に達し器量ある出家は來るまじ。假令狼に衣著せたる道樂和尚にても、尻さへ据ゑてくるれば、女も許すと云ふからの思ひ附きで、そなたを世話してやる心算、此の相談如何に。」と云ふ。孫太郎ぞく

そくして悦び、先づもつて重ね〳〵の深切、誠にかたじけ有馬山、否とは申さず。さきだつてのお世話は、急に髮を延ばさねばならぬ事ゆゑ間に合はず、殘念に思ひしが、此の度のは早速なること吾等坊主はいま〳〵しく、既に髮を延し、添へ髮して最早野郎天窗とはなりたれども、また其の口取りはづさぬうち、唯今元の如くに剃りこぼち、その寺の和尚とならんは望む所。」と剃刀おつ取り、頭巾を取れば野郎頭。長四郎肝をつぶし、「さてははや還俗せしか、やれ情なやそれではどうも、此の度の相談もならずの森の時鳥。」と泣いて悔めば、「何さ〳〵出家をうるさく一旦は生やしたれども、其の話はまんざらでもなき故、又剃る合點。」とはや頭をもみにかゝれば、「イヤ待て〳〵、さきだつて吾等、そなたに會ひし時よりも、餘程日數も立ちたる事、定めて是れまで經をも讀み習ひ、凡て出家の作法、少しはこじつけやりもすらんと、思ふからの案じなるに、今見れば其の野郎頭、還俗せんと思ふ心からは、經も讀むまじ。出家の道も皆目のすこたんにては、一寺の和尚となつたればとて、檀家の葬送の時、そなたの鍋破聲にて、序に出まするはと、役者の聲色も使はれまいし、まがりなりにも引導渡さねばならず。それが出來ればよし、出來ぬに於ては、そなた今その天窗を、剃つた處が無駄と云ふもの。そこがどうも覺束ない。」と、根を押されて孫太郎、元來經文は娑婆で見し與次郎の如く、一字も近付きにあらざれば、この返答に辟易し、さてはさうかと恨めしの頭をかくより外はなし。長四郎

苦々しき顏付して、「さてこそこれも出來ない相談。折角吾等はそなたの爲よかれがしと、思ひ思うて一度ならず二度まで、緣なき衆生は度し難し、此の上また〳〵よの寺を聞き合はせ、もし野郎天窗の經讀まぬ、住持欲しがる寺もあらば、その時口入れ致さう。」と、打笑ひつゝ出で行きければ、孫太郎足摺りして口惜しがり、扠も〳〵世に運の惡き者も、いか程かあるべきが、何をしても我が身程、當の槌の異ふ者か。生甲斐も無き命と思へど、死ぬる事は嫌ひなり、如何にやせんと、とやかく思ふうち、同じ相借家に兀山頓白と云ふ醫者當時の流行者とて寬闊の暮し、日頃心安きゆゑ、もたれ込みて、毎日その藥箱持に雇はれ、賃錢百ころりと、獨り寢の寂しさ、此の身になりても、久しく女のゆもじの嗅、かがざることを口惜しく頓白方に山出しの婢女、おかまと云ふが器量は名に負ふ羽生村の累に、眼の二つある分にて、疱瘡の時不思議に命を助かりしと云ふ顏つき、心樣は正直者にて人の譃を誠と思ふ律義より、孫太郎にあやなされ、裏の物置へ、澤庵漬を出しに行くとて、つい大根の雙股へ、押しかけられし石臼の新枕より、次第に深き中となり、毎夜頓白方に泊りては、忍び會ひしが、或時頓白の弟子共うち羣りて、樣々の雜談男女の中の戲れ話に、孫太郎云ふやう、「同じ女にても、賣色と素人の違ひは、絹の二布しめたると、荒き木綿とのわけにて、手ざはり和かなれば、尊さは門からと、格別珍重に思はるゝものぞ。」と、打語りどよみたるが、その翌夜のことなりし。孫太郎何時も

の如く頓白方に醉ひ倒れ打臥し、かの下女おかまの一つ蒲團に轉げ込み、添寢の木枕交せしに、おかま縮緬の二布しゐたるを、孫太郎いぶかしく、少給の者の如何してや、かく工面せしぞと、心をかしく思ひゐたりしが、其の後頓白の妻、おかまに云ふを聞けば、「此の間旦那殿の黑縮緬の羽織、肩さけ色變りて、何の用立たざるを、其方望み故與へしが、何とせしぞ、定めて物の繼ぎにもなるまじ。」と云へば、おかま赤面して、何の答へもせざりしを、孫太郎立聞し思はず吹き出して、さてはおかま、例のそばきり色なるを恥ぢ、縮緬の二布せしは、旦那の羽折の著古しなるや、去るにても珍らしや。黑縮緬の湯卷したるは、全く我先に、弟子中との戲れ話を、聞き囓りての故ならん。偏に野性の律義なる心より、吾等への馳走振りこそをかしけれと、一人腹の皮をよぢらし、此の事人には云はざれども、誰云ふとなく家内に流布して主人頓白の耳に入り、笑ひの中にも感じ入り、男を思ふ眞實の心より、その情合不便なりとて、表向き世話しておかま孫太郎を夫婦となし、「今より何なりとも商賣すべし。元手金望みに任せ、用立つべし。」との事にて、孫太郎に相當の店を出させ、靑物商賣を致させけるにぞ、おかま面體は二目と見られざれども、志貞實にて、晝夜をわかたず精出し、商ひ向き油斷なく、孫太郎に勝りて稼ぎける故、此の程は女房の働きにて、米櫃に鼠住まず、竈に蜘蛛の巢も張らざれば、孫太郎は却つて懷手してのらつき暮す程の仕合、元來は饑じき腹にまづいものなしとて、

當分の蟲養ひに、抓み喰ひたりしも、今は大事の山の神とて、恐れ敬ひ、御機嫌取りてぞ暮しける。

三　慾に眼の光る戀病の横著者

猫に鰹魚節は、龜の尾の灸を、河童に賴みすゑさするが如く、油斷のならぬ今の世の人心、箱入りにせし娘にも、相應の蟲附きて雉子と鷹の緣を結ぶあれば、破鍋に閉蓋はお茶の子にして、いづれ戀は思案の外、分別の脇途なり。孫太郎今は女房の精出すにて、格別のことはなけれど、先づ餬口ぎに氣骨折れず、持前癖とて少し尻の溫まると、はや榮耀の起る人心とて、横道にもまた、厚顏しき事こそ出來せり。其の頃名高き分限、萬代屋龜介と云ふ者に賴まれ、孫太郎大磯の曲輪舞鶴屋の千歳と云へる太夫の方へ、使となりて行きたりけるが、直に會うて渡し、返事取りてかへる可きよし、うけたまはりて件の太夫を格子先へ呼びいだし、萬龜樣の御狀とて差出せば、千歳受取りて、文を開き見、につこりと笑ひて、「貴方のやうな、お志の深いお方もあるものか。」と、鶯の三光を囀るやうな聲音にて、紅の脣の動く艷顏。孫太郎見るより、すぐにその口端へ、喰ひ附きてもやりたき思ひにぞくぞくして、さても〱あのやうな、美しい女もあるものかと、五體震へて見とれ居たりしうち、千歳は立つて行くと間もなく、返事認めて持ち出で、禿の持ち來りし、煙草盆引き寄せ、吸ひ附けて孫太

郎へ差しいだし、「ようぞ御大儀にこそあれ、主樣へよろしく傳へてよ。」と、脊中を一つたゝかれし時は、寒中にさつと水をかゝりし如く、ひいやりと身をちゞめて、返事請取り立歸り、萬龜へ渡すと其の儘、我が宿に歸り來れば女房おかま、孫太郎の勝れぬ顏つきを見て、「此方何處へ行きたるぞ。おそかりしは氣色にても惡しきや。」と云ふに、「萬龜殿に頼まれ、使に行きたるが、おのれそれをかまふものか。」と、膳のすゑてあるに、食事もせずしてその儘打ちふしてより頭上らず、錢儲けの口あれども「働きてからが、面白からぬ浮世。」と髭くひそらせし男の、ついにこぼさぬ涙を流し、木綿襦袢の袖を絞りければ、おかまあきれて是れは合點の行かぬ事と、心ならず案じ侘び、「どうでも常のことではなし樣子があらう、夫婦の中に何をか遠慮し、斯くまで深く包まるゝぞ。病氣の樣子、どうも氣懸りな、仔細を明し語られよ。」と恨みつすかしつ、樣々に泪ぐみて尋ぬれば、孫太郎しばらく思案の體なりしが、「成程そなたの不審立つるは尤も至極、大體ありふれし事ならば、そなたに何を隱さうぞ。話し出すも恥かしながら、此の間萬龜殿の使に大磯に行きて、舞鶴屋の太夫千歳殿と云ふを、ひと目見るより何の差別もなく、鳩尾邊がひいやりとせしより此の方、叶はぬ戀の物思ひに、斯くの有樣。」と男泣きにしやくり出せば、女房興を醒し、「さても思ひがけもない。そなたのやうな横著者の、不器量なわしをさへつまむ箸まめな人、氣ばし違ひての事か、途方もないこと云はしやる。」と、受附けね

ば、孫太郎恨めしげに、「いかさまさう思やるは理、我とても不思議なり、かゝとにて巾著は愚か生馬の目をも抜きかねぬ男、戀に病まうとは釋迦も御存じはあるまじ。いかなる因果のつくばいにや、この思ひは。」と、さめ〴〵泣き喞てば、おかま律義に心弱く、孫太郎の脊を撫でおろし〳〵、「まことに世にある人は、是れ程叶ひ易き戀はなけれど、我々風情の身にては、命をば捨つるとも、大金の懸る戀地は手に及ばず。とかく前世の戒行拙き故、なる戀のならぬと云ふは、口惜しき身の上。」と、倶に袂を絞りしが、鴈は八百地道なる分別にては埒明かずと、おかま思案し、「兎も角もわしに任せておかしやれ。」と、頓て支度し大磯に行き、舞鶴屋の格子へたよりて、千歳を呼び出し、眞實からの熱き涙をこぼして、夫孫太郎が見染めて戀病となりたる、段々の次第を打明けて委しく語り、「畢竟御身ゆゑに焦れ死なば、此方思ひもよらず、俄後家となること、何とぞ御情に夫の命助かるやう、頼み上げますお慈悲〳〵。」と、泣き入り〳〵、思ひ入りて見えけるにぞ、情を賣る太夫、心優しき者にて、頻りに不便に思ひ、「戀する連合の人より、是れまで來て女の身の涙を流し、云ひ難き事云はるゝはよくよくの事。こなたの心根いとしければ、此の戀かなへ參らすべし。さりながら此の身太夫と名をつき、外聞を思ふ職なれば、客も相應の身分の方ならでは會ひ難し、假令賤しき人にもあれ、風俗を改め假名して來らるべし。」とて、禿を招き何やら綿紗に包みし物を取り寄せ、おかまの袂へ押入れけれ

ば、おかま夢かと許り嬉しく、「兎角この御恩、言葉には述べ盡されず。此の上は一足も早く立歸り、夫に斯くと悦ばせ申す可し。」とて、鬼の首取りたる心地に宙を飛んで歸り、臥したる孫太郎の枕に寄り添ひ、件の品を騙り、袱紗包を開き見れば、燃え立つ如きの小判十五兩。これは／＼と夫婦肝をひつくり返し、暫くは物をも云はず。孫太郎涙ながら、「さりとては優しき太夫殿の志。」と、起き上りて畏まり、大磯の方を臥し拜み、光明眞言を唱へしも道理なるかな。おかまぞく／＼して、「これなうなう、うつかりとしてゐる處で無い。先づ此の金にて衣服其の外を調へ、太夫を揚げる大盡風を、拵へ給ふが肝心。上著には結城紬下には八端縞、羽折は龍門の紋付、脇差はお家主より借り請け、それにて間に合はせ、病氣擧句なれば、ざつと洗足にても使ひ髭許り剃つて、小鬢先にちらついてゐる白髪をも拔くがよい。その中私は大丸へなりとも註文し、誂へて來ませうか。」と立上れば、孫太郎、「先づ待て／＼、こゝが一大事の分別處、我等の心底は、其方の話にて太夫殿へ通じたれば、最早思ひは晴れたる道理、此の結構な小判をむざ／＼と似合はぬ衣裝にしてしまひ、跡も續かぬ女郎狂ひをしようより、これを望性に何ぞ一稼ぎし、身上をなほし、せめては奥州米一俵の寢姿をも見ようと思ふ吾等の料簡、何と其方の心は。」と、眞顔になりて云へばおかま目の色を變へて、「扨も其方は男畜生情盜人、身こそ貧乏はしても、その樣な氣心の知れた事、ようも云はれし。勤めする全盛の太夫殿が、

此方の樣な、地獄から火を貰ひに來りし罪人程に、黑く瘦せたその顏にて、先から揚代を取つて會ふ樣にして下されし、太夫殿の情、その志を破つて金を唯取らうとは、大それた根性骨、よもや本氣ではあるまい。」と、正直一遍のおかま、疊を叩き立てて喚けば、孫太郎天窗をかき〳〵、「いか樣これは我等の誤り。よしなき事を言ひ出して、そなたの手前も面目なし。此の上は片時も早く、身の廻りを整へ、序にざつと髮月代し來るべし。」とて、むく〳〵立上り、「衣服の好み跡の始末よき樣、吾等胸に差畧ありと、金子殘らず懷中し、出で行きたりしが再び歸らず。おかま腹を立て、その行方を尋ね探せど終に知れず。「扨は私の同心せぬ氣を見てとり、金子を奪ひ驅落せしか、人で無し。」と、齒を咬み憤りて、頓白方へ行きてこの始終を語れば、頓白仰天し、「扨も孫太郎めは、言語道斷の曲者かな。左樣の不實なる者に最早未練は殘すまじ。さるにても其方は、例なき賢女なれ。時代違ひて列女傳にも載らざりし殘念さ、この上は其方の身分、吾等引受け世話すべし。少しも氣遣ひ致すまじ。」とその儘八百屋商賣をさせ、小野郎一人に手傳はせて其の儘に打過ぎけるが、おかまの心實正なれば、孫太郎の事は思はずして、太夫千歳の志を、無下にせし事のみ胸にたえず、案じ侘びてぞ暮しける。

討ちは致さぬ
金がかたき　世中貧福論後編上册　終

討ちは致さぬ
金がかたき　世中貧福論後編中册

四　明いた口へ持ち込んだ色と慾との二つ譯

傘借りて破り返す人と、一家中へ嫁の仲人して鋪金の歩一取ると、記念分けしたゝか貰ひて、その命日に、精進さへせぬ者とは、飼犬に喰らひ附かれたるが如しとかや。孫太郎折角千歳の情を無茶にし、久しく持ちつけぬ小判を見しより、忽ち色氣を忘れ、慾に目がくれ驅落し、何でも是れにて、一旗擧げんと、上方をさして出かけけるが、東海道藤川の驛より、道づれとなりたる人は、六十餘りの老人にて、攝州兵庫の商人萬石屋俵右衞門と云ふものゝ由、道すがら語るを聞けば、相應に暮す者と見え、妾を召し連れ東都見物の歸るさ、かの妾荷持の男と密通し、俵右衞門を打捨て、兩掛の荷物持ちたるまゝ、打連れて逐電し、俵右衞門路用金は、肌に附けたるゆゑ、それには事缺かざれども、差當り、衣服の著替も無く、一人旅となりて難澀し、詮方なく、江尻の宿に滯留し、國元へ飛脚を立てて其の事を申しつかはし、迎ひの者の來るを待ちゐる處に、飛脚の者如何せしや、これも歸り來らず、日數立てども、何の沙汰もなかりし故、俵右衞門大きに心せき、殊に急ぎ歸らざれば、辨じ難き

用向きもあり、心ならずも一人江尻の驛を出立したるが途中難儀の由、委細の話に孫太郎も幸ひ、一人旅にて、上方へ志す者なれば、同道せばやと約束し、その夜は池鯉鮒の宿に泊り、夜もすがら互に語り明すに、俵右衛門は孫太郎を、實儀ある者と見込みて、愈同伴の事をば、頼みけれども、旅中のことゆゑ心をば許さず、懷中には唯少分の路用のみある體に見せて、打連れ旅行しけるが、俵右衛門持病の癪氣おこり、をり〳〵惱むを、孫太郎懇に介抱しつゝ、程なく大坂に著きける時、俵右衛門云ふやう、「とてものことに、兵庫まで誘引し給はるべし。歸宅の上厚く恩謝し申すべし。」とて、打連れこれより乘船し、恙なく兵庫の宿へ歸著しければ、家内打寄り無事を祝し、親族その外、近鄰の者共馳せ集まり佳儀を述べて同道の孫太郎が厚情を聞くより、各感じ入りて悦ぶ事は限りなし。

その夜俵右衛門、密かに孫太郎へ申しけるは、「さても吾等、年老いたる身の殊に病體、道すがら其の許の厄介にあづかり、異儀なく歸宅し、再び妻子共に面會する事、ひとへに其の許の介抱ゆゑなり。さきに爰元出立の時、路用の外に用心手當として、金子百兩恪持し出でたるが、斯く無難にして歸りし悦びのあまり、此の百金のうち、半金を分けて、其許へ呈上すべし、これ途中介抱に會ひし返報、近頃無躾なれども、何とぞ受納し給はらば、滿足ならんと、五十金に熨斗を添へて差しいだせば、慾深き孫太郎も、是れ程にはあらじと、胸算用の外を、突きいだされてぎよつとせしが、わざと辭退す

れども聞かず、達て進め與へて、猶も止め置きて、樣々馳走しけるが、孫太郎逗留のうち、この家の體を見るに、穀物商賣にて、召使の男女も、さのみ多くは見えず、暮しかた質素にして、しかも内福の體女房はおやまとて年の頃三十六七にも見え、ほつとりものにて利發の樣子。十三四の男子、俵次郎と云ふのみありて、心安さに、うか／＼と長逗留しゐたりけるが、俵右衛門今は安堵し、心弛み旅勞れ出でてや、心地勝れず打臥してより、俄に癪氣強く取り詰め、性氣を失ひ、針藥の治療をも待たずして頓死しければ、家内の愁傷云ふばかりなく、涙ながらに葬送して、いづれも力を落し、孫太郎もまさか本意なく、元來何の當もなく、はる／＼來りし事なればと、祥ひこの俵右衛門に取り入り、兎も角もせばやと心中に思惟し、さてこそ萬事に實意を見せて心配りせしに、今斯くなりて便りを失ひ、この上は折を見て後家おやまに身の上を語り、手段ぞあらんと、それよりは表向き殊勝げに、朝夕俵右衛門の靈前に向ひては、稱名を唱へ廻向し、何事にも家内の者の機嫌を取り、見世の忙しき時は、手傳ひ等しけるにぞ、後家おやまも心樣柔和にて、孫太郎を止め置き、後には何彼の相談相手となす程に心安くなりて、或夜おやま、小座敷に一人、小鍋立てして酒の燗をし、孫太郎を招き、小杯を取り出して進め、其の身もいつになき機嫌のけしきにて、ほろ醉ひとなり、櫻色に照り渡る顏の愛敬を表はし、戲れ言云ひて、餘念なき體に、孫太郎心もち味になり、忽ち煩惱起り、とても喰ひつぶ

し居るからは、かかる折にこそ此の後家をもあやなし、是れも賞翫すべしと、そろ〳〵口をむしりかかる時、おやま膝摺り寄せて云ふやう、「そなた樣に折入つてお頼み申したき事あり、夫旅だたれし後にて、番頭始め手代ども、主の留守をあなどり大分の引負ひし、日頃御用を承る御屋敷の御間をかき、其の上はからずも夫の病死、愈御屋敷の御出入りもあがらんかと心配の處、同商賣のうちより當家を惡樣に云ひ立て、御屋敷を我が物となさんと工む人ある故、何卒左樣なり行かぬやう、内々お役人方へおなげき申し、明日は生簀の茶屋にて、お役人方を招請し、倅俵次郎へ相替らず御用仰せ附けらるゝやうお願ひ申す筈に、先達て御筆頭の泡淵段五兵衛樣と云ふお方へ、申し込み置きたるが、そなた樣をお頼み申したいは爰のこと。無調法な私の亭主ぶり覺束なく、平生如才のなき御身を見込み、何卒其の執持ちを、お頼み申し度いと云ふは、その段五兵衛樣と云ふお方が、第一番のお客。あなたさへ御承知なされば、何事も成就すること、至りて御酒がお好き故、面白をかしう、お進め申して下さるやうお頼み申したいゝ。それに就き今一つのお願ひは、どうも女の口から、厚顏しく云ひ難き事故、わざと酒には醉ひたれども恥かしうて」と笑顏して、袖を覆ひ云ひ兼ぬる體、孫太郎心中に、さては此方より持つて參らずとも、彼方からはずみかゝりし居膳、これは甘しと、早合點して、「ほんに久しいお馴染と云ふではなけれど、よく〳〵深い縁なればこそ、是れほどにもお心安い中、御遠慮

には及ばぬこと、何なりとも貴方のお頼みならば、唯今吾等の生肝お望みあるとも、胸を斷ち割り差上げる所存。」と、はやしこなしぶりに、摺り寄りて手を取れば、後家恥かしげに聲を密め、外にてもなし、先にお話し申せし、當家を押退け、御屋敷の御用聞かんと云ふ人は、身上に不足なく、大分の金を撒き散らし、金づくめにしてのもくろみ、一通りの事にては、あちらへはし負かさるゝ故、この樣な事申さば、女の身にて大膽な者とお思ひ給はんなれども、其の段五兵衛樣、此方にて何時ぞや御酒機嫌の時、私へお心のある樣に、仇口を仰せられしが一つの便り、どうぞ彼方へ私を取持ち、人知れずお目に懸るやう太鼓が打つて貰ひたさ、其方へのお頼み、定めしあつかましい女、殊更夫に別れて間も無き中、大それた事ながら、假令女の道に背くとも、先祖より數代續きし家の破滅にはかへられず。さればとて先を仕落す程の力はなし、色にてなりと仕遂げんと、心は附けども、武家方をお相手に、如何にお心安きとて、女の口から直にも云はれず、其方の常に口輕き、口拍子にて酒興の上、此の事しおほせ下さらば、お禮として金子二十兩進ぜよう程に、必ず〳〵構へて人には沙汰なしにして下され。」と、猫撫聲して云ふにぞ、孫太郎は我への戀と思ひの外、當は違へど二十兩の謝禮と聞きてまんざらにも思はず。先の望みをかなへし上にて吾もまた、その相伴する手段もあらんと心にうなづき、如何にも吾等呑み込み申、承知の濟にて鰯の取れぬ法もあれ、頼まれし事、し遂げずには置か

ぬ男。そのお侍假令石部金吉なりとも、天晴れ首尾よくふづくりおほせ、御望みを達し申すべしと、目算違へど花鬮には、當りし心地と酒にして、其の夜は倒れ臥したりける。

五　煩惱の犬骨折つて樓の色仕掛

天道人を殺さず、人にも亦、眞底よりの鬼も無ければ、世は瓢簞の川流れ、誘ふ水の浮草に、根は無けれど萎みもせず、枯れもせざるは孫太郎の身の上。思ひも附かぬ所縁を求めて兵庫萬石屋の食客となり、元來下腹に毛の無き男、上手を使ひて終に後家おやまの片腕と頼まれ、其の日となれば俵右衛門の片身分けとて、小袖羽折の未だ衿垢も附かざるを、孫太郎著服し、すつぽりと著替へて、後家諸共、生簀の茶屋にて、泡淵段五兵衞、その外それ〴〵の役人十人許り、饗應の善美に、人の咽を鳴らさせ、藝子に三絃をかじらせ、孫太郎口から出放題を洒落れ散らして、酒飲む許りを、云ひたての太鼓持、何武左客と頭からおしこなし、座敷を吾が物にして騷ぎけるにぞ、おの〳〵興に入り、杯も數限りなく、呑み倒れてはや鼾をかき出すあれば、酌する女の首筋へからみつきて離れぬあり。または牀柱にもたれ、山寺歌ふ此方には、銚子かへて來りし小女郎捕へて、不理窟を云ひ出してわめくもあり、かかる亂軍の中を見すまし、孫太郎はかの一件を取持たんと、上客の段五兵衞が傍近くす

り寄りける時、段五兵衛大眼玉を俄に細くし、孫太郎の袖を引き、縁側に立ち出で私言きて申しけるは、「その許今日初對面なれども、粋と見受けて賴み度き事あり。當時吾等妻に別れ獨身となり、既に渴命に及ばんとする厄介者あり。それ故今日亭主方の後家殿の尻つき、甚だ好もしく、至つて執心に存ずるから、何卒其方の働きにて、取持ちてはくれまじきや。もしおほせなば其の代り、其方へ金子三十兩謝禮としてはずむべし。男と見かけての賴み、何と聞き屆けくれまじきや。如何に／＼。」と鼻の下の長口上、涎を腮に傳はらせ云ふにぞ、孫太郎聞きて、扨は此方より申し出さんと思ひし處、これは手も濡らさず唯取り出、後家よりは二十兩、又此方より三十兩、有卦に入りたる覺えもなきに、さてこそ仕合のなほり小口と心中に悅び、眞顏になりて「如何にも其の義吾等承知は致せしが、性質物堅き後家にて男は愚か、雄猫さへ傍へは寄せず、形見にくきとて擂子木をも手には取らず。有りやうは今食客の吾等、此の節無人故、今日のお取持ちに、出づるにつけても、無作法なる事は、決して無用と嚴しき言ひ附け、左程の代物、なか／＼普留那の辯でも、いやらしき事など云ひ出して、恥をかくは知れた事、その上自然吾等しくじりとならば差當つての迷惑、左樣の危き事致すからは、もし仕果せなば御褒美の三十金、下さるゝに違ひなくば命に懸けて働き見申す可し。」と、先の內兜を見拔き、わざと後家を堅く云ひなし、三十兩の根を抑してかゝれば、「何さ／＼云ひ出して不首尾ならば、

座興にしてしまふ分の事、萬一後家承知せば、それこそ三十金は、物の見事に差出す事、侍の鰒の腸喰うて、死ぬる法もあれ、虚言は云はぬ男、働き次第。」と酒が云はする譫言を、してやつたりと孫太郎、後家の方へは、我進め込みたるやうに取繕ひ、段五兵衛へは、骨折りて後家を落せし體に云ひなし、こつそりと二人を引合はせ、雙方より都合五十金の禮物。仕合よければ此のやうに、木に餅の生るものかと、骨折らずに小判の耳たぶ、あつくなりしと、一人笑坪に悦びける。

六　しらぬが佛造りて魂の惡性者

常磐御前は女の道を破り、清盛に身を任せし故、公達方に恙なく、成長し給ひて終に平家を討ち亡ぼし、父祖の恥辱を雪ぎたりし、その例ありとは云ひながら、萬石屋の後家おやまは、性もと婬奔より起りて、泡淵に身を任せ家業相續の手便とせしは、故なきにはあらねども、それに慣るゝの失ありて、後には度々の逢瀬に心亂れし、夫存生の中は、左程にもせざりし顏の化粧、卑しきまでに作り、姿も端手にいたづら風となりけるにぞ、孫太郎是れを見て取り、どこぞのはずみに、厚顏しく出かけて、否應云はせず、段五兵衛の相伴し、内證我が物としてより、おやまもそれに心移り、次第に深くなりて、孫太郎そろ／＼ふざけ出して、實の夫婦の如く親しみけるが、今日も段五兵衛、例の生贄の

茶屋に來る約束なればとて、おやま孫太郎と打連れ、出かけ待ち受けて、段五兵衞來るとはや、見はらし好き二階座敷に先の奢りの酒汲み交し、餘程醉ひも廻りし時分、孫太郎段五兵衞に向ひ、「さてさて旦那はあやかり者なれ、この後家御承れば、過ぎゆかれし御亭主、此の美しき人をね腐らかしものにし、妾三味して怪我な事女房が二布の臭もかがず、其の上旅立ちせられて二月餘り、じらしにじらされた上歸ると直に頓死、久しく生物の味をしられぬ後家御ゆゑ、旦那へ御馳走ぶり、嘸かしと思ひやられるのみか、此の程は貴方よりも、女中の方から大分の焦れやう、毎日お噂云ひ出されぬ例はなし、難儀なるは吾等一人。お二人の睦まじい千話ばなしを何時も受けて許り、迷惑至極。」と、おやまの方を尻目にかけて、己が口舌を云ひ出せば、後家孫太郎の膝を、思ふ樣抓りて、憎らしやこのやうに焦るゝ事を、嘸や五月蠅く思召すかは知らねども、お志の實有るおかた、女の身に取りては嬉しさ餘りて、慕ひ申さねばならぬ處、こな樣のやうな女さへ見ると、惚れて懸る悪性者とは違ひて、實の有るお方がいとしうなうて何とせうぞ。」と、孫太郎へ當てこすり、目顏に云はする千話喧嘩。人の馳走に會ひ乍ら、その見る前にてのいちやつき。後生樂の段五兵衞一向に心附かず、「これはおやまの云ふが道理、孫太郎はどうやら悪性らしい男、女に氣を揉ますするは大きな殺生、吾等の樣に一直なれば、先にもその心意氣は有る筈、何とおやま、さう有らう。」と、引き寄せて戯れかゝれば、後家俄に目顏

をしかめて腹をおさへ、私はちよつと用たし。」にと、延紙取りまはして座を立ち、孫太郎へ目使ひして下へおるれば、暫くして孫太郎、段五兵衛の袂をひかへて「貴方は何とも、お心は附くまじけれども、此の茶屋の若い者の中に、一人どうやら、後家御へ心有る樣子、先刻ちらと見受けたることもあり、何とやら心得ぬ後家御のそぶり、茶屋にて色事する手管のあひやう、大方は、用事かなへに行くふりして、下の小座敷にての出合ひ、ある格なれば、憚り乍ら御油斷有るな。」と囁き申せば、如何樣それはよい氣の附け處、若しやほかに、左樣の後暗き事あらば、敵面に恥をかかせ屋敷の出入り差止むる分の事。吾等その有無を見屆けん。」とて、立上る裾を捕へて「貴方樣のお出でなさるは惡し。風を喰らうて、ちよいと外へ外すは必定、矢張あなたは、其の儘此處にお出でなされて、何でも聲高にお喚きなされてお出でなされば、旦那はお座敷にと油斷して、したいことしらるゝ處を、吾等そろりと參り、委細を見とゞけ申すべし。」と、得手勝手を云へば、「いかにも〳〵、然らば其方を賴むぞ。」と、段五兵衛は座敷に居なほり、酌をする女に三味線彈かせ、落人の爲かや今は冬枯れてと、聲高らかに語り出す。其の隙に孫太郎、まつかせと下におり立ち、小座敷に入ると、後家待ち受けて抱き付き、「首尾は。」と云へば、「さればこそ、何も知らずにあの高々。」と、石原を藥罐ひきずるやうなおとぼねにて、梅川忠兵衛の道行き聞く如く、二人しめ笑ひして、此のせはしない處が命ぞと、轉び合つて

埒を明け、後足にて土をかけぬ許りに、孫太郎何喰はぬ顔して二階にあがり、「さて〳〵人をば疑はぬもの、下へ參り詮議致すに何のわけもなく、後家御は至つて腹痛と見えて、用たしにござつた樣子、殊の外惱みの體畢竟、あなたさまなればこそ、身に替へてのおつとめ、よしなき事申せしは、我等のあやまり。疑はしき事微塵些かない樣子。」と、聞いて段五兵衛、「それは氣の毒、斯樣に内外熟懇にする我等へ近頃遠慮強き仕方、腹痛ならば夙くよりそれと明して、ちと休みはせいで。」と、頭を掻きて、氣の毒がらるゝ處へ、後家腹を抱へて力なささうに座敷へ來ると、段五兵衛紙入れより、丸藥等取り出し、手づから與へて、「何と心持は如何ぞ、腹の痛むに遠慮はなし、彼方の間の靜かな處へなりと行き、ちと横になり休息し給へ。先頃も其方癪の起りし時、孫太郎は蝮手とやらにて、彼奴が揉んだら治つたと云ふ事、何と孫太郎大儀乍ら、おやまをあちらの間へなりと連れて行き、背中からなりと押してやり介抱頼む。」と鼻の下を長くして、結構過ぎたる詞。「もうそれには及びませぬ。」と、おやまの斟酌、「はて扨孫太郎ことは一つ家に居りて、心置きもあるまじと思ひ、吾等の頼みたるに、男と思ひ、遠慮しての事か、人にこそよれ孫太郎の心底、實儀者と見込みて、吾等懇意に致す位、其方の身に少しでも、怪しき事あれば、吾等へ早速耳打つ程の忠心者苦しうないこと、孫太郎ひらにあちらへ連れて行き、按腹を頼み入る。按摩料少分ながらはずむぞ」と、黄なる物壹枚取り出し、孫太郎へ

下さるにぞ、「これは有り難し。」と牡丹餅にてたゝかるゝ心持。「あれ程までにお心を遣ひなさるゝ事、先づあちらへ。」と、無理に後家の手を取りて、一間隔てし小座敷へ連れ行き、どこをどうするやら、此方は夢中作左衞門、何も知らぬが佛にて、女共相手に酒盛し、地道な話に精をつかし、欠伸も三つ四つ出たる時分、孫太郎居るかと來りて、「後家御大方、御腹痛もとつと善い樣子、旦那には嘸かし御退屈、これから御酒に致すべし。」と、指す手引く手に己の勝手のみ云へども、段五兵衞心付かず、「おやま心よいとあれば、何よりもつて珍重。兎角其方でなければ埒明かず、萬石屋の見世も手代共の不埒ゆゑ皆暇を出し、無人の處、幸ひ其方の世話するにて、何も差しつかへの事なき由、おやま殊の外悅び、吾等に於ても滿足致す。此の上とも賴むは其方ばかり。可愛さうに後家一人、女の身であくせくと心遣ひが不便さに、屋敷の手前は吾等如何樣にも請け込み、取計らへば、萬石屋の家名相續のこと、幾重にも其方の心添へを吾等よりも折入つてのたのみ、其の代りには骨はぬすまぬ、其許の働き代は、吾等の料簡にて別段に仕方あればその心得にて萬事を賴む。先づ是れは當座の賴み、そのしるに、輕少なれども、吾等の志、受納あれ。」とて、又金子五兩を紙にねぢりて投げいだされ、孫太郎餘りに果報過ぎて、氣味惡き程に思へど、先は一向の結構人。さりとては、これも女に孝行の段五兵衞、何事も知らぬでもつた世の中、此の人往生せられたら、佛に成ること請合ひ、石に判して急度相

違あるまじと、孫太郎心の中をかしく、おし戴きながら脇の方を向きて、舌を出せしは心憎し。

討ちは致さぬ 金がかたき 世中貧福論後編中册 終

討ちは致さぬ金がかたき 世中貧福論後編下册

七　昔話に尾鰭のつく生物の腐れ縁

昔と違ひ、今時の人は萬事に小賢しく、縱令心の鈍き者も、相應の智德を持つて生まれ、見るを見眞似に、習はずしてその道々を知れる顏付き。先づ見た處の愚かなるは一人も無し。殊更商賣の道にかけては、枕を割りて工夫仕出せし賣物を、直に側からおつ被せて、なか〳〵一人許りに、善い事はさせぬ世の中。然るに孫太郎は如何なる拍子の瓢箪やら、水に浮き沈みのあるが中にも、降つて涌く仕合の善さに、手もぬらさず、分限不相應の金銀をしこ貯め、思ひも寄らぬ福後家にかゝりて、うまき物喰ひ飽きせしは、天より運の降りたるにて、今は衣食に事缺かず、住所は人の物なれば、何時かけ出さうと儘の身分、この程は諸人の猜み憎む程なるゆゑ、幸ひ古鄕も懷かしく、置き去りにせし女房も、少しは不便と思ひ出すに付け、そろ〳〵と羽根づくろひし、「國元の母の年忌も近ければ。」と、譃八百に一先づ歸國し度き由を、後家に話せば、これも浮氣一遍の尻あけ猿にや後を引かず、早速の承知に餞別とて、また黃なる物の數々衣服萬端殘る方なく支度して、金子都合二包ばかり、小判にし

てしつかりと、襷に縛り付け、日暮前足元の明るきうちと、夜船に打乗り大坂に到り、それより道中さし急ぎ、藤澤の驛に著きて、柳行李の著替小袖取り出し、立派に出で立ち、わざと黄昏時分鎌倉に到り、己が住みたるとおぼしき家居を見れば、から臼の音して屈竟の男共、俵の力持しゐたるに立ちより、女房おかまのことを問へば、「それはたしか、天竺へ引越されました。」と、耳を取つて鼻をかむやうな事を云ふ故、これはさもあるべし。女房一人今まで爰にはゐられまじと、其の鄰家を覗けば、刻煙草屋の跡に、月水早流しの看板、向うの居酒屋、以前呑み倒せし借錢のおどもり、やかましく催促せしが、これも三五十五の團子見世と、ころりかはりて、近付きの人あたりに見えず。此の上はとて、兀山頓白の方へ行き、案内して打通れば、頓白夫婦臺所に居合はせ、これはとばかり、ぎよつとせし顔付きなりしが、孫太郎の風體りゝしく、雨掛の柳行李を男に持たせしを見て、詞を改め「さてもひさしや孫太郎か、まづ／＼これへ。」と云ふに、草鞋解き捨てあがりて、荷物の中より反物數々浪花淀橋の煙草入れ、四橋煙管、有松絞り、府中の籠細工まで、竝べ立てて土産とし、「さて吾等事、段段の不埒、眞平御高免下さるべし、女房共も嘸や恨みあるべきが、以前吾等あるまじき心根の、ふとせしことより人を戀せしに、思ひ寄らず金子を得て、既に他愛もなく、使ひ捨てんとしたりしが、いやいや當分盗人とも云はばいへ、今まで僅かの賃錢を取り、無念の暮しをせし事も、元手と云ふ物な

きゆゑに、生き甲斐もなき身の上。此の金をもつてなんでもひと稼ぎし、あつぱれ金儲けして、こゝろざしの優しき女房どもに安樂をさせんと思ひ込み、上方へ赴き、だん〳〵仕合善き事重なり、金子も多分儲けし故、穢れし頰を押拭ひ、今般歸國せし上は、何事も御宥免。」と、委細を語り詫びする體に、頓白横手を打つて、「まづ〳〵無事にて珍重なり。此方にも段々の話は追々。先づ内儀に對面あるべし。これも今は我等鄰家へ引移り、安穩の暮しいざ〳〵同道致さん。」とて、孫太郎を誘引するに、打連れてその家に到り見れば、まだ新しき普請の結構、召使の男女も見えて、中の間におかま、べんべらもの引張り、座蒲團の上にしかみ火鉢をかゝへゐたるが、顏容も思ひなしか、樂燒の茶椀を、胡麻あえにせし樣なる顏つきなりしも、色白くなりてどこやら美味のありさうに見えて、孫太郎も見違ふる程の風俗、頓白を見るより座を立ちて挨拶し、「此のお方は。」と孫太郎の顏を見て肝をつぶせば、孫太郎打笑ひて、「珍らしや、命あればこそ再びそなたの無事な顏見て、悦びいかばかり。吾等の不埒は唯今頓白樣へも段々お詫び申せし通り、上方へ登りて、思はぬ仕合し、そなたの事懷かしく、今まで苦勞をさせし代り、安樂に養はんと立歸りし處、見れば此の家居の結構、これはそなたの家か。どうした譯にて此の暮しは。さてこそ吾等の惰弱を見限り外に男を持ちしや。」と云ふに、おかまはらはらと淚を流し、「其の樣な心ならば、こな樣のやうなる人へ、頭から緣付きは致すまい。頓白樣のお世

話にて此の家を建て此處にをる。段々の話は後にて、先づこな樣に引合はす人が有る。」と、奥の小座敷より伴ひ來るは、傳へ聞く唐土の楊貴妃か、我が朝の小町衣通姫とも云ふべき美婦人、孫太郎見とれて、「そもこれは誰樣ぞ。」と云ふ時、おかま腹を抱へて吹き出し、「こな樣の命にも及ぶ程、戀ひ慕ひし人を、見忘れてか。」と云ふに孫太郎よく／＼見れば、見覺えある大磯の太夫千歳なるゆゑ、忽ち赤面し、呆れ果てて、「是れは又、思ひがけもない。太夫殿にはどうして此處に。」と、面目なげなる顏色を、おかまをかしく、「こなさまは、驅落をする程の事ゆゑ後はかまはず。わしが折角この千歳殿から借りて來りし金濟まさずには置かれず。金も取られ主は驅落せしと斷りいはば、私共に譃欺りごと云ひて、千歳殿を欺したかと、思はるゝが恥かしさに、それから夜の目も寐ず、人の賃仕事すゝぎ洗濯する片手には、商賣の青物買ひ出しては賣り、朝夕白粥に味噌鹽の外食はず、始末し稼ぎ、やう／＼十五兩の金をこしらへ、かやう／＼と譯云うて、千歳殿へ戻せしに、情深く段々と、わしの志を不便がられ、奥底なく話の上、千歳殿の云はるゝには、今は外に親もなく、親類縁者も無き身の上、そなたのやうな實ある人を便りにしたし、今よりは姉樣と思ふ程に、何かの相談相手になつて下されとの賴み。それよりして互に、折ふしの問ひ音信に親しくなり、誠の兄弟の如くせしに、星の井の大盡殿に千歳殿は請け出され、引取られても、やはりわしは姉と名乘り、そこへも不斷心安く行き通ひる

たりし内、つひにその大盡病死せられ、千歳殿へ隙出でて、記念金三百兩、その外樣々貰ひたれど、賴らるゝ方なく、わしの處へ引取り、こなたに始末し貯へし金に、三百兩を都合し、旅籠屋風呂屋、數多の株を買ひ請け、人に貸してそれ〳〵の株代を取り、それにての遊び暮し、わしのやうな不器量者でも一人をれば樣々と、相談しかくる人もあれば、千歳殿は猶のこと、歷々へ片付く口もあつたれど、いま男を持つて氣苦勞しようより、いつそのこと二人して、氣儘に暮すまいかと、談合づくに此の仕儀。」と、始め終りの物語、流石の孫太郎感に堪へ、「扨もそなたは貞女かな、かくも優しき心ざしは、千歳殿も同じ心底。我等愈面目なし。」と、女房に頭を下げて、あやまり入りたる風情。千歳も嬉しげに、「姉樣の殿御とあればわたしは妹、此の上とも可愛がつて下さりませ。」と、何處やら色を含む挨拶、「何がさて畢竟御身より賜はりし、金から起つて、吾等も斯くの仕あはせ、女房と云ひ二人とも、我が爲の福の神。頓白樣の御深切、お禮は言葉に盡されず。」と、それより打混じて、悅びの酒もり。めでたいづくしを云ひ竝べて、孫太郎は蒲燒の鰻に氷おろしをかけたる心持。甘い事づくめにて、女房の建てし家居に旦那顏して、其の夜はおかまと久し振りの樂しみ。隨分お氣に入るやうにもつてまるり、翌日は天道を黃色に拜む位なれど、飯よりは好物の男、折々はおかまの目を忍び、權柄づけに千歳をもいぢりかけ、錢入らずの榮花。かかる橫著の頭にも、舍ります神のあるやらん。ひと

へにこれも貧乏神に見はなされたる故、この仕合を掘り起す、鍬先の達者なるら、其の身の一徳とや云ふべし。

八　貧すりや鈍ちやん內證の軍評諚

芝居の敵役の古い臺詞に、質の流れと人の行末陰陽師身の上知らず、家相見のわが物とて、八宅明鏡を考へ、工手間をかけて造作せし家にも、借錢積りて尻すわらず、夜逃げにせしを見れば、我が身の上は知れぬものにて、これ慾に迷ふが故なるべし。さても古道具屋正作は、さしもに固き身代と云はれしも、奢りに長じ榮花の上盛り、有るに任せて使ひ果たし、福の神に見限られ、することなす事左前となり、金錢の入る事のみ打續き、その上女房長病にふし、因果と醫師の見立てちがひに、利きもせぬ藥のみて思ふ樣無駄なる金を費させ、病人は尻喰らひ觀音の御名を唱へて往生しければ、その歎きよりも正作は金の入るに力を落し、葬送して後、要太夫を妾宅に置くも費えとて、おなめと名を替へ、引取りて本妻となせしに、廻り合はせ惡しき時は善き事なく、大阪在のをなめの親元、福富方より、飯米三百俵化粧料二百兩は、かねての約束なれば、是れまでは年々送り越せしが、近年如何してや一向無沙汰なるゆゑ、正作怪しみ思ふ折ふし、おなめが弟なりとて、寒中にゆき丈足らざる破

れ給一つ著て、遙々と尋ね來り、「放埒ゆゑに親の勘氣を受け、身を寄する方なくわざ〳〵まゐりし」と、捻ぢこみての食客。其の癖、「わしは、飯よりか酒が好き故、金毘羅樣へお願ひ申し、何卒一生酒の止まぬやうにと願がけし、其の代りには、商賣して錢儲けすることは勿論、ちよつとでも身を働かすことは致すまいと、堅く誓言立てしたれば、唯遊びて酒飲むばかりの身の上。」と、竪の物を横にもせず、喰ひ潰して居る中、大分の品取り逃げして行方知れず、あげくの果てには、人の物をも唯取りておさへられ、云はずともの事を、此の正作が女房の弟なる由、口走ると其の儘先方より届けられ、樣子を聞けば、笠の臺の離れさうなる仕打なる故、捨てても置かれず、盜人に負錢出し、償ひて內濟すれども大分の物入り。其の上是非なく又々引取るに、瘡を煩ひ總身へ吹き出し、行歩叶はず、永々厄介かけて終に相果て、その一七日もたたざるうち、これもおなめより三番目の妹、飯炊き男の三助と懇し、姊をたよりに驅落して來り、泣きつき賴むに、これもさながら見放しもならず、此の二人いけずるく、しかも我儘者、「私共は是れまで恩を見せ置きたる人數多有る故、何處へ行きても麁末にはしてくれねど、姊樣の懷かしさに遙々の處、わざ〳〵尋ねて來ました」と、深切ぶりに喰ひ倒して居る中、正作の持前にてこの妹の澀皮のむけたるに一杯機嫌のうへ手を付けて、かの三助におさへられ、刃物三昧して大きにゆすられ、是れにも餘計の金を取られ、其の上三助、無體にこの女を引つさ

らひて、何方へか逐電し、影も形も見せざりしが、後によく〳〵つまらぬこと仕出來せしと見え、二人心中して、何の是れも、書置きせずとものことを、正作の名處委しくしるして、是れまでのしだらを、詫び言の書置き。又此の尻が來て、死骸の取り置き、それ〴〵への挨拶入用、これにも餘程の金を費し、福の神樣と云ひしおなめ、どうやらかうやら貧乏神となりて、正作の悔みまだそのほとぼりも醒めぬうち、おなめの親元、いかなることにや、打續きての不仕合にだん〳〵零落し、流石の分限もばた〳〵と身上しまひて、處の住居もなり難く、富平夫婦に、子供六人まで打連れ、見すぼらしき體にておなめを目當に下りしが、途中より親父病氣とて、通し駕籠に乘り込まれ、その駕籠賃さへ正作に拂はす程の難澁。舅の事なり、是れまでの恩義もあれば、詮方なく背負ひ込み大勢の厄介　其の頃凶作打續き、米は高直なり、六人の子供道中ひもじき目に會ひしと見え、痩坊主の齋に付きたる如く、腹の中に宿なしも居るかと思ふ程の大食、追焚きしても一餉は粥にでもせざれば足らぬ位。これはならぬと、正作一人氣を減らし如何はせんと思へども、すべき手段もなく、商賣も手につかず、今ははや日毎にやり繰りにのみ胸を痛め、とても地道の事にては埒明かず、何ぞくわつと一時に儲かるやうなこともやと、兩腕を組み天窗を割れども、金許りかは智慧も思案も無かりける。

九　泣く頬をさす八幡の勸進角力

其頃雪の下に、山鯨猪右衛門と云ふ角力の親仁分、鶴が岡の境内にて勸進相撲興行するにつけ、正作を語らひ金主と成さんと、甘く話して金儲けの摑み取りもある樣に、ふづくりかけられ、元よりはや、身上不手廻りとなりし人の癖として、大慾を起し山ごとにかゝる習ひ、この相談にふはと乘りが來て、正作手前にははや遊金は無けれども、工面してやりつけて見る心持と成り、其れより角力の年寄仲間を集め、色々評議する中、一人の云ふには「房州保田の麓に古今無雙の大男あり、いまだ若年なれども、昔の釋迦が嶽より、千鱈に樽を添へて取喰らひ、恰も小山の搖ぎ出たる如きの大兵、體の目方六拾貫目に餘る由、さきは至つての貧窮百姓、吾等先達て貰ひ受けんと相談をせしに、金子不足にて手を空しく歸りたりしが、天晴れ此の者を貰ひ受け、押し出しなば、假令角力はともあれ、先づ其の化物かと思ふ程の大男にて、評判を取る事請合ひの西瓜、はづるゝと云ふ氣遣ひの無き代物、僅か金子拾兩許りも有れば、親の手を切り貰ひ請け、一生こつちの者にして、金儲けをする事。」と、鼻に油をのせて話せば、座中手を打ちて、「やれそれを、何として今までは云はざるぞ、みす〳〵大金の目前に、ぶら下り有る事を、捨て置く事か。」と、正作も共に舌打して、「然らば其の金子吾等才覺すべ

し、此の方へ貰ひ切る手段を頼む。」と相談しめて、年寄仲間一兩人急に支度し、房州へ遣はせしに、此の者共保田の親許へ掛け合ひ、金子七兩にて貰ひ請け、船に乗せて打連れ歸りければ、成程珍らしき大男、盛年未だ十九歳、背の高さ八尺五寸許り、處から石の大佛の如く、鴨居低き家の内へは、這うて入る位にて、更に人間とはおもはれず。是れは金の生る木男と、正作悦び、褌も張り込みて立派に作へ、名乗りを岩羅漢と付けて、先づ初日を出すまでは人に見せなと此の男を、我が宿の奥の開天井を打抜きて入れ置き、場所の小屋掛けさし急ぎ、金の降る日を、待つ樣にせきこみ、太鼓を廻し、今日初日と云ふ時、夜明け方より俄に雨降り出して、次第に強く車軸を流し、風烈しく吹き荒れて、折角掛けたる角力の小屋、横樣に倒れて、「これは目出度い、小屋をも蹈みつぶす程の大入、吉相が善いと、傍から取りはやせば、正作苦笑ひしつゝも、明日の日和を待つに、雨雲いやが上に立重なり、何時晴れさうにも見えぬ氣色、しかも八專がへりとて、慥かに八日は降り續くものと人の云ふに違はず、毎日の降り續け十日餘りも日の目を見ざれば、町方は商ひ店に戸をさして、居食ひするに氣をつかし、百姓は作物の根が腐ると喚き出し、水場には堤を切りて鄰村へ惡水を落し、爭論となりてめいめい鋤鍬を擔け、走り廻り、擲き合ひて喧嘩絶えず。これでは假令日和善くなればとて、角力どころではないと、見合はせて居る中、正作處の物入り、毎日角力取共寄り集まりて酒肴の暴れ食ひ。始め

の程は、聽て金儲けとその樂しみ有る故、費えを厭はず、旦那々々ともて囃さるゝ面白さに浮かれ、大氣に樽酒をつけて、破目をはづせし騷ぎに、有頂天となりしが、此の程は胸につかへてをかしからず。酒もこれで五樽目、今日酒屋から是れまでの代金下されずば、あげられぬと斷られし由臺所の親仁、而も人中にて高々とつぶやく。肴屋よりも、大分賣り懸け溜りし故、内金が借りたいとの催促。米は今年中食ふ心算の圍ひ米、何時の間にかは、一俵も殘らず。道理なるかな、彼の岩羅漢、體に合はせて三四人前の食事一餉に、一升五合では食ひ足らぬ厄介者。其の上聞けば、持病に癲癇ありて人とせり合ふか組み合ひでもするか、總じて人立ちの多き騷がしき處にては、極めてその病起るとて、此の程は逆上して頭痛がすると寢てばかり、横になると座敷一ぱいふさがり、押入れの物出しに行くにも、次の間より廻り道せねば行かれぬと、家内の小言やかましく、正作も持て餘し、是れは因果のつくばいと、今さら悔みても返らず、勿體なくも天道を恨み、己の微運に應ぜざることを知らずして、今は西明寺の雪の段、後へも先へも行かれぬ身の上とは成りける。

十　無心の種を卷舌は生醉の似山師

小人窮すれば不善を成すとかや、正作はこの降りつゞく雨に、今日も明日もさめはて晴天十日の角

力、二十日餘りも絕えてはつきりとせし日和を見ず、小屋も腐り又建て直さねばならぬ仕儀。其の上內證の矢種も盡き、此の雨に借金の淵次第に深くなり、質草もなくなり、工面に盡き、此の儘止むるも無念とは思へど、小屋の普請、これからの雜用諸事に、今金子二十兩も才覺せねば、ならぬに究まり、如何はすべきと思ふ處、近在の有德なる大莊屋權太夫と云ふ者の妾にかめと云ふは、もと大磯に勤めの身にて、正作の女房要太夫の妹女郎なり。當時權太夫の妾となり別宅に住居し、到つての內福にて、金子を人に用立てその利分を取りて、金の殖ゆるを、樂しみとする由正作聞きて、女房おなめよりの緣に從ひ、尋ね行きて委細を話し、何卒金子二十兩入用の由、おなめよりの文を見せて賴み込みしに早速承知し、「さ有らば明晚までに整へ置き申すべし。手形認め請取りに來らるべし。さりながらこの金子用立ち申す事は內分の事故、權太夫殿は勿論外へも決して沙汰なし。」との事にて契約し、立歸りけるが、この權太夫大兵にて小力もある男なれば、角力好きにて、山鯨猪右衞門始め年寄共、日頃親しく出入しける故、此の仲間へ使の者來り、明夕方妾宅にて、遠來の珍物振舞ひ申すべし、皆皆打揃ひ、まゐるべき由使の者の口上。正作聞くより、「是れ幸ひ、權太夫知らぬ人にてもなし、妾おかめへかの內用もあれば、吾等も押し掛け行く可しとて、其の日角力取仲間と同道し、權太夫が妾宅に到り、心にあらぬ追從輕薄して、權太夫のお髭の塵を取々の酒盛。正作隙間を見て、そつとおかめ

を傍に招き、昨日お賴み申せし金子、約束なれば今宵受取り度きよしを云へば、かめの云ふやう、「如何にも此方承知なれど、今少し折惡しし。其の事に就き、御話し申し度き事有れども、此の取込みの中いかゞなれば、何卒明日にても密かに御越しあれ。」と云ふ。正作聞きて、「されば此の方にも早急の入用あれば、今宵の中の御願ひ。」と、押返し賴めば、暫く思案し、「さ有らば此方旦那殿、何時も此處には泊りたまはず御歸りあれば、御身虛病を起すか、但しは酒に醉ひ給ふ風情して打倒れ、旦那の後に殘り給へ。不斷心安き人々の此處へ止宿し給ふこともあれば、構へて旦那への遠慮は入らず。」と、この魂膽に極めてしめし合はせ、心中にさても嬉しや、吾等わざと醉ひつぶれ、後に殘りてあはよくば、金子諸共、此の妾の寶藏の家尻切らん事胸中に手段ありと、口なめずりして、あつかましくも、早このおかめをせしめる氣になり、しすまし顏にて座敷に立出で、それより醉ひたる風情して、倒れ殘らんと思ふ底意なれば、人目にも立つ程飮まざれば、醉ひたる風にはうつるまじと、誰も賴みもせぬ相を致し、押へもせざりし杯の數を重ねて、皆飮む風情をし、半分は打ちあけ、隨分おつにくろめて、そろ〳〵と管を卷き出し、眼を据ゑて、生醉の體をすれば、その座に眼張と云ふ角力の年寄、これは下戶にて人の呑むのをまじ〳〵と見ながら、片隅に目を持ちてゐたるが、進み出て、「是れは正作親方には、日頃成る口にて今日に限り、酒何杯飮まれて、其の樣には醉はれたるぞ。先刻より見事

に見えたる其のおしたみは、これにあり。」と、脇取り盆二枚に滿へてある酒のしたみを取り出し見すれば、座中手を打ちて、「これは酒の外に我々を醉はすやうな仕掛、如何にしても面憎し。最前からの過怠にこれで一杯呑ませよ。」と、丼鉢を明けて、權太夫から云ひ出し、いづれも醉ひ機嫌の者共立ちかゝり、正作を無理に突き据ゑ、かの鉢に一杯つがせ、兩方から目見が付きて、「少しにても皮をむかば、又改めて呑み直させよ。」と、皆々かゝつて責め付けられ、醉ひしふりなどいかな〳〵受け付けねば、詮方なくやう〳〵此の酒を飲み盡し、今は誠の醉ひ姿權太夫の方へ、足を蹈みのばして、横に倒れながら管を卷き、其の身の自慢を高々と云ふとて、「これ〳〵そなた達も吾にあやかれ。今日醉うたふりして跡に殘れ、內々こつそりと、話が有ると、爰のお妾殿が仰せられたは、大方吾等に氣のある證據は、金も二十兩貸して下さる筈、なんと色男か、いかに〳〵。」と、正作酒に醉ふと、自負をあぐるが癖にて、己の心に思ひし事を、一つも殘さず醉ひに浮かれて、繰り返し饒舌るにぞ、妾は權太夫の手前迷惑さに、「是れは怪しからぬ、何時私が其のやうな事を、他愛もない、氣でも違ひし人さうな。」と、赤面し腹を立つるを、權太夫、心の練れたる男なれば、正作の醉ひし戲言にしてしまひ、これを調べず笑ひとなせど、正作はそれより前後も知らず大勢に引きかたげられ戾りたりし事も、一向夢中にて、翌朝目醒めて見れば我が宿なり。これはと起き立ち、肝心の金のこと、何とせしぞと、早

速妾宅に走り行き、臺所へ入ると其の儘、おかめ顏色を變へて、云ふ程の事此方には一つも覺えず、樣々ことわり云うても聞かばこそ、跳ねつけられて、もとねにしかね、折角借り出す心算の金、算段ぐわらりと閒違ひ、角力の跡を餅につきて、是れまでの入用殘らず入れ損となり、後に殘るものとては、大飯食らひの岩羅漢ばかり、親元へ返さうにも、只は引取らぬ樣子、其の癖遠慮會釋も無く、「肴も干物を菜にしては思ふやうに飯が食へぬ。」と、きよろりとした顏つき。さてもこれは困り者と、さしもの正作しんまくし兼ね、如何なれば、手に取りしやうに覺えし事も、土俵際にて變起り、工面の四十八手もし盡し、櫓太鼓のどんつくな目に會ひしも、我意の強さに善果をあやまり、惡因に引かれて、する程の事、禍ひならずと云ふ事無きに仍つてなり。されば人界の盛衰は、善惡の報に依ると云へども、一つは其の身に備はりし運次第にて、榮枯交々轉變し、今多羅福屋孫太郎の洪福、正作には打つて變りて金の生る木の榮え久しき春ぞめでたき。

此の外樣々趣向有れども餘り帖數が長く相成候故、先づ是れにてさし置き、猶嗣編追々出板致し入二高覽一可レ申候。御評判宜奉二希上一候。　板元

討ちは致さぬ
金がかたき

世中貧福論後編下册　終

通俗巫山夢

通俗巫山夢自敍

朝には春の花に愛で、夕には秋の落葉を悲しみ、榮譽を貪る事、浮海の一粟の中、假に夢を結ぶが如し。予夢中に此の夢物がたりを著し、頓に樂しく命けたるとは、かの漢土の巫山の神女が、雲となり雨となりて、楚の襄王に弄りたる、故事より思ひよりつゝ、一彈指の憂樂は、もと無なることを諭くといへども、現にあらず、悟めたるにあらざれば、唯長日の睡眠を需むる手引となすのみ。こは自笑其碩の筆意を偸むの嘲りに遭はん後は、籠中に藏れ、鼠の巣とならん事をこれねがふものなり。

于時文化癸酉春

十返舎一九題

通俗巫山夢目次

此の書の大意は、明和の頃の時行唄に、花洛の娼妓に吉原のはりをもたせ、長崎の衣裳を著せて、大阪の揚屋で遊ぶ夢を見て騒いだといへる事のありしを、據所として、文化は八文字屋自笑に倣ひ、滑稽を專として、一騒士が放逸の事跡を著し、童蒙をして不詢の道に奔らざらしめんとおもふ而已。

一之卷

萬葉集にも朱雀所の柳とあり、所がらのけしきを、

第一章　たひらのこは西の禿にならひけり　其角

第二章　蝶の飛ぶばかり野中の日影かな　ばせを

第三章　さかづきに泥なおとしそむらつばめ　ばせを

二之卷

第四章　さほ姫のうちかけすがた藤のはな　其角

第五章　若いとき捨てたるかねの寒さかな　杉風
第六章　大黒の米見て戻れぬくめ鳥　御射山翁 羅人

三之卷

第七章　玉笹にあらぬ一夜のおとりかな　其角
第八章　つばくらや鳥影たえぬ船おろし　文母
第九章　見せたしな始皇に雪のしるし傘　風狀

四之卷

第十章　朝貌にうすきゆかりの木槿かな　蕪村
第十一章　しらぬ火に陽炎見ゆるひる間かな　成山
第十二章　酒くさき人にからまる胡蝶かな　嵐雪

五之卷

第十三章　小袖著せて俤にほへむめの妻　其角
第十四章　秋風のこゝろうごきぬ縄すだれ　嵐雪
第十五章　とゝはやす女は聲若しなつみ歌　同

通俗巫山夢目次　終

通俗巫山夢巻之一

東都　十返舍一九編

萬葉集にも朱雀の柳とあり、所からのけしきを、
たひらのこは西の禿にならひけり　其角

第一章

花は櫻木人は武士、肴は鯛に、紅小袖、女は都、物ごし優しう、風俗も又餘國にすぐれて、久かたの尼法師、あらがねと土なぶりする幼女までも、おのづから賀茂川の水際たちて、華奢風流、得もいふべくもあらず。これが爲にうかれどちの打連れて、春は東山の花に、辨當の坊主持して樂しみ、秋は高尾栂の尾の紅葉に、酒樽の馬持して生醉絶えず、夏は四條の納涼に、居ながら古褌の洗濯してあそび、冬は圓山の雪景色に、轉びながら下駄の掃除して通ふなど、四季折々の壯觀多かる中に、島原といへる一廓あり。三千人の美女を集め、賣物に花をかざり、情の大安うりと引札して、こゝに見

世をひらきしより、騒客の得意われも〳〵と、朱雀野道にひきもきらず。げにや東寺羅生門の鬼も、金札に閉口せしは、地獄の沙汰も金次第なりと、もつたが病の、萬福長者町通り一條下りて住居すれど、身代は日に〳〵のぼる、豊阪屋の陽太郎といふ者あり。父は陰兵衛といへる唯の親父にて、性質あたじけ茄子の、いまだ青臭きはしりをば味ひしらぬ男にて、若きうちより吝嗇を好み、義理をかくことを茶漬飯のごとく思ひ、遊興をば疫病神のごとく嫌ひ、商賣に至りては、唐土諸葛亮、我が朝の楠木なんどが雪隠に入りたるとひとしく、一心不亂、わきめもふらず稼ぎたりしかば、身上濕地のうごろもちの如くもち上げ、次第に手廣くして、生涯の内とち萬兩の分限となり、御屋鋪方の御用ちやつと畏まり、町方の家質引當てオツトまかせと大金を貸しかけ、其の利足ばかりにて、今家内犬猫ともに三十人あまり、貳疋のくらしなりけるも、諺に親苦をし子樂する孫乞食するといへるが如く、いまだその乞食する孫はなけれども、はや總領の陽太郎、醉うた〳〵五勺の酒にも、忽ち合羽屋の連木ほど赤くなりしが、いつしか底拔け上戸となり、跡をひく三味線も、ちつくりかじりならひ、鼓をたゝきおぼえ、太皷もくらはせ、茶の湯も呑みかけ、花も突つこみ、俳諧狂歌の門にも、婆娑で見た與治郎ほどは附き合ひ、だん〳〵と戯氣の豊年打ちつゞき、鼻毛の穂に穂さきて、親の物は子のものと、金銀を湯水の如くつかひすてて、漸く垢拔けのしたる男と思ふ己惚より、却つてその身の汙れた

るを知らず、八百よろづの神達を信心して、いつしか此の島原に、百度まゐりの歩みをはこび、桔梗屋の若紫といふ松の位に、三間階子をかけて登り詰め、野干の大番振舞ひにはあらねど、揚げ詰めとなして晝夜を分たず、一寸さきは闇雲ながら、里の諸譯には明るくなり、萬事氣の利きたる遊びにて、そのくせ男ぶりもまんざらでなければ、若紫も憎からず思ひ、互に相思ふ中は離れじと、漆紅葉ながしつゝ、龍田川の鴛鴦をまなび、堅くちぎりてありけるが、さもながたらしき行末の事ども、宿老五人組の加判せぬばかりに、痳病やみたる牛の小便ほど、亢龍悔いあり、すべて物の滿ち昇るときは、きはめて下るべき、禍ひ出で來れるならひとして、忽ち降つて涌いたる難澀あり。その藪から房州の人のよし、所用ありて上京し、旅泊のつれ〴〵、此のさとに通ひて、若紫の婀娟なるに、鼻の下を童子格子となし、金銀は權兵衛の種蒔くやうに、ばつ〳〵と蒔き散らし、心を盡せど兎角に、若紫の打解けざるを怨み、所詮この太夫いかに根強くとも、われら金の力をもつて、ヨイヤこれはさと根引きになし、國元へ連れ行き、鰯網のめに、水も洩らさぬ中と語らふべしと、手前ばかり呑み込み山の鳶たつやうにせきたち、急ぎ桔梗屋へ相談し、手附半金を渡し、跡金を償ひ次第、埒あくべきに約束かためてありけるを、若紫是れを聞くより、打驚きていかにせんと、陽太郎方へ人を走らせ、その事を玉章にいひやりければ、陽太郎この音信は、まことに足元から、たつ鳥の跡なかば讀みさし、周

章てふためき、壁に馬のりかけたる、おろせが駕籠、三まいにて飛ばせ、早くも曲輪に來り、角德といへる揚屋に走りこみ、太夫を呼びよせ、「扨樣子は。」と尋ぬれば、若紫も淚にかきくれていふ樣、「はや彼の方に身請け極まり、跡金はこのひと日ふた日のうちに埒あけ、すぐにわたしを遠き國に連れ行かんすとのこと。元より方樣に深くもかたらひ參らせし身の、何とて外に心をうつしませう。所詮長らへて思はぬ人のながめにあふも、うとましと、覺悟を極め、いきて居る氣はござんせぬ。今しの御げんを、この世の名殘と思へば、いとゞ胸せまり、言ひたいことの數々も口ごもりて、おもふにまかせぬかなしさ、推量して。」と、袂を顏に押當て、ふし沈むにぞ。陽太郎聞きて、「委細はそなたの玉章にて、逢ひ見ぬさきに辨へたれど、何といふも金づくなり。尤もわれら身上にては、太夫の百人二百人、受け出したりとも、何のその、絲瓜の皮とも、思はねども、未だ部屋住みのかなしさ、親父の熊鷹眼、番頭共のどんぐり目、人にすぐれて天眼なれば、この目をぬく事、生馬の目よりもかたく、過急の事には覺束なし。去りながら我等とても、そなたを人手にわたしては男の一分たたず、友達共の笑ひぐさ、曲輪中の者どもに、顏見られんも口惜し。さらば智慧袋の底うちたゝき、何とぞ身請けの金才覺し、このはうへ引きとり、その房州とやらに、鼻あかせん。かまへて氣づかひしやんな。」と、口から出次第、めつぽふ彌八と云ひなぐさめつゝ、其の夜子の刻過ぐるまで、語りあふうちも、何と

やら氣もしめり、胸つぶれていつよりも面白からず。若紫はひとすぢに、身請けの事のみ案じわぶるを、陽太郎さま〴〵に宥め賺して、かならず明日の夜こそ、金子才覺して來らん」と、あてはなけれど、當座の出放題に、噓八百を云ひちらし、頓て別れて、長者町のおのが家路に走り戻りたりしが、去るにても此の難澀、いかにしてや償はんと、ひとり小座敷に寢もやらず、俄に文殊菩薩を祈れど、三文の智慧も出でず。目連尊者をしたへども、金工面する通力もむなしければ、途方にくれて心氣つかれ、おもはずとろ〳〵と打眠りたる夢のうちに、白髮をいたゞき、白衣を著たる老翁、何やらん、肩に荷はせ給ふを見れば、若紫の紋どころ、杜若の花を書きたる、提灯と釣鐘とを一荷にし給ふは、さてもそろはぬ釣合なるを、何とて持たせ給ふやらんと、陽太郎夢心に近寄つて、これを見れば、かの老翁の宣ふやう、「我は是れその方の父陰兵衛が日頃信心する藤の森稻荷明神なり。汝放逸惰弱にして家業に怠り、島原の傾城に打ちこみ、箸にも棒にもかゝらぬよし、父陰兵衛歎きて我に訴へ、何とぞ倅をきまじめの、眞人間となしてよと願ふ。ア、さりとては堅い親父、我等も以前若き時は、配下の狐共人を惑はさんとて、さも美しく油つきたる、ぽつとり娘の姿と化したるを見ては、コレ畜生めと思はず、尻をたゝきしこと折節なりしが、元來狐なることを知るがゆゑに、執著の心起るべき理なく、それかぎりの戲れなり。然るに其方は、若紫の性體も狐なる事をしらず、はぐらされて終には、

その尻の毛までもぬかるべし。ちかき譬は、わがふりかけたる提灯と釣鐘、其の方の目には、いづれを以て重しとするや。ソリャしれたこと、鐵をもつて鑄立てたる提灯はいざしらず、目方を論ぜば、お月様と泥龜、なか／＼釣鐘とは、比べものになりませぬと、言ふであらうが、左にはあらず。釣鐘重しといへども、佛法常住萬劫不退轉にして、ゴンといふ響きにも、百八煩惱を消滅せしめ、人間の用とする處、二六時中間斷なし。この提灯は、心といふ字にまがへる杜若の紋所、若紫のちやうちんなれば、巧言令色をもつて蠟燭のしんとし、妄火をうつして黑光を照らす。その罪のおもき事、釣鐘の十ヤ二十、引ッ括めても及ぶべからず。汝この提灯を目當とし通ふは、夏の蟲の火を慕ふが如く、其の身を亡ぼす基兆なるべし。この一條を旣得し、今より島原通ひを、ふつ／＼思ひとゞまり、家業やたらに出精すべし。陰兵衛の志せつなるにより、汝に意見せんとて、唯出できたるも、あまりに手なく、ちと茶番めきたれど、斯かるこじつけをなして、持ちにくきものを荷ひてあらはれたり。此の釣鐘も張籠にはあらず、コレ見よ。」と、御杖をもつて、グワン／＼と打たせたふ。まことや神は正直にわたらせたまへば、凡夫の疑念なきやうにと、こゝらまで御氣をつけられ、頓て末社どもを召され、まづ／＼是れは相濟みたりと、芝居役者の切幕に入りたる如く、小道具の提灯と釣鐘をわたし給へば、あまたの狐ども、めい／＼に受取り、かき消すごとくうせにける。明神かさねて宣ひけるは、

「猶も汝に見すべきものあり、こなたへ來るべし」と、先に立たせ給ふに、陽太郎夢中ながら、御跡につき從ひ行くに、處は何地としらず、渺々たる廣野に出でけるに、西の空山の端に入る日にはあらで、小判形せし光りもの日輪の如く、四方を輝らし、靑天鮮やかなりしが、ばら／＼と時雨降り出したるに、明神宣ふやう、「是れなん世話にいへる、狐の嫁入りのある日和なり、アレ見よ」と指ざし給ふ方を見れば、鋲打の乘物に、むかひ添への女、あまた附き從ひ、上下著たる男ども、前後を圍ひ、下部に長刀を持たせ、或は挾箱、手道具、釣臺など、後よりつらせておしきたるが、近寄るに從ひ、よく／＼見れば、其の人々の面體かたちは、人間にて有りながら、おの／＼尻尾をぶらさげたり。陽太郎横手を打つて、さてこそ是れまで人の話には聞きつれども、いまだ目下には見ざる狐の嫁入りなるべし。さても珍らしきものを見るものかなと、一心不亂にながめ居たりしが、漸々に近づき、旣に陽太郎の目前を過ぎるとき、乘物の戶少し開きあるにさしよりて、とてものことに、嫁御寮の顏見ばやとさし覗けば、ふしぎや桔梗屋の若紫、身には綾羅錦繡をまとひ、顏の化粧いつよりも花やかにつくりたてて、悠々と座し居たり。陽太郎思ひがけなく仰天し、呆れはてて、だうと座したるが、あまりのことに茫然と、氣拔けして兎角のことばもいでず。其の隙に乘物は、遙かに西の方へと行き過ぎたり。明神宣ふやう、「さきに若紫も狐なりと言ひしは是れなり。方食の詞をもつて人を迷倒させ、僞

りを實情と思はせ、實を戲言にかふる野干の所業。彼に實情ありとおもふは、則ち汝の迷ひなり。アレ見よ、西にあたりて光りわたるは、小判の光にして、とかく狐の嫁入りは、金の光る方へ行くものなりと思ふべし。汝金銀の不足なき豐坂屋の總領なれば、今部屋住みにて何事も心のまゝにならざれば、時節を待つて、外に祥ひの緣を索むべし。」と、濃やかに意見し給ひ、神去らせ給ふと見て夢覺めければ、陽太郎全身汗にそみ、神慮の有り難きを感拜し、藤の森の方をふしをがみ〳〵、さるにても年頃父の信仰し奉る餘光にやと、しきりに有りがたく「是れ偏に父の子を思ふ慈愛の切なる故、神明もあはれみをたれ給ひ、かく夢に此の身の不詢を告げさせ給ふならん、此の上神慮に悖り、父に逆らひては、たとひいかやうに計るとも、若紫を具せん事難きのみならず、不期の禍ひ、天よりくだし給ひて、非業に此の身をうち屠るべし。ア、おそるべし〳〵。」と、忽ち先非を悔みて「夜明けなば父に夢の告げをかたり、是れまでの不善を詫び、安堵さすべし。」と、思ひ續け居たりしが、程なく空あきらかになり、烏の聲告げわたるころ、陽太郎起き出でたるに、番頭杢兵衞なるもの、早くも出できたりて、陽太郎の手洗ひ口そゝぐうちを待ち兼ね、走りよりて「コレハ若旦那、お早うございました。何かはしらず親旦那樣のたまはせ給ふ。はや〳〵此方へ。」といふに、陽太郎聞きて、我らも親人へ申し上げたきことあり。」とて、急ぎ父の居間に入りたるに、夜前より止宿せしと見えて、一家親類の人

人、苦々しき顔して居ならびたるが、陰兵衛涙ぐみていふやう、「ヤイ倅め。是れまでの身持、度々意見すれども、とかく糠に釘、豆腐に鎹、ひとつも間に合はぬ故、所詮おのれが事は思ひきり、弟賞之助を跡式相續と、相談決著したれば、もはやおのれに用はない。今より七生までの勘當ぢや。勝手次第にいづかたへなりとも出て行きをれ。」と、以ての外の仕合。陽太郎懈轉し、「まづ御まち下さるべし。それにつき申し上げたきことあり。」と、今曉藤の森稲荷の御夢想のあらましをかたり、「かかる神慮の尊さと、父の惠みの深きことを感じ、一念發起し、是れまでの多罪償はん爲、今日より身を粉にし、骨を碎きて、商賣出精すべしと思ひをれば、何とぞ御勘當の事、幾重にも御宥免下さりませ。」と、いふに陰兵衛いかな聞き入れず、「おのれ又しても〳〵、譃八百ぬかしをる。是れまでも、最早心を改めませうといひしは、幾度か數しれず。その舌の根も干かぬうちに、早かけ出しをる不埒者。けふは自他とも勘當するつもり。宿老殿へもとゞけたれば、とても叶はぬ事ぢや。出て行きをれ。」と、詞は尖くいひ放せども、さすがに恩愛の涙たもちかね、兩眼をおさへながら、腰元共に差圖して、紙衣の古小袖を取りいださせ、「かねてはこれをおのれにうちきせ、追ひいだす手段にて、拵へ置きたるぞ。杢兵衛早くこれ著せて、さらけ出せ。」との主命、番頭是非なく、陽太郎の泣き入るを引きたて、無體に帯引きほどき、件の紙衣をきせかへければ、陽太郎折角本心に立ちかへり、父に詫びて、今よ

りは家業に、少しも油斷せまじと思ひたりしも、目算違ひ、さま〲に云譯すれども、承引なければいかゞせんと、途方を失ふばかりなり。さるほどに此の陽太郎の母親は、子の愛におぼるゝことふかき性質にて、陽太郎の終にはかかる身とならんことを思ひやり、それを苦にし病となり、此の頃養生の爲とて、田舍のしるべのかたへ、逗留に行きたる留守の事なれば、一向に是れをしらず。せめて母人だにましまさばと、陽太郎の悔み、詮方なければ、しほ〱として、住み馴れし家居をあとに出でゆきける。

第二章

蝶の飛ぶばかり野中の日影かな　　ばせを

質の流れと人の行末、定まらぬは商賣の利上げに疎く、借り過ししたる報いとは今こそしるき、陽太郎の名にも似ず、日陰の身となり、所詮是れまでの不孝の罪、天道赦し給はず、勘當せらるゝ際となりて、俄に心改めしと言ひたりとて、聞き入れなきも無理ならず。兎角此の身の不行跡より、起る災ひ是非なしと覺悟して、何れの淵川にも身を沈め、死なんものと思ひ極めたりしが、「さるにても淺ましや、とても勘當うくる事、昨日にも知るならば、太夫をつれて驅落し、生きるとも死するとも、

ともにせんものを、今かかる身となりては、曲輪へとても顔出しならず、畢竟蛇もとらず蜂もとらずと、たとへにいふ身の上になりたるいひ甲斐なさ、此の世の名殘に、せめて詞はかはさずとも、太夫の顔今一目見て死ぬべしと、又未練起り、笠深く傾け、島原さしてたどりけるが「いや／＼この案山子見る如き姿にて、若し曲輪のしりたる者に、顔見られたらんは面目なし。」夜に入りて行かばやと朱雀野の草原に腰打ちかけて、日の暮るゝを遲しと待ち居たりけるが、既にはや申の刻半ば過ぎて、島も塒におもむく頃、人相のかねばこおびたゞしく、下部どもに荷はせ、跡より田舍風の大盡めきたる男を、末社らしきが、あまた打ちかこひ行くとて、一人の男いふやう「さて／＼若紫太夫はあやかり者、かねてより豐坂屋の陽太郎といふ、きいたふうの、ちやうぼこにかゝり、互にすりへがしたり、へがされたり、へぼくだ將棊のねからつまらぬ戀中と聞きましたが、その陽太郎は、齒のない親父へ不孝の者とて、久離きられたと人の噂、そやつにかゝつてをらうより、旦那に根引きせらるゝとは、太夫冥加にかなうた出世。すぐに今宵から奥さまとは、ヤッチャめでたい／＼。」とそゝりたてて過ぎ行くにぞ、陽太郎是れを聞くより、藪醫師の悔みに來りて、洒落まはるを見るよりも頬憎く肝癪起りてこたへられず、「必定若紫の話に聞きたる、かの房州の客とやらんはあれなるべし。今末社どもの雜言、おのれ追ひかけて、金玉なりともしめ上げくれん。」と立上りしが、いや／＼さきは大勢なり、わ

れまた打擲にあはんも詮なし。此の上はいかにもして、太夫に會ひ、無理にすゝめても驅落させ、きやつめらに賴母子のからかけさせてくれんと、ひとり點頭き、はや暮れかゝるを幸ひ、塵打ちはらひて立ちあがりたるに、東の方よりあまたの人聲して、銘々提灯ともしつかねてこゝに來り、陽太郎の體をすかしながめて「ヤアこゝにぢや。」と、ばら〳〵と取卷き、「コレハ豐坂屋若旦那でございますか、よい處でお目にかゝりました。」といふ。陽太郎一圓合點ゆかず、よく〳〵見れば、この者共は日頃出入りして、貸金の口入れする人々なれば、大きに赤面し、「さても思ひよらぬ對面かな。われは勘當うけて、身をよする方なく、袖乞同然のこの風體、詞かはさば各の外聞あしかるべし、折もあらば。」と心せくまゝ、行かんとするを引きとゞめて、詞を揃へいふやう、「御存知の通り、我々共も口入れ仕り、親旦那より拜借の金子、今晦日までの日限ある故、返納のつもりにて殘らず持參いたしたるところ、親旦那の仰せには、其の元がたの證文は、のこらず紙衣にしたてて倅に著せ、勘當しましたと、委細のおはなし。それはと銘々困り入り、證文なくては返濟主へ、我々の申譯如何いたしませうと、お伺ひ申したところ、陽太郎の行方を尋ね、其の銀と證文引替へにさしやれと、親旦那のおことば。扨こそ御勘當なされても、お慈悲深い御はからひと感心のあまり、あなたのお行方、今朝から足を擂子木になして尋ねあるき、大かたに島原にござるであらうと、わざ〳〵打連れまゐるところ、こ

れにてお目にかゝりしは最究竟。證文おかへし下さりませ。金子引きかへさし上げませう」と、思ひがけなき仕合に、陽太郎はじめて心付き見れば、わが著たる紙衣、殘らず貸金の證文をもつて、綴り合はせしなれば大きに驚き、「まことに報じても報じ難きは親の恩なり。勘當しながらも憎しとは思さず、此の身の不自由なき樣にとの御心づかひ、有りがたや忝や」と、骨身にこたへ淚せきあへず、止めかねて見えけるにぞ、「お道理さまや」とたゞ貰ひ泣きしつゝも、提灯さしあげて、陽太郎の體中見まはし〳〵、「さればこそ私の口入れ致せし借主は、東寺羅生門の茨木屋、證文はあなたの右の腕にあつたも不思議、引きちぎつて請取りませう。銀高は六拾六貫目、金に直して千百兩、お受取り下さりませ」と、差出すにぞ、陽太郎は呆るゝばかり。「是れは夢かやうつゝかや、もしや狐の所爲ではないか」。此の小判も木の葉では有るまいかと、あや麩屋町の掛屋敷、「引きあての證文は脇腹の處にありましたが、ようも橫に寢なんだが仕合ぢや」と引きはがせば、つぎは脊中にべつたりと、黑持ちほどの印形をおしたるは、紋屋の辻子の家質證文。さてまた宮川町の子ども屋が一札は、肛門のあたりに見え、蛸藥師天蓋屋の手形二通は兩の足。乳の下あたりに見えたるは、姉が小路妹の辻子の家質手形、から茶釜の地代銀、引當は臍の上、くつ〳〵お茶をわかしてぢやと、寄つてたかつて、紙衣をもみくたやにして引きはがし、懷中にをさめ、「都合元利銀高二千貫目あたり、お持ちなさるゝ御勝手

のよい樣にと金に直して五萬兩何かし、お請取下さりませ。」と、それ〳〵に財布より取り出してならべおき、「さて若旦那さま、お金は出來ても紙衣はさつはりちや〳〵むちやく。お寒からうにむさくとも、お小袖お求めなさるまで私どもの著ふるし、憚りながら。」と二三人言ひ合はせ、上著下著を取交ぜて陽太郎にうち著せければ、陽太郎はたゞ立つたり居たり、手の舞ひ足の蹈取をも定めず、有頂天となり悅びしが、されども宿なしの身のうへ、この大金の置所に當惑し、いかにやせんと工夫するまでもなく、親の藥の甘きは、忽ち本の病を引きいだし、慈悲心かへつて、惡念の糞となるとの譬へにひとしく、是れよりすぐさま島原へおしかけ、此の金をもつて若紫を根引きにせんと、此の人々のうち、舞ひ上り者三四人をかたらひ、金とりもたせて、角德へなりこむべきにきはまりければ、「ともかくも左ほどまで、お心をかけられし太夫なれば、受けいだし給ひ、其の上にては以後を愼み、御身を大切に時節をまちて、親旦那へ御詫言なさるべし。」と、暇乞ひして、みな〳〵引取りければ、としやおそしと陽太郎、末社ども引きつれ、宙をはしりて島原へと急ぎ行きける。

第三章

さかづきに泥なおとしそむらつばめ　　ばせを

金銀は人の身を扶くるの最上にして、また亡ぼすの根本とかや。陽太郎はかの者共に、金子とりもたせて角徳かたに走りこみ、若紫をつかみにやり、右の次第を語りて亭主を呼びよせ「身受けのこと金づくならば、いかほどなりとも跡へはよらじ」と、半分聞かず角徳にはかにいきり出し「其の儀ならば桔梗屋へかけ合ひ、なんでもさきは賣りもの、われらこれまで棚へ上げ置きたる、とつておきの智慧を出し、曽留那の辯をもつて、首尾致さんこと方寸にあり、其のかはり御祝儀はしつかり、めでたいめでたい、追付け吉左右をしらせ申さん」と、袴腰横町をさして出で行くにぞ、跡には藝子がひく三弦のてんつる天へも登るべき勢ひにて、太鼓末社の藝盡し、お髭のちりを、とり／＼はやす眞最中、鬼の首取りたる如く、亭主勇みて立歸り「さて／＼骨折りこじつけました、何さまさきの大盡より、半金までも渡し置いたる上なれば、外へ身受けはさせぬ／＼と、いぢばり給ふを商賣づく、根引のお客二人まで出來たるは、親方が福徳の三年目。慾氣はなけれど、ちつとも金高の多い方へやりたいとの料簡。ハテ思召しが有るならば、附け上げてお買ひなされと、挨拶してあつちの金高、ぎり／＼の處、あらましは承知いたしてまかりある。此の上はあなたの御賢慮、お金次第」といふをまたず、陽太郎打うなづき「モウよい／＼、とくよりわれら、究竟のひと趣向案じ置きたり、若紫の目つき鼻つき、口もとから風俗、どこに一つ申分のないしろもの。直踏みして見るに位しれず。さるによつ

て、天窗のぎり〳〵より、足の爪先まで、われらふり手になりて、かた〳〵直をつけさせん。この趣向はいかに。」といふ。「コリヤおもしろ狸の腹鼓、打つて變りし奇々妙々、希代ふしぎ、希有けれつのおぼしめしたち、よかろ〳〵。」とそやしたてられ、牀の間の正面に毛氈しかせ、若紫を無理やりに押直し、陽太郎みづから向鉢卷にて、「サア〳〵〳〵ふりかけるぞ〳〵、先づ口あけが、遠山の霞にも譬へたる柳の眉ぢや、なんぼ〳〵〳〵。」「オツト眉は三日月の參拾兩かえ、イヤもうちつとぢや。」「そんなら兩方合はせて六拾兩。」「よいは負けてやれ。」「次は凛としてはりが有つて、しかも愛敬のこぼれかゝる二かは眼ぢや、なんぼ〳〵。」「是れも四かは目にして兩方で四十兩か。」「イヤ〳〵コノ横目づかひする處が、命ぢや、はりこんで買つた〳〵。」「オイそんなら横目千兩。」「オツトよしのの、鼻筋が、しやんとして、高からず低からず、よい加減の鼻ぢや、なんぼ〳〵。」「ソノ鼻ならば高慢りやうが物はあらう。」「次は耳朶の厚い福耳ぢや。」「オツト耳ひいて福殘る、福德の參拾兩。」「そこで可愛らしいちよぼ〳〵口ぢや。」「ハアくちんが三進、くち加四くちかゝさんのゆづりかして少し反齒だけ直打がない。」「ア、コレめつさうな事いふな。反齒は西瓜や、蜆くふに重寶ぢや、しつかりと買うてくれ。」「オ、そつは六拾四兩はどうぢや。」「エ、まけてやれ。後はむつちりと、ひねりこゝろの乳ぢや〳〵。」「ちゝくたむくいのむく八拾兩。」「次は臍ぢや、是れは何の役にもたたぬ物なれども、何

ぞをさゞりまはす時、爰が勝ぢや、そんならそんじよ、其處はかうぢやと、見當になることもあるから、まんざら不用のものでもない、なんぼぢや〳〵。」「そんなら勝さぐり御用心、けふは二十八兩か。」「オットまけてやれ、その代り此の下が一番の直打ものぢや、サア〳〵なんぼ〳〵〳〵」「鮹の八拾兩か。」「イヤそんな事ではならぬぞ。」「何かなしに千兩〳〵うつておけ、しやん〳〵しやんとやつて、總身の金高二千兩あまり。」是れにて親方へかけ合ひたりしに、「なんぼ太夫の身の代でも、此の大金は職過ぎるとあつて、又取りへいて返しもならず。そのかはりには、お尻に石臼をつけたる引舟、寐小便する禿、腰のぬけけやり手婆を、まけにそへて上げませう。」と、さらりと埒明き、陽太郎若紫が日頃のねがひ成就して、「めでたいわ〳〵、すぐに今より門出の祝ひ。」と、藝子太鼓のありたけ買ひ上げ、飲めやうたへの大さわぎ、ばらり〳〵と蒔きちらす、小判に羽根がはえて、家内中を飛び廻れば「ハテ金のふりさうな日和では無かりしに、これはありがた山吹いろ、つかみどりぢや。」と狼狽へ出し、田葉粉盆をひつくりかへして「灰吹から蛇が出た。」と亭主が騒げば、料理人は「生舟の泥龜、時をつくつた。」とわめくにぞ、仲居はしゆびんと銚子をまちがへ、お針は擂子木に絲をとほし、座頭の坊は懷中から、草履を出して鼻汁かむやら、手飼ひの猫が馬ほどな鼠を産んだと立ちさわげば、内のまへの痩犬、癲癇がおこつたと、あわふいてをどり出し、上を下へともてかへす、家内の賑はひ前代未聞

と謂ひつべし。

通俗巫山夢卷之一　終

通俗巫山夢卷之二

東都　十返舍一九編

第四章

さほ姫のうちかけすがた藤のはな　其角

色は思案の外といへども、魂膽手管は、思案の中より出て、これに溺るゝ者、借金の淵にはまり、つひに其の身を失ふとは、我人百も承知しながら、若き時は血氣に任せ、跡先しらずの無分別に、父祖が膏血の財を、無益の事に費す、智慧あり貌のふうときい、氣の利きたる仲間へは入りがたし。されや鳶飛んで空に舞ふ時は、油揚の用心し、息子うかれて青樓に遊ぶ時は、身代の用心すべしと、豊坂屋の親父これをさとり、陽太郎を勘當せしは如在なきやうなれども、紙衣の情却つてその身の仇となる。いよ〱放蕩奢侈にして、藤の森いなりの神制をもうち忘れ、若紫を請け出せしより、角德に居つゞけして、晝夜酒宴歡樂をのみ、事としてありけるが、ふと思ひ付きたることありとて、末社

どもを集め申しけるは、「われら京の女郎を手に入れしこそ幸ひ、是れより東都におもむきて、此の若紫に、吉原のはりをもたせ、長崎の衣裝を著せ、大阪の揚屋にて遊びたらんは面白からん。」と途方もなき案じに、「コリャ出來ました、日本開闢以來の遊び、さすがは旦那の活物、いやはやおそれ韓信股をくゞりて閉口ぢや。」と、鼻のさきに血の氣の多き舞ひあがりども、尻追立ておもしろがれば、陽太郎頭にのり、「さあらば是れよりすぐさま發足すべし。」と、俄にさわぐ旅用意、銘々笠よ脚絆よと交ぜかへし、兩掛、挾箱は太夫の手道具、櫛道具、人形枕、藥鑵に塗下駄、おはぐろ壺は小附にし、小猫としゆびんは駕籠にのせ、三絃太鼓其外太夫の厄介もの、こしぬけ婆は船廻し、道中隨分ぬらりくらりと、朝は寐次第、晝は馬駕籠乘り次第、そのくせ宿へは早く泊り、川留なくとも逗留し、忘れても急ぐべからず、ゆきなりさんぼうに、ぬたくるべしと、萬事拔目のある差圖に、かしこまつたと、ねはらばひ、あげ股うつて、うかれたち、揃ひの浴衣そろひの馬鹿者、あらましに用意とゝのひければ、頓て出立の日になり、都をば霞と倶に立ち出で、道草くふ、むまやろの泊り／＼に、夜明しの酒くみ交し、晝も立場の馬かひ酒に、しやれ散らして、道はかどらず、若紫も折節は、駕籠をつらせて、そと八文字の道中、蟲の這ふごとくなれば、日數つみてゑいやらやつと、先づ大井安部の兩川を無難に打越したが喜びとて、よし原の驛にとまり、名にしおふ興津鯛の、はねまはるをおさへて料理

させ、「これから酒ぢや。」と、口にはいたつて、孝行もの打ちよりて、高なしの大さわぎ。とてもの事に此の驛の飯もりども、ひと繩に引きずりよせ、丸裸にして追ひはなし、おつかけごくらして遊ぶまいか。」と、一人がいへば、「コリヤ妙ぢや大菩薩、つかみにやれ。」と、宿の女房を呼びよせ、註文すれば、陽太郎のいふやう、「ナントお内儀、當宿の名はよし原とやら、東都の曲輪と同じ名なれば、女郎の風情心さままで、萬端上方とは事かはり、江戸ッ子の氣性あるべし。そのはりとやら意氣地とやらいふことに、鍛錬せし女郎あらば、呼びたいものぢや。」といふ詞のうちより、女房けんつうあたまをふり立て、「ありますとも／＼、此の間こゝもとへ、くらがへとやらで來なされた、ほてのさまといふ女郎衆、はりが強くて、お客をふるが得手ものぢやとの評判でござりますが、呼びませうか。」といふに、陽太郎悦び、「われらそのはりの強いといふ處、此の度の入用なり、あとのよねたちは、こなさまの見繕ひ、十把ひとからげに連れてござれ、はやう／＼。」とせきたつにぞ、慾に目のなき女房、「錢まうけの晝ぢや。」と、いさみたち、それ／＼に呼びよせ、引連れ出づるは、かのほてのときこえし、ほつとりふうの大女。どさり／＼と地ひゞきさせて座になほると、次なるは誰人の御作佛にや、痩せがれして色青ざめたる佛顏、其の外おたふくもあれば、へんば頬あり、佛頂顏も見ゆれば、又莞爾々々と笑ひふくみて、人相のよきかと思へば、顏の道具のしまりなきにて、おの／＼やんごとのある顏ばか

り、揃ひにそろひし目白のおし合ひ、くち〳〵囀る田舎詞も一興にて、酒も闌におよび、陽太郎かのほてのに向ひて云ふやう、「そなた事はきはめて、はり強く、客をふらるゝといふこと聞きおよびたるが、われちと仔細ありて、そのふらるゝを願ふなれば、今宵の相方と定め、何とぞふりつけて貰ひたし。」といふに、ほての聞いて、「何よりやすき御事なり、お望みならば、唯今ふりて見せ申すべし。そこ立ちたまへ。」といひさま、陽太郎の後へまはり、帯の結びめ取つて、宙に引上げ、さながら犬の猫をくはへて、ふりまはすがごとくするにぞ、陽太郎肝をつぶし、目くるめきてたまらず。「コリヤコリヤ何とする、まゝ目がまふ、ゆるせ。」と聲たつるに、末社ども仰天し、「コレは旦那を何とする、悪洒落な女郎め。」と、立ちかゝりて引きはなせば、ほての打笑ひて、「恥かしながらわたしは、信野の山賤の娘なれば、ちから業もしなれて、腕さきにおぼえがある故、お望みに任せ、ふつてお目にかけました。このうへまだ、はりつよい所はわたしが此の握りこぶし、うけさんしたら、その跡のづき〳〵が、めつたには治りませぬ。ちとはりとばして見せませうか。」と、したり顔にいふに、みな〳〵興をさまし、扨こそもじのふりつけるの、はりの有るといひしは、力業のことか、とはうとてつもない女郎衆もあるもの、旦那の災難當年の厄おとし、このやうな女郎衆は、西の海へさらり〳〵。」と、末社どもがおだてに、陽太郎若紫も、大わらひして、「杯もをさまり、かかる間違ひも旅の興なり。」

と、いひつゝ腰骨をさするもをかしく、やがてかの女郎共を鬮取りにして、末社どもへ割り付け、しばらくこゝにかりの夢をぞむすびける。かくて夜明けければ、此の宿をたちて、又日数をかさね、ややうやく江都に到りければ、「先づ石町あたりに、貸座敷をかりて逗留し、此のうち若紫に、吉原のはりをもたせんには、當分かの郭へあづけ置き、見習はせんには如かじと、手寄りを求め、三浦屋といへる女郎屋へ、心安く出入する濱野屋東作なるものを招きよせて言ひけるは、「われらめしつれたる若紫といふ太夫、京都島原に勤めせしものなるが、此の上吉原のはりをもたせ、長崎の衣裝をきせて、大阪の揚屋にて、遊びたいとの大望を起し、それゆゑ先づ御當地へめし具したり。何とぞそのはりをもたせんには、しばらく吉原へ預け、見習はせんと思ふなれば、幸ひそのもと三浦屋とやらんへ懇意のよし、その方にて若紫を預り、つとめさせて客を請けさせ、かの郭の風儀、會得するやう頼みたし。預り賃は此方より、いかほどなりとも差出し、其の上、禿、番頭、女郎、遣手まで、みな此方より賄ひ、仕著せ小づかひ一切の事、少しも苦勞にかけず。其の代りには彼が身は、賣德にして、三浦屋の方へとらるべし。此の趣にて、其許より言ひ込み、世話して呉れらるゝやう、取り成したのむ。」と牡丹餅に頬たゝかるゝ如き言分、濱野屋呑み込み、「それはいと安き事、見ました處が憚りながら、太夫さまの御器量、ぴいどろを逆さま、商ひの出來るは必定、處を金とつて預り、賣德にせよとは、ミ

浦屋の福の神、あんまり甘すぎるが、ひよつと小町さまでは有るまいか、但しは辨慶の妹御か、なんにいたせ掛け合うて見ませう。」と、おのれもしこたま、うは汁を吸はんとの目算、胸にばち／＼、いきりきつて立ちかへりしが、善は急ぎ、甘いものは宵に食へと、すぐに翌日三浦屋を同道して來り、「早速今日親方を、お目見えにつれてまゐりました。」と、あちらこちらの仕あはせ、「陽太郎喜び、若紫を引合はせ、「一年百兩詰めにして、三年きつて三百兩、預り貸此方より渡しませう。」と、さらりと手をうち、相談調ひ、すぐに太夫を三浦屋かたへ遣はしけるが、さすがは都育ちとて、萬事客の取扱ひよく、ふるといふ事なかりし故、三浦屋おやかた笑坪に入り、誠に近年のほり出しもの、龍宮を親類にもちて、肴屋見世出したやうなもの、唯取りぢやと、ほた／＼して悦びたりしが、次第に此の郭なれて、かねびらきる大盡を、きはふうといやしめ、己惚似た山をふりつけ、女郎のはりといふことを見覺えてより、むしやうやたらにふるといふ噂、陽太郎の耳に入り、さればこそ、もうしてやつたものぢやと、ある日末社ども殘らず、腰付けにしてぶら／＼と出かけ、觀音のおく山をひやかし、夕暮頃より、田町通りを日本堤にいたり見るに、げにも此の郭の繁昌ば、往來の人に見え、押し合ひへし合ひ、店向きの出番、腰をぬかして駕籠をとばせ、地まはりの俠士、足を擂子木にして下駄を引きずり、堀の船頭尻に帆かけてはしり、編笠茶屋の男、猿が守して客をおくり、座頭の坊、提灯に行き

あたりて、「此の盲め。」と悪口するもをかしく、千住の百姓犬の糞を踏みつけて、勿體なしといたゞくなどは、それ〳〵の商賣柄、大盡を羨ふ仲の丁の茶屋あれば、素見物をよろこぶ田町の酒屋あり。見えにかざす扇、借金をおそるゝ頬被り、むかひにゆき木乃伊つれて戻る鯱、おのがさま〴〵、あふさくるさの絶間なき賑ひは、夜を晝なる別世界、仙境とも謂ひつべし。さて仲の丁へ入りて見れば、いちめんの青簾、軒釣の提灯に光をまし、家毎の暖簾風に和ぎ、ひきたつる藝子の三味線、調子高にして、人の心を有頂天に昇せ、臺所の悪洒落、西施褒姒に笑みをふくませ、新造禿の淫聲、餘國にかはりてえもいはれず。陽太郎は始めて、かかる繁花に魂を奪はれ、うつかりひよんと濱野屋のかどを過ぎるを、亭主はやくも見かけて、「コレハ旦那おめづらしい御來臨、サア〳〵是れへ、お多葉粉盆汲んでこい、お茶綺麗に掃除して、お杯はやうといつてやれ。嬶御挨拶、孃はどこにおぢや、又手水かちも長い雪隠、寐ては居ぬか起して來い、早く〳〵」と、俄にてん〳〵舞ひの馳走ぶり。陽太郎も木石ならねば、それ〴〵に祝儀の心付け、そこへも爰へも時ならぬ、花が降るはと騒ぎたち、藝子あまたに、妻太夫、田子七、源治、次路庵などいふ、不出かしものの名あるものども、追々はせつき、ヤッチャ旦那とちやらつかし、酒は泉をなし、肴は山の如くもちかけ〳〵、あいのおさへと、何れも猩々から干鮮もつて、わたりに來さうな底なしども、引受けてはしやれ、しやれては呑み、はてしつ

かねば先づきりあげ、是れからは、三浦屋へなりこみ、太夫さまの座敷で、あつさり呑み直さうと、陽太郎をさきにたて、打ちつれて三浦屋へとおしこめば、遣手若いものもかねてより、陽太郎のこと承知なれば、むしやうに追從輕薄、たら／＼もてなすにぞ。夫れに引きかへ、若紫は此のほど打絶えし、陽太郎の爰に來るを嬉しとも思はぬ顏色にて、何とやら挨拶もつぎ／＼しく、氣おもたげに顏をそむけて坐し居れば、末社ども見てとり、例のひぞりと察しやり、洒落にまぎらし「コレハまた太夫樣としたことが、たまさかの御對面に、なぜうき／＼となされませぬ。思はせぶりは呑みこまぬ。サアサァ酒ぢや。」と、さわぎに、くち／＼陽太郎の機嫌とり／＼、二あがり潮來、どつちり天上ぬけ、たのしみの最中、肝心の若紫たちぎえがして、此の席に見えざれば、何とやらしらけて、酒も理に入り、夜も更けたるに、はや世間も沉まり、硯蓋には椎茸と九年母の皮のみ殘り、燭臺の下には、海老の殼と杉箸のもえさしうるさげに、多葉粉盆は紙屑籠の出見世となりぬ。さればこゝに興盡きて、藝子は三味線をしまひ、牽頭も口を閉ぢて、ひき汐時になりければ、茶屋の女房、若紫を呼び來りて、さりとては、太夫さまに似合はぬ、折角旦那のお出でに、何とて御座敷にはござりなせぬ。最早お休みなさりませ。」と、目顏でしらせど若紫は、いけしやァ／＼として、「ナンノまあ、如在に思ふぢやおざんせぬが、何としてやら、今宵に限り、氣色がわるくなりんせん。主樣も折惡いとき來なんして、

挨拶するも面倒におざんす。」と、愛想づかし言ふに、みな／＼呆れはて「コレハ又肝が潰れて芋が煮える、旦那があまり御無沙汰ゆゑ、お腹も立たうが、よいかげんに仲直りしておあげなされ。」と、手をとりておしふれど、びくとも動かず、「イエ／＼外に大事の客人も有り、ちよつといつてまゐりませう。」と、とつてもつかぬ様子にて、廊下のかたへ出でゆくにぞ、茶屋の女房はじめ末社ども、あいた口ふさぎもやらず、陽太郎の手前氣の毒さうに、かれこれと取繕へば、陽太郎しばらくありて横手をうち「ハヽア、よめたり／＼、太夫がつれなきは、却つてわれらへの馳走ぶり、はりの強うなつた處を見せんとの心づかひ、コリヤ出來たぢやないか、是れでこそ今宵はひとり、心よう寐らるゝ。」と、思ひの外の喜びに、さてはさやうかと、是れをしほに、皆々打ちつれて歸りければ、末社共もそれ／＼に、皐月の空の時鳥、なき出しさうな振袖新造に引きずられ、小便くさき座敷へと、寢にゆくにぞ、陽太郎唯ひとり、舟漕ぐ禿を相手にし、三ツ蒲團の上に、箔のつかざる涅槃像のごとく、それと往生しながらも、さすがに心さびしく寐もやらず、退屈のあまり、廊下に出で、そこらうそ／＼と見廻れば、しめやかに話し聲きこゆる、小座敷の障子開きかゝりあるに、何心なくうちをすかし見れば、若紫こゝにありて、年若く色なま白きをとこさし向ひ、さもむつましげに、打ちかたり居る體を見るより、陽太郎たちまちやつきとなり、さてこそ性根の腐りし女め、外に密夫をこしらへ、われらをふり

付けしは、此の郭に馴れたる、氣性を見することよと、思ひしには相違して、眞實に心變りせしと覺ゆるなり。蹈み込んで此の恨みいうて、恥つらかかせんと、飛びたつばつかりにおもひたりしが、イヤイヤはしたなく、さやうなこともなるまじと、心にをさめ、もとの座敷に立ちかへりたるに、とかく胸の火消えず。今となりて、藤の森の稻荷の御告げをおもひ廻せば、若紫も狐なりとの御意見、川るずしてかかる古狸に誑かされ、おほくの金銀を、費せしことこそ口惜しけれと、末社どもを呼びあつめ、若紫が爲體を委細に語り「何事も是れまで欺かれしは、われら鼻毛の寸尺延びたる故なれば、人を恨むべからず。」と、はや歸り支度するに、末社ども始めて此の始末を聞きて、何とも詞なく「さてはさやうでござりますか、よもやとは思へども、油斷は大敵　さるにても心憎し、その間夫めを引きずり出し、蹈みのめして腹いるべし。」と、氣をひかるゝと陽太郎頻りにおし宥め、さあらぬ體に打連れ二階をおりたつにぞ。此の時若いもののしらせにより、若紫やう〳〵と出で來りて「もうお歸りなんすか。」とばかり。又來なんせと約束を、背中へたゝき込むべき所、さはなくて唯一とほりの挨拶なれば、陽太郎返事だにせず、癇癪の蟲をおさへて立ち歸りけるが、いかにしても堪へ難く、又未練もおこりて、心迷ひ、ともかくも今ひとたびゆきて、ためし見ばやと、其の口を隔て、三浦屋にいたりけるに、例のごとくかの間夫來り居合はせ、陽太郎はありてもなきがごとく扱はれ、いよ〳〵はら

に据ゑかね、摑みつかんと思ふほどに、せきたつ胸を、みづから撫でさすりて、未だ夜深きに立ち出で、田町に來るに、こゝに夜あかし酒屋のあるを、さいはひと打入りて、やけ酒のぐい／＼のみし、忘れんとするに忘られず、心のうかねばつき／＼も、青菜に鹽と、しよげかへりて、おもしろからねば、こゝを立ち出づるとて、掛行燈のあかりに、すり違ひゆく人を見れば、かの若紫の間夫と見えし若者なり。陽太郎末社どもに囁きいふやう、「あれなる先にたちて行くものこそ、太夫が間夫に相違なし、唯今ちらと見受けたる面體、なか／＼見覺えあり。」と、半分聞かず、「それこそは、旦那の戀の仇敵、さいはひ往來も絶えたる夜中、あたまのかけ拾はせて、われ／＼が蟲養ひ。」と、ひとりがさわげば、「ソレよかろ。」と、先にゆきこしたる男にはしりつきて、ばら／＼と取卷き、「おのれ若紫太夫を、横ぐはへにせしえせ者、思ひしられや。」と突き倒し、矢庭に大勢のし懸りて、さん／＼に打擲し、おこしもたてず脚こしも、折れよとばかり蹈みつけ／＼、打連れて逸散に逃げのび、石町の座敷に戻りけるが、陽太郎倩思ふやう、我いかなれば神慮に背き、父の高恩を茶にせしむくい、かかる性根のくさりたる女に迷ひて、馬鹿をつくし、大金を殺して遣ひしは、我ながら日本一の阿房のかゞみ、是れみな神罰親のばち、かくこそあるべき筈なりと、後悔提灯もちにあらざれば、さきにたたざることを歎き、誠に一念發起して、今は若紫に怨みなし、彼が薄情は、かへつて此の身のふたゝび善心

にたちかへる、導きとなりしと、觀念してぞ居たりける。

第五章

若いとき捨てたるかねのさむさかな　杉風

人として下愚といへども、道心なきこと能はず。されや昨日剃つたも今道心、一昨日剃つたも今道心、陽太郎は煩悩の毛もなき様に、一心を削りまはして、今道心を得たるも、おくればせとはいひながら、過つて改むるに憚りなしと、まじめになりて、若紫をば其の儘に打捨て置き、其の身は急ぎ歸國せばやと、用意最中、表に人のおとなふ聲して、入り來るものあり。身にはべんべらもの、ひつぱりながら、亂髪にして色青ざめたる顔に、べた／＼膏薬をはりつめ、片足叶はざるにや、杖にすがりて蹩ひき／＼、「ちとお頼み申します。陽太郎さまに御目にかゝりたき事あつて、まゐりました。」と、いふ聲洩れきこえて、陽太郎奥より立出で、何者やらんと見れば、若紫の密夫なりける「扨こそ途中の狼藉をいひたて、ねだりに來りしものならん」と、思ひながら、そしらぬ體にて申しけるは、「いまだお目にもかゝらぬその元は、何人にや、われら陽太郎なり、いかなる御用ぞ。」といふに、かの男そろそろとにじりあがりて、「わたくし事は一昨日田町にて、そなたさまに蹈みのめされ、打擲にあひ

たるもの、御覽のごとく數箇所に疵つきました故、もしやねだりがはしく、どなりに來たかと、おほし召しませうが、微塵もさうした事ではござりませぬ。委細はこれを見て下さりませ。」と、うはづゝみに、若紫とかきたる封じ文、取りいだしさし置けば、陽太郎最早かかる品は、手にふるゝも穢らはしと思ひながら、さすがにも未練やおこりけん、「古狸めがまた何事を書いたるやらん。殊に此のものの持參せしこそいぶかしけれ。」と、とりあげてひらき見る、その文體に、

一筆しめしまゐらせ候。さてはせんもじは、ようぞや御かよひ下され、やま〳〵御嬉しく存じ上げまゐらせ候。わが身事そのふしは、なにかと御氣にそまぬ御ことのみにて、さぞかし御はらたちとすゐしまゐらせ候。わが身事このさとへまゐり、はりとやらいきぢとやら、けいこさいちうに御ざ候まゝ、それゆゑの事と御すゐもじ下さるよし、だん〳〵とほうばい衆にききまし候へば、はりといふ事お客をふり候ばかりにてはなく、すべて強きものにはあたり、よわきものをば助くるといふならはせにて、おもふをとこはたとへいかやうのいやしき方にても、これへ心中をたて、外の客人此の身のためになるべき人なりとも、慾をはなれふり候を、はりとも、いきぢとも、たて引きとも申し候よし、さあればその間夫といふなくては、はりもいきぢも詮なき事とぞんじ候へども、御もとさまをのけて外に間夫ぐるひいたし候心はなく候ゆゑ、この御かたはかねてより御はなし申し上げまゐらせ候。わがしんじつの兄さま

にて候。かやうの事もあらんかとぞんじ、御もとさまへも御しらせ申さず、いひ合はせてあとより
こゝのもとへ御つきなされ候を、折ふしわが身かたへまねき申し、人目には間夫のやうに思はせ、
わが身心中だてするていにて、外の御客をふりつけ候事に御ざ候。かならず〳〵あしく御くませな
きやうねがひ上げ參らせ候。それゆゑあにさまわが身かたへ御よび申し候も、御客のつもりに候ゆゑ、
そのたびごとの物入三十兩ほどかゝり申し候。それは今日しあにさまへ御わたし下されたく、それ
にて聞きまし候へば、とちうにて御もとさまみな〳〵さま、兄さまをまことの間夫とおぼしめし
候や、打ちたゝきなされ候よし、此のかうやく代もよろしく御かんぢやうねがひ上げ參らせ候。まづは
このよし申しあげたく、そう〳〵めでたくかしこ。

わか紫ゟ

陽太郎樣まゐる

かくの如く認め有りける故、陽太郎大きに驚き、「さてはかねてより、噂に聞きし太夫の兄貴にてお
はすかや。いかさま兄弟とて、面體のよく似たるこそ證據なれ。左樣とは知らず、面目もなき次第ぢ
や。」と頭をかけば、彼の男、「何がさて、少しも苦しうはござりませぬ。皆太夫と言ひ合はせの狂言
最ちつと淺葱の頭巾、ぬがずに居ようかと存じましたが、明日は晦日、揚代の算用致さねばならぬ譯

ゆゑ、お金貰ひに參りました。それに此の膏藥代の外に、皆さまにどつかれまして、雪駄の鼻緒切りました。此のたて賃が八文、お蔭で腹がへつて、正直蕎麥二膳たべましたが三十二文、藏前で團子が三串十二文、此の杖が四文、此の分もお序に戴きて歸りませう。」と、思ひの外なる若紫の文體といひ兒の詞、さてはさうかと、陽太郎また／＼心迷ひ出し、折角濡せし眉毛の唾も、乾きはてて、愚かにも一心からくり的のごとく、かはりやすきは、鄙情のならひと言ひながら、淺ましくもまたその氣に移り、兒を馳走し、金子を與へ、愈いくぢもなかりける。

第六章

大闇の米見て戻れぬくめ鳥　　　御射山翁　羅　人

飛鳥川の淵瀨は、田樂返しの如く、人の心は濕皮癬にひとしく、移りやすきぞ淺はかなれ。陽太郎は一心九十六文に足らざれば、愚かなる上にまた愚かにかへりて、「若紫の心底、石に判とはおもへども、よく／＼思ひめぐらすに、油斷のならぬ人心、もしや實に間夫狂ひなど出來る時は、悔ゆるとも詮なし。」とて、三箇年の約束なるを、急に三浦屋より取戻すつもりにはまり、頓てその事をいひやりけるが、「されど未だ修行滿たざれば、このうへは內稽古さすべし。」と、おもふにさいはひ、かのさと

のいきはりに名を得たる春日野といふ傾城、今年二十七歳は表むき、正味の處は頭の藥罐に、あらはれたる年明きのまごつきもの、行所なしときくより、陽太郎かたへ引取り、若紫を呼び返して、此の春日野を師匠分とし、諸事今も勤めの身の、心もちを専らとし、平生も裲襠をはなさず、新造、禿をも付けおきけるが、陽太郎つく／＼と思惟し「こゝに一計あり、われら春日野に足をつけ、若紫に悋氣させなば、兩方意氣張りづくとなり、互に負けじ劣らじと張り合ふべし。さすればおのづから上達はやかるべし。」と、折節の戯れに託け、春日野をはりかけ、たらしかくれば、こなたもしれもの、待ち受けた据膳、同膳もてなしに、抓み喰ひの化の皮あらはれ、若紫の顔色たちまちに變り、それよりは春日野とすれ／＼にて、角のはえぬばかりに胸の火をたき合ひ、ものをもいはず、當てこすりあふを見るに、陽太郎の悦び大方ならず。春日野は年來巧者のしれものなるに、おとらぬ意地の突つはりやう。若紫の上達、最はやこれにて十分なり、とてものことに甲乙を試さばやと、かの加藤重氏が、兩女に雙六をうたせて、オ、シキ／＼とけしかけたるに、忽ち女の髪の毛蛇となりて、喰ひ合ひしといふこと聞き及びたり。このふたりも、よもそれにはおとるまじ。黒髪みだれて蛇はおろか、蟒ともなりてくひあふべき、互の意氣地見ものならんと、俄に雙六盤をとりよせ、兩女のまへにおしなほさせ申しけるは「此の勝敗をもつて、われらの心を一人にまとむべし。勝ちたるかたには偕老のかた

らひをなし、打負けたらんものは、永の暇遣はすべし」とて、その勝負をすゝめけるにぞ、兩人勇みたちて「互にわれうち勝たん」と廣言し、頓て盤引きよせ、うちかゝりたるに、げにや戀目のあらそひは、顏の紅葉の朱二朱三にあらはれ、出一の事に目を皿になし、おとらずさらず時うつれど、はてしつかねば陽太郎、みるに勞れて大欠伸し、こくり／＼と居眠りければ、ふたりの女も袖をあげて、いくたびか欠伸のふたする程に草臥れ、言ひ合はさねど互に肱を盤にもたせ、舟漕ぎいだす鼻息に、陽太郎ふと目をさまし見れば、不思議や兩人の黑髮、おのれとみだれてぬたくるにぞ、さてこそ蛇の下ごしらへ、さもさうず、さもあらんと見るうちに、蛇にはならで鰻となり、くひ合ひもせず、ぬらりくらりとぬらつきしは、此の兩人が人の心の底をやあらはしぬらん。さるにても河竹の勤めせし身い、部情はかくぞありぬべし。是れに迷ふ心愚かなれば、燒鷄卵の四角なるを見、大晦日の月夜にくらべて、傾城にも實情ありと、理窟をつくるは、終に身を害ふの惡種をおろすに均しからんか。

通俗巫山夢卷之二 終

通俗巫山夢卷之三

東都　十返舍一九編

第七章

玉箒にあらぬ一夜のおとりかな　其角

傾國に趣かざるは、女郎を買はざるの堪忍なり。女郎を買はざるは、色慾に溺れざるの堪忍なり。唐土の韓信が堪忍せし、股ぐらには異なれども、何れこの穴這入りするもの、家を傾け身を害ふ事前車の誡め百も承知、二百も合點と言ひながら、兎角堪忍のならざるは此の道にして、迷ひの雲に本然の大道をうしなひ、おさきまくらとなりては、明るき道に出づる事、木茸の看板かけし、壺の耳よりも遠しとかや。されば假初の勤めに眼潰れし、ふらすこの酒、あるかなきかを見るよりもいと安き、傾城の心忱なきを知らざれば、二ツ枕に屏風の中、甘味くして食せし後、額に手をあてて低首きものいはず、しばらくありて憎らしい男めと、背中どやしてあくびなど、みす〳〵の譫言に心づかず、鼻毛

三千丈にいたりし、豐玻屋陽太郎折々は平脈うつて、本腹の心ざしはありながら、又もやこの病神にとりつかれ、言ひ回されて、若紫春日野の本心、鰻となりしを知覺らず、二人ともに打連れて江都を發足し、長崎より強飯と、たとへにいふほどの長たらしき、旅路をさして出でたちけるが、原より若紫とは、漆食に粉屑をもつて固めたる、水も洩らさぬ中にて、春日野は唯當座の鰹節にせしことなれば、未練を殘さず、若紫の兄なる、甚次郎兵衛に讓りて娶せ、同道して五十三次の驛々、しやれのめし、はやくも伏見にいたりたるが、古郷なる都のかたも、勘當せられし身の氣散じさ、立寄るべき處もなければ、すぐに夜船と三十石の胴の間をかりきり、既に棹をとりなほして船いでんとする時、船頭の申しけるは、「御無心ながら其の中へ、此の人ひとり頼み上げます。」と、若き男の風呂敷包、わいがけたるを、是非にとて、斷りいふに、おの／＼不承顔して、鼻のさきに煮えきらぬ、挨拶するをもかまはず、はや船頭におしこまれて件の男、火牀の前に身をすくめ、人の荷物にもさはらぬやうにして、「是れはいづれもさま、御免下さりませ。」と、慇懃に會釋し、其の後はそこにある火をむしんともいはず、自身摺火打にかち／＼と煙草くゆらせ、鼻息もせずして、おし默り居る。表の方には、さまざまの乘合、愛宕の樒に粽そへて、帆柱にくゝりながら、飛脚の足を踏みて、「商賣に障ること」、やりつけられて謬りあればは、虎屋の饅頭尻にしきて、これはと立つ拍子に、とりはづしたる奈良のさらし

屋、高山の茶番師、近江の蚊帳賣、京の小道具屋、山伏、藪醫師、鹿島の事觸、殊勝らしき出家の傍には、茶屋の嬶めきし女のはなやかなるが、丹波の百姓相手に芝居ばなし、とつてもつかぬ挨拶とりどり、當年はどこも滿作でござらう。わし共の國には、大分植ゑ出しをしましたといへば、紀の國には蜜柑の木に、金玉ほどの橙が出來て、鳶がけん毛をむしつたとの評判。いかにも／＼中村歌右衛門は、當時での名人でござらう。とかく念佛申せば、極樂往生に疑ひないと、仰せられた。とりわけて今年ほど、蛸のとれたことはござらぬ。それと申すも此の頃の咳氣は、敗毒散では參りませぬ。ゆうべの宿の娘めが、むつちりとした腰つき。どうでも西瓜と神鳴は、喰ひ合はせにちがひはないと、おもひ／＼の出放題。胴の間にむつり／＼として居た男、人のはなしの尾にとりつき、「アノ鶏くうて酒のむと、雨降りに合羽著てさるくやうぢや。」と、ねからわからぬ西國詞を、甚次郎兵衛聞きとがめて、「こなさまお國は、いづかたにや。」と問ふ。此の男こたへて、「うんどもは長崎邊でござる。」といふ。陽太郎聞きて、「幸ひの事なり、我等その長崎へくだるもの。御歸國ならば、御同伴申すべし。不案内なれば、諸事おたのみ申す。」と、打解けて彼の地の事ども尋ね問ふに、此の男もそろ／＼口ほどけて、「うんどもは丸山の陳分屋勘藏と申すもの、國どもの事は、鵜で御ざるほどに、一所によかこさりませ。」といふ。陽太郎は音にきこえし、丸山のものと聞くより、猶よろこびて、「此の度われら京の

女郎を請けいだし、江戸の吉原のはりをもたせ、長崎の衣裳をきせて、大坂の揚屋にて遊びたいとの大望をおもひたち、それゆゑはる／＼長崎まで、衣裳もとめにまゐる者。」と、段々の物語するうち、いつの間にかは、八幡山崎も打過ぎ、佐田守口を經て、大坂の八軒家につきたりければ、爰をあがりて、其の日すぐに雜魚場より、金毘羅船を借り切り、長崎者も同船にて、川口を出で、順風に帆かけて、兵庫、西宮、須磨、明石なんど、忽ちに打過ぎて、日の西山に落ちたる頃、播州鶉野といふ處にぞ著きたりける。「いでや爰も室の津に、ひとしき遊女ありと聞きおよびたれば、船中の徒然、うちあがり見ばや。」といふに、長崎の男押しとゞめて、「かかる田舍の麥飯、都人の口には合はず。そのうへ親椀におしつけての無理じひ、鼻につかへて迷惑したまふべし。」と、袂をひかふるをも聞き入れず、「イヤ／＼その杓子あたりよき事こそ、望む處の命なれ。」と、末社どもそゝりたちて、はや通ひぶねに乘り移れば、若紫と春日野の、年がましきものをつけて船に殘し、陽太郎は是非とも、かの長崎者をも同道せんといふに、「イヤわれら事はゆるし給へ。」と、とかくに尻込みして動かざれば、打捨て置きて、みな／＼此の津にあがり見るに、家居まばらにして、遊所のかゝりも鄙めきたれど、かじりちらす猫の皮は、都にかはらず、晴花唄も相應に、うなりてきこゆ。船頭の敎へこしたる、月の輪屋熊八といふを尋ねて入り見れば、こゝは女郎屋にはあらず、引手茶屋といふ者なり。亭主飛んで出で、

「先づ是れへ。」と、おくの小座敷へ請じ入れ、茶煙草粉盆持ちいづるもひとりにて、女房は夜なべ仕事に、機織りして客に構はず、十一二歳の小娘、圍爐裏のまへに、指のまたをかきながら、まじ〳〵としたる顔つき、何か事たらぬやうにて附穗なければ、陽太郎亭主をよびて、「われ〳〵は當所不案内のものなり。いづれなりとも、時花女郎呼びよせたまはるべし。」といふに、亭主心得、おなじくは直にお目利然るべし、いざさせ給へ。」とさきにたちて、女郎屋の見せつき、あれくれと見あるき、その中にも愛元にての全盛、玉彌といへるを極めて、陽太郎の相方とし、外に家内有りたけの女郎を、ひと網に引き上げさせ、杯出て、丸盆に目鼻の附きたる下女、銚子、鉢、肴もち出て、「コレハようお出でなされました。愛元は上方とちがひ、物事不自由にて、やつと御馳走も出來ませぬ。」と、手をつき慇懃に挨拶して、篤實の體もをかしく、末社どもは、はや口やかましく、しやべりちらして呑みかくるに、玉彌はさすが此のさとの名取ほどありて、相應に興をそへ、事馴れたるやうすに、陽太郎いふやう、「さて〳〵船中の積鬱をはらさんとて、此の處に來りしに、今一段座敷ねいりておもしろからず、何ぞかはりたる趣向はなきや。」といふに、玉彌とりあへず、「すべてこのさとの遊びは夏の事なり。取りわけて盆の大踊、他國はしらず、愛元にては、おもしろき事此の上なし。其の時節に來り給はば、歸る事を忘れ給ふならん。」と、聞くより陽太郎、これこそはと游ぎ出し、「ナント金づくではその踊、

今見られまじきや。」といふに、丸盆の下女すゝみ出で、「女郎さまがたさへ、大勢よびなされば、唯今でもをどらせませう。」と聞きあへず、「ソレ安きこと、入用は望み次第、よきにはからへ。」との詞もまたず、甚次郎兵衞承り、「いざや鶉野の女郎ども、總揚げと觸れてやれば、「コリヤめづらしい。」と、俄に家內さゝめきわたり、「今宵踊の趣向とは、盆と正月いちどきに、希代なことぢや。」と、次の間の戸障子、唐紙引きはづせば、あるじの女房、肝を潰して飛んで出で、「コレは又さわがしい何事ぢや。」と、きよろり／＼して座になほれば、甚次郎兵衞懷中より、袱紗につゝみしもの取りいだし、「ナントお內儀、旦那のお好みにて、女郎ども總揚げにし、爰元の踊所望とは、きさまたちが福德の三年目、今宵の丁子がしら、預つておかしやれ。」と、百兩包を投げいだせば、あまりのことに女房吃驚して、「是れは。」とばかり、後さまに倒れし儘正氣つかず、「ヤレおかさま目がまうた、お寺へ人をやらしやんせ。」と、女郎どもが狼狽へ出せば、出入りの按摩かけ來り、「さてこそ持病の疝氣がな、おこつたであろ。ぼんのくぼの毛三本ばかり、ひきぬかしやれ。」と、わめくにぞ、亭主あわてて、「コリヤたまらぬ、出あへ／＼。」と、銅盥をたゝきたつれば、向う三軒兩鄰てんでに擂子木、眞木ざつぽ、打ちふり打ちふり、「長樂寺さまに說法が、はじまるさうな。」とかけいだす。「かかる騷動何事やらん。」と處の莊屋かけ來り、押鎭むれば、やう／＼女房も正氣づき、家內もきよろりと夢見た心地、大汗ふき／＼

時ならぬ、踊帷子おもひ／＼の出でたちにて、女郎共立ちならび、兵庫くどきといへる、唄の手をどりはなやかに、ふり出す腰付足どりのおもしろさ。陽太郎はじめ、皆々魂宙にぶらりと、現ぬかして見る處に、一際すぐれて五人一樣に、住吉をどりの出でたち、菅笠につけたる紅の絹にかくれて、顔の見えぬは心にくし「アレ笠をとりてをどらせよ。」と、陽太郎の差圖に、「承る。」と、末社ども立ちかゝり、「旦那の仰せぢや、おの／＼美しき御面相の皮めくるぞ。」と、かたはしより笠をとれば、いづれも艶顔、五人めの踊り子「わたしは御赦されて下さりませ。」と、逃げいだすを無理に引捕へ、笠引きとれば女郎にはあらで、かの船に殘りし長崎者の勘藏なり。これはと人々驚けば、忽ち月の輪屋の熊八走りよつて、勘藏が胸元とつて附きすゑ、聲あらゝかにいふやう「おのれよくも爰へ來られしものかな、日本一の横道もの、親かたへの面晴れし、仕樣あり、コレそこな花山どのも、爰一寸も動かす事なりませぬ。」と、血眼になつて罵るにぞ、末社ども見兼ねて、「是れはわれ／＼同船の旅人なり、何とてさやうに手込にはするぞ。」と引きはなせば、勘藏涙をながして、「さて／＼都人の手前、近頃面目なき仕合。はづかしながら有りやうは、それなる花山といふ女郎と、われら久しき馴染にて、たがひに思ひ思はれつ、あふうちに、身上段々居開帳の如く、不斷明けはなして家内の靈寶左まへと、親の讓りの田地七丁まで、もみくちやにして、彼が臍の穴へおしこみ、其の上に揚代の殘金、此の月の

輪屋に請けあはせ置きたるが、つひにわれら住所此の近邊なれども、そこにも居られず、夜逃げにして、長崎の伯母のもとへまかりこし、くひつぶしてゐるうち、京都への飛脚にたのまれ、唯今戻りがけ、おの／＼方に同船し、この港に著きて見れば、花山が事なつかしく、逢ひたさは山々なれども、借金あればうかと顔出しもならぬ義理、くひしばつて船に殘り、帆柱と共に、つくりとしてをりましたが、こたへられず、尻の下からむく／＼と、持ち上げられるやうな心もち、せめて顔なりと見る首尾もあらうかと、あなたがたのあとから、うそ／＼と參りましたる處、承れば踊の催しある由、花山を呼びいだし、傍輩の女郎にも呑み込んでもらひ、かやうに女の姿となり、顔をかくしてお座敷へ出ましたも、透間を見て花山にあうて、はなしが致したいばかり、かくあらはれし上は是非なし、とてもふたりながら、ながう生きて居る所存にあらず、いかやうとも存分にせられよ」と、男泣きに袂を絞る見すぼらしさ、花山も滿座の中、顔をもあげず、打ちしをれたる體。心なき末社共も、きのどくさうに口を閉ぢて控ふれば、月の輪屋なほも手づよく、髭だらけの大口明いて、「又してもおのれらが涙に、是れまで誑されし口惜しさ、もはやその手はくはず、われら請合ひたる不埒。親方よりきびしき催促にあひ、町内へことわられ、商賣さしとめらるゝが悲しさに、妻子の衣類手道具、さらへあつめて質物に遣はし、半金を償ひ、それにてしばらくの猶豫をたのみ置きしが、おのれ爰に來る

は百年目、とても此の風の神見るやうな風體、逆樣にして震つても、びた錢壹文出る氣遣ひは有るまじ、揚代のかはりに、丸裸にして町内を引きずりまはし、あとは簀卷にして水葬禮にする、うせあがれ。」と髷ぶしとつて用捨なく、打ちたゝき蹈みにじり、さもにくさげに引廻す。これにてけふも、あすも、さめはて、一座しらけて見えければ、甚次郎兵衛飛んで出で、「コレ月の輪どのとやら、きさまの憤りは、めん／＼の勝手づく、外に仕樣も有るべきに、此の座敷へ蹈み込み、狼藉せられしは、われ／＼へも申し分有つての事か、此の言譯はいかに。」と、額ぐちに筋はつて、りきみ出せば、陽太郎も心中に此の男の無骨を惡み、むやくし思ひゐたりし事なれば、頓て月の輪屋にむかひ、「ナントその人の借金、われら償ひ遣はすべし。何程の金高にや。」といふに、勘藏平伏して、「其の段は御宥免下さるべし。とてもかく生恥をさらせし身分、命を金子の代りとし、帳面消さす分の事。」と、遮つて辭退するを、陽太郎猶泪もろく、金高を問へば三十兩なりといふ。然らば先刻爰元へわたし置きたる、百金のうちにて算用すべしと、さつぱりした取捌きに、勘藏手をあはせ、口の内に、光明眞言をとなへぬばかり、嬉し涙にせきあへず。月の輪屋の熊八、俄に笑顔つくり、「まことにわれら腹たつ儘、跡先をも辨へざる、麁忽の段、眞平御用捨下さるべし。兎角金子さへいたゞきますれば、ちつとも言分梨子地の硯蓋、おさかな唯今上けませう。」と、ちやらつかして入らんとするを、「どこへ／＼さうは

させぬ」と、末社ども呼び留め「かくいへば戯場の狂言めきて、近頃古手な事なれども、其の方はそれにて濟むべし。此の方には申し分あり、かやうに座敷を騷がし、遊興の妨げせし申譯は」と、せめつけられて、熊八はもぢ〳〵手をすり「それは御めん」といふをいはせず「ソレ打ちのめせ」と立ちかゝれば、肝とともに煮〆の芋を蹈み潰し、牛蒡ほどの尾をふりたて、ヤッチャまかせと逃げこむにぞ、あとはみな〳〵笑ひを催し、酒も大かたに醉ひがまはり、いざやとて打連れ、爰をたちて舟にかへりぬ。さるにても此の鶉野といへるは、今は絶えて野原となれども、むかしは娼家軒をならべて、繁昌の土地なりしと言ひつたへし。

第八章

つばくらや鳥影たえぬ船おろし　文母

肥前長崎は、和朝無雙の名津にて、寶の島とも謂ひつべし。錦のやま高く、白絲の瀧流れ、木の伽羅を筏に組み、麝香犬は猫のごとく、家毎に見えわたり、丁子葉茶の煮殼にひとしく、掃溜に捨てて焦らせ、一角は鰹節の出し殼に似て澤山なり、かかる名勝の地なれば、一刻も早く見まほしく、陽太郎は船を急がせ、漸く此の地に到著しけるが、まづ何はさしおき、勘藏を案内として、丸山に立ちこ

え、木屋といへる揚屋に入り、奥座敷にうち通れば、仲居が運ぶ獺虎の皮の鋪蒲團、紫檀の脇息かまへさせ、ちんたの酒に、孔雀の吸ひもの、鳳凰のやき鳥、琥珀の菓子盆には、天門冬、佛手柑、まるめろなんど、たか〳〵と積み上げたるは、いかさま唐土めきて、楊貴妃やうの女郎、衣裳つきの結構さ、紋がらは山海經にある如き、鳥獸の綺絲縫、金絲銀絲の織物。されども帶は蜀紅の錦まがひ、つむりには鼈甲、玳瑁の櫛笄、鋸目あるを、施我鬼の飯ほどにさし連ね、いう〳〵と出で來るありさま、下界の人とはおもはれず。然るところ、勘藏陽太郎に囁きけるは、「此の鄰ざしきにをるは、小鬢兆巴元溪と申す商唐人、御慰みに近附となり給ひ、珍らしき事ども、お聞きあらんはいかに。」といふ。これは一しほおもしろからんと、直に勘藏をもつて言ひ入れさせ、隔ての唐紙おしあけ、推參し見るに、毛襪やうの裝束して、涎は髭をつたはらせ、何やらわからぬことをいつて、女郎相手に餘念なき體、藝子が七筋の琴、伽羅の胡弓に、唐音のめりやすをあはせての大騷ぎ、どうもいへぬと陽太郎、興に乘じておもはずも、酩酊の顏色、ときにかの巴元溪、しきりに陽太郎のかたを見て、頭を疊にすりつけ〳〵、「日本人なむさんちよろまかすかん、まかたらゐけてき、とらにやん〳〵。」といへども、こなたへいつかうに通ぜず、誠に生きた唐人の寐言、なんといふことであらうと、勘藏に尋ぬれば、さすがは此の上地に馴れしものとて、勘藏聞きとり、「イヤあのやうに申されましたは、此の節此

の唐人どの、いたつて工面がわるい、そこで、ナント此方に結構な織物持參せし品々、げんなまで安賣にはたきたいと、申す事、さいはひあなたも、太夫さまの衣裳、おもとめなされうとて、當地へ御越しの事は、先達て承りましたが、珍らしいもの下直ならば、お買ひなされませぬか」といふ。陽太郎聞きて「いかにもソレ究竟なり、珍物あらば求めたし」といふに、さし心得て何やらん、唐人に向ひ、ぺつちやくちやいふよりはやく、挾箱やうのものをとりよせ、蓋押しあけて芝居の藏衣裳見るごとき、めつたに光る織物、其の外何ともわからぬ毛織など、品々取りいだし「こんりやんたんからくんちやあ、ほんぱかてん〳〵、どらやあ〳〵」といふ。勘藏横手をうつて「パァ、是れは此の方へもめつたには、渡らぬしろもの、先づ是れなるが、定めてお聞き及びもござりませう。正眞の火浣布、あらしか狸の衾、秦の始皇の鼻毛織、あれなるが天竺の流沙川にすむ、龍の金玉の毛にて織りたるりよんきんたんまん、被と申すもの。あつちの詞にて、かんきんちりゝん、だらりんと申しまして、寒き時は縮となり、又暑き時には、だらり〳〵とどこまでも延びる、奇妙希代の珍物、其の外紅毛おたり、はらんだのほてれん布、馬鹿羅州の阿綸子、貧すりや緞子、おのぞみ次第、いづれもこれは鼻の下の長尺、おたけは七丈六尺まで、ゆきが三丈から四丈までは、急度請合ひ、つよいことは命しらず、著ずにしまつて置きなされば、いつまでもきれる氣遣ひのないくせに、値段は三千三百三十三両

三分の處、急に金子入用ゆゑ、たんとはおまけ申しにくいが、たゞの百兩にしてあげませうと、唐人どのの言分、わたしがお進め申すではござりませぬが、お買ひなされても御損のいかぬ事、思召し次第になされませ。」と、すゝむるとはなしに、そろ〳〵と水を向ける最中、次の間の襖細目に押明けさし覗く間、「ヤァ勘藏の横著ものめ、爰にか。」とずつと這入りて、「おのれは〳〵覺えたか。」と、抓みかかるを見れば、鶉野の月の輪熊八なり。陽太郎驚き、「ヤァそなたはどうして爰へ。勘藏が揚代の三十兩は、われら償ひ濟ましたれば、最早申し分はなき筈、此の體は如何。」と取りさふるを、耳にも入れず、せきにせいたる顏色、唐人見かねてわつて入り、「コレサ熊八、われらの商賣肝心の處折あし、仔細はしらねどあとで〳〵。」と、おぢな目つきしてすかしなだむる顏、「ヤァ毒皿九太郎か、おのれにも去年呑み込んで請合つた、算用の殘りはどうしをる。」と、辰巳あがりに罵るにぞ。「コレサ〳〵短氣な。」と、口に手をあてる唐人の詞、「日本風はいぶかしや。」と、陽太郎の不審に、勘藏狼狽へ、「ホンニさうぢや、こんりやんすこたん、ちやかほかばあ〳〵。」と、間違へて、おのれが唐音つかふほどの混雜、「あた邪魔くさい。」と手にあたる、煙草盆投げ出す。銚子、皿、はち、われをわすれて同士討。喧嘩をいかにといふに、此のもの共はみな、東海道にていふ護摩の灰、西國にては旅虎落といひて、年中この海陸を往來し、旅人の金銀荷物などを掠めとり、渡世とするものなれば、さきに鶉野にて、勘

藏熊八といひ合はせ、さいはひ女郎花山は、勘藏の馴染なるゆゑ、謀計をかまへ、揚代のかゝり合ひありと僞り、勘藏を打擲し、陽太郎に金子を出させ、わけどりとせんとの惡工み、仕果せしが早くも勘藏、其の金子をおのれひとりよこ取りして、熊八には配分せぬゆゑ、さてこそ跡をつけきたり、丸山にと聞きいだし、爰に來りて此の騷動に及びしなり。又毒皿の九太郎も、唐人の姿に似せてかゝる始末も、勘藏とうなづきあひての狂言、血を血で洗ふいさくさに、さてはと陽太郎心づき、憎さもにくしと、末社どもにかくといへば、おの／＼血氣ざかりのものども、それ打ちのめせと大勢おしかけ、たゝきまはれば、唐人のかぶりし頭巾、附髭も、ころりと落ちて剃下奴、體は唐土天窗は日本、なく聲ギウ／＼三人ながら、ほろを亂して命から／＼逃げはしりぬ。

第九章

見せたしな始皇に雪のしるし傘　　風状

鷄飯に豚のこくしやうも鼻につき、何ぞあつさりとしたものといへば、葱の白根の五分切に鹽鳥の吸物、此のくらゐのあぶらは、爰で不斷の茶漬飯と、甘味いものの喰ひ飽きする丸山の居續けに、陽太郎はすでのこと、又虎落どもの、おこはにかゝらんとせしに懲り果て、此の上はとて筑後屋とい

ふ呉服店へかけ合ひ、若紫の衣裳、上著にて蜀紅の錦、うちかけは古金襴、緋羅紗の帯に金花鳥のべた縫ひ、下著は南京更紗、白綸子、いづれも色縫、紅白の南天、實は珊瑚珠水晶を、綴ぢつけてとの註文、わづか茶入の袋だけも、金何枚といふべき古渡の結構づくめ、人のほしがる貴なるもの、しこままこたんと、つみやげて大さわぎ、女郎藝子は女護の島ほど、いやがうへにならべ置き、彈きつ歌ひつ、はてしもしらぬ酒宴に、呑み草臥れて陽太郎は、涅槃像のごとく、眞中に倒れかゝれば、末社がくちもひく汐時、船漕ぎいだししらけたるに、出頭の甚次郎兵衛大聲あげて、「コリャ／＼日頃にも似合はぬ、皆やいほれだしやう、今ひといき趣向して、さわゞまいか。」といふに、仲居のお宮「イエイエなんぼ猩々の様なお方々でも、此の開からの呑みつゞけ、ちとお休みなされて、お醒しなされ、そのかはりわたしがおもひつき、京の女中でうつくしいといふ評判の、操路さまといふ太夫様、けふからの突き出し、是れをよんで鬮取りを、はねにしようぢやございんすまいか。」「是れはよからう。ソレ早くつかみにやれ。」と、居眠りせし末社ども、俄に目を皿になし、いきりきつて待つ處に、太夫さまお出で。」と、仲居がさきばらひに、ずつとあらはれ出たる姿、いかにも都育ちと見えて、花車風流は王照君が、田舎かせぎに出たる粧ひ、ほつそりすういり柳腰、甘味さうに見ゆるはたまらぬと、末社どもが引裂紙も、天窗数に割り附け、「長いのをとつたものが、アノ美しい頬べたへ、ねぶりつくの

ぢやが合點か。」と、さし出せば、「南無金毘羅大權現、私へ長いのを授けたまへ　そのかはり嫌ひなものは一生たちます。」との願籠り、「イヤわれらは嚴島の辨天さま、百八燈はおろか、もつと海へ回廊の建て續ぎし、唐銅の燈籠七八千、石鳥居も一萬ばかり、繪馬にかいてあげませう。何とぞ長い鬮をさらしめ給へ。」「オットさうは虎の日の毘沙門さま、祖師日蓮大ぼさつ、淸正公。」と、思ひ〳〵の願かけ。甚次郎兵衞は手鬮もつて、釣瓶で水を汲んで、手水をつかつて、何拜みしやら、おくればせにかけつけ、「あたりのものには福がある、延喜がよい。」とひきあてたる長鬮、「さてこそわれらへ札がおちた、サア〳〵わかつた、是れへ〳〵。」といふ顔、かの操路ふしぎさうにつく〴〵見ては、「これ〳〵おまへは。」と、いはんとするを、甚次郎兵衞詞をかけて、「コリヤ〳〵はじめてお目にかゝるぞ、ようは似た人もあるものぢや。」と、おぢな目づかひに、さすが京のおばすれ太夫、「ホンニよう似たおかたぢや、すでのこと僞相いはうとしました。」と、頓智のちやらくら、おきに見てとる末社ども、「コレハ何やらをかしな鹽梅、互にいはくのある顔つき、われ〳〵が目水晶、はぐらかさうとは、大佛の鼻毛ふといといふもの。甚次郎狐に茶椀酒で、拷問しようと當てこすれば、陽太郎むつくと起き、「樣子は聞いた、われら尻持ち、まづその太夫から白狀させよ。」と、何がな慰み見出したき最中、きかぬ氣のむかう見ず、猪之八といふ末社、茶椀もふるいと酒甌のいぬし丼、鉢打ちあけ、なみ〳〵とかけて、

太夫さまあげませうと突きつければ、「是れはいたうもない腹とやらで、さりとは無理ぢや。」と、操路は迷惑さうな顔つき、「イヤ／＼その鉢で酒まゐらすは、アノ男と下地から近付のやうす、白狀せられよ。」、と口觜尖らして鷹右衞門といふ男、「斯ういひかゝつたからは、否でも應でものまします、それともさつぱりと、まき出してしまひなさるか。」埒のあかぬ末社ども、同音にのめや歌へや、一寸さきは闇の夜と、手を打ちたゝき、はやしたててせめつけられ、操路すこしむつとして、「コレハ皆さん、よつて、わたしを嬲らうとの言ひ合はせでござんすか。」「ナンノ貴樣のやうな瘦せた身ひとつを、此の大勢の者どもが、おとなげなく言ひ合はせて、へこまさうとするものか。」生馬の目をぬくわれ／＼を、ちよろまかさうとしられた返禮。下地から近附きか、ありていに白狀あれば事濟む。」と、かさにかゝるを陽太郎、おしとゞめて座興になし、舞ひ納むれば仲居ども、「ちとお休みなされませ、操路さまもあちらへ。」といへば、イヤあのおかたなら、わたしはどうとも。」斟酌する體、「先づ一杯とれ。」と一間を仕切るうちに、操路手水にたつてゆくを、猪之八鷹右衞門つゞいて緣先にはしりいで、太夫をとらへて、「どうでもあの甚次郎兵衞とは、近附きでござらうが。」と、しつこう根間ひすれば、操路吐息をつき、「ホンニ勸めしてけふほど、迷惑なめにあうたことはござんせぬ。なんぼおまへがたが問はんしても、座敷ではいはれぬ事、必ずわたしがいうたと、いうてはわるいほどに。ありやうは成程あの

お人はおちかづき。あれは京で福徳寺の遊樂さまとて、尊い和尚さま、いつの間に、あのやうな男にならんしたやら、後生して願はずとも、出家おちのおかたにあふ事、未來の程がおそろしい、皆さまの取持ちで、牀入りせぬやうに頼みます。」と、委細のはなし。兩人横手を打ちて、「いかさまこれは座敷でいはれぬがもつとも、旦那も近頃、太夫さまの御縁でおちかづき、出所御ぞんじないと見える、耳うつておかうか、イヤ先づ甚次郎兵衛めに、いやがらせ遊ばうか。」と、もとの座敷へ立戻り、甚次郎兵衛にむかひて、「ナントそこがどのやうにかくしても、なんでもあの太夫とは、わけがありさうに見ゆる。」と、こそぐりかくれば、甚次郎兵衛聞きて、「なるほどはじめ來た時は、何とも心つかなんだが、よく〳〵見れば、ずゐぶんしつて居る女、必ずわしがいつたとはいふまいぞ。あの女は京で名題の女郎なりしが、おほくの客をたらし、未來のほど覺束ないとて、尼になつて嵯峨の釋迦堂前に、ちよつこりとした庵をむすび、鼠衣でその殊勝さ、今中將姫と、皆人感に絶えた比丘尼であつたが、いつの間に、又むかしの身にはなりしぞ。さりとてはおそろしや、來世は鬼の餌食になるであらう。なんぼ此の方構はぬ身分とはいふものの、あのやうな墮獄の罪人と、牀入する事是ればかりはゆるせぢや。」と、まじめになりていふもをかしく、末社ども兩方を聞きて、「どちらがどうやら、とかく見ぬ事聞かぬ事は、いづれの方が誠とも、定め難し。」と、頭を撫でて居たる處に、都祇園町の小道具屋智

助といふ者、京中の大家へ出入りして、帝頭持半分渡世をするもの、商ひ用にて此の地に來り居合はせ、かねてより陽太郎は懇意なるゆゑ、かくと聞きて早速揚屋へ尋ね來り「是れはおひさしぶりで、まづは御健勝。」と、挨拶終りて、甚次郎兵衛を見るより肝を潰し「あなたは福德寺樣ではござりませぬか、どうしていつから還俗はなされました。ひとしきりおまへの說法では、ァ、御若いに有りがたい事ぢやと、わたしどものやうな、後世の道に疎いものさへ、お十念をいたゞいたこともござりましたが、今かやうのお身とは、ほんに佛さまたちも御ぞんじは有るまい。」と、呆るゝ處へ、操路すました顏して出で來れば、智助見て「ャァ貴樣は妙正どのではないか、是れはしたり、坊主落ちのより合ひ、前世の事は見た人がなければ、いつその事、是れもましか。」といふに、甚次郎兵衛も操路も、さつぱりおさとが知れ「此の上は詮方なし、打明けてお話し申さう。妙正事は東石垣にてかくれもない女郎なりしが、或時母親、われらの寺へつれて參られ、出家の望みふかきよし、弟子にしてくれよと達ての賴み、をしいものぢやと思ひながら、其の時分は殊勝顏して、人に尊がらるゝ身持なれば、近頃奇特のいたり、此の世はわづかの假の宿、未來こそ大事なれ、そなた一人出家すれば、兩親兄弟はいふにおよばず、一門一家まで成佛する事疑ひないと、戒文を授けて、愛想もこつそり坊さまに、剃りこぼつてやりしが、戒師も弟子も今の身持、これも浮世ぢや。」と話ししに、皆々興をさまし「最早

餘程夜もふけた、甚次郎兵衛和尚さま、お床入りなされい。」と、いへば、「然らば廻向いたさうか。」と床のうちへはひり、何をいふかとおもへば、「さて／＼いつぞや釜の座の五郎右親仁と、奈良茶くひに貴さまの庵へいつた時、ちとおたつて見ようかと思つたれど、中々おこなひの殊勝さ、信心ふかく見えたるゆゑ、もしいひ出して恥をかけばと、口までは出たれど、辛抱して、言ひ出さず歸りたるが、今此の身になる事を、其の時から知つたなら、たゞはおくまいに。」とのむつ言、立聞きして末社ども腹筋をよるをかしさよ。

通俗巫山夢巻之三　終

通俗巫山夢卷之四

東都　十返舍一九編

第十章

朝貌にうすきゆかりの木槿かな　蕪村

調子に乘りても、物は前方にいふべし、よく言ひ果せんとして、必ず虎に角を畫きて、虎にならざるの類多し。甚次郎兵衛は其の身坊主おちなる事を隱し、西國方のさる大家に仕へし、鎗の一筋も持たせし者の果てなりと、素性尤もらしく若柴もいひ、甚次郎兵衛もその口を合はせて、是れまで陽太郎を欺き置きしが、百日の說法屁一つにて、思ひもよらず、化の皮は禿げたれども、頰の皮厚ければ絲瓜とも思はず。畢竟陽太郎愚かながらも、萬事馴れて、おもながなる性質なる故、そこに附込みたるにや、少しも恥ぢらふけしきもなく、かの尼おちの太夫と、每夜の私言、いかにしてもあまりとや頰にくし、此の上きやつらを否がらせ、困らする趣向もがなと、陽太郎の發言に、心得田甫のひな

ぐさ。そこらはわれ〳〵とつておきの智慧袋、ものまへの入用にと、くすねおきしをさらけ出し、一工夫仕らんと、後生樂の末社ども、何がなと思案にくれて打過ぎけるが、或日旅宿にて例の如く、皆皆打寄り酒宴の最中、雇ひの飯たき親仁、あわたゞしく次の間にて申しけるは、「只今當所にて、名うての惡者、すでの長左衞門と申す男、つか〳〵と參り、甚次郎兵衞といふ人、此の家に逗留せらるゝよし、何方の人にて、商賣は何をしらるゝや、ない〳〵にて聞きたいとの事。あれは上方のお客さまのお供してござつたお人、商賣は何やら委しい事は知りませぬと、ついいうてかへしましたが、お知る人でござりますか」と、何やら氣遣ひがる樣子。甚次郎兵衞も合點ゆかず、ハテ此方に覺えなきをとこ、是れはふしぎと眉に皺よせて、不審り居る折柄、どや〳〵と入り來るは、終に見馴れぬ究竟の男ども三人、中にも鎌髭むさくろしげに、あから顏の、一理窟もこねさうな男、さも橫柄らしく、「是れいづれも御免なされ、扨甚次郎兵衞殿と申すかたへ、御意得たうござる。」といふ「則ちわれらその甚次郎兵衞、何の御用ぞ。」といへば、かの男、「イヤ身共ことは、操路太夫の親方、荒灘屋三之助の後見傳内と申す者、今朝操路缺落いたし、行方しれぬについて、さま〳〵勘考いたす處、畢竟當地へ參つて、いまだ間もなきこと、外に蟲のつくべきやうなし、承ればそのもと、上方表よりふかき馴染のよし、定めて惡性根入れられ、引き出されしものと、傍輩どもの取沙汰、われらそれに相違あるまい

と、的中いたして參つた。サァ操路はいづかたへかくされしや、有體に申されよ。」といふ。甚次郎兵衞仰天して、「誠にこれは寐耳に水といはうの、藪から坊主おちのわれら、さやうな不埒、はたすべきやうもなし、ほんの當推量に、鎌をかけての言分、近頃麁忽でござらう。」と、半分聞きさし、傳内猶詰め寄せていふやう、「われら今こそ、かかる賤しき商賣は致しをれども、以前は帯刀もし、棒の一手も心掛けし身分、なか〳〵卒爾なことは申さず、慥かなる證據ある故にこそ、かくは申すなれ。」と、懷中より一通を取出し見すれば、上包に甚さん操よりと記せし書面。傳内おしひらきていふ「御約束の通りこなた事は今朝ほどより、兼て御はなしの方まで立退き、御もとさまの御出でを待ちをり候まゝ、はや〳〵御越し下さるべく候、委しくは御めもじのせつと、心せき申しのこし候。」と、讀みきかせて、「ナント覺えないとはいはれまじ、此の文はこなたの處へ屆けてくれいと、うちの禿どもが内々にて、頼まれたといふ事。われらの眼にかゝりしは因果のつくばひ、此の文が證據。とても遁れぬ、詞の甘いうち、ありていに申せばよし、さもなければ料簡あり、後悔するな。」といふ尾について、二人の男共もいきり出し、「兎角はない、引きずり出して打ちのめし、頰の皮ひきめくらん。」と、鼻あぶらを手にもみつけて、力みかゝれば、甚次郎兵衞も腹にすゑかね、「汝等いひかけするのみならず、悪口此の方に覺えなければ、その文もこしらへごと、操路と點頭き合ひてのゆすり騙り、その手は喰は

ぬ。」と、いひもきらせず、傳内大口明いて、「おのれが心に引きくらべ、かたりとは吾ながな奴、嘘をつく口をもち、盗みしたい手をもち、かけ出したい足の、くつついてある代物を抱き込んで、わがものにして渡世する荒瀧屋、あまちやな事しては、此の後女郎どもの、しめしがきかぬ。殊にあの太夫はちと樣子あつて、たとへ百萬貫目積んでも、めつたに手放し出來ぬ太夫、金に目をくれぬ此の男、ゆすりかたりでない證據、引出してでんどへつれゆき、埒明けん」と、腕まくりして立ちかゝるを、陽太郎初め末社ども、最前より甚次郎兵衛が、むきになりて爭ひゐるををかしく、袖引き合うて打笑ひつゝ控へ居たるが、こたへかねて鷹右衛門猪の八、兩方をおし鎮めて、甚次郎兵衛を別間に連れ行き、兩人口を揃へて申しけるは「段々の樣子をきくに、さきは悉く無理にして、此方に一向覺えなき事明白なり、殊に證據といへる一通も、先方に抱へ置き、女郎の書きたるもの、とるにたらず。さればとて雙方いひ募りて、もしも表沙汰にならば、理非はそこにてわかるべけれど、こゝが此方の思案どころ、第一は旦那の名もいで、そこもとの素性も糺された時、出家を墮落せし譯もいはねばならず、とかく外聞を失ふ事なれば、蟲を殺して穩便の沙汰よかるべし、彼等が何貫目積んでも太夫は出さぬ、いや金に目はくれぬなどといふのがすなはち、ゆすりの證據、みす／＼見えすぎてあるこしらへごと、旦那の身分をつけこんでの仕事なれば、今少々も金子をもつて扱はば、直に濟むべき事なれ

ども、いかにしても殘念なり、何とぞ金子を出さず、鼻あかする趣向もがなと、われ〳〵工夫せし事あり、外にてもなし、此方に知らぬといふ言譯は、かくの通りと、彼等の前にて、そこもと髪を切りて坊主とならば、是れにていさくさの市がさかえて、ぐつともすつともいふ事はあるまじ。是れ則ちきやつらは、あてのつらがはづれ、またそことても、今坊主となつてからが、念佛唱へて精進するといふではなし、やつぱり旦那のたいこもつて、肴も女房も勝手次第、以前の出家の身の上には、勝るとも損はなし、なんと此の趣向をして見ぬか」と、まじめになりて勸むるにぞ、甚次郎兵衛忽ち目に角たてて、「おいてくれ、おのれらが陽太郎殿へふきこんで、身どもをふたゝび坊主にしようといふ、もくろみとは見ぬいておいた、せつかく座興にしらるゝ事、一ぱいくつた顏して、最前から調子を合はせてをれば、よく〳〵の二本坊と、思つての譫言、操路が缺落せぬ事も知つて居る、打つちやつておけ。」と言ひ捨てて座敷にもどり、件の者共に向つて「コレ荒灘屋の親かた、太儀でござつた、貴さまも頼まれて來たらうに、もうよい加減にしてかへらしやれ、馬鹿なつらぢや。」と、三寸俎板見すかされて、拍子がぬけ、こりやもう叶はぬ、ありやうは操路太夫に吞み込ませ、その文を書かせて、あの衆を頼み、親方になつて貰ひ、術にかけてつぶりを剃らせ、慰まんと言ひ合はせし狂言、覺られては一も二も、ない〳〵つぶりの釜が破れて面目ないと、鷹右衛門の殘念がり。皆々横手を打ち笑ひ、

酒にしようと又呑みかくれば、甚次郎兵衛はしたり顔にて、「なんとわれらの逞しさ、ちよつとおなた衆の目が動き、鼻のさきがひこつくと、はゝあこいつはかうぢやなと、白眼んだが最後のすけ、ちよつともやつたものではないに、あゝ恐ろしや〳〵、すでの事すんぼら坊主に削りまはさるゝ處、先づは無難の天窗も身親ひ、髮月代なとして來よう。」と、大手をふりて出で行きしが、稍暫くすぎて、手拭に頭をつゝみ、顏色青ざめ、しを〳〵として立歸り、「さて〳〵けふはいかなる惡日ぞや、やつぱり坊主にならねばならぬ因緣と見えて、思ひがけなく、こんなものになつてのけた。」と、手拭をとれば剃りたての青坊主。これはふしぎやと、みな〳〵驚き不審がれば、「さればこそ聞いてくれ、髮結所に待ち合はすうち、三四人寄りてさま〴〵の話につき、いや誰々は殊勝げにて出家になれば似合ふ顏、彼は似合はぬ顏などと、評議する調子にのり、そこに居たる者の、でつぷりとして色白く、人相よき男に向ひ、我等のいひしはそこもとこそ出家せば、殊によく似合ふべしと、つい洒落にいひたるを、かの男御見立てあづかり忝し、さあらば剃髮し申すべしと、髮ゆふ男に頼み、剃りこぼちてくれよといふ。コレは一興と戲れにこそ申したれと、われらとめても聞き入れず、髮結もまた剃るまじと斟酌すれば、此の男顏色をかへて、ぜひ〳〵剃るべしと、聲あらけなくいふにぞ、密かに傍の人にきけば、そのものは當所にての男作、膽の多七といふ者にて、九州の內人に知られし豪傑のよし、髮結

もそのをとこのいひ出せし詞、背き難くやありけん、終にくり／＼坊主となす、われら側にきのどくさ、是れはひよんな事いひ出して、よも此の儘にては濟ますまじ、ことにかゝる氣性は、一筋縄ではいかぬ奴、いかゞはせんと、思ふところに、かの者われらに向ひ、其方も坊主顔なり、この如く剃るべしといふ。いやといはば、いかなるうきめにあはせかねまじき、頬構への恐ろしさ、手のこつぼうすりて、さま／＼詫びても聞き入れず、摑みつかんず勢ひに、據なく、われらも倶に此の有樣、さりとては情なき災難。坊主に飽き果て還俗して、やう／＼此の頃、人並のあたまとなりしに、最前は貴樣だちの謀計、遁れて嬉しやと思ふにかひなく、ものの因縁といふものは、諍はれぬものぢや。」と、恨めしげにあたまを撫で／＼、しよげかへりて涙を流し悔しがる處へ、勝手のかたより膽の多七をさきにたて、居合はせしものどもつか／＼と來るを見るより、鷹右衛門猪之八聲かけ、「コレはいづれもお手柄が見えました。委細はこの和尚のはなしで、腹筋をよりました。」といふ。甚次郎兵衛さてはと呆れはて、「ヤアこれもやつぱり、おのれらが仕くみの狂言であつたか、エ、口惜しや、あつたら肝を芋にした。」と、じり／＼舞ひしてくやしがる。多七打笑ひて「旦那よりのお頼みゆゑ、こなたさまが髪結所へ、見えるそのまゝ言ひ合はせて、似合ふ似あはぬの評判から引き出し、此の三人の中誰なりとも、こなさまがかういうたら、その時かうぢやと、かねてよりしめし合はせて置いたもくさん、わ

れら男作でもなんでもなし、そことは知らず、笑止な人ぢやこと、とよめけば陽太郎興に入り、多七が坊主なり賃、いびつなりもの、くわつとした取捌き、これを肴に、またノ＼酒になりすましぬ。

第十一章

しらぬ火の陽炎見ゆるひる聞かな　　来山

かくて若紫の衣裳、縫仕立とも、ものの美事に出來しければ、陽太郎の悦び大かならず、これにて過當の望み足れり、去りながら今ひと趣向し、何ぞ變りたる思ひ付きなくては、をかしからずと、さまざま工夫し、先達ての紙子の趣向、殊によき案じなればと、それにならひて、今あらたに貧窮のものどもへ金銀を貸附け、その證文をもつて、紙衣に仕たて、若紫が著替衣裳となすべしとて、旅宿のおもてに金銀貸所といふ、看板をかくるやいな、夜のうちから戸を打叩く、木魚あたまの光る老僧、一朝坊主は吉喜がよいと、見世出しをいはうて參りました、われらはさる御大名の祈禱寺、宗旨は眞言弘法の流れを汲みて、野郎地若衆に、僅かの地領もつかひあげ、ちやんからりんの悲しさに、佛を祈る、あびら雲絹縁の護摩壇を枕にして、夢の告げ有りがたく、寺からさとへ、かけつけました、われら如きの衆道好きには、金銀を野郎ノ＼とおつしやるげな、ひとへにお慈悲。とかしこまれば、陽

太郎うち點頭き「こなたの宗旨は現世の福徳をおもてとする金胎両部の文字も、一歩小判を表したれば、貧乏にはない筈なれど、散錢奉加のたまり、彼若衆狂ひに、みな尻へぬけるとみえる。」と、打笑ひつゝ手形受取り、望みの金高さしいだせば、「是れは有りがた薯蕷、鰻になる程精分がつきました。」と、いそ〳〵かへる其の後へ、ちはや古金買ひだし親仁、薬罐あたまを、うちふり〳〵、お慈悲〳〵と差出す、手形はさながら鐵釘の、お禮はあとでと古かねならぬ、新吹小判十五兩、慥かに赤銅いたしたと、鴈首さげて立ちかへる。慾に目のなき座頭の坊、わがものいらずに官職を、したいわれは都の生まれ、色にそやされ紺のだいなし、鬜あたま、地にすりつけてはうかしながら、總嫁を身受けの金づまり、當七月の給金にて、お取替をと夕化粧、女郎屋の亭主に打連れ、手をすつる藪醫者、借金をはらひたまはぬ神道者、疵もつ足のうらやさん、梅がえもどきの女まで、持病のしやくに柄をすげて、悲しい事共いひならべ、こゝへ三兩かしこへ五兩、或は十兩二十兩、是れは早速かたじけあり、御恩は死んだら忘れます、そのかはりには限月に、急度返濟も覺束なく候、生きた人への香奠とおぼしめして下さりませと、甘い口ほこ羊羹いろの肩衣に、棧留の袴膝のあたりは黒光なるを著し、お釋迦の手の大小腰によこたへ、一僕つれたるお侍、五十以上の禿あたま、疊にすりつけ、われら身上不如意につき、掛取どもに攻めたてられ、籠城叶はず切腹とは存ずれども、實はとくより賣代な

して、竹光なればせん方なく、入水せんと思ひつゝ、夜前濱邊をさして出かけたれど、犬が吼えて身をうれず、據なく無心に罷越しました。」と、詞のうちより六十餘りの女、黒帽子をかぶり、垢染みつきし古布子の、素貧乏もかくされぬ、綿のはみだしひきずり下駄、脱ぎすててあがり口になほり、「わたくしは此のあたりの者なるが、亭主はながく〲顋にて蠅を追ひからし、商賣出來ねば、上下の口とも、渇命に及ぶ歎かはしき、借金を質になりともおとりなされて、御合力願ひたげます。」と、いふ顔嶋の目鷹右衛門、つくぐ〲詠めて、「ヤアこなたはさつきにも、八百屋ぢやというて來た親仁、顔口の痰瘤と、鼻のさきが釜山海のはうへ、つんまがつてる處がたしかな目印、女に化けて出直し、又してやらうとは、あまり人を馬鹿にしたやつ、その手はくはぬ。」と、横頬ひとつふたつ御見舞ひ申せば、やつきとなつて、「ナンノわしが最前くるもので、おぼえもない身を、何としてくらはさしやれた、きかぬ〲。」とわめきかゝれば、かの侍かけより、「コレ親仁どの、腹立つるは損ぢや、うたれてなりと、金借りて戻るが上分別、しづまらしやれ。」と、われを忘れし為體、諸之八聞きとがめて、「ヤアこいつめもばんくるはせもの、見たやうだやと思うたが、今のさきうせた結構婆、拾五両といふもの借りて戻りながら、侍に化けて二の句をうせたは太い奴、かした金のおはり丸裸にして、恥頬かかせ腹いるべし。」といひさま、とつて踏み倒し、衣類大小取りあぐれば、天窗は男からだは木綿の

湯具ひとつ、扨こそ女に化けたる親仁、これも衣類を剝ぎとられ、つぶりの鬘は笄髷、身には黃色のゐつちう褌、面目投首して、婆なく〳〵申すやう、「あらはれましたからしかたがない、なる程この親仁どのは、わたしの連合、さきほど八百屋ぢやというて、御無心に參りし人、私も粘うりばゝになつて、まんまとおかねいたゞきながら、また來をつたにくい奴ぢやと、思召しませうが、さら〳〵身の慾には致さぬ事、夫婦の者が言ひ合はせて、どうぞ御本山さまへ、おかねがあげたさ、さき程の金にては不足なる故、姬ごぜのあられもない、野郎あたまに剃りこぼち、侍となつて參りましたも、御開山さまへ御奉公ぢやとあきらめて、連合も此の度は、女に僞せて狂言をやられましたが、斯うなつてはもうしかたがない、此の上はノゥ親仁どの、御本山へは、うちのかねを出して上げませう、サアござれ。」と手を引きあうて、すご〳〵かへるもぶざまなれ。よく〳〵きけば此の者どもは、當地にては指折の金持ながら、慾に耽りてこの仕儀に及びしならんと、人々噂申しあへり。さるにても陽太郞、おほくの金銀を貸附け、證文はとれどもつく〴〵おもふに、是れ則ち河童の屁のおもひつき、紙衣に仕立て著をればとて、其の證文が誠やら譃やら、自身勝手にかきたるものやら、人は何ともしらぬ火の、筑紫よりは二百里の餘を、隔たりし大阪にて、みえにもはれにもならぬ事と、貸しつけたるかね損にして、それよりは出立の用意をぞなしたりける。

第十二章

酒くさき人にからまる胡蝶かな　嵐雪

右大臣師輔公は、雲上の衣冠車馬に至るまで、美麗を求むべからずと示し給ひ、禁秘抄には天子著御のお物さへ、おろそかなるを用ゐると見えたり、況んや民間卑俗の身として、分際不相應の華美を盡す事、驕奢の惡名、萬口の譏りを招くは陰にして、おもては巧言辯舌にのせられ、自分に威勢ありと心得、無用の潤色に誇るもの、その費えあげてはかり難し。されば陽太郎の行末、さぞと思ひやられたれど、眼前今の活計、沖をこえたる舶のいちはやくも、浪花の津に入りて、旅裝束脱ぎ捨て、長崎衣裝の綺羅を飾りし若紫、春日野を、左右の花と手に携へ、末社ども數十人に前後を圍ませ、管絃樂器の音せぬ許りに練り出して、新町の揚屋、よし田屋になりこめば、ソリャこそ昨夜の燈花、福德神のお入りごとと、百目掛の蠟燭、忽ち萬燈となりて、晝を欺き、臺所の俎板音たかくして、擂鉢のわるゝを厭はず、いで其のときの擂子木は、梅さくら松にあらざれば、山椒の木の芽に、鼻をうごかす料理人、二角はしめたものぢやと悦び、井戸車についてまはる男どもも、百疋はおさへた鳥飛びあるく。仲居が赤前垂常よりも色をまして、花車の慾頰、近年に覺えぬ摑み取りぢやと、奥座敷の三間

をうちぬき、陽太郎を上座になほし、名ある太夫藝子の總揚げに、どんとしやれるたいこの嘉吉が、七福の顏の藝、淀八が扇の手踊り、熊吉が十二眼のをかしみ、さけは鯨の百川を吸へどもつきず、肴はいやし坊の下戶、あらせども澤山なり。かかる酒席の騷がしきに引きかへ、となりの小座敷には、法師をよびて八橋の祕曲を盡させ、としの頃四十にちかきふたつ髷の艷顏、黑羽二重に淺葱綸子の下著、襟かずをそろへて、ゆたかに著なし、腰元あまたしたがへ、羽織袴著たる實盛武士、二三人末座に控へさせ、御酒の相手には、年がましきけいこども、三四人めされてしめやかなる體、いかさま大家の後室と、看板うたぬばかりに見ゆ。甚次郎兵衞、もののひまより是れを伺ひ見て、仲居に囁き、何人にやとたづぬれば、「あれこそ西國がたにて、さるお歷々樣の後家御のよし、とかくお國の草ふかきところをおきらひなされ、此のほどより當所に御逗留ありて、もし御目にとまりし男あらば、御寢間の伽にめしかゝへられ、すぐに此の地に御隱居とのこと。そのをとこ、お氣に入代として、一年に千兩づゝの給金、お物好き隱居屋敷もすぐに下され、此の外に願ひ事あらば、何なりと、そのものの望み次第との仰せ渡され、しかしそれも、野暮堅いものはお嫌ひ、道樂肌の男、御好みとの御註文ゆゑ、此の間より大勢御覽なされど、今もつて、お氣に入つたものがないとの事でござります。」と、唇をそらしてしやべれば、末社ども俄にうかれだし、ナント耳よりなこと、われも〳〵その後家御へ、

お目見えはなるまいかと、銘々鼻をいからして、鄰座敷を覗き見れば、勿體ないほどの御器量、そも人間ではあるまいと、有頂天滿の瓶八と云ふ、ぬらくら親仁をさきにたて、北と南の雨の宮、風の宮たつ・茶屋の掛人、まはし男も借著して、後家御へ目見えと、瓶八委細に披露すれば、石部金太夫と云ふ、御乳夫らしき侍罷り出で、「さて〳〵何れも御大儀千萬、此の度主人の後室、男を選み召しかゝへらるゝ義、隱居に賴み入り、追付け御目見えいたさすべし、暫時それに控へられよ。」と、次の間にとゞめおき、頓て案内して、いざ是れへといふにぞ、各後家御の前に這ひ出で、平伏すれば、ひと目見給ひて、訛りのある鶯の三光を囀る如きものごしにて、金太夫をめされ、何やら仰せられしが、そのまゝ金太夫、瓶八を近附け申しけるは、「さて氣の毒ながら、今少しお氣に入らぬとの御意ぢや程に、先づつれてかへられよ。」といふ。瓶八承り、「御註文は大概、此のやうな男つきをと、御好みをうけたまはり、それに似寄りたる男ばかりを選みいだし、連れてまゐるらば、これほどに隙入れずとも、早速御目にとまる者もござりませう、何とぞかやうな風の者が御好みぢやと、委細を仰せきけられ下さりませ。」と申せば、「これは尤も、しからば此方に控への繪姿がある、これをその方へ貸して遣はす程に、とかく披見せらるべし、面體恰好その如く、天柱もとに黒痣五つあつて、龜の尾のあたりに、腎滿の痣とて、さしわたし一寸はかりの痣ある男を、吟味し連れ來るべし。」と、金太夫繪姿をわたせ

ば、「それをとくより仰せられますれば、おきに埒のあきます事。さて〳〵おの〳〵さまにも隙費え、わたくしも足をする木に致しました、いづれ御好みの通りの男、早々穿鑿致しませう。」と、御いとま申し立ち出づれば、先刻よりたち聞きしたる、猪之八鷹右衛門を初め、其の外の者共、次の間に待ち受け、「コレハ天満の親方、その繪姿ちと拝見。」といへば、瓶八見て、扨こそ風来人のお揃ひ、久し鰤のあんかけ以來、打絶えた出合ぢやと、一綱に陽太郎の座敷へ飛び込み、杯ひろひて呑みかけながら、鄰の目見えに、はかれしものども口々に、「ア、残り多や、あの美しい後家御を相手にして、千兩の給金とは、この世からの極樂、ふみはづしてたとひ來世は、鬼の茶粥となつて、地獄の釜で煮らるるとも、本望であらうのに、どうしてわれらが御氣にいらぬぞ、こればかり不思議ぢや」と、鼻も動かさずいふを嘉吉ひつとり、「世界に男ひでりしたらば格別、そちがやうなものを、何の因果に思ひつくものぞ、われらでさへ、はかれたものを。」と、その押しの強さ、甚次郎兵衛も、坊主にならずば、目見えして、御意に入らうもの、残念至極と、かひなき天窗を撫で廻すもをかしかりき。瓶八件の繪姿をとり出し、ありもせまいがこの席に、此の樣な男はと、あなたへ弘著して、「これはあまりよい男とも見えぬが、鼻のひらい鹽梅、眼尻の下つた樣子、どうやら鷹右衛門に似たやうぢや、其のくせ年も二十四五位と、こゝに書いてあるが、ちやうどそのとしばい、ホンニ頰骨の出た所まで、生寫しぢ

やつ」と油をのせられ、喜右衛門傍に鬢のおくれ毛を撫であげ、ちとさうもござるまいと云ふ顔つきにて、「しからばわれらもお目見えを」」とあつかましくも、孫八を頼めばうち點頭き、さりながらさきの好みは黒子と痣が肝心、それさへあればと、大勢覆ひかさなり、天柱もとをあらため見て、「さても仕合者かな、黒子四ッまで、今ひとつは、墨をつけてたりとも、五ッの數を合はすればすむ事、難儀なるは亀の尾のあたりの痣、これはあるまい近頃残念千萬」」と、各もとの座におし直れば、惣領かわきの隠右衛門しばらく考へて、「イヤそれでもないとはいはれぬ、産神にすゝめられた跡、纔かに十四のあたりに、あつたと覺えました、とてものことに見て下され、失禮ながら」」と尻引きまくれば、又もや皆々立ちかゝり、穿鑿すれども痣はなし。「さてこそ縁なき衆生ぢや」」と、どつと笑へば、甚次郎兵衛いふやう「ナント是れは熱くとも堪忍して、痣のやうに煙管の火皿焼いて、あてゝはどうぢや。」といふ。「ア、めつさうな、それが熱くて、こらへられるものか。」とかぶりふれば、「ハテこなたは臆病もの、女郎はまんぞくに揃つてゐる指さへきつてやるではないか、少しの熱い目を辛抱すれば、結構な身になることぢや、美しい後家御望みにないか、千兩の金入らぬか、さりとては分がひない男ぢや。」と、氣をもたされて、鰒は喰ひたし命は惜しし、なんのまゝのかは、「そんならあまり、あつくないやうにたのみます、首尾したら貴様たちへも、舌一まいづゝはすむぞ。」といふ内に、焼喜世留をあてられ、

飛びたつばかりのあつさをこらへて、涙をかくすもをかしく、瓶八見て、「出來た〳〵、そのまゝの痣(あざ)ぢや。」と悦ばせ、鄰座敷(となりざしき)へ打連れ行けば、こなたよりは皆々、息をつめて様子(やうす)いかにと聞きゐたる。

通俗巫山夢巻之四　終

通俗巫山夢卷之五

東都　十返舍一九編

第十三章

小袖著せて俤にほへむめの妻　其角

呉越の人は文身とて、渾身の入黒子を粉り、衣服の代りとするは、漁獵を平生の生業として水中に世をわたる故とかや、それには異なる人ごゝろ、色慾の二つに迷ひ、燒金をもつて生まれもつかぬ痣をこしらへ、「及ばぬ望みは、さながら雉子と鷹右衛門、次の間へ控へさせ、瓶八金太夫に對面し申しけるは、お好みの男漸く見當り、めしつれて參りし」と引き合はすれば、金太夫懷中より眼鏡取出し、天柱もとのほくろをあらため、さて痣はいかにといふに、無躾ながらと尻おしまくり見すれば、「いかにもいかにも見屆けました、定めて此の男にきはまるべし、それに控へよ」と立つて入れば、瓶八鷹右衛門の脊中をたゝき、「世に果報者とは其方の事、あやかりもの〳〵」と、ともに勇みて座敷へ出づれ

ば、後家御鷹右衛門を見給ひ、天柱もとの黒子、龜の尾の痣ある事は、金太夫より委細に聞きたまひて、嬉しや日頃わらはが念願の男、それ〴〵申し付けたるとほり、はからふべし。」と、仰せの下より究竟の侍出で來り「此の男に繩かけませうか。」と、伺ふにびつくりして、逃げ出す鷹右衛門をとつて押へ、高手小手に縛むれば、忽ち顏色土の如くなつて、これはいかにと大方ならず動顛すれば、金太夫瓶八にむかひ、其の方は樣子知るまじ、此のものゆゑ後室樣はじめ、われ〳〵とも、去年より寢食を忘れて、さま〴〵と心を碎きしに、今日ふしぎに手に入る事、先づ以て喜ばし。その仔細は、大阪のものとありて、去る春よりめし使はれし、右の黒子と痣のある中間、盜賊の手引きをなし、御寶藏へ忍び入り、お家の重寶數品を盜み取り、あまつさへ足輕どもに手を負はせ、此の男共に行方知れず、大殿御死去の後は、萬事後室さまの御計らひ、大切の重寶紛失して、若殿御家督のさはりとなるにつけ、繪姿をもつて、先づその手引きせし者を詮議のため、謀計をかまへて、かくの如くの仕合。」と、おもひもつかぬ災難に、鷹右衛門あつき涙をながし「わたくしは決してさやうの不埒を、いたした覺えはござりませぬ、お恥かしながら、あなたの御意に入る事とぞんじまして、龜の尾の痣は、唯今あちらの座敷にて、燒金をあて、熱いのをこらへて拵へました痣、生まれ付きではござりませぬ。」と、聲ふるはして泣き詫ぶれども聞き入れず「言譯は御國へ參つて申し上げよ。」と、金太夫瓶八を近

くまねき、「その方へ御褒美は、追而是れより下しおかるゝ、此の者はおいてかへれ。」といひわたし、最早夜も更けたれば、今一獻めしあがられ、御旅宿へ御歸りあるべし、それまではお座敷に、見ぐるしき繩つき、庭さきへなりとも、引出しおくべし。」と、差圖にしたがひ、侍中、鷹右衛門を引立て、庭前の柱にしかとくゝりつけ置きて、ざしきへ入りぬ。鷹右衛門は心がらとて、およばぬことを猿猴が、月夜に釜をぬかれし心地。せつない時の神だのみも、あはす兩手をくゝられたれば、詮方投首して、男泣きにすゝりあげ、「さるにてもかかる憂目にあふ事を、皆しりたらんに、詫びてもくれず、おもしろさうに聲山たてての大騒ぎ、うらめしや腹ひもじや、酒一つ呑みたや。」と、あせれど叶はぬ野郎の雪姫、畫心なければ鼠も書かれず、いかにやせんと思ふ處に、甚次郎兵衛悠々としてきたり「ナント鷹右衛門おもひしつたか、われらを坊主にせし發黨人は、こなたといふこと聞きたるゆゑ、その意趣がへし、旦那へふきこみ、天滿の瓶八をかねてより抱き込み、西口の女師匠を、御大身の後室さまに、こしらへての俄狂言、滿足なそちのからだへ、燒金をあてただけが、此の間のはらいせ、最早料簡してやるほどに、來て酒飲め。」と、いましめの繩緒ほどけば、鷹右衛門は呆れはて、扨はさうかと元の座敷へ飛び込んで見れば、かの後家も侍も、打混じての大騒ぎ、コリヤ甘味うかかれたと、ぢだんだ踏んでくやしがれば、皆々どつと打笑ひ、これをはねにそれ〳〵の、骨は盜まぬ大盡摑き、

小判の木の葉座敷中へ落ちれば、これはお客にさしあひな、帚がほしやと銘々懐へかきこみ〱、一倍元氣を得てる末社どものよろこび、いつを限りともはかりなき、居續けの酒びたしに、陽太郎後には疲れはて、他愛はなくて夢にくれ、現にあかして七日七夜幕なしの大奢り、口にもほゝばりて、いはれぬほどの金高、拂ひの段になりて、百兩あまりの不足、これは追つてと末社ども請合へども、ていしゆなか〱合點せず、少金ならばいかやうともいたすべきが、一包餘りの不足、只今おもらひ申さねば、甚だもつて迷惑との言分。此のもさくさのうち、有像無像の神ども、陽太郎のふところ、樽底となりたるに愛想をつかして、懇に置去りとし、こそ〱と立消えせし、あとに殘るは甚次郎兵衛、鷹右衛門、猪之八、三人よれば文殊の智慧も金もなく、此の仕舞のつけやうはと、小首も三ツ傾け、六本の手を組みて思案すれど、出ぬといふつはものには、精も興も盡きはてて、酒も咽喉へは通らねど、つまり肴には、若紫を百兩あまりのかたに、二度の勤めかと相談極まり、茨木屋方へ遣はし、猪之八は京へとて出でゆき、鷹右衛門は此の曲輪のよし原に、從弟ありとて、こゝに暫く居候のつもり、甚次郎兵衛は著替など賣り拂ひて、春日野もろとも、白髪町邊に裏借家かりて、鍋ひとつの宿ばひり、さすがに金銀を山にたとへ、海にくらべて減ることを知らざりし、陽太郎の淫酒歡樂、たちまち消えて、手と身とになり、甚次郎兵衛かたのくひつぶし、はじめてさめたる目はぱつちり、

ア、よい夢を見た事ぢやと、まだへらず口いうてくらしぬ。

第十四章

秋風のこゝろうごきぬ縄すだれ　嵐雪

呂洞賓が邯鄲の枕の中に、いかなる仕掛しおきてやら、五十年の榮華を見せしも、高が夢中、たとひ百味の飲食も、目で見たばかりは身にならず、酒屋の門に三年三月、立ちあかしたりとも、呑まぬ酒には醉はざる道理。それにはかはりて現在これまで、無量の榮華歡樂をせし事、一生の徳なれと、陽太郎の負惜しみ、されども今思ひめぐらすに、せめて、つかひ捨てし金の十分一除けておかば、此のくるしみは有るまじと、死んだ子の年かぞへるも、零落れたる身の習ひとて、體ひとつの置きどころ、白髪町の片ほとり、正面むきては這入りがたき路次のおく、大溝の狸と、となり同士の甚次郎兵衞、頭の丸きをさいはひと、按摩けんびき、はりほどのほそき世わたり、山水と變名すれば、春日野も春とばかりあらためて、やす茶屋の下ばたらき、稼ぐよりも貧乏の足はやく、稍ともすれば、棚下の擂木より、竈へかけて、蜘蛛の巣の綱渡り、米櫃には大黒のあくびして居るをも構はず、飯くはうの陽太郎、限りもしらぬ、のんべんぐらりの掛り人に、山水も持てあまし、脊中に腹はかへられぬ

と、これまで恩になりし事も、その當人へはさたなしに、おのが勝手に忘れてしまひ、秋風たてばおのづから、ひいやりとしたことあてこすり、出てゆけかしに扱へども、うつかりひよんな顔するばかり、頓著はふところへ、入るものかと、きまじめなり。されば戀は思案と貧乏の外とかや、女房お春はさすがにも、女心のやさしく、陽太郎が今の身を、いたはるにつけ、燃杭に火のうつりやすき人ごころ、山水は日毎療治に出あるき、夜の更けるまでもかへらざれば、雨降る夜の寂しき、風ふく日の恐ろしさに、破戸しめて、さしむかひの昔咄より、色氣をひきだし、ひもじい腹をかゝへながら、轉び寢の私言たびかさなり、阿漕の網の破れ蒲團、引きかぶりゐたる處を、山水見つけて大きに立腹し、鯵切庖丁をふりまはして、もつての外の騒動、鄰の下駄屋草履かたしに、あわてふためきかけ入りて、先づ女房を預りつれかへれば、よし原の鷹右衛門、誰にかくとや聞いて走り來りて、委細を聞くより、何事もわれらへ預けくれよと、山水を宥め、陽太郎を引取りかへりて、おのが居候のまたものとしてさし置き、翌日山水かたへしかけ、對面していふやう、「ともかくも兩人の不屆、言譯もなき事ながら、以前の因みもあれば、まんざらの筋なきことにもあらず、其方も是れまで高恩になりたる陽太郎殿のこと、幾重にも料簡し、穩便にすましくれよ。」と、ひたすらに、斷りいへども、山水かぶりをふりて、「成程以前恩義あるが故に、かかる困窮の中にてのたてやしなひ、陽太郎殿の阿房つかひ

に、すてられし百兩三百兩の金よりも、今われらが百文二百文の錢尊くして、世話になりたる帳面ここに消えて、取りやりなし。さすれば不屆を、用捨すべきいはれなければ、兩人の笠の臺、さらへおとして、腹いる分のこと」と、居丈高にいふに、それは人にこそよれ、近頃不料簡のいたりと、鷹右衞門さま〲に詞を盡し、詫ぶれどもいかな〱聞きいれず。漸く詞和ぎて金づくの相談になり、金子拾五兩をもつて、陽太郎の首代に償ふべしといふ。鷹右衞門聞きて「これはあまりなる過怠といふべし、今逆さまにして震つても、鼻血はしらず、甘き雫の垂らぬ事は、其の方も合點なるべし、少金の事ならば、われら引受けて、いかやうにも才覺し渡すべけれど、十五兩とは思ひもよらず。」と、やつつかへしつ、やつと十兩に手をうちて、鷹右衞門急ぎたち歸り、若紫にかけ合ひ、時借して、かの長崎にて調へたる衣裝、質物に入れ置きしを、請け戻して賣り拂ひ、金子五兩を賣り出して、其の餘は自身も少々才覺し、若紫も打歎きて、十兩の耳を揃へ、陽太郎が首代として、山水にわたし、是れにて内濟調ひければ、かの鄰家のものかたに、預りおきしお春をも、段々訴訟して、ふたゝび山水のかたへ引入れさせけるが、元來山水強慾ものにて、今貧窮の身分、猶さらよからぬものどもに附合ひ、掠めとりし十兩の金も、そゝのかされて、無益の酒肴につかひ果し、いよ〱朝夕の煙も、絶間がちなる處に、鷹右衞門、いつよりも顏色猛々しく、腕まくりしてはひり、山水が胸ぐらをとつて中

しけるは、「おのれ女房お春といひ合はせ、主人同然の陽太郎どのをたらし、不義をしかけさせて、金子拾兩を掠めとりし段、言語道斷の不屆、町内へことわり、夫婦相對づくのもくろみ、吟味するぞ。」と引立てかゝるを山水突き放して、「さういふ汝は狂氣せしか、いはれざる逆ねだり、此の方より料簡ならず、女房と點頭きあひて、陽太郎殿をそゝのかせしなどとは、跡方もなき譫言。」と、取りあへざる體に、鷹右衛門猶も聲をあらゝげ、「畢竟不義は兩人同罪にて、一命にかゝはる處男女の差別なし、陽太郎殿の首は、拾兩の金子をもつて繼ぎたるが、女房お春の首は何ものがつぎたるぞ、金子もとらず其の儘に料簡し、今此の家へ引入れをる上は、陽太郎殿とても、金子を出して濟ますべき樣なし、さるによつて、口先ばかりの挨拶にて納得し、先達て其の方へ渡せし金子は、此の方へ返辨すべし、異議を申さば、汝らが相對づくなる事、片落ちのはからひによりて、相違なければ、存じ寄りあり。」と、理の當然にぐつともいはれず、もとより夫婦密談して、工みし事にはあらざれども、この言譯にぎつちりつまり、金は殘らずつかひすて、償ふべき手段もなく、只管に先非を悔み、誤れども承知せず、とかく最初に受けとりし金子を、もどさねばならぬ仕儀に及び、詮方なくお春をふたゝび苦界の身となさんとするに、若紫よりは器量もおとり、殊更三十を越えたれば、漸く拾兩に相談きはまり、此の金子を鷹右衛門方へ償ひ、其の身はそこにも居りがたくやありけん、ひとつ竈に紙屑籠、ねずみ

の糞と下駄かたし、跡にのこして夜のうち、いづくへか逃げさりける。

第十五章

とゝはやす女は聲若しなつみ歌　嵐雪

民間の卑俗、衣食住に乏しからぬ、國恩を忘れずば、過奢格外をつゝしむべきに、衣類には天服を好み、食類には珍膳を儲けて、萬人儉約の當中に獨歩して、十日をさまさせ、十手に指さゝるゝ事、遠きおもんぱかりなき、放逸の行跡、竟には天の冥罪を蒙るべし。陽太郎は假初の遊興より、驕奢に長じて、金錢の冥利につき、痩法師の山水が脚をかじり、露命をつなぎ居たりしも、不良の事より、鷹右衛門が情に引きとられ、見ず知らずの方に宿六を敬ひ、山の神に追從して、旦には味噌こしをたづさへてはしり、夕には油さしを手に提げて、艱難辛苦といふ事をはじめてみにしむ夜すがらの寐覺には、この身になりても、若紫の事忘れがたく、とびたつばかりにおもへども、揚錢なければいかにとも詮方なく、轉寢の枕をはりて思ふやうは、誠や今若紫の親方、茨木屋の亭主は、かくれもなき稻荷信仰、手づから小豆めしを焚きて、毎朝神棚へ供ふるよし、これを手便として趣向ありと、宿に狐の皮あるを幸ひに、繻袢の下へ著込み、わざと尾のはしを出して見せかけ、千草色の木綿布子を上に

引張り、尻からげして夜に入り、曲輪におもむき、茨木屋の門にたゝずみたりしに、兼て見知りたる引舟が見つけて、「コレは陽太郎樣ではござりませぬか、此のお姿は。」と肝を潰し、親方にかくといへば、此の間より若紫がはなしに、よしある人の今は零落して、難澀の身と聞き居たる、陽太郎の事なれば、氣の毒にや思ひけん、まづこなたへと呼び入れていたはりければ、陽太郎しなしたりと狐の身ぶりをして、詞つきも尻聲のなきやうに申しけるは、「何とぞ赤の飯を綺麗にして振舞ひ給へ。」といふほどに、亭主は最前からの體相をつく〳〵と見て、よろづに氣をつけ、うしろのかたに尾のちらりと出たるを見るより、さてはまた人ならず、年頃信心する、稻荷明神の御使の狐ならんと、律儀におもひ入りて、陽太郎を奧座敷に伴ひ、小豆飯に油揚類、いろ〳〵の饗應。陽太郎頭にのり、「ハア、さすがは主如在なく、はや我が本體をさつしての馳走、滿足々々、此のかはりには明神へ申し上げて、金銀ふんだんに與ふべし。」とて、心よげに杯をかたぶけ、「とてもの馳走に素酒はのめぬ、美しい女どもをだして、福神の心を慰められよ。」といふ。亭主渴仰の首をたれ、家內の女郎ども二十人ばかり、相手となして取りもてば、「イヤ〳〵此の女郎どもは神の心に叶はず、若紫一人を出すべし、此の太夫に馴染みふかき陽太郎に乘りうつりてきたるも、明神おぼしめしありてのお差圖なり、用あらばこなたより呼ぶべし、若紫ばかり出して、皆々勝手へ立つべし。」といふ。ともかくも福神の御意次第と、

若紫を出し、亭主を始め、おの／＼座敷を立ちて入れば、若紫は肝のつぶれた顔して、「これは陽太郎さま、いかゞの事にや、さりとはのみこまぬお姿。」と、恐れて側へも寄りつかねば、聲をひそめていふやう、そなたに別れてより、片時も忘れ難く、何とぞしつかり逢うて、はなしたくは思へども、今の身分錢無の悲しさ詮方なく、そなたもしるとほり、蟲も踏み殺さぬ默坊のわれらなれど、修行はして見ようもの、斯ういふ趣向を思ひつき、狐の身振りをして亭主をたらし、けふ一日は揚代なしに、ゆつくりと遊ぶつもり、震ひ出したる智慧袋、きついものか。」とより添へば、若紫も打笑ひて、「ホンに智は萬代の寶とやら、金がなしとも此のやうに、あはるゝ趣向はあるものぢや。」と、亭主がはな毛をのばし、有り難がるを笑ひあうて居る所へ、亭主上下をいためつけて、新しき神の折敷に、小豆餅をのせて持つて出で、「御機嫌よくお遊び下されて、忝き仕合、かやうにあらたかなる御神使にあづかります瑞相か、當年の初午に稲荷さまへ參詣して、散錢三文上げましたが、戻りがけに錢三百文拾ひましたは、忽ち二百九十七文の德分、これみなあなたがたのおかげ、有りがたうござります。」と天窗を疊にすりつければ、若紫陽太郎の袖をひきて、「テモ美味人ぢや。」と、をかしがるを、しつ／＼と目まぜで知らせ、「なるほどそのやうに、三文のぜに三百文になるといふは、則ち明神のお守りなさるるしるしといふもの、いままた金三兩出して此の座敷に供へられよ、明日は忽ち三百兩にしてかへす

べし。」と、聞くより亭主しり追立てて悦び、「なにがさて、とてものことに十兩供へませう、千兩になされて下さりませ。」と、いひさまかけ入りて小判十兩を持出し、牀の間に鹽水うつて供へ置き、「隨分家内は清淨にきよめましたれば、後々これに御逗留下さるべし。」と唯一心に、有り難がりて勝手へはひれば、まづは有りがた山吹色、久しぶりの十兩と、定九郎もどきに右の小判をしたゝめ、下帶にくくりつくれば、若紫興をさまし、「ホンニさうしたお心ではなかつたに、世につれて横道なことをなさるは、ぜひもない事や。」と涙ぐめば、「なるほどそなたのいふとほり、貧乏すれば心まで、賤しうなつたと、思はるゝもはづかしながら、これは天より授かる金、もしも後日に詮議あらば、われらは知らぬ、それは狐が身どもにとりつき、各を誑せしことと、諸事きつねにおつかづけて仕廻へば濟むこと。」と、ありあふ枕引きよせ、久しぶりの思ひをかたり、牀近くに有る銚子をとりよせ、手づからつぎて、さしつさされつ水入らぬのたのしみ、我知らずとろ〱と、添寝の夢を結びしが、何やらんえならぬ匂ひ鼻に入りて、ふと目をひらきあたりを見れば、座敷はなくて草茫々たる野道に、石の枕して我ひとり伏してあり。これはと驚き起き直つて、さても合點のいかぬ事と、魂のうろつく中にも、十兩の金の事を思ひ出し、下帶にくゝり付けしを、そろりと解いて出し見れば、小判にはあらで椿の葉十枚ばかり。南無三寶、扨は我智慧をもつて、狐をお先に、茨木屋の亭主を、美味くやりしと

おもひしが、まんまと狐に先をとられ、かへつて、われらがつままれけるよと、きよろつく顔つき、あほう／＼と鳴き渡る、烏に明け行く東の方より鷹右衛門走り來りて、「さて／＼夜前ふと出で給ひしが、御歸りなきゆゑ、われら未明より所々尋ね歩きしに、此の難波の原へは、何ようありて來り給ふや。」といふ。陽太郎始めて難波の原といふ事を知りて、鷹右衛門に、夜前よりのあらましを語り、大笑ひして打連れ戻りたるが、倩思ふに世間萬事、此の狐が所爲にひとしく、此方に文殊の智ありとおもへば、さきにも荒神守り給ひて、ひとり牡丹餅に、たゝかるゝ事はなきよの中、思ふ處喰ひ違ふは、ひとへに積惡のなす處なりと、陽太郎前過を悔み、曩に藤の森稻荷の御告げに、若紫をさして、妖妄の野干なりとのたまひ、嫁入の性體までも見せ給ひし、神恩に悖りさかひ、放逸無道にして、金銀を瓦石の如く、無益に費せし報い、今の身に及びし事、あやまつた稻荷の神罰、お恐れありと天に誓ひ、地に約して惡念をひるがへし、直に上京し、しるべのかたにたよりて訴訟頼み、終に父の赦免をうけ、家居にかへりて家業怠慢なく、粉骨碎身して次第に富貴十倍し、行末ながく被譽の名を殘しけるとぞ。

通俗巫山夢卷之五（大尾）

誹語堀之内詣

誹語堀之内詣序

室に花咲く麹町の井土は、深き物の譬にして、釣瓶縄長へに、幾代ふりけん、棹竹の直なる、玉井が鋪の紅粉看板は、霞をつらぬき、介總燒の稱、春風と倶に芳しく、羣集をはかる升屋の繁昌は、かかる拍子の瓢箪屋に、蕎麥切のしたぢから、賣り弘まりし午黄圓の功能まで、高嘶きする駄賃馬ひきもきらず、堀之内詣の駕籠、宙を飛ぶ。はね題目の聲耳やかましとて、藥罐を被る。茶飲み友達若盛りおしなべて歩みを運ぶ、高祖大士の廣德著きかな。故にかの伊勢八が信あれば、予も德ありとや、案じつけたるひと趣向、書肆へ百度参りをし、大願成就とこじつけたれば、此の上高覽の利益あらん事を希ふものなり。

十返舎一九誌

誹語堀之內詣目次

上之卷

第一章　生醉本性違はず、手盛をくふ酒の題目

第二章　世界の親仁の店卸、算用のあはぬ佛せゝり

中之卷

第三章　女に孝行のしるし、掘り出した月夜に釜

第四章　戀に目のなき座頭、ひつかゝれた猿の吹替

第五章　馬の糞をさらふ鳶凧は、慾頰の千枚張り

下之卷

第六章　色に溺るゝ女郎買ひ、はまりこんだ借金の淵

第七章　出放題目の奇特、佛を賣りぐひの道心坊

誹語堀之内詣上之巻

東都　十返舎一九

第一章　生醉本性違はず、手盛をくふ酒の題目

玉川の鮎銀泥の色を現はし、成子の瓜金色の光を放つ。大覺世尊の正法輝く、法華弘通の時なるかな。今東武堀の内に垂跡ある、祖師日蓮大ぼさつは、此の宗門の本主として、道德自在、妙用不思議の靈驗ましますにより、末世の衆生利益を蒙り、唖俄に聲色をつかひ、聾はじめて雷に驚き、盲坊様、目をあきて兩親にむかひ、是れはお初にお目にかゝりますと、初對面の挨拶するも、その靈應の有り難さ、次第に流布して、四ッ谷街道の賑ひ、附燒團子のくしのはをひく、往來の馬の糞も、すひとらせ給へる、鮑の貝の、かた法華は猶更なり、他宗の者も、南無妙法蓮陀佛の聲混雜して、淀橋の水車に等しく、行きては戻る、百度參りの差當りて、金儲けの親玉とは、此の祖師のことなりける。こゝに神田の八丁堀に、彌次郎兵衞とは、一つ長家の佐次兵衞といふもの、此の宗門の信者なれ

ば、一日の麗かなるに立ち出でて、麹町通りを眞直に、四ツ谷御門を出で、まづ此の處の茶見世によりて休らひけるに、年の頃三十ばかりの、職人らしき男、さんとめの羽織、ぬの子をきて、長房の數珠を、首にまとひかけ、二十ばかりの弟子らしき男に、すこしの風呂敷包を持たせて、話しながら來り、同じく此の茶やへはひる。ちや屋のばゝ「どなたもお早うござります。」ト茶をくんで出す。かの男名は權七、「ばあさん今日は好い天氣だの。アツ、、、、べらぼうにあつい茶だ。こんなに沸さずといい事を、薪費な。コウ水があるならうめてくんねえ。そしてその燒きたての團子を、二三本呉んな、虎手前もくふか。」とら七「一本やらかしやせう。」權「茶でやけどさせたかはり、團子がぬるいで、入れ合はせるな。」とら「ホンニあそこが煙つてゐるから、燒きたてかとおもつたら、コリヤばあさん、昨日やいておいたのだな。」ばゝ「ナニおまへさん、昨日やいたものを上げるものかえ。」とら「そんならいつ燒いたのだえ。」ばゝ「それは一昨日か再昨日やいたものでござりますア。」權「なんの事だ、だうりで食へねえ、犬にでもやらうか。」ト云ふ内犬が二疋尾をふつてくると、「コリヤ〳〵手前にやるべい、わんといへ〳〵。」犬「わん〳〵。」とら「ソレやるぞ、エ、無器用な畜生めだ。あとのやつは女犬だな、ソレわれにやるぞ。」ト投げてやると、女犬がくらはうとするを、男犬走りかゝつて女犬をかむと、女犬「キヤアン〳〵。」とら「エ、やかましいやつらだ。」ト犬をおもふさまけちらかす。犬ふりかへつて、くひつきにかゝれば、はつととびのく拍子に、そばのせうぎに、腰をかけてゐたりしおさぶらひのあしをふむと、侍「アイタ、、、お身コリヤ何せる。」ト此のお侍酒きげんと見えて、顏はゆでだこのごとくなるに、くわつと目をむき出してとら七をにらめる。此の男むから見ずとみえて、とら「何をするとは俺がどうしやした。」侍「何うしたと云ふこんがあらずかい。」

おのれ侍の足をなぜふんだい。」 とら「エ、ふんだら堪忍しなせえ、それほどでえじの足なら、おつぺしよつて、仕舞つて置きなさればいいに。」 侍「イヤこいつ過言吐すな、町人に足をふまれて、身どもも其の分ですますことはならないぞ。」ト眞黒になつてはらをたて、むづかしくひねくり、どうやらぬきもしさうな、顔色なれば、 権「御もつともでござりやす、畢竟あなたが此の男に、あしを踏まれたと、おもひなさるから、お腹が立ちやせうが、ナニ踏んだのぢやァござりやせん、此の男の足の下へ、貴下のお足が、もぐりこんだのでござりやす。」 侍「いかさま。お身がさういへばそこもある。身共帯刀もせる身分だ。町家のものに、足を踏まれてはすまない。コリヤ成程、身どものがむぐりこんだのであらう。」 権「さやう／＼、先づあなたの御機嫌がなほつて有り難え。ハ、、、、。時に虎七もう出かけようか。」 とら「面白くもねえ、まんなほしにどこぞそこらで、一ぺいやらかしやせう。」 侍「コリヤお身たち酒がなるか。」 権「飯よりすきでござりやす。」 侍「それは幸ひのこんだ、身どもこゝに吸筒をもつてをる、中直り致さうか。身どもいたつて好物だが、酒といふものは、相手がなくてはがいにのめない、ナントこゝで一つ呑んではどうだい。」 権「ソリヤようござりやせう。ちつとはやうござりやすけれど、折角さういひなさるものを、そのかはり、肴はわつちが、フット奇妙だ、むかうになにかあるさうだ。」ト すぐにかけ出して、向うの居酒やへ行き、まぐろのさしみをひときらもつて来る 侍「コリヤよからうか／＼、併しばんばあどの、見せをふさげてもよからうか。」はゝ「ナニサようご

ざります、お燗をしてあげませうか。」侍「イヤそれにはおよばぬ、サア杯もこゝにある。」ト たもとより、紙に包みし、小杯を出しかけると、権「そんならお初めなせえ。」侍「イヤ／＼きさまから、ひらに／＼。」ト むりに杯をつき付ける故、権七とつておしいたゞき、「さやうならわつちから。」侍「おしやく致さう。」ト 繼ぎのあたりし汚れたふろしきより、すひづゝを出して権七へついでやる。権「オトト、、、ありやす／＼。コリヤ不思議の御縁で、あなたの御酒をいたゞきやす。」ト 一口のみて、侍「ヤアヤア、コリヤなんでござりやす。」侍「なんでとはどうだい。」権「酒ぢやアござりやせん。」侍「なに酒でなくて。」権「それでも酒ぢやアござりやせん。コウ虎七、手めへ一口のんで見や。」とら「ドレ／＼、エ、水だ／＼、ペツ／＼／＼。」侍「なんだ水とは解せない。」ト 杯をとり、ついでひと口のみ、「ホンニ水だい／＼、ハハアよめたことがある。身どもがいに酒がすきで、鳥目をもつて出をると、有りたけのんで仕舞はずには、おかない性分だによつて、今朝妻が申すには、おまへはいつでも他行なさると、戻ることをわすれて、錢の有りきり飲んでしまつてござるから、けふは出がけに内でのんで、道ではけつして、飲まぬがよいといふによつて、しからばとて、何が宿元でのんだ程に、かやうに生酔となつて、サア是れから堀の内だといふと、妻がとめる。イヤ／＼いかねばならないと、無理やたいに出かけようとする。そこで妻めが、そんなら錢をもつてござりますな、賽錢ばかりでいけといふ。インニヤそれではならないと、じや／＼ばると、せず事がないかして、そんなら此の吸筒へ、酒を入れてあげるから、

堀の內へゆくまでにまゐらないで、戻りしなに、これをのんで歸れと、入れてよこしたが、此のうへ酒を呑んだら埒があるまいと、わざと水をつめて、よこしをつたもんと見える、ハ、、、、。」權「イヤ笑ひ事ぢやァござりやせん。折角呑まうと思つて、肴までとりよせたものを、コリヤ痳病になりさうだ。」とら「ソレ見なせえ、いい加減にすればいいに、あのお侍樣に懸つて、詰らねえめにあつた、人をつけにした。」侍「イヤもう一言も內藤新宿。」權「ホンニ馬糞の樣なめにあつた、仕方がねえ、此のさし身を桑うけにもなるめえし、コウ虎や、向うへいつて、二三合とつてきやな。」ト錢一本はうり出してやると、とらもかけ出して、德利をさげてもどり、とら「エ、咽がぐび／＼する、氣いらずに、手めへの酒をやらかしねえ。」權「ついでくりや、オツトよし／＼、ア、ほんたうの酒は、また格別なものだわえ。」侍「チトおあひがいたしたいな。」とら「蟲のいいこと。」侍「それだとつて、これがこたへられずものか。」權「思ひが恐ろしい、一つあげやせうか。」侍「ハ、、、、これは近頃かたじけない。オツト／＼うまい／＼、是れがほんの酒田のからくりてんから／＼。」とら「エ、人の酒でしやれらァ、あつかましい。」侍「何といはれてもよい、とてもの事に重ねませずか。」權「ア、コレ／＼とんだ事をいひなさる。」トむりにひつたくり、ありたけ呑んでしまひ、權「ア、いい心持になつた。」侍「身共今少したらない。」とら「たらざァ勝手に呑みなせえ、人の酒を呑んで、禮もいはずに、足らねえたァ氣のつええ。」侍「イヤ禮はいはない、なぜいはないなれば、貴樣達の

酒を、身共のんだではない、アリヤ身共の口へ、その德利の酒が、むぐりこんだのであらず。ワハ、ハ、、ハ、ワハ、ハ、、、。權「エ、おもしろくもねえ、サア虎七出かけよう。」ト此の二人は出て行く。おさぶらひはそこに倒れて、たわいなき樣子。左治兵衞此の面白さに思はずも、長休みして、「アイおせわになりました。」ト茶代を拂ひ、それより左治兵衞は、とほりすぢをたどり行きける。

第二章　世界の親父の店卸、算用のあはぬ佛せゝり

かくて四ッ谷の町をたどり行けば、こゝに年のころ、六十以上の婆樣達、左治兵衞の行くさきにたちて、話しながら行くを聞けば、あから顔のでつくりとしたばゝ、名はおめう、「ヤレ〳〵お祖師さまのお蔭で、けふ一日は極樂だのうおくまさん。」おくまばゝ「さやうとも、おかげで氣が延び〳〵としやした。ホンニ私なぞは、内にゐると、もう〳〵若蠅えといつちやアござりやせん。御存しのとほり、アノ血の道どのは、年中頭が重いの、尻がいたいのといつて、百で買つた馬を見る樣に、ごろり〳〵と寢てばつかり。それに聞きなせえ、今月が產月だといふに、襦袢が一枚拵へてござりやせんわな。夫れでわたしが、あつちこつちして、しめしもたんとあるがいいと、支度して置きやすやら、此の間も鄰裏の、大屋さんのおかみさんが、澀紙をもつて來て下さつたから、すぐに向うの米屋で、菰を一枚もらひやして、ちやんとその澀紙をとぢつけてやつて、さあといつたら斯うするものだと、あれも年の行かねえものだから、私が嚙んで含めるやうに、をしへてやつて置きやし

たが、さうするときのふの晩がた、うらの赤犬めが子を産むとつて、酔狂らしい、となりの爺つてうどのが、明地へ小屋をかけて、やるの何んのと、さわぎまはると、私が處の血の道どのが聞きなせえな、可愛想にあの赤めは、何もまだ支度をしちやァ置くめえ、幸ひわたしのが有りやすと、折角こしらへてやつたその菰を、ちやんと犬にしかして、産ましやしたわな、馬鹿々々しい。」おかう「オホ、、ホ、、わたしはまた、嫁の世話はござりやせんが、そのかはり、親父殿の戯氣には、困りはてやす、聞いてくんなせえ、あの年になつて後生は願はず、お題目がきらひで、明けても暮れても殺生ずき、毎晩鯊を、釣つて來て、けふは二百とつたの、イヤ三百あつたのと、ひち／＼はね廻る奴を、すぐに附燒にして、美味さうにくふその頰のにくさ、わしも根性がきたねえから、有樣はくひたけれど、歯は一本もなし、ホンニ業腹でなりやせん。それだからもう、殺生をやめて、死んだ子供の爲に、お題目でも唱へて、折々はお祖師さまへも、お禮參りしなせえと、意見しても、耳に釘、どうぞ此の間に大屋さまや、お向うの勘太郎さま、お長屋の衆をたのんで、親父に意見して貰ひやせうと、思ひやすからお賴み申しやす。」ト云ふと大屋のばあさま「ソリヤもうお前のところの太郎兵衛さんの殺生は、世間の人のすること、お慰みともいひやせうが、わしが處の生酔どのには困り果てやす。何處の國にか、もう七十でござりやすが、それで町内の息子どのたちを、唆して吉原がよひさ。ホンニあんまりだから小

言をいふと、此の年になつてゐるわたしに、出て行けと云ひやすわな。ソリヤもうお前のまへだが五十年もあとのことなら、わしも此んなおけんつうではあるめえし、其の時分には色も白かつたから相應な口もありやせうが、四五年後の病ひで、こんなに口が曲るし、頰べたへ痰瘤が三ツまで出來てあるものを、今どこへ行かれるもので、ほんに〳〵、腹が立つと云つちやァございやせん。」ト話のうちからくちをもぢ〳〵して、今一人のばゝ、おやん「ホンニどこの親父たちも、古血が狂ふにやァ過りやす、わつちが處の又、箆棒爺を聞いてくんなせえ、棺桶へ片足蹈ん込んで居ながら、此の間も關又さんとやらの處に、茶番があるとつて、ソレお前方も知つてゐなさる、わつちが處へ來る、眼玉の大きな膏藥やの岩吉といふ人よ、あれと二人で、聟や娘の手めへも構はず、二階へあがつて、踊るやらはねるやら、梅川忠兵衛の道行をするとつて、何時の間にやら、お鍋が祝ひの時拵へてやつた、緋緞子の帶をしめて、女形になるとさ、ホンニ本氣の沙汰ぢやァございやせん。大屋さんのお婆さまも爰にゐなさるが、まだ先跡月から店賃もあげねえで、其處どころぢやァございやせんわな。それでも若え時からあゝいふちやらほこ者で、人樣には正直さうに見えやすが、あれでもてえ〳〵根性骨の太い人といつちやァございやせん。それから見ちやア、お妙さんの處の太郎兵衛さんは、結構でございやす。のうとんちき屋のおばあさん。」ト云ふと、こんちきやの婆「さやう〳〵太郎兵衛は、お年寄つて、後生の事も構はず、殺生なさるを、わ

たしは又、お羨ましく思つてをります。なぜと云ふに、わたしが處の親父どのは、あんまり後生を願ひすごして、身上の障りになります。ほんに歴々の和尚様がたの樣に、朝も晩も、お勤めの長たらしさ、商賣は棚へあげて、偶々見世に出てゐられる時、買人が來て、是れは何程だといふと八兵衞が、ハイそれは、八匁五分でござりますと、いふを聞いて、親父のひやうたくれ殿が、コリヤ八兵衞、あれは元直が五匁についてゐるに、三匁五分の僞りを吐すは勿體ない、五戒とやら蜆貝とやらの内にも詭をつくことを佛さまが、一ばんがけに誡め給ふ。それだから假にも詭をつくな。モシ唯今倅が、八匁五分と申したは僞り、誠の處は、五匁五分でござりますと、どうも商業に咎を付けて僞りませぬから、わしがいふには、コレお前は、詰らねえ人だよ、商人が利分をとらねえで、今日が立ちますか。いらざる商賣の、邪魔をさしやるといふと、腹をたてて、ア、凡夫かはいや、利慾のために、僞りかざるは無間の業人、學文とやらはしねえでも、心さへ誠なれば、佛さまになる事は疑ひない。とかく後世の一大事が肝心、商ひはするとも詭をつくな、一文でも利をとるなと、途方もない事ばつかり。折角息子が儲けためた錢金を、つかみ出しては佛の事に、蒔き散らしてしまひますから、此の間も親類衆がよつて、親父を座敷牢へでも入れて、此の後寺參りをさせぬ樣にしたがよいと云はれますが、わたしがゐて爾うも僞りますまいから、今日はお祖師様へ、おやぢの後生願ひがやみますやうにと、

願がけにまゐるのでござります。それから見ちやア、太郎兵衛さまの殺生ずきが、結句ましでござります。」ト此の話の内、はやくも大木戸へ來る。左治兵衛あとよりゐさいに聞きて、のばあさまたち、おやぢのわんざんことは珍らしい。左治「なるほど世界はさま〴〵、嫁のことを悪くいふが當前うにしやれて行く。さらば是れからまた、あの手合の話を聞きませう。」ト此のばゝあ連れをかけぬけて走りゆく。ときに向うへ、何か聞いたふうの手合が面白さ

誹語堀之內詣上之卷　終

誹語堀之内詣中之巻

東都　十返舍一九

第三章　女に孝行のしるし、掘り出した月夜に釜

大木戸の邊より、一杯機嫌に洒落てゆく二人づれ、一人は羽織著物ともに、薄茶がへしのおなじ小紋、ぱつち尻はしよりにして、名はりつ石、今一人は黒紬の小袖に、小倉織の羽織、白繻子に菊の花の縫をしたる帶、祭に拵へたると見え、何れも板じめの襦袢、袖口から出しかけ、互に己惚の話を、人の聞くにも構はず、夢中になつて饒舌りながらゆく。二三間も先へ、十六七の娘と三十ばかりの年増、何れも半襟の掛りし派手な縞の著物にて、衣裳付きに錢めは見えねども、なり形しやんとして、氣のきいた風俗、意氣な手拭を冠りて行くを、跡の二人その尻つきを見ながら小聲にて、りつ石「花友見さつし、やぼからぬ後、いきだのう。」友「きうさ、女中の歩くを跡から見ながらゆくは、まんざらでねえものだ。モシ／＼お前がたア、そんなに急がずと、もちつと靜かに歩いてくんなせえ。」ト聲をかけられ

て、此の女ども何者にや、ちつともおくせず、平氣にて振返り、莞爾と笑ひながら、としま「オヤお前さんがたァいやだよ、殿達の先へ立つて歩くのは氣がつまつてわりい、わつちらァお後からめえりやせう。」りつ「ナニサかまふこたァねえ、先へ立つていつて呉んなせえ、併しこんなことをいつて、叱られはしめえか、おめへがたァ男の連れは何うしなさつた、たゞしは只二人づれか。」としま「ひとり男づれがござりやしたが、どうしてか、道ではぐれやした。」女「そいつは奇妙だね。是れからわつちらと、一所におのりはどうだね。」りつ「その事〳〵。時にあねさまは、どうか見た樣だ。」しんぞう「オホ、、、、見なさつた事もありやせう、わつちらがやうな不景氣なものは、何程もありやすから。」りつ「ナニとんだことを、お前なぞのやうに美しい顔が滅多にあるものか、今日はお祖師さまのお引き合はせで、こんな嬉しいこたァねえぞ。」女「嬉しかァお前なんぞおごりなせえ。」りつ「おごるとも〳〵。」女「そこらで一杯やりかけやせう。」ト此のしんじゆくのとりつきへ來り、ある茶やを見つけて、りつ「サア〳〵此處にしよう。」女「お前方もはひりなせえ。」としま「イエわつちらァお先へめえりやせう。」女「ハテいいわな、何もかもわつちが、呑み込んだ、ひらに這入りなせえ、サア〳〵奥へ奥へ。」ト酒きげんにて、嫌がるものを無理やりに、おしこむ樣に引きつれて奥へ通ると、左治兵衛もあとより、此の茶やへはひり、わきへこしをかけて、休みながら見てゐれば、茶やの女「どなた樣もようお出でなさいました。」りつ「おめへのとこへわるく來てたまるものか、時に何がありやす。」女「おまんまでござりますか、御酒にいたしませうか。」りつ「イヤ飯ものむ酒もくひやすが、マァちよ

つびりとしたもので、一はいやらかしの材木屋にしやせう。」女「かしこまりました。」ト程なくつまみものにてうしさかづきを出す。女「サァりつこう、おめへから初めなせえなのよしひでとしな。」りつ「こいつはきついわ、そんならいたゞきのわたせる橋にか、是れはお酌僄りだな、オツトありまの大根、すぐに是れをのみてうなごんすみかねとして、お前にあげ田の辨天さま。」女「ところをおさへこの寒ざらし。」りつ「こいつはひどいぞハ、、、、。」しんぞう「オホ、、、、なんだか、お前さんがたの云ひなさる事ァ、わつちらにやァさつぱりわかりやせん。」女「ハテわかる所ぢやァわかりやせうから、マア此の杯はおめへに上げよう。」しんぞう「私は一向にたべやせぬ。」女「そこを無理についで、わつちがすけて上げようといふが山だ、一口のんでよこしなせえ。」しんぞう「ソリヤあんまり僄りさま。」女「ナニサ／＼オツト／＼それでよし、此奴はありがてえ。」ト娘のつけさしを飲んで嬉しがる。此うちいろ／＼さかなも出で、段々杯のかずもかさなり、やがて中ひらつきのめしを持つて來てすゝめる。りつ「サアサァお前がたア、構はずとやりかけなせえ。」しんぞう「それでも道づれのおかたに、こんなに御馳走になつちやァ、お氣の毒だねえおみさん。」としま「さうさねえ。」女「袖ふりあふも他生の緣だ、まだこんなこつちやァねえ、歸りにはどんと御馳走をしやせう。その代り、けふ一日お前がたァ放しやァしねえぜ。」としま「オホ、、、、わつちらも、とんだ面白いお方と一所になつて、お馴染の樣だも鐵面皮しいねえ。」トこいつも只の女ではなく、おつにあはせて飯をくつてしまひ、しんぞう「もう遲くなりやす、おいでなさいやせんか。」りつ「ナニ

サまだ九ツにやアなるめえ、マアいいわな。」としま「そんなら私らァお百度を致しやすから、そろ〳〵お先へ參つて、あつちらでお待ち申しやせう。」友「エ、欺しぢやァねえかえ。」としま「本當にきつと待つてをります。」ト とめてもとまらず出かけようとする りつ「そんなら今におつつきやせうから、出かけなせえ。」ト 二人の女を先へやつてしまひ、 りつ「ナントふたりながら、まんざらの素人ぢやァねえ、泥水にかぶれたものに違ひはねえが、何にしろ、おいらア年増のはうがいい。」友「そんなら貴公はとしま、新造はおれがのだ。」りつ「ナニおれがのだ、おちよぼのてんぐるまぢやァあるめえしハ、、、、。」ト 夢中になつてうれしがる。そのうしろのかたに、ゆふきぞろひにて、氣のきいたふりの男一人やにさがりにて、たばこをのみゐたるが、二人へことばをかけて、「モシお前方ア何方でござりやす。」りつ「わつちらァ本所さ。」男「わたしは藥研堀邊だが、モシ今の女共をおめへがたァ、御存じかね。」りつ「道づれになりやして、何うか見たやうな顏だとおもつてゐやすが、所は知りやせぬ。」男「見た筈さ、私等の方へも來ますから、お前方の方へもまゐりやせう。アリヤァ、女太夫で滅相にいい聲さ。」りつ「エ、女太夫かえ、なんのこつた、置きやァがれ。」友「道理こそ飛んだ目に逢はしやァがつた、忌えましい。」りつ「時に爰の勘定はどうする。」友「何うするといつて、主があの女どもへ、おごらうといつたぢやァねえか。」りつ「ナニ乃公ばかりでおごるものか。」友「それだとつて、是れ位は、主が出してもいい。」をとゝひ主と吉原へいつた時、田町でのんだ酒の錢は、みんなおいらが出しておいたわな。」りつ「そのかはり、ソレ天王

橋で、貴公が草履の鼻緒がきれたとつて、そのたてちん八文、乃公がとりかへておいた。」左「イヤ主も汚えことをいふもんだ、ソリヤア茅町で主がくつた、團子の錢を、おれが拂つておいたから、五分五分だ。」りつ「ナニその時おらァ大福餅はくつたが、團子を食つた覺えはねえ、譃をつくぜ。」左「エエ譃なもんか、しかもその團子に、けし炭がくつ付いてゐて、ぬしやァ脣を眞黒にしたぢやァねえか、つまらねえことをいふもんだ。」ト此のやつつかへしつがいくらにもひず、せん方なしにこゝのいりめを、りつ石ひとりにて勘定し、なにかぶつ／＼こごとをいひながら出てゆくと、左次兵衛もをかしさをかくして、そのあとについて出る。

第四章　戀に眼のなき座頭、ひつかゝれた猿の吹替

世界佛法腹念佛とて、兎角くはねば後生心も出ず、いかに祖師日蓮聖人の有り難きとて、饑じき腹から高聲に、題目も出でざればと、往來に即席料理の鋪建ち續き、菜飯、田樂の葭簀張り所せく、なんでも八文の沫雪あれば、平付き十二文の茶漬あり、かかる繁花と鳴子の町に差懸る。左次兵衛か先だちてゆく座頭の坊、連れの女は女房とも見えず、棧留の布子著たるは、いかさまにも飯炊女に手をつけたるにて、おしはれて妾といふ器量でなく、其の癖大年増にて、横にふくれた女に手を引かれ行く。其の跡よりきのきいた若い男、此の座頭の連れかと見れば、物言ふ體もなく、折々彼の女が振返

りては、可笑しな目つき顔付をすると、彼の男色々の手品をして、互に頷き合うて行くを、左次兵衛見て、扨こそ此の女の隠し男、目の見えぬ相手を侮り、今日堀の内へ参る事を、内々に示し合はせ、道々の樂しみ、座頭は一向知らぬが佛、さるにても心憎き奴共かなと、其の跡に付いて彼の女は、そこゝと人の居ぬ、茶屋を見歩く様子にて、こゝに猿遊席といふ茶店、猿とくまとを庭に繋ぎてあり。此の茶やにはたれも相客なきをみてかの女、女「モシへちつと休んで行きませう。」ざとう「オ、それも宜からう。」女「こゝにしませう。」ト此の茶店のぐつと奥座敷へ、腰をかけると、かの男も同じくこゝにはひりて、牀几をへだてゝこしをかける。左次兵衛なにも慰み、此の手合の様子を見んと、これはわざと見せさきの牀几に、腰をかける。茶やのをんな「ようお參詣なされました、山茶一つあげませう。」トそれ／＼へ茶を運ぶ。ざとう「おれは茶よりも酒が一つ呑みたい。おなあ、その吸筒を出さぬか。」女「アイ／＼、サア呑みなさい。」トはこねのひきものの吸筒を、ふろしき包から出して、杯をあてがふと、ざとう「オツトあるぞ／＼。」ト此の内かの若い男は、袂からいはおこしを出して、猿にあてがひ、樂しんでゐたるが、やがて茶椀をさし出し、女に酒をくれろといふ手付きをすると、女うなづきて吸筒をそつともち來り、かの男についでやると、ざとう「コリヤおなあ、さすぞ。」女「アイ／＼。」ざとう「そなた今どこへいつた。」女「何處へもいきはしませぬ。」ざとう「イヤ／＼夫れでも此處にはゐるなんだ、サア一つのめ。」女「そんならちつとばかり、ソレつぎますぞ。」ト吸筒を男へ見せるは、もう一つついでやらうといふ心いき、男がつてん／＼をして、茶椀をもつて來ると、すぐにいつぱいついでやれば、男そのまゝひといきに、くつ／＼とのんでしまひ、もう一つと茶椀を出して又つがせる。ざとう「コレ／＼和女は日頃酒の匂ひを、嗅ぐのもいやだといひながら、今日はよくのむの。」女「ナアニそんなに飲みはしませぬ。」ざとう「それでも今、どつく／＼とのむ音がした。」

女「あれは茶をのみました。」ざとう「そんならちやけだな。ハヽヽヽ。ドレ〳〵おれにもう一つつげ。」女「ヤア吸筒が見えぬ。コレ〳〵其方へもつていつては悪いに。」ざとう「ナニ誰が持つていつた。」女「エ、わるさをする、爰の内には猿がゐますから、その猿めが吸筒を、彼方へもつていきました。」ざとう「ハヽヽヽ、猿といふ奴は、利巧な者だげな。彼奴に酒をのませると、面白いといふ事だ、おもいれ呑ましてやれ。」女「ソレ猿に酒をのませろと。」男「キヤツ〳〵。」ざとう「のむか〳〵。」女「のみますとも。」ざとう「それはをかしい、ドレ〳〵どこにゐる。」女「イヤそばへよりなさんな、ひつかきます。」ト此の内男もむしやうに酒をついでのみ、そろ〳〵酔ひがまはりて、猿の身ぶりをしながら、ざとうの手をちよいとひつかく。ざとう「アイタ、、、イヤ大きな猿だな、ひつかいたあんばいが、人間の様な手だ、ア、いたい〳〵。」女「もうあつちへ逃げました。」ざとう「おれはちひさい時から目がつぶれて、猿といふ者を見た事がない、猿はどんななりだ。」女「猿のなりかえ、茶縞の布子をきて、紺の股引をはいてゐます。」ざとう「ナニ猿が布子をきて、股引をはいてゐる、ハテとんだものだな。」ト此の内男はむしやうに女の手をひつぱり、こつちへこいといふ故、女目まぜにとめても、男は酒に酔ひてゐる故、一向かまはず、むりにあちらのしやうぎへ引きずつてゆき、何かこそ〳〵と話してゐるうち、ざとう「コリヤ〳〵おなあ〳〵、どこへいつた。」女「アイ〳〵今ちよつと。」ざとう「イヤどうも合點がいかぬ、もう何處へもいつてくれるな、こゝへこい〳〵。」ト三尺手拭の代りに、しめてゐたりし紐をとつて、女の帯へ括りつけ、その紐の端をわが帯へしつかりと括りつけておくと、女「コリヤ何をしなさる。」ざとう「かうして置けば何處へもいく氣遣ひがないから。」ト此の内男又無上に

招く。女帯へ指さして、これだからいかれぬといふ事をしらせても、男構はずずつと來て、女の手をとり、むりむたいにひつぱる。ざとう「コリヤ〳〵又何處へいく。」女「猿めが生酔になつて、どうもなりませぬ。」ざとう「ナニ猿めが憎い奴だ。」トそばにある杖をとつて、くらはさうとする。男は女の手をとらまへてゐるなりに、はつととびのく拍子に、女の帯へくゝりつけてある、紐がほどけてざとう尻もちをどつさり。ざとう「あいた〳〵、コリヤ紐がとけたわ。おなあ〳〵、どこだ〳〵。」ト紐をたぐる。此の内男此のざしき先に繋ぎてある、猿の細引をとつて、ざとうのもつてゐる紐にくくり合はせて、女をばむりに手をとりひきずり、裏の切戸口を開けてつれてゆく。後にはざとう一人、殘りて、ざとう「どこへ〳〵、もう何處へもやらぬぞ〳〵。」トいちもくさんにひもをぐつと引けば、猿きやつといひてざとうにかきつく。ざとう「アイタ、、、ヤア〳〵コリヤ、おなあにくゝりつけておいた紐が、どうして猿めに。」さる「キヤツ〳〵。」ざとう「ハテ面妖な、コレ〳〵こゝの御亭主でも、かみさまでも、ちよつと來てくんなさい、はやうはやう。」亭主「なにごとでござります。」ざとう「イヤわしがつれの女は、そこらには居ませぬか。」亭主「イイエ見えなされませぬ、大方お手水でござりませう。」ざとう「どうも合點がいかぬ、先刻からをかしな事だと思つてゐたが、コリヤアどいつやら、あの女と此の猿と、繋ぎかへて連れていつたものだらう。女の出るまでは、此の猿は、人質同然でござるぞ。」亭主「イヤそれは、私ところの猿でござります。」ざとう「イヤ〳〵貴樣の所の猿なら、茶縞の布子に、紺の股引をはいてゐるはずだが、此の猿は一寸さはつたところが、まる裸でゐる。」亭主「ナニ途方もない、猿がそんななりをしてをりませうか。」ざとう「なにしろあの女は、私が妾で女房も同じ事だから、此の分ではすまぬ。ハテこゝの内からなく

なつたを、貴様達も、知らないとばかり云はれまい。」亭主「デモ無理ばつかり、ナニ私所でしりませう。」ざとう「知らずば女の代りに、此の猿をつれていく。」亭主「さるが内儀様の代りになるなら、勝手にソレ連れてござれ。」ト亭主もやつきとなつて、ざとうに猿をはうりつけると、額も頭も、かきむしられて、大騒ぎをやる處へ、裏の切戸口から、かの女と男打連れて出で、女さあらぬ體にて、女「すヤさう〴〵しいなんだえ。」亭主「ソレお出でなさりました。」ざとう「エ、おなあ、どこへ行つた。」女「手水に行きました。」ざとう「それなら、それと云つていけばよいに、なぜ此の猿と繋ぎかへていつた。」女「イヤ私ではない。」ざとう「誰が繋ぎかへた。」女「アレ彼處にゐる猿めが。」ざとう「ヤアまだ猿がをるか。」女「猿も熊もゐます。」ざとう「ヤア〳〵こゝの内は何だ、猿だの熊だのと、麹町の三河屋へいつたやうだ、ハ、、、。」亭主「モシ座頭様が、猿にひつかゝれたとかけて、何とときます。」ざとう「コリヤ面白い、あけましよ。」亭主「これを、色事の出合ひととく、その心は、おひたかつた、ハ、、、。」ざとう「それはできた〳〵、御亭主、大きにおやかましうござつた。」トなんにも知らずに、手を引かれて出てゆく。女はすこしあてこすられて、挨拶もそこ〳〵にしてゆくをかしき、左次兵衛始終を見てゐて、左次「なるほど世には横道なやつもあるものだ、かはえさうに、目の見えねえ者をお先にして、罪造りな奴等だ。」ト一人打笑ひつゝ、此の茶屋をたち出でける。

第五章　馬の糞をさらふ鳶凧に、慾頬の千枚張

かくて鳴子の町を過ぎ行けば、向うに喧嘩と見え、大勢人だちして、高聲に喚きたつるを、何事やらんと、左次兵衛、たち止りて見れば、いづれも處の人と見えたるが、五十あまりのおやぢ、二十ばかりの男をとらへて、草ばうきにてくらはせにかゝると、こなたもきかぬ氣の男と見え、竹のさきにあはびがひのつきたるを持つて、たゝきあふを見かねて、人々やう／＼とひきわくれば、おやぢ「太え奴でござらァ、わしが處の角先へたれた馬の糞を、那奴めがのだと吐しやァがる。」男「ナニどこの前だとつて、乃公が見つけてさらふのだ、うつちやつて置かつせえ。」仲人「コリヤ三太めが、お前のまへにたれてあつたを、淩つて持つていかうとしをつた故、お前が角さきにあるものだによつて、外へやることはならねえといふのだな。コリヤ道理だが、三太めもまた、大道で淩ふものを、誰の彼のは入らねえ、見付けた者が淩ふに、いさくさはないといふも、ひと理窟あるからむづかしい。」おやぢ「イヤ／＼何にしろ、コリヤァおれが糞だ。」男「ナニこなたの糞なものか、これは馬のくそだわ。」おやぢ「ハテ馬の糞でも乃公が角先にありやァ、乃公が糞にちがひはない。」男「ナァニこなたが、こんな丸い糞をたれるものか。」おやぢ「イヤ丸い糞をたれようが、四角な糞をたれようが、おのれが世話にやァならねえ、打捨つておきやァがれ。」男「ナニまた、此方が糞をたれるに、おれが構ふものか。」おやぢ「知れたことだ、又構つて見やァがれ、たゞおくものか。」仲人「コリヤ斯うしなさい、なんでも此の糞は、二人して分けるがよからう、ノウ大屋さま。」大屋「成程々々、わしが兩方へ割りつけてやらう、コレ十露盤を一寸持つて來なさい。」仲人「ナァ

ニそろばんはいりませぬ、わしが分けてやらう、ドレ〳〵。ちう〳〵たこかいな。」男「モシ〳〵それぢやァあつちの方へばつかり、大きなやつをやらつしやる。」大屋「エ、默つてゐろ、此方の方へ分けたのは、ちつさくても性がよい。」仲人「傍で口をきくから算へ損なつた、初手からやらう。ちうじちうじ、たこのくはへのじつてう〳〵、ハ、アひとつあまつた。」おやぢ「あまつたのは、わしの方へよこさつしやい。」男「イヤさうはならぬ、此奴も二つにわつてやれ。しかしおれがわつたら、大小が出來るだらう。コレ八兵衛どの、貴様は手が利いてゐる、すつぱりと、まつ二つにしてやつてください。」仲人「いかさまなァ、しかしわしも、小料理をするものだが、ついに馬の糞を、手がけたことがない、コリヤ大屋樣、何になさる、お吸物になさるなら、小口切りにして、ちよいと獨活に、蕗の薹の吸口などが、ようございませうね。」大や「さればの、但し丸で美味煮にするか、何であらうとこれを肴に、一杯やらうぢやァないか。二人の衆も料簡して、一つのんだがよい、其の上で譯を付ける、それまで此の馬の糞は、わしが預る。」おやぢ「そんなら大屋樣へ預けませう。モシ八兵衛さま、あづかりをとるには及ぶまいか。」仲人「ナンノ大屋樣だものを、氣遣ひがあるものか。」大や「もし不足したら貴様の處の雪隱をくませる時、さし引勘定屹度致さう。」ト、是れにて此の喧嘩をさまれば、左次兵衛始終を見てをかしく、誠に慾の世界、わづかの馬の糞より起りて、爭論も珍らしいと、ひとり打笑ひてこの處

を打過ぎける。

誹語堀之內詣中之卷　終

誹語堀之内詣下之卷

東都　十返舎一九

第六章　色に溺るゝ傾城買ひ、はまりこんだ借金の淵

此の街道より、堀の内へわかれ道に、江戸屋といへる料理茶屋あり。左次兵衛こゝにて支度せんと、奥座敷へ通れば、（茶屋の女）「ようお出でなされました。」ト、茶、煙草盆を持つて來り、奥の間に客あるを、衝立にて仕切るゆゑ、左次兵衛其の客を見れば、年のころ三十ばかりの、人體よき男、結城仕立にて、五分もすかぬといふ風俗、小もの一人つれて、口取ざかなに、小さかづきとりあげ、ひとりたのしみ居るところへ、表の方より、是れもおなじ風の若男、小野郎に著がへの、風呂敷包をもたせて、この茶やに入り來るを見るより、件の男聲を懸けて、「是れは山水樣か、おつな處へお來臨だね。」「イヤア風雅樣、是れはどうだ、モシ解せやした、お馴染が此の節病氣で、內證へ引込んでゐると聞きやしたが、堀の内へその御立願か、實のあるもんだね。」（風）「ナニサ外に少し譯があつて、捻つた方

へ出かけやしたのさ。マァ持合はせだ、一つあがんなせえ。」山「戴きやせうか。」鳳「しかし此の肴はおそれ久松。」山「八百善や金巴樓で、手をとらせる私等が腹にあふものは、所詮こゝらにやァありやすめえ。諸事御料簡々々、時におめへ此の間のお世界は。」鳳「モシ浮世は兎角金の事さ。江戸町のわけも、とう／＼五十目のいた事になりやした。」山「私も此の節句には、義理詰めになつて、新造を出してやらにやァなりやせんが、どうも詮方がござりやせん。女郎けへもおめへや、私等らが様になると、どけへいつてもお互に、こけにやァされねえと云ふもんだから、金もまかにやァなりやせん。」ト互ひにやつつ返しつ話の内、二人の供は居眠りしてゐるを幸ひと、山水は風雅のひざもとへにじりより、少し聲をひくめて、山「時におめへとは、おなじ樓でお附合ひ申して、そんなに久しいお馴染といふでもねえが、なんだか内外お心安く、打明けて話しあふ中となつたも、不思議の縁でござりやせう。それについてちとお前に、お頼み申したい事があるから、見合はせてお宅へ推參致さうと存じた處、こゝでお目にかゝつたこそ幸ひ、何ともお恥かしい事だが、唯今もお話し申した通り、是非新造出しいたしてやらねば、ならねえ義理で、それも心當ての金子がありやすゆゑ、うけ合つたといふもの。處でその金が、少し間違の筋で、來月中頃でなければ、手に入りやせぬから、どうぞそれまで、五十目ばかり、おめへ呑み込んで、貸して下さる事ァ出來やすめえか。ホンニ遊所の金には、つまるならひとやらで、内には腐る程あつても、親仁の前があるから、わつち

の自由にやアならねえで、困りはてた處、どうぞお前を見かけてのおたのみ、御勘辨はありやすめえかねっ。」ト うそばつかり。ありやうは此の男、内も表むきばかりにて、ろくでもない處を使ひはたし、のつぴきならぬ金の入用を、わざと新造出しにいると見えをいふ。風雅此の話の内より、にはかに打ちしをれたる顔色にてためいきをつき、 風「是れはおもひの外のお話、ありやうはわたしも、おめへの處へおたづね申して、御相談申さうと存じた處、けふこゝでお目にかゝつたこそ幸ひ、見合つて申し出さうと思ふ内お話の様子で、げんなりと致しやした。恥をいはねば理がきこえやせんが、實の處は旦那寺から、日蓮上人の、五枚つぎのまんだら、私の處へ預つて置きましたを、正月の仕舞の附け屆け、夜具の入用何かにさしつかへて、そのまんだらを、百金の質物に遣はしやしたが、是非とも一兩日の内には、寺へ返さねばならねえ時宜になつて、その金子の才覺に、當惑致してをりやすわな。」 山「夫れは困つたものだ、私も實實の處は、新造出しと申すは譃の皮、親共の石塔をたてるについて、金の入用にさしつかへて、難澁致しやす。」ト 始めのはなしとちとは、うつてかはつて、二人ながらまじめになつて、煙草ばかりのんでゐる處へ、日ごろ此の手合の、かみにつれてあるく者共と見え、いづれもべんべら物ひつぱり、三人づれにて、おもてからなりこみ、中にも無精といふをとこ、 「ヒヤアしめた〳〵、コリヤ風雅さまも御一所か、どうした拍子のひやうたんで、わたくし共を出しぬいて、堀の内とは其の意得ぬ。此の間から旦那がさつぱり、お通ひがないとの事で、夜前私、濱野屋で、おいらんのお目にかゝり、則ち今日敕使として、お宅へ伺候いたした處、お見世で承れば堀の内へ御參詣、コリヤ變つた思召し立ち、併しこいつもひねつて可笑しから

うと、お跡をしたひ、此の雨の宮風の宮を引出して。なんでもひと筋道、おめにかゝらねえ事はあるめえ、必定江戸屋がお小休みであらうと、此のたぬ吉めが近眼で、旦那を見付けたから、をかしいぢやァござりやせんか。」たぬ吉「旦那がたに逢はずばやう〳〵しがらきで茶づるか、淡雪でのんで歸るぐらゐの事であらうに、もう〳〵大丈夫、殊に風雅さま御一所は、いよ〳〵もつて鬼に鐵棒、コリャういてきた、ひとつやらかせ、宗匠、もつと、うめえ物をさういはつし。」宗匠「うめえものなら鳳凰の泥龜煮か、孔雀の卵とぢか、但しは水牛の無鹽があるなら、あいつを平鍋でちり〳〵といはせて、ちよいと柚醤油でくひはどうだらう。」ぶすゑ「エ、むだをいはずと、コウ姉さん、もつとうめえものを、ありつたけ出しなせえ、お金子拂ひのいい旦那だに。ホンニ御輕薄ぢやァねえが、モシ旦那がた、今時貴下方お二人の樣な、大丈夫な大盡さまは、ひろい世界にもう一人とはござりやすめえ。宗匠は知つてゐるだらう、ソレいつぞや、中の町で主がいやな目つきだといつた、指いらずのべつかこうといふ顔の客人よ。斯ういへばどうか、人樣の事を悪くいふ樣だが、ひよつと貴下がたが、どこぞでお出合ひなさるめえもんでもねえから、お心得の爲にお話し申しやす。イヤもう恐ろしい人、首ッたけ借りてある地面を引當てに、貸すものはあるめえかと、すでのこと私が、後家の質屋へ口入しようとして、跡で聞いて肝が潰れやした。此の間も、親御がお寺の祖師堂を、建立するとつて、溜めておかれ

た金を横どりして節句の仕舞はどうでござりやせう、わたしもツイ一日勤めて、一角貰ひやしたが、コリヤ尻がこようかと、その晩は碌に寝られなんだから、をかしいぢやァござりやせんか。」宗匠「イヤそれはまだしも、親の物は、子の物といふからいいが、わたしが存じてをる、さる處の旦那は、恵心の作の三尊を、何處からやら借りて來て、金十兩の七難即滅として、すぐにその金子で、はつ〳〵と贅澤ばつかり、わたしもふつと向島へつれられて、一歩にはあり付きやしたが、よく思つて見ればあの人のかねを貰ふは、盗人の分配をとる樣なもので、どうも氣味が悪くてつかはれやせんから、コレ御覧なせえ、いまだに此處にもつてゐやすが、兎角人は知らねえと思つてゐても、天道さまが正直だ、だからあんな人はどうせしまひは、ろくな事ぢやァあるめえ。」ト今まで二人が話の樣子、聞きでもして、あここするかと思ふ程に、二人の胸にひし〳〵とこたへしやらん、いつからものをもいはず、二人はたゞたがひに、顔のいろあをざめて、といきをつくばかり、ざしきめいりて、いつかうにうかざれば、三人も手もちなく、かほを見あはせて、たね直「なんだかしらねえが酒がしまぬ、モシもう是れでおつもりにして、是れから宿の叶屋で、呑み直しやせう、風雅さまさう致しやせう。」風「そんな事がよからう。」ぶすゐ「コレ〳〵女中、こゝの勘定だはやく早く。」女「ハイ〳〵唯今。」トしばらくして書付をもつてくると、宗匠受けとりて、山水の前へさしおく。山「ナニ金一分と五百五十文か。」トふところへ手を入れて、もぢ〳〵してゐると、風雅もわきのはうを向いてゐたりしが、風「モシ金をおくづしなさるも面倒だ、錢は供にもたせて參りやしたから、端錢はこれから出しやせう。」山「さやうかね、時に困つた事は、ハァ聞えやした、わつち

が紙入に、今朝判が二まいと、南鐐が五ッ六ッ入れておきやしたが、今見れば二朱がたつたひとつ、コリヤ金をもたせて出すと、皆使ふと思つて何時のまにやら、おふくろにとられやした。ナント風雅さんおめへおもち合はせがあらうから、どうぞ南一拜借致してえの。」風「コリヤお恥かしい事だが、私もその傳さ、入れて出たと思つた金が、かくの通り。」ト金入れを出して、ふるつて見せると、山水もつけな顏して　山「しかたがねえコウおせう、ぬしが懐中の百疋を、ちよつとかさつし。」宗匠「どこにわたしが。」風「ホンニ今盗人の分口だといつた金を、見せたぢやァねえか、明日はぢきに二角にして戻すから、出さつせえな。」トつ引きならず、宗匠ひよんな顏してもぢ〳〵と、内懐からをしさうに出してやれば、山「これでよし〳〵、コウ女中、ソレ一分、あとの五百五十は、こなたのお供の衆からとるがいい。モシ宗匠が百疋出したからわつちが懐の南一があまりやした、これでおめへと駕籠に乘つて歸りやせう。なんだか今日は、心持が惡くて酒ものめず、折角みんなが來たものを、氣の毒だけれど、これでお別れにして、ずつとけへりやせう。」風「いかさま、私も今夜は内に用事もあり、早くけへらにやァならねえから、コウ主達は、跡からゆるりと來さつし。」ト二人は此のおもてにゐるかごをかりてのり、さつさつとゆく。三人あとにつつくりとして、宗匠「道理こそ、ゆうべ夢見がわるかつた、コリヤァとんだめにあつた、いめえましい。」ぶする「ホンニ、いかいお力落し。」たぬ吉「あんまり呆れて、酒もさめてしまつた、コリヤつまらねえ、サァいかうか。」ト拍子ぬけして、のろり〳〵と出かける。左次兵衛先刻より見てをかしく、後より續いて立ち出でたるに、三人が出合ひがしら向うより

来るは、吉原の茶屋の男、ぶす二「ヤア湊やのわけえしゆ、どこへ〳〵。」男「イヤ是れはおそろひなさつて、道理こそ今朝から二度まで、おめへさまがたのお宿へ、人をつかはしましたに、かの甲州の龍王さまが、きのふから居續けで、けふお立ちなさるについて、暇乞ひに二角づゝやりたい、宗匠や、たぬ吉、無粋をも呼びにやれと、久八がお宿は勿論、そこら中を尋ねましたに、お出でなさらぬ故、客人ははやお立ちなさいました。私も新宿までお送り申して、二歩藏きましたによつて、ついでながら、堀の内樣へ出かけました。お前がたはお出でがなくて殘り多い。」ト いひすてて別れゆく。二人たちまち氣を惡くして、此のやうにも間が惡くなるものか、目のさきにぶらついてゐた二百疋を、とりはづし、はる〴〵と出かけ、こんなめにあうたるけふはいかなる悪日ぞと、宗匠はなほのこときぬけがしてぐんにやりとなり、たがひにこごと八百いひながらゆくうしろかげを、左次兵衛見るに、ふき出す程をかしく、あまりの事に、しばらく見送りて、左兵「なるほど世界は様々だ、さつきの様に、僅かの馬の糞から、いきせいはつて、喧嘩づらする者もあり、又あの手合は大まいの身代を遊所狂ひに、惜し氣もなく使ひはたし、神共が人の陰口いふを、聞いてゐた時の二人の心が、思ひやられて可笑しかつた。」ト 一人打笑ひつゝ、いそぎける。

第七章　出放題目の奇特、佛を賣りぐひの道心坊

街道よりまがりて、畑中の道をゆけば、兩側に菰筵などをしきて、參詣の人に錢をこふ、いろ〳〵の乞食ども、盲「ハイ旦那様、足のかなはぬめくらに、一文くださりませ。」つんぼ「ハイ〳〵、わたし

は御覧の通り、鼻のまがつたつんぼう。」ばゝ「口ばつかり達者な、腰拔ばゝでござります。」女「ハイハイ長々亭主に煩はれまして、久しく何にも致しませぬから、空腹くて難儀を致します。お慈悲に一錢下さりませ、四文錢なら、三文つりをそへて下さりませ。」左次「つくな〳〵。」女「つくな〳〵と被仰りますれど、居去の金玉へ砂がつくと、あなた方のお跡へ乞食のつくは、當然でござります。親子三人たつた一文で助かります。」左次「一文やれば三人がたすかるか。」女「さやうでござります。」左次「そんならやるめえ、ハテたつた一文の錢で、三人助かるといへば、錢ほど大切なものはない。コリヤ一文でも、めつたに手ばなしてはならねえわえハヽヽヽ。」すこしの庵にゐる道心坊、「デブ〳〵〳〵デヽデブ〳〵デブ〳〵、是れにござるは祖師日蓮上人、佐渡の國へ渡らせ給ふ時、さどの澤根の烏賊つる舟は、烏賊はつらいで夜の目をさらし、よの目さらして嚊盜まれた、ツンツル〳〵と說かせ給ふ處の、浪題目の緣起、又辰の口の御難のとき、棚からおちた牡丹餅のあんだら、修復建立、お志はござりませぬかな。」ト少し舌のまはらぬ、よい〳〵かゝりし道心坊、むしやうにしやべりゐる處へ、田舍者と見えて、ふろしきづゝみを背おひたるおやぢ、そこらきよろ〳〵と見まはし、おやぢ「モシちくと物サア問ひますべい、おみくじ判斷のうして、くんさるとこは、爰だかのし。」道心「見て進ぜませう、出しなさい。」おやぢ「そんだら頼んますべい。私ハアいなだきごたア、いなだいたアが、あんだか、かんだかしれ申さない。」ト懐中より、みくじをいだす。道心坊おみくじの本をいだし、くりかへして此のみくじとみあはせて、しかつべらしく、道心「ハヽア是れは、こ

第十四番末吉

石玉未分時
憂心轉相悲
漸々通大道
華發應殘枝

の石玉未だ分れざる時とござるは、俗に申す、かの河童の尻子玉と申す様なもので、石玉とは尻子玉が石の様になつて、くだいても割つてもいかぬ程に、かたくなつた處が、未だ分れざる時、むかし憂心といふ出家の尻子玉が、事の外かたくなつて悲しんだといふことがあるから、憂心轉相悲しむ、これを貴樣の身のうへにとつて見れば、きさま尻のたゝりがある。とかく何をしても尻へぬけて、住所にも尻がすわらず。それといふも米屋の尻、酒屋の尻、いろ／＼の尻がくるゆゑ、斷りに譃をついても尻からはげて、尻のしまひは、尻くらひ觀音と出かけねばならぬといふ身の上と見える。しかれども、漸々大道通ずとあるは、後には仕合がむいて來て、かの尻子玉がとけて、大便の道が通じたといふこと、そこで華ひらいて、殘枝に應ずとは、すべて人の閉口する事を、鼻がひしやげたといふ、今まではきさま仕合が悪くて、鼻がひしやげてゐたが、大道通じてだん／＼鼻も高くなることを、はなの開くにたとへたものだ。此のまた殘枝とは、殘は殘る、枝は尻といふ事で、りの字を畧したもの、かの所々の、色々の尻が殘つてあつたも、次第に片付くといふ、御鬮だほ

どに、末は隨分よけれども、當時は甚だむづかしい。とかく尻のたゝりがあるから、用心を大切にさつしやれ。」おやぢ「あるほどハァ、お祖師さまのおみくじは、おそがいこんだもし。わし尻にたゝるにやァ、ちがひござらない。あんだか、かんだか、色々の尻がくるにやァたまげまうす。此の尻のこない樣にやァ、いつなりますべいもし。」道心「めつたに其の尻難は遁れられまいが、兎角信神さつしやい。もし望みなら、その尻除けのお守を進ぜませうか。」おやぢ「ソリヤァいなだきますべい、代物はいくらだもし。」道心「多少にはよらぬ、御心持しだい、多い分はいくらでもようござる。」おやぢ「そんだら是れでよかんべいか。」トおひねりをして差出し、かの守をもらひ有り難さうにいたゞきてもちゆく。左次兵衞しばらく立ちどまり、始終を見てをかしく、田舍ものとて、おやぢの正直なるに引きかへ、道心坊のよくづらこそ憎けれと、せわにもならぬことながら、左次「モシ今の尻除けのお守といふは、どうしたお守だね。」道心「アイこれが尻よけ。」左次「ハ、、、、いかに錢がほしいとつて、尻よけの守といふがあるものかえ。」道心「イヤわしの處の、庵主のいひ付けで、何でも此の守一つを、病人らしい人なら病難除け孕んでゐる女中へは、安産の守、又厄除け火伏せと、向うの好みしだいに、名をつけてやれと、かねていひ付けられたによつて、そこで尻やみのある人へは、尻よけの守でござる。」ト有體にいふを聞きかねて、おくより庵主と見えて、六十許りの僧たち出で、あん主「ハテ「コリヤ慾心、いつおれがそんなことを、いひつけておいた。」道心「いつでもおまへが。」あん主「ハテ扠ずか〳〵と、何をぬかしをる、そんなことを明々地にいふものか、たはけめが、コリヤ安産の守、

或は病難除けの守、みな夫れ〳〵あるものを、それに他愛もないことをぬかす。」道心「イヤそれでも、此の守ばつかりを。」あん主「コリヤ〳〵まだいふか、總體おのれは才はじけ者で、兎角乃公がいふことを聞きをらぬ、おれが悪い事はいはぬほどに、なんでも是れからおれがいふ通りにしをれ、ばかづらめが。」道心「ハイそんならお前のいふ様にさへすれば、よくござるか。」あん主「知れたことだ、サア爰にはおれがゐるから、アノ燒香盤の抹香をもつておけ。」道心「サア爰にはおれがゐるから、アノ燒香盤の抹香をもつておけ。」あん主「イヤこいつ何をいふ。」道心「イヤこいつ何をいふ。」あん主「ヤイ〳〵おのれ、おれが口眞似をしをる。」道心「ヤイ〳〵おのれおれが口まねをしをる。」あん主「うぬにくいやつだ。」トありあふ火吹竹をとりて、道心を一つくらはせる。道心その火吹竹をひつたくり、道心「うぬにくいやつだ。」ト庵主の頭をこつつり、あん主「アイタ〳〵アイタ。」道心「アイタ〳〵〳〵。」あん主「師匠をなぜぶつた。」ト此のたびは頭筋をとつてねぢつけられ、口まねもできず、道心「ア、〳〵御ゆるされませ、わしはなんでも、おまへがいふとほりにしろと、おつしやりましたから、それでお前のいふとほりをいたしました、御めん〳〵。」トあやまるをもきかず、あん主はむしやうにくらはせる。左次兵衛餘りのをかしさに、腹をかゝへて此のところを打過ぎ、左次「ハ、、、、師匠も師匠なら、弟子も弟子、とかく頭は圓めても、食はねば空腹いに違ひはないと見える。さらばお祖師様へまゐらう。」トやがて妙法寺に至りたるに、げにも高祖上人のゐとくあらはれ、近頃修造の結構きらびやかに参詣の人ひきもきらず、百度參り、日まいりしきほど、ゆきつ戻りつ、おし合ひ〳〵、有り難き事いふばかりなし。

左次兵衛御堂にのぼり、拜み參りて、暫くこゝに休らひける。

誹語堀之內詣下之卷（大尾）

大正十五年六月二十五日印刷
大正十五年六月二十八日發行

（非賣品）

近代日本文學大系
第十八卷

編輯兼發行者　東京市麹町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社

右代表者　東京市麹町區内幸町一丁目六番地
中塚榮次郎

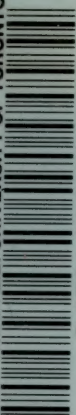
印刷者　東京市本所區番場町四番地
井上源之丞

印刷所　東京市本所區番場町四番地
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所　東京市麹町區内幸町一丁目六番地
國民圖書株式會社
電話銀座　七八三番
　　　　　二一八八番
振替東京五二二九八番






EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03043 4187